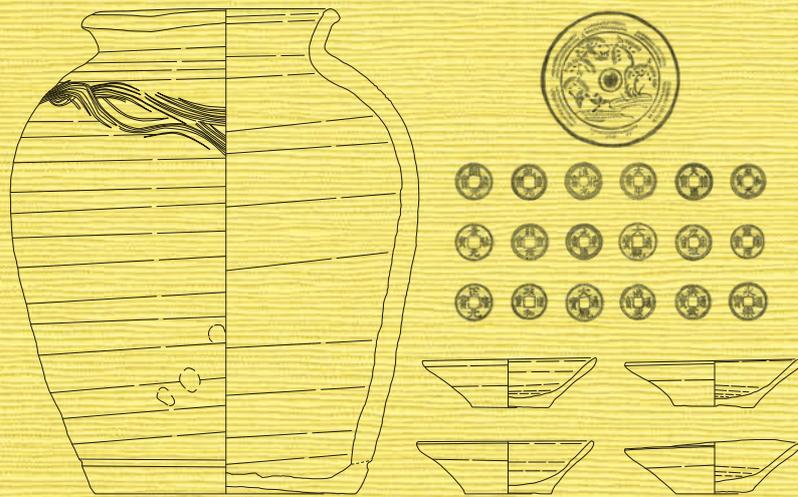


天神溝田遺跡Ⅱ

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ



2014.3

高 知 県 教 育 委 員 会

(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

天神溝田遺跡Ⅱ

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ

2014.3

高 知 県 教 育 委 員 会
(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターでは、平成18年度から高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所の業務委託を受けた一般国道33号線バイパス(高知西バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。この事業は、高知県東部に計画されている高知南国道路と南国安芸道路の二つの自動車専用道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査とほぼ同時進行で実施されたものです。

高知西バイパスは、高知市から西に隣接するいの町にかけて全長9.8kmの区間で計画されており、工事路線上にはバーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡を始めとして多くの遺跡が所在しています。

今回報告する天神溝田遺跡は、いの町天神地区に所在し、昭和36年の宇治川改修工事の際に確認された遺跡であり、平成20年度から平成24年度にかけて発掘調査を行いました。遺跡は、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であり、発掘調査により掘立柱建物跡や当時の流通が窺われる土器や陶磁器がみつき、当遺跡が地域に果たしてきた役割や仁淀川流域における遺跡の実態がより鮮明なものになる貴重な資料を提供しています。

本書が豊かな地域史の復元に寄与し、地域の再発見に繋がると共に、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所、いの町、そして埋蔵文化財への深い御理解と御協力を賜りました地元の皆様方に心から謝意を表すと共に、発掘調査に従事して頂いた現場作業員の皆様方、報告書作成にあたり御指導ならびに御教示頂きました関係各位に心から厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 森田 尚宏

例言

1. 本書は、高知西バイパス建設に伴い、平成20～24年度に実施した天神溝田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は高知県教育委員会が国土交通省四国地方整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター（現公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
3. 天神溝田遺跡は、高知県吾川郡いの町伊野字天神山・字城山他に所在する。
4. 発掘調査は調査対象区域の買収状況に応じて5ヵ年にわたって実施し、発掘調査延べ面積は、6,031 m²である。
5. 調査期間は、平成20年11月1日～平成25年3月31日にかけて発掘調査及び基礎整理を行い、本報告書刊行及びの整理業務を平成25年4月5日～平成26年3月31日まで実施した。
6. 発掘調査・整理作業は次の体制で行った。

平成20年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏 同総務課長 恒石雅彦 同主任 谷真理子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第二班長 吉成承三 同主任調査員 坂本幸繁 技術補助員 矢野雅子 測量補助員 横山藍

平成21年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 小笠原孝夫
総務：同次長 森田尚宏 同総務課長 里見敦規 同主任 弘末節子
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第二班長 吉成承三 同主任調査員 坂本幸繁 技術補助員 矢野雅子 測量補助員 横山藍

平成23年度

総括：財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 嶋崎るり子 同総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 吉成承三 同専門調査員 武森清幸 技術補助員 大原直美 測量補助員 横山藍

平成24年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏
総務：同次長 嶋崎るり子 同総務課長 里見敦規 同主任 黒岩千恵
調査総括：同調査課長兼企画調整班長 廣田佳久
調査担当：同調査第四班長 吉成承三 同専門調査員 武森清幸 技術補助員 大原直美 測量補助員 横山藍

平成25年度

総括：公益財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長 森田尚宏

総務：同次長 宮田謙輔 同総務課長 野田美智子 同主任 黒岩千恵

調査総括：同調査課長 廣田佳久

調査担当：同調査第三班長 吉成承三 調査補助員 横山藍

- 7.本書の執筆,編集は吉成が行い,調査補助員の横山が補佐した。現場測量,遺構図等の作成,及び報告書掲載の遺構・写真等の図版作成は,調査補助員 矢野・大原・横山の補助を得た。
- 8.遺構については,SB(掘立柱建物跡),SA(柵列),SK(土坑),SD(溝),SX(性格不明遺構),P(ピット)とし,遺構番号は,SB,SAについては調査区全体の通し番号とし,SK,SD,Pについては調査区ごとに通し番号を付した。掲載している遺構図の縮尺はSB,SAは $S=1/100$,SK,SD,Pは $S=1/40$, $S=1/60$, $S=1/100$ で作成しそれぞれに記載しており,方位(N)は世界標準座標方眼北である。
- 9.遺物については,原則 $S=1/3$ とし,法量の大きさによって $S=1/2$, $S=1/4$, $S=2/3$ で掲載し,各遺物にはスケールバーを掲載している。また,凡例のない遺物図版の塗りについては,タール付着痕を示す。
- 10.発掘調査にあたって,事前の樹木伐採は(社)いの町シルバー人材センターに委託し作業を実施した。また,基準点設置については(株)アンプル,航空写真測量については(株)四航コンサルタントに委託し業務を実施した。整理業務では,天神溝田遺跡から出土した種実・植物遺体の自然化学分析,及び鉄器の保存処理を(株)パリオ・サーヴェイに,併せて和鏡の成分分析及び鉄器の保存処理については財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所に業務を委託した。
- 11.現場作業及び整理作業については下記の方々に行って頂いた。(敬称略,五十音順)
発掘調査作業員
井沢俊一・大原栄美・尾崎定富・尾崎毅・川上公雄・北岡由美・小松利明・塩見朗・渋谷茂弘・白井三郎・新川太郎・杉本直助・中島美恵子・中野泰佑・西内園・西村仁水・仁野村かゆり・橋村康之・林孝明・林美津恵・原田憲二・藤山三和・町田憲嗣・宮添彬・村松広海・森山三四子・山口壽子・山口優幸・山中益代・横山正宣・和田智子・渡辺清記
整理作業員
岡内真理子・岡崎千枝・川谷文香・永森亜紀・西田由紀・橋田美紀・畑平裕美・松山真澄・山中美代子・吉本由佳
また,報告書作成にあたっては,埋蔵文化財センターの諸氏の協力と援助を得た。
- 12.調査の実施にあたっては,国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所,いの町,いの町教育委員会,工事関係者の協力を得た。また,地元の方々の絶大な協力と援助を得た。
- 13.出土遺物の注記は,出土略号を平成20年度を08-4ITM,平成21年度を09-4ITM,平成23年度を11-7ITM,平成24年度を12-2ITMとし,図面,写真資料とともに高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	
1. 調査の契機	1
2. 天神溝田遺跡の概要と周辺の遺跡	3
3. 試掘調査の概要	5
(1) 各トレンチの基本層序と概要	5
(2) 試掘調査出土遺物	6
4. 調査日誌抄	9
第Ⅱ章 調査の概要	
1. 調査の概要	15
2. 調査の方法	16
(1) 調査の方法	16
(2) 基本層序	17
第Ⅲ章 調査の成果	
1. I区	23
(1) 上面遺構と出土遺物	23
(2) 下面遺構と出土遺物	53
(3) 包含層出土遺物	74
2. II区	87
(1) 上面遺構と出土遺物	87
(2) 下面遺構と出土遺物	119
(3) 包含層出土遺物	122
3. III区	137
(1) 検出遺構と出土遺物	137
(2) 包含層出土遺物	148
第Ⅳ章 科学分析	
1. 自然科学分析	165
2. 和鏡の成分分析	169
第Ⅴ章 まとめ	
1. 弥生時代 - I W区出土の弥生土器について -	171
2. 古代 - 遺物の帰属時期と遺跡の性格 -	172
3. 中世 - 掘立柱建物跡の変遷と埋納遺構・遺物からみた帰属時期 -	174
4. 近世 - 江戸時代前期から中期にかけての遺構と遺物 -	176

挿図目次

図1	いの町位置図.....	1	図37	I W区 SK15遺構図・SD8・P73遺物実測図..	43
図2	高知西バイパス路線図と周辺の遺跡.....	2	図38	I 区SB9遺構図.....	43
図3	試掘調査位置図.....	4	図39	I E区上面遺構配置図.....	44
図4	試掘トレンチ柱状図.....	7	図40	I 区SB10遺構図.....	45
図5	試掘調査遺物実測図.....	8	図41	I 区SB11遺構図.....	45
図6	調査区位置図・グリッド設定図.....	14	図42	I 区SB12遺構図.....	46
図7	I W区調査区セクション図.....	17	図43	I E区P2・22・24・80遺構図・遺物実測図..	47
図8	I S区調査区セクション図.....	18	図44	上面ピット遺物実測図.....	48
図9	I E区調査区セクション図.....	19	図45	I E区SK5遺構図.....	48
図10	II区調査区セクション図.....	21	図46	I E区SK7・8・13遺構図・遺物実測図..	49
図11	III区調査区セクション図.....	22	図47	I E区SD2・4遺構図・遺物実測図.....	50
図12	I W区・I S区上面遺構配置図.....	24	図48	I E区SD9・10・13～15遺構図.....	51
図13	I 区SB1遺構図・遺物実測図.....	25	図49	I E区SD14・15遺構図・遺物実測図.....	52
図14	I 区SB2・3遺構図.....	26	図50	I W区P82遺構図.....	53
図15	I 区SB2・3遺物実測図.....	27	図51	I W区P117遺構図.....	53
図16	I 区SB4遺構図.....	27	図52	I W区下面遺構配置図.....	54
図17	I 区SB5遺構図・遺物実測図.....	28	図53	I W区下面ピット遺物実測図.....	55
図18	I 区SB6・7遺構図・遺物実測図.....	29	図54	I W区SK18～20遺構図・遺物実測図..	55
図19	I 区SB8遺構図・遺物実測図.....	30	図55	I W区SK21遺構図・遺物実測図.....	56
図20	I W区・I S区ピット遺構図・遺物実測図.....	31	図56	I W区土器溜まり遺構図.....	57
図21	I W区SK2遺構図・遺物実測図.....	32	図57	I W区土器溜まり遺物実測図1.....	59
図22	I W区SK3～6遺構図.....	33	図58	I W区土器溜まり遺物実測図2.....	60
図23	I W区SK3・6遺構図・遺物実測図.....	34	図59	I W区土器溜まり遺物実測図3.....	61
図24	I W区SK7遺構図・遺物実測図.....	34	図60	I W区土器溜まり遺物実測図4.....	62
図25	I W区SK8遺構図.....	35	図61	I W区土器溜まり遺物実測図5.....	63
図26	I W区SK9遺構図・遺物実測図.....	35	図62	I W区土器溜まり遺物実測図6.....	64
図27	I W区SK10・11遺構図・遺物実測図.....	36	図63	I W区土器溜まり遺物実測図7.....	65
図28	I W区SK12・13遺構図.....	36	図64	I W区土器溜まり遺物実測図8.....	66
図29	I W区SK16遺構図・遺物実測図.....	36	図65	I W区土器溜まり遺物実測図9.....	67
図30	I S区SK1遺構図・遺物実測図.....	37	図66	I W区土器溜まり遺物実測図10.....	68
図31	I S区SK5・6・8遺構図・遺物実測図.....	37	図67	I E区SB13遺構図.....	68
図32	I W区SD1遺構図・遺物実測図.....	38	図68	I E区下面遺構配置図.....	69
図33	I W区SD2遺構図・遺物実測図.....	39	図69	I E区P137・158・172・187遺構図・遺物 実測図.....	70
図34	I W区SD3遺構図・遺物実測図.....	40	図70	I E区P191・222遺構図・遺物実測図.....	71
図35	I W区SX2遺物実測図.....	41	図71	I E区下面ピット遺物実測図.....	72
図36	I W区中面遺構配置図.....	42			

図 72	I E 区SK14・17 遺構図・遺物実測図.....	73	図109	II 区埋納遺構遺物(古銭)3.....	102
図 73	I E 区SK18・20・22 遺構図・遺物実測図	73	図110	II 区埋納遺構遺物(古銭)4.....	103
図 74	I W 区I 層遺物実測図.....	74	図111	II 区埋納遺構遺物(古銭)5.....	104
図 75	I W 区II 層遺物実測図.....	75	図112	II 区SK1 遺構図・遺物実測図.....	110
図 76	I W 区III 層遺物実測図.....	76	図113	II 区SK2 遺構図・遺物実測図.....	110
図 77	I W 区V 層遺物実測図.....	77	図114	II 区SK7 遺構図・遺物実測図.....	111
図 78	I W 区VI 層遺物実測図.....	78	図115	II 区SK9・18 遺構図・遺物実測図.....	111
図 79	I W 区VII 層遺物実測図.....	79	図116	II 区SK19 遺構図・遺物実測図.....	112
図 80	I E 区II 層遺物実測図1.....	80	図117	II 区SK21・23 遺構図・遺物実測図.....	112
図 81	I E 区II 層遺物実測図2.....	81	図118	II 区SK25 遺構図・遺物実測図.....	113
図 82	I E 区III 層遺物実測図.....	82	図119	II 区SK43 遺構図.....	113
図 83	I E 区IV 層遺物実測図1.....	83	図120	II 区SD3 遺構図・遺物実測図.....	114
図 84	I E 区IV 層遺物実測図2.....	84	図121	II 区SD2・4 遺構図・遺物実測図.....	115
図 85	I E 区VII 層遺物実測図1.....	85	図122	II 区SD5・6 遺構図・遺物実測図.....	116
図 86	I E 区VII 層遺物実測図2.....	86	図123	II 区SD8 遺構図・遺物実測図.....	117
図 87	II 区上面遺構配置図.....	88	図124	II 区SX1 遺構図・遺物実測図.....	118
図 88	II 区SB1 遺構図.....	89	図125	II 区P250 遺構図・遺物実測図.....	119
図 89	II 区SB2 遺構図.....	89	図126	II 区下面遺構配置図.....	120
図 90	II 区SB3 遺構図.....	89	図127	II 区下面ピット遺物実測図.....	121
図 91	II 区SB4 遺構図.....	90	図128	II 区SK51・61 遺構図・遺物実測図.....	122
図 92	II 区SB5 遺構図.....	90	図129	II 区II 層遺物実測図.....	123
図 93	II 区SB6 遺構図.....	90	図130	II 区III 層遺物実測図1.....	124
図 94	II 区SB7 遺構図.....	91	図131	II 区III 層遺物実測図2.....	125
図 95	II 区SB8 遺構図.....	91	図132	II 区III 層遺物実測図3.....	126
図 96	II 区SB9 遺構図・遺物実測図.....	91	図133	II 区III 層遺物実測図4.....	127
図 97	II 区SB10 遺構図.....	92	図134	II 区III 層遺物実測図5.....	128
図 98	II 区SB11 遺構図.....	92	図135	II 区VI 層遺物実測図1.....	130
図 99	II 区SB11 遺物実測図.....	93	図136	II 区VI 層遺物実測図2.....	131
図100	II 区SA1 遺構図.....	94	図137	II 区VI 層遺物実測図3.....	132
図101	II 区SA2・3 遺構図.....	94	図138	II 区VII 層遺物実測図.....	134
図102	II 区P5・88 遺構図・遺物実測図.....	95	図139	III 区遺構配置図.....	136
図103	II 区上面ピット遺物実測図.....	96	図140	III 区P66 遺構図・遺物実測図.....	137
図104	II 区埋納遺構遺構図.....	97	図141	III 区P121 遺構図・遺物実測図.....	137
図105	II 区埋納遺構遺物実測図1.....	98	図142	III 区P144 遺構図・遺物実測図.....	138
図106	II 区埋納遺構遺物実測図2.....	99	図143	III 区P145 遺構図・遺物実測図.....	138
図107	II 区埋納遺構遺物(古銭)1.....	100	図144	III 区P189 遺構図・遺物実測図.....	139
図108	II 区埋納遺構遺物(古銭)2.....	101	図145	III 区ピット遺物実測図1.....	140
			図146	III 区ピット遺物実測図2.....	141

図147	Ⅲ区SK2遺構図・遺物実測図	142	図160	Ⅲ区Ⅳ-1層遺物実測図2	154
図148	Ⅲ区SK3遺構図・遺物実測図	142	図161	Ⅲ区Ⅳ-1層遺物実測図3	155
図149	Ⅲ区SK4～6遺構図・遺物実測図	143	図162	Ⅲ区Ⅳ-1層遺物実測図4・Ⅳ-2層遺物 実測図1	156
図150	Ⅲ区SK7・8遺構図・遺物実測図	144	図163	Ⅲ区Ⅳ-2層遺物実測図2	159
図151	Ⅲ区SK9遺構図・遺物実測図	144	図164	Ⅲ区Ⅴ層遺物実測図1	160
図152	Ⅲ区SK10遺構図・遺物実測図	145	図165	Ⅲ区Ⅴ層遺物実測図2	161
図153	Ⅲ区SX1～5遺構図	146	図166	Ⅲ区Ⅴ層遺物実測図3	162
図154	Ⅲ区SX1・2遺物実測図	147	図167	Ⅲ区Ⅴ層遺物実測図4	163
図155	Ⅲ区SX3遺物実測図	147	図168	Ⅲ区Ⅴ層遺物実測図5	164
図156	Ⅲ区SX4・5遺物実測図	148	図169	各調査区の年代別出土遺物点数	172
図157	Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図	149	図170	いの町条理推定グリッド図	173
図158	Ⅲ区Ⅲ層遺物実測図	151	図171	中世掘立柱建物跡全体配置図	177
図159	Ⅲ区Ⅳ-1層遺物実測図1	153			

表目次

表 1	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表1	105	表 9	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表9	109
表 2	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表2	105	表10	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表10	109
表 3	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表3	106	表11	Ⅱ区埋納遺構古銭集計表	109
表 4	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表4	106	表12	天神溝田遺跡の種実同定結果	165
表 5	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表5	107	表13	アワ果実の大きさ	166
表 6	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表6	107	表14	天神溝田遺跡古代土器器種別表	174
表 7	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表7	108	表15	天神溝田遺跡中世土器器種別表	175
表 8	Ⅱ区埋納遺構古銭計測表8	108			

遺構計測表目次

遺構計測表 1	Ⅰ区SB	181	遺構計測表10	Ⅰ区SB8ピット	184
遺構計測表 2	Ⅰ区SB1ピット	181	遺構計測表11	Ⅰ区SB9ピット	184
遺構計測表 3	Ⅰ区SB2ピット	182	遺構計測表12	Ⅰ区SB10ピット	184
遺構計測表 4	Ⅰ区SB3ピット	182	遺構計測表13	Ⅰ区SB11ピット	184
遺構計測表 5	Ⅰ区SB4ピット	182	遺構計測表14	Ⅰ区SB11ピット	185
遺構計測表 6	Ⅰ区SB5ピット	183	遺構計測表15	Ⅰ区SB12ピット	185
遺構計測表 7	Ⅰ区SB6ピット	183	遺構計測表16	Ⅰ区SB13ピット	185
遺構計測表 8	Ⅰ区SB7ピット	183	遺構計測表17	Ⅰ区SB13ピット	186
遺構計測表 9	Ⅰ区SB7ピット	184	遺構計測表18	ⅠW区上面SK	186

遺構計測表19 I S区上面SK.....	186	遺構計測表40 II区SB6ピット.....	191
遺構計測表20 I S区上面SK.....	187	遺構計測表41 II区SB6ピット.....	192
遺構計測表21 I W区上面SD.....	187	遺構計測表42 II区SB7ピット.....	192
遺構計測表22 I S区上面SD.....	187	遺構計測表43 II区SB8ピット.....	192
遺構計測表23 I W区上面SX.....	187	遺構計測表44 II区SB9ピット.....	192
遺構計測表24 I W区中面SK.....	187	遺構計測表45 II区SB10ピット.....	193
遺構計測表25 I W区中面SD.....	187	遺構計測表46 II区SB11ピット.....	193
遺構計測表26 I W区中面SX.....	187	遺構計測表47 II区SB11ピット.....	194
遺構計測表27 I E区上面SK.....	188	遺構計測表48 II区SA.....	194
遺構計測表28 I E区上面SD.....	188	遺構計測表49 II区SA1ピット.....	194
遺構計測表29 I W区下面SK.....	189	遺構計測表50 II区SA2・3ピット.....	194
遺構計測表30 I W区下面SD.....	189	遺構計測表51 II区SA2・3ピット.....	195
遺構計測表31 I E区下面SK.....	189	遺構計測表52 II区上面SK.....	195
遺構計測表32 II区SB.....	189	遺構計測表53 II区上面SK.....	196
遺構計測表33 II区SB.....	190	遺構計測表54 II区上面SD.....	197
遺構計測表34 II区SB1ピット.....	190	遺構計測表55 II区上面SX.....	197
遺構計測表35 II区SB2ピット.....	190	遺構計測表56 II区下面SK.....	197
遺構計測表36 II区SB3ピット.....	190	遺構計測表57 II区下面SD.....	197
遺構計測表37 II区SB3ピット.....	191	遺構計測表58 III区SK.....	198
遺構計測表38 II区SB4ピット.....	191	遺構計測表59 III区SD.....	198
遺構計測表39 II区SB5ピット.....	191	遺構計測表60 III区SX.....	198

遺物観察表目次

遺物観察表 1 (1～22).....	201	遺物観察表13 (265～286).....	213
遺物観察表 2 (23～44).....	202	遺物観察表14 (287～308).....	214
遺物観察表 3 (45～66).....	203	遺物観察表15 (309～330).....	215
遺物観察表 4 (67～88).....	204	遺物観察表16 (331～352).....	216
遺物観察表 5 (89～110).....	205	遺物観察表17 (353～374).....	217
遺物観察表 6 (111～132).....	206	遺物観察表18 (375～396).....	218
遺物観察表 7 (133～154).....	207	遺物観察表19 (397～418).....	219
遺物観察表 8 (155～176).....	208	遺物観察表20 (419～440).....	220
遺物観察表 9 (177～198).....	209	遺物観察表21 (441～462).....	221
遺物観察表10 (199～220).....	210	遺物観察表22 (463～484).....	222
遺物観察表11 (221～242).....	211	遺物観察表23 (485～506).....	223
遺物観察表12 (243～264).....	212	遺物観察表24 (507～528).....	224

遺物観察表25 (529 ~ 550).....	225	遺物観察表36 (771 ~ 792).....	236
遺物観察表26 (551 ~ 572).....	226	遺物観察表37 (793 ~ 814).....	237
遺物観察表27 (573 ~ 594).....	227	遺物観察表38 (815 ~ 836).....	238
遺物観察表28 (595 ~ 616).....	228	遺物観察表39 (837 ~ 858).....	239
遺物観察表29 (617 ~ 638).....	229	遺物観察表40 (859 ~ 880).....	240
遺物観察表30 (639 ~ 660).....	230	遺物観察表41 (881 ~ 902).....	241
遺物観察表31 (661 ~ 682).....	231	遺物観察表42 (903 ~ 924).....	242
遺物観察表32 (683 ~ 704).....	232	遺物観察表43 (925 ~ 946).....	243
遺物観察表33 (705 ~ 726).....	233	遺物観察表44 (947 ~ 968).....	244
遺物観察表34 (727 ~ 748).....	234	遺物観察表45 (969 ~ 980).....	245
遺物観察表35 (749 ~ 770).....	235		

写真目次

写真 1 重機による表土掘削作業風景.....	9	写真 7 II区発掘作業風景.....	12
写真 2 IE区発掘作業風景.....	9	写真 8 III区発掘作業風景.....	12
写真 3 IE区航空写真測量作業風景.....	10	写真 9 IS区発掘作業風景.....	13
写真 4 IW区竹伐採作業風景.....	10	写真10 IS区埋め戻し作業風景.....	13
写真 5 IW区発掘作業風景.....	11	写真11 天神溝田遺跡の種実・植物遺体.....	167
写真 6 IW区航空写真測量作業風景.....	11	写真12 和鏡保存処理後・X線写真.....	170

図版目次

- 図版1 天神溝田遺跡全景(東上空より) I E区P22根巻石検出状態(南より)
- 図版2 I W区全景(東上空より) I E区P31礎板石検出状態(南より)
- I W区全景(北上空より) I E区P187碗型滓検出状態(西より)
- 図版3 I W区上面遺構検出状態(北東より) 図版13 I E区下面東側遺構検出状態(西より)
- I W区SB2 P5土師質土器杯(18)出土状態 I E区下面西側遺構検出状態(西より)
- I W区SB7 P11陶器皿(28)出土状態 図版14 I E区SB13完掘状態(南より)
- I W区SB7 P13煙管(29)出土状態 I E区下面遺構完掘状態(東より)
- I W区P27礎板石検出状態(北西より) 図版15 II区全景(北東上空より)
- 図版4 I W区SD2完掘状態(北東より) II区上面遺構検出状態(南西より)
- I W区SK9遺物(45~47)出土状態(北より) 図版16 II区埋納遺構セクション・備前焼壺(438)
- I W区SK9紐銭(47)出土状態 出土状態(南より)
- I W区SD2陶器皿(57・58)出土状態 II区埋納遺構和鏡(439)出土状態
- I W区SD2瀬戸系陶器向付鉢(63)出土 II区埋納遺構備前焼壺(438)出土状態(東
- 状態 より)
- 図版5 I W区SK4・5炭化物・焼土検出状態(南より) II区埋納遺構備前焼壺(438)出土状態(南
- I W区上面遺構完掘状態(東より) より)
- 図版6 I W区北壁セクション(南東より) II区埋納遺構完掘状態(南西より)
- I W区南壁セクション(北より) 図版17 II区中央バンクセクション(西より)
- 図版7 I W区下面遺構検出状態(東より) II区SX1焼土・炭化物検出状態(西より)
- I W区SK20遺物出土状態(北東より) II区P319銚帯金具(506)出土状態
- I W区P82礎板石検出状態(北より) II区Ⅲ層筭(582)出土状態
- I W区土器溜まり弥生土器出土状態 II区Ⅶ層弥生土器出土状態(南西より)
- I W区土器溜まり出土状態(東より) 図版18 II区上面遺構完掘状態(南上空より)
- 図版8 I W区土器溜まり出土状態(南東より) II区下面遺構完掘状態(南上空より)
- I W区下面遺構完掘状態(南西より) 図版19 III区上面遺構検出状態(西より)
- 図版9 I S区遺構検出状態(西より) III区下面遺構検出状態(南東より)
- I S区SK6炭化物・焼土検出状態(南より) 図版20 III区IV層遺物出土状態(北東より)
- I S区SB2P3陶器皿(23)出土状態 III区SK10土師質土器杯(716~719)出土状態
- I S区P16磁器碗(34)出土状態 III区Ⅲ層土師器碗(772・773)出土状態
- I S区Ⅵ層土師器皿(320)出土状態 III区Ⅳ-1層銚尾(860)出土状態
- 図版10 I区SB3完掘状態(北より) III区Ⅳ-2層黒色土器甕(896)出土状態
- I S区遺構完掘状態(西より) 図版21 III区中央バンクセクション(北東より)
- 図版11 I E区全景(北東上空より) III区Ⅴ層須恵器壺(944)出土状態
- I E区上面遺構検出状態(北西より) III区Ⅴ層刀子(971)出土状態
- 図版12 I E区西壁セクション(南東より) III区Ⅴ層鉄鏃(973)出土状態
- I E区P6青花皿(81)出土状態 III区Ⅴ層鉄鏃(974)出土状態

- 図版22 Ⅲ区上面遺構完掘状態(東より)
Ⅲ区下面遺構完掘状態(南東より)
- 図版23 Ⅱ区埋納遺構 出土遺物集合写真
Ⅱ区埋納遺構 和鏡(439)
- 図版24 Ⅱ区埋納遺構 古銭
Ⅱ区埋納遺構 土師質土器皿とアワ(452・454)
- 図版25 Ⅱ区埋納遺構 備前焼壺(438)
- 図版26 Ⅱ区埋納遺構 古銭
Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)
- 図版27 Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)
- 図版28 Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)
- 図版29 試掘調査出土遺物
- 図版30 I区SB1P7・SB2,3P1～3・SB3P4 磁器(皿), 陶器(皿)
I W区P1・I S区P1・16・11・12・14 陶器(碗・皿), 磁器(小丸碗・碗)
- 図版31 I W区SK9 鉄製品(紐銭)
I E区SD14 陶器(皿・蓋・碗)
- 図版32 I W区SD2 陶器(皿・碗・鉢)
- 図版33 I E区P80・18・43・7・68 青花(皿), 陶器(碗・皿)
- 図版34 I E区SD15 陶器(碗・皿・大皿), 青磁(皿)
- 図版35 I W区Ⅱ層 陶器(皿・碗)
- 図版36 I W区Ⅲ層 陶器(皿・碗・壺)
- 図版37 I W区Ⅲ層 白磁(皿), 磁器(鉢)
- 図版38 I W区Ⅴ層 土師質土器(皿), 陶器(皿・甕), 青花(皿)
- 図版39 I W区Ⅵ層 須恵器(杯・蓋・壺・甕)
- 図版40 I E区Ⅱ層 土師質土器(焙烙鍋), 陶器(皿)
- 図版41 I E区Ⅲ層 青磁(碗), 青花(皿・碗・杯)
- 図版42 I E区Ⅳ層 土師器(甕)
I E区Ⅶ層 鉄製品(鉄鏃・鉄鎌・鉈・不明鉄製品)
- 図版43 Ⅱ区SK1 土師質土器(杯), 青磁(碗)
Ⅱ区Ⅲ層 瓦質土器(鍋)
- 図版44 Ⅱ区Ⅲ層 東播系須恵器(鉢)
Ⅱ区Ⅲ層 陶器(播鉢・壺・花入・甕)
- 図版45 Ⅱ区Ⅲ層 青磁(皿・碗・不明)
Ⅱ区Ⅲ層 土製品(土錘)
- 図版46 Ⅱ区Ⅵ層 緑釉陶器(皿・碗)
- 図版47 Ⅱ区Ⅵ層 須恵器(杯・蓋・甕)
Ⅱ区Ⅵ層 土師器(羽釜)
- 図版48 Ⅱ区Ⅵ層 土師器(甕)
Ⅱ区Ⅶ層 弥生土器(甕)
- 図版49 Ⅲ区SX2 鉄製品(小札・釘)
Ⅲ区SX3 鉄製品(釘), 鉄滓
- 図版50 Ⅲ区Ⅱ層 青磁(碗), 白磁(皿・碗), 青花(碗)
- 図版51 Ⅲ区Ⅳ-1層 土製品(土錘)
Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(皿)
- 図版52 Ⅲ区Ⅴ層 黒色土器(碗・甕)
- 図版53 Ⅲ区Ⅴ層 製塩土器
Ⅲ区Ⅴ層 土製品(土錘)
- 図版54 I W区SB8P1 土師質土器(皿)
I S区P16 肥前系磁器(小丸碗)
I W区SK9 土師質土器(皿)
I W区SD2 肥前系陶器(皿)
I E区SD2 土師質土器(皿)
- 図版55 I W区土器溜まり 弥生土器(壺)
I W区土器溜まり 弥生土器(甕)
- 図版56 I W区土器溜まり 弥生土器(甕)
I W区土器溜まり 弥生土器(鉢)
I E区P222 土師器(杯)
- 図版57 I W区Ⅰ層 陶器(片口鉢)
I W区Ⅵ層 土師器(皿)
Ⅱ区P5 土師質土器(杯)
Ⅱ区SK2 陶器(播鉢)
Ⅱ区SD8 弥生土器(鉢)
Ⅱ区SX1 土師質土器(杯)
Ⅱ区Ⅱ層 瀬戸美濃系陶器(碗)
- 図版58 Ⅱ区Ⅲ層 土師質土器(杯)
Ⅱ区Ⅵ層 土師器(杯)
Ⅱ区Ⅶ層 弥生土器(壺)
Ⅱ区Ⅶ層 弥生土器(甕)
Ⅱ区Ⅶ層 弥生土器(蓋)
Ⅲ区SK5 土師器(皿)

- Ⅲ区SK5 土師器(杯)
- 図版59 Ⅲ区SK5 土師器(杯)
- Ⅲ区SK6 須恵器(杯)
- Ⅲ区SK10 土師質土器(皿)
- Ⅲ区Ⅰ層 尾戸焼(皿)
- 図版60 Ⅲ区Ⅰ層 肥前系磁器(紅皿)
- Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(小皿)
- Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(杯)
- Ⅲ区Ⅱ層 備前焼(甕)
- Ⅲ区Ⅲ層 土師器(碗)
- Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(皿)
- 図版61 Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(皿)
- Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(杯)
- Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(皿)
- 図版62 Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(盤)
- Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(杯)
- Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(蓋)
- Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(盤)
- Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(杯)
- 図版63 Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(杯)
- Ⅲ区Ⅳ-2層 須恵器(皿)
- Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)
- 図版64 Ⅲ区Ⅴ層 土師器(甕)
- Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(皿)
- Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(杯)
- Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(蓋)
- 図版65 Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺)
- Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(甕)
- Ⅲ区Ⅴ層 灰釉陶器(碗)
- I W区SK6・10 肥前系陶器(皿), 瀬戸天目(碗)
- I W区SD2 陶器(皿)
- 図版66 I W区SX2 備前焼(播鉢)
- I E区SD4 肥前系陶器(皿)
- I W区P73・114 須恵器(杯・器台)
- I W区土器溜まり 弥生土器(壺)
- 図版67 I W区土器溜まり 弥生土器(壺)
- I W区土器溜まり 弥生土器(甕)
- 図版68 I W区土器溜まり 弥生土器(甕)
- 図版69 I W区土器溜まり 弥生土器(甕)
- I W区土器溜まり 弥生土器(甗)
- I W区土器溜まり 弥生土器(鉢)
- I W区土器溜まり 石製品(投弾・石鏃)
- I E区P172 黒色土器(碗), 須恵器(碗)
- 図版70 I E区SK14 土師器(碗), 黒色土器(碗)
- I W区Ⅰ層 統制陶器(皿)
- I E区P188・206・234 土師器(甕・羽釜)
- I W区Ⅱ層 肥前系磁器(瓶)
- I W区Ⅲ層 陶器(皿)
- 図版71 I W区Ⅲ層 唐津焼(碗・大皿)
- I E区Ⅱ層 陶器(鉢・播鉢)
- I E区Ⅱ層 石製品(石錘・石臼)
- I E区Ⅱ層 肥前系磁器(碗・筒型碗・皿)
- I E区Ⅲ層 瀬戸美濃系陶器(皿), 陶器(碗)
- I E区Ⅲ層 備前焼(播鉢)
- 図版72 I E区Ⅳ層 緑釉陶器(碗)
- I E区Ⅳ層 土師器(羽釜)
- I E区Ⅳ層 石製品(砥石)
- Ⅱ区P88 瀬戸天目(碗), 青花(皿)
- Ⅱ区P146・1 瀬戸美濃系陶器(皿), 常滑焼(甕)
- 図版73 Ⅱ区P399・416 弥生土器(甕)
- Ⅱ区P420・440 土師器(羽釜)
- Ⅱ区Ⅱ層 肥前系陶器(皿)
- Ⅱ区Ⅱ層 唐津焼(皿), 尾戸焼(碗)
- Ⅱ区P319 銅製品(銚子金具)
- Ⅱ区Ⅱ層 石製品(石臼)
- 図版74 Ⅱ区Ⅱ層 肥前系磁器(皿・鉢)
- Ⅱ区Ⅲ層 土師質土器(羽釜)
- Ⅱ区Ⅲ層 瓦質土器(鉢(片口)・播鉢)
- Ⅱ区Ⅲ層 瓦質土器(羽釜)
- Ⅱ区Ⅲ層 陶器(甕)
- Ⅱ区Ⅲ層 白磁(皿・碗)
- Ⅱ区Ⅲ層 銅製品(不明)
- 図版75 Ⅱ区Ⅲ層 鉄滓
- Ⅱ区Ⅲ層 石製品(石鍋)
- Ⅱ区Ⅲ層 石製品(砥石)

- | | | | |
|------|-------------------------|------|-------------------------|
| | Ⅱ区Ⅵ層 土師器(羽釜) | | Ⅲ区Ⅳ-1層 黑色土器(椀) |
| | Ⅱ区Ⅵ層 鉄滓 | | Ⅲ区Ⅳ-1層 灰釉陶器(椀), 緑釉陶器(皿) |
| | Ⅱ区Ⅶ層 鉄製品(鉄斧) | | Ⅲ区Ⅳ-1層 製塩土器 |
| 図版76 | Ⅱ区Ⅶ層 石製品(石斧) | 図版78 | Ⅲ区Ⅳ-2層 黑色土器(椀・甕) |
| | Ⅱ区Ⅶ層 石製品(石鏃) | | Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺) |
| | Ⅲ区SX2 鉄滓 | | Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺把手) |
| | Ⅲ区SX3 羽口 | | Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺) |
| | Ⅲ区Ⅰ層 尾戸焼(碗・皿) | | Ⅲ区Ⅴ層 緑釉陶器(椀・皿) |
| | Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(焙烙鍋), 陶器(小鉢) | | |
| | Ⅲ区Ⅲ層 瓦器(椀) | | |
| 図版77 | Ⅲ区Ⅱ層 備前焼(搗鉢) | | |

付図目次

- 付図1 天神溝田遺跡調査区全体遺構配置図(S=1/200)

第 I 章 調査の契機と経過

1. 調査の契機

天神溝田遺跡の所在するいの町は、高知県中央部に位置し、東側は高知市に接する。町の南部に位置する中心部には、鉄道に並行して東西に国道33号線が通っており、仁淀川橋のたもとで、吾北、本川、愛媛県西条市方面に向かう国道194号線と分岐する。他方、国道33号線は、仁淀川橋を渡ると、日高村、佐川町、越知町、仁淀川町を経て、愛媛県松山市に至る。これらの国道は、高知県西部の主要国道であり、いの町は県都である高知市に隣接し、近郊からの交通の要衝となっているため、中心部の国道は慢性的な道路渋滞になっている。この交通渋滞緩和、及び路面冠水の解消、交通安全の確保等を目的として、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所による高知西バイパスの計画が図られた。高知西バイパスは、高知市鴨部よりいの町波川までの総延長9.8kmの区間で計画されており、I期工事として高知市鴨部よりいの町枝川までの区間は平成9年度までに供用開始された。いの町枝川から波川区間についてはII期工事として地域高規格道路・高知松山自動車道の一部としての事業が進められてきた。現在いの町内では、平成18年度から高知西バイパス建設工事が進められている。路線計画は、いの町中心部の南部丘陵地を現国道33号線に並行して西へ進み、仁淀川を架橋して対岸の鎌田地区に渡り、波川、日高村方面に向けてバイパスが建設される。

いの町内には、仁淀川及び、その支流沿いに遺跡の分布密度が高く、バーガ森北斜面遺跡や天神溝田遺跡などに代表される弥生時代から中・近世にかけての周知の埋蔵文化財包蔵地が数多く立地する。今回のバイパス路線計画は、南部丘陵地及び宇治川沿いに工事が行われることから国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所と高知県教育委員会による協議が行われ、計画路線内及び周辺部に

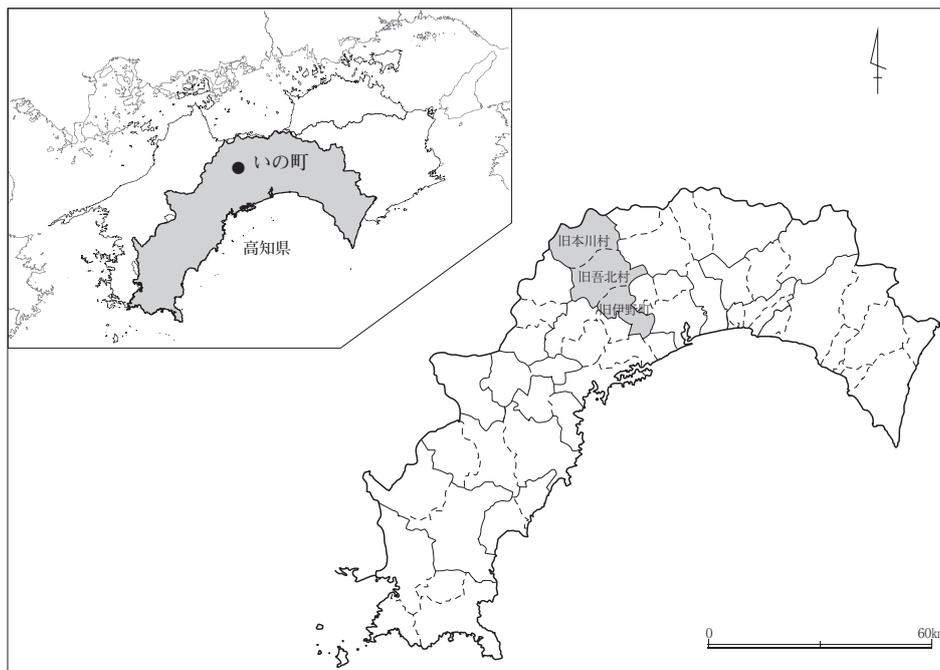


図1 いの町位置図

1. 調査の契機

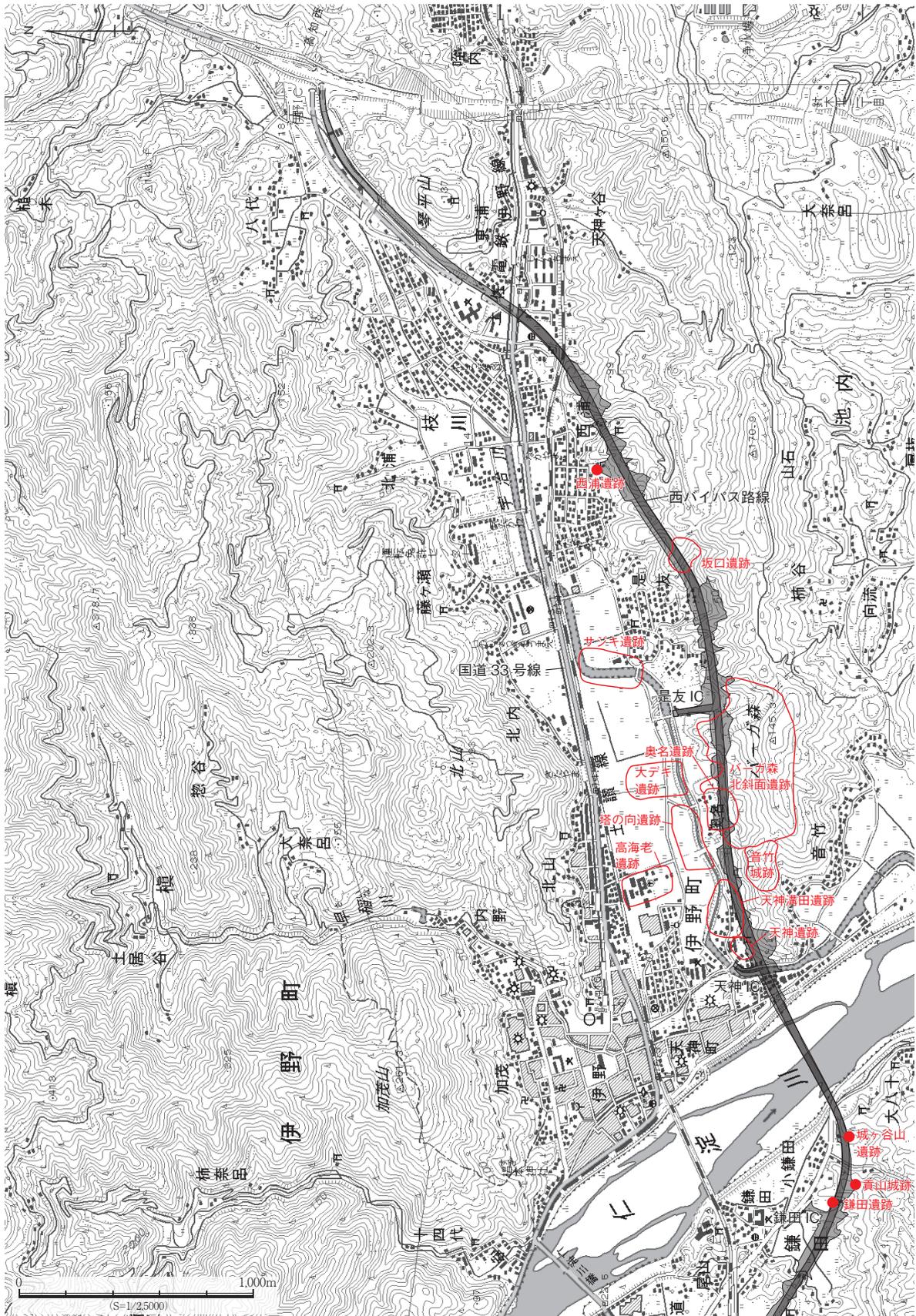


図2 高知西バイパス路線図と周辺の遺跡

埋蔵文化財包蔵地が立地する工事計画区域については、事前に試掘調査を行い、遺構・遺物の有無、内容を確認したうえで発掘調査が必要な場所、範囲についての協議がされた。

試掘確認調査は平成18年度に実施され、翌年度以降に計画されている道路建設工事の内仁淀川架橋工事により影響を受ける箇所について、仁淀川右岸の鎌田地区、左岸の天神・天神溝田地区で実施した。鎌田地区には周辺に中世のハギ原遺跡・門田遺跡が、天神地区には弥生時代の天神遺跡・天神溝田遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として立地する。天神溝田遺跡の試掘調査では古代から中世を中心とする遺構と遺物の広がり確認され、従来の埋蔵文化財包蔵地より広範囲に渡る事が明らかとなった。この試掘調査の結果を受けて、高知県教育委員会、国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所との間で本発掘調査についての協議を重ね、バイパス工事によって影響を受ける範囲について平成20年度から記録保存を目的とした本発掘調査を実施することとなった。また、平成20年度前半期には高知西バイパス建設工事、いの町道(奥名西線)道路改良工事によって影響を受ける天神溝田遺跡について発掘調査を実施する必要性が生じた。このため、いの町と高知県教育委員会、土佐国道事務所との協議が行われ、いの町天神地区については、先行して町道改良工事計画範囲内について記録保存を図る緊急発掘調査を実施することとなった。平成20年度は平成20年7月15日から同年10月31日までのいの町道奥名西線道路改良工事に伴う発掘調査を実施し、同年11月5日から高知西バイパス建設工事に伴う調査として仁淀川対岸に位置する鎌田地区の遺跡の発掘調査に着手した。平成21年度に仁淀川架橋に際し、橋脚と天神IC、鎌田ICの工事計画があり、先行して天神溝田遺跡の一部及び鎌田地区に所在する鎌田遺跡、貢山城跡の本発掘調査を実施した。

2. 天神溝田遺跡の概要と周辺の遺跡

天神溝田遺跡は、仁淀川の左岸、支流の一つである宇治川沿いに立地する。遺跡発見の端緒となったのは昭和36年に行われた宇治川改修工事の際に銅剣と銅戈が出土したことによる。出土した銅剣は中細型、銅戈は中広型であり弥生時代中期後半頃に位置づけられるもので、昭和36年にいの町指定文化財となり、現在は高知県立歴史民俗資料館に保管されている。西側に隣接する天神遺跡から弥生時代後期に位置付けられている土器(天神式土器)も出土しており、弥生時代中期後半から後期にかけての遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。

また、遺跡の南側の丘陵には音竹城跡が立地する。現状では堀切や平場など中世の山城としての遺構が良く残っており、中世備前焼の壺片などが表面採取されている。城主、築城時期など詳細は不明であるが、平成20年度に行われたいの町道奥名西線建設に伴う発掘調査では、音竹城跡の主郭がある丘陵下の調査区で南北朝期から室町時代前期にかけての遺構と遺物が確認され、音竹城跡の機能時期や関連すると思われる屋敷などの施設の実態が明らかとなった。

宇治川を挟み対岸には奈良から平安時代にかけての遺物が採取された塔の向遺跡が立地する。平成20年度に行われたいの町道奥名西線建設に伴う発掘調査では、奈良から平安時代にかけての遺構と遺物が沖田橋付近の調査区(I区)で確認された。検出された遺構は掘立柱建物跡や土坑、溝などであり、8世紀後半～9世紀前半代にかけての土師器、須恵器などの供膳具、土師器甕などの煮炊具、9世紀後半～10世紀代にかけての黒色土器や緑釉陶器、11～12世紀代にかけての土師器や瓦器椀などが出土し、古代から連続と続く遺跡である事がわかった。さらに、同調査区の下面で弥生時代後期前半の土坑を検出した。溝状の土坑で内部から壺、甕、高杯が完形で出土した。出土した弥生土器甕

2. 天神溝田遺跡の概要と周辺の遺跡

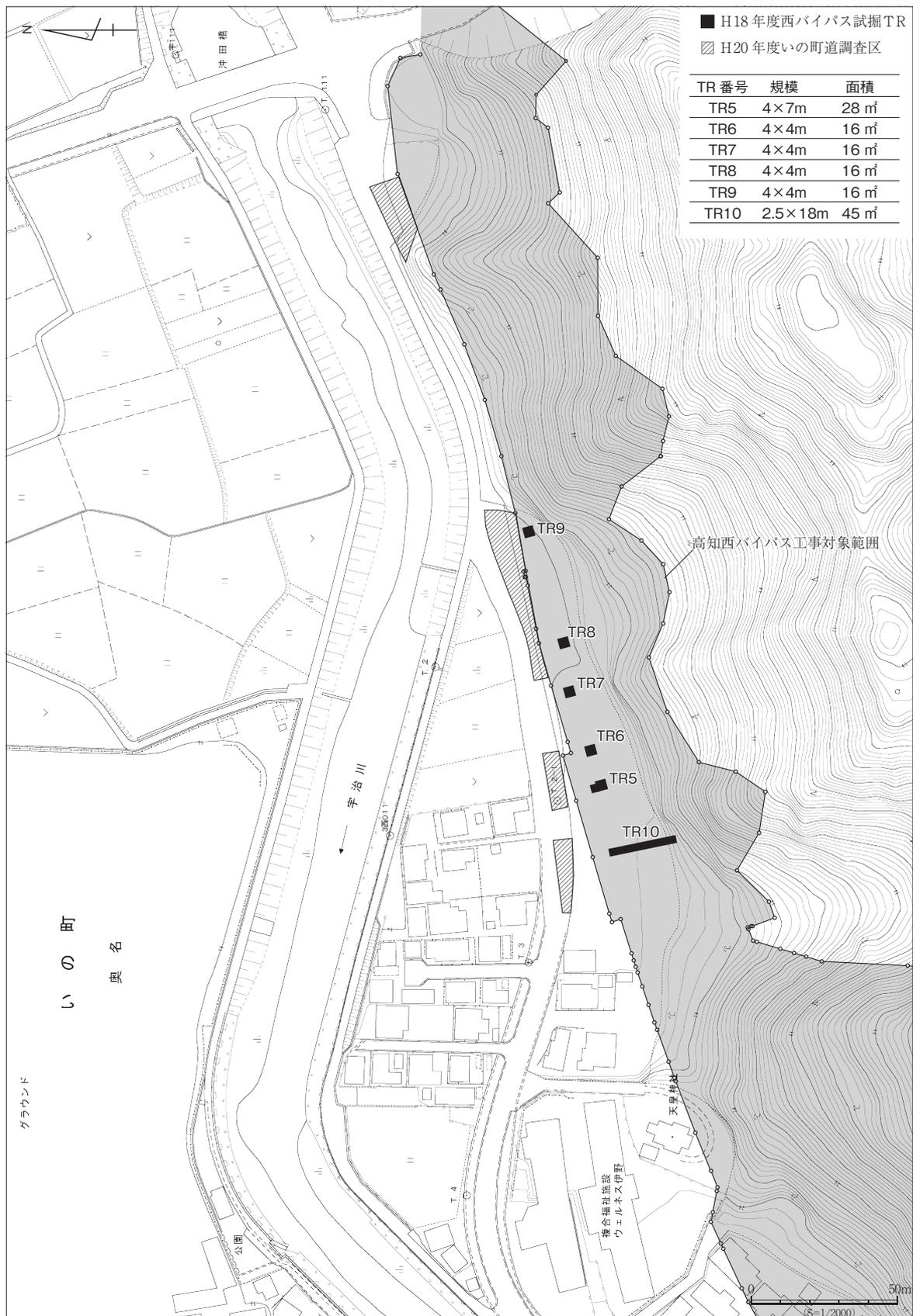


図3 試掘調査位置図

は、口縁部に粘土の貼付帯を残し、形態的に西南四国域に多く分布するタイプの系譜を持つものであった。弥生時代中期後半から後期初頭の高地性集落であるバーガ森北斜面遺跡の丘陵裾にあたる地点で確認されたことから、集落の変遷及び広がりを知る上で貴重な成果が得られている。

今回の天神溝田遺跡の調査は、弥生時代中期末から後期前半のバーガ森北斜面遺跡及び、後期後半の天神・天神溝田遺跡への広がりや遺跡の変遷、古代では遺構の時期とその性格、中世では集落の広がりや音竹城跡との関連性を把握する調査といえる。

3. 試掘調査の概要

天神溝田遺跡についての試掘確認調査は平成18年12月5日から12月28日まで実施した。調査対象地の内、国土交通省が工事用地として取得している範囲について合計10箇所の試掘トレンチを設定し発掘調査を実施した。仁淀川に架橋する橋脚工事が予定されている調査対象地西部は、宅地があり限られた範囲での試掘であった。4箇所のトレンチを設定し調査を実施した結果、遺構、遺物は確認できなかった。宅地化に伴う造成土が2.5m以上あり、その下層は粘土が厚く堆積していた。植物の腐植土が互層に堆積しており、仁淀川及び宇治川の後背湿地にあたる部分と思われる。

調査対象地東部は音竹城跡が立地する丘陵裾部を中心にトレンチを設定し調査を実施した。現況は宅地跡及び竹林であった。谷開口部に設定したTR5・6、TR8～10で古代から中世にかけての包含層及び遺構を検出した。以下に遺構と遺物が検出された試掘トレンチの概要を述べる。

(1) 各トレンチの基本層序と概要

TR5

基本層序

- 第Ⅰ層 暗灰色シルト(現表土)
- 第Ⅱ層 暗灰褐色シルト
- 第Ⅲ層 褐灰色シルト(中世遺物包含層)
- 第Ⅳ層 明褐色シルト(φ0.5～1.0cm礫混。古代遺物包含層)
- 第Ⅴ層 暗灰褐色シルト(Mn含む。古代遺物包含層)
- 第Ⅵ層 褐灰色シルト(弥生遺物包含層)
- 第Ⅶ層 Ⅶ-1 灰褐色粘土質シルト
Ⅶ-2 灰褐色粘土

調査対象地の中央部の山裾に設定した試掘トレンチである。現表土下0.5～0.9mで古代の遺物包含層を確認した。Ⅳ層は明褐色シルトで0.5～1.0cmの礫を含む。10世紀後半～11世紀前半代の土師器碗、土師器甕などが出土した。Ⅴ層は暗灰褐色シルトであり9世紀末～10世紀前半代の遺物が包含されていた。また、Ⅵ層からは弥生時代後期後半の土器も出土した。

TR9

基本層序

- 第Ⅰ層 暗褐色シルト(現表土)
- 第Ⅱ層 灰褐色シルト(φ0.5～3.0cm礫混)

3. 試掘調査の概要

- 第Ⅲ層 暗灰褐色シルト(φ 1.0cm礫混)
- 第Ⅳ層 褐灰色粘土質シルト
- 第Ⅴ層 黄褐色粘土質シルト
- 第Ⅵ層 暗灰褐色シルト(φ 3.0～4.0cm礫混)
- 第Ⅶ層 暗黄褐色粘土質シルト(φ 3.0～4.0cm礫混)

調査対象地の中央やや東よりの山裾に設定したトレンチである。現表土下0.7mでピットを1個検出した。遺構検出面はⅣ層上面であり、遺構埋土はⅢ層の暗灰褐色シルトであった。また、試掘トレンチ北側にサブトレンチを設定し下層確認を行った結果、現表土下1.1m、上面遺構検出面より0.3～0.4m下でピット3個を確認した。検出面はⅤ層の黄褐色粘土質シルト上面で、遺構埋土はⅣ層の褐灰色粘土質シルトである。Ⅵ、Ⅶ層では遺構と遺物は確認されなかった。

TR10

基本層序

- 第Ⅰ層 暗褐色シルト(現表土)
- 第Ⅱ層 暗灰色シルト(φ 2.0～3.0cm礫混)
- 第Ⅲ層 黄褐色シルト(φ 1.0～3.0cm礫混, 遺物包含層)
- 第Ⅳ層 暗褐色シルト(φ 5.0～6.0cm礫混, 遺物包含層)
- 第Ⅴ層 灰褐色粘土質シルト(φ 1.0～2.0cm礫混, 遺物包含層)
- 第Ⅵ層 黄褐色シルト(φ 1.0～2.0cm礫混, 遺物包含層)
- 第Ⅶ層 暗灰褐色シルト(φ 1.0～2.0cm礫混, 遺物包含層)
- 第Ⅷ層 淡黄褐色粘土質シルト(遺物包含層)
- 第Ⅸ層 黒褐色粘土(遺物包含層)
- 第Ⅹ層 灰褐色粘土

調査対象地の中央やや西よりの山裾に設定したトレンチである。現況は段地形であったため、上段部から下段部に向けて縦断状にトレンチを設定した。上段では、表土下0.3～0.4m下で中世から近世にかけての遺物を包含するⅢ層を確認した。また、焼成土坑、ピット等を検出した。さらに、下段では下層に包含層(Ⅴ～Ⅸ層)が確認され古代から中世を中心とする遺物が出土し、地表下2.08m、Ⅹ層上面で、ピット、土坑を検出した。出土遺物は古代では土師器供膳具、煮炊具、須恵器甕・壺など9～11世紀代が中心である。中世では14～15世紀にかけての土師質土器供膳具、瓦質土器鍋、古瀬戸などの出土がみられた。Ⅹ層上面に堆積しているⅧ・Ⅸ層は粘土質シルトと粘土であり、9～10世紀代の遺物包含層であることから、Ⅹ層上面で検出された遺構はこの頃のものと思われる。また、Ⅷ層から下の層は水平に堆積しており、安定した基盤層として捉えることができる。

(2) 試掘調査出土遺物

今回の天神溝田遺跡の試掘調査では約400点の遺物が出土した。時代別にみると、弥生土器(弥生時代後期)が96点、古代(9～11世紀)は、土師器230点、須恵器20点、緑釉陶器1点の合計251点、中世(14～15世紀)は、土師質土器38点、瓦質土器8点、瀬戸1点の合計47点、近世(17～18世紀)は陶磁器2点、瓦1点の合計3点である。古代と中世の遺物の割合が多く、古代の遺物についてはTR5・6と調査対象地西

寄りに設定したトレンチで多く確認された。TR9では中世の遺物が多く出土した。1～3は供膳具でありTR6・8から出土した。1は土師器杯の底部片であり、底部はやや段を持って立ち上がる。外底部はヘラ切り痕が残る。2は土師質土器杯の底部片であり、内底部にヘラ状工具による回転調整の痕跡を残す。3は土師器皿であり、回転ナデ調整、回転ヘラ切りが認められる。4～6は須恵器でありTR5・6から出土した。4は甕であり、頸部が立ち、口縁部は外反し端部は直立する。外面胴部には平行タタキ痕が残る。5は蓋である。天井部はヘラ削り、体部は回転ナデ調整による。6は壺の胴部片であり、肩部から上部、底部が欠損する。回転ナデ調整が施される。7～9は土師器煮炊具でありTR6から出土した。7は短い鏝の付く羽釜である。8・9は口縁部が外反する甕であり、ハケ調整が施される。10・11は瓦質土器の鍋でありTR9から出土した。膨らみのある胴部から口縁部は直立気味に仕上げる。口縁部はヨコナデ調整が施される。12・13は管状土錘である。12の重量は3.0g、13は6.7gを測る。14は古瀬戸の片口鉢で、全体的に灰釉が薄く施釉され外面の体部下半は露胎である。

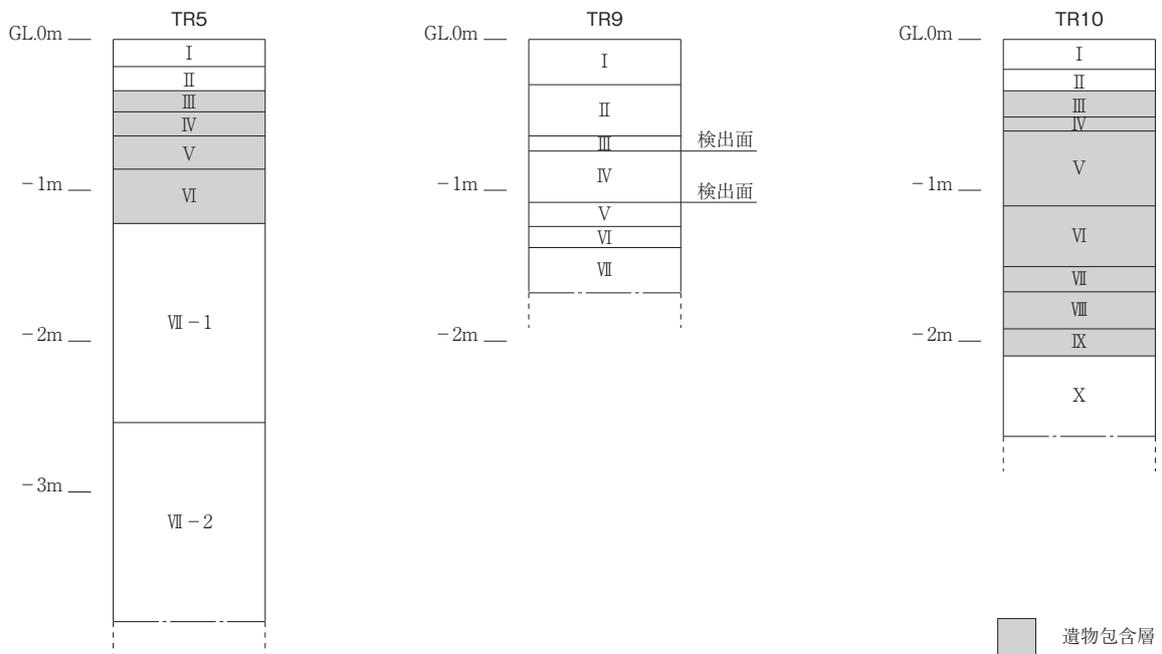


図4 試掘トレンチ柱状図

3. 試掘調査の概要

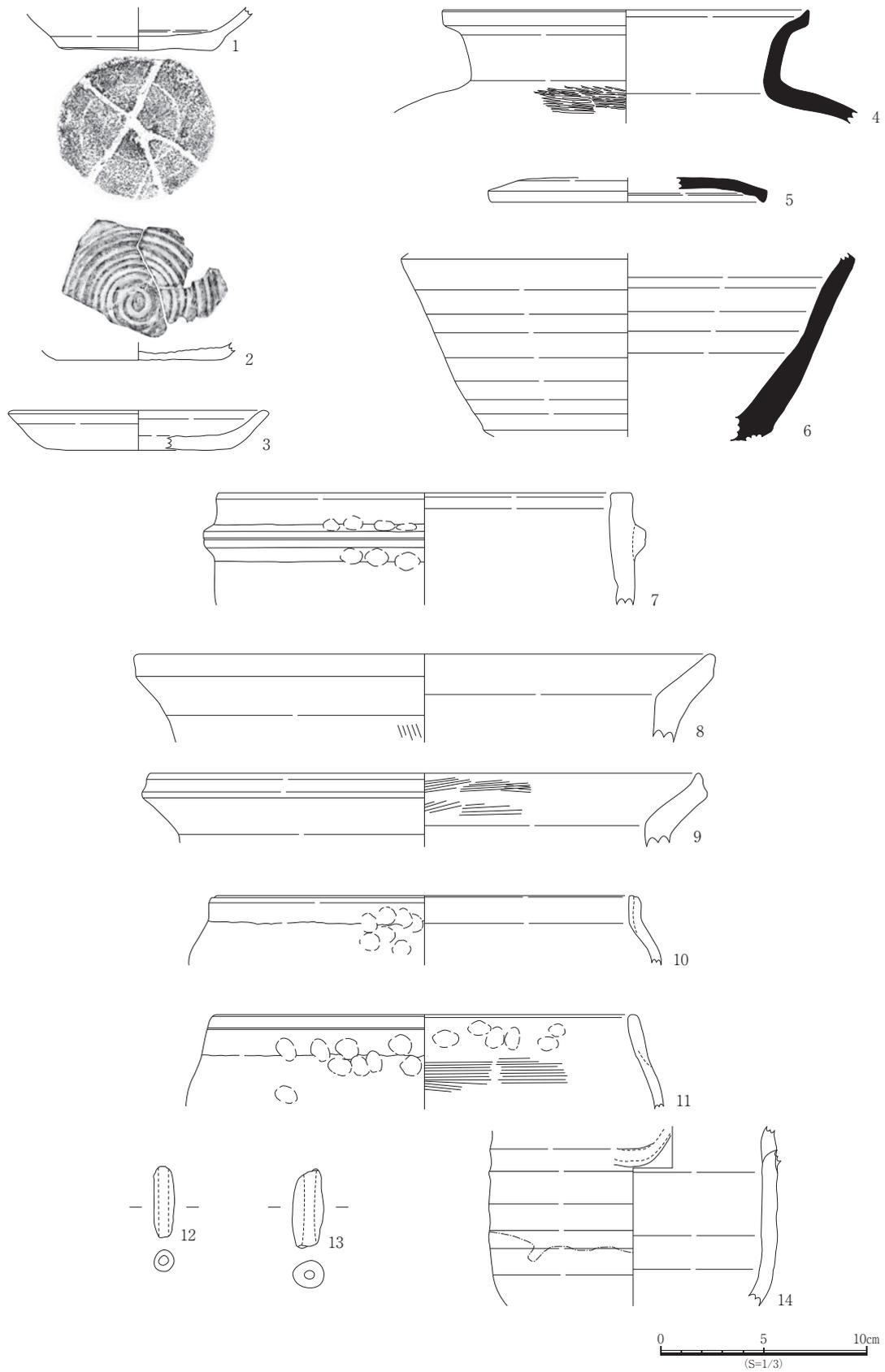


図5 試掘調査遺物実測図

4. 調査日誌抄

平成20年度

平成20年12月22日～平成21年3月25日

12.22(月) 重機による表土掘削開始。

1.7(水) 竹伐採作業を開始する。



写真1 重機による表土掘削作業風景

1.13(火) 貢山城跡事務所から天神溝田遺跡事務所へ引越し作業を行う。重機で表土の掘削作業を行う。

1.14(水) 重機による表土掘削を行う。

1.15(木) 重機による表土掘削と調査区南壁の清掃・竹の伐採作業を行う。Ⅲ層から近世陶磁器が出土する。

1.16(金) 重機による表土掘削を行う。

1.19(月) 重機でI E区西部分を掘削, 竹伐採及び南側斜面の壁の清掃を行う。東側部は, 山土を掘削し, 岩が見えるように掘削を始める。

1.20(火) 山際, 土石流堆積の東側から岩出しを行う。西部の斜面地は重機によって掘削する。西部・南北方向にトレンチを入れる。

1.21(水) 雨天のため現場作業を中止する。重機による掘削のみ行う。

1.22(木) 雨天のため現場作業を中止する。

1.23(金) 重機によるトレンチ掘削を行う。

1.26(月) 南西斜面側の竹伐採を行った後, 重機と人力で包含層掘削を行う。同時に遺構の検出も行い, ピット・土坑が検出された。

1.27(火) 午後からトレンチ東側の遺構検出作業を行う。重機は山際から掘削を行う。西側トレンチの深掘りを行い, 堆積を見る。調査区グリッドの設定を行う。

1.28(水) 遺構検出作業とI E区東側トレンチ調査を行う。

1.29(木) 調査区清掃後, 一面目中近世遺構検出状態の写真撮影を行う。撮影後, 雨が降り始め作業を終える。

1.30(金) 雨天のため現場作業を中止。事務所で写真等整理作業を行う。

2.2(月) 上面遺構掘削を開始。同時に上面南西部の一部を精査・遺構検出を行う。重機は北西部を中心に, 中世の遺構が検出される高さまで掘削をする。

2.3(火) 雨天のため現場作業を午前で中止にする。午後重機による掘削を一部行う。

2.4(水) 前日の雨の影響により, 現場作業を中止する。

2.5(木) 遺構掘削を行う。

2.6(金) 遺構掘削と遺構検出作業を行う。

2.9(月) 遺構掘削と遺構検出作業を行う。午後雨が降り始め, 現場作業を中止する。

2.10(火) 遺構掘削と北側の遺構検出作業を行う。

2.12(木) 遺構掘削と北側の遺構検出作業を行う。重機は北壁部分を掘削する。平面図の作成を行う。

2.13(金) 遺構掘削と遺構検出作業を行う。

2.17(火) 遺構掘削と遺構検出作業, 山際周辺の檜・竹の伐採も行う。

2.18(水) 清掃の後, 航空写真測量を行う。重機は廃土置き場の移動を行う。

2.19(木) 一面目完掘状態写真撮影を行う。I E区西壁側にトレンチを設定し, 機械掘削を行う。上面遺構の平面図を作成する。

2.20(金) 調査区西側より下層掘り下げを行う。上面遺構測量終了する。



写真2 I E区発掘作業風景

2.23(月) I E区西側より下層包含層(Ⅶ層)掘削を開始する。

2.24(火) 午前中は調査区東半部の遺構検出。降雨のため, 遺構検出を中止する。西側の竹藪に試掘3箇所を設定し, 木々の伐採作業を行う。

2.25(水) 雨天のため現場作業を中止する。

4. 調査日誌抄

- 2.26 (木) 上面の残りの遺構掘削及び下面の重機掘削と人力掘削を行う。
- 2.27 (金) 雨天のため現場作業を中止する。事務所にて図面等整理作業を行う。
3. 2 (月) 下面遺構検出作業及び西壁と北壁の清掃、分層を行う。午後、検出状態写真の撮影を行う。
3. 3 (火) 雨天ため、現場作業を中止する。
3. 4 (水) 重機にて山際の西側上面の掘削を行い、人力によって遺構検出・精査を行う。雨天のため午前中で現場作業終了。
3. 5 (木) 新しく検出した上面遺構の検出写真撮影及び遺構掘削・測量を行う。
3. 6 (金) 雨天のため現場作業を中止する。
3. 7 (土) 上面の遺構検出と遺構掘削を行い、測量を行う。また、西側下面の精査も同時に行う。
3. 9 (月) 上面の遺構検出と遺構掘削を行い、測量を行う。上面掘削後、下面遺構検出を行う。
- 3.10 (火) 重機で I E 区東側上面掘削後、遺構検出及び遺構掘削と測量を行う。西側下層の遺構検出と掘削を行う。
- 3.11 (水) I E 区西側の下層面の清掃、残りの遺構掘削も行う。重機で東側を掘削後、遺構検出を行う。
- 3.12 (木) I E 区中央部の遺構検出後、午後遺構検出写真の撮影。東側は重機と人力掘削で遺構検出を行う。
- 3.13 (金) 雨天のため現場作業を中止する。
- 3.14 (土) 午前中は排水作業を行う。調査区東部の下層遺構を掘削する。
- 3.15 (日) I E 区東部の下層遺構を掘削する。
- 3.16 (月) I E 区東側の遺構掘削及び測量を行う。遺構掘削後は、山際から清掃を開始する。
- 3.17 (火) 清掃後、完掘状態写真撮影を行う。その後、重機による掘削を行い、遺構検出状態写真撮影後、遺構掘削。ほぼ完掘を迎える。
- 3.18 (水) 午前中、清掃後航空写真測量。その後、下層



写真3 I E 区航空写真測量作業風景

- 確認のため東端を深掘りする。分層後にセクション写真を撮影。後に図面作成を行う。
- 3.19 (木) 埋め戻し作業を開始、西壁の写真撮影を行う。道具類の片づけを行い、現場作業員は本日で作業終了。
- 3.20 (金) 重機による埋め戻し作業を行う。
- 3.23 (月) 重機による埋め戻し作業と道具類の運搬作業を行う。
- 3.24 (火) 重機による埋め戻し作業と電気・水道の撤去作業を行う。
- 3.25 (水) 埋め戻し作業と事務所・倉庫・トイレの撤収作業を行う。産業廃棄物も撤収する。

平成21年度

平成21年4月22日～9月29日

- 4.22 (水) 現場作業員集合、就労規定等の説明をする。竹伐採と重機にて産業廃棄物の移動を行う。
- 4.23 (木) シルバー人材センターより3名派遣、竹伐採を行う。
- 4.24 (金) I 区の伐採はほぼ終了する。碎石搬入、重機により舗詰めを行う。安全柵で調査区を設定する。
- 4.27 (月) 現場作業員作業開始。竹伐採と産業廃棄物の運搬作業を行う。事務所・トイレ・倉庫の設置。



写真4 I W 区竹伐採作業風景

- 4.28 (火) 現場作業員は休み。産業廃棄物の処理を引き続き行う。
- 4.30 (木) I W 区南壁・西壁の清掃作業を行う。重機でTR及び表土掘削、グリッド設定作業を行う。
5. 1 (金) I W 区中央部より、上面遺構検出を行う。ピット・土坑・溝跡が確認される。
5. 7 (木) I 区遺構検出作業を行う。
5. 8 (金) 清掃後、I W 区遺構検出状態写真撮影を行う。重機は東側を拡張する。

- 5.11(月) I W区の西側から遺構掘削を開始する。
- 5.12(火) I W区遺構掘削・測量を行う。
- 5.15(金) 現場作業員は休み。現場にてセクション図作成後、遺物・図面整理を行う。
- 5.18(月) I W区の遺構掘削を行う。II区は重機で表土掘削を開始する。



写真5 I W区発掘作業風景

- 5.20(水) I W区の遺構掘削・平面図作成を行う。II区はトレンチ調査、グリッド設定を行う。
- 5.21(木) I W区は遺構掘削・平面図作成を行う。II区は包含層掘削、遺構検出作業を行う。
- 5.22(金) 現場作業員・重機は休み。
- 5.25(月) I W区の上面完掘写真撮影を行う。II区は遺構検出作業、重機による排土移動を行う。
- 5.26(火) I W区の包含層掘削、遺構検出作業を行う。
- 5.27(水) I W区の包含層掘削、遺構検出作業を行う。II区は遺構検出作業を行う。
- 5.29(金) I W区の包含層掘削、遺構検出作業を行う。II区は重機による排土移動を行う。
- 6.1(月) 現場作業員休み。I W区の重機掘削、II区は重機による排土移動を行う。
- 6.2(火) I W区の遺構検出作業を行う。II区は産業廃棄物の移動・搬出を行う。
- 6.3(水) 雨のため現場作業を中止する。
- 6.4(木) I W区の遺構検出作業を行う。II区は重機で廃土搬出を行う。
- 6.5(金) 午前中I W区東端の遺構検出及び写真撮影を行い、雨天のため午後から作業を中止。
- 6.8(月) I W区の遺構検出状態写真撮影、その後遺構掘削を行う。II区重機掘削、産業廃棄物の搬出。
- 6.9(火) I W区の遺構掘削と測量を行う。
- 6.10(水) 雨天により現場作業中止。
- 6.11(木) 排水作業の後、I W区の遺構測量を行う。II区西端の遺構検出を行う。
- 6.12(金) I W区は重機で下層掘削を始める。II区西端の検出状態写真撮影、東端は包含層掘削

を行う。

- 6.13(土) II区の重機による表土掘削を行う。
- 6.15(月) I W区の下層包含層掘削を行う。調査区の西端から遺構検出作業を行う。II区は竹伐採を行う。
- 6.16(火) I W区も下層の遺構検出作業を行う。II区は竹伐採を行う。
- 6.17(水) I W区の下層遺構検出作業を行う。II区は重機による包含層上面まで掘削を行う。
- 6.18(木) I W区は下層の遺構検出作業を行う。II区は整地層掘削とトレンチ掘削調査を行う。
- 6.19(金) I W区は遺物集中の検出作業を行う。II区はトレンチ掘削調査と包含層掘削を行う。
- 6.20(土) II区の廃土搬出作業を重機で行う。
- 6.22(月) 現場作業員休み。I W区の遺構測量を行う。II区は重機で、西部分の掘削を行う。
- 6.23(火) I W区は清掃作業の後、完掘状態写真撮影を行う。II区東側の包含層掘削を行う。
- 6.24(水) II区の包含層掘削と重機による廃土搬出作業を行う。
- 6.25(木) I区は重機で下面掘削を行う。II区東端の包含層掘削、西側部分の山斜面清掃を行う。
- 6.26(金) I W区は重機掘削後、土器の取上げや包含層掘削を行う。II区包含層掘削及び遺構検出を行う。
- 6.29(月) 雨天のため現場作業を中止する。
- 7.1(水) I W区の土器溜まりの検出と、精査及び遺構検出作業を行う。
- 7.2(木) I W区の排水作業と土器溜まりの検出作業を行う。II区は包含層掘削、東端を重機で拡張する。
- 7.3(金) I W区の土器溜まりの検出作業と遺構検出を行う。II区は包含層掘削とガードフェンス設置を行う。
- 7.4(土) I区の土器溜まりの検出作業と出土状態の写真撮影、遺構検出を行う。
- 7.6(月) I W区の遺構検出作業の後、遺構検出状態



写真6 I W区航空写真測量作業風景

4. 調査日誌抄

- の写真撮影を行う。
- 7.7 (火) I W区の遺構掘削を行う。
- 7.8 (水) I W区の遺構掘削・弥生土器取上げを行う。
- 7.9 (木) I W区の排水作業後、遺構の完掘と同時に、西端から清掃を開始する。午後3時より航空写真測量を行う。
- 7.10 (金) I W区の弥生土器取上げ及び調査区南壁、北壁のセクション図作成を行う。II区は包含層掘削を行う。
- 7.13 (月) I W区の包含層掘削・弥生土器集中の写真測量を行う。II区は包含層掘削と遺構検出、バンクのセクション図作成を行う。
- 7.14 (火) I W区包含層掘削・弥生土器の取上げ、II区は包含層掘削と遺構検出作業を行う。
- 7.16 (木) I W区包含層掘削・弥生土器の取上げを行う。
- 7.17 (金) I W区の包含層掘削、弥生土器の取上げ。午後より雨天のため現場作業を中止する。
- 7.21 (火) 雨天のため現場作業を中止する。事務所にて図面等整理作業を行う。
- 7.23 (木) I W区の清掃、下面の遺構検出状態写真撮影を行う。
- 7.24 (金) I W区の弥生土器を取上げ、遺構掘削の後、下面遺構完掘状態写真の撮影を行う。
- 7.27 (月) I W区は重機による埋め戻し作業を始める。II区は遺構検出、包含層掘削を行う。
- 7.31 (金) 作業日数調整のため現場作業を中止する。
- 8.3 (月) I W区は重機による埋め戻し作業を行う。II区は遺構検出を兼ねて、包含層掘削を行う。
- 8.5 (水) II区東端側を清掃、遺構検出状態写真撮影を行う。撮影後に遺構掘削作業を行う。
- 8.6 (木) II区の遺構掘削作業を行う。
- 8.10 (月) 現場作業員は休み。
- 8.17 (月) II区の遺構掘削作業と切合い関係の遺構について測量を行う。
- 8.21 (金) II区東側の遺構掘削作業と測量を行う。西側は包含層掘削、遺構検出作業。
- 8.27 (木) 現場作業員は休み、図面等整理作業を行う。



写真7 II区発掘作業風景

- 9.1 (火) II区西側の包含層掘削、遺構検出作業。
- 9.3 (木) 雨天のため、現場作業を中止する。
- 9.4 (金) II区西側の検出作業の後、遺構検出状態の写真撮影。引き続き遺構掘削を行う。
- 9.5 (土) II区西側遺構掘削・測量を行う。
- 9.7 (月) II区西側遺構掘削、埋納遺構遺物出土状態の写真撮影と平面図の作成を行う。
- 9.8 (火) II区西側の遺構掘削・測量を行う。
- 9.10 (木) 午前記者発表。II区西側の遺構掘削・測量を行う。
- 9.11 (金) 航空写真測量を実施する。
- 9.12 (土) 現地説明会を開催する。
- 9.14 (月) 現場作業員は休み。II区東側を重機掘削。
- 9.15 (火) II区東側の下層遺構検出作業を行う。
- 9.17 (木) II区東側の下層検出作業、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 9.18 (金) II区東側の遺構掘削を行う。
- 9.23 (水) II区東側の遺構掘削を行う。西側遺構検出作業、遺構掘削を行う。
- 9.24 (木) II区の遺構完掘写真撮影、航空写真測量を行う。道具等の清掃、片付けを行う。
- 9.25 (金) 現場事務所周辺の清掃を行う。
- 9.26 (土) 重機による埋め戻し作業開始。
- 9.28 (月) 事務所片付け、電気・水道撤去。
- 9.29 (火) 事務所撤去。発掘調査終了。

平成23年度

平成24年1月26日～3月7日

- 1.26 (木) 本日より現場作業員を入れ、III区周辺の伐採した木々を片付ける。重機による表土層掘削。
- 1.27 (金) 周辺の伐採した木々を片付ける。重機による表土層掘削。
- 1.30 (月) 重機による表土層掘削。丘陵上に補足調査のトレンチを設定、掘削する。
- 1.31 (月) 重機による表土層掘削。
- 2.1 (水) 重機にて土置場の廃土移動及び表土と無遺



写真8 III区発掘作業風景

- 物層掘削を行う。
- 2.2 (木) 包含層掘削及び、遺構検出作業を行う。
 - 2.3 (金) 重機にて土置場の廃土移動、表土・無遺物層掘削を行う。
 - 2.6 (月) 雨天のため現場作業員は休み。重機により廃土の移動と表土の掘削を行う。
 - 2.8 (木) Ⅲ区の北東部と南部の包含層の掘り下げを行う。北壁にトレンチを設定し、下層を確認しながら掘り下げる。
 - 2.9 (木) Ⅲ区北東部のⅡ層掘り下げを行う。
 - 2.10 (金) 遺構検出作業と清掃作業を行い、上面遺構の検出写真を撮影する。遺構配置図を作成する。
 - 2.13 (月) 雨天のため現場作業は中止。
 - 2.15 (木) 上面遺構掘削を開始する。
 - 2.16 (木) 上面遺構の掘削がほぼ終了する。南東部は瓦礫の堆積が厚く、一部を残し検出する。
 - 2.17 (金) 完掘状態写真撮影を行う。写真撮影後、包含層を掘削する。
 - 2.18 (土) Ⅳ層を掘削し、遺構検出を行う。
 - 2.21 (火) Ⅲ区全体の下層遺構検出を行う。下層遺構検出状態写真撮影後、遺構掘削に入る。
 - 2.22 (木) 遺構掘削作業を行う。雨天のため、午前中で作業終了する。
 - 2.23 (木) 雨天のため現場作業を中止する。
 - 2.24 (金) 下面遺構完掘状態写真撮影を行う。平面図、セクション図を作成する。
 - 2.27 (月) 下層確認、セクション図作成を行う。道具類の運搬を行う。
 - 2.28 (火) 重機による埋め戻し開始。道具類運搬、電気・水道撤去。
 - 2.29 (水) 重機による埋め戻しを行う。事務所・倉庫・トイレ撤去。
 - 3.1 (木) 重機による埋め戻しを行う。
 - 3.7 (水) 埋め戻し完了。

平成24年度

平成24年4月23日～5月28日

- 4.23 (月) 発掘調査に伴い現場用のトイレ・倉庫を搬入する。
- 4.24 (火) 現場作業を開始する。調査対象地周辺の草刈り、及び竹林の伐採を行う。
- 4.25 (水) I S区周辺の伐採作業を行う。調査前の全景写真を撮影する。
- 4.26 (木) 重機搬入。伐採樹木の移動を行う。
- 4.27 (金) 調査区を設定し、南山側より重機で表土と

竹根の除去をした後、人力で包含層を掘削する。

- 5.7 (月) 重機による表土掘削、人力で包含層掘削を行う。
- 5.8 (火) 現場事務所を設置する。包含層掘削と、一部山際より遺構検出作業を行う。



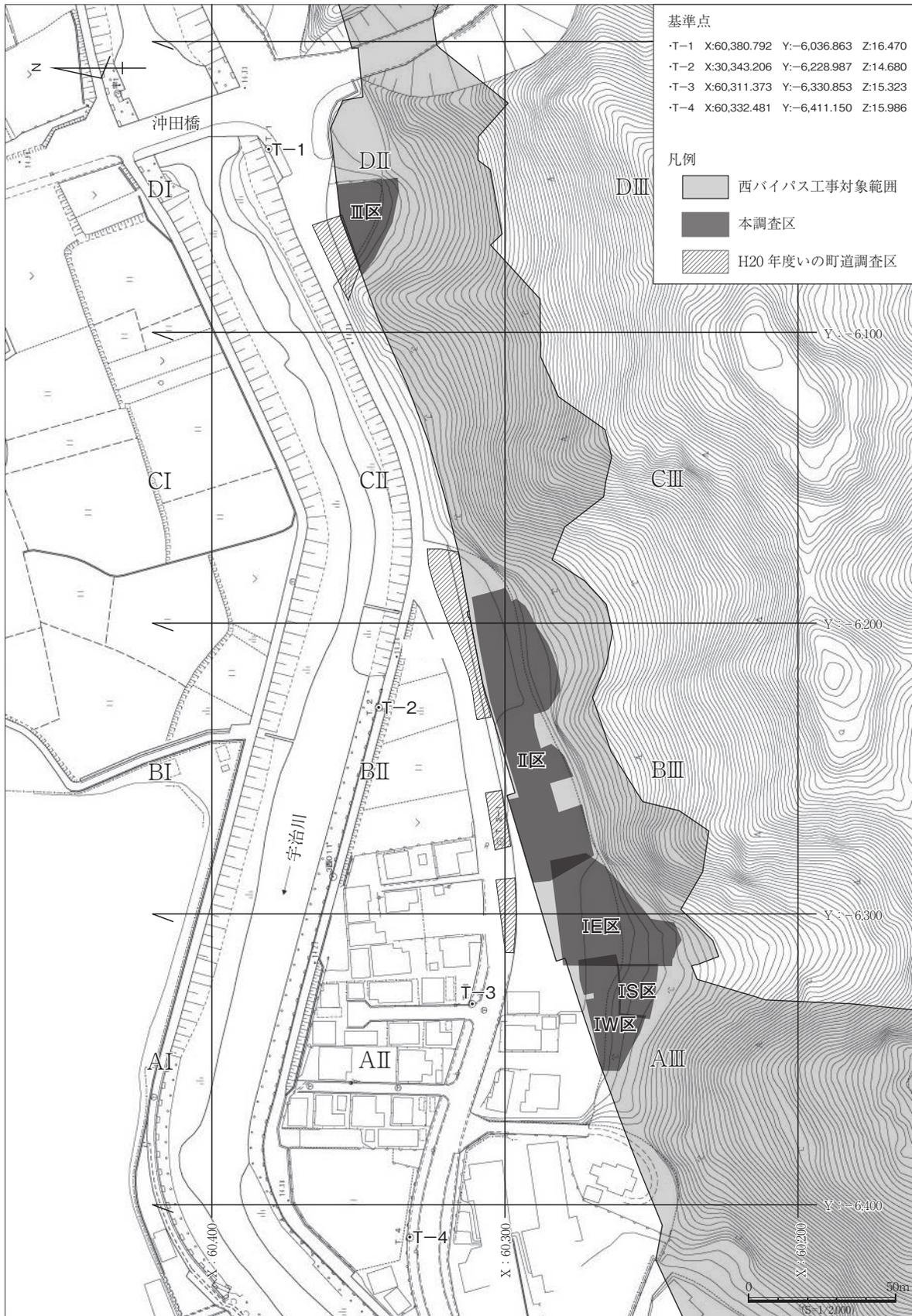
写真9 I S区発掘作業風景

- 5.9 (水) 調査区全体の遺構検出作業、その後清掃、遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 5.10 (木) 遺構掘削を行う。平成21年度調査区で検出された掘立柱建物跡に関連する柱列を検出する。
- 5.11 (金) 上面遺構掘削及び測量を行う。
- 5.15 (火) 雨のため現場作業を中止する。
- 5.16 (水) 上面遺構は、ほぼ完掘する。
- 5.17 (金) 清掃作業の後、上面遺構完掘状態の写真撮影を行う。終了後、重機にて下層確認の掘り下げを行う。
- 5.18 (金) 調査区下面の遺構検出作業を行う。
- 5.21 (月) 下層遺構の検出状態の写真撮影を行う。遺構掘削後、完掘状態の写真撮影を行う。
- 5.22 (火) トレンチを設定し、下層確認を行う。
- 5.23 (水) 重機により、埋め戻しを行う。現場トイレ撤去後、倉庫と一緒に搬出する。
- 5.28 (月) 埋め戻しが完了し、重機を撤収する。



写真10 I S区埋め戻し作業風景

1. 調査の概要



第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の概要

平成18年度に実施された試掘調査の結果に基づき、工事予定区域23,000㎡の内、工事の影響を受ける範囲について平成20・21年度、平成23・24年度に発掘調査を行った。調査面積は、I W区1,398㎡、I E区1,131㎡、I S区220㎡、II区3,000㎡、III区280㎡を測る。当調査区は、丘陵の縁辺域から低湿地帯の境界部にあたり、現地標高14.8～18.0mを測る。傾斜した丘陵縁辺部と低湿地の平坦部で弥生時代後期、古代から近世にかけての遺構と遺物が検出された。

弥生時代の遺構としては、西端のI W区の下層及びII区中央部の下層で弥生時代後期に位置付けられる土器溜まりを検出した。出土した土器は壺、甕、鉢類であり高知県の弥生時代後期後半に位置付けられる「天神式土器」の一群である。これらの土器は丘陵緩斜面に堆積した包含層から出土しており、隣接する天神遺跡との関連が窺える。

古代は、III区で8世紀後半～9世紀前半代と、9世紀後半～10世紀前半代の遺構が検出された。III区は平成20年度いの町道建設に伴う発掘調査区のI区に隣接し、同時期の遺構と遺物が確認されている。今回の調査でも当該期の遺構の広がりが確認された。さらに、I E・II区西端の下層では9世紀後半～10世紀前半代を中心とする遺構と遺物が確認された。主な遺構は掘立柱建物跡、溝跡、ピットと土坑であり、鍛冶に関連する遺構も検出された。奈良から平安時代にかけての集落構造の一端を知る事ができた。中世の遺物はI・II区で出土し、時期は14～15世紀代が中心である。平成20年度いの町道建設に伴う発掘調査で報告した屋敷の区画溝の続きを検出した。検出遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑、ピットである。特筆すべき遺構は、II区で検出された備前焼壺の中に土師質土器皿20点、古銭393枚を入れ、和鏡で壺の口を封印して埋納したと考えられる埋納遺構である。近世の遺構はI区で多く検出され、17～18世紀代を中心とする遺構が確認された。検出遺構は、掘立柱建物跡、溝、土坑墓などであり、近世の屋敷地の様相が明らかとなった。これらの事から、天神溝田遺跡は弥生時代から近世にかけての複合遺跡である事がわかった。

遺物は、弥生時代、古代、中世、近世のものが出土している。弥生土器は壺・甕が主体に出土し、鉢も少量出土が見られる。壺・甕の外面にはタタキ目が残るものや、ハケ調整が施されるものがあり、弥生時代後期後半に位置づけられる。出土遺物の中心的時代は古代から中世にかけての土器・陶磁器類であり、包含層からまとまって出土した。これらは出土遺物の割合の多くを占める。古代の遺物は土師器・須恵器の供膳具や甕、黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などで、8～12世紀代までの遺物が連綿とみられる。また、銅製の銚帯装飾具なども出土している。また、I E区下層及びII区西端部下層では鉄滓など製鉄に関わる遺物が集中し、椀形滓も出土した。中世は土師質土器の杯や皿、瓦質土器、備前焼、瀬戸焼、常滑焼、貿易陶磁器などが出土した。時期は鎌倉時代から南北朝期にかけてのものと、室町時代後期のものが中心であり、搬入品が比較的多くみられる。これらの中世の遺物はII区のIII層包含層から集中して出土した。近世では、肥前産、瀬戸産などの搬入品と、尾戸焼、能茶山焼などの在地産の陶磁器類が出土している。時期は17世紀後半～18世紀代にピークがあり、19世紀代にかけて連綿とみられる。

2. 調査の方法

(1) 調査の方法

今回の天神溝田遺跡の発掘調査対象地は丘陵及びその谷部であり、平成18年度の試掘調査、及びいの町道建設に伴う発掘調査で遺構と遺物が確認された範囲に対し調査区を設定した。調査対象地西端の谷部をⅠ区、その東側をⅡ区、調査対象地東端の谷部をⅢ区と調査区名を設定し本調査を実施した。

Ⅰ区は平成20・21年度、平成24年度にかけて調査を実施した。平成20年度に調査を実施したⅠ区の東半分をⅠE区、平成21年度に調査を実施したⅠ区の西半分をⅠW区とした。平成24年度はⅠW区の南側をⅠS区として調査を実施した。Ⅰ区全体としての現況は山林裾に開けた宅地跡であり、対象範囲内の樹木の伐採、草刈りを行い、重機により宅地の基礎撤去や産業廃棄物の処理を行った。その後、調査区の設定を行い、発掘調査に着手した。検出した遺構については人力により掘削し、掘削終了後に遺構全体の完掘写真撮影、平面図(1/20)を作成し、必要に応じて個別遺構の完掘写真撮影も行った。出土遺物については出土状態の写真撮影、出土状態図の作成、レベル測量を随時実施した。また、平成20・21年度は、調査区全体の遺構完掘後に航空写真撮影及び航空測量を実施し、各調査区全体の写真撮影、遺構全体平面図(1/40)を作成した。最後に下層確認を行った後、重機により埋め戻しを行い現況に復した。Ⅰ区全体の調査面積は下層調査面積を含めて2,749㎡である。

Ⅱ区はⅠ区の東側の谷部に開けた宅地跡であり、平成21年度のⅠW区調査終了後、調査を実施した。いの町道建設工事に伴う発掘調査区のⅡ-1区、Ⅱ-2区に隣接する調査区である。Ⅰ区と同様に樹木の伐採等を行い、重機によって表土、無遺物層を掘削した。遺物包含層掘削、遺構検出作業、遺構掘削については人力で行った。掘削終了後に遺構全体の完掘写真撮影、平面図(1/20)を作成し、必要に応じて個別遺構の完掘写真撮影も行った。出土遺物については必要に応じて出土状態についての写真撮影、出土状態図の作成、レベル測量を実施した。加えて、調査区全体の遺構完掘後に航空写真撮影、及び航空測量を実施し、調査区全体の写真撮影、遺構全体平面図(1/40)を作成した。また、Ⅱ区の西半部下層では、古代の遺構が検出されたため、下層調査も実施した。調査終了後に重機により埋め戻しを行い現況に復した。Ⅱ区の調査面積は3,000㎡である。

Ⅲ区は調査対象地の東端にあたり、平成23年度に調査を実施した。いの町道建設工事に伴う発掘調査区のⅠ区に隣接する調査区である。いの町道工事の際の廃土が置かれていたため、最初に廃土を除去し調査区内の樹木の伐採を行った。その後、調査区を設定し重機で表土掘削を開始した。遺物包含層及び検出した遺構については人力により掘削し、掘削終了後に遺構全体の完掘写真撮影、平面図(1/20)を作成、必要に応じて個別遺構の完掘写真撮影も行った。出土遺物については必要に応じて出土状態についての写真撮影、出土状態図の作成、レベル測量を実施した。調査区全体の遺構完掘後に写真撮影を行った。最後に下層確認を行った後、重機により埋め戻しを行い現況に復した。調査面積は280㎡である。

測量については、3級基準点・3等水準点(T1～4)を設置して、天神IC工事予定地の西側から調査対象地全体にグリッドを設定した。大グリッド(100×100m)は東西方向にアルファベット、南北方向にローマ数字を付し、中グリッド(20×20m)と小グリッド(4×4m)にはアラビア数字を用い、包含層遺物の取り上げには、各グリッド番号を使用した。本報告書の図面には公共座標(世界測地系)を記している。今回の天神溝田遺跡調査Ⅰ区はAⅢ・BⅡ・BⅢ、Ⅱ区はCⅡ、Ⅲ区はEⅡグリッドに位置する。

(2) 基本層序

各調査区で認められた基本的な層序は以下のとおりである。

① I W区(調査区北壁)

第Ⅰ層 I-1 φ 3.0～4.0cm・φ 8.0～15.0cmの角礫を含む整地土

I-2 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト

第Ⅱ層 灰黄褐色(10YR5/4)シルト(φ 0.5～1.0cm礫混。近世遺物包含層)

第Ⅲ層 黄褐色(10YR5/6)シルト(φ 0.7～0.8cm礫混。近世整地土1)

第Ⅳ層 明褐色(7.5YR5/8)粘土質シルト(φ 1.0～3.0cm, 3.0～8.0cm礫混。近世整地土2)

第Ⅴ層 灰黄褐色(10YR5/2)シルト質粘土(中世遺物包含層)

第Ⅵ層 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘土(古代・古墳時代遺物包含層及び古代遺構検出面)

第Ⅶ層 灰黄色(2.5Y6/2)シルト質粘土(弥生時代後期遺物包含層)

I W区は丘陵谷部にあたり、現地標高 15.26～15.98mを測る。調査区の北壁側をI W区の基本層序とした。現況は宅地跡でI層は現代の整地層である。II層は近世の遺物包含層であり、17～18世紀代にかけての遺物が出土した。III層は近世の整地土であり、同じく17～18世紀代にかけての遺物と遺構がみられた。IV層もIII層と同じく近世の段階の整地土であり、遺構検出面である。礫混じりの粘土質シルトで固く締っている。V層は中世の遺物包含層である。調査区の南壁セクションで検出されたVI層とVII層は分層が可能であったが、北壁では分層が困難であったためVI層とした。古墳時代及び古代の遺物包含層で、南壁VII層に対応する層である。VII層は弥生時代後期末の遺物包含層であり、調査区南壁のVIII層に対応する。調査区北西部において遺物が集中して出土した。

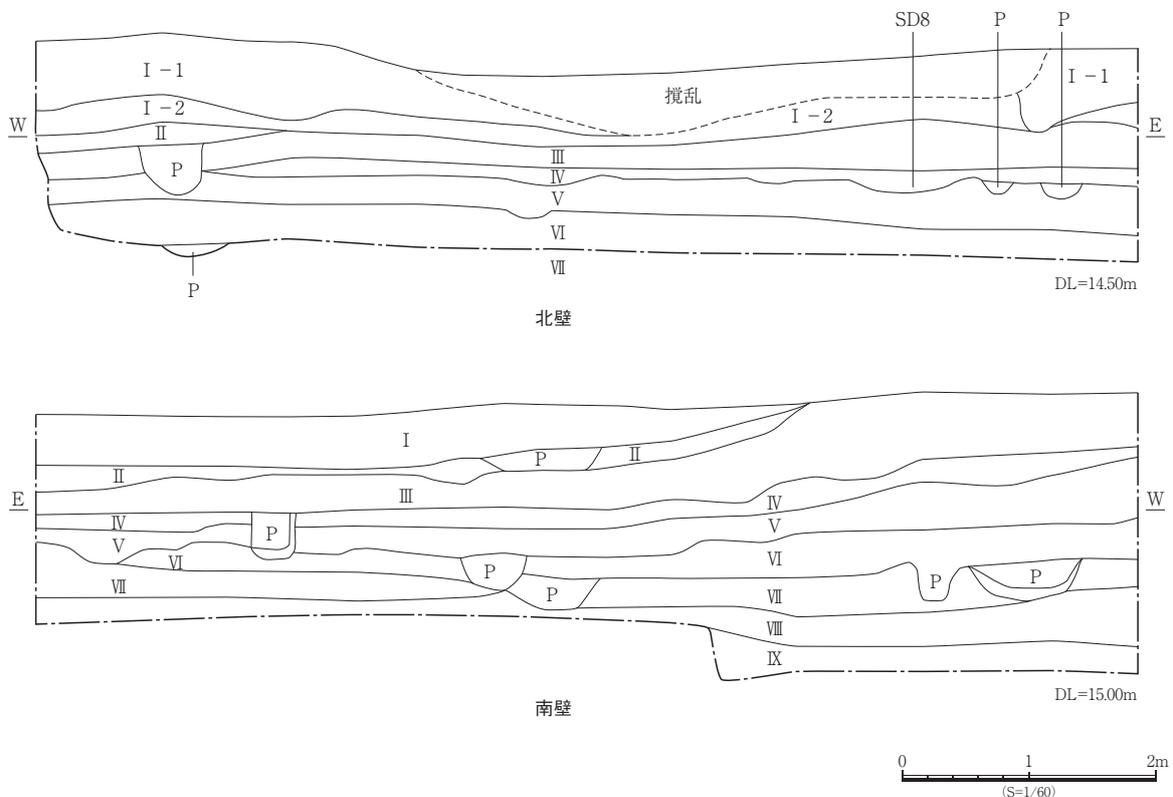


図7 I W区調査区セクション図

2. 調査の方法

② I S区(調査区東壁)

- 第Ⅰ層 黒褐色(7.5YR3/1)砂質シルト(竹根の攪乱が著しい。表土)
- 第Ⅱ層 暗褐色(7.5YR5/6)粘土質シルト(ϕ 0.3~0.5cm礫混。整地土)
- 第Ⅲ層 褐灰色(10YR4/4)砂質シルト(ϕ 0.3~0.5cm礫混。近世遺物包含層)
- 第Ⅳ層 褐色(10YR4/4)シルト(ϕ 1.0cm礫混。近世遺物包含層)
- 第Ⅴ層 暗褐色(10YR3/4)砂質シルト(ϕ 0.3~0.4cm礫混。近世遺物包含層)
- 第Ⅵ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土(ϕ 0.2~0.4cm礫混。近世遺物包含層)
- 第Ⅶ層 明黄褐色(2.5Y6/8)粘土質シルト(近世整地面)
- 第Ⅷ層 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト(ϕ 0.2~0.3cm礫混)
- 第Ⅸ層 黄褐色(10YR5/6)シルト礫(ϕ 1.0cm礫が主体, ϕ 10.0~20.0cm蛇紋岩風化礫混)

I S区は、I W区の南側に接し、調査区北部の堆積はI W区の南壁セクションと同じである。調査区の東壁側をI S区の基本層序とした。I W区と同じ丘陵谷部にあたり、宅地跡で現況は竹林となっていた。現地表下0.5mまで宅地整地土及び旧表土が認められ、竹根による攪乱が著しいが、以下、旧耕作土(Ⅳ層)、床土(Ⅴ層)が認められ、旧耕作土中から近世(江戸後期)の陶磁器片が出土した。旧耕作土及び床土層下に堆積するⅥ層からは、17~18世紀代の肥前系陶磁器などが出土し、Ⅶ層上面(標高15.00~15.50m)で近世の遺構を検出した。

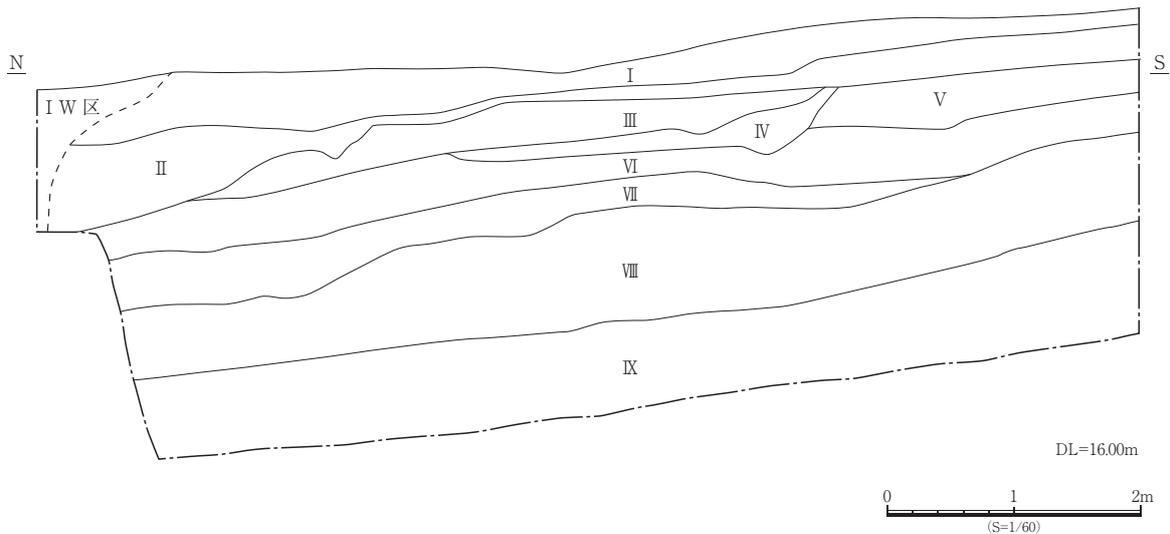


図8 I S区調査区セクション図

③ I E区(調査区西壁)

- 第Ⅰ層 褐色(10YR4/4)シルト(表土)
- 第Ⅱ層 Ⅱ-1 褐色(10YR4/4)シルトに黄褐色(2.5Y5/4)シルト(ϕ 1.0~2.0cm礫混,近世整地土1)
Ⅱ-2 褐色(10YR4/4)シルトに黄褐色(2.5Y5/3)シルト(ϕ 1.0~2.0cm礫混,近世整地土2)
- 第Ⅲ層 Ⅲ-1 褐色(10YR4/4)シルト(ϕ 2.0~3.0cm礫混,中世遺物包含層)
Ⅲ-2 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト(ϕ 2.0~3.0cm礫混,中世遺物包含層)
Ⅲ-3 褐色(10YR4/4)シルト(ϕ 2.0~3.0cm礫混,中世遺物包含層)
- 第Ⅳ層 褐色(10YR4/4)粘土質シルトに褐色(7.5YR4/4)シルト混(古代遺物包含層)

- 第V層 褐色(10YR4/4)粘土質シルト(古代遺物包含層)
- 第VI層 VI-1 褐色(10YR4/4)粘土質シルト(φ 1.0~3.0cm礫混)
VI-2 褐色(10YR4/6)粘土質シルト
- 第VII層 褐色(10YR4/4)粘土質シルト(古代遺物包含層)
- 第VIII層 浅黄色(2.5Y7/4)粘土(φ 2.0cm礫混)

I E区は、I W区の東側にあたり、現地標高14.80~15.92mを測る丘陵谷部に位置する。調査区の西部と東部では部分的にしか堆積していない層が認められるため、調査区西壁と東壁を基本層序とした。調査区西部は現表土下に近世の整地層が確認され、II-1・2層とした。I W区の第III・IV層に対応する。II層からは17~18世紀代にかけての遺物が出土した。上面遺構は標高14.3~15.75mで検出した。III層はオリーブ褐色から褐色を呈するシルト層であり、中世遺物包含層である。15~16世紀代の遺物が出土した。III層は調査区中央部から北部にかけて調査区の下段にしか堆積が認められない。IV層以下は粘土から粘土質シルトで、河川氾濫原堆積層である。褐色粘土質シルト層で、古代の遺物包含層であり、10~11世紀代の遺物を含む。V層も基本的にはIV層と同じ様相であり、古代

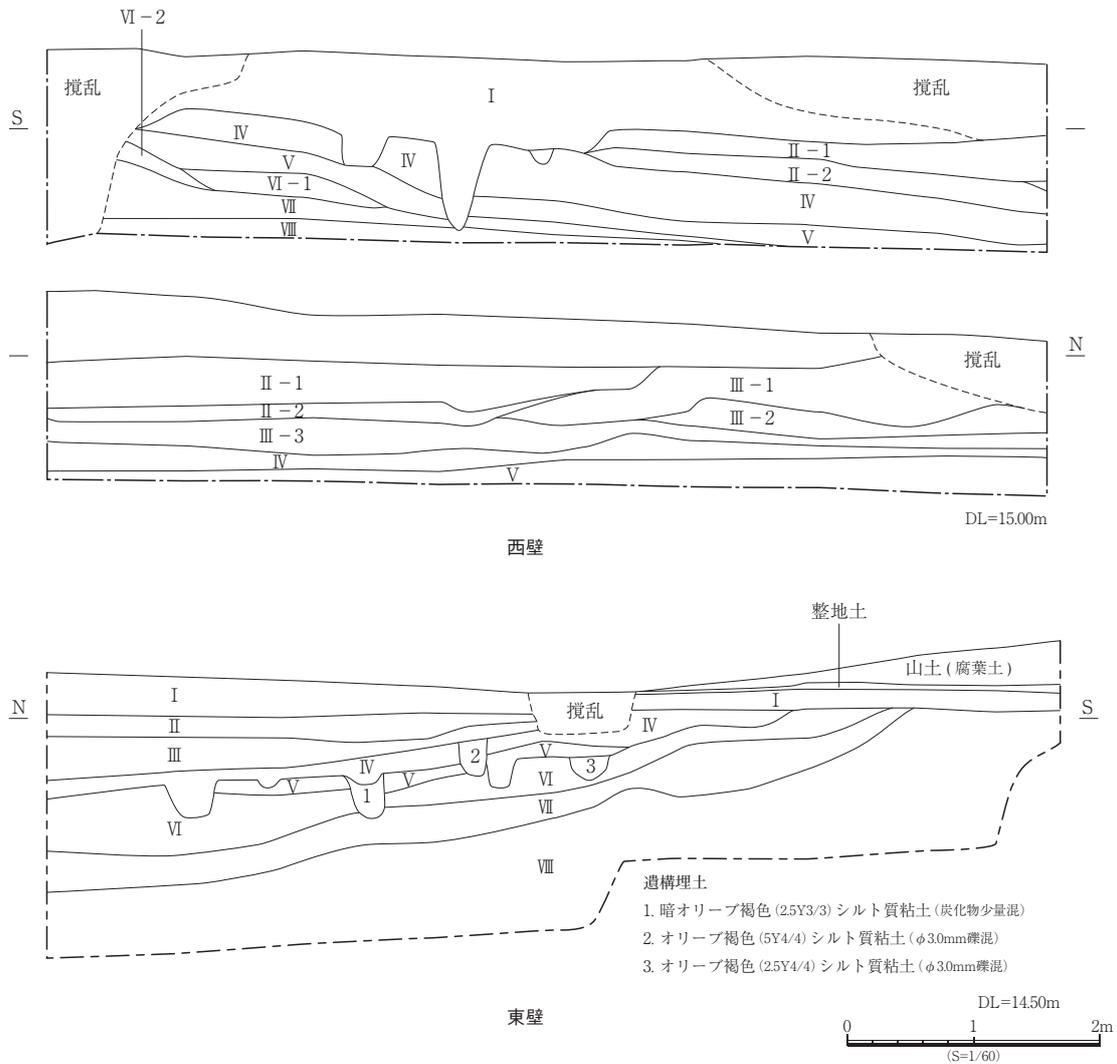


図9 I E区調査区セクション図

2. 調査の方法

の遺物包含層である。出土遺物の帰属時期も概ねⅣ層と同じである。Ⅵ層は上段から下段への落ち口にのみ堆積が認められた。Ⅶ層は褐色粘土質シルト層であり、古代の遺物包含層である。9～10世紀代の遺物が出土した。

I E区(調査区東壁)

第Ⅰ層 暗オリーブ色(5YR4/3)シルト(表土)

第Ⅱ層 黄褐色(2.5Y5/4)シルト

第Ⅲ層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粘土(中・近世遺物包含層)

第Ⅳ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土(φ 2.0cm礫混。古代遺物包含層)

第Ⅴ層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質粘土(φ 1.0cm礫混。古代遺物包含層)

第Ⅵ層 にぶい黄色(2.5YR6/3)粘土

第Ⅶ層 にぶい黄褐色(2.5YR6/3)シルト質粘土(φ 0.2cm礫混。調査区北壁側はグライ化により褐色(10YR6/1)粘土。古代遺物包含層)

第Ⅷ層 浅黄色(2.5Y7/4)粘土(φ 2.0cm礫混)

I E区東部は西部にみられた近世の整地面は確認出来ない。調査区東端部は緩斜面であり、現地表面14.90～16.60mを測る。Ⅰ・Ⅱ層からは近現代の遺物が出土した。Ⅲ層はオリーブ褐色シルト質粘土で、調査区北部の方に堆積が認められる中・近世の遺物包含層である。西壁側のⅢ層に対応する。Ⅳ層は細かい礫を含んだオリーブ褐色シルト質粘土で、古代の遺物包含層である。Ⅴ層は黄褐色シルト質粘土で、古代の遺物包含層である。基本的にⅣ層と同じ様相を呈する。Ⅴ層では中世の遺構と、古代の一部の遺構を検出した。Ⅵ層はにぶい黄色粘土であり、古代の遺構検出面である。ピット、土坑など古代の遺構を検出した。Ⅶ層はにぶい黄褐色シルト質粘土であり、調査区北壁側はグライ化により褐色を呈する。古代の遺物包含層で、9～10世紀代を中心とする遺物が出土した。Ⅷ層は浅黄色粘土であり、河川氾濫原堆積層である。基盤層にあたる。

④Ⅱ区(調査区中央バンク東壁)

第Ⅰ層 表土

第Ⅱ層 Ⅱ-1 明黄褐色(10YR6/1)シルト(φ 0.5～1.0cm礫混。整地土1)

Ⅱ-2 明黄褐色(2.5Y6/8)粘土質シルト(φ 1.0～2.0cm礫混。整地土2)

Ⅱ-3 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土質シルト(φ 0.5cm礫混)

第Ⅲ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質シルト(φ 3.0～5.0cm礫混。中世遺物包含層)

第Ⅳ層 オリーブ黄色(5Y6/3)砂質シルト(φ 3.0～5.0cm礫混。中世遺構検出面)

第Ⅴ層 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土質シルト

第Ⅵ層 オリーブ黄色(5Y6/4)砂質シルト(φ 0.5～3.0cm礫混。古代遺物包含層)

第Ⅶ層 浅黄色(2.5Y7/4)粘土(φ 2.0cm礫混。古代遺構検出面。弥生遺物包含層)

第Ⅷ層 オリーブ黒色(5Y3/2)礫(φ 8.0～15.0cm)

II区は調査対象地中央谷部に位置する。緩斜面地形であり、現地標高14.50～17.90mを測る。調査区中央部に設定した中央バンクの東壁側セクションを基本層序とした。I～III層は丘陵からの堆積層であり礫混じりの砂質シルトが主体であるが、VII層は河川の氾濫原堆積層であり礫混じり粘土である。河川の氾濫原堆積と山からの流れ込みによる堆積層が互層に堆積する。南側のII層は近世の整地土及び近世の遺物包含層であり、近世に開墾されたと思われる。III層は中世の遺物包含層であり、南北朝期から室町時代の遺物が出土した。IV層は礫混じりのオリブ黄色砂質シルトであり、中世遺構検出面である。遺構はIII層が埋土になっているものもみられる。V層は暗灰黄色粘土質シルトで、河川氾濫原堆積層である。V層では、IV層で検出しきれなかった中世の遺構を検出する事ができた。VI層はオリブ黄色砂質シルトであり、古代遺物包含層である。9～10世紀代を中心とする古代の遺物が出土した。VI層は調査区西部ではI E 区東壁セクションのVII層に対応する。VII層は浅黄色粘土であり、河川氾濫原堆積層である。古代の遺構検出面であり、II区の西部を中心に下層では、古代の遺構が検出された。また、調査区中央部では、部分的に弥生時代後期の遺物を包含しており、土器がまとめて出土した。

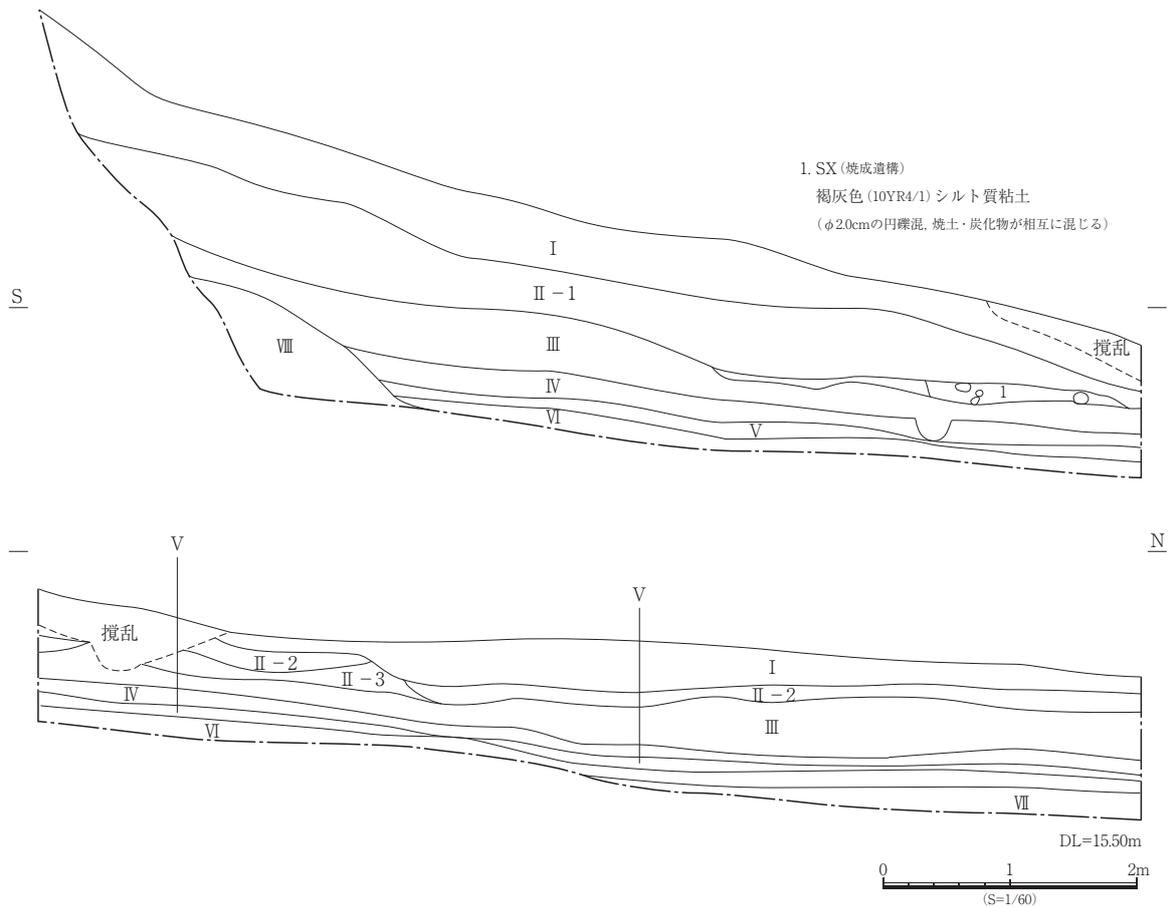


図10 II区調査区セクション図

2. 調査の方法

⑤Ⅲ区(調査区北壁)

第Ⅰ層 攪乱土

第Ⅱ層 灰色(5Y4/1)シルト質砂(φ 5.0～8.0mm礫混。中・近世遺物包含層)

第Ⅲ層 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質シルト(φ 3.0～5.0 mm礫混。古代・中世遺物包含層)

第Ⅳ層 IV-1 黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト(φ 3.0～5.0mm礫・炭化物混。古代遺物包含層)

IV-2 褐灰色(10YR3/1)シルト質砂礫(φ 5.0～8.0mm礫・炭化物混)

第Ⅴ層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト(炭化物混。古代遺物包含層)

第Ⅵ層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質粘土(古代遺物包含層)

第Ⅶ層 黄褐色(2.5Y5/6)粘土

第Ⅷ層 オリーブ色(5Y6/6)粘土質シルト

第Ⅸ層 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土(炭化物混。弥生時代遺物包含層)

第Ⅹ層 オリーブ色(5Y5/4)シルト質粘土

Ⅲ区は今次調査対象地の東端にあたる。丘陵谷部に位置し、緩斜面地形で、現地標高 15.68～16.30m を測る。Ⅰ層はいの町道工事の際の廃土が残っており、盛土である。Ⅱ層は灰色シルト質砂で中・近世の遺物包含層である。Ⅲ層はオリーブ黒色砂質シルトであり、古代・中世の遺物包含層である。Ⅳ層はⅣ-1・Ⅱ層にかけて水平な堆積がみられ、古代の整地層として捉える事ができる。古代の遺物包含層であり、9～11世紀代を中心とする遺物が出土した。Ⅴ層及びⅥ層は調査区中央部から東部にかけて水平で、Ⅳ層と同じ様な堆積が認められる事から古代の段階に整地が行われているものと思われ、遺物では9～10世紀代を中心とする土器が出土した。また、Ⅳ層が埋土になっている遺構の検出面にあたる。Ⅶ層以下は粘土及びシルト質粘土の互層堆積であり、河川氾濫原堆積層の様相を呈する。Ⅸ層は炭化物が混じる灰オリーブ色粘土であり、標高13.70m前後に堆積がみられる。弥生時代後期中葉の遺物が少量出土した。平成20年度に調査したいの町道調査区では、同時期の土坑が検出されており、今次調査区の山際の方までその時代の包含層が続くことが明らかとなった。

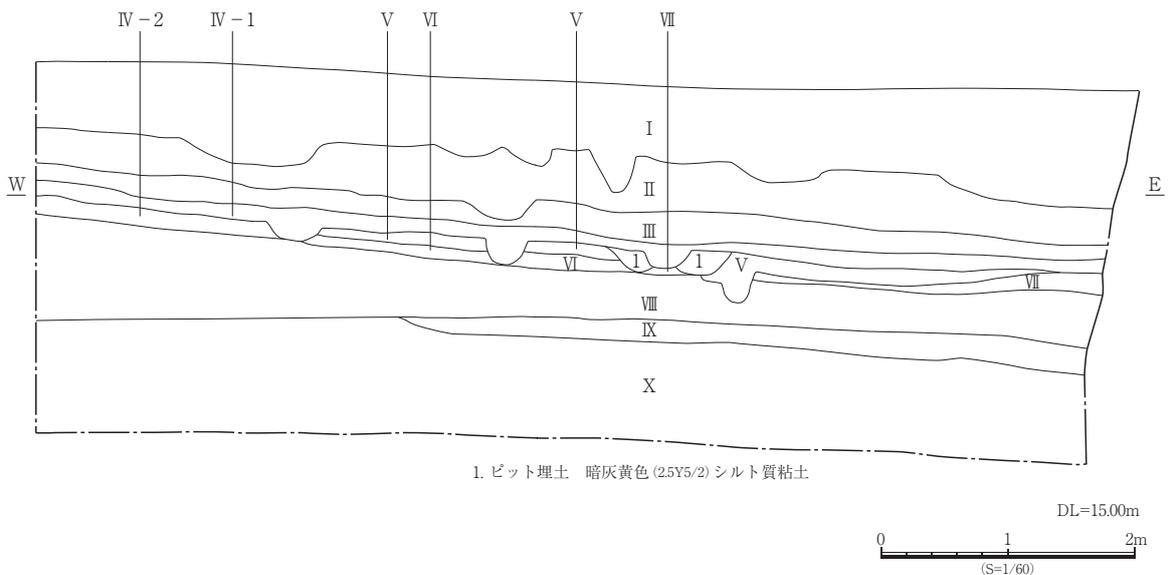


図11 Ⅲ区調査区セクション図

第三章 調査の成果

1. I 区

I 区は、調査対象地西部の谷部に設定した調査区である。調査区の西半分を I W 区(I S 区含む)、東半分を I E 区とし、上面で検出された遺構と下面の遺構に分けて記載する。I 区では、SB13棟、ピット1,179個、土坑51基、溝28条、性格不明遺構4基が検出された。掘立柱建物跡(SB1～12)については建物の配置を把握するため I 区全体で通し番号となっている。他の遺構については調査区ごとに番号を付した。遺構から出土した遺物については遺構図と併せて図示し、包含層から出土した遺物については、各区の層順に図示した。以下に調査区ごとに特徴的な遺構について抽出し記載する。

(1) 上面遺構と出土遺物

① I W 区(I S 区含む)

掘立柱建物跡

SB1 (図13)

A Ⅲ-9-21, A Ⅲ-14-1・2グリッドで検出した桁行4間×梁行2間の南北棟側柱建物跡である。北側梁行の中柱は検出されなかった。標高は南側が高く15.75m, 北側は15.12m前後を測る。規模は桁行7.41m, 梁行5.56mを測り, 床面積は41.19㎡である。柱穴は直径0.30～0.51mを測る円形であり, 柱痕径は10.2～15.2cmを測る。埋土は暗褐色シルトが主体であり, 中には黄褐色シルトがブロックで混じる埋土もある。P4で土師質土器細片が2点, P7より図示した染付皿(15)が出土した。また, P2では柱痕上面で礎板石として使用されたと考えられる直径15.1cmを測る平滑な石が出土した。

SB2 (図14・15)

A Ⅲ-9-22, A Ⅲ-14-2・3グリッドで検出した桁行5間×梁行1間の南北棟側柱建物跡である。側柱の柱間寸法は桁行1.43～2.13m, 梁行3.98mを測り, P8に対向する西側のP3・4間の側柱は検出されなかった。西側柱のP1～3はSB3のP1～3と切り合いが認められ, 建替えの際に柱穴が再利用されているものと思われる。検出面の標高は南側が高く15.89m, 北側は15.17m前後を測る。規模は桁行9.52m, 梁行3.98mを測り, 床面積は37.88㎡である。柱穴は直径0.34～0.74mを測る円形及び楕円形であり, 柱痕径は13.6～23.0cmを測る。埋土は暗褐色シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。P5より図示した土師質土器杯(18)が1点, P8より砥石(25)が出土した。

SB3 (図14・15)

A Ⅲ-14-2・3グリッドで検出した桁行3間×梁行1間の南北棟側柱建物跡である。側柱の柱間寸法は桁行1.35～2.44m, 梁行4.41～4.49mを測る。西側柱のP1～3はSB2のP1～3と切り合いが認められ, 建替えの際にP1～3の柱穴は再利用されているものと思われる。検出面の標高は南側が高く15.78～16.10m, 北側は15.71m前後である。規模は桁行5.74m, 梁行4.49mを測り, 床面積は25.77㎡である。柱穴は直径0.48～0.64mを測る円形及び楕円形であり, 柱痕径は15.0～20.0cmを測る。柱穴の埋土は暗褐色シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。P4より図示した肥前系陶器皿(20), P8より土師質土器皿(17)が出土した。また, P8では, 焼土と粘土塊が出土した。SB2と共有する柱

1. I 区

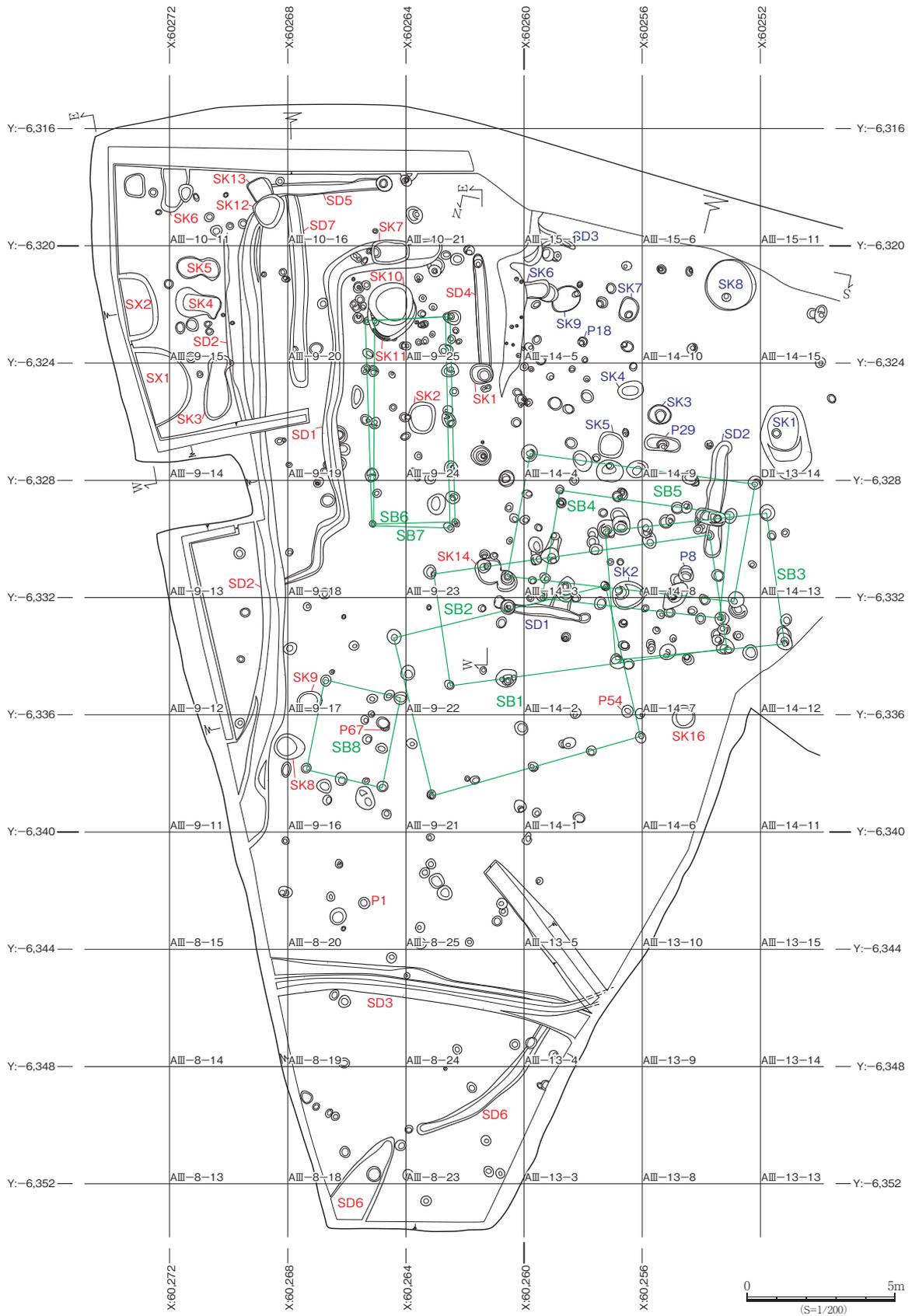


图12 I W区·IS区上面遺構配置図

穴P1～3では、土師質土器小皿(16)、肥前系陶器皿(21～23)、鉄銭(24)が出土した。これらの出土遺物から近世の掘立柱建物跡に位置付けられる。

SB4 (図16)

AⅢ-14-3・8グリッドで検出した桁行3間×梁行1間の南北棟側柱建物跡である。側柱の柱間寸法は桁行1.49～2.35m、梁行3.51～3.73mを測る。検出面の標高は15.70～15.81mである。規模は桁行6.02m、梁行3.73mを測り、床面積は22.45㎡である。柱穴は直径0.48～0.58mを測る円形及び楕円形であり、柱痕径は9.0～15.0cmを測る。埋土は暗褐色シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。P2より鉄釘、P4より鉄滓が1点ずつ出土した。建物の棟方向はN-6°-Eを指し、SB5とほぼ同じ棟方向である。

SB5 (図17)

AⅢ-9-23グリッド、AⅢ-14-3・4グリッドにかけて検出した桁行4間×梁行1間の南北棟側柱建物跡である。側柱の柱間寸法は桁行1.72～2.21m、梁行4.06～4.25mを測る。検出面の標高は南側が高く15.78～16.10m、北側は15.71m前後を測る。規模は桁行7.70m、梁行4.25mを測り、床面積は32.72㎡である。柱穴は直径0.48～1.74mを測る円形及び楕円形であり、柱痕径は14.0～21.0cmを測る。柱穴の埋土はオリブ褐色粘土質シルトであり、柱痕埋土は黒褐色シルトである。P1・5より図示した土師質土器皿(26・27)が出土した。また、P2の柱痕から細片ではあるが土師質土器皿が出土した。その他の柱穴からも肥前系陶器、磁器の細片の出土が少量みられた。建物の棟方向はN-7°-Eを指し、SB4とほぼ同じである。

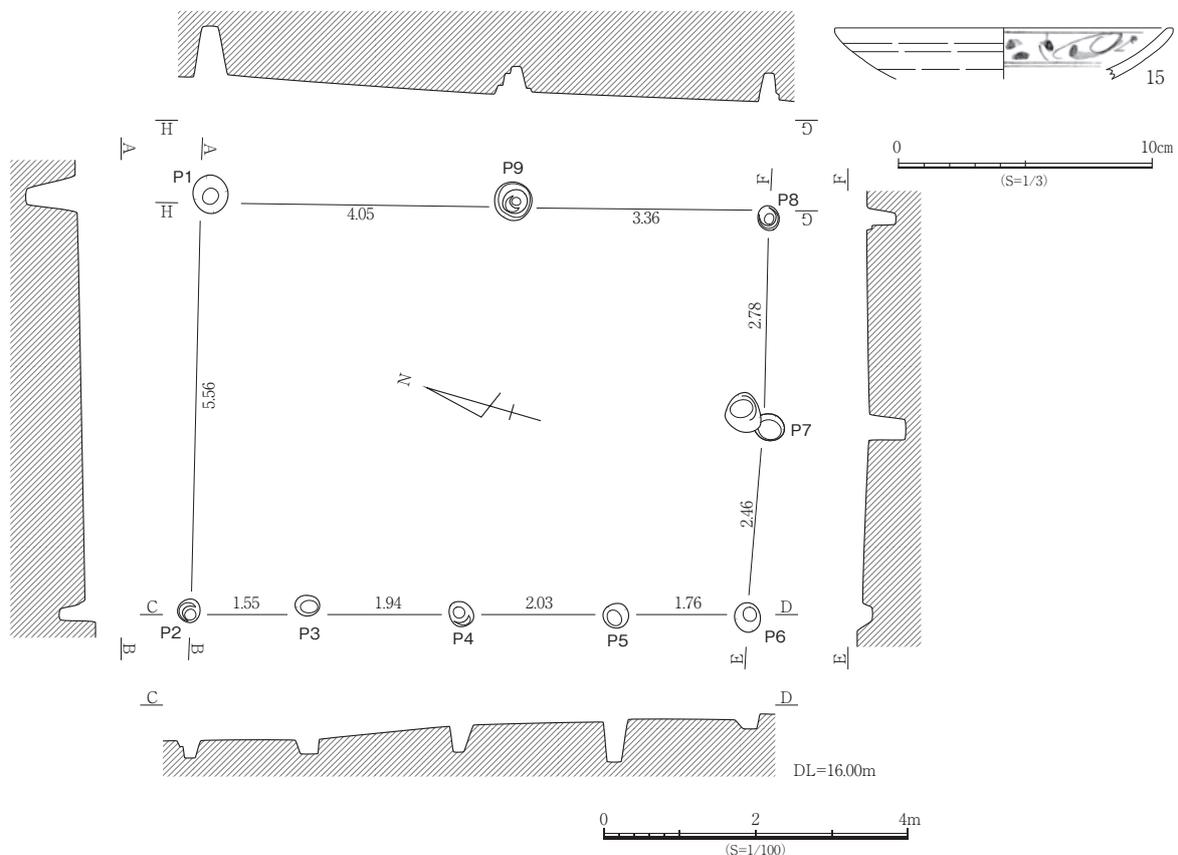


図13 I区SB1遺構図・遺物実測図

1. I 区

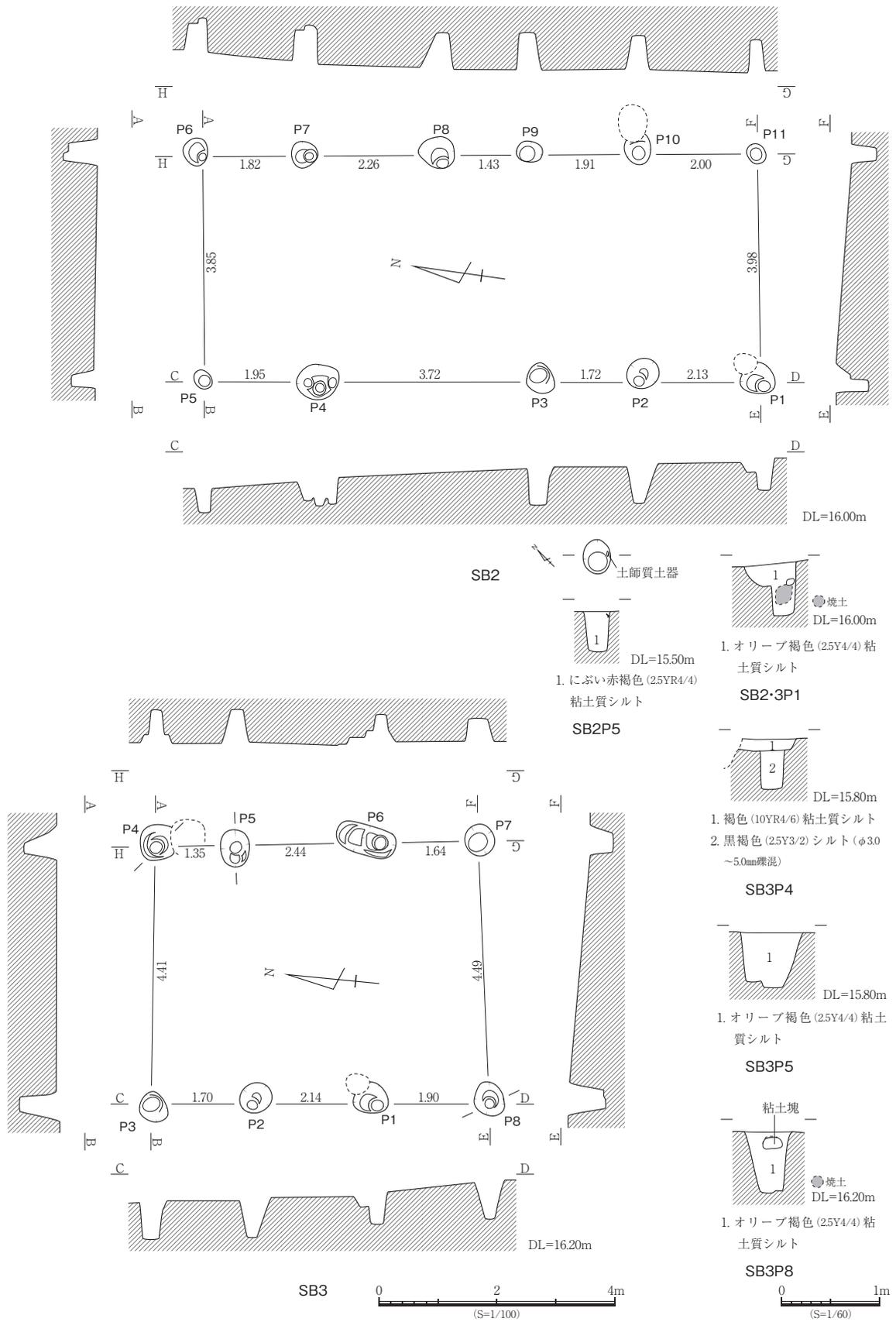


図14 I区SB2・3遺構図

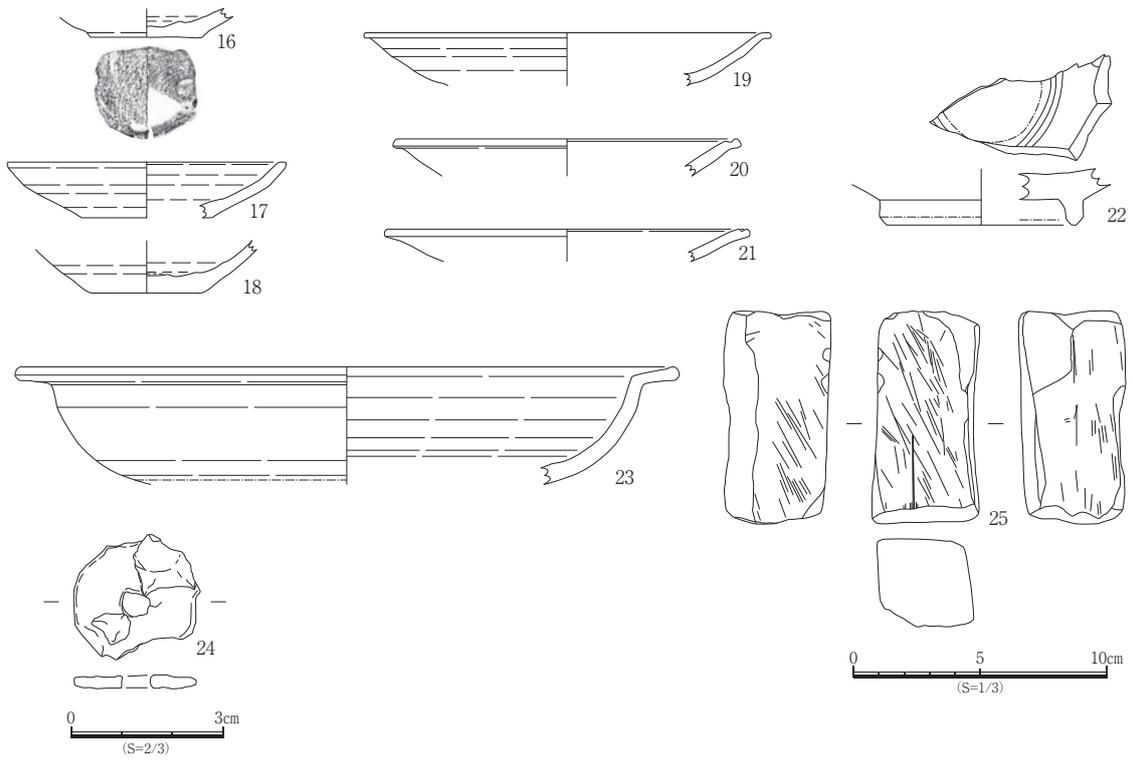


図15 I区SB2・3遺物実測図

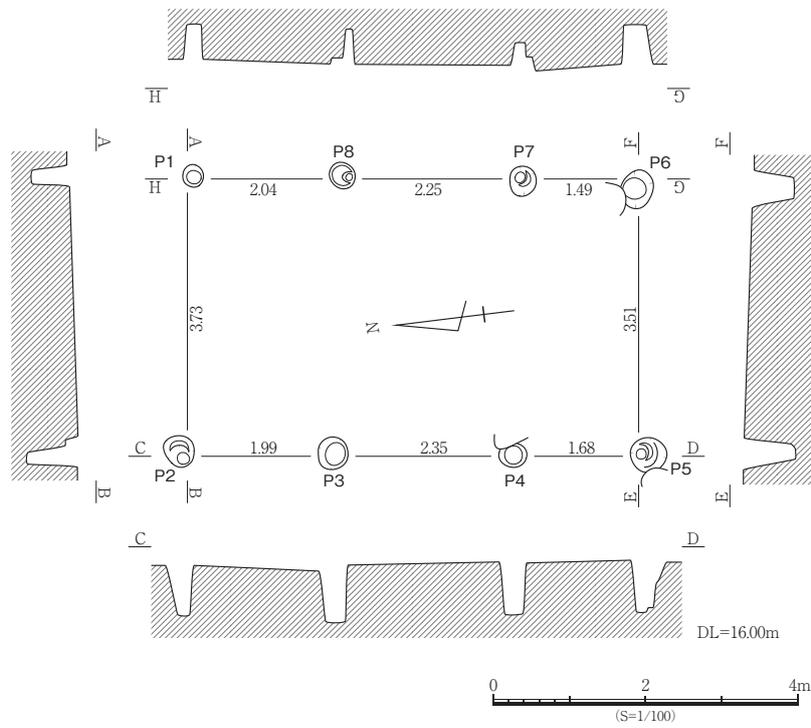


図16 I区SB4遺構図

1. I区

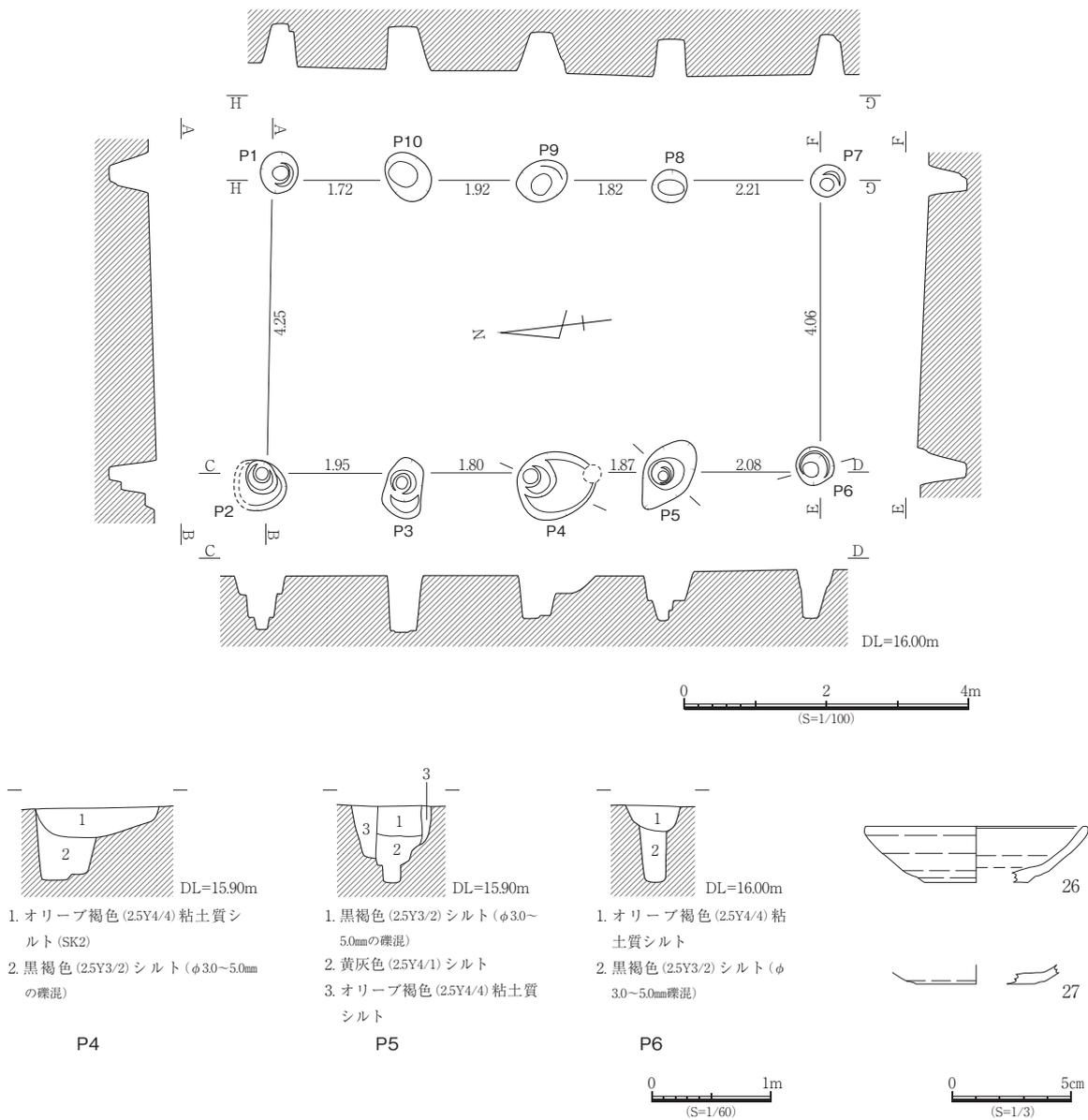
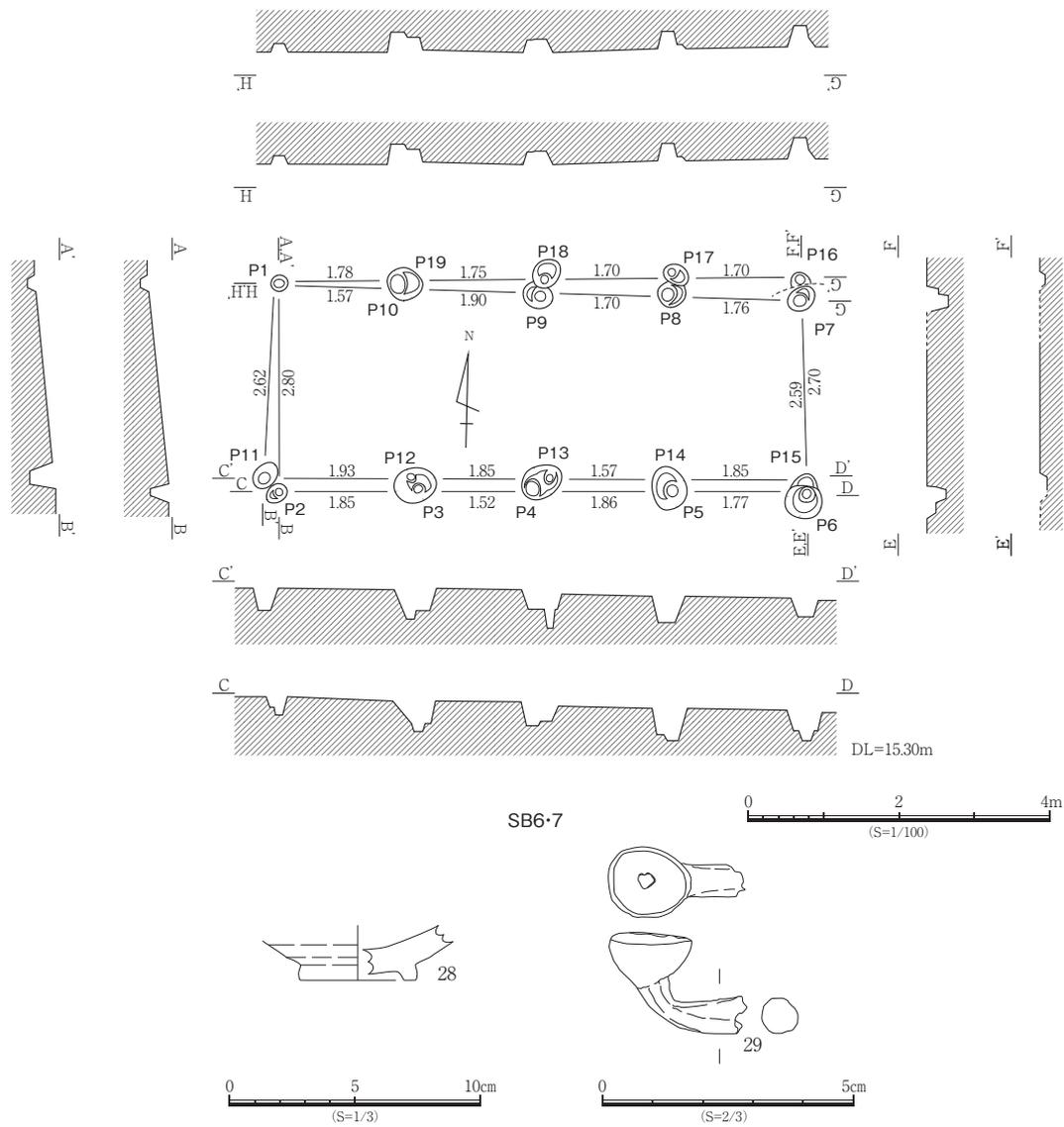


図17 I区SB5遺構図・遺物実測図

SB6・7 (図18)

A III-9-18~20グリッド, A III-9-23~25グリッドにかけて検出した桁行4間×梁行1間の東西棟側柱建物跡である。SB7とした柱穴プラン(P11~19)は, SB6の柱の建替え, もしくは添柱と考えられるピットである。標高は14.98~15.25mである。SB6の側柱の柱間寸法は桁行1.52~1.86m, 梁行2.70~2.80mを測り, SB7としての側柱の柱間寸法は桁行1.57~1.93m, 梁行2.59~2.62mを測る。規模はSB6が桁行7.00m, 梁行2.80mを測り, 床面積は19.60㎡であるのに対し, SB7は桁行7.20m, 梁行2.62mを測り, 床面積が18.86㎡と狭い。柱穴は直径0.23~0.60mを測る円形であり, 柱痕径は9.0~19.0cmを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトであり, P11~19は暗褐色シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。P11より図示した鉄釉が施された肥前系陶器皿(28), P13より銅製の煙管雁首(29)が出土した。その他のピットからも土師質土器細片, 陶器細片の出土が少量みられた。建物の棟方向はSB6・7ともにN-89°-Eを指す。



SB7ピット出土遺物

図18 I区SB6・7遺構図・遺物実測図

SB8 (図19)

AⅢ-9-16・17グリッドで検出した桁行1間×梁行1間の側柱建物跡である。東西方向の柱間寸法が長く、東西に棟方向を持つ側柱建物跡になるものと思われる。検出面の標高は15.70～15.81mで北側のP1・4は下がった面で検出した。側柱の柱間寸法は桁行3.08m, 梁行2.67mを測り, 床面積は8.22㎡と小型の建物跡である。柱穴は直径0.34～0.43mを測る円形であり, 埋土は褐色シルトである。柱痕跡は確認されなかった。P1より図示した土師質土器皿(30・31)が出土した。30の外底部には簀子状の圧痕を残す。土器の形態, 法量等から13世紀後半～14世紀代の皿と思われ, 口縁部の一部にタールの付着が認められる事から灯明皿として使用されたものである。北西隅柱からの出土であり, 地鎮めに使用された皿の可能性が考えられる。

1. I 区

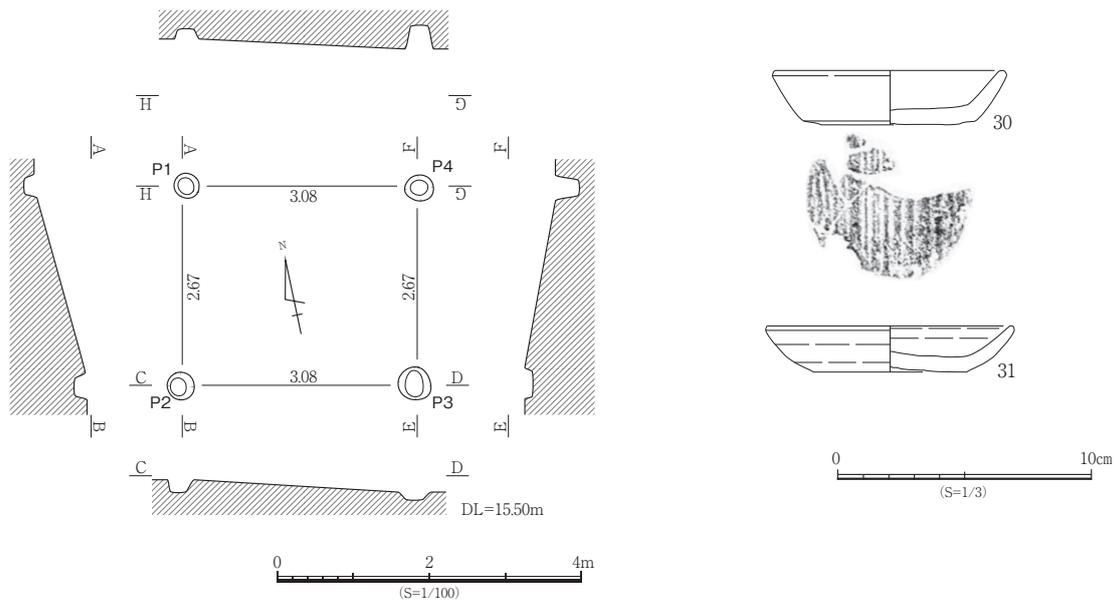


図19 I 区SB8遺構図・遺物実測図

ピット

I W 区 P1 (図20)

A Ⅲ-8-20 グリッドで検出した直径0.38～0.42mを測る円形のピットである。埋土は暗褐色シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。検出面で柱痕と思われる直径18.0～22.0cmの楕円形のプランを検出した。埋土は灰オリーブ粘土である。ピットの深さは0.21mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土中から図示した天目茶碗(32)が出土した。32は唐津産の陶器碗である。口縁部は尖り気味に仕上げる。全体的に鉄釉が施され、外面体部下半は露胎する。

I W 区 P54 (図20)

A Ⅲ-14-2 グリッドで検出した直径0.40～0.42mを測る円形のピットである。埋土は褐色粘土質シルトであり、検出面から10cm下で直径12.0～22.0cm前後の角礫を検出した。柱の根固めに使用されたものと思われる。ピットの深さは0.34mを測り、断面形は逆台形状を呈する。

I W 区 P67 (図20)

A Ⅲ-9-16 グリッドで検出した直径0.24mを測る円形のピットである。埋土はにぶい赤褐色粘土質シルトであり、検出面から10cm下で直径6.0～14.0cm前後の角礫を検出した。柱の根固めに使用されたものと思われる。ピットの深さは0.28mを測り、断面形は逆台形状を呈する。

I S 区 P8 (図20)

A Ⅲ-14-8 グリッドで検出した直径0.49～0.53mを測る楕円形のピットである。埋土は褐色粘土質シルトであり、検出面から0.12m下で柱痕が確認され、内部から直径22.0cm前後の角礫を検出した。柱の礎板として使用されたものと思われる。柱痕径は0.32～0.34mを測り、深さは0.45mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

I S 区 P18 (図20)

A Ⅲ-14-5 グリッドで検出した直径0.31～0.32mを測る円形のピットである。埋土はオリーブ褐色粘土質シルトであり、検出面から0.12m下で柱痕が確認され、内部から直径14.0cm前後の角礫を

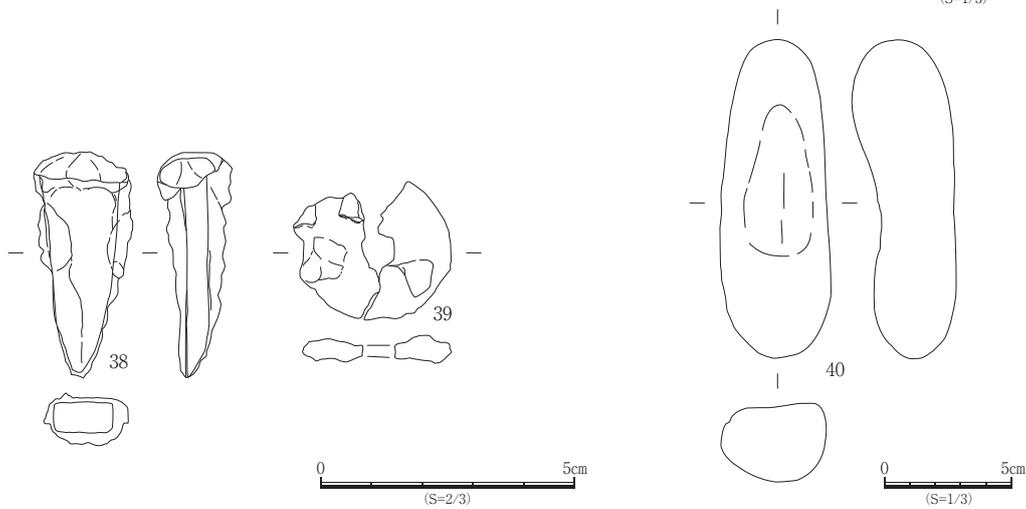
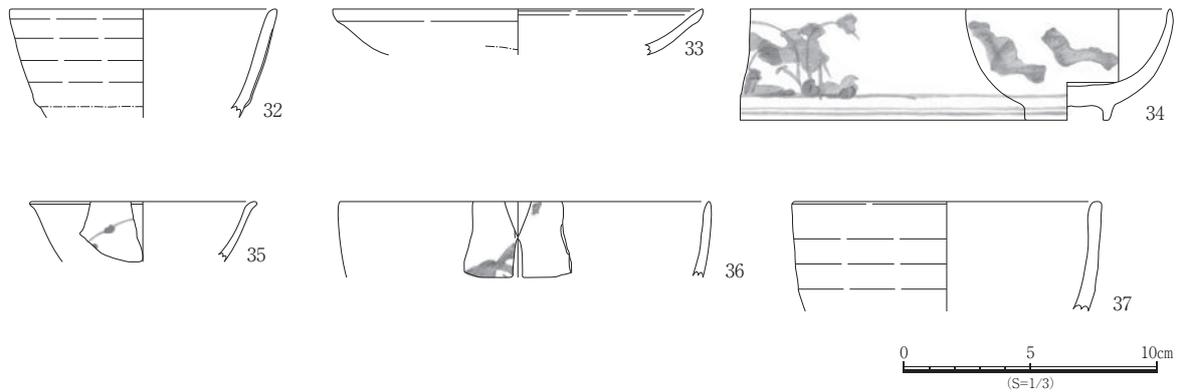
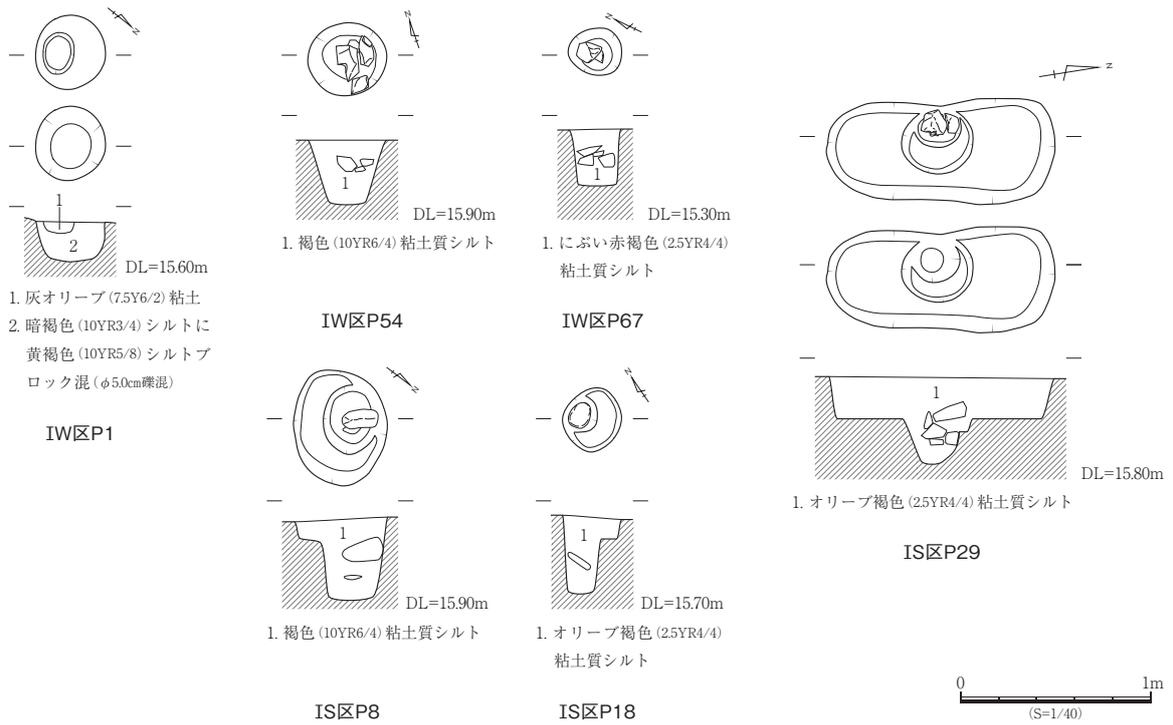


図20 IW区・IS区ピット遺構図・遺物実測図

1. I 区

検出した。柱の根石として使用されたものと思われる。柱痕径は0.18mを測り、深さは0.32mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

I S 区 P29 (図20)

A Ⅲ-14-9 グリッドで検出した長径1.23m、短径0.51mを測る長方形のピットである。埋土はオリブ褐色粘土質シルトで、検出面から0.22m下で柱痕を確認し、内部から直径8.0～19.0cm前後の角礫を検出した。柱の根石として使用されたものと思われる。柱痕径は0.38m、柱痕検出面からの深さは0.28mを測る。断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは土師質土器の灯明皿片が1点出土した。

上面ピット出土遺物(図20 33～40)

I W・S 区の上面ピットの埋土からは33～40の遺物が出土した。各遺物の出土地点については遺物観察表に記載する。ここでは、図示した遺物について記述していく。33は唐津産の陶器皿である。口縁部は少し肥厚し、内面はナデ仕上げにより沈線状に凹む。全体的に灰釉が施され、外面体部下半は露胎である。34は肥前系磁器の小丸碗である。外面に草花風の文様と雁文が濃い呉須で描かれる。高台脇には二重界線が施される。35は肥前系磁器の端反碗である。口縁部は外反し、外面に草花風の文様が描かれる。36は尾戸焼の陶器碗である。全体的に灰釉が施され、0.5～1.0mm大の細かな貫入が入る。外面に鉄絵笹文が施される。37は尾戸焼の丸形碗である。全体的に灰釉が薄く施される。38は鉄製の楔である。39は鉄銭であり、一部破損する。直径2.9cm、穿径0.6cmを測る。37～39はI S 区P14から出土した。40は流紋岩製の砥石で、仕上砥である。

土坑

I W 区 SK2 (図21)

A Ⅲ-9-24 グリッド、SB6・7のプラン中央部で検出した長径1.12m、短径0.90mを測る隅丸方形の土坑である。埋土は褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。埋土中から図示した肥前系磁器の青磁皿(41)の他に、土師質土器細片及び肥前系磁器皿細片が出土した。

I W 区 SK3～6 (図22・23)

A Ⅲ-9-14・15からA Ⅲ-10-11グリッドにかけて検出した焼成土坑である。平面プランは達磨形をした不整楕円形であり、4基を検出した。SK3の長軸はN-85°-Wを示し、東西方向に配置される。燃烧部は東側に設けられており長径0.74mの不整円形のプランを呈する。埋土中から図示した土師質土器皿(42)の他に土師質土器細片、肥前系磁器皿細片が出土した。SK4・5の長軸はN-3°～9°-Eを指し、南北方向に2基並んで検出した。燃烧部は2基とも南側に設けられており、長径0.74～0.78mを測る。被熱痕跡は2基ともに壁面のみで床面は炭化物が認められた。断面形はいずれも浅い皿状を呈し、埋土は粒径0.5～1.0cmを主体とする礫混じりのオリブ褐色から暗オリブ褐色粘土質シルトであった。SK6はI W 区東壁際で検出した。長軸

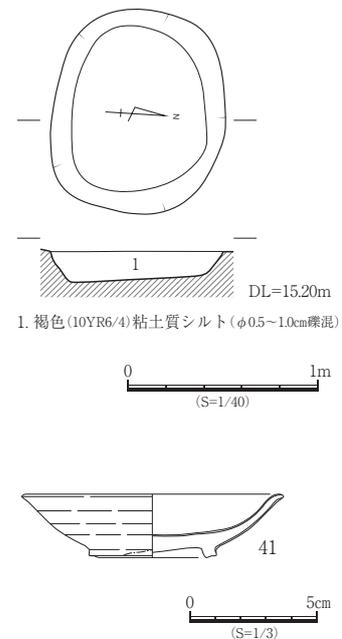


図21 I W 区SK2遺構図・遺物実測図

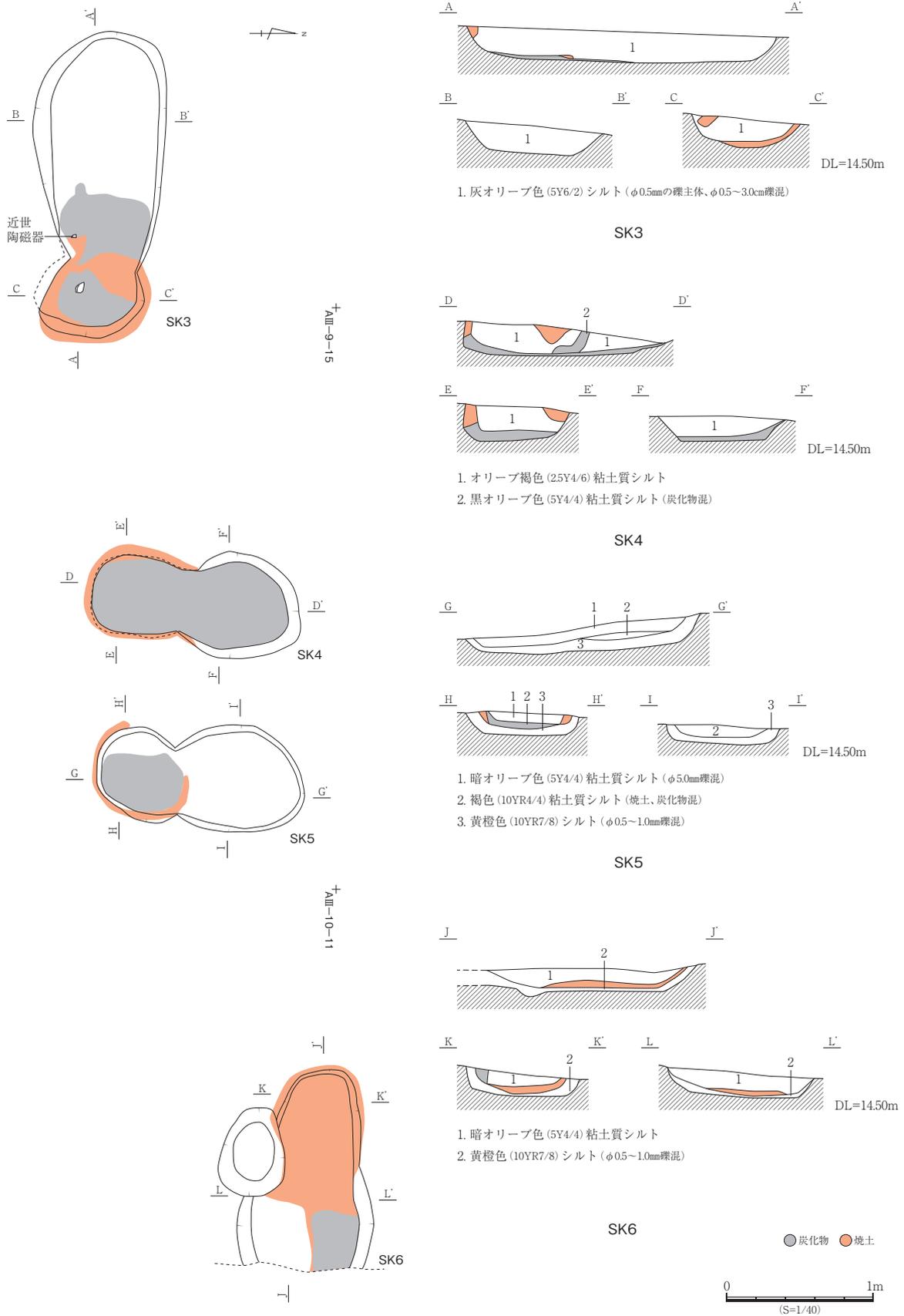


図22 I W区SK3~6遺構図

1. I区

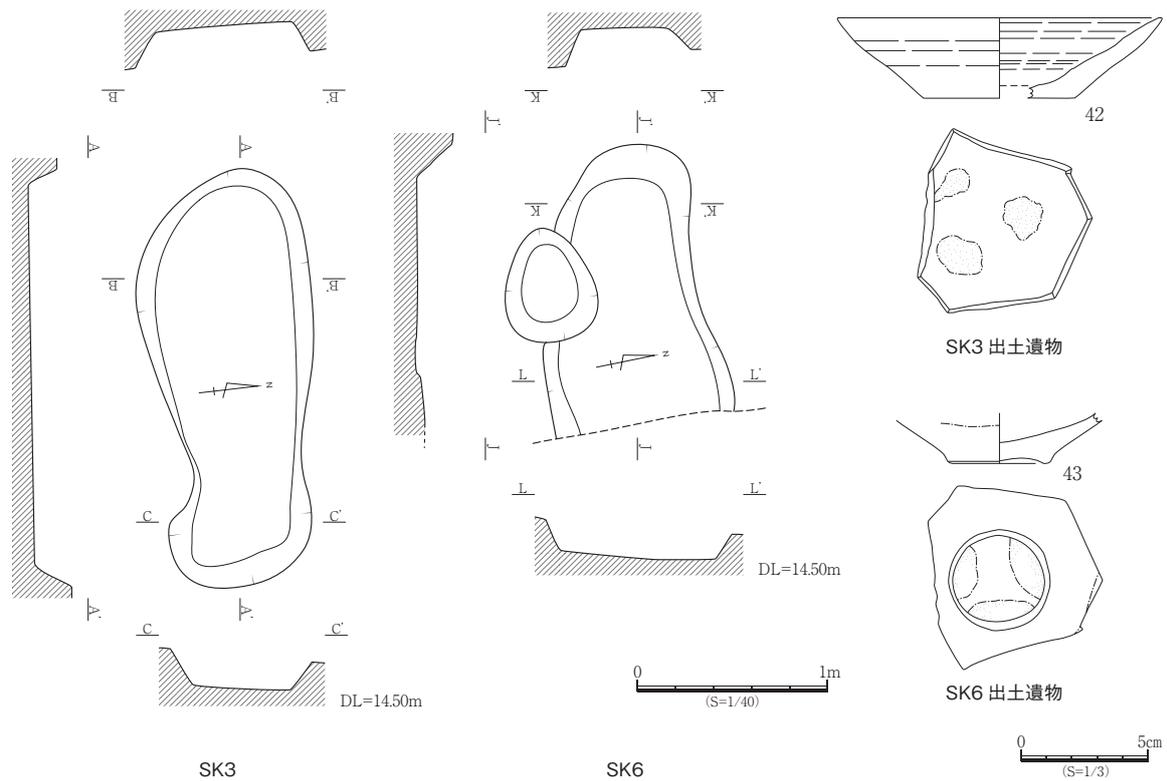


図23 I W区SK3・6遺構図・遺物実測図

はN-79°-Wを指し、東西方向に配置される。燃焼部は西側に設けられており直径0.66mの楕円形を呈しする。底面と壁面が被熱しており焼土化が認められた。埋土は暗オリーブ色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。底面と壁面が被熱しており焼土化が認められた。埋土中から図示した肥前系陶器皿(43)と土師質土器細片、肥前系磁器皿細片が出土した。出土遺物から4基とも17世紀中葉から後半に位置づけられる。

I W区SK7 (図24)

A III-9-20・A III-10-16グリッドにかけて検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長径1.30m、短径0.74mを測る。SD1を切る。断面形は逆台形を呈し、深さは0.14mを測る。埋土は礫混じりのオリーブ褐色粘土質シルトである。埋土中から図示した瓦質土器鍋(44)の他に土師質土器細片4点、青花皿片が出土した。15世紀代に位置づけられる。

I W区SK8 (図25)

A III-9-11・16グリッドで検出した土坑であ

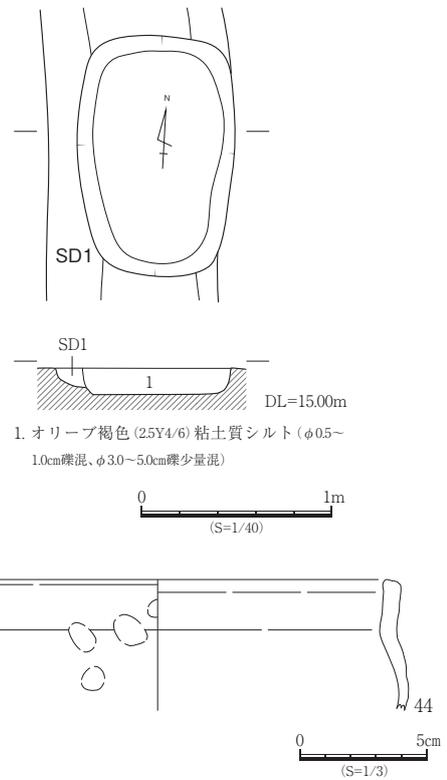


図24 I W区SK7遺構図・遺物実測図

る。平面プランは楕円形を呈し、長径1.04m、短径0.88mを測る。断面形は逆台形で深さは0.34mを測る。埋土は1層が礫混じりのオリーブ褐色シルトで上部に焼土を含む。以下は黄褐色から褐色を呈する礫混じりの粘土質シルトで、埋土中から瓦質土器片と土師質土器細片が出土した。15世紀代に位置づけられる。

I W区 SK9 (図26)

A III-9-17グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈し、長径0.86m、短径0.66mを測る。長軸方向はN-3°-Wで、ほぼ真北を示す。断面形は逆台形を呈し、深さは0.14mを測り、埋土は礫混じりの黄褐色シルトで炭化物を含む。埋土中から図示した土師質土器皿(45・46) 2点と、鈕銭(47)が出土した。これらの遺物は、土坑の床面南東端で出土し、土師質土器皿は2枚が上向きで出土した。土師質土器皿の形態から17世紀に位置づけられ、鈕銭が供伴することから墓の副葬品、もしくは地鎮遺構としての可能性が考えられる。

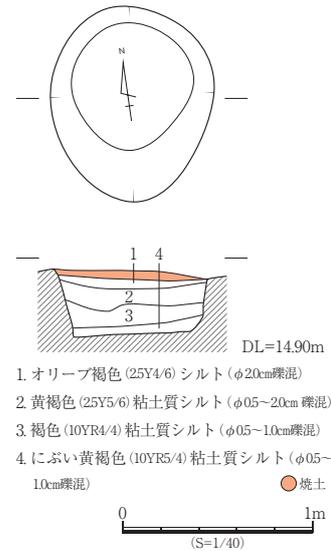


図25 I W区SK8遺構図

I W区 SK10・11 (図27)

A III-9-20・25グリッドにかけて検出した土坑である。SK10の平面プランは円形を呈し、直径1.50mを測り、SK11を切る。断面形は逆台形を呈し、深さは0.28mを測る。埋土は褐色粘土質シルト、東側面に炭化物が混じったオリーブ褐色粘土質シルトの堆積が認められる。埋土中から図示した瀬戸天目茶碗(48)の他に青磁釉が施された肥前系磁器碗が出土した。18世紀後半代に位置づけられる。SK11は円形、もしくは楕円形を呈するものと思われる。長径1.74m、短径1.60m、深さ0.24mを測る。床面はSK10に切られており全体は不明であるが周縁部がテラス状になり、中央部が凹む形態になるものと思われる。埋土は褐色からオリーブ褐色を呈した粘土質シルトであり、遺物の出土は認められなかった。

I W区 SK12・13 (図28)

A III-10-11グリッドで検出した土坑である。SK12は不整形を呈し、長径1.09m、短径0.98m、深さ0.10mを測り、SK13・SD2を切る。断面形は浅い逆台形である。埋土はオリーブ褐色粘土質シルトである。SK13は西半分がSK12により切られ全体形状は不明であるが方形、もしくは長方形を呈す

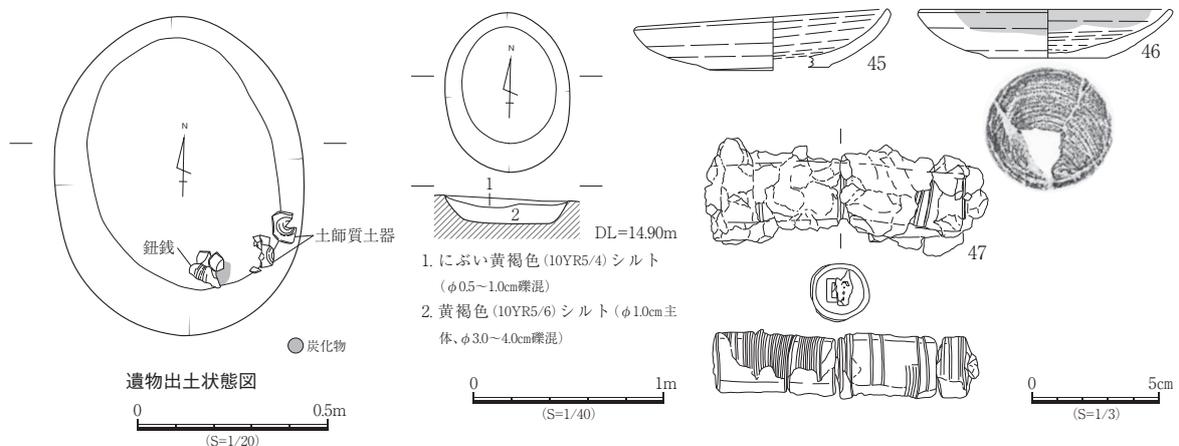


図26 I W区SK9遺構図・遺物実測図

1. I区

るものと思われ、規模は、長径0.66m以上、短径0.77mを測り、深さは0.04mで断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、埋土中から土師質土器、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁など細片が出土している。また、炭化物と焼土が混じっており、骨片が確認された。

I W区 SK16 (図29)

AⅢ-14-6・7グリッドにかけて検出した土坑である。平面プランは円形を呈し、直径0.78mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは0.16mを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。埋土中から図示した磁器皿(49・51)、磁器碗(50)、陶器播鉢(52)などが出土した。17世紀後半～18世紀前半代に位置づけられる。

I S区 SK1 (図30)

AⅢ-13-14グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長径2.51m、短径1.56mを測る。二つの土坑の切合いが考えられ、床面の深さは西側が0.43m、東側で0.63mを測る。断面形は逆台形状を呈し、土坑西側の遺構埋土は灰色シルトに三和土(敲き土)と礫が混じる。東側はオリブ色シルト礫であり、壁面に三和土(敲き土)が使用されている。埋土中から図示した流紋岩製の砥石(53)、陶器片などが出土した。

I S区 SK5 (図31)

AⅢ-14-4グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長径0.87m、短径0.84mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは0.16mを測る。埋土はオリブ褐色粘土質シルトで、埋土中から図

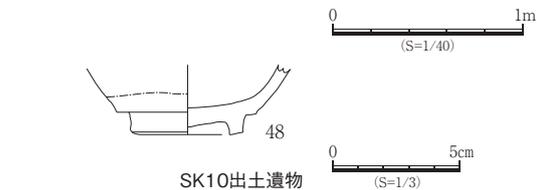
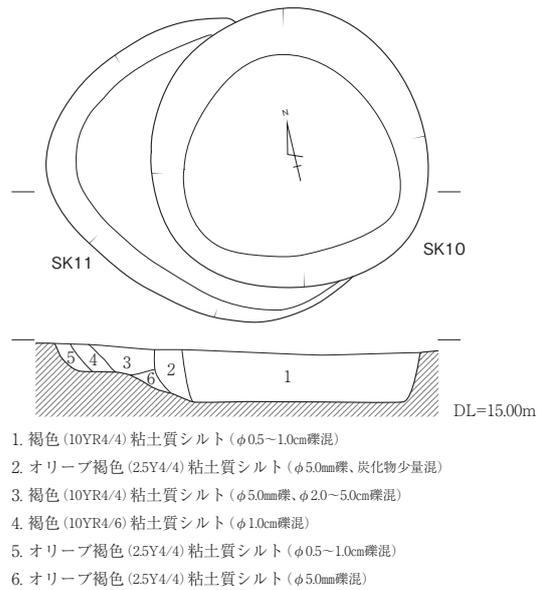


図27 I W区SK10・11遺構図・遺物実測図

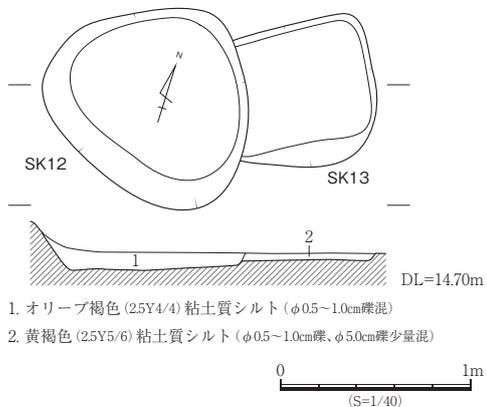


図28 I W区SK12・13遺構図

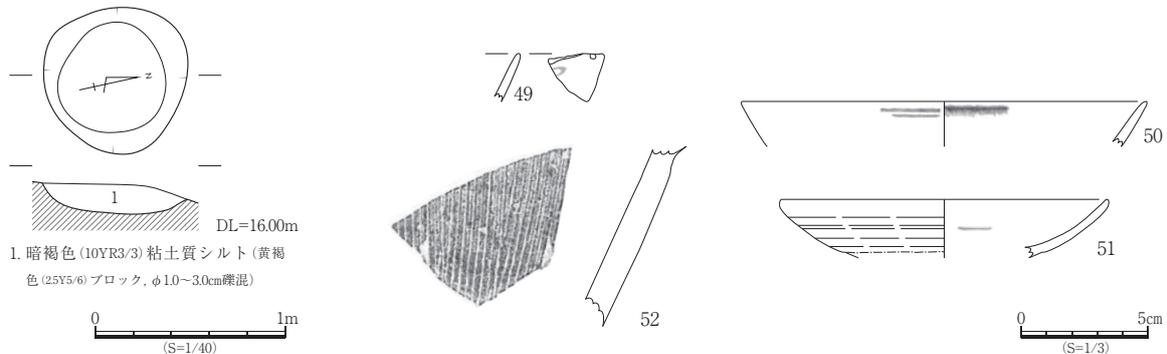


図29 I W区SK16遺構図・遺物実測図

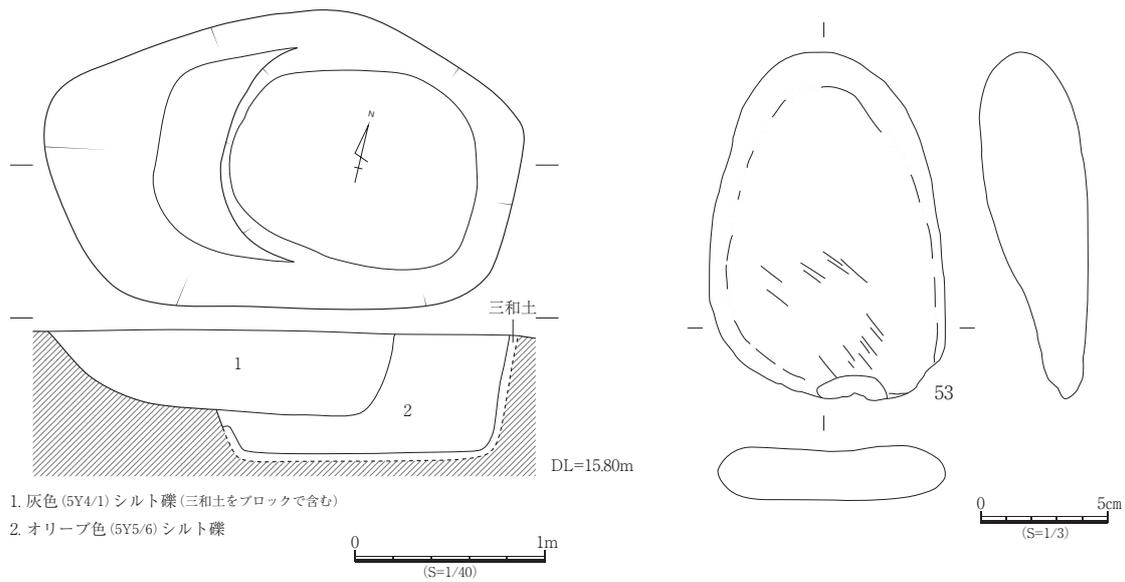


図30 I S区SK1 遺構図・遺物実測図

示した肥前系磁器杯(54)が出土した。54は高台外面に二重界線,内面に簡略された舟文が施される。

I S区SK6 (図31)

AⅢ-14-5グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長径1.05m以上、短径0.63mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは0.26mを測る。埋土はオリブ褐色粘土質シルトであり、床面全体に厚さ4cmで焼土の堆積が認められた。埋土中から灰釉が施された肥前系陶器片などが出土した。

I S区SK8 (図31)

AⅢ-14-10グリッドで検出した土坑である。平面プランは円形を呈し、直径1.70mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、深さは0.20mを測る。埋土は上部に黄褐色シルト、下部に灰色粘土であり、埋土中からは図示した肥前系青磁皿(55)が出土した。

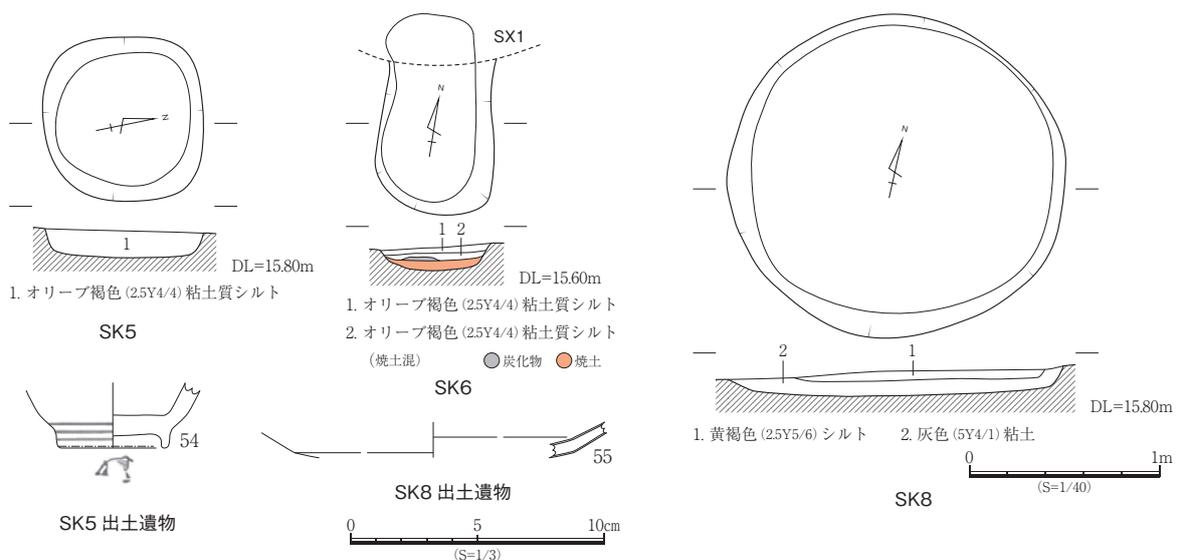


図31 I S区SK5・6・8 遺構図・遺物実測図

溝跡

I W区SD1 (図32)

AⅢ-9-18・19グリッドで検出した溝跡である。平面プランは東西方向に9.00m伸び、東端部は南に90°折れて3.14m伸びた所で終わる。西端部は北に鍵状に折れて3.00m伸びた所でSD2に接続する。総延長は15.14m、幅0.22～0.95m、深さは0.16m前後を測る。断面形はU字形、逆台形状を呈し、溝の西端から中央部にかけてはU字形で、東端部は床面がフラットになる。SB6・7の雨落ち溝として機能していたものと思われる。埋土はオリブ褐色粘土質シルトであり、埋土中から図示した鉄滓(56)、近世陶器片などが出土した。出土遺物から17世紀中葉から後葉にかけての遺構と考えられる。

I W区SD2 (図33)

AⅢ-9-11～15グリッドで検出した溝跡である。平面プランは東西方向に伸び、東端部はやや南に曲がりSK12・13に切られる。この部分からSD5が接続し南に向かって3.51m伸びる。SD5はSD2と同一の溝であると思われる。西端部はやや北に向かって緩やかに曲がる。総延長は20.98m、幅0.22～0.95m、深さは0.30m前後を測る。断面形はU字形、逆台形状を呈し、溝の西端から中央部にかけてはU字形で、東端部のSD5では床面がフラットになる。平面プランからみるとSD1に並行しており、SB6・7、SD1などを区画する溝と考えられる。埋土は1層が直径5.0～20.0cmの礫が混じる暗褐色粘土質シルトであり、2層は溝の肩口にオリブ褐色粘土質シルトの堆積が認められた。埋土中から図示した肥前系陶器皿(57～61)、瀬戸系陶器の天目茶碗(62)、向付鉢(63)、肥前系磁器の白磁小杯(64・65)、軒丸瓦(66)、砥石(67)などが出土した。出土遺物から17世紀中葉から後葉にかけての遺構と考えられる。

SD3 (図34)

AⅢ-8-19・24グリッドで検出した溝跡である。平面プランは南北方向に11.12m伸び、幅0.82～1.06m、深さは0.29m前後を測る。断面形は西側がテラス状になりU字形、逆台形状を呈する。溝の南端はやや東に曲がり調査区外に伸びるとと思われる。埋土は褐色粘土質シルトであり、溝中央部から北部にかけて直径8.0～15cmの角礫が検出された。埋土中から図示した肥前系陶器の筒形火入れ(68)、

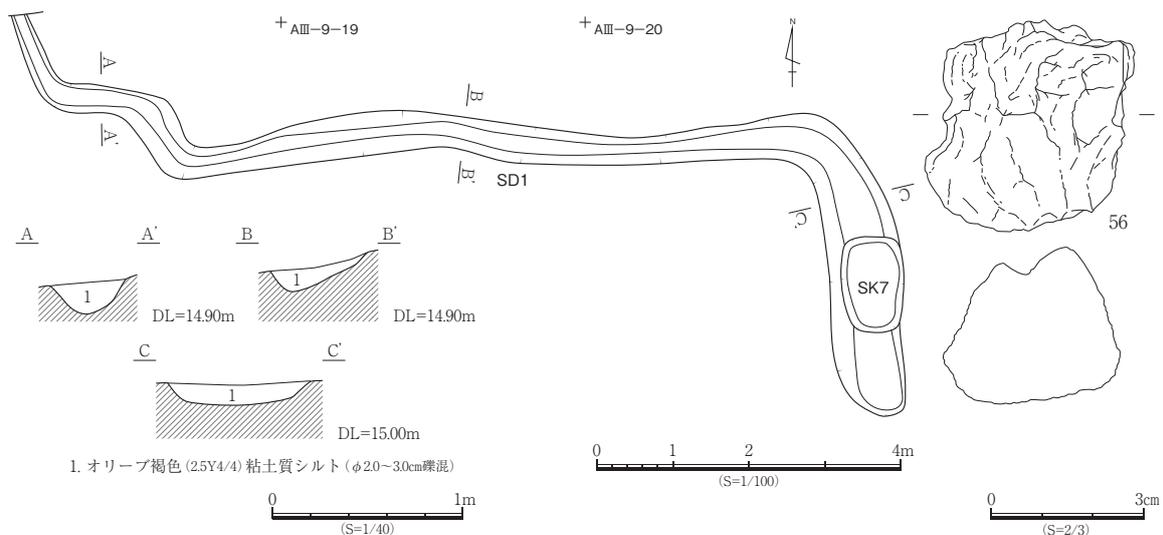


図32 I W区SD1遺構図・遺物実測図

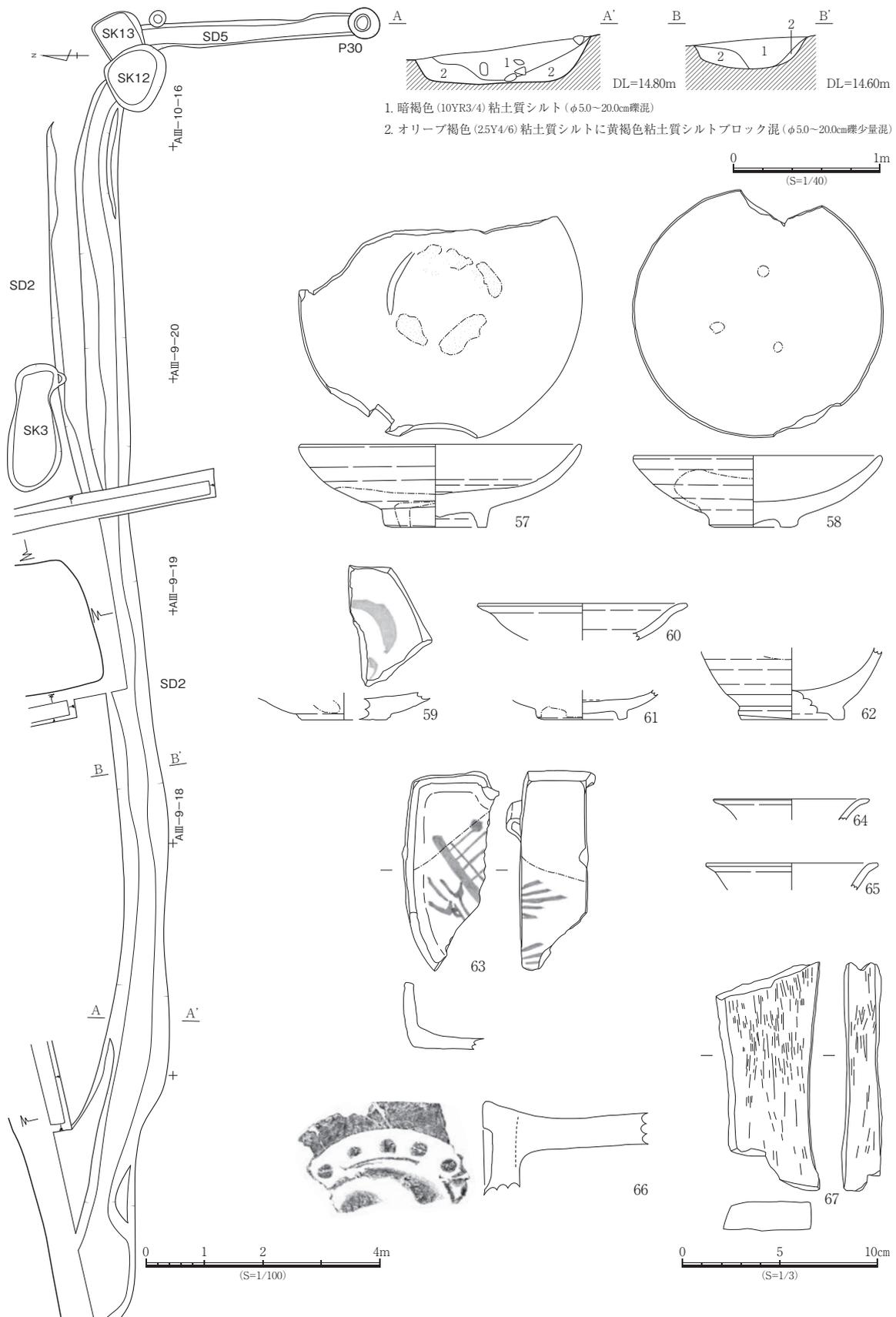


図33 I W区SD2遺構図・遺物実測図

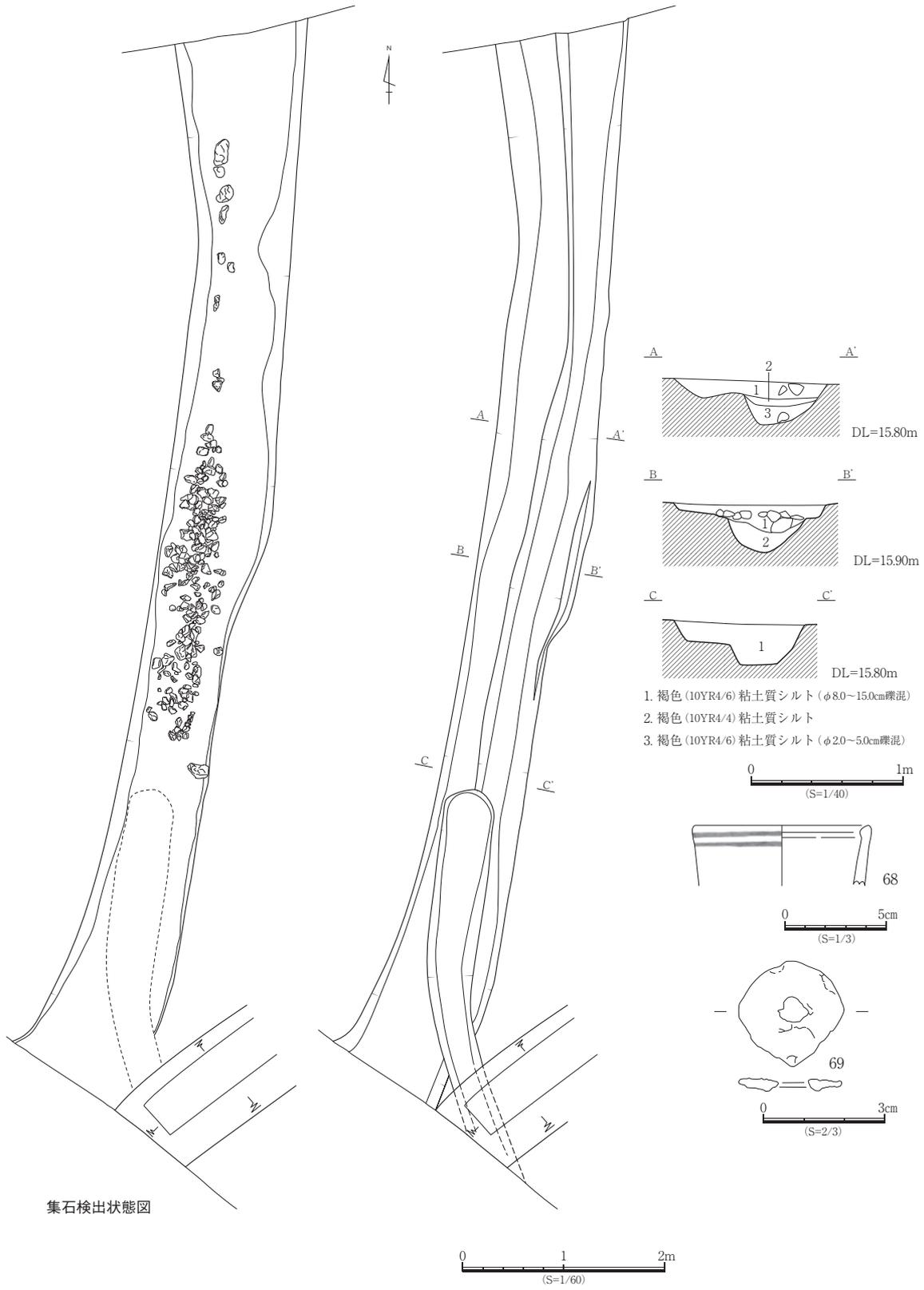


図34 I W区SD3遺構図・遺物実測図

鉄銭(69)の他に肥前系陶磁器類, 土師質土器の細片が出土した。出土遺物から17世紀中葉から後葉にかけての遺構と考えられ, I区の近世屋敷地の西限を区画する溝に位置付けられるものと思われる。

性格不明遺構

SX1・2(図35)

AⅢ-9-9・10グリッド, 調査区北端で2基並んで検出した性格不明遺構である。遺構プランの半分は調査区外であり, SX1は円形, SX2は隅丸方形になるものと思われる。SX1は長径2.82m, 短径1.52m以上を測る。断面形は浅い箱形で深さ0.16mを測る。埋土は礫混じりの黄灰色粘土質シルトであり, 土師質土器の細片と鉄滓が出土した。SX2は長径2.34m, 短径1.10m以上を測る。断面形は浅い逆台形で深さ0.14mを測る。埋土は礫混じりの黄灰色粘土質シルトであり, 土師質土器の細片と図示した備前焼播鉢(70), 鉄釘(71), 瓦質土器細片等が出土した。

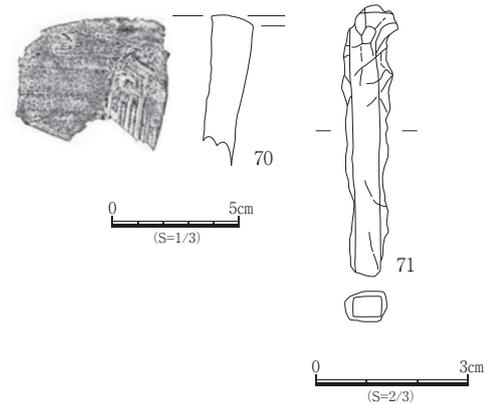


図35 I W区SX2遺物実測図

中面遺構と出土遺物

I W区の近世整地土下のV層上面で検出した遺構である。上面遺構を掘り下げ下層遺構検出面に至るまでに確認された。ここでは中面として取り上げる。調査区北東部では中世の溝, ピット, 西部ではピットを検出した。

土坑

SK15(図37)

AⅢ-8-19グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈し, 長径1.42m, 短径0.74mを測る。断面形は浅い皿状で中央部はやや凹む。深さは0.06mを測る。埋土は褐色粘土質シルトであり上部には炭化物の堆積が認められた。埋土中から土師器細片, 鉄滓1.078gが出土した。

溝跡

SD8(図37)

AⅢ-9-15・20グリッドで検出した溝跡である。2条が並行して南北に延び, 西側のSD8-2が東に折れてSD8-3と繋がる。この接続部から0.2mの間隔を空けてSD8-1が東方に延びる。SD8-2・3の北端は調査区外に延びる。各溝の規模はSD8-1が長さ1.58m以上, 幅0.34, 深さ0.02mを測る。SD8-2は曲がりの部分も含めて長さ10.52m, 幅0.42m, 深さ0.02mを測り, 南端の屈曲部は深さ0.08~0.20mと深くなる。SD8-3は長さ8.42m以上, 幅0.38m, 深さ0.05mを測る。各溝の断面形は浅い皿状, 逆台形状を呈す。埋土は明褐色シルトであり, 埋土中から図示した瓦質土器の鍋(72), 混入と考えられる土師器, 須恵器細片が出土した。出土遺物から14世紀後半~15世紀にかけての遺構と考えられる。また, SD8-3の南端床面でP73を検出した。埋土はSD8と同じであり, 銅製の鋏(73)が出土した。

1. I 区

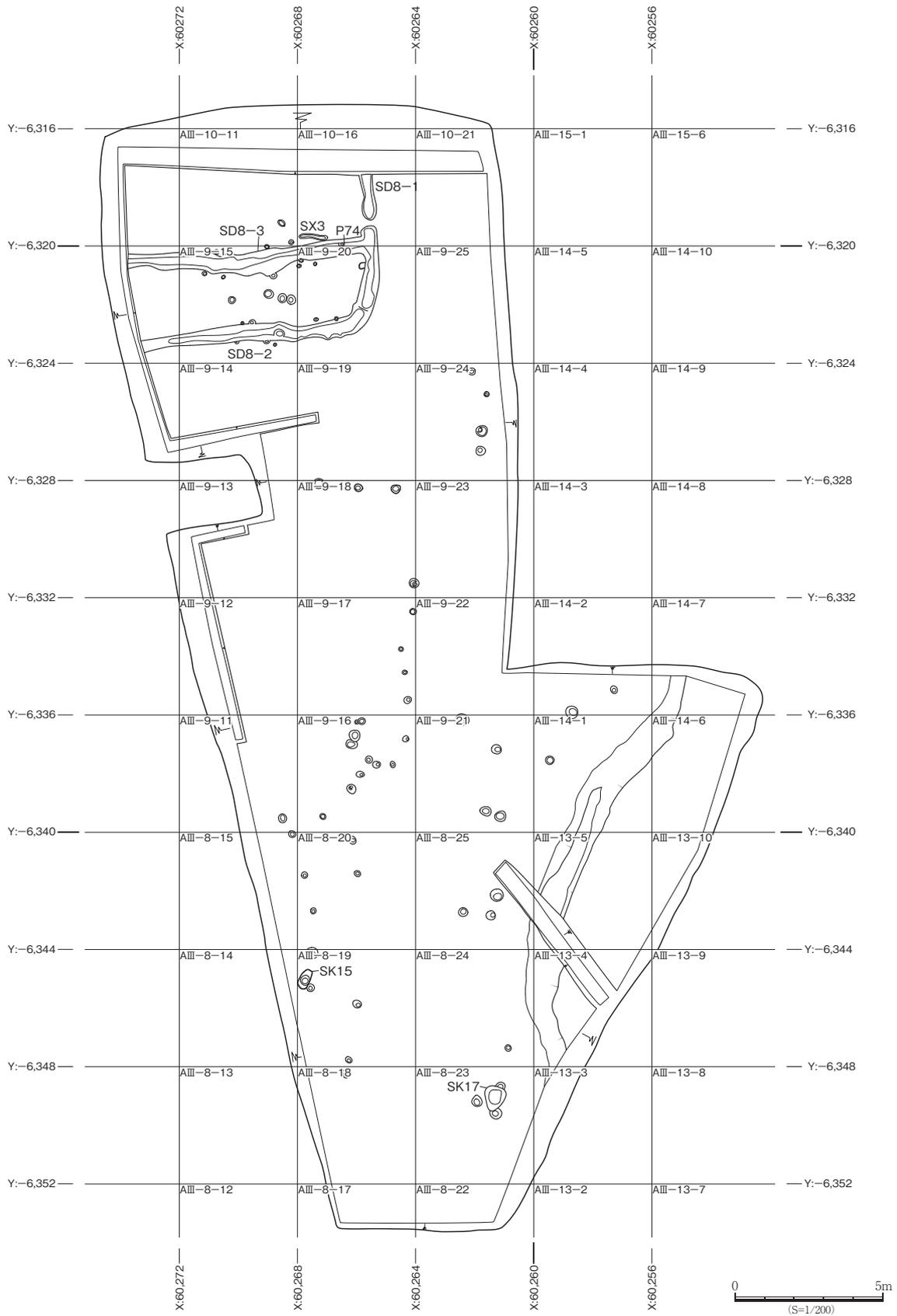


图36 I W区中面遺構配置图

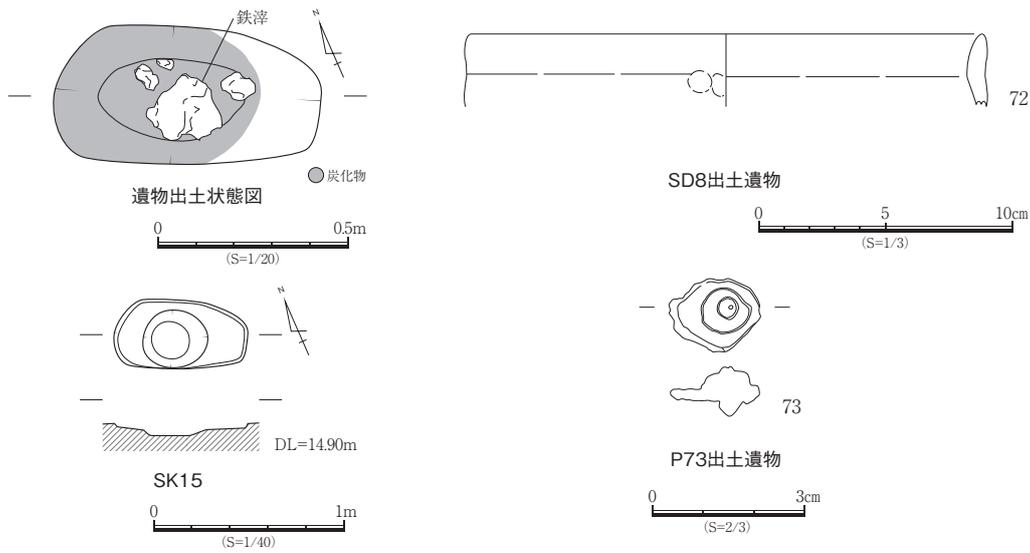


図37 I W区 SK15遺構図・SD8・P73遺物実測図

② I E区

掘立柱建物

SB9 (図38)

A III-10-25, B III-6-21グリッドにかけて検出した桁行2間×梁行1間の東西棟側柱建物跡である。棟方向はN-72°-Eを示す。規模は桁行4.49m, 梁行2.06mを測り, 柱間寸法は桁行側が1.71~2.61m, 梁行側が2.02~2.06mである。床面積は9.24㎡で, 柱穴は直径0.33~0.39mを測る円形及び, 長径0.39~0.44m, 短径0.18~0.33mを測る楕円形であり, 柱痕は検出されなかった。埋土は暗褐色シルトが主体であり, 中には黄褐色シルトがブロックで混じる埋土もある。P1より肥前系陶器の灰釉皿, 土師質土器の焙烙鍋が出土した。

SB10 (図40)

A III-10-25, B III-6-21グリッドにかけて検出した桁行2間×梁行1間の東西棟側柱建物跡である。棟方向はN-59°-Eを示す。規模は桁行4.52m, 梁行2.52mを測り, 柱間寸法は桁行側が1.84~2.61m, 梁行側が2.50~2.52mを測る。床面積は11.39㎡である。柱穴は長径0.32~0.70m, 短径0.26~0.50mを測る楕円形であり, 柱痕は検出されなかった。埋土は暗褐色シルトが主体であり, 中には黄褐色シルトがブロックで混じる埋土もある。P2・4より近世陶磁器の破片が2点出土した。

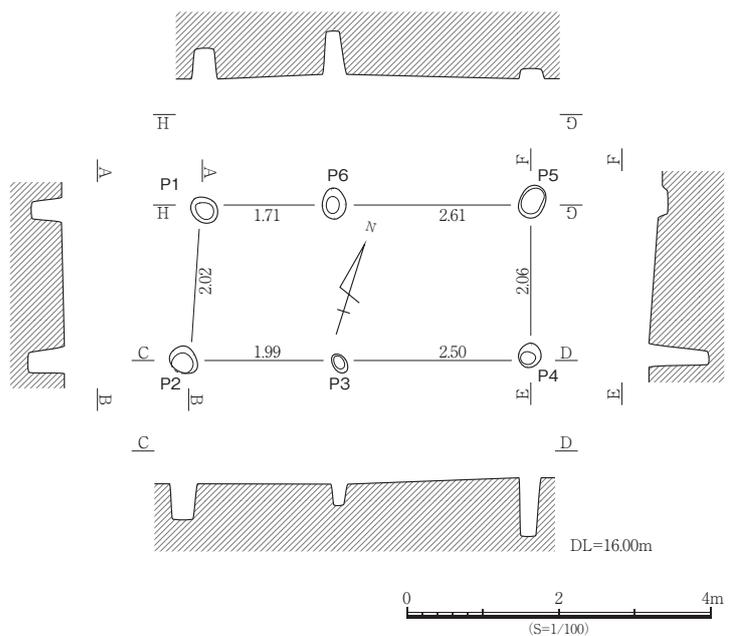


図38 I区SB9遺構図

1. I 区

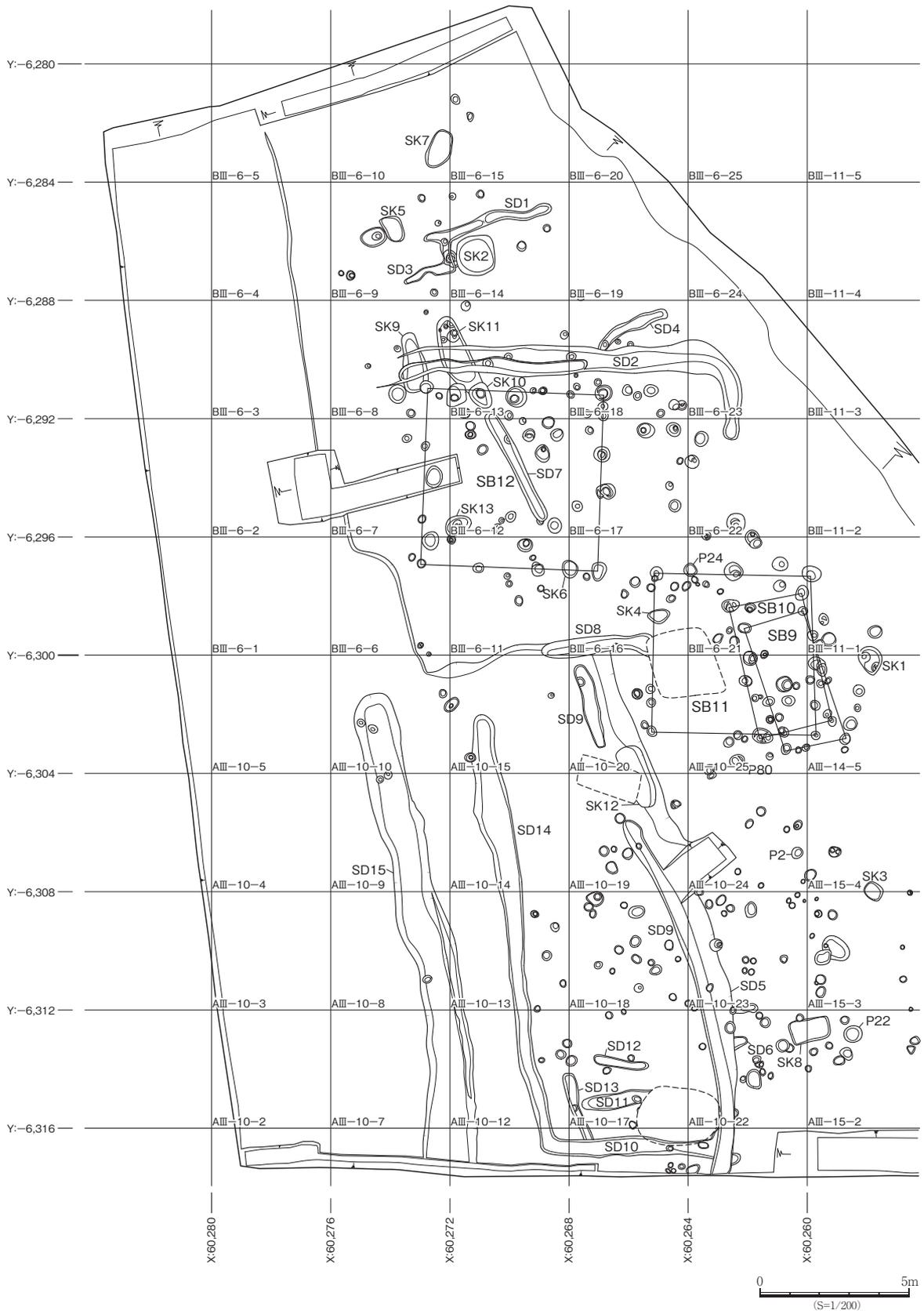


图39 I E区上面遺構配置図

SB11 (図41)

A III - 10 - 25, B III - 6 - 21 グリッドにかけて検出した桁行2間×梁行2間で西側に半間の庇が付く東西棟建物跡である。棟方向はN - 89° - Wを示す。規模は桁行5.39m, 梁行5.46mを測り, 柱間寸法は桁行側が0.98 ~ 4.34m, 梁行側が2.53 ~ 2.86mで, 底部分は0.98 ~ 1.00mを測る。床面積は29.42㎡である。P10はP2・7間の間柱になるものと思われる, P2・7との柱間は2.26 ~ 3.12mを測る。柱穴は直径0.30 ~ 0.63m, 長径0.32 ~ 0.70m, 短径0.26 ~ 0.50mを測る楕円形であり, 柱痕は検出されなかった。埋土は暗褐色シルトが主体であり, 中には黄褐色シルトがブロックで混じる埋土もある。P9では18 ~ 20cmの角礫及び円礫の根石が認められた。埋土中から唐津灰釉皿の破片が1点出土した。

SB12 (図42)

A III - 6 - 7・12・17グリッドにかけて検出した桁行3間×梁行3間で東西棟建物跡である。棟方向はN - 88° - Wを示す。規模は桁行6.06m, 梁行5.92mを測り, 柱間寸法は桁行側が1.55 ~ 3.97m, 梁行側が1.82 ~ 3.95mを測る。床面積は35.87㎡である。P11・13はP1・10間, P3・14間の間柱になるものと思われる, P1・3との柱間は1.55 ~ 1.61mと他に比べ短い。柱穴は直径0.24 ~ 0.58mを測る円形及び, 長径0.46 ~ 0.64m, 短径0.35 ~ 0.48mを測る楕円形であり, 柱痕はP5 ~ 7とP14で検出され, 各柱痕径は0.10 ~ 0.26mを測る。柱穴の埋土はオリブ褐色粘土質シルト

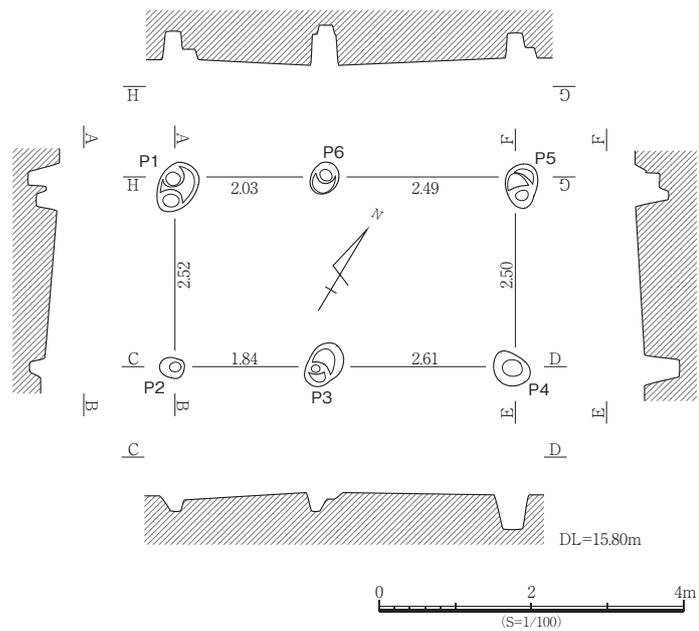


図40 I区SB10遺構図

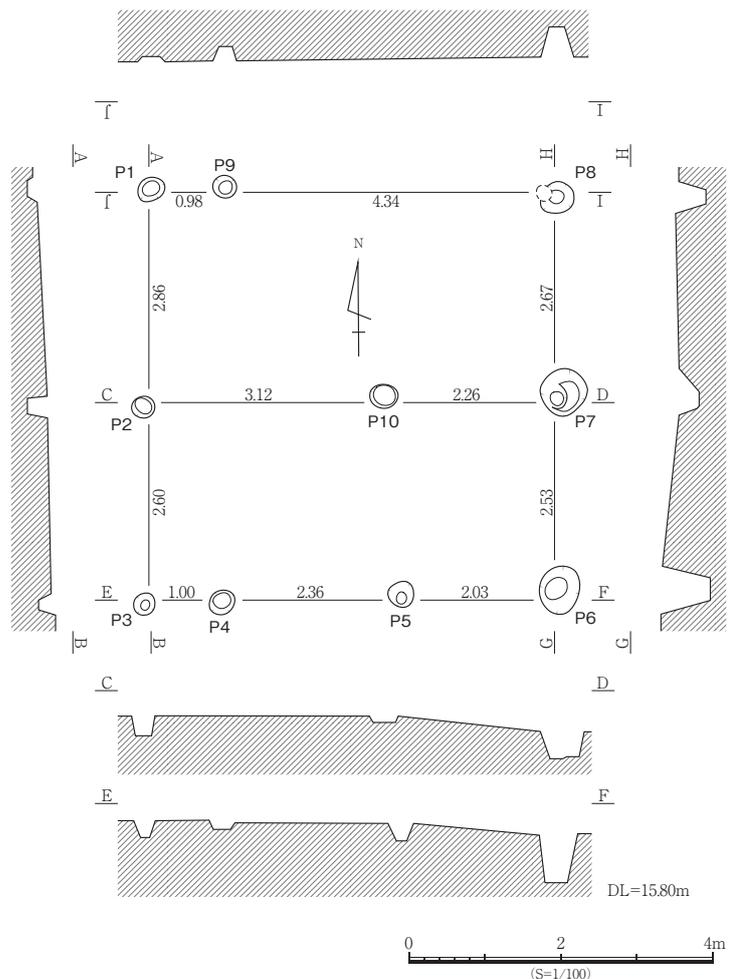


図41 I区SB11遺構図

1. I区

が主体であり、P6では焼土と炭化物が含まれていた。また、柱痕上部に根石の一部と思われる直径10.0cm前後の角礫が認められた。P9では18～20cmの角礫及び円礫の根石が認められた。ピットからの出土遺物はP3・9の埋土中から鉄釘が2点出土したのみである。

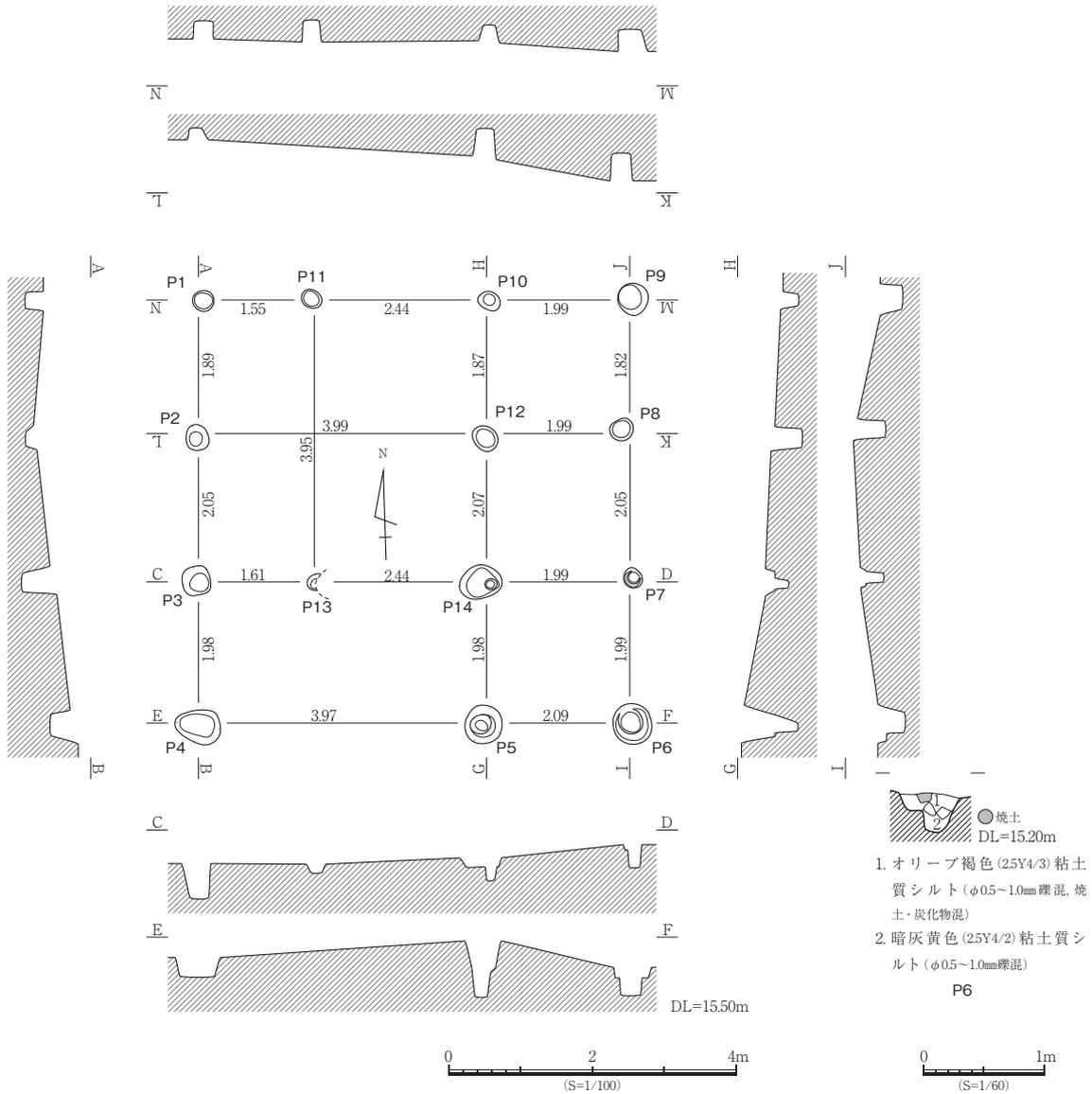


図42 I区SB12遺構図

ピット

P2 (図43)

AⅢ-10-24グリッドで検出した長径0.40m、短径0.36m、深さ0.53mを測る円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは図示した磁器の端反皿(74)、と砥石(75・76)の他に備前焼播鉢片が出土した。74は口縁部外面に濃い釉調の呉須で界線が施される。砥石は仕上砥であり、使用痕が顕著に認められる。

P22 (図43)

AⅢ-15-2グリッドで検出した長径0.64m、短径0.54m、深さ0.30mを測る円形のピットである。

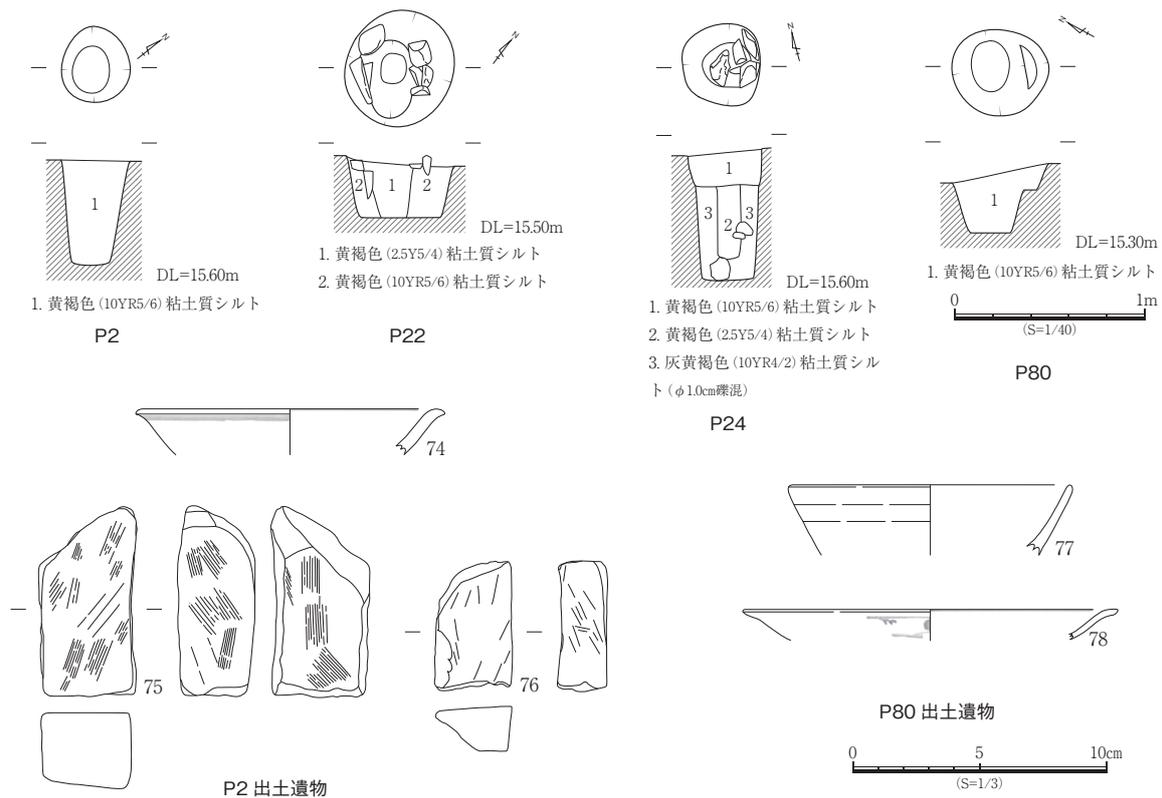


図43 I E区P2・22・24・80遺構図・遺物実測図

中央部に直径18～20cmを測る柱痕が認められた。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、柱痕部分は黄灰色気味で粘性がある。柱痕の周りには、根巻石状に直径8～10cm大の角礫が認められた。断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは陶器碗の破片が出土した。

P24 (図43)

BⅢ-6-21グリッドで検出した長径0.64m、短径0.54m、深さ0.30mを測る円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、柱痕部分は黄灰色気味で粘性がある。柱痕の周りに根巻石状に直径8～10cm大の角礫が認められた。断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは陶器碗の破片が出土した。

P80 (図43)

AⅢ-10-25グリッドで検出した長径0.51m、短径0.46m、深さ0.27mを測る円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈し、南側に段部を有する。埋土中からは図示した土師質土器杯(77)、と青花皿(78)が出土した。78は口縁部外面に濃い釉調の呉須で牡丹唐草文、内面に二重界線が施される。

上面ピット出土遺物(図44 79～86)

I E区の上面ピットの埋土からは79～86の遺物が出土した。79は瀬戸産の天目茶碗で、全体的に鉄釉が施される。80は瀬戸産の皿で口縁部は稜花状を呈し、全体的に鉄釉が施される。81は青花皿の底部片である。見込みに淡い釉調の呉須により玉取獅子が施される。82は陶器皿で、内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、中央に呉須により花文が施され、外面体部下半に呉須による文様が施される。高台

1. I区

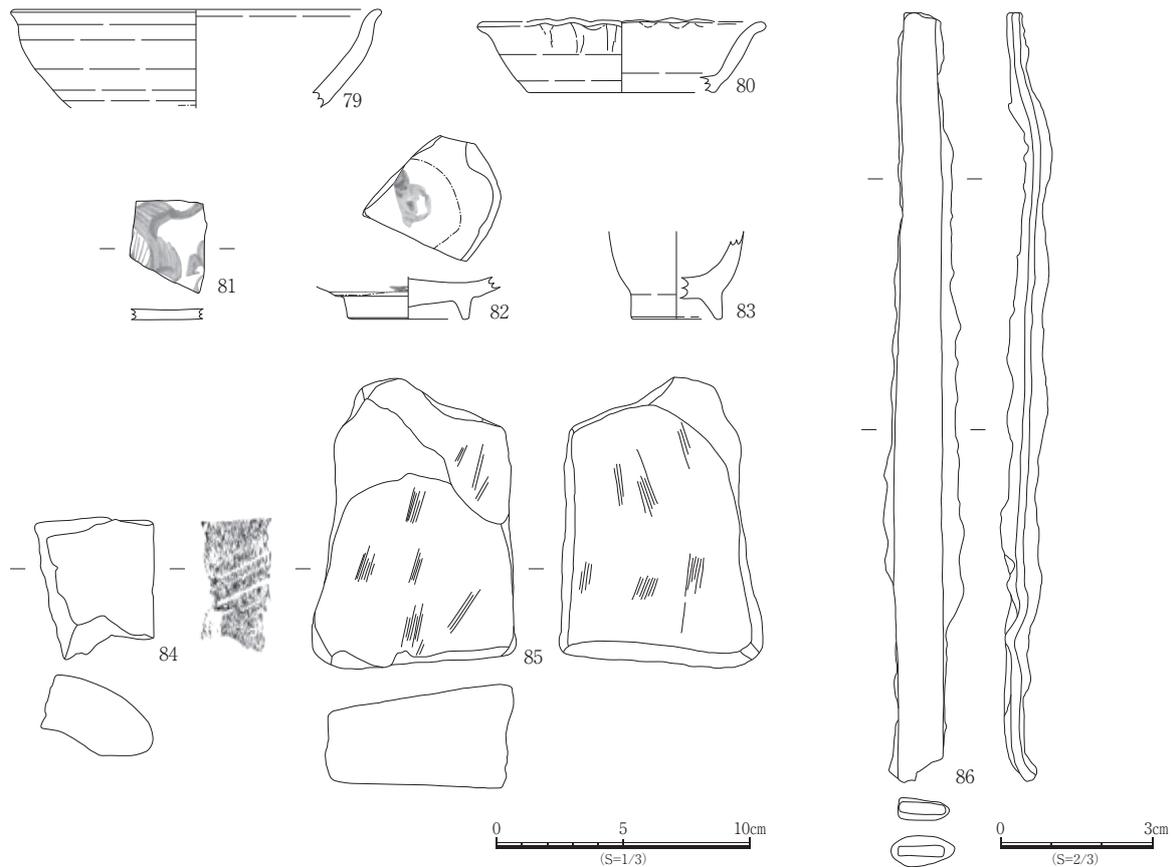


図44 上面ピット遺物実測図

内は兜巾状に削る。胎土は淡黄色を呈した精緻な土が使われている。83は肥前系の白磁小杯である。84は丸瓦片で、内面に斜位のコビキ痕が認められる。85は砂岩製の砥石、86は鉄製の鉋である。

土坑

SK5 (図45)

BⅢ-6-9グリッドで検出した土坑である。平面プランは不整楕円形を呈し、長径0.88m、短径0.62m、深さ0.08mを測る。土坑の長軸方向はN-73°-Eを示す。断面形は逆台形状を呈し、埋土は礫混じりの褐色シルトであり、上部に焼土が認められた。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK7 (図46)

BⅢ-6-10グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈し、長径1.34m、短径0.78mを測る。断面形は逆台形状を呈し、深さは0.15mを測る。埋土は炭化物と焼土が混じった褐色シルトであり、埋土中からは瓦片が1点、近世陶器片が1点出土した。

SK8 (図46)

AⅢ-15-2グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長径1.34m以上、短径0.78mを測る。断面形は逆台形状を

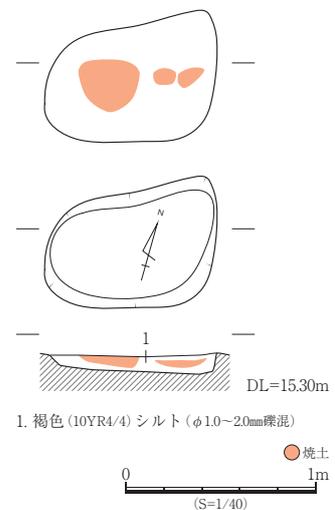


図45 I E区SK5遺構図

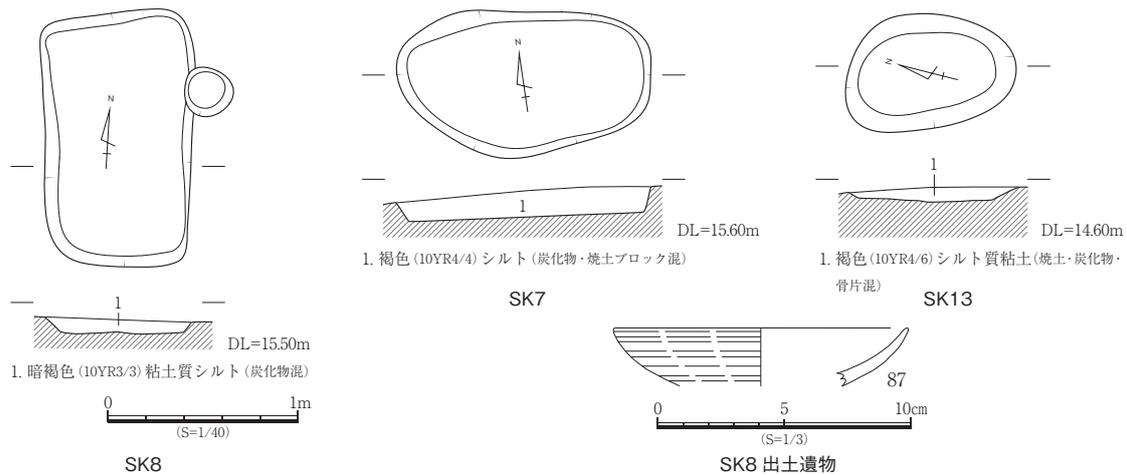


図46 I E区SK7・8・13遺構図・遺物実測図

呈し、深さは0.13mを測る。埋土は炭化物を含んだ暗褐色粘土質シルトであり、埋土中から図示した肥前産陶器である銅緑釉が施された内野山窯系陶器皿の口縁部片(87)が出土した。他に近世陶器の破片が2点出土した。

SK13 (図46)

BⅢ-6-12グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈し、長径0.91m、短径0.60mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは0.09mを測る。埋土は焼土、炭化物、骨片を含む褐色シルト質粘土であり、遺物は出土しなかった。

溝跡

SD2 (図47)

BⅢ-6-8・13・18・23グリッドで検出した溝跡である。平面プランは南北方向に11.0m伸び、南端部は西に鍵状に折れて3.20m伸びた所で終わる。総延長は14.20m、幅0.73～1.16m、深さは0.23m前後を測る。また、南端から北へ5.0m伸びた所では、溝底面の西側が長さ6.2m、幅0.3～0.45m、溝底面からの深さが30cmほど下がっており、断面形は逆台形状から西側がU字形を呈する。SB12を囲む配置である事から区画溝の性格が考えられる。埋土はオリブ褐色粘土質シルトで、埋土中から図示した土師質土器皿(88・89)、京焼系の陶器碗(90)などが出土した。他に肥前系磁器、唐津鉄釉皿の破片が出土した。出土遺物から18世紀前半代の遺構と考えられる。

SD4 (図47)

BⅢ-6-18グリッドで検出した溝跡である。平面プランは南東から北西方向に2.62m以上伸び、SD2により切られる。幅0.47m前後、深さは0.13～0.30m前後を測る。断面形はU字形及び逆台形状を呈する。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、埋土中から図示した肥前系陶器の皿(91)、土師質土器の焙烙鍋片が出土した。91は高台内の削りが高台脇より深く削り込まれ、高台の断面形が逆台形状を呈する。内面に白土化粧を掛け巻ハケ目が施される。18世紀代の遺物と考えられる。

SD9 (図48)

AⅢ-10-22・23グリッドで検出した溝跡である。平面プランは東から西方向に2.89m伸びた所で攪乱により切られるが、さらに西方に12.20m以上伸びるものと思われる。SD9の南側は一段高い

1. I 区

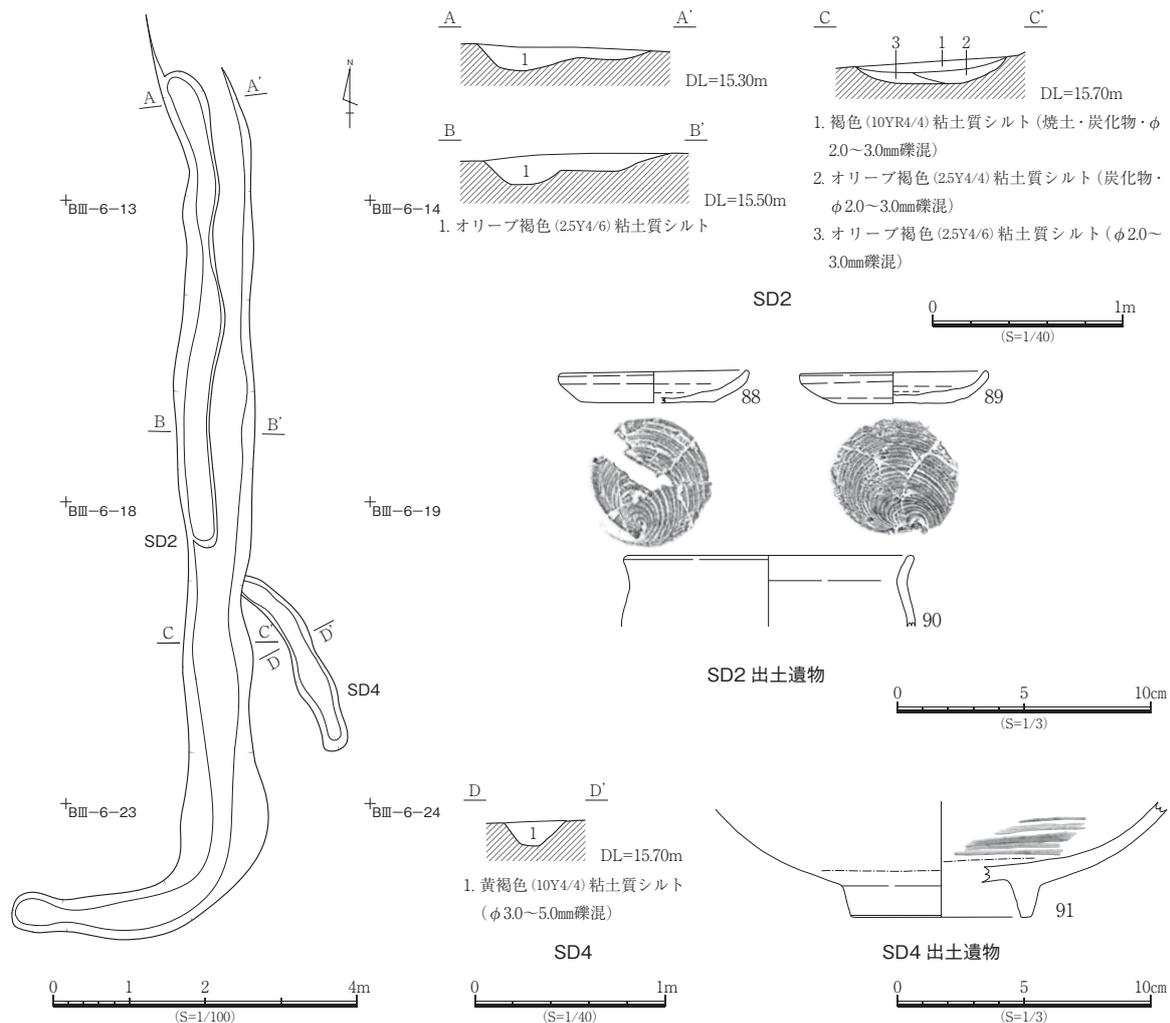


図47 I E区SD2・4遺構図・遺物実測図

段部であり、この段部に並行して検出した。総延長は15.09m、幅0.56～0.70m、深さは0.12～0.25m前後を測る。溝の西部分は一歩テラス状の段部があり、一段高い南側の段部では柵列状のピットを検出した。上段部を区画する溝と考えられる。溝の断面形はU字形を呈し、埋土は黄褐色粘土質シルトである。埋土中から瀬戸天目茶碗片、土師質土器細片が出土した。

SD13 (図48)

A III-10-17グリッドで検出した溝跡である。プランは東西方向に2.34m以上伸び、西端はSD10に切られる。幅は0.44m前後、深さは0.11mを測る。断面形はU字形を呈し遺構埋土は黄灰褐色粘土質シルトである。溝の伸びる方向がSD14に並行しており、プランとしては区画溝の性格も考えられる。

SD14・10 (図48・49)

A III-10-12～15グリッドで検出した溝跡である。SD14は東西方向に伸び、西端はSD10と接合し、南に折れる。規模は全長14.57m、幅は0.50～1.17m、深さ0.22m前後を測る。溝の断面形は東側では両側にやや段を持つ逆台形状で、中央部は南側に段を持ち、北側はU字状を呈し深くなる。溝の深さは0.15～0.20mと西側に比べ浅い。埋土はオリーブ褐色から黒褐色を呈した粘土質シルトであり、

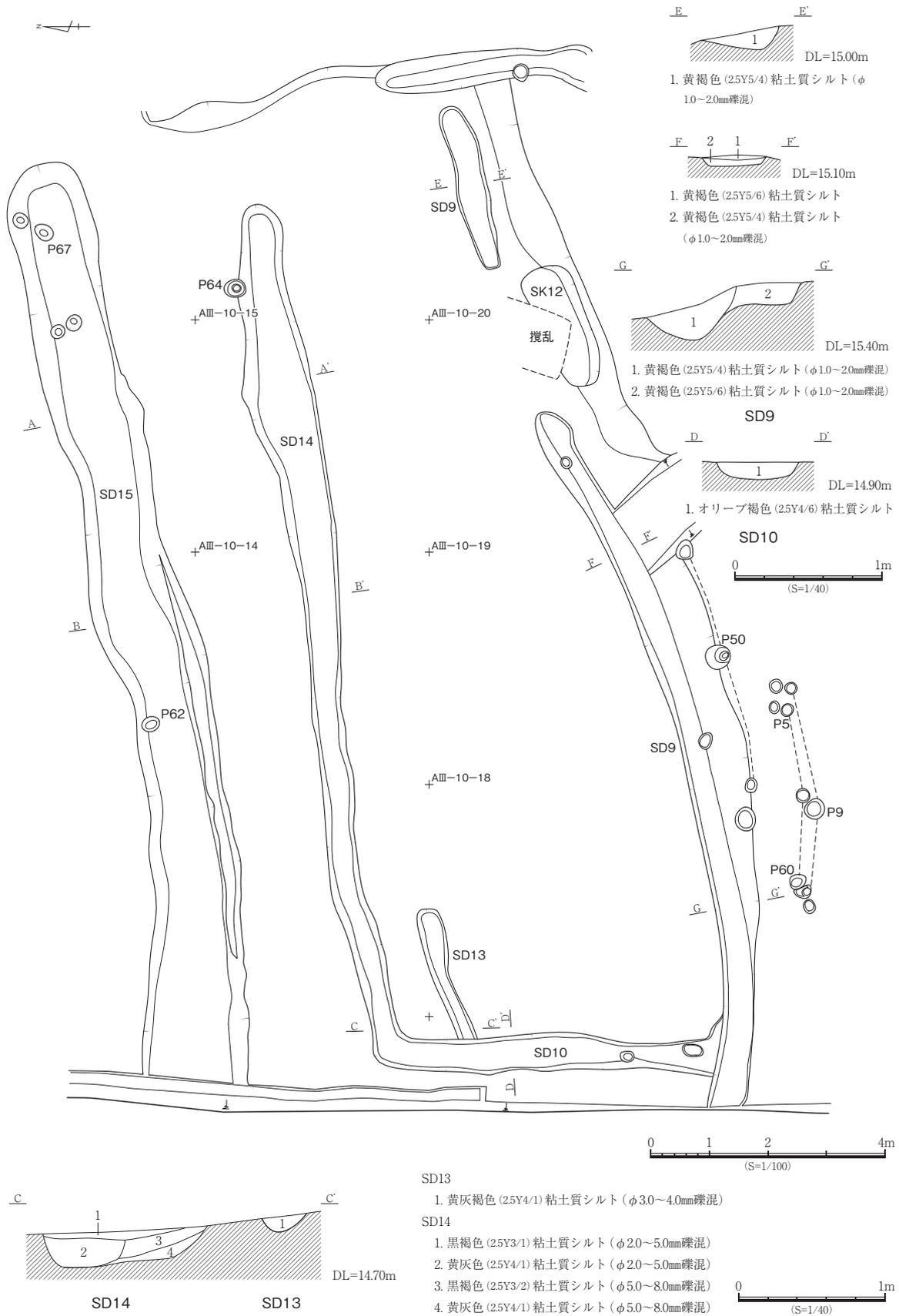
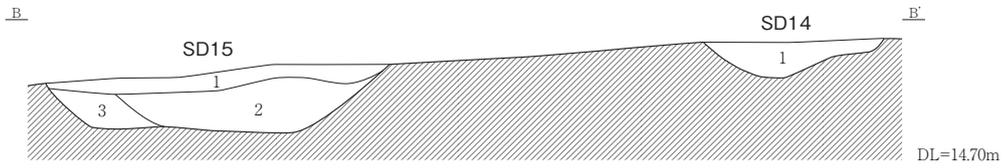
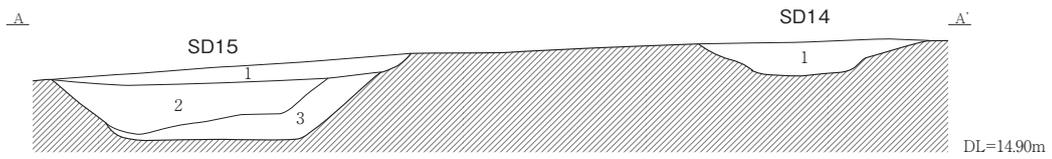


図48 I E区SD9・10・13~15 遺構図

1. I 区

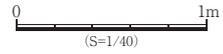


SD15

1. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土質シルト (φ1.0~2.0mm礫混)
2. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粘土質シルト (φ1.0~2.0mm礫混)
3. 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘土質シルト (黄灰色 (2.5Y7/2) 粘土質シルト混)

SD14

1. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土質シルト (φ1.0~2.0mm礫混)



SD14・15

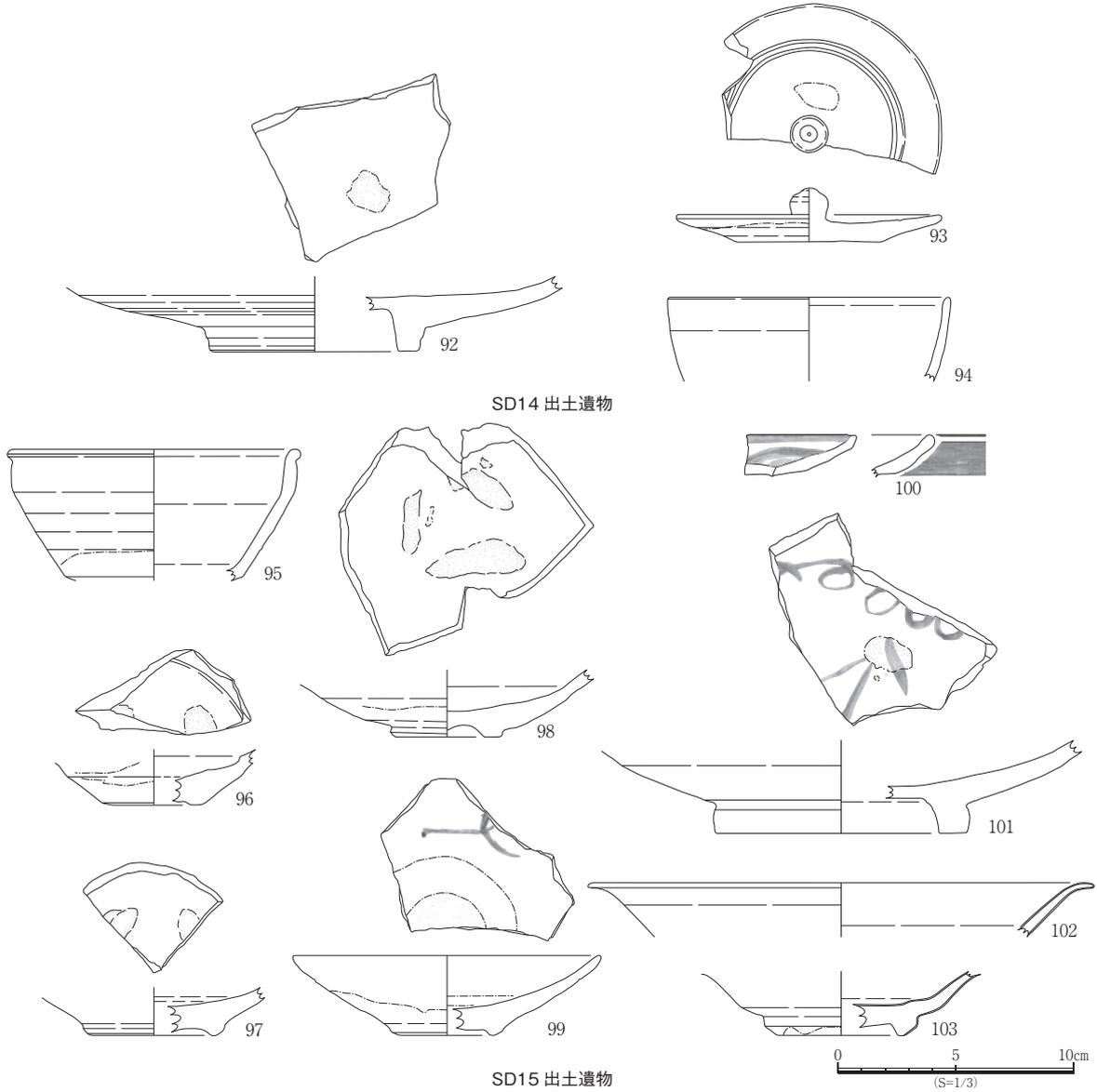


図49 I E区SD14・15遺構図・遺物実測図

西端では複数の堆積が認められる。SD10は東西方向に延びるSD14の西端で南に折れて5.93m延びる溝である。SD14との切合いは明確に確認できず、埋土の違い、溝の深度の違いから別の溝として取り上げたが、区画溝の性格も考えられるためSD14と同一の溝の可能性もある。SD14からは92～94の陶器が出土した。92は唐津の陶器皿であり、内面は白土化粧が施され見込みに砂目を残す。93は灰釉が施された蓋であり、宝珠形のつまみが付く。天井部は凹み、二重の界線が施される。94は肥前系の陶器碗であり、全体的に鉄釉が施される。

SD15 (図48・49)

AⅢ-10-7～10グリッドで検出した溝跡である。プランは東西方向に延び、SD14と並行する。規模は全長15.93m以上、幅は1.34～1.84m、深さ0.34m前後を測る。溝の断面形は逆台形状を呈する。埋土は黄褐色粘土質シルト及び、明黄褐色粘土質シルトで、95～103の陶器、磁器が出土した。95は瀬戸天目茶碗であり、口縁部は上方に折れて端部は小さな玉縁を呈する。全体的に鉄釉が施され、外面体部下半は露胎である。96～98は肥前系陶器皿であり、全体的に外面体部下半まで灰釉が施され外底部は露胎である。高台は低く内面は兜巾状に削る。内面見込みには砂目が認められる。99は肥前系陶器皿であり二彩手が施される。100は陶器皿で、全体的に鉄釉が施され、内面は白土化粧がハケ塗りされる。101も肥前系陶器皿であり、断面四角形の高台が付く。高台脇より高台内の方が深く削り込まれる。内面は白土化粧が施され、鉄釉と銅緑釉により老松文風の文様が施される。見込みには砂目が認められる。102・103は青磁皿である。102は口縁部であり、端反皿である。103は底部片であり、高台外面は斜めに削る。釉は高台外面まで全面施釉され、高台内は露胎である。出土した遺物からSD14・15は17世紀後半～18世紀代の年代に位置付けられる。

(2) 下面遺構と出土遺物

① I W区

ピット

P82 (図50)

AⅢ-8-20グリッドで検出した長径0.40m、短径0.34m、深さ0.28mを測る円形のピットである。埋土は褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。ピット埋土の上部で直径15～18cmの角礫を検出した。平らな面を上にしており、礎板石として使用されたものと思われる。埋土中からは土師器細片が3点出土した。

P117 (図51)

AⅢ-9-23グリッドで検出した長径0.26m、短径0.24m、深さ0.17mを測る円形のピットである。埋土は褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。ピット内で直径12～15cmの角礫を検出した。P82同様に平らな面を上にしており、礎板石として使用されたものと思われる。埋土中からは遺物の出土は無かった。

下面ピット出土遺物(図53 104・105)

下面ピットからは主に古代の遺物が出土している。104は須恵器杯の

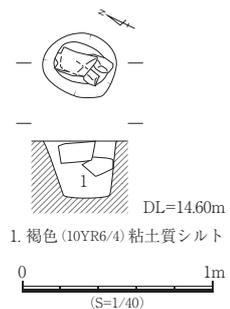


図50 I W区P82遺構図

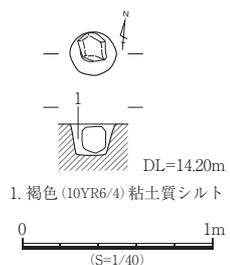


図51 I W区P117遺構図

1. I 区



图52 I W区下面遺構配置図

口縁部で回転ナデ調整が施される。105は須恵器で器台の身の部分と思われる。口縁部は僅かに外反し回転ナデ調整が施される。

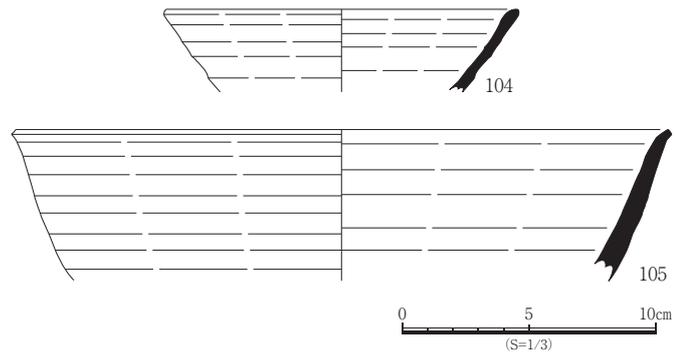


図53 I W区下面ピット遺物実測図

土坑

SK18 (図54)

A III-9-16グリッドで検出した土坑である。平面プランは不整形で、長径0.74m, 短径0.70m, 深さ0.12mを測る。土

坑の長軸方向はN-42°-Eを示す。断面形は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルトである。埋土中からは図示した弥生土器の甕(106), 他弥生土器片が11点出土した。106の底部は丸底気味で、外面ハケ調整, 内面はナデ調整を施される。外面の一部に煤の付着が認められる。

SK19 (図54)

A III-9-16・21グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長径1.40m, 短径1.00m, 深さ0.17mを測る。長軸方向はN-8°-Wを示す。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄褐色シルト質粘土であり、弥生土器片14点が出土した。

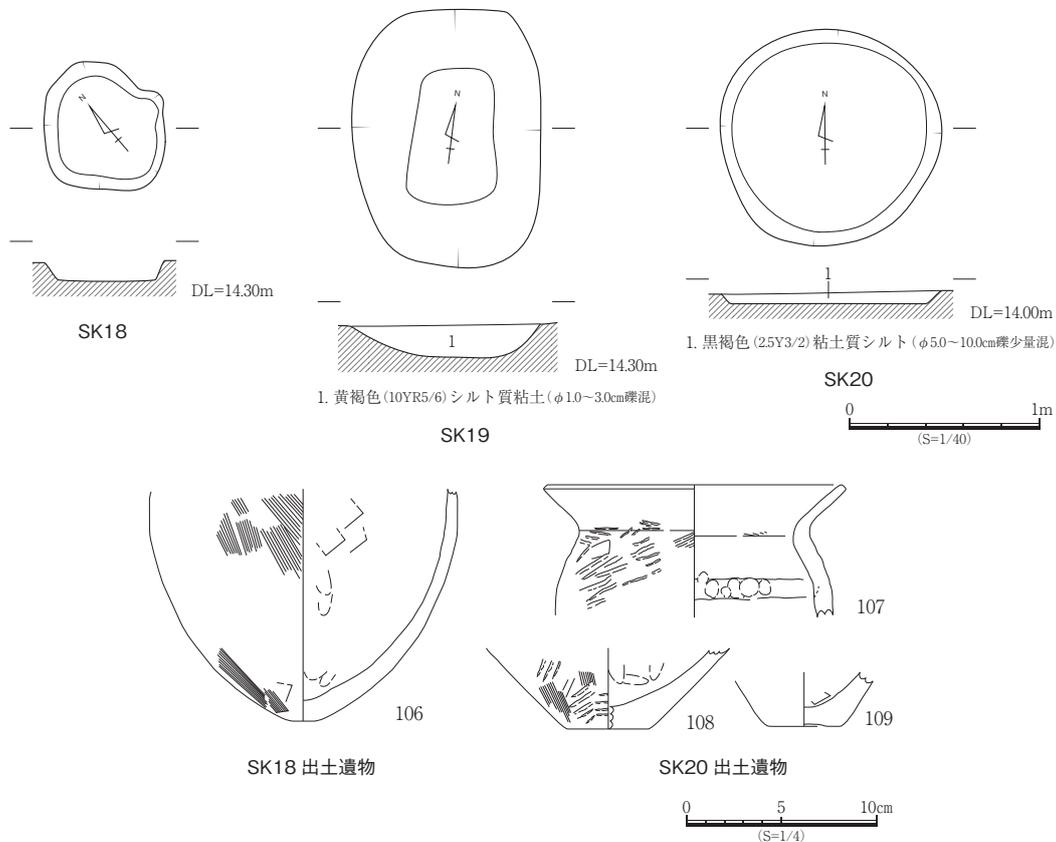


図54 I W区SK18～20遺構図・遺物実測図

1. I 区

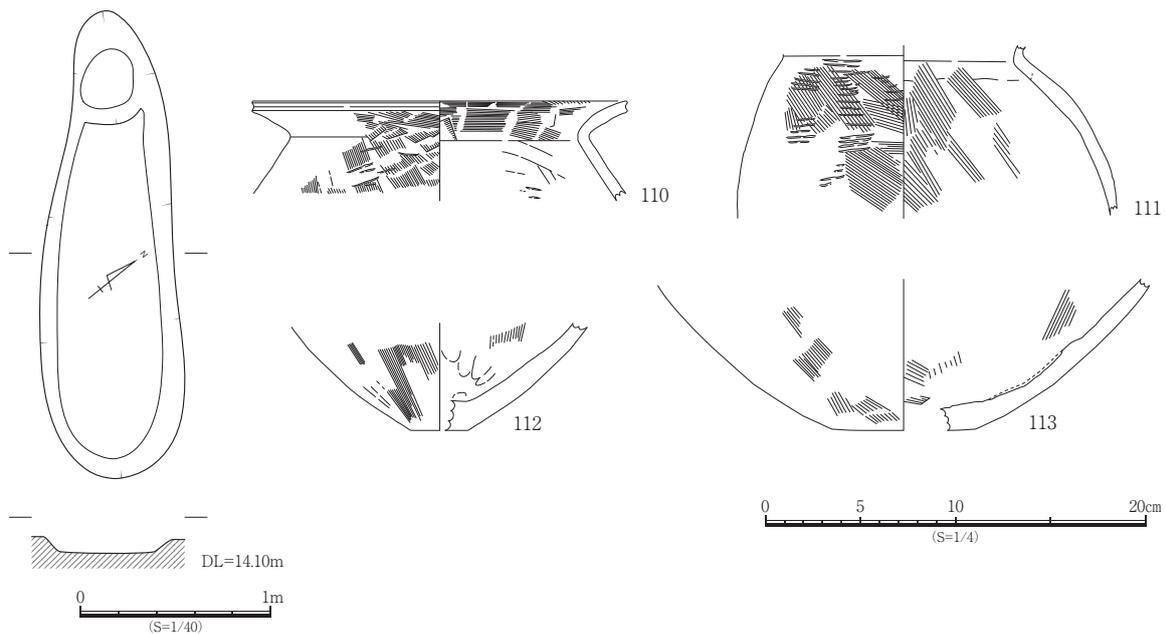


図55 I W区SK21遺構図・遺物実測図

SK20 (図54)

AⅢ-9-17グリッドで検出した土坑である。平面プランは円形を呈し、直径1.14～1.18m、深さ0.07mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルトである。埋土中からは図示した弥生土器の甕(107～109)が出土した。107は甕の上半部であり、口縁部は長く大きく開く。器壁が厚く胴部内面に接合痕が認められる。胴部外面はタタキ目を残し、口縁部、及び胴部内面はナデ調整が施される。108・109は底部片であり平底を呈する。108はタタキ成形後、ハケ調整が施される。109の内面は板状工具によるナデ痕が認められる。

SK21 (図55)

AⅢ-9-16グリッドで検出した土坑である。弥生土器の土器溜まりを掘り下げ、平面プランを検出した。土器溜まりの集中2のブロックにあたる。平面プランは溝状を呈し、長径2.48m、短径0.50m、深さ0.24mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土である。埋土中からは図示した弥生土器(110～113)の他、弥生土器片が112点出土した。110は甕の上半部であり、口縁部は長く大きく外反し、端部中央は凹む。内外面ともに細かいハケ調整が施される。111は甕の胴部片であり、外面はタタキ成形後、ハケ調整、内面はハケ調整が施される。112は甕底部片であり、平底から外方に開いて立ち上がる。内外面ともにハケ調整が施される。113は壺の胴部下半である。内面の一部は器壁が剥離する。ハケ調整が施される。

土器溜まり (図56)

I W区の下面、AⅢ-8-20、AⅢ-9-16・17グリッドにかけて弥生土器の土器溜まりが確認された。検出面はⅦ層灰黄色シルト質粘土であり、標高14.0～14.15mで検出した。土器は、集中の単位が認められたため、集中1～9のユニットに分けて取り上げを行った。特にI W区の北壁寄りに土器片が多く偏っており、集中3～5で取り上げた土器は個体復元が可能なものが多く出土し、一括性が高い。壺、甕が主体であり、中でも甕の割合が多い。少量であるが鉢もみられる。以下に器形ごとに記述する。

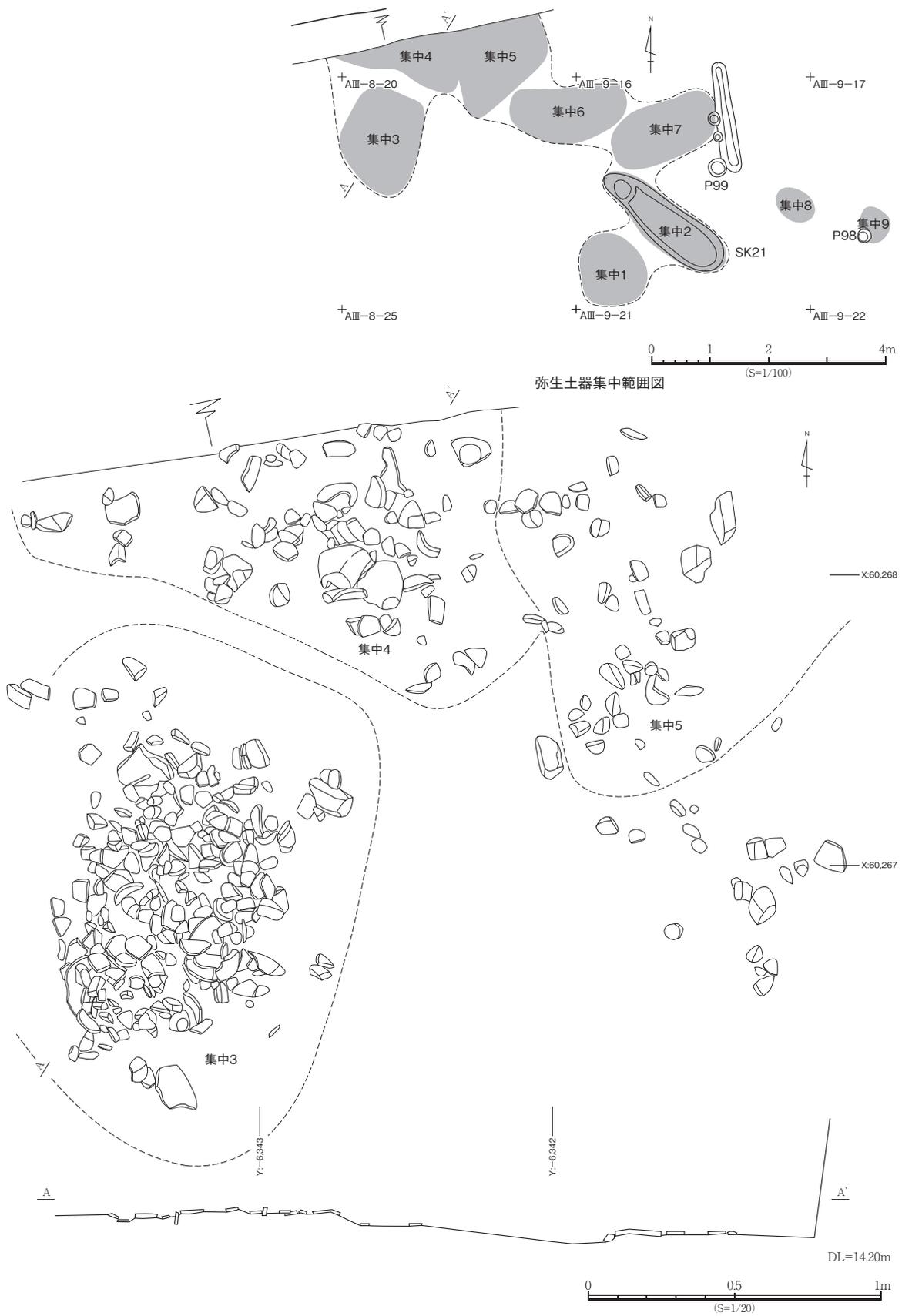


図56 I W区土器溜まり遺構図

壺(図57・58 114～133)

114～118は壺の口縁部片である。口縁端部を上下に拡張するもの(114～116)、複合口縁のもの(117)、素口縁のもの(118)がみられる。119～122は壺の頸部と胴部境界に付く突帯である。いずれも斜格子の刻みが施される。124～127は底部片である。124・125は平底でタタキ目を残す。126は厚みのある底部から段を持ち外方に開く。ハケ調整が施される。127も内面に細かなハケ調整が施される。128～131は壺の上半部である。128～130は素口縁であり、やや外方に開くタイプ(128・129)、直立するタイプ(130)、複合口縁のもの(131)などがみられる。いずれもタタキ成形後、ハケ調整が施される。胴部の張り具合は、球形で胴部中位に最大径が来るが、130はやや寸胴形を呈する。131の口縁部外面には櫛描による波状文、上部に刺突文が認められる。132・133は壺の胴部片である。胴部中位に最大径がくる。双方ともハケ調整が施され、133は内面ナデ調整が施される。

甕(図59～65 134～241)

134～241は甕である。法量は小型、中型、大型の三法量がみられる。基本的にタタキ成形、ハケ、ナデ調整によるが、内面はハケ調整が施されるものが多い。ここでは大きく法量で分けて、口縁部の形態は個体差として捉えられるものもあるが、口縁部の形態、調整等の特徴で分け掲載した。134～155は小型に属し、口径が13.0～17.0cm前後を測る。155は器高が15.0cmを測り、他も同法量を示すものと考えられる。口縁部の形態は、「く」の字に外反させ、口縁端部のナデ仕上げによって140～145の様に端部を下方に垂下させ面を成すタイプと、146～151の様に丸く収めるタイプ、さらに胴部から口縁部をタタキ成形により引き延ばし口縁部が大きく開くタイプがみられる。156～199は中型に属し、口径14.9～21.4cm、器高21.9～25.8cm前後を測る。156～158は胴部と口縁部の接合部が顕著であり、内面の屈曲部の稜が明瞭である。159～162の口縁端部は面を成す。165～167の口縁部は外方に反るように折り曲げ、細かいハケ調整を施す。169～173も口縁部が大きく外反し、胴部内面の接合痕が顕著である。174は逆L字状に外反する。175は小型に属するかも知れないが、口径の大きさと中型に分類した。胴部から口縁部を短く折り曲げ外面をタタキ成形、内面は縦方向の均等なハケ調整が施される。176・177の口縁部はやや内湾し、受け口状を呈する。178～180は口縁部の屈曲が緩く、ナデ調整が施される。181の口縁部は大きく外反し、端部はナデ調整により垂下する面を成す。183・184は胴部と口縁部の接合部が顕著である。口縁端部については強いナデにより外面が凹み、端部は垂下する面を成す。口縁部端の仕上げに粘土を付け足しているものと考えられ、185・186についても外面の稜は無いが同じ仕上げ方をしている。

187～190は中型の全体的な形態がわかるものである。底部は僅かに平底を残し、胴部の最大径は中位からやや上半部にあたる。

191～196は大型に属する。192の口径は12.8cmと小さいが、胴部の立ち上がりが大きく、胴部の張りが球形を呈するものと思われる。194は寸胴の胴部から口縁部が開き、頸部のくびれが小さい。内面に5.0cm単位で粘土帯接合痕が認められる。197～241は甕の底部片である。平底のもの、僅かに平底を呈するものと丸底を呈するものがみられる。底部内面の調整は、ナデ調整、ハケ調整が主体で、232～239は底部をタタキ成形により平底にしており、明瞭にタタキ目を残す。240の底部は丸底に近く241は尖り気味に仕上げている。

甗(図65 242～244)

242～244は甗である。尖底状の底部に直径0.7～0.9cmの穿孔がみられる。

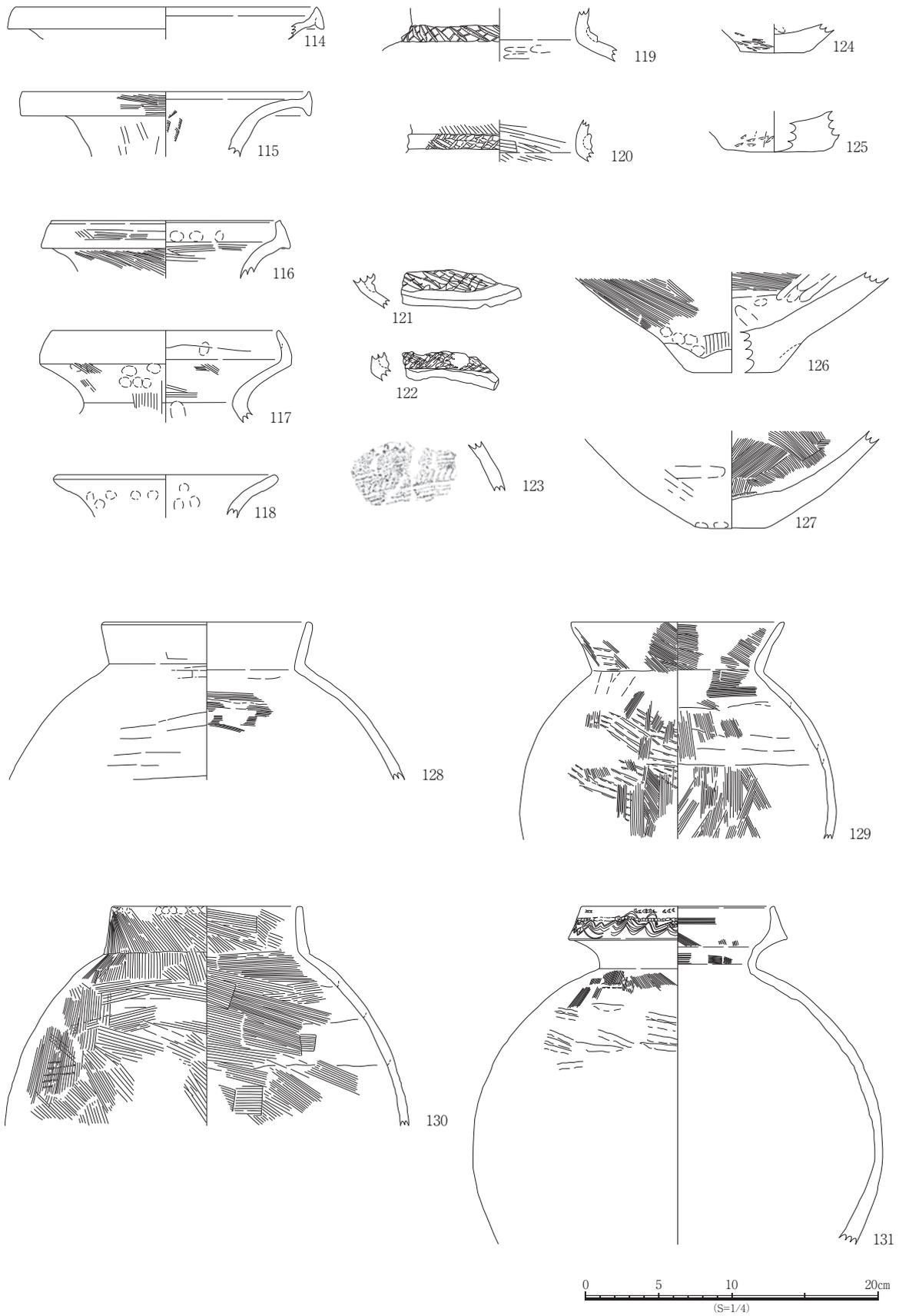


図57 I W区土器溜まり遺物実測図1

1. I区

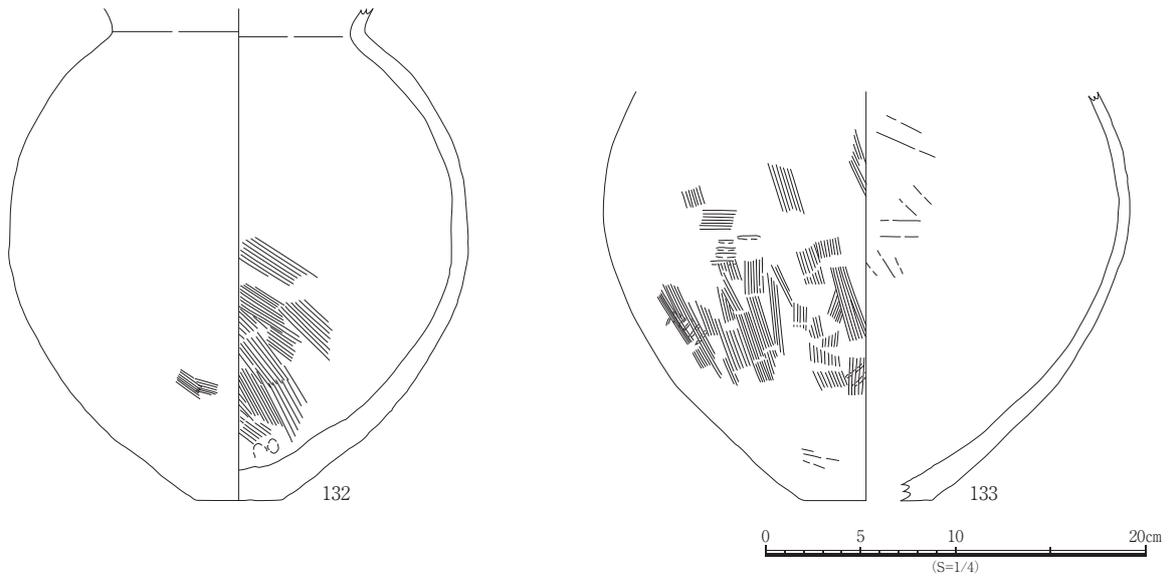


図58 I W区土器溜まり遺物実測図2

鉢(図66 245～252)

245～252は鉢である。245は平底で体部は内湾気味である。外面はミガキが施され、内面は細かい単位のハケ調整が施される。246は脚付きの鉢である。ラッパ状に大きく開く脚が付く。体部は内湾し、口縁端部は面を成す。248は内湾し口縁端部は尖り気味に仕上げる。外面はナデ、内面はハケ調整が施される。249は平底から外方に立ち上がる。ナデ調整を基調とする。

鉄器・石器(図66 253～255)

253は平釘状を呈した鉄製品で、先端部は細く尖る。鉄鏃の基部と思われる。254は投弾と考えられる。砂岩であり、直径5.4～5.7cmの球形を呈する。重量は162.1gを測る。255は石鏃である。平基式であり、サヌカイト製である。

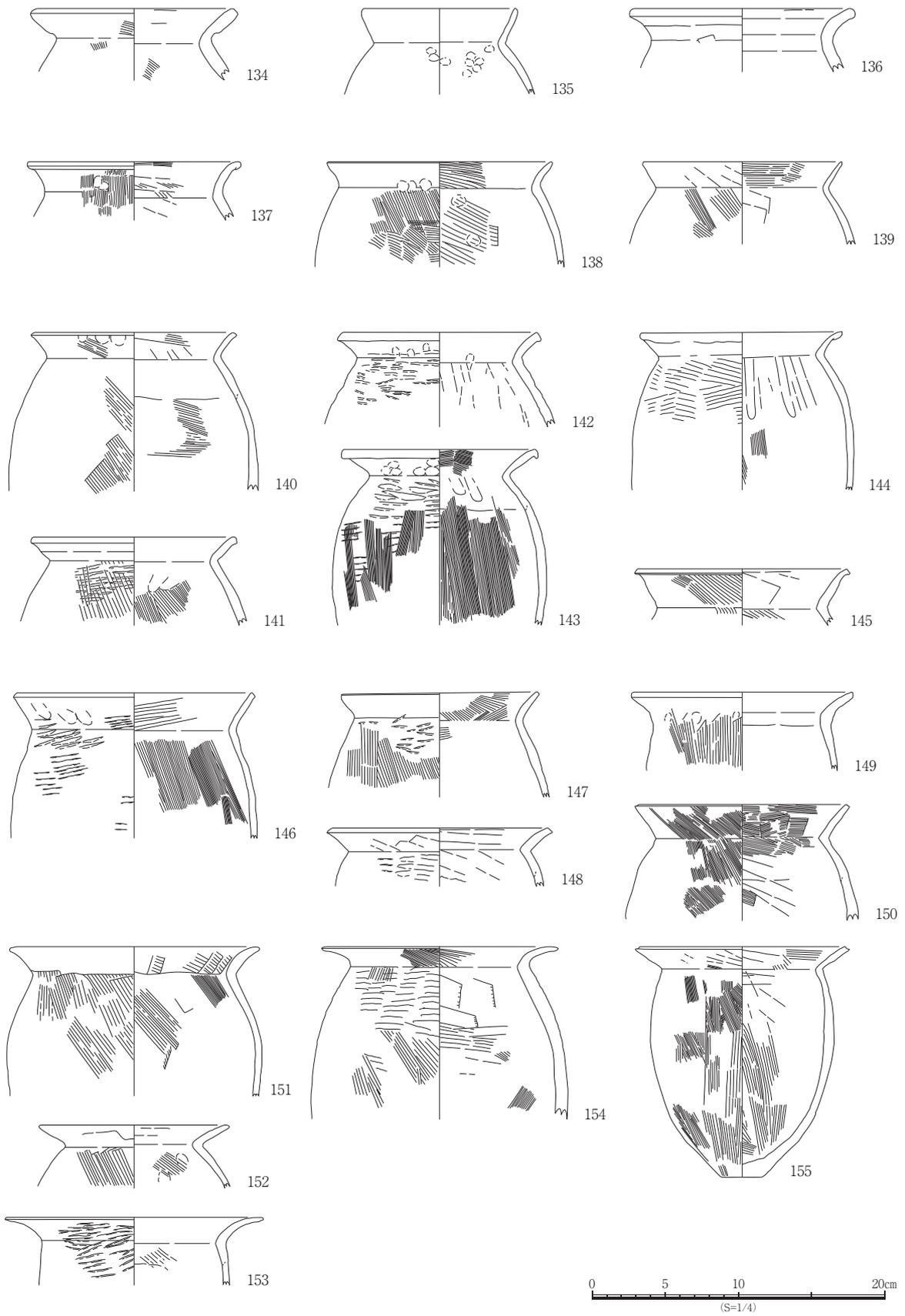


図59 I W区土器溜まり遺物実測図3

1. I区

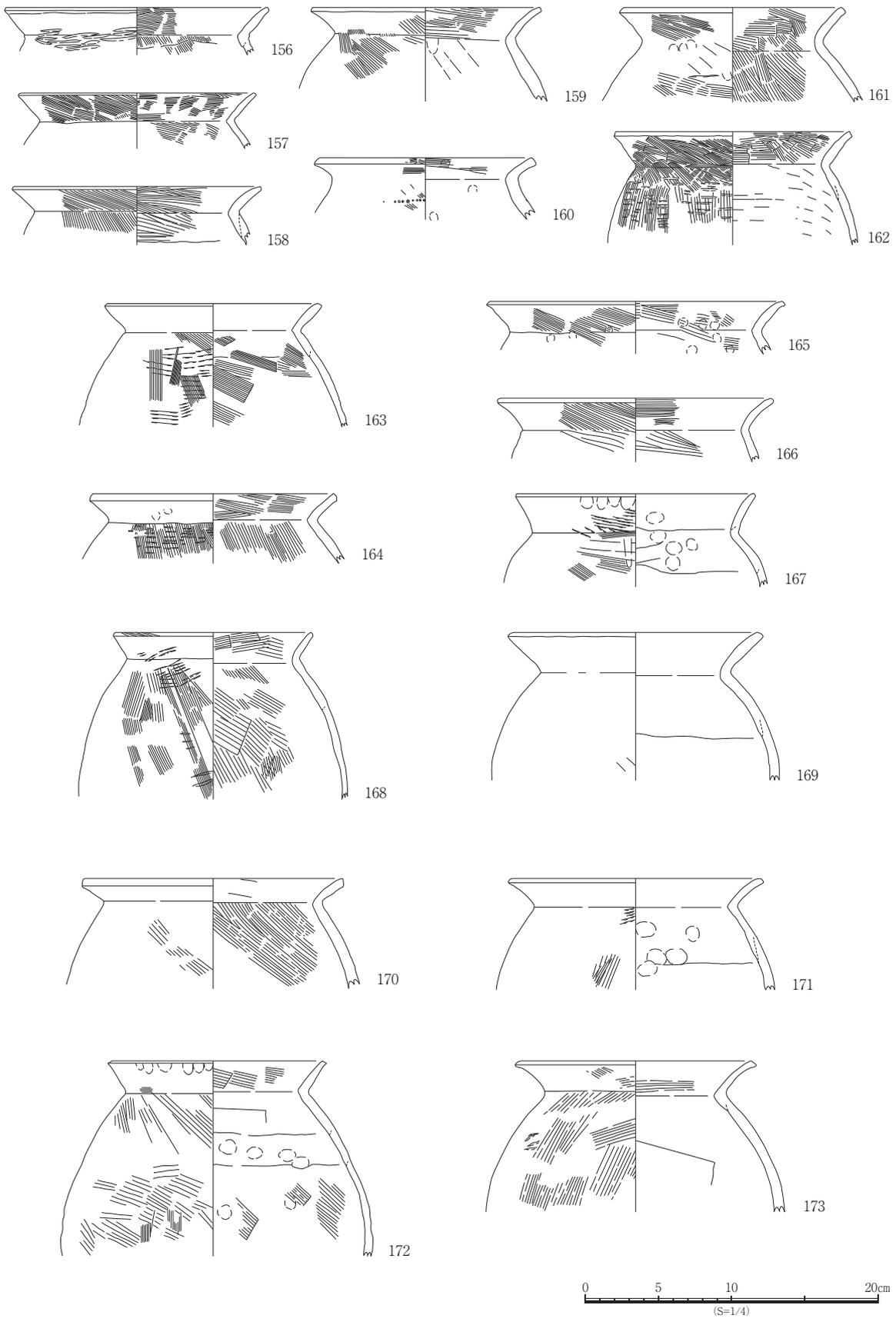


図60 I W区土器溜まり遺物実測図4

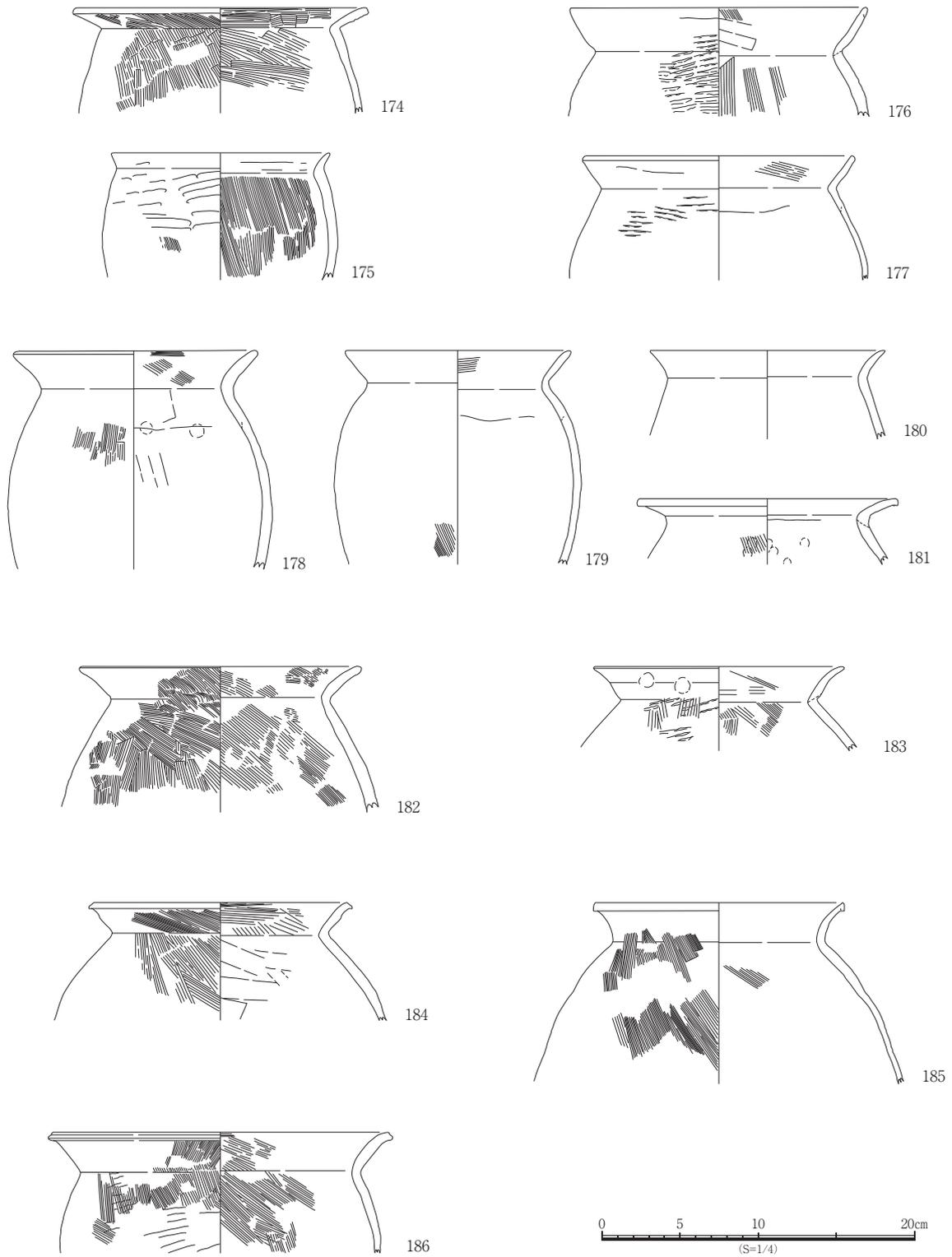


図61 I W区土器溜まり遺物実測図5



図62 I W区土器溜まり遺物実測図6



図63 I W区土器溜まり遺物実測図7

1. I区



図64 I W区土器溜まり遺物実測図8

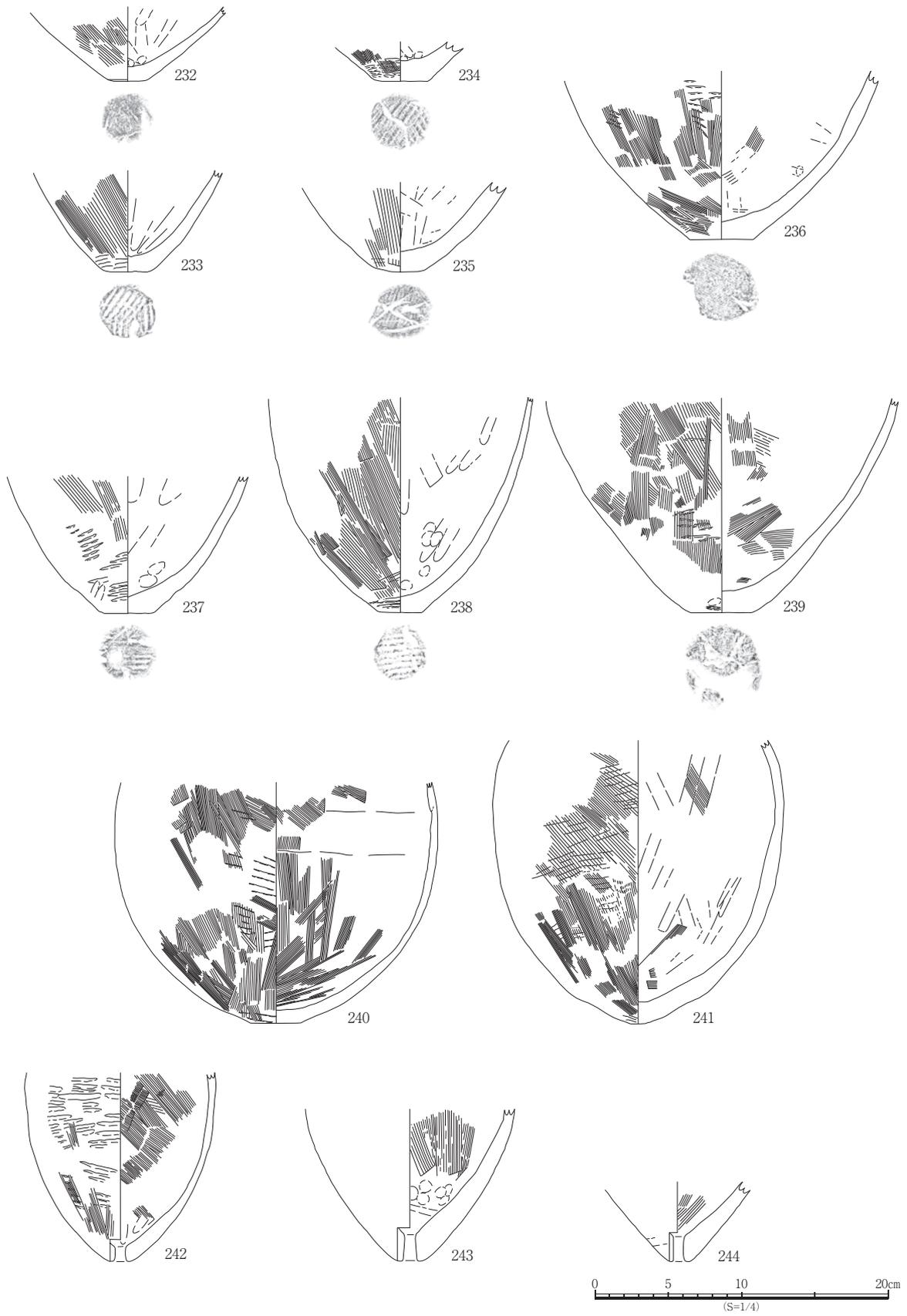


図65 I W区土器溜まり遺物実測図9

1. I区

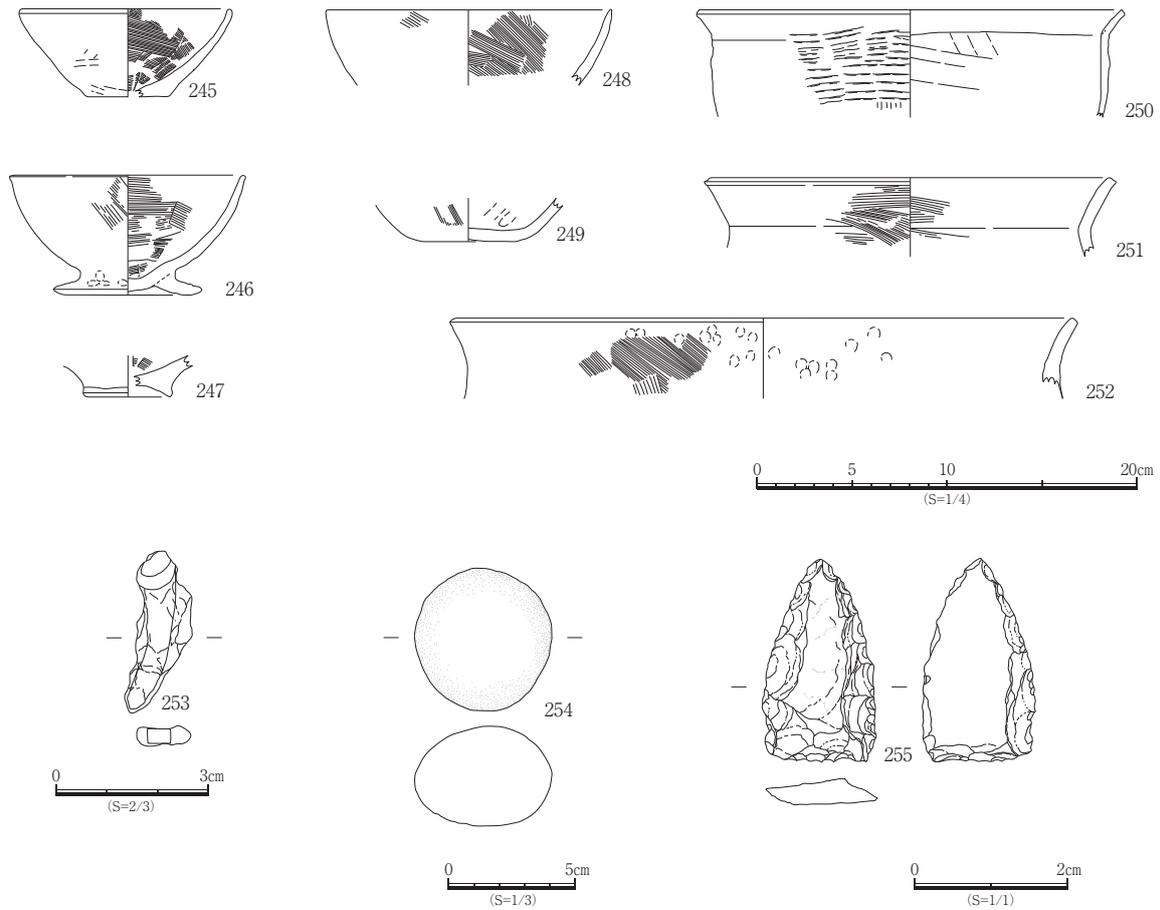


図66 I W区土器溜まり遺物実測図10

② I E区下面

掘立柱建物

SB13 (図67)

A III-10-12・13・17・18 グリッドにかけて検出した桁行3間×梁行2間で南北棟建物跡である。検出面はⅧ層上面の下層で検出した。棟方向はN-30°-Wを示す。規模は桁行5.34m, 梁行3.72mを測り, 柱間寸法は桁行側が1.60~1.81m, 梁行側が1.68~1.99mを測る。床面積は19.86㎡である。東側の側柱P8・9間の柱穴は未検出だが, 総柱の可能性も考えられる。柱穴は直径0.19~0.30mを測る円形であり, 深さは0.06~0.20mを測り, 埋土は褐

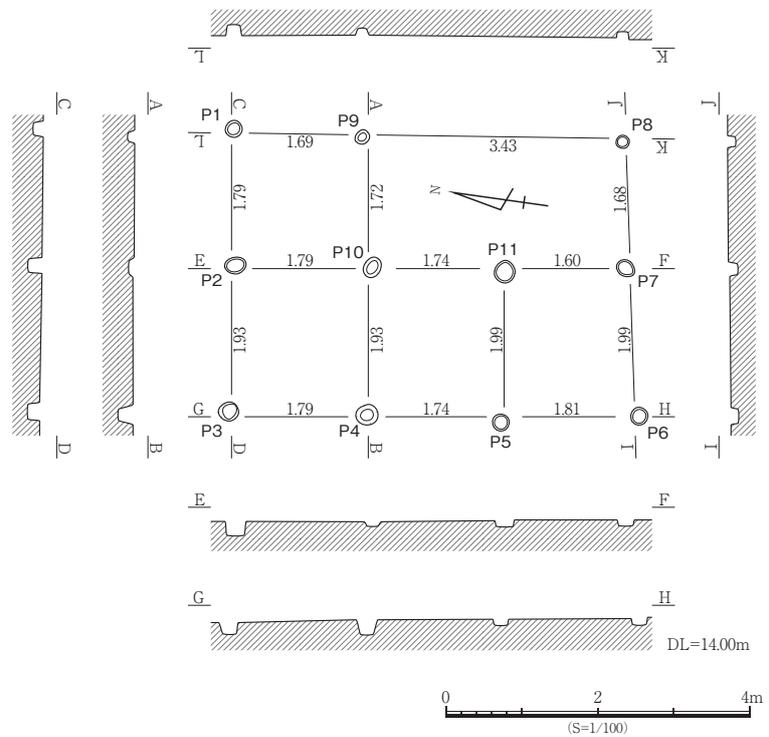


図67 I E区SB13遺構図



図68 IE区下面遺構配置図

1. I 区

色シルトが主体であり、Ⅲ層と同じ土質である。出土遺物は極めて少なく、P4・7・8・11の埋土中から土師質土器片が出土した。中世の掘立柱建物跡である。

ピット

P137 (図69)

BⅢ-6-4グリッドで検出した長径0.64m、短径0.50m、深さ0.29mを測る楕円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは図示した土師器杯(256)と黒色土器碗(257)が出土した。

P146・158 (図69)

P146・158はBⅢ-6-7グリッドで検出した。P146は長径0.31m、短径0.32m、深さ0.16mを測る円形のピットである。P158に切られる。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、埋土中からは弥生土器の破片が出土した。P158は長径0.56m、短径0.37m、深さ0.08mを測る楕円形のピットである。P146を切る。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、埋土中からは図示した土師器杯(258)、杯脚部(259)が出土した。

P172 (図69)

BⅢ-6-4グリッドで検出した長径0.52m、短径0.47m、深さ0.32mを測る円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトで、柱痕部分はやや粘性がある。柱痕径は0.22mを測り、柱痕の深さは0.24mを測る。埋土中から内外面とも黒色処理された楠葉型の黒色土器B類碗(260)の破片が出土した。口縁部内面に1条の沈線が施され、内面はヘラミガキが認められる。他に須恵器碗(261)が出土した。回転ナデ調整が施され、口縁端部は外方に尖り気味に仕上げる。他に土師器細片が10点出土した。

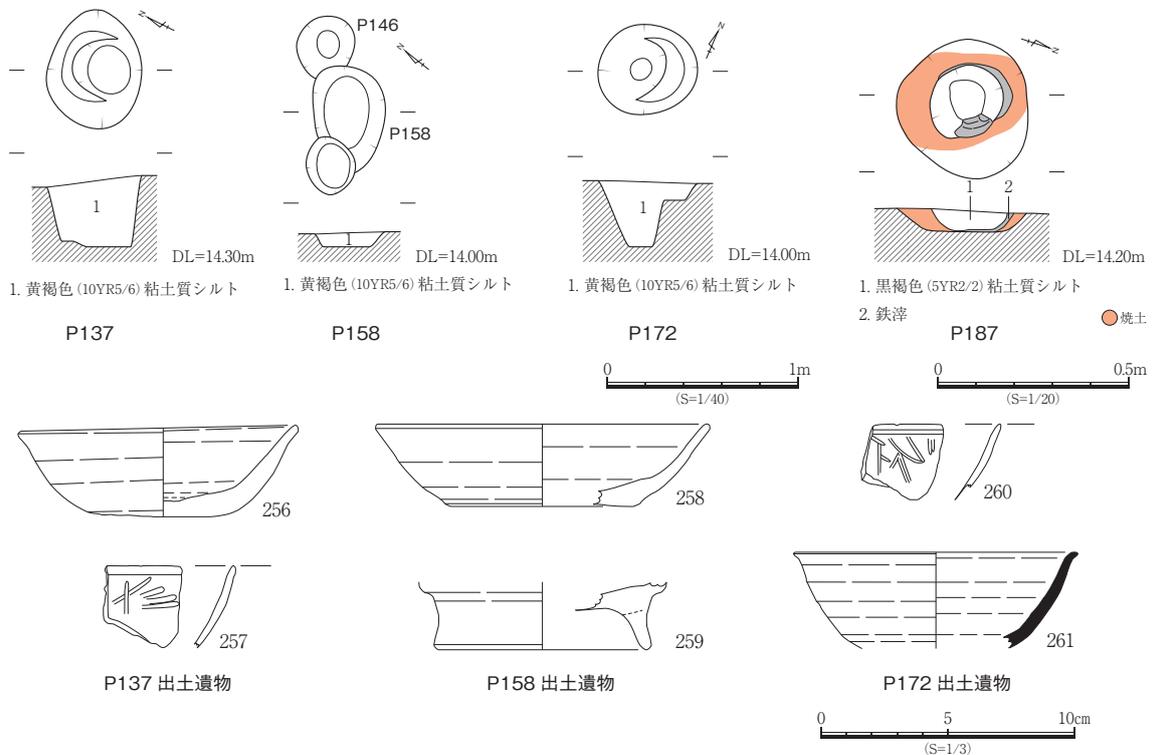


図69 I E区P137・158・172・187遺構図・遺物実測図

P187 (図69)

BⅢ-6-5グリッドで検出した鍛冶炉と思われる円形のピットである。直径0.30～0.34m、深さ0.05m前後を測る。検出面では輪状に焼土、内側に椀形滓が確認された。椀形滓内部に炭混じりの黒褐色粘土質シルトが溜まっていた。椀形滓の周りは焼土で、ピット壁面は被熱を受けるが底面には被熱痕は認められない。P187近く、BⅢ-6-2・3グリッド周辺で鉄滓が比較的多く出土している。

P191 (図70)

BⅢ-6-5グリッドで検出した長径0.40m、短径0.35m、深さ0.09mを測る楕円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトであり、断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは図示した土師器皿(262・263)の他に須恵器甕片、土師器細片が出土した。262・263ともに回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。263は胎土にチャートを含む。

P222 (図70)

BⅢ-6-3グリッドで検出した長径0.33m、短径0.22m、深さ0.23mを測る円形のピットである。埋土は黄褐色粘土質シルトで、断面形は逆台形状を呈する。埋土中からは図示した土師器杯(264・265)が出土した。264の内底部は凹む。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。

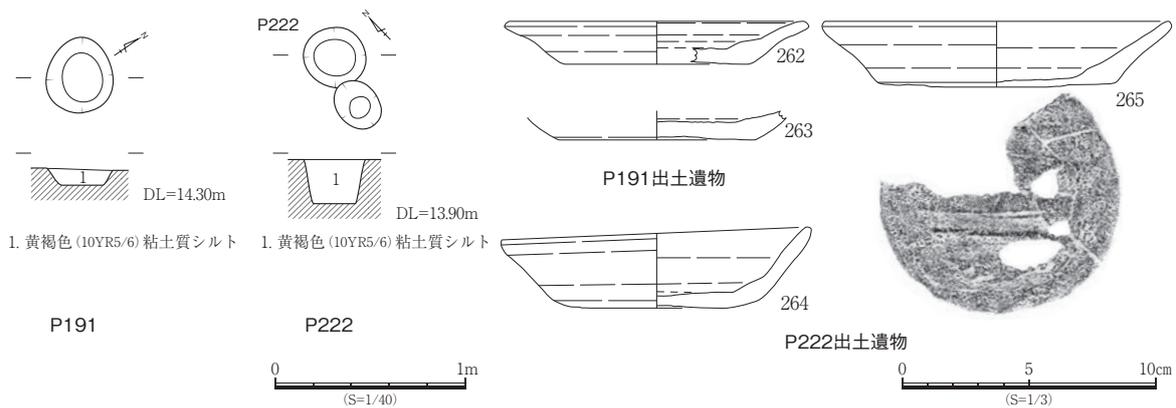


図70 I E区P191・222遺構図・遺物実測図

下面ピット出土遺物(図71 266～280)

その他のピットからは266～280の遺物が出土した。266～268は土師器皿で、回転ナデ調整、回転ヘラ切りである。269～272は土師器杯である。269の底部はやや円盤状を呈する。270～272は回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。271・272はタール痕が認められる。272の内底部は凹む。273は土師器甕で、丸みを持つ胴部から口縁部は短く直立する。内面胴部の境目は横方向のナデにより段が生じ、口唇部は丸く収める。胴部外面は指頭圧痕が顕著である。274も土師器甕の口縁部で、胎土にチャートを含む。口縁端部は上下に拡張し、外面に面を成す。ナデ調整が施される。275は土師器羽釜で、口縁直下に鏝が付く。鏝端部はナデにより面を成す。口縁端部は内傾する面を成す。胎土に長石、雲母片を含む。276は内黒の黒色土器A類椀である。断面三角形の高台から内湾して立ち上がる。277～279は須恵器で、277は高台が付く杯である。断面四角形の短い高台は沈線状に凹む。回転ナデ調整が施される。278は蓋で、天井部は欠損、端部内面は沈線状に凹む。279は甕の底部片である。丸底を呈し、外面はタタキ目と粗い単位の手掘り状工具による調整が認められる。内面はナデと指頭圧痕が顕著である。280は土錘である。

1. I区

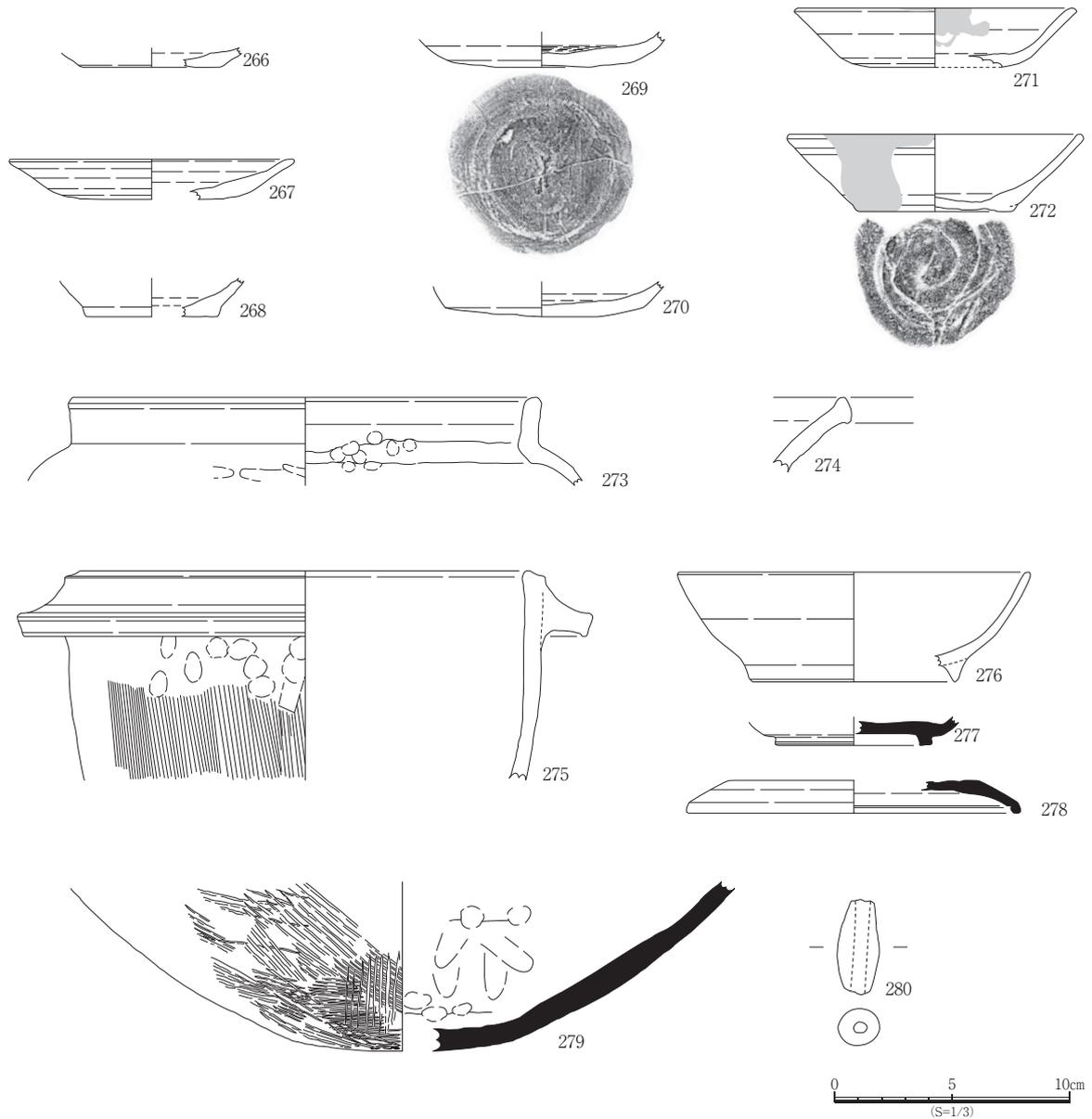


図71 I E区下面ピット遺物実測図

土坑

SK14 (図72)

BⅢ-6-4グリッドで検出した土坑である。平面プランは溝状で、東端はP142に切られる。長径1.23m、短径0.53m、深さ0.03mを測る。長軸方向はN-84°-Wを示す。断面形は皿状を呈し、埋土は褐色粘土質シルトである。埋土中から図示した土師器椀(281)、黒色土器椀(282)の他、土師器供膳具細片30点、土師器煮炊具細片11点が出土した。281は足高の高台が付く。体部は直線的に外方に立ち上がる。282は内黒の黒色土器A類椀である。口縁部はヨコナデにより端部を尖り気味に仕上げる。内面に沈線が施される。内面は横方向を基調とする密なヘラミガキが施される。

SK17 (図72)

BⅢ-6-3グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長径1.26m、短径1.13m、深さ0.07mを測る。土坑の長軸方向はN-63°-Eを示す。断面形は浅い逆台形状を呈す。

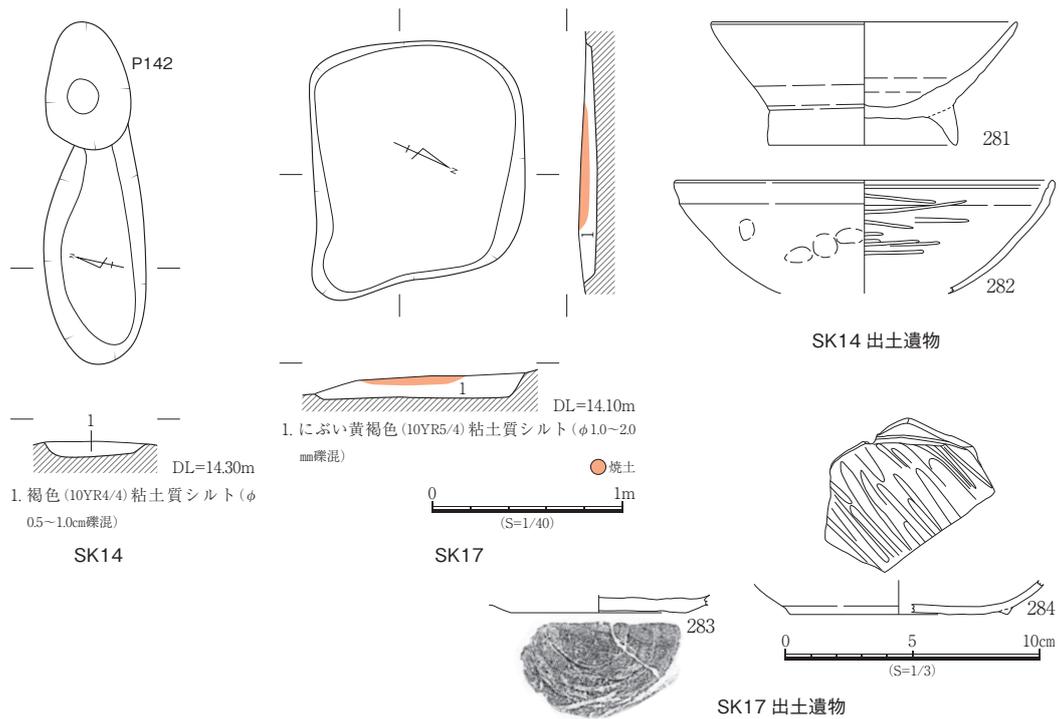


図72 I E区SK14・17遺構図・遺物実測図

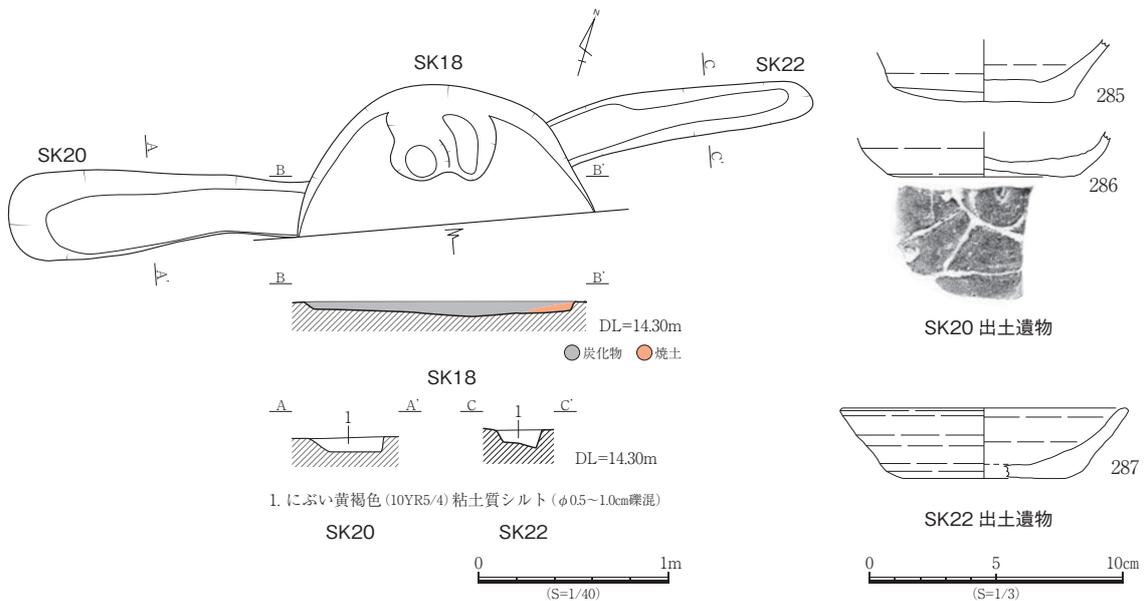


図73 I E区SK18・20・22遺構図・遺物実測図

埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトであり、土坑中央上部に焼土が認められた。埋土中からは図示した土師器杯(283), 黒色土器碗(284)の他, 土師器細片26点, 土師器煮炊具1点が出土した。283は回転ナゲ調整, 底部切離しは, 回転ヘラ切りによる。284は内黒の黒色土器A類碗である。僅かに断面三角形の低い高台が付く。内面見込みは密な平行ヘラミガキが施される。

SK18・20・22(図73)

SK18はBⅢ-6-4グリッドで検出した土坑である。平面プランは半円形を呈し, 南側は未検出で

1. I 区

あるが円形を呈するものと思われる。溝状土坑のSK20・22を切る。直径1.57m, 深さ0.40mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し, 埋土は炭化物であり, 土坑の東側に焼土が認められた。埋土中からは土師器の細片が14点出土した。SK20・22はBⅢ-6-5・9グリッドで検出した土坑である。平面プランは溝状を呈しSK18に切られる。SK20・22は同じ溝の可能性はあるが, 別番号を付した。SK20は長径1.54m以上, 短径0.47m, 深さ0.07mを測る。断面形は浅い逆台形状を呈し, 埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトであり, 埋土中からは図示した土師器杯(285・286)の他に土師器供膳具の細片が140点, 土師器煮炊具の細片が1点, 黒色土器(A類)細片が1点出土した。SK22も同じく溝状を呈し, 長径1.35m以上, 短径0.29m, 深さ0.04mを測る。遺構埋土はSK20と同じにぶい黄褐色粘土質シルトであり, 埋土中からは図示した土師器杯(287)の他に土師器供膳具の細片が29点出土した。

(3) 包含層出土遺物

① I W 区

I 層出土遺物(図74 288・289)

288は陶器の片口鉢であり, 外面胴部中位から内面全体に白土化粧が施される。外面に「伊野町④小野醬油商」, 見込みに「山羽」の屋号が入る。289は統制陶器の丸形皿である。内面に山と樹木が呉須により描かれる。高台内には「ト5」の統制番号が付けられている。いずれも近代の遺物である。

II 層出土遺物(図75 290～302)

290は土師質土器皿の底部片である。ロクロ成形, 底部は回転糸切り痕が認められる。291～294は肥前系陶器皿である。291は鉄釉が施される。292は断面三角形の低い高台が付く。透明感のある灰釉が薄く施され貫入が認められる。内面は蛇ノ目釉剥ぎが施される。293は唐津の端反皿で, 口縁

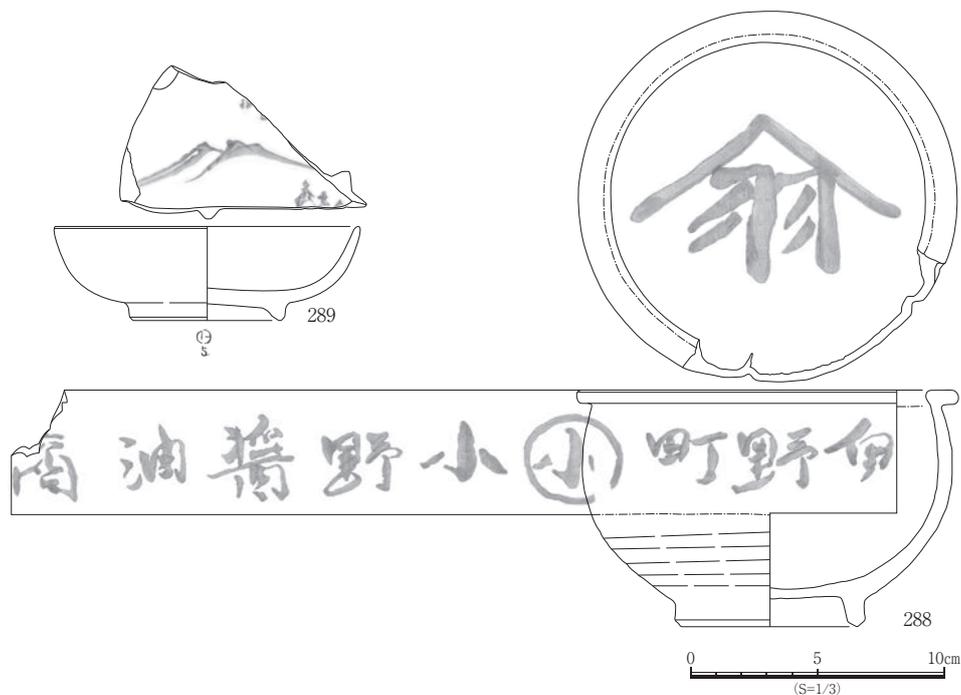


図74 I W 区 I 層遺物実測図

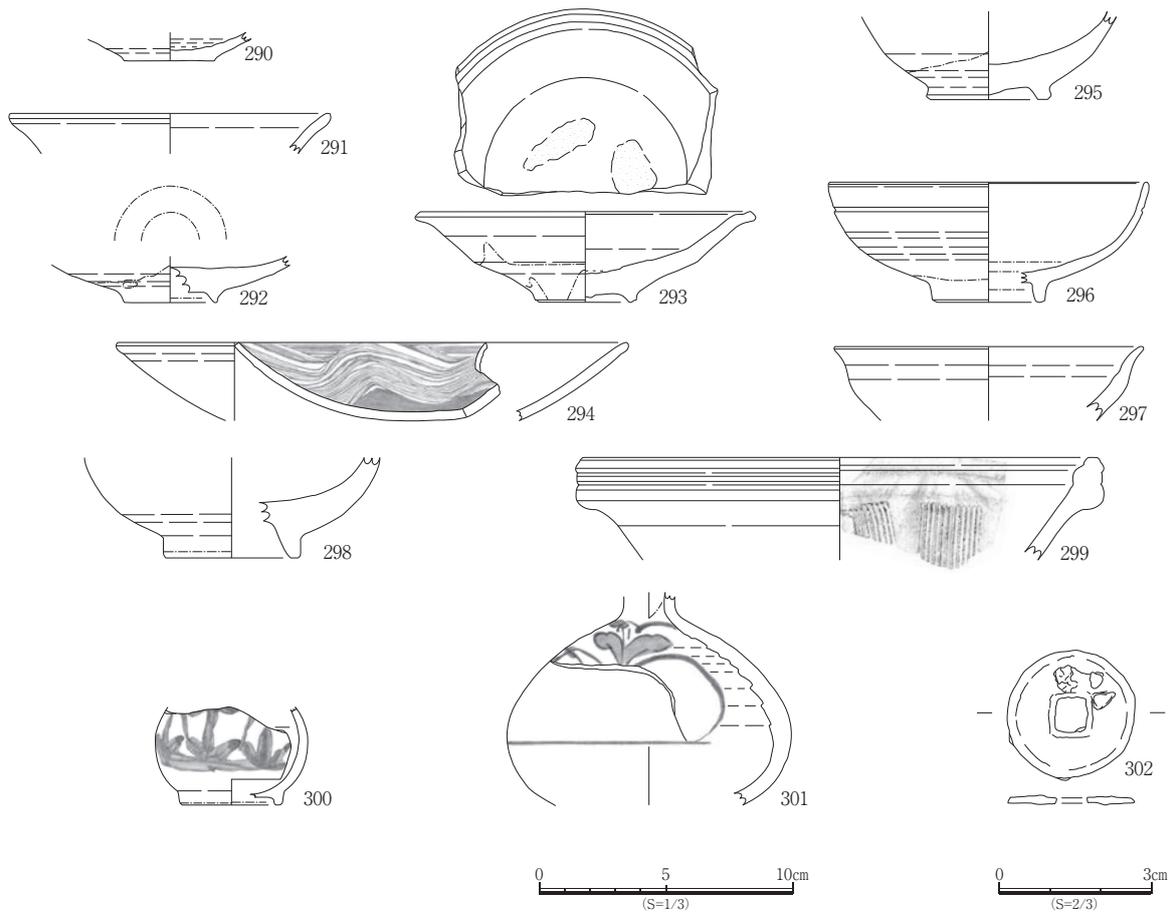


図75 I W区Ⅱ層遺物実測図

内面は沈線状に凹む。見込みには砂目が認められる。高台内は兜巾状に削り出す。294は口径の大きい直縁皿である。鉄釉、白土化粧により波状文が施される。295～298は陶器碗である。295は唐津の灰釉が施された碗である。高台部分は露胎で、高台内は兜巾状に削り出す。296は内面見込みを蛇ノ目釉剥ぎ、外面高台脇まで施釉される。297は唐津の鉄釉が施された碗である。口縁部は外反する。298は尾戸焼の丸形碗である。高台脇より高台内を深く削り込む。灰釉が全面施釉され、畳付の釉は削り取る。細かな貫入が認められる。299は関西系(丹波)の播鉢である。内面に11条一単位の条線が施される。口縁部内面は沈線状に凹む。300は肥前系の鶴首瓶である。外面に草花文が施され、畳付は釉を削り取る。301は肥前系の瓶であり、外面に草花文が施される。302は鉄銭であり直径2.5cm、穿径0.6cm、重量は3.0gを測る。Ⅱ層で出土した肥前磁器は、時期的には17～18世紀代に位置づけられる。

Ⅲ層出土遺物(図76 303～314)

303・304は唐津の灰釉が施された陶器皿である。303の口縁部内面は凹み、端部は上方に尖る。釉は全体的に薄く施釉される。304は体部中位から口縁部にかけて外反し、内面に段が生じる。見込みに砂目が残る。305は肥前内野山窯産の銅緑釉が施された皿である。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、三日月状の目跡が残る。306は唐津の陶器碗であり、全体的に褐色釉が施され、口縁部外面及び体部内面の一部に鉄釉により文様が描かれる。307は陶器大皿であり、断面逆台形の高台が付く。高台部

1. I 区

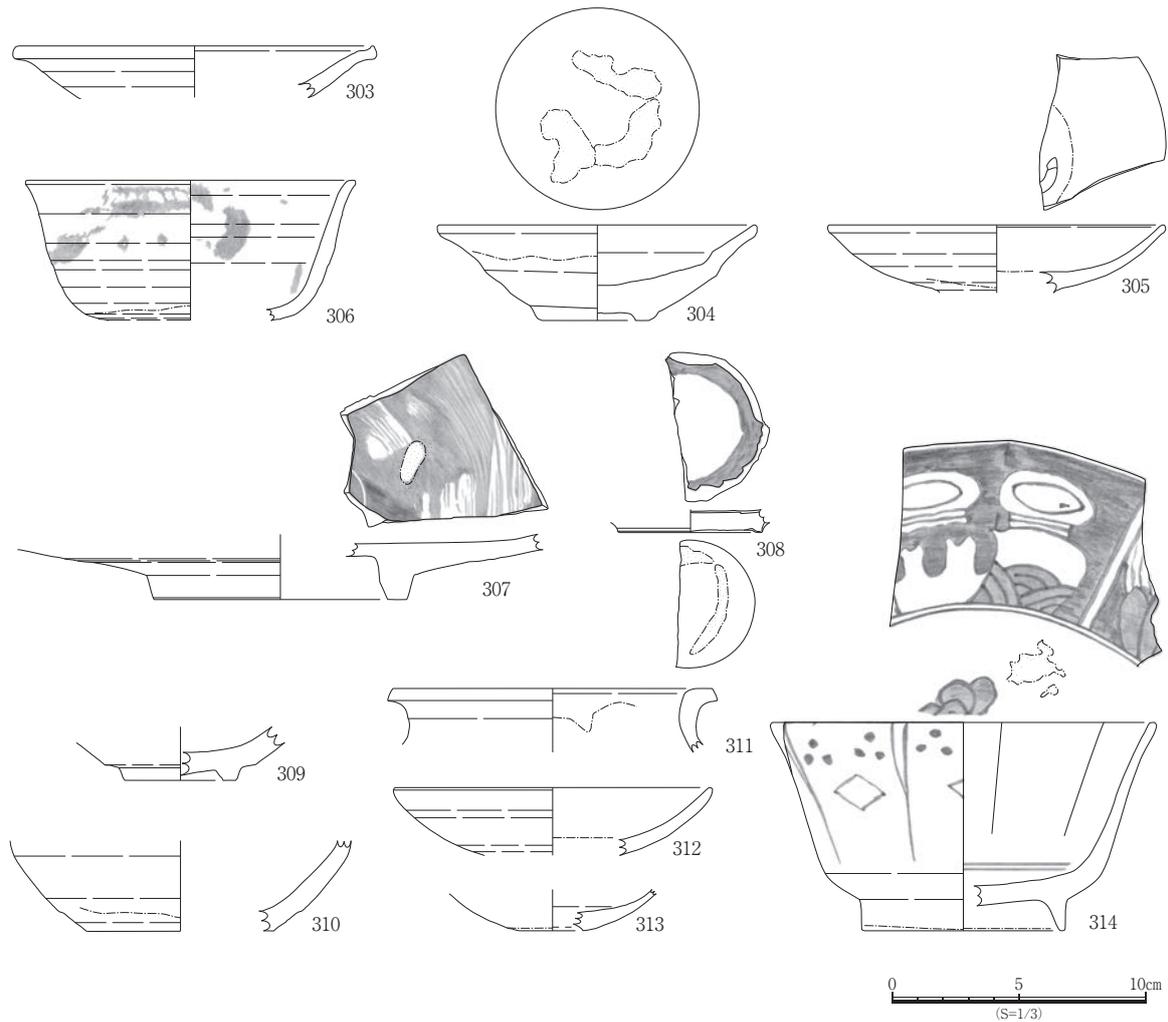


図76 I W区Ⅲ層遺物実測図

分は脇よりも内面が深く削り込まれる。内面は全体的に透明釉が施され、白土化粧を掛け、ハケ目文様を描く。見込み中央には銅緑釉が施され、外面は露胎である。308は瀬戸美濃系の灰釉が施された皿である。低い高台が付き、内面見込みは青い釉調の釉薬が輪状に施される。外底部は砂目が認められる。309・310は瀬戸美濃系の天目茶碗の底部片である。309は断面逆台形の低い高台が付く。310の高台部は欠損する。内面全体及び外面体部下半まで鉄釉が施される。311は陶器壺である。口縁部は水平に折り曲げ、端部は面を成す。外面、及び口縁内面の一部まで褐色釉が施される。312・313は白磁皿である。312は肥前系の白磁皿である。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎであり、全体的に透明釉が薄く施され、一部ピンホールが認められる。313の外底部はクリ底である。全体的に透明釉が施され細かな貫入が認められる。314は肥前系磁器の角鉢である。外面三叉、菱形文が施される。内面も濃い呉須の釉調で文様が描かれる。これらのⅢ層出土遺物の時期は17～18世紀代が中心である。

V層出土遺物(図77 315～319)

315は土師質土器皿である。ロクロ成形、底部切離しは回転糸切りによる。316は瀬戸美濃系の灰

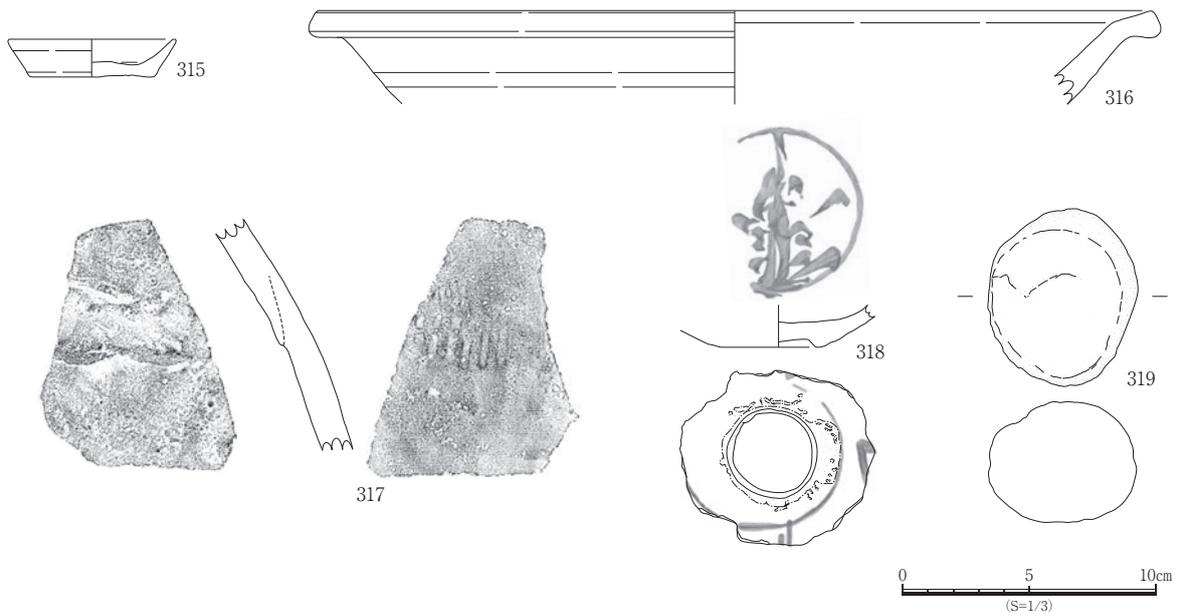


図77 I W区V層遺物実測図

釉陶器折縁大皿の口縁部片である。口縁端部は外側に折り返し、端部は面を成す。317は常滑焼の甕胴部片である。外面に自然釉が掛かり、格子目のスタンプ文が認められる。318は漳州窯系の青花皿である。クリ底で周縁部に砂目が認められる。胎土は陶質で、内面見込みには草花風の文様が施される。319は投弾と考えられる石である。石質は砂岩であり、全長7.1cm、全幅5.9cm、重量は270.1gを測る。これらのV層出土遺物の時期は15～16世紀代が中心である。

VI層出土遺物(図78 320～336)

320・321は土師器の皿であり、回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りによる。322・323は土師器碗であり、口縁部は外反する。回転ナデ調整が施される。324～332は須恵器である。324は杯の口縁部で、端部が僅かに外反する。325は杯の底部である。断面四角形の高台が付く。326は蓋である。天井部の一部は欠損する。327は瓶の口縁部である。端部は上方に拡張し、ナデ調整によって仕上げる。328は壺の頸部片である。頸部下半の一部にタタキ目と刻み目が残る。329・330は壺の底部片である。「ハ」の字に開く高台が付く。329は粘土接合部に隙間が生じ、底部の一部が膨れる。331は甕の胴部片である。外面に平行タタキ目、内面は工具の調整痕が横方向に連続して認められる。332は甕の底部片である。外面胴部下半にタタキ目が認められる。内面底部に粘土帯の接合痕が認められる。333は板状鉄製品である。334・335は鉄滓である。334は重量21.1g、335は重量93.6gを測る。336は管状土錘である。これらのVI層出土遺物の時期は8世紀後半～11世紀代が中心である。

VII層出土遺物(図79 337～346)

337～344は弥生土器の甕である。337の口縁部は緩やかに外反する。胴部外面の一部にタタキ目とハケ調整、内面はヘラ状工具による横方向のナデ調整が施される。338の口縁部は「く」の字に外反し、端部は尖り気味に仕上げる。外面胴部と口縁部の一部にタタキ目が残る。339の口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。外面胴部及び口縁部に横方向を基調とするハケ調整が施される。340の口縁部は、胴部

1. I 区

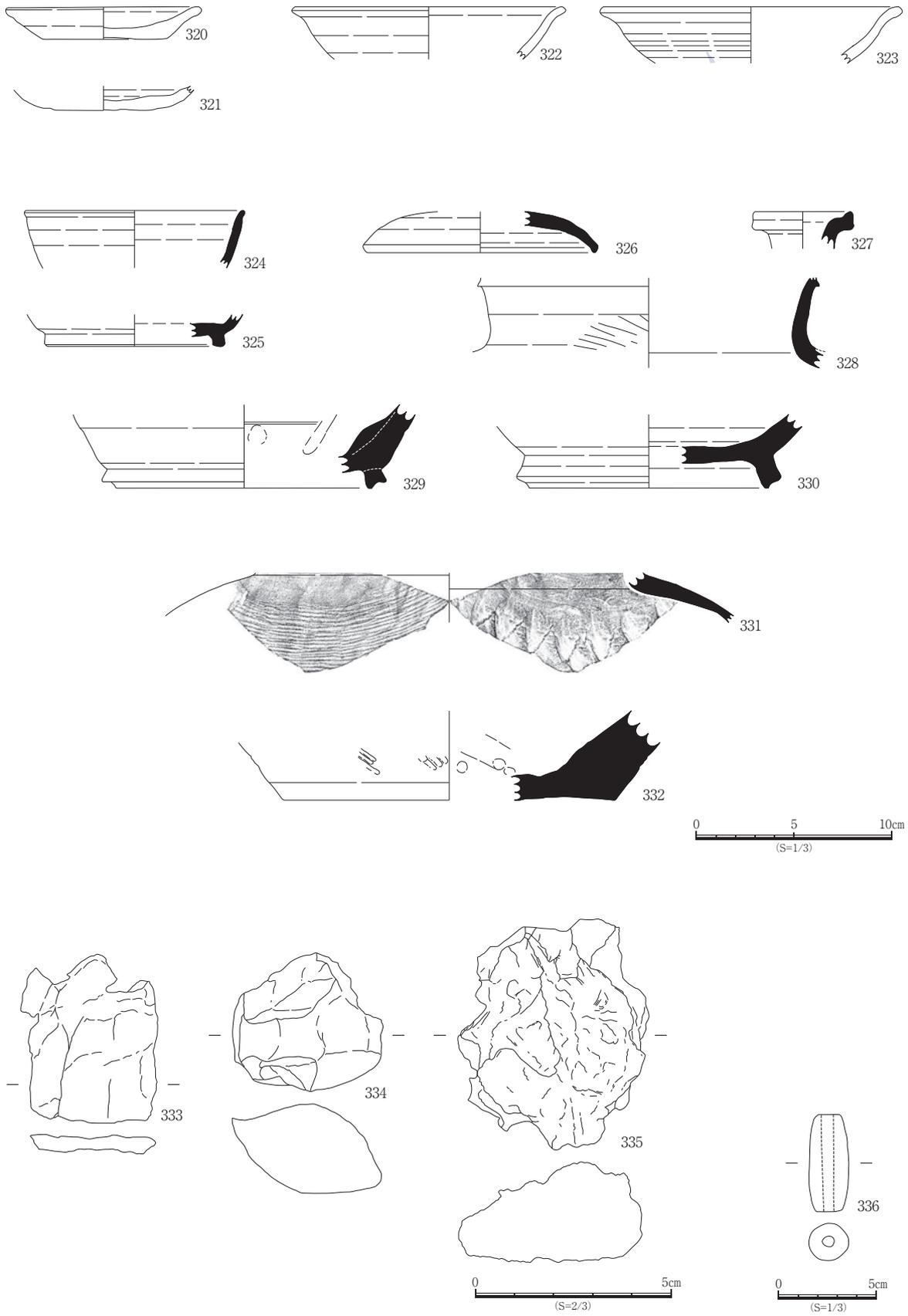


图78 I W区VI层遗物实测图

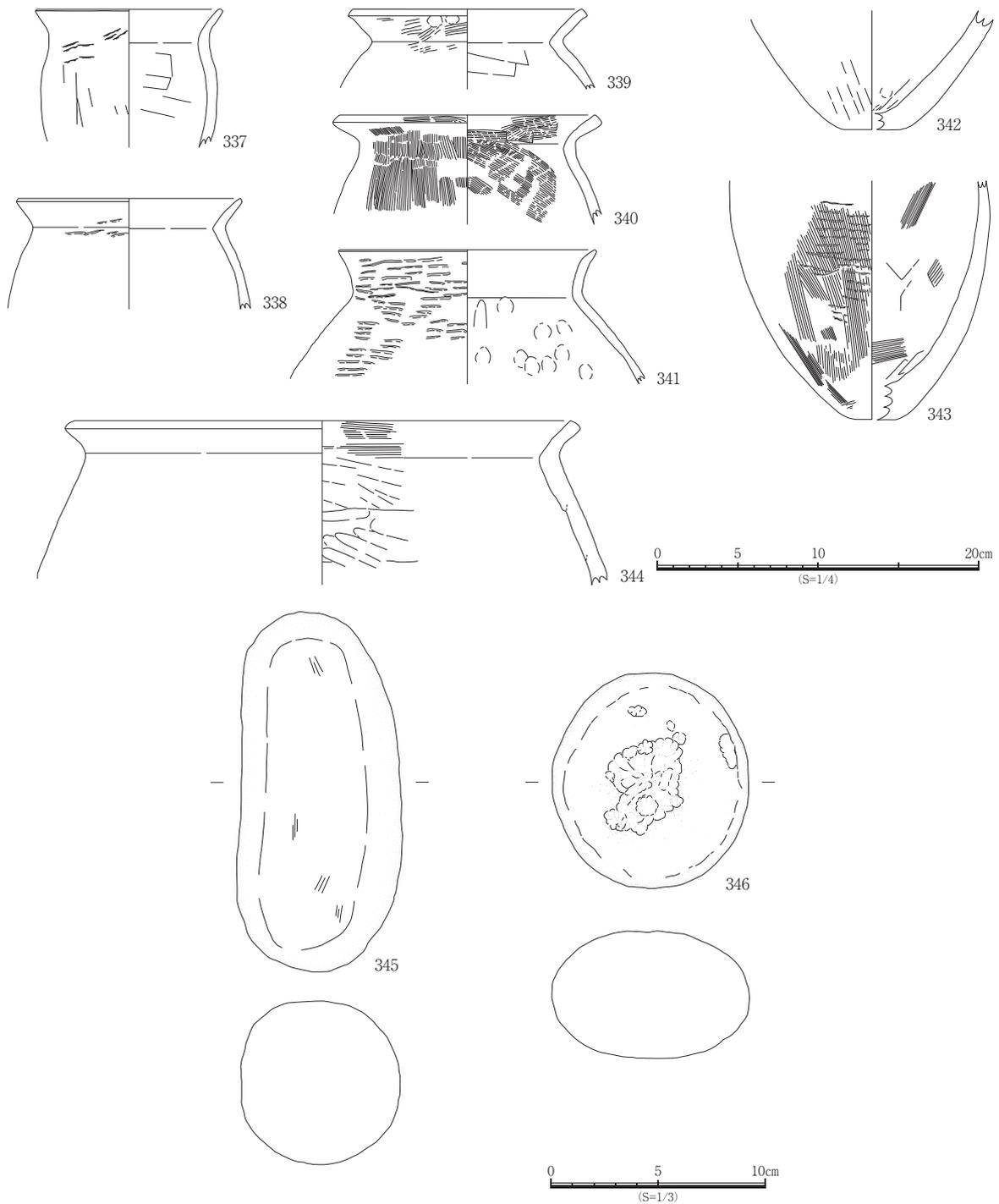


図79 I W区Ⅶ層遺物実測図

からやや間延びしながら外反し、端部は面を成す。外面は縦方向のハケ調整、内面は斜状のハケ調整が施される。341の口縁部は上方に延び端部は外反する。外面は胴部から口縁部までタタキ目、内面はナデ調整が施される。342・343は底部片で、僅かに平底を残す。342はナデ調整、343はタタキ成形の後、縦方向のハケ調整が施される。344は大型の甕である。内面の粘土帯の接合痕が顕著で、全体的にナデ調整が施される。口縁端部は平らな面を成す。345は砂岩製の砥石で、一側面に使用痕が認められる。346は叩石で、中央部に敲打による凹みが認められる。Ⅶ層出土遺物は弥生時代後期後半から終末に位置付けられる。

1. I 区

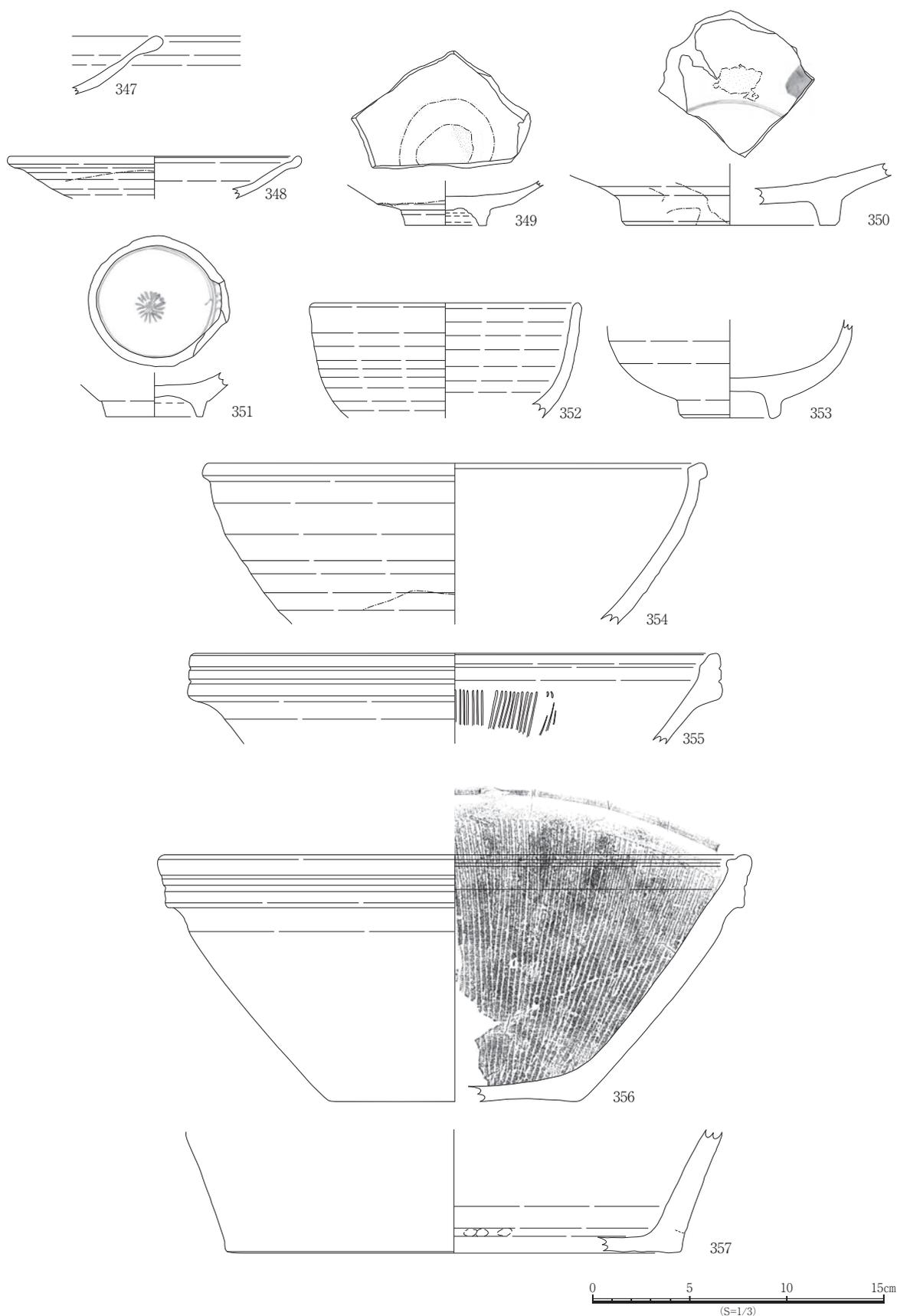


图80 I E区II層遺物实测图1

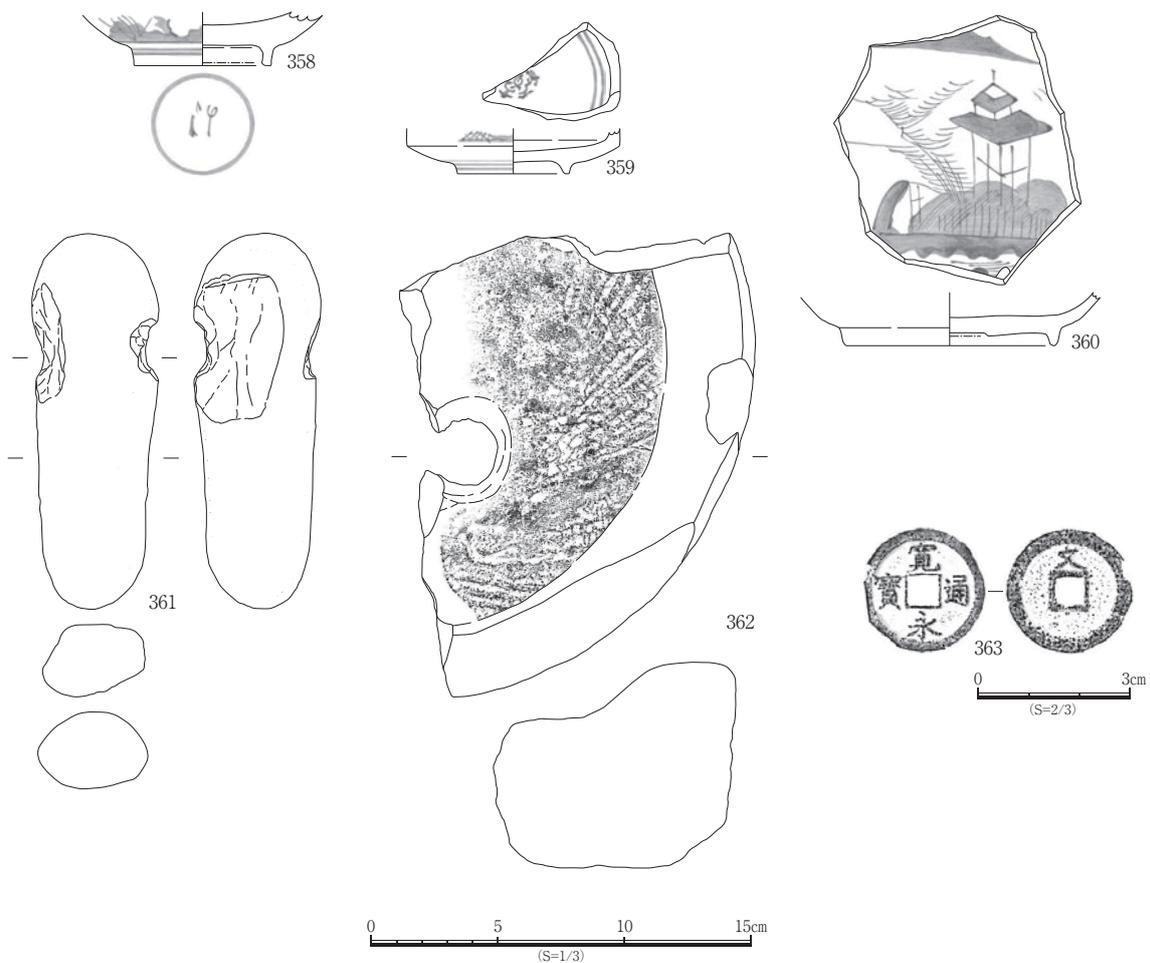


図81 IE区Ⅱ層遺物実測図2

② IE区

Ⅱ層出土遺物(図80・81 347～363)

347は土師質土器焙烙鍋の口縁部片である。口縁部はやや肥厚し、ヨコナデ調整が施される。体部は外面に指頭圧痕が残る。348～350は唐津の陶器皿である。348は口縁部片であり、口縁部外面直下まで灰釉が掛け流しにより薄く施釉される。349は底部片であり、高台は削り出し高台で、高台内は兜巾状に仕上げる。内面は蛇ノ目釉剥ぎが施され砂目が認められる。350は法量の大きい皿の底部片であり、断面四角形のしっかりした高台を持つ。内面は白土化粧によるハケ塗りが施され、見込みに鉄釉で描かれた文様の一部が認められる。351～353は陶器碗である。351は白土化粧による象嵌が施された碗である。断面逆台形状の高台が付き、全体に鉄釉が施される。内面見込みに菊花文、外面にはこよみ手文が施される。352・353は尾戸焼の陶器碗である。全体的に黄色釉が施され、細かな貫入が認められる。353は高台から丸みを持って立ち上がる。354は陶器鉢であり、口縁部は外側に折り曲げ、断面形は方形である。内面は白土化粧によるハケ塗りが施され、外面体部下半は露胎である。355・356は関西系播鉢である。355は内面に10条一単位の深い条線が施される。356の口縁端部は丸みを持ち、内面は沈線状に凹む。内面は9条一単位を条線を口縁部直下まで施し、口縁部内面のヨコナデ調整により擦り消す。胎土に1.0～4.0mmの白色粒を含む。357は陶器甕の底部片であり、全体的

に鉄釉が施される。358～360は肥前系磁器である。358は碗であり、体部外面に草花文、高台脇に二重界線、高台内には界線とくずれた文字が薄い呉須により施される。359は筒形碗であり、外面は斜格子文、内面は五弁花文と二重界線が施される。360は皿で、見込みに山水楼阁文が施される。蛇ノ目凸形高台である。361は緑色片岩の石錘で両側面に抉りが入る。362は石臼である。363は寛永通宝であり、「文」の背文字が見られる。これらのⅡ層出土遺物の時期は17～18世紀代に位置付けられる。

Ⅲ層出土遺物(図82 364～370)

364は瀬戸美濃系の陶器皿で、全体的に灰釉が施され、口縁部は抉りが入り稜花風に仕上げる。365も瀬戸美濃系の天目茶碗で、口縁端部は口鏝釉が施される。366は備前焼播鉢である。内面に12条を基調とする条線が施され、ロクロ目が顕著である。367は青磁碗であり外面に蓮弁文が施される。368～371は青花である。368・369は皿であり、368はクリ底で外面に芭蕉葉文、内面にくずれた十字花文が施される。369は端反皿で、外面に唐草文、内面見込みに十字花文と二重界線が施される。370は碗であり外面唐草文、内面見込みはアラベスク文が施される。371は杯器形と思われる。口縁部内外面に観世水文帯が施される。これらのⅢ層出土遺物の時期は15～16世紀前半代に位置付けられる。

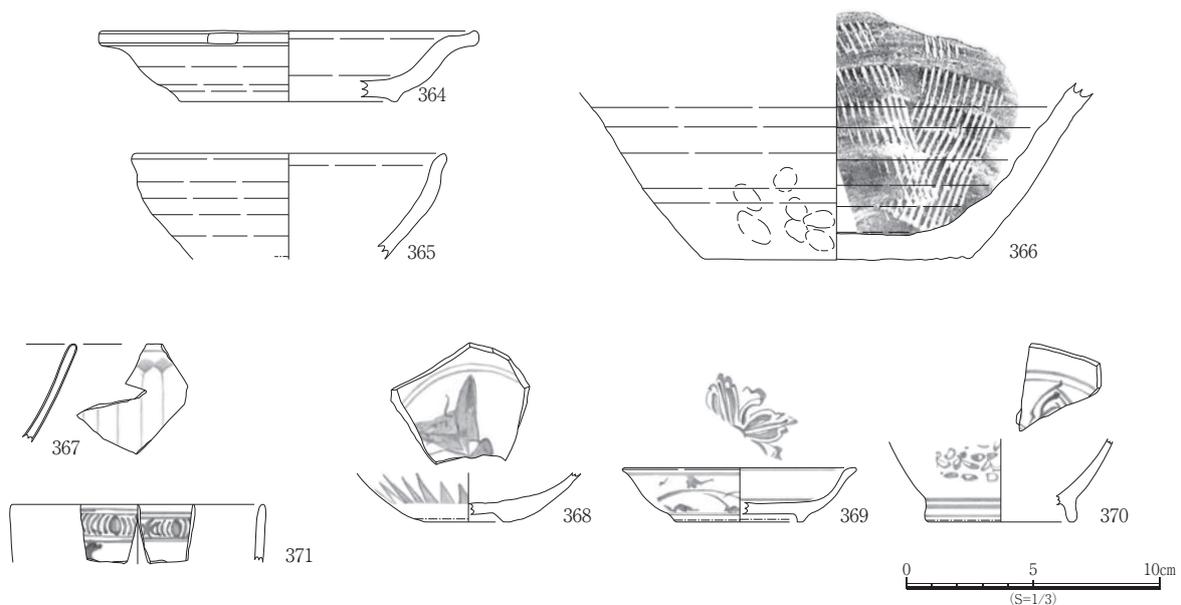


図82 I E区Ⅲ層遺物実測図

Ⅳ層出土遺物(図83・84 372～386)

372は土師器の杯である。回転ナデ調整、底部の切離しは回転ヘラ切りである。373は土師器碗の底部片である。足高の高台が「ハ」の字に開く。374～377は黒色土器碗である。374・375は断面三角形の高台が付く。外面はナデ調整、内面はヘラミガキが施される。376・377は低い高台が付く。377は底部中央が接地する。内面は平行に密なヘラミガキが施される。378は京都系の緑釉陶器碗の体部片である。内面体部中位に段を持ち、全体的に薄く緑釉が施される。379～383は土師器の甕である。379・380は「く」の字に外反する。379の口縁部は強いヨコナデにより端部が上方に向き尖り気味に仕上げる。胎土に雲母片を含む。380は外面に板状工具によるナデが施される。口縁部内面は横方向のハケ調整が施される。口縁部と胴部の接合部は指頭による押圧痕とナデ調整が顕著に認

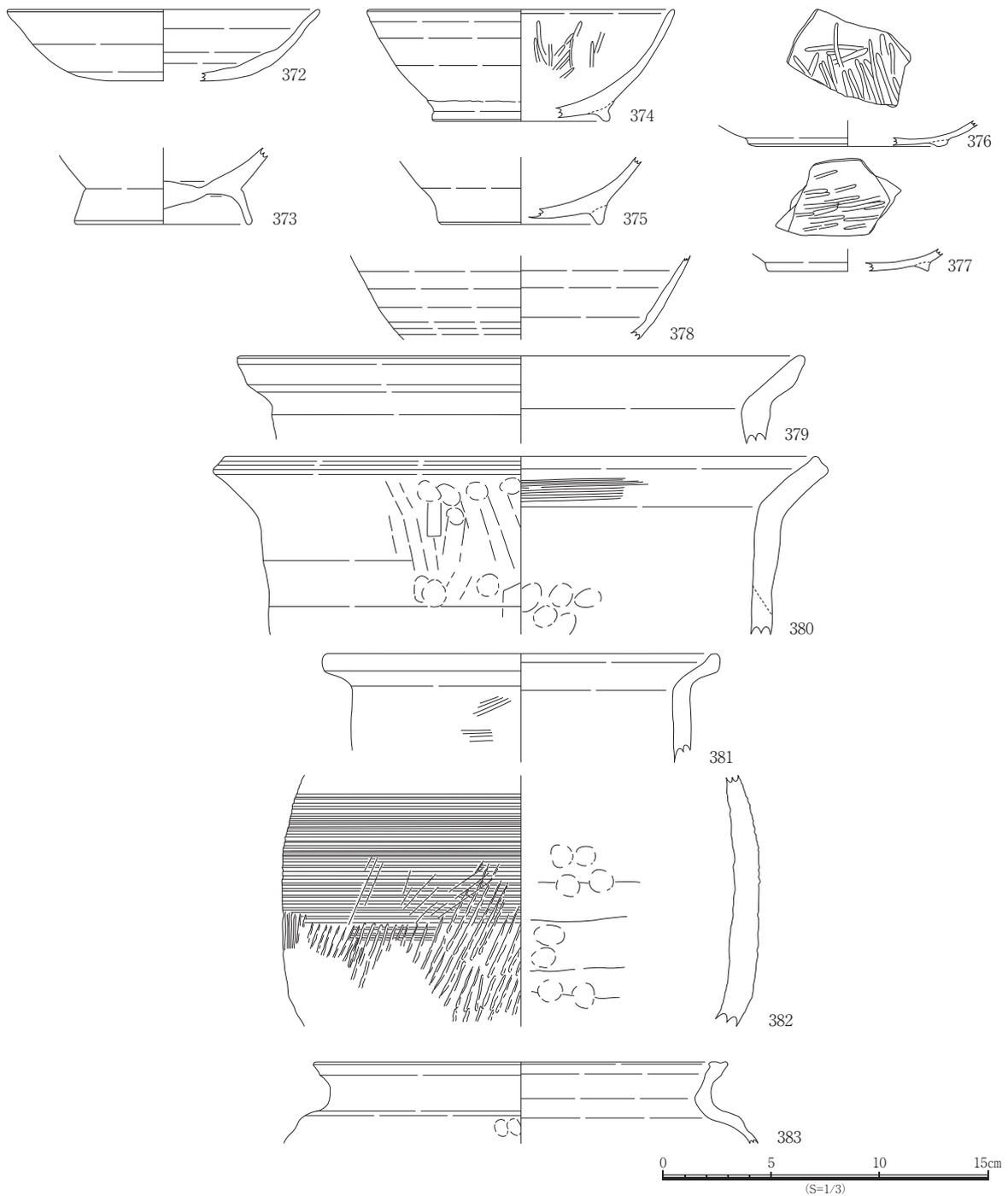


図83 I E区IV層遺物実測図1

められる。胎土に石英が含まれる。381の口縁部は外反し、端部を上方に拡張し外面に面を成す。口縁部はヨコナデ調整が施される。胴部外面の一部に横方向のハケ調整が認められる。382は甕胴部の上位にあたる部分である。外面にタタキ成形後の横方向のハケ調整が施される。381・382の胎土にはチャートが含まれており、在地産と考えられる。383は丸みを持つ胴部から口縁部は段を持ちながら外反する。口縁端部はヨコナデにより水平に引き出し面を成す。胴部外面は指頭による押圧痕が顕著である。色調は黒褐色を呈し、胎土には雲母片を含む。搬入品と考えられる。384・385は土

師器の羽釜である。384は口縁直下に鑿が付き、鑿の端部は尖り気味に仕上げ上向く。口縁部はヨコナデ調整が施され面を成す。胴部外面には指頭圧痕が認められる。385は口縁部を内側に引き出し尖り気味に仕上げる。口縁部は水平に付き、端部は面を成す。胴部外面は鑿接合部の下端にヘラ状工具による縦方向のナデが施される。撰津型の羽釜である。386は砥石であり仕上砥である。三側面に使用痕が認められる。これらのIV層出土遺物は9～11世紀前半代に位置付けられる。

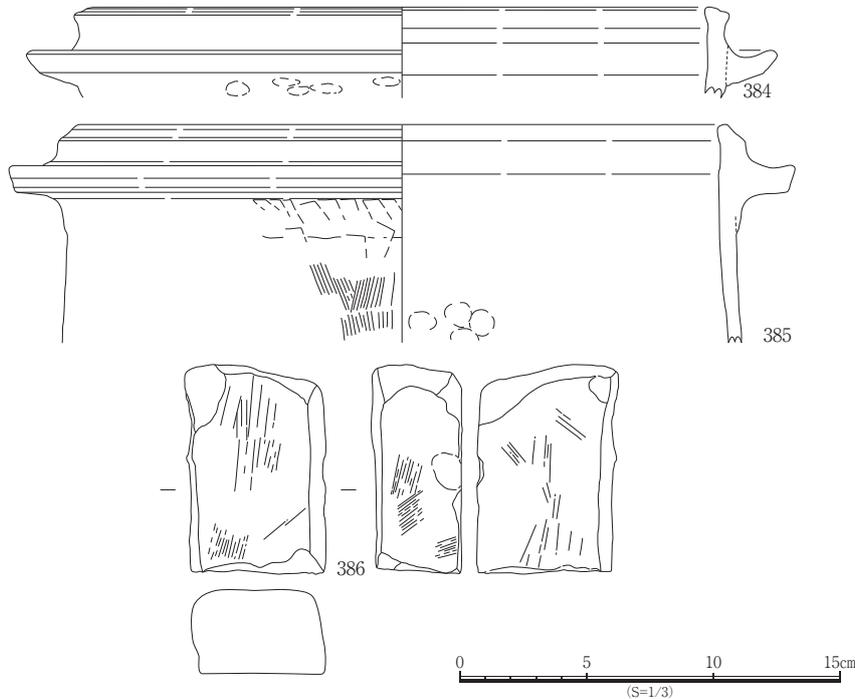


図84 I E区IV層遺物実測図2

VII層出土遺物(図85・86 387～412)

387～390は土師器供膳具である。387・388は杯であり、387は円盤状の薄い底部から立ち上がる。切離しは回転糸切りが施され、内面にロクロ目が残る。388の内底部は凹み、ベタ底から段を持って立ち上がる。底部切離しは回転ヘラ切りである。389・390は椀であり、389は円盤状の高台で、内底部は凹み、底部切離しは回転糸切りである。390は足高高台が付く。391は黒色土器椀であり、内面のみ黒色である。断面三角形の低い高台が付く、底部は丸みを持つ。392は京都系緑釉陶器椀の口縁部片である。393～396は土師器羽釜である。393～395は口縁部真横に鑿が付く撰津C型に属する。393は口縁部真横に鑿が付く。胴部外面は縦方向のハケ調整、その他はナデ調整が施される。胎土にチャート、石英を含む。394は口縁部真横に鑿が付く、口縁端部は内側に拡張され水平な面を成す。胴部外面は縦方向のハケ調整、その他はナデ調整が施される。395は口縁端部からやや下がった位置に鑿が付く、口縁端部は内傾する。鑿は393・394に比べ薄く、端部は丸みを帯びる。全体的にナデ調整が施される。胎土にチャート、石英を含む。396の胴部は寸胴で直線的に立ち上がる。口縁端部は水平な面を成す。鑿部分は欠損し、形状は不明である。全体的にナデ調整が施されるが、胴部外面は指頭圧痕が顕著である。397～399は土師器甕である。397の口縁部は外反し、端部は外面の上端と下端に面を成す。外面はナデ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。胎土はチャート、石英を含む。398は丸みを持つ胴部から口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸みを持つ。口縁部はナデ調

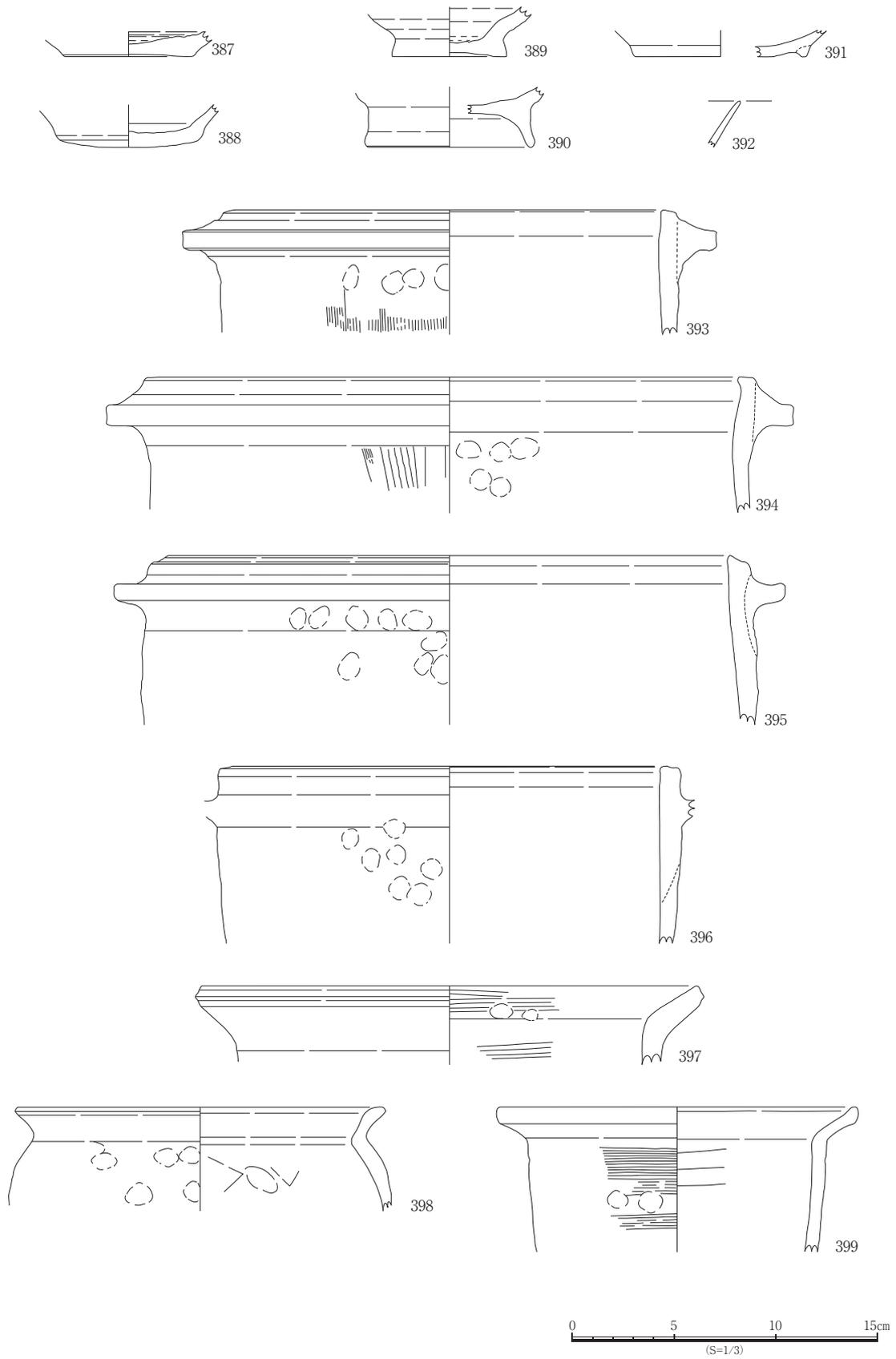


図85 I E区Ⅶ層遺物実測図1

1. I 区

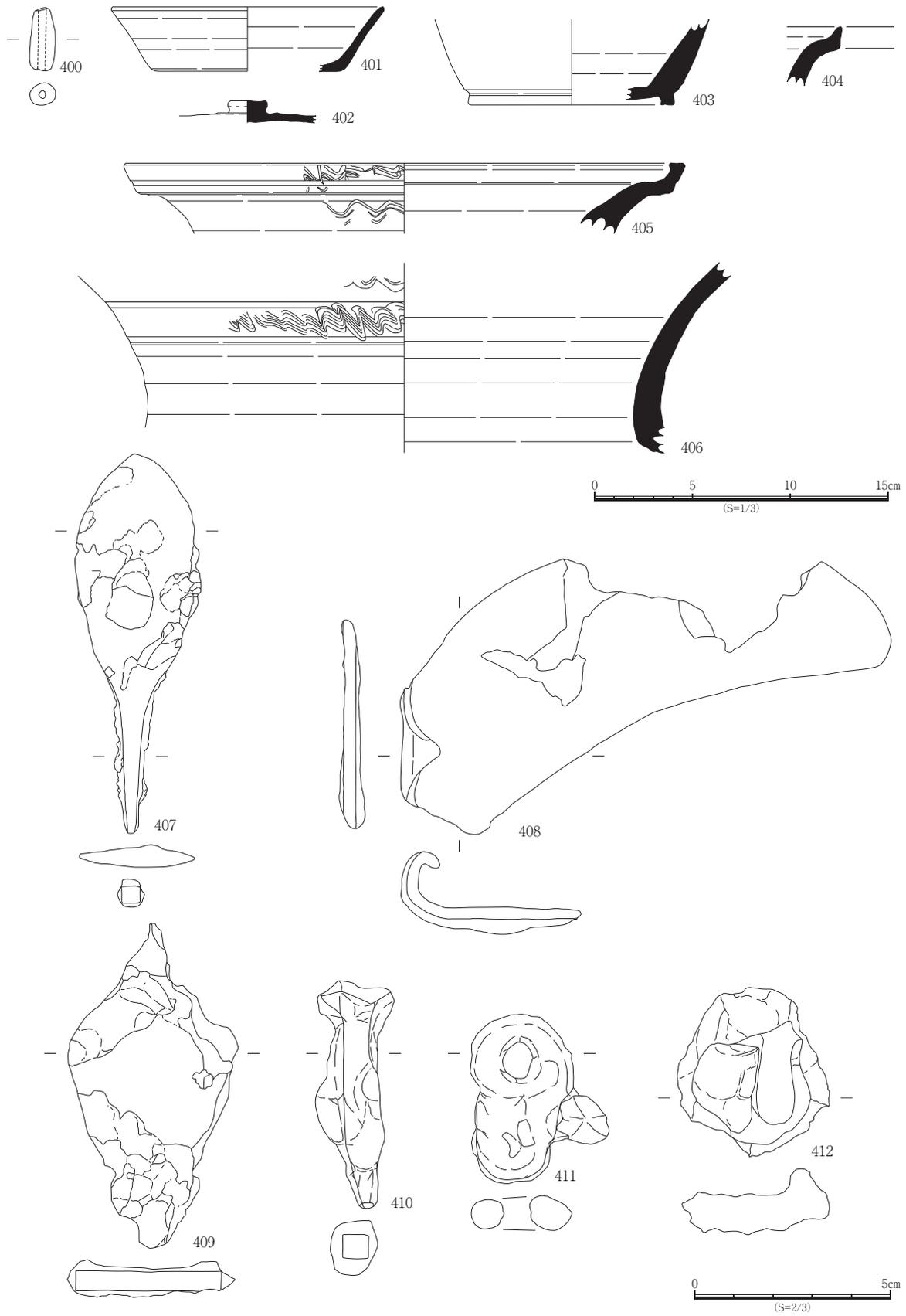


图86 I E区VII层遗物实测图2

整, 胴部は外面に指頭圧痕が顕著である。色調はにぶい褐色を呈し, 胎土に石英, 雲母片を含む。399の口縁部は「く」の字に外反し, 端部は上方に拡張される。胴部外面は横方向のハケ調整が施される。胎土にチャートを含む。400は管状土錘である。孔径0.4cmを測る。

401～406は須恵器である。401は杯であり, 体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整が施される。402は蓋であり, 扁平なつまみが付く。僅かに宝珠の形状を残す。403は壺であり, 断面四角形の高台が付く。高台脇はヘラ削りにより沈線状に凹む。回転ナデ調整が施される。404～406は甕である。404の口縁部はナデ調整により上方に拡張し, 端部を尖り気味に仕上げ外面に面を成す。405の口縁部は上方に拡張され端部は水平な面を成す。外面に櫛描による波状文が施される。406は甕の頸部であり, 2条の沈線の間には櫛描による波状文が施される。407～411は鉄器である。407は鉄鏃であり杏仁形を呈する。408は鉄鎌であり, 着柄部分は折り返しがみられる。409は菱形を呈した鉈であり, 先端部は尖る。410は釘である。411の器形は不明であるが, 環状部分から下に扁平な突起が付く。412は鉄滓である。

当調査区は, 丘陵の縁辺域から低湿地帯の境界部にあたり, 現地標高15.50～17.00mを測る。傾斜した丘陵縁辺部と低湿地の平坦部で古代から近世にかけての遺構と遺物が検出された。遺物は古代から中世にかけての土器・陶磁器類が包含層からまとまって出土した。古代では土師器・須恵器の供膳具や甕, 黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土し, 中世では土師質土器の杯や皿, 備前焼, 貿易陶磁器の出土がみられた。また, 下層では弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土器が出土した。この時代の遺構は確認できなかったが, 何らかの祭祀を行った可能性も考えられる。

2. II区

II区は, 平成20年度にいの町道改良工事に伴い発掘調査を実施した調査II-1区, II-2区の南側に接し, 丘陵谷部に位置する。II区の東部では, 14～16世紀前半代にかけての遺構と遺物が中心に検出された。いの町道調査時にも同時期の遺構が検出されており, 掘立柱建物跡, 溝など屋敷地としての規模, 広がりが見らなくなった。調査区中央部では, 何らかの祭祀を行ったと考えられる埋納遺構を検出した。また, 調査区の西部では, 下面で9～10世紀代を中心とするピット, 土坑が検出され, IE区で検出された古代の遺構の広がりを把握することができた。II区で検出された遺構は掘立柱建物跡11棟, ピット1,096個, 土坑59基, 溝12条, 性格不明遺構3基である。以下に特徴的な遺構について抽出し記述する。

(1) 上面遺構と出土遺物

掘立柱建物

SB1 (図88)

BⅢ-2-10・15, BⅢ-3-6・11グリッドで検出した桁行2間×梁行2間の南北棟側柱建物跡である。規模は桁行3.69m, 梁行3.65mを測り, 床面積は13.46㎡である。柱穴は直径0.23～0.36mを測る円形であり, 柱痕径は12～15cmを測る。埋土は褐灰色シルトが主体である。P3で土師質土器が3点出土した。建物の棟方向は, N-73°-Wを指す。

SB2 (図89)

BⅢ-3-7・13グリッドにかけて検出した桁行4間×梁行1間の南北棟側柱建物跡である。規模は

2. II区



图87 II区上面遺構配置図

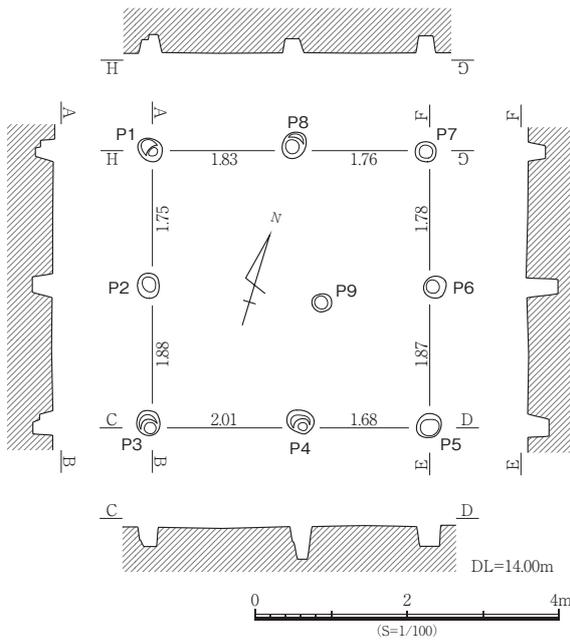


図88 II区SB1遺構図

桁行5.29m, 梁行1.60mを測り, 床面積は8.46㎡である。柱穴は直径0.23～0.40mを測る円形で, 柱痕径は0.15～0.19mを測る。埋土は褐灰色シルトが主体である。P5より土師器が4点, P8より土師質土器底部片, その他のピットから土師器, 須恵器が少量出土した。建物の棟方向はN-22°-Eを指す。

SB3 (図90)

BⅢ-3-7・13グリッドにかけて検出した桁行3間×梁行2間の東西棟側柱建物跡である。規模は桁行5.88m, 梁行2.71mを測り, 床面積は15.93㎡である。柱穴は直径0.25～0.60mを測る円形であり, 柱痕径は0.16～0.20mを測る。埋土は褐灰色シルトが主体である。P8より土師質土器が3点, P10より土師質土器が1点出土した。建物の棟方向はN-55°-Eを指す。

SB4 (図91)

BⅡ-24-21・22, B-4-1・2グリッドで検出した桁行2間×梁行1間以上の東西棟側柱建物跡である。建物北側は調査区外へ続く。規模は桁行3.62m, 梁行2.01m以上を測り, 床面積は7.27㎡以上である。柱穴形は直径0.15～0.28mを測る円形であり, 柱痕径は0.10～0.15mを測る。埋土は褐灰色シルトが主体で, 黄褐色シルトのものも含ま

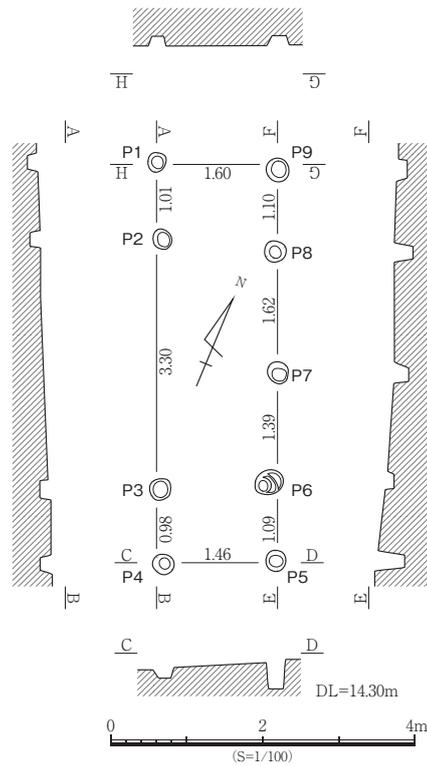


図89 II区SB2遺構図

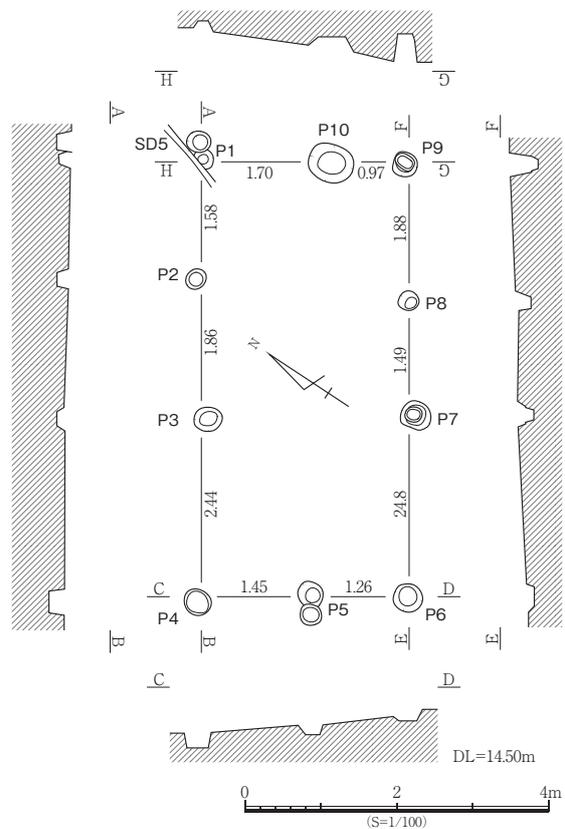


図90 II区SB3遺構図

れる。建物の棟方向はN - 72° - Eを指す。

SB5 (図92)

B II - 24 - 23・24, B III - 4 - 3・4グリッドで検出した桁行3間×梁行2間の南北棟側柱建物跡である。規模は桁行4.91m, 梁行2.50mを測り, 床面積は7.41㎡である。柱穴は直径0.21 ~ 0.39mを測る円形であり, 柱痕径は0.08 ~ 0.16mを測る。埋土は褐色粘土質シルトが主体で褐灰色シルトのものもみられる。P4より土師器の甕が2点, 他のピットからも土師質土器と土師器が少量出土した。建物の棟方向はN - 48° - Wを指す。

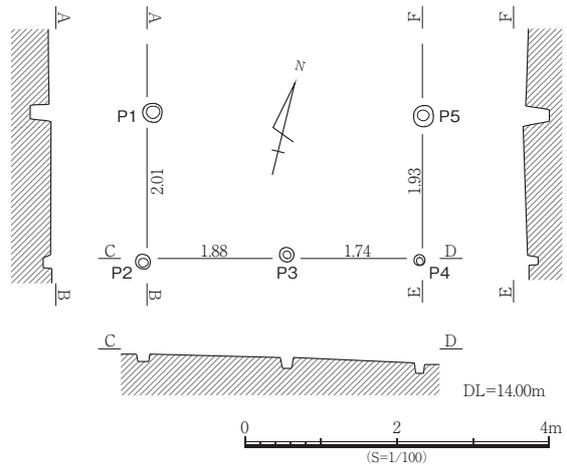


図91 II区SB4遺構図

SB6 (図93)

B II - 24 - 20, B II - 25 - 21グリッドにかけて検出した桁行3間×梁行2間の東西棟側柱建物跡である。標高は13.66 ~ 13.89m前後を測る。規模は桁行5.21m, 梁行3.71mを測り, 床面積は19.32㎡である。柱穴は直径0.22 ~ 0.40mを測る円形であり, 柱痕径は0.08 ~ 0.13mを測る。P1 ~ 5, P8 ~ 10で構成される正方形のプランが身舎と考えられ, 東端のG - H通りは構造体本体に付属する柱列と思われる。埋土は褐色粘土質シルトが主体で, 暗褐色粘土質シルトのものもみられる。P4・5・6より土師質土器が出土した。建物の棟方向はN - 73° - Eを指す。

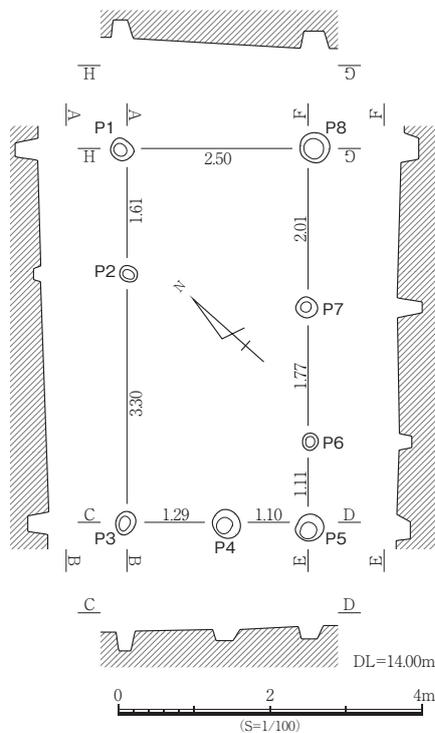


図92 II区SB5遺構図

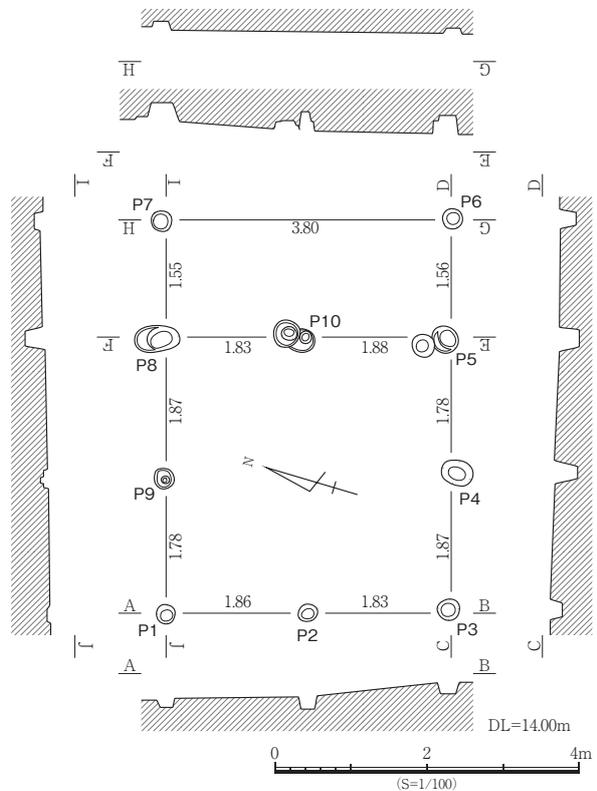


図93 II区SB6遺構図

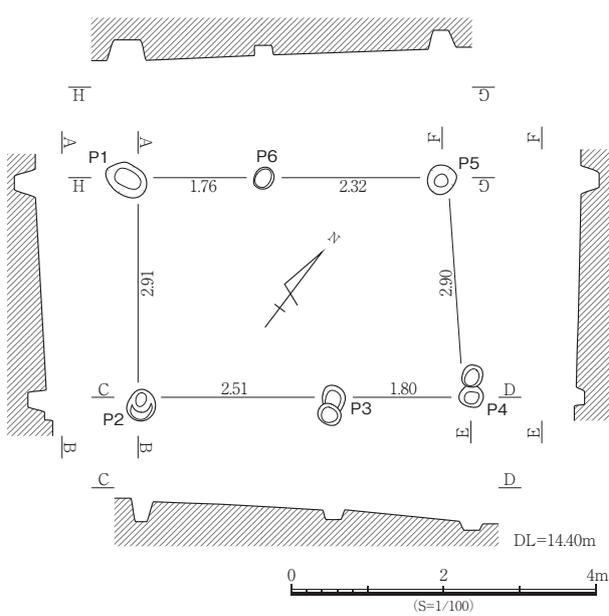


図94 Ⅱ区SB7遺構図

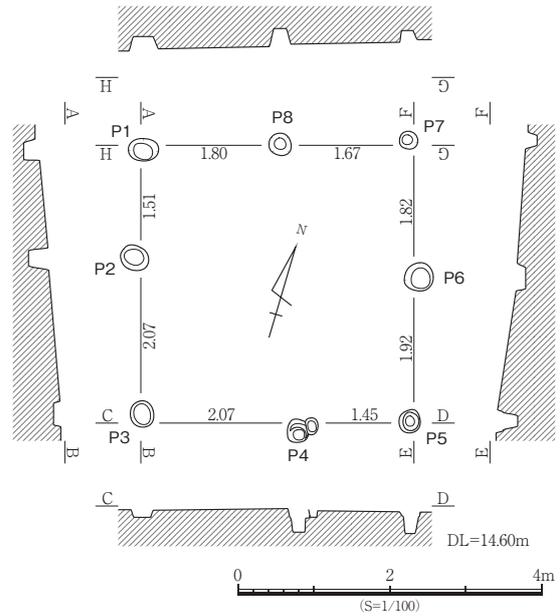


図95 Ⅱ区SB8遺構図

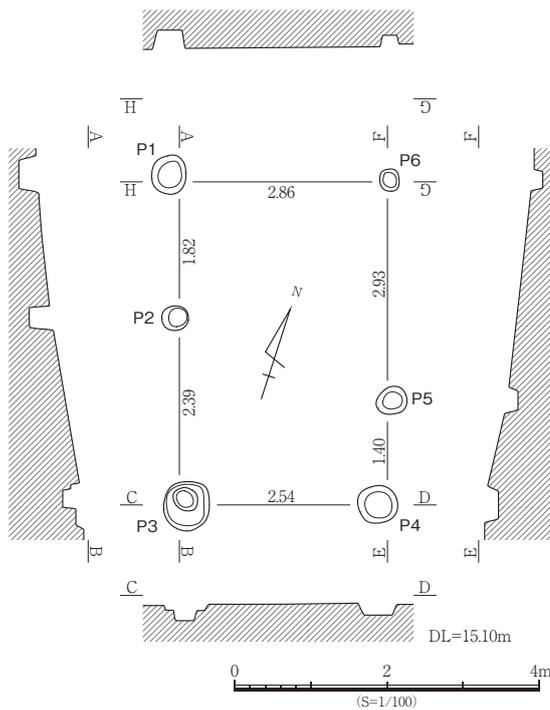
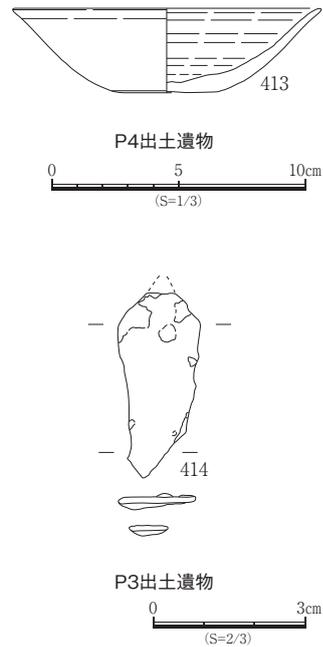


図96 Ⅱ区SB9遺構図・遺物実測図



SB7 (図94)

BⅢ-4-5, BⅢ-5-1グリッドにかけて検出した桁行2間×梁行1間の東西棟側柱建物跡である。規模は桁行4.31m, 梁行2.91mを測り, 床面積は12.54㎡である。柱穴は直径0.24~0.57mを測る円形であり, 柱痕径は0.13~0.16mを測る。埋土は褐灰色シルトが主体で灰黄色シルトのものもみられる。P2より土師質土器が5点, P5より4点出土した。建物の棟方向はN-53°-Eを指す。

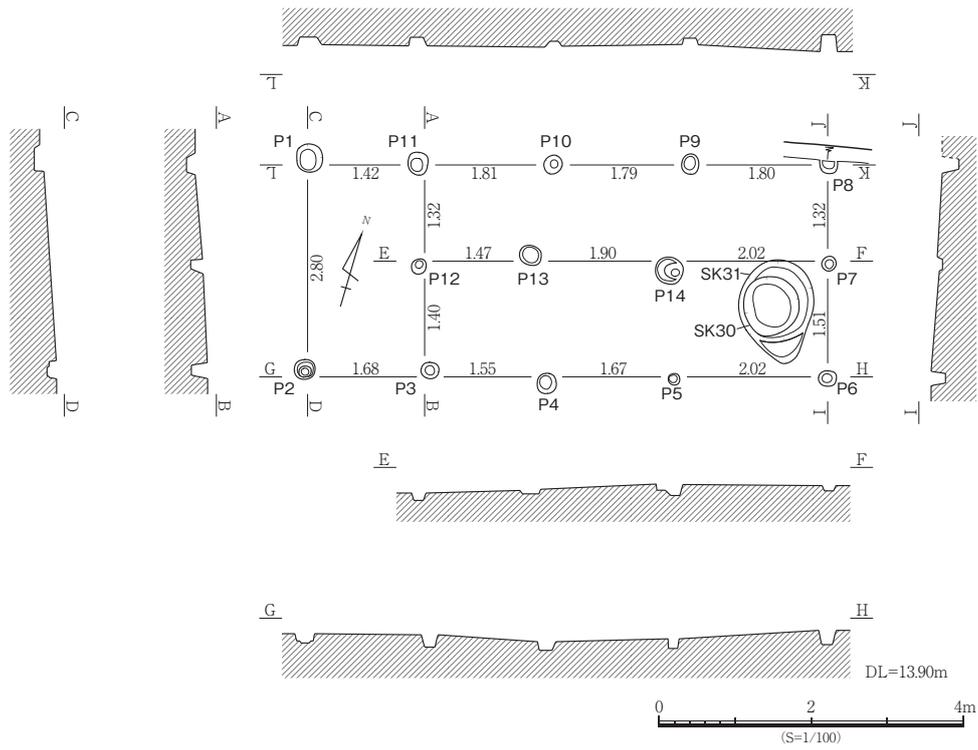


图97 II区SB10遺構図

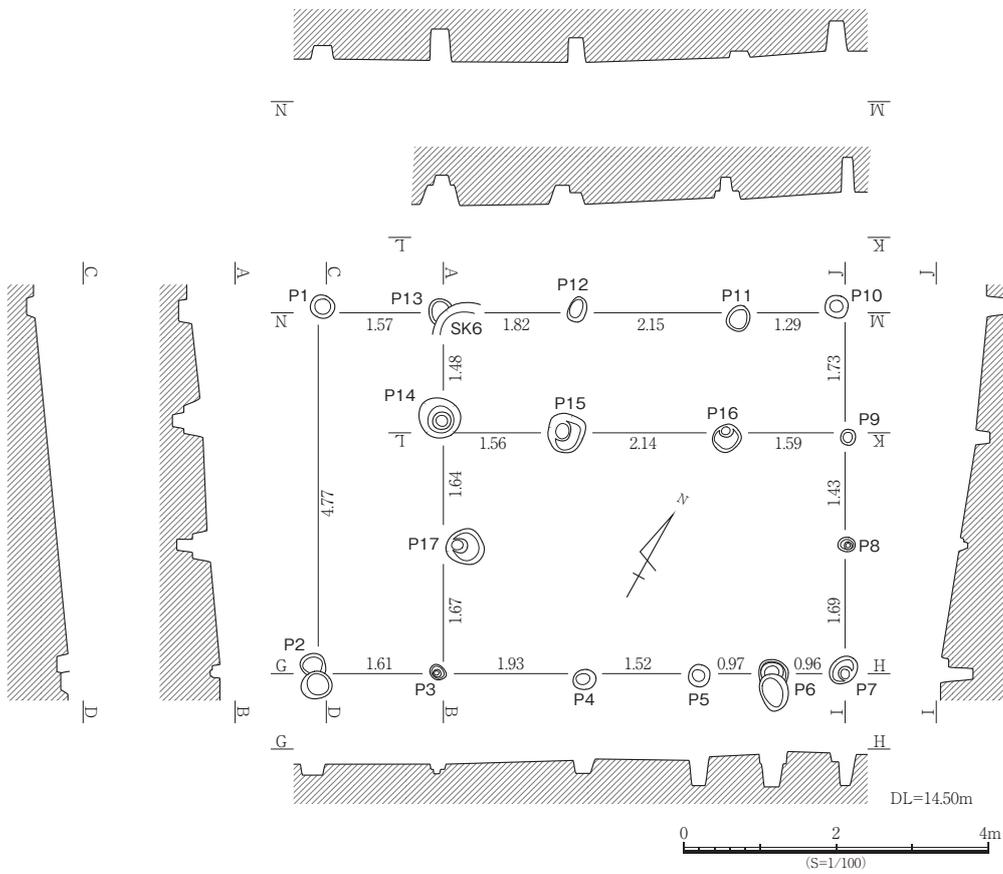


图98 II区SB11遺構図

SB8 (図95)

BⅢ-4-10, BⅢ-5-11グリッドにかけて検出した桁行2間×梁行2間の南北棟側柱建物跡である。規模は桁行3.74m, 梁行3.52mを測り, 床面積は13.16㎡である。柱穴は直径0.23～0.40mを測る円形であり, 柱痕径は0.11～0.14mを測る。埋土は褐色粘土質シルトが主体ある。P5より鉄製品が出土した。建物の棟方向はN-16°-Eを指す。

SB9 (図96)

BⅢ-4-15, BⅢ-5-16グリッドにかけて検出した桁行2間×梁行1間の南北棟側柱建物跡である。規模は桁行4.33m, 梁行2.86mを測り, 床面積は12.38㎡である。柱穴は直径0.24～0.65mを測る円形であり, 柱痕径は0.17～0.19mを測る。埋土は褐色粘土質シルトが主体である。建物の棟方向はN-17°-Wを指す。P4から土師質土器杯(413)が出土した。413は斜上外方に立ち上がり, 口縁部は僅かに外反する。内面はロクロ目が顕著に残る。P3からは鉄鏃と考えられる鉄器(414)が出土した。

SB10 (図97)

BⅡ-25-16・22グリッドにかけて検出した桁行4間×梁行2間の東西棟総柱建物跡である。規模は桁行6.92m, 梁行2.83mを測り, 床面積は19.58㎡である。柱穴は直径0.15～0.38mを測る円形であり, 柱痕径は0.09～0.10mを測る。C-D通りでは中柱が検出できなかったことから, 西側には庇等が存在した可能性がある。埋土は褐灰色シルトのものと, 暗灰黄色粘土質シルトが主体である。建物の棟方向はN-74°-Eを指す。P3より土師質土器が4点, P14より5点出土した。建物内に位置するSK30からは土師質土器3点と鉄滓が出土している。

SB11 (図98・99)

CⅡ-21-12・22グリッドにかけて検出した桁行4間×梁行3間の東西棟側柱建物跡である。規模は桁行6.99m, 梁行4.85mを測り, 床面積は33.90㎡である。柱穴は直径0.18～0.55mを測る円形であり, 柱痕径は0.06～0.17cmを測る。C-D通りでは間柱が検出できなかったことから, 建物西側は小屋組とは別の庇等が存在した可能性がある。埋土は褐色粘土質シルトのものと, 灰褐色シルトが主体である。建物の棟方向はN-61°-Wを指す。

P4から東播系須恵器鉢の底部片(415)が出土した。酸化焰焼成であり, 質感は瓦質に近い焼成である。外面に煤の付着が認められる。P12より瓦質土器, P15より土師質土器2点と鉄滓, その他のピットからも土師質土器が出土している。

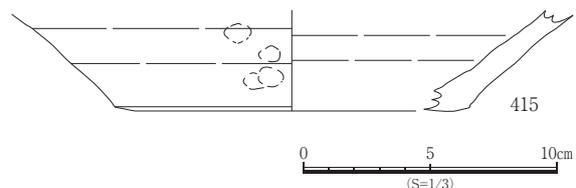


図99 II区SB11遺物実測図

柵列

SA1 (図100)

BⅢ-3-5・14グリッドにかけて検出した全長12.97mの柵列である。検出標高は14.07～14.88m前後を測る。柱間寸法はP1～5は0.63～1.11m, P6～12は1.17～1.65mである。柵列南側の丘陵の等高線に沿って並ぶため, 地境界の柵列であると思われる。柱穴から遺物は出土しなかった。

SA2 (図101)

BⅢ-4-4・14グリッドにかけて検出した全長12.91mの柵列である。検出標高は14.35～14.84m

前後を測る。柱間寸法は1.09～2.77mである。SA1と同様に南側丘陵の等高線に沿って並ぶため、地境界の柵列であると思われる。埋土中からの遺物は極めて少ないが、P1より土師器、P4より土師質土器が1点ずつ出土した。

SA3(図101)

BⅢ-4-7・4・13・14グリッドで検出した全長11.95mの柵列である。検出標高は14.48～15.06m前後を測る。柱間寸法は1.19～2.86mである。SA1・2と同様に南側丘陵の等高線に沿って検出されたため、地境界の柵列であると思われる。柱穴から遺物は出土しなかった。

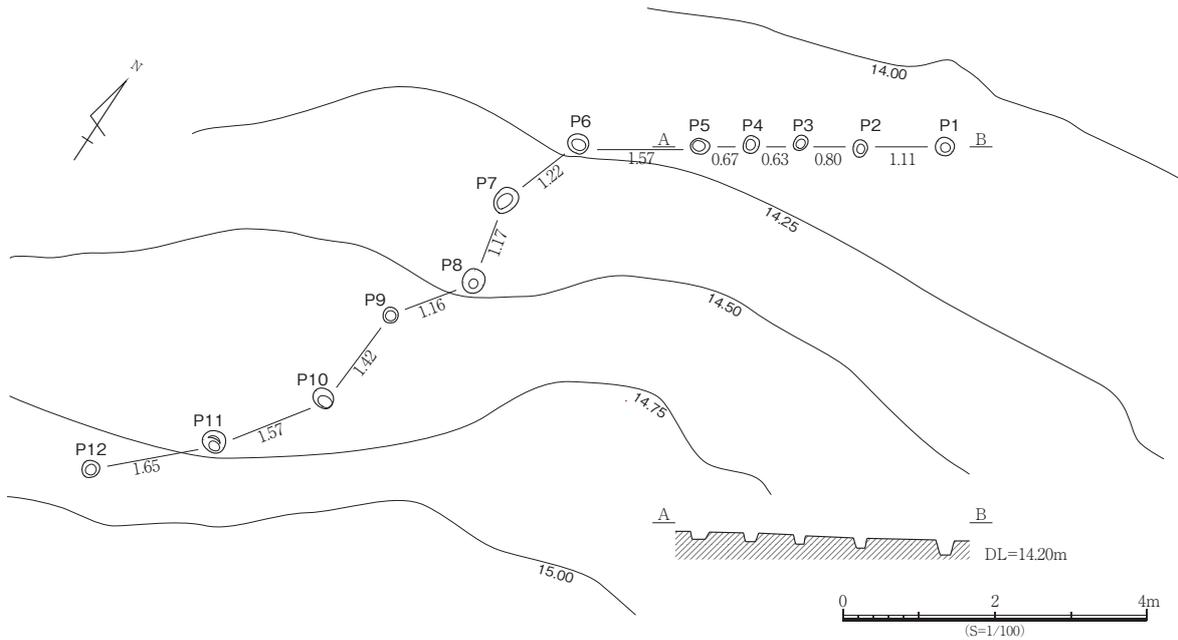


図100 II区SA1遺構図

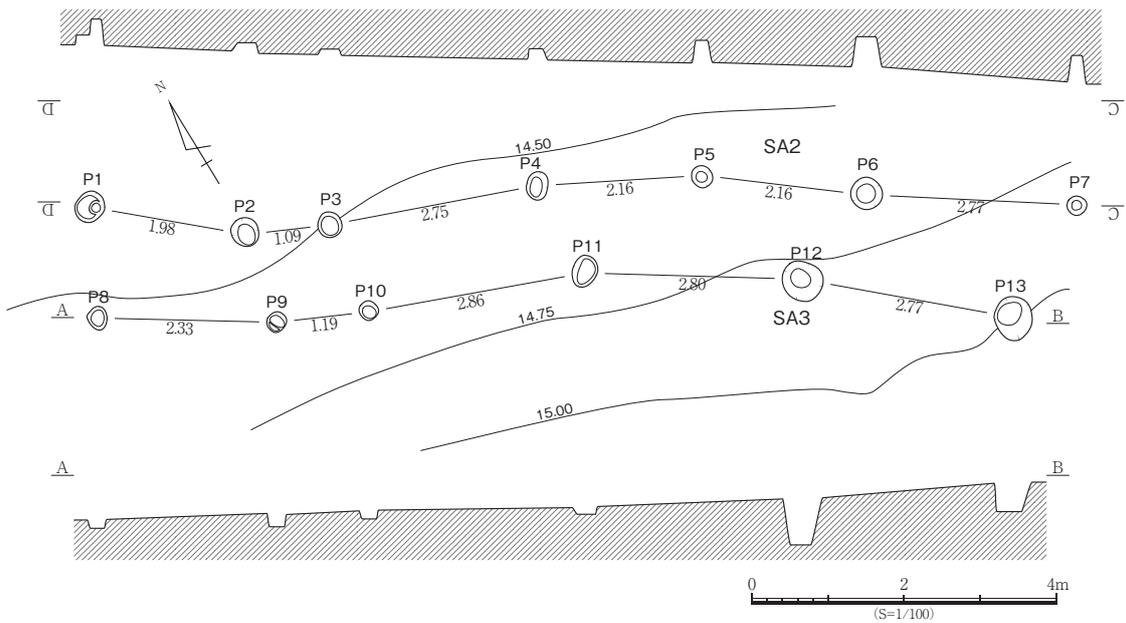


図101 II区SA2・3遺構図

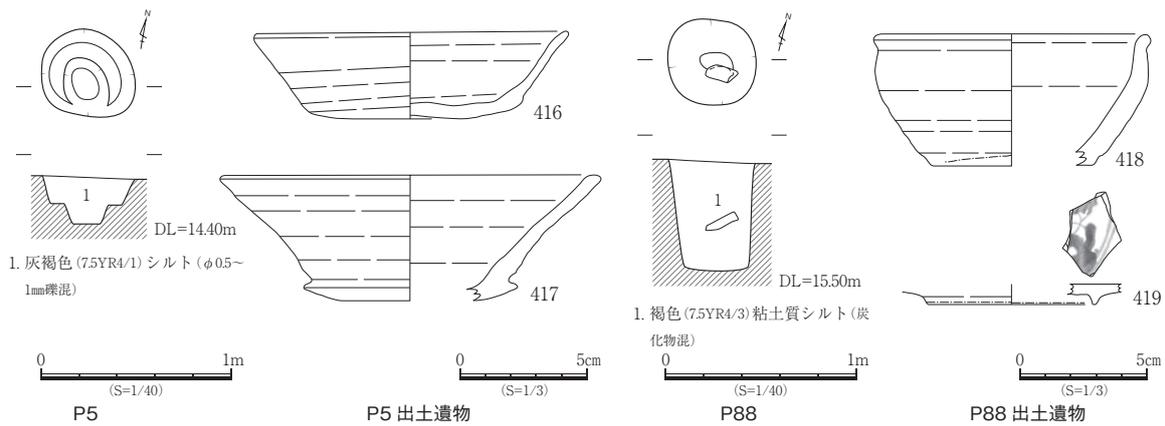


図102 II区P5・88遺構図・遺物実測図

ピット

P5 (図102)

BⅢ-4-8グリッドで検出した長径0.49m, 短径0.46m, 深さ0.24mを測る円形のピットである。埋土は灰褐色シルトであり, 径0.12mの柱痕を持つ。埋土中から図示した土師質土器杯(416・417)が出土した。416は回転ナデ調整, 底部切離しは不明である。417はロクロ成形で底部切離しは回転糸切り痕が認められ, 切離しの際のズレにより段が生じる。

P88 (図102)

BⅢ-4-20グリッドで検出した長径0.46m, 短径0.46m, 深さ0.58mを測る方形のピットである。埋土は褐色粘土質シルトであり, 断面は台形状を呈する。埋土中から図示した天目茶碗(418), 青花皿(419)が出土した。418は瀬戸美濃系であり, 口縁部は直立気味に立ち上がり, 端部は外反し玉縁状を呈する。全体的に鉄釉が施される。419は見込みに二重界線と草花文が施される。高台部分は釉を削り取る。景德鎮窯系B群の青花皿である。

上面ピット出土遺物(図103 420~437)

II区で検出された上面ピットからは420~437の遺物が出土した。9~10世紀代, 14~15世紀代の遺物である。420~422は須恵器杯で, 回転ナデ調整が施される。420・421の焼成は良好で還元焼成であるが, 422は酸化焰焼成である。420・421は調査区西部BⅢ-3-3, 3-13グリッドで検出されたP209・223から出土した。下面遺構として古代の遺構が集中して検出された調査区西部の縁辺部にあたる。423もBⅢ-3-18グリッドで検出されたP198から出土した土師器甕で, 胴部外面にタタキ成形後, 横方向のハケ調整を施す。口縁部内面も横方向のハケ調整が施され, 胎土にチャートを含む。在地系の土師器甕である。424~429は土師質土器供膳具であり, 424・425は小皿である。424の口縁部は短く外反し, 一部被熱している。425は内湾気味に立ち上がり, 端部は尖り気味に仕上げる。426~429は杯で, 全てロクロ成形, 回転ナデ調整, 底部切離しは回転糸切りである。426・429は体部の一部にタール痕が認められる。430~432は瓦質土器の鍋底部である。外面は指頭圧痕が顕著である。432の底部は外面に段が生じ内型成形によると思われる。433は瀬戸美濃系の陶器折縁皿の底部片である。内面に重ね焼きの跡が認められる。434は常滑焼甕の体部片で, 外面に格子目状のスタンプ, 2条平行のヘラ記号が施される。435・436は鉄器である。435は刀子もしくは鉈の断片で, 重量は16.9gを測る。436は羽子板状の方頭式鉄鎌で, 重量は23.5gを測る。437は砂岩の叩石で, 中央部は敲打により凹む。

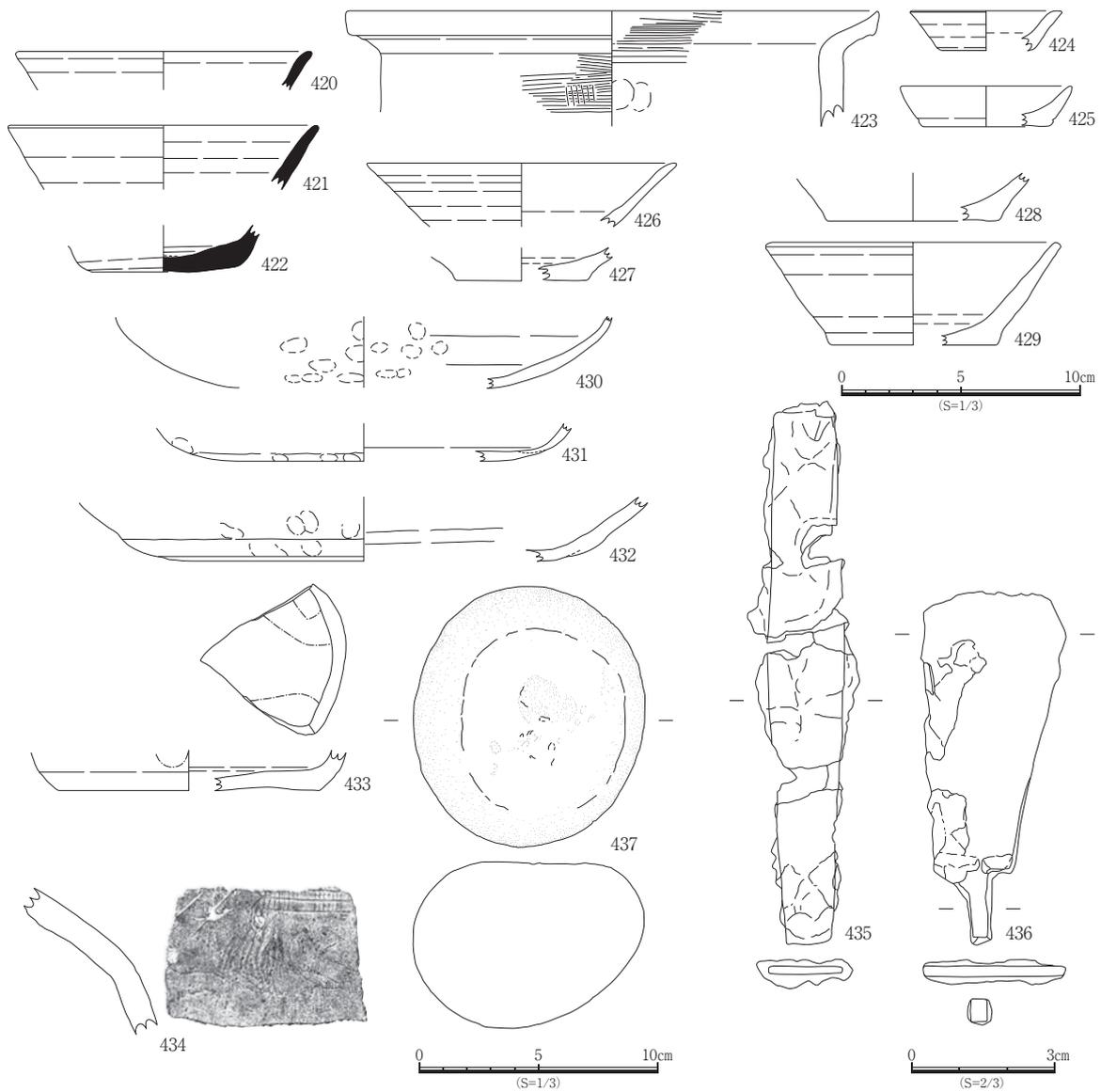


図103 II区上面ピット遺物実測図

土坑

埋納遺構(図104～111)

BⅢ-3-4グリッドで検出された遺構である。全体的なプランの規模は長径0.59m, 短径0.45mの楕円形を呈し, 東側に深さ2.0～5.0cmの浅い皿状の掘込み面があり, 西端に長径0.37m, 短径0.31mの円形を呈した深い掘込み部を持つ。検出時はピットと思われたため, ピット番号(P161)を付し調査を行った。検出面の東端で土師質土器皿が伏せた状態で出土した。埋土上層にあたる1層は灰黄色を呈した礫混じりのシルト質粘土であり, 1層を3.0cmほど掘り下げた所で備前焼壺(438)の口縁部の一部を検出したため, 口縁部全体を検出するように慎重に掘削を行った。備前焼壺の口縁部内面の覆土を除去した所で和鏡(439)が出土した。和鏡は, 鏡面側を上にして壺に蓋をするように置かれていたと思われるが, その後土圧で内部に落ち込んだものと考えられる。土坑を半裁して断面観察を行った結果, 壺はやや東側に傾けた状態で埋められており, 完形であることが確認された。埋土

は、壺の周縁がにぶい黄褐色を呈した粘土で、上部は同色のシルト質粘土の堆積が認められた。掘方は埋土と周辺の堆積土との識別が難しかったが、壺の法量、形状に合わせて掘られていた。埋土中には布や紙などの繊維は確認されなかった。壺の内部には1層の土が流入しており、図示した土師質土器皿20個体と393枚の古銭が納められていた。土師質土器皿は破片で出土したが、底部を上向き、下向きと合わせ口にして納められていたと思われる状態が底の一部で確認された。また、土師質土器皿には多量の種実の付着が認められた。壺内部の土を洗浄し精査、分析した結果、約770個のアワと、イネの胚乳と穎が検出された。植物の先を玉止め状に結んだ縹銭の断片もみられ、古銭はこの藁状の植物を紐状に編んだもので縹銭にしていたものと思われる。これらの出土状況から、この遺構は何らかの祭祀遺構と考えられる。438～459、古銭1～393が埋納遺構の出土遺物である。438は備前焼の壺であり、法量は口径15.6cm、器高32.2cm、底径17.1cm、胴径は胴部上位が最大径で、26.9cmを測る。底部から斜上方に立ち上がり、胴部は上位で最大径になり、頸部に向かって窄む。頸部は斜上方に短く開き、口縁端部は断面三角形状に玉縁を持つ。端部はシャープにヨコナデ調整が施され、内面はナデにより凹線状に凹む。外面の底部と胴部の接合部は沈線状に1条凹線が入り、肩部には櫛描による波状文が施される。外面全体にロクロ目を残し、外底部には下駄状の圧痕を残す。形態的には備前IV期後半頃のものと思われる。439は和鏡であり、面径(直径) 9.1cm、面厚0.2cm、周縁厚0.7cm、周縁幅0.3cmを測る。内区には州浜、松樹、双雀を配しており、松樹には双雀の巢も配される。(州浜松樹双雀鏡) 13世紀末～14世紀代のものと考えられる。440～459は土師質土器皿である。全てロクロ成形、回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りによる。ベタ底から斜上方に立ち上がり、体部中位から口縁部にかけて開き、端部は尖り気味に仕上げる。内面はロクロ目を残すものが多いが、外面は丁寧なナデ調整が施される。特に体部中位から口縁部は内外面とも丁寧なナデ調整が施される。内外面にはタールや、452のように植物(アワ)の果実が付着しているものがあり、古銭の付着痕も認められるものが多い(440・453・454)。図107～111(1～393)は古銭であり、開元通寶から宣徳通寶までの銭種があり、永樂通寶が63/393枚と最も多く、次いで元豊通寶43/393、開元通寶40/393、熙寧通寶40/393と続く。詳細は埋納遺構出土古銭計測表(表1～10)に記載した。

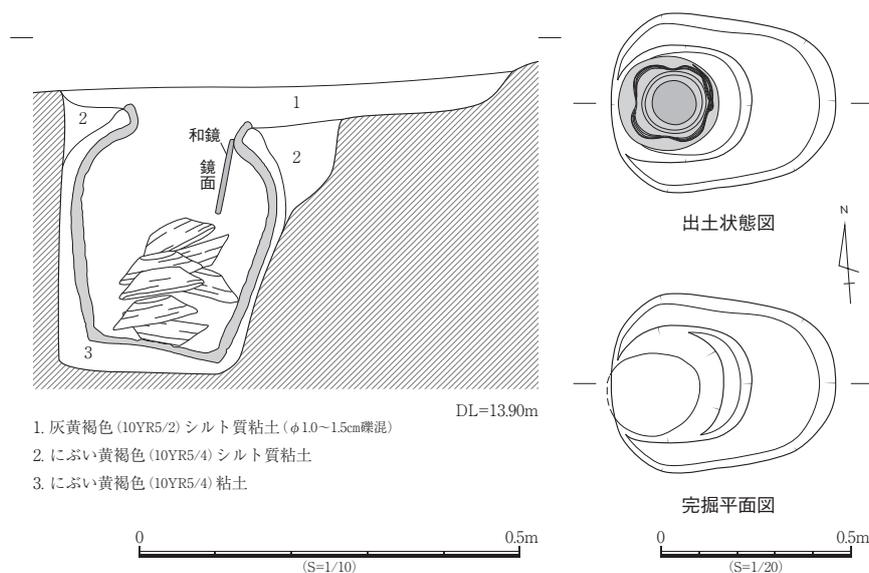


図104 II区埋納遺構遺構図

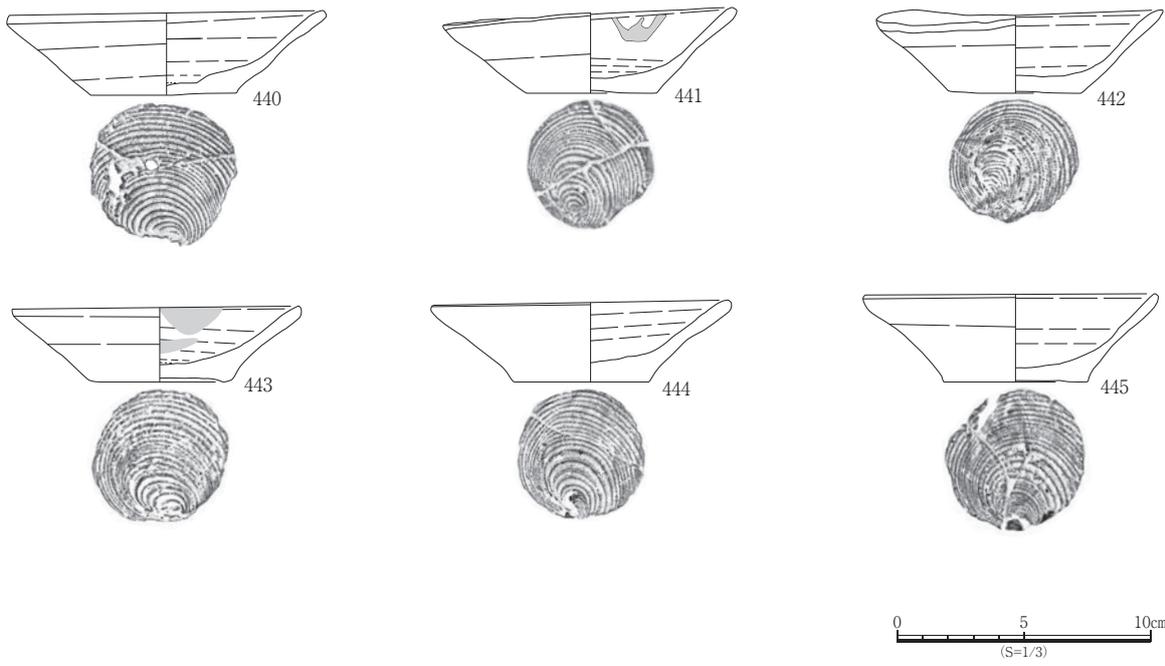
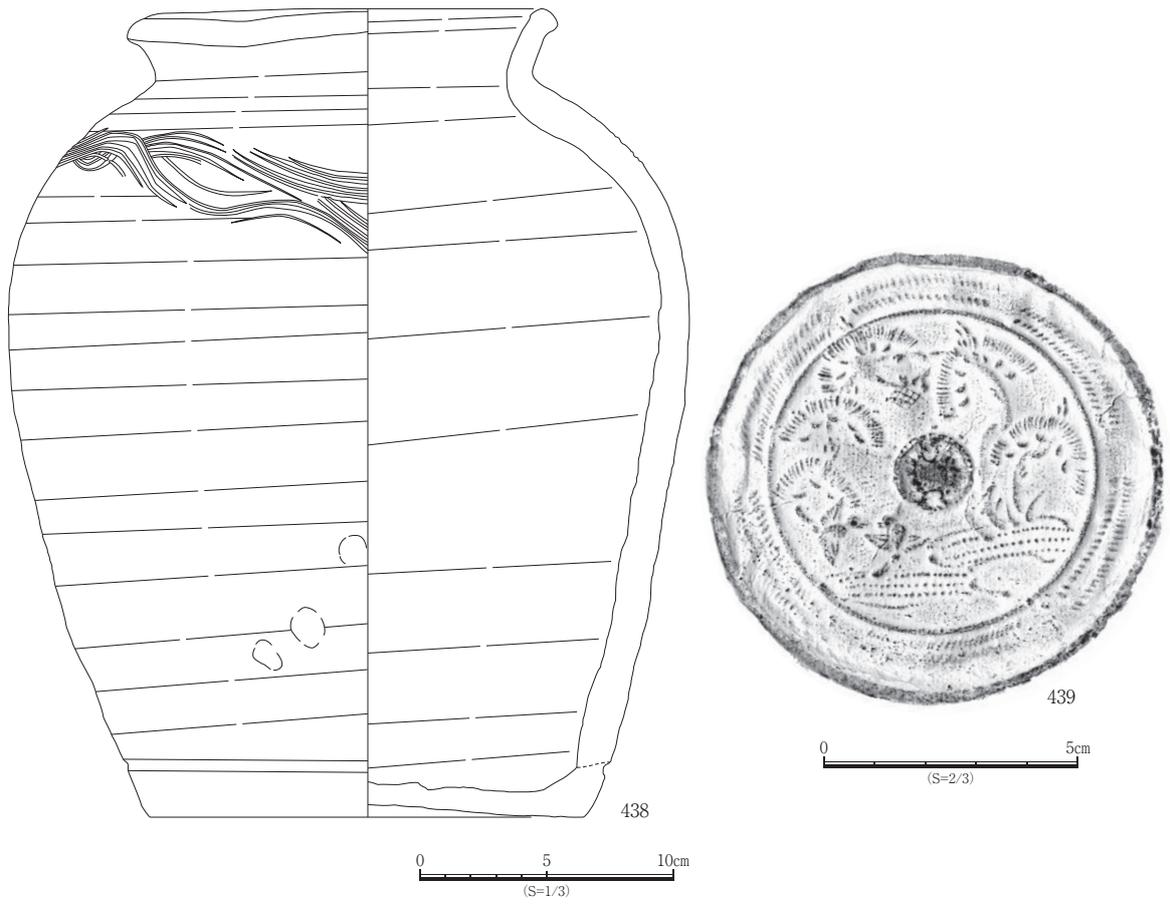


图105 II区埋納遺構遺物実測図1

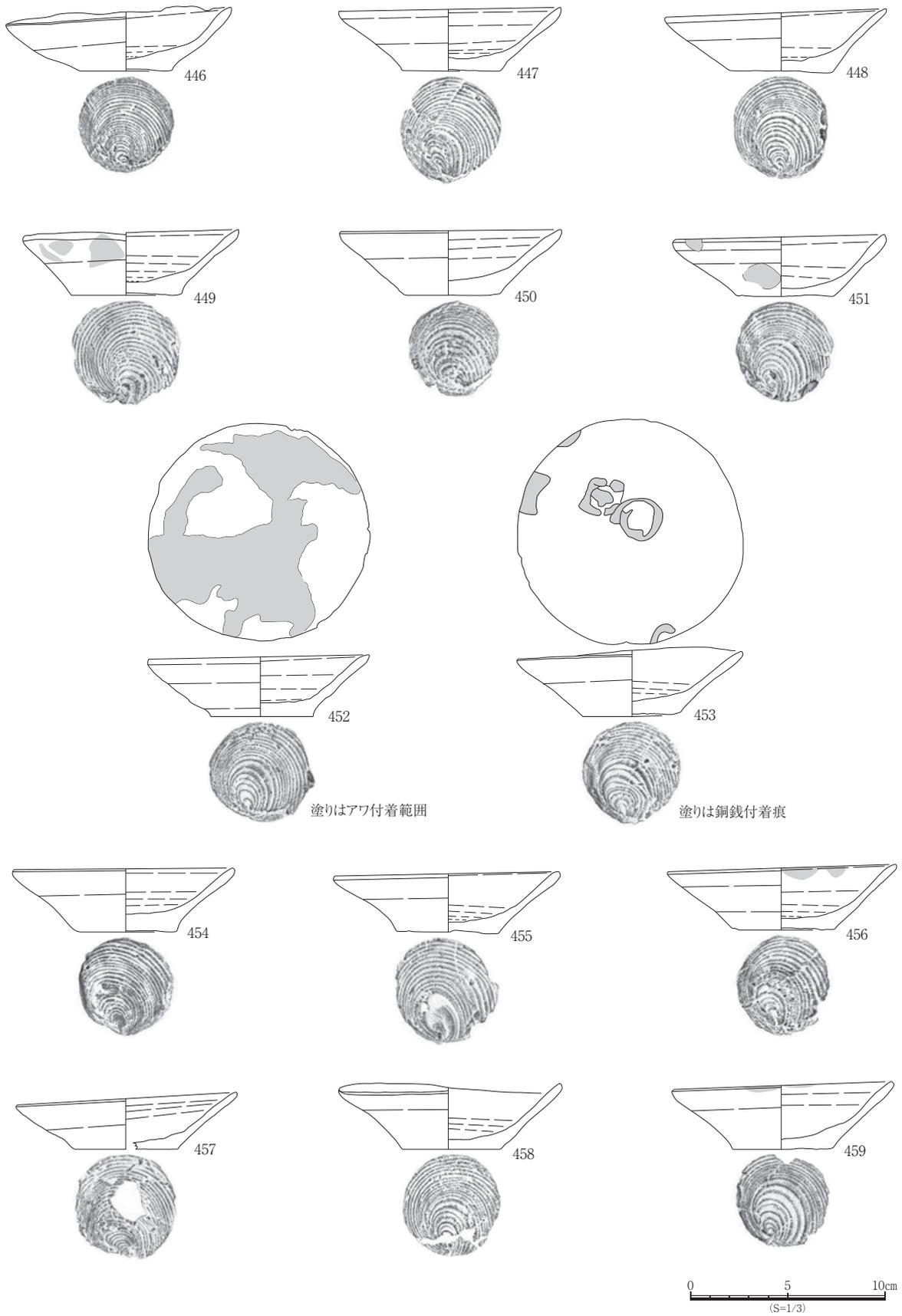


図106 II区埋納遺構遺物実測図2

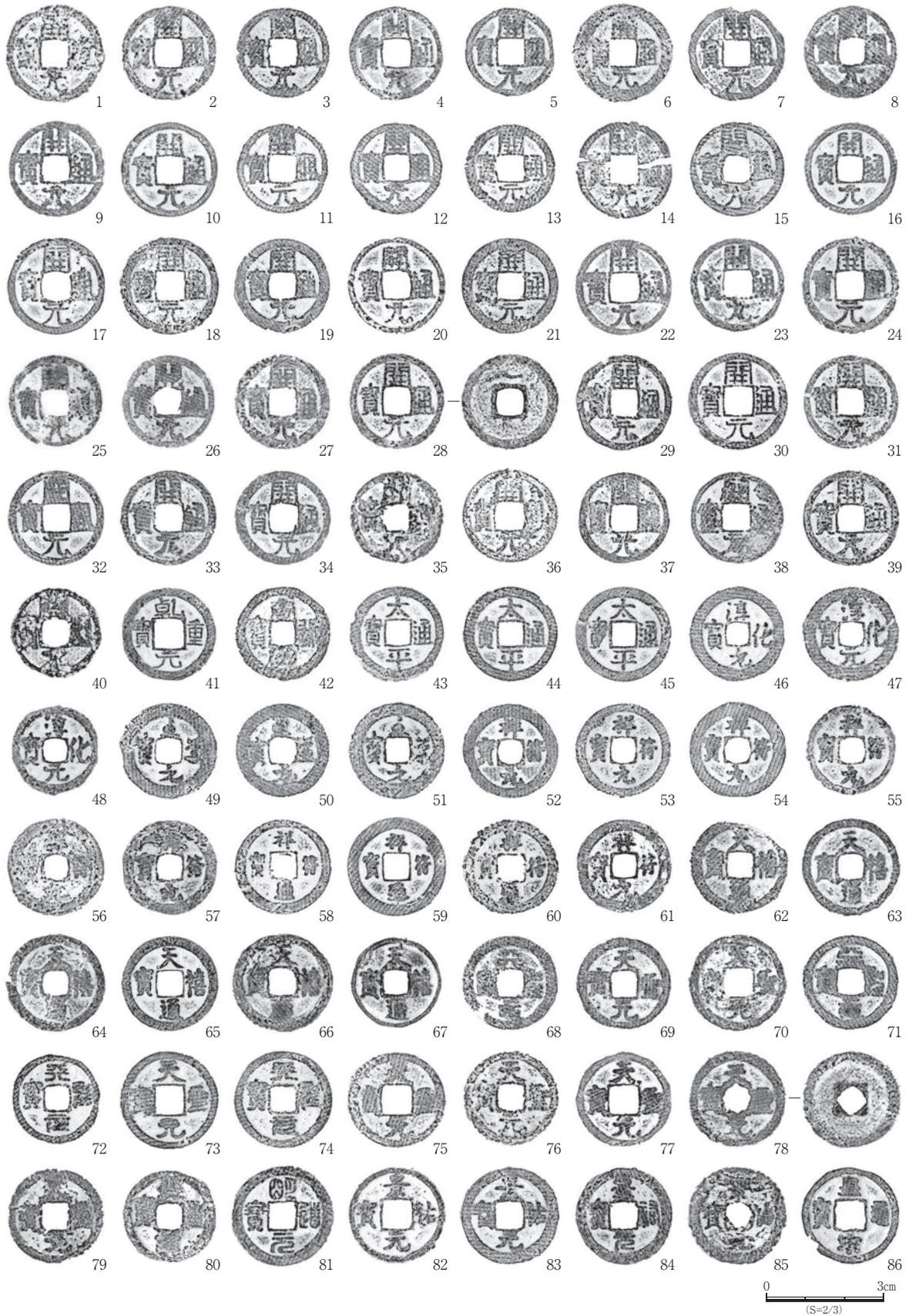


图107 II区埋納遺構遺物(古銭)1

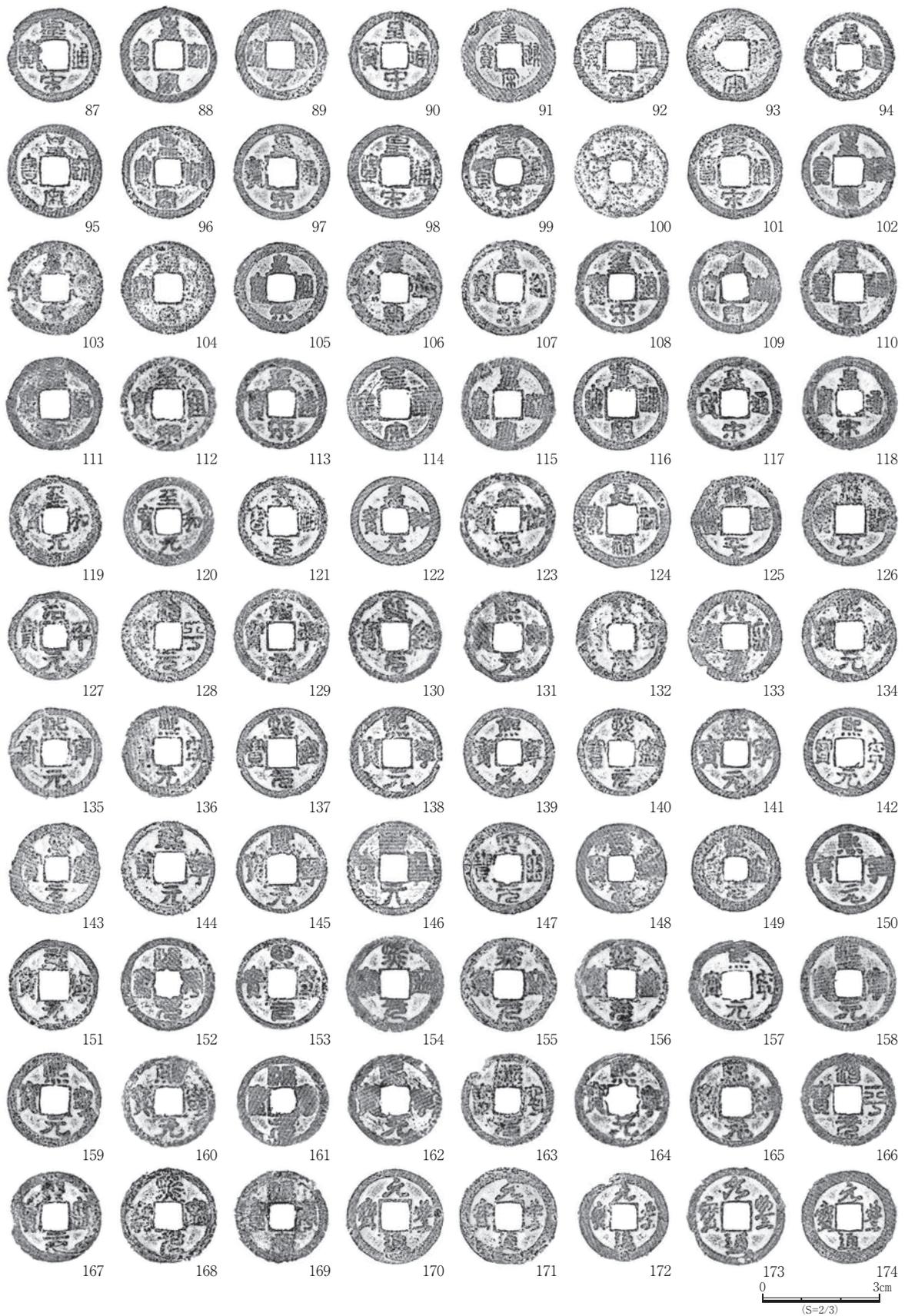


図108 II区埋納遺構遺物(古銭)2

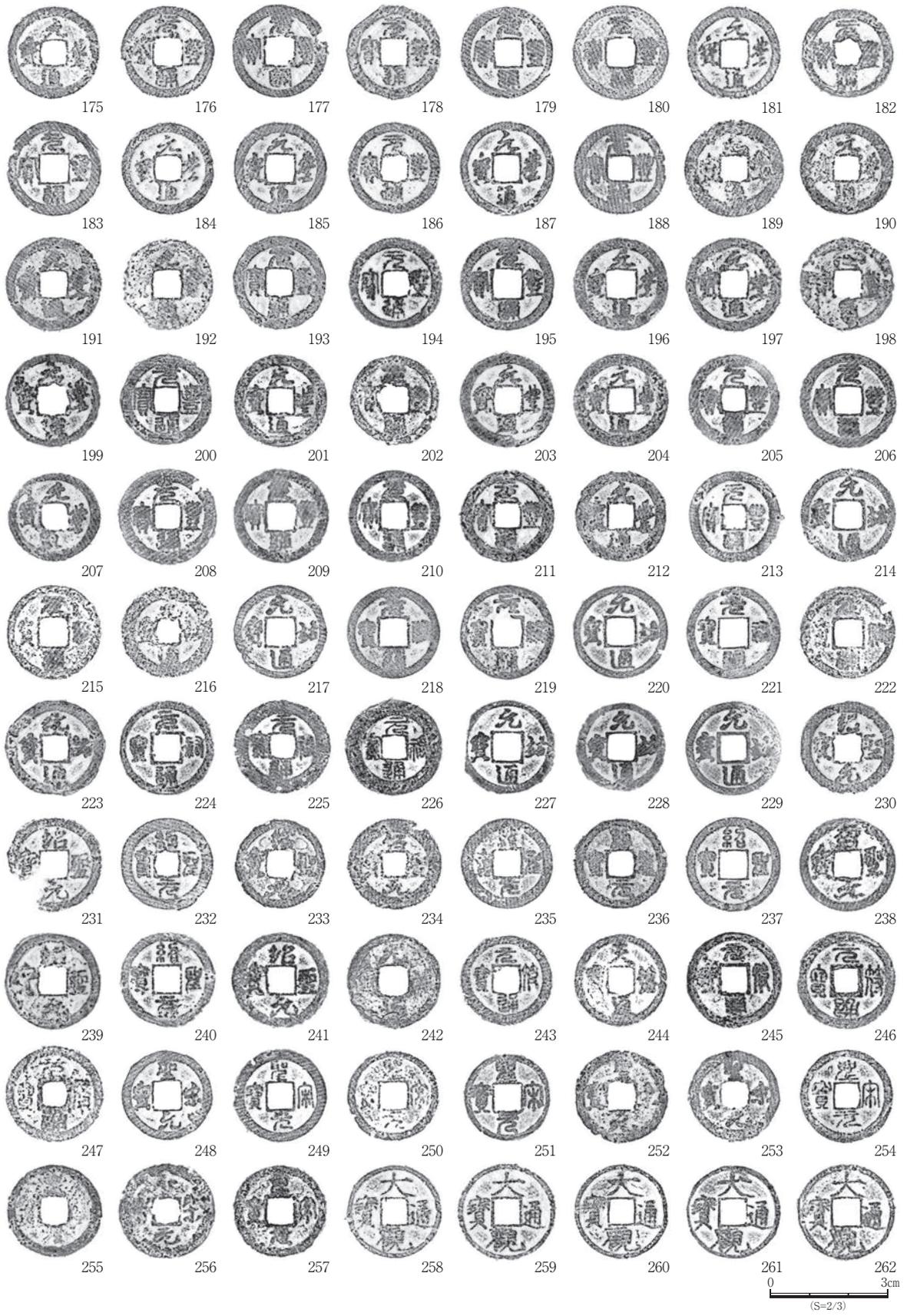


图109 II区埋納遺構遺物(古銭)3

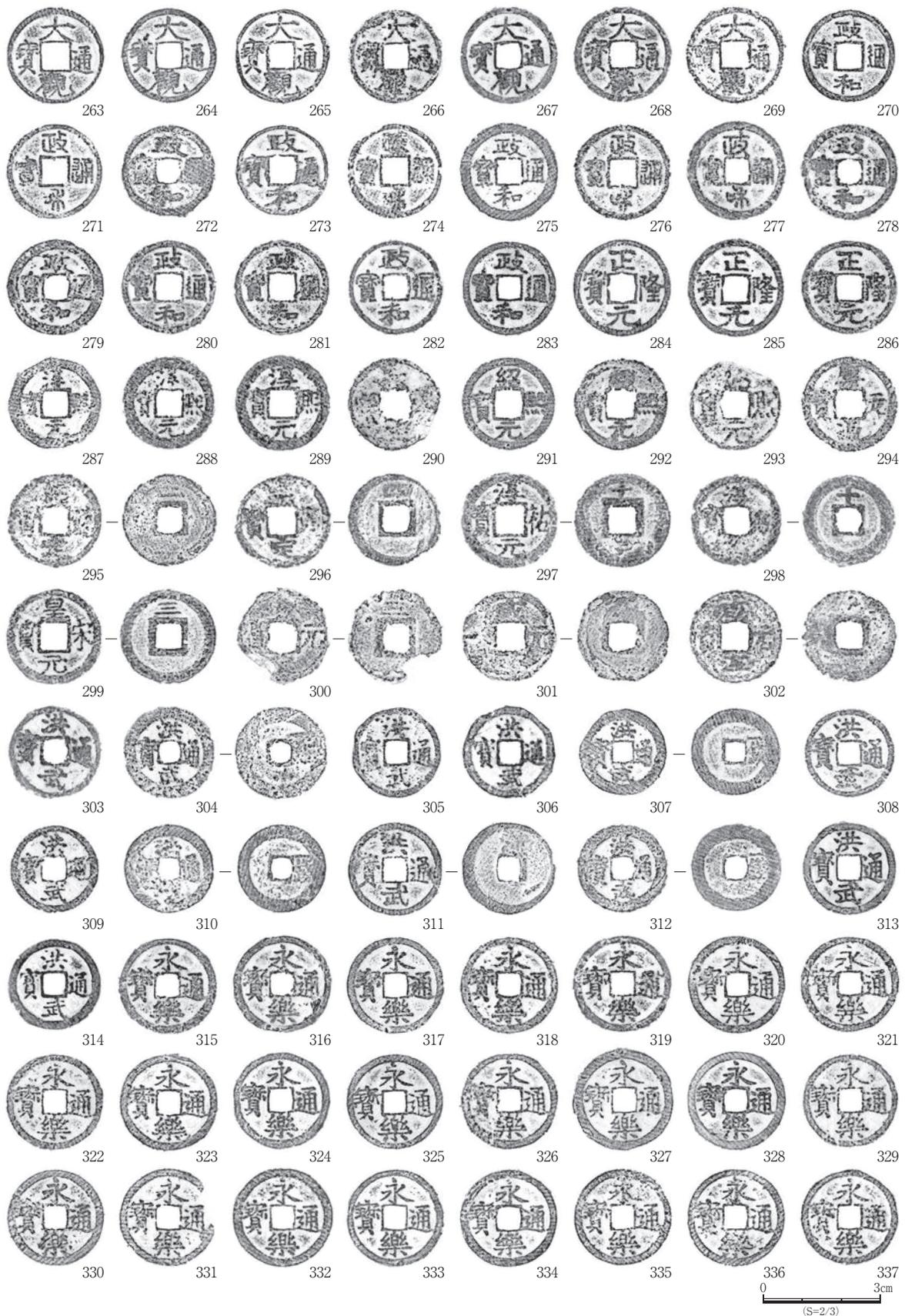


図110 II区埋納遺構遺物(古銭)4

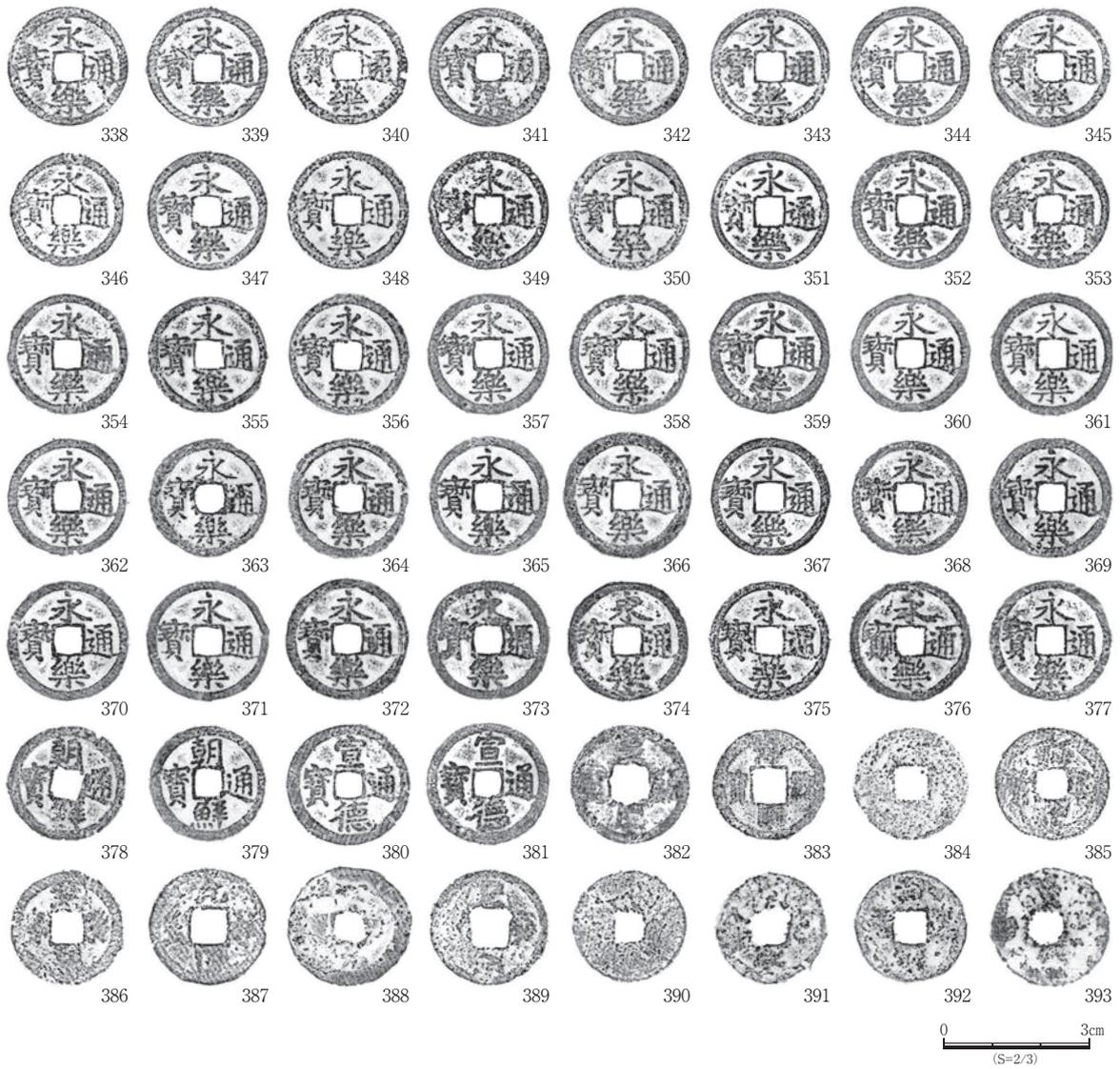


图111 II区埋納遺構遺物(古錢)5

表1 埋納遺構古銭計測表1

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
1	開元通寶	25.00	21.00	7.75	7.00	1.33	0.83	2.49	
2	〃	23.75	20.50	8.50	7.50	1.17	0.75	2.46	
3	〃	23.25	20.00	8.00	7.50	1.15	0.72	2.77	
4	〃	23.75	21.00	8.00	7.00	1.17	0.70	2.19	
5	〃	22.50	19.50	7.75	7.00	1.19	0.89	2.80	
6	〃	24.75	19.75	8.00	7.00	1.37	0.90	3.04	
7	〃	24.00	20.50	8.00	7.00	1.00	0.79	2.60	
8	〃	23.25	19.75	7.75	7.00	1.25	0.93	3.00	
9	〃	24.00	21.00	8.25	7.00	1.17	0.93	3.04	
10	〃	24.00	21.00	8.00	7.50	1.20	0.69	2.78	
11	〃	22.75	19.75	8.00	7.25	1.49	1.20	3.67	
12	〃	22.75	19.50	7.75	6.75	1.05	0.63	2.18	
13	〃	22.75	18.75	8.00	7.00	0.89	0.62	1.73	
14	〃	23.75	21.00	8.25	7.00	0.99	0.75	1.60	
15	〃	23.75	21.00	8.00	7.00	1.20	0.85	2.85	
16	〃	23.00	20.50	7.75	6.75	1.52	0.99	3.53	
17	〃	24.50	21.00	8.75	7.75	1.44	0.83	3.49	
18	〃	24.75	20.75	8.50	7.25	1.29	0.75	3.23	
19	〃	23.75	18.75	8.00	7.00	1.13	0.59	2.69	
20	〃	24.25	21.75	8.25	7.00	1.26	0.65	2.86	
21	〃	24.25	19.50	8.00	6.50	1.18	0.64	2.91	
22	〃	24.25	21.25	8.50	7.50	1.20	0.89	3.23	
23	〃	23.50	21.00	8.25	7.00	1.14	0.75	2.44	
24	〃	24.25	21.25	8.50	7.00	1.28	0.70	2.61	
25	〃	23.25	20.50	8.25	6.50	1.30	0.94	2.26	
26	〃	23.75	20.25	8.50	6.25	1.04	0.79	2.57	
27	〃	23.75	20.00	8.50	7.00	1.39	1.25	3.73	
28	〃	24.00	20.75	8.00	7.00	1.21	0.75	2.85	紀地銭か
29	〃	24.00	21.00	8.50	6.50	1.21	0.88	3.04	
30	〃	24.75	21.00	8.50	7.50	1.38	1.00	3.58	
31	〃	23.50	20.75	8.25	7.00	1.04	0.84	2.60	
32	〃	24.00	20.75	8.00	6.75	1.28	0.70	3.08	
33	〃	24.25	21.25	8.50	6.75	1.26	0.86	2.91	
34	〃	24.00	20.25	8.75	7.00	1.03	0.78	2.59	
35	〃	23.00	20.25	8.50	6.75	1.15	0.79	2.32	
36	〃	23.25	20.25	8.25	7.00	1.03	0.92	2.61	
37	〃	22.75	20.00	8.00	6.50	1.09	0.84	2.81	
38	〃	23.25	21.25	8.50	6.75	1.25	0.88	3.27	
39	〃	23.75	20.75	7.75	6.50	1.15	0.73	2.90	
40	〃	22.25	21.00	8.50	7.00	0.94	0.88	2.09	
41	乾元重寶	23.75	19.50	8.75	7.50	1.21	0.49	2.67	
42	唐國通寶	24.00	19.75	7.50	6.50	1.60	0.99	3.54	
43	太平通寶	23.50	19.75	7.00	6.00	1.33	0.73	3.06	
44	〃	24.00	19.25	7.50	6.75	1.25	0.84	3.18	

表2 埋納遺構古銭計測表2

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
45	太平通寶	24.25	19.25	7.25	6.00	1.06	0.41	2.83	
46	淳化元寶	24.00	18.75	6.75	6.00	1.25	0.73	3.26	
47	〃	24.25	18.75	7.00	6.00	1.14	0.67	2.46	
48	〃	22.25	18.25	6.75	6.00	1.10	0.69	2.49	
49	至道元寶	24.00	18.50	7.50	6.50	1.15	0.63	2.81	
50	〃	23.50	18.00	8.00	7.00	0.97	0.68	2.21	
51	〃	24.25	17.75	7.75	6.00	1.30	1.00	3.46	
52	祥符元寶	24.00	18.50	7.50	6.75	0.99	0.64	2.38	
53	〃	24.00	20.00	7.00	6.25	1.37	1.02	3.31	
54	〃	24.25	18.25	7.00	6.50	0.93	0.73	2.41	
55	〃	22.50	19.25	7.75	6.50	1.26	0.81	3.05	
56	〃	24.75	18.50	7.25	6.00	1.25	0.89	3.38	
57	〃	23.50	18.75	7.75	6.25	1.19	0.75	2.82	
58	祥符通寶	24.75	19.75	7.50	6.50	1.45	0.82	3.46	
59	〃	25.25	19.25	7.50	6.25	1.20	0.53	3.29	
60	〃	24.00	19.00	8.00	6.25	1.21	0.63	2.91	
61	祥符元寶	23.75	18.50	7.50	5.75	1.34	1.05	3.16	
62	天禧通寶	24.50	19.50	7.50	6.50	1.20	0.80	2.75	
63	〃	24.50	21.00	8.00	7.00	1.15	0.72	3.15	
64	〃	25.00	20.50	8.00	6.25	1.25	0.94	3.42	
65	〃	24.00	20.00	7.50	6.25	1.48	0.99	4.00	
66	〃	25.25	20.25	8.50	7.00	1.30	1.01	3.68	
67	〃	22.75	20.75	8.00	6.25	1.06	0.85	2.84	
68	天聖元寶	24.00	18.75	7.75	7.00	1.32	0.84	3.05	
69	〃	23.25	20.00	8.00	7.00	1.23	0.79	3.19	
70	〃	24.00	20.75	8.75	7.75	1.42	1.15	3.03	
71	〃	23.75	20.00	8.00	7.25	1.10	0.67	2.61	
72	〃	22.75	19.00	7.25	6.50	1.18	0.72	2.73	
73	〃	25.00	21.25	8.75	7.50	1.25	0.77	2.96	
74	〃	24.75	21.00	8.00	6.75	1.67	1.19	4.83	
75	〃	24.25	21.00	8.75	7.75	1.17	0.99	2.73	
76	〃	23.50	20.25	8.25	6.50	0.91	0.51	1.87	
77	〃	24.00	20.75	9.00	7.25	1.01	0.71	2.87	
78	〃	24.00	20.50	9.50	7.50	1.53	1.03	3.76	
79	〃	24.00	20.50	8.50	6.75	1.41	1.08	3.75	
80	〃	24.25	20.00	8.50	7.00	1.33	1.05	3.37	
81	明道元寶	25.50	20.25	7.50	6.50	1.15	0.73	3.54	
82	景祐元寶	24.00	21.25	8.75	7.75	1.23	0.70	2.47	
83	〃	24.75	20.00	8.00	7.00	1.29	0.84	2.97	
84	〃	24.50	19.75	8.00	6.75	1.01	0.68	2.86	
85	〃	24.50	19.00	8.00	6.25	1.42	1.18	3.80	
86	皇宋通寶	24.75	21.75	8.50	7.50	1.20	0.69	3.05	
87	〃	23.75	19.75	8.75	7.75	1.19	0.88	3.00	
88	〃	24.00	21.00	8.50	7.50	1.18	0.69	3.02	

2. II 区

表3 埋納遺構古銭計測表3

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
89	皇宋通寶	23.50	18.75	8.25	7.50	0.82	0.53	1.55	
90	〃	22.75	19.00	7.75	6.75	1.43	0.68	2.52	
91	〃	24.50	17.00	7.75	6.75	1.32	1.20	3.54	
92	〃	24.00	20.50	8.75	8.00	1.39	1.25	2.72	
93	〃	23.75	20.00	8.50	7.25	1.12	0.97	2.50	
94	〃	22.00	18.25	7.50	6.75	1.43	0.87	2.99	
95	〃	23.75	19.75	8.50	7.00	1.05	0.68	2.38	
96	〃	24.25	19.50	8.00	7.00	1.19	0.94	2.90	
97	〃	24.75	20.25	8.75	7.75	1.24	0.95	3.05	
98	〃	24.00	19.50	9.00	7.50	1.61	1.28	4.52	
99	〃	23.25	19.75	8.00	7.25	1.03	0.65	2.48	
100	〃	23.75	20.50	6.25	5.25	1.38	0.88	3.35	
101	〃	24.25	20.25	8.75	7.50	1.16	0.89	3.12	
102	〃	23.75	19.75	8.50	7.25	1.03	0.69	2.17	
103	〃	24.00	18.75	8.25	6.75	1.09	0.65	2.59	
104	〃	23.75	19.25	8.75	7.50	1.30	1.23	2.99	
105	〃	23.75	18.25	8.50	7.00	0.96	0.80	2.04	
106	〃	24.00	18.50	8.75	7.00	1.04	0.80	2.46	
107	〃	24.25	20.50	8.75	6.75	1.08	0.69	2.57	
108	〃	23.75	20.00	8.25	6.75	1.18	0.80	2.65	
109	〃	23.25	19.00	8.50	6.50	1.05	0.69	2.24	
110	〃	24.00	20.50	8.25	7.50	1.21	0.89	3.22	
111	〃	24.00	19.50	9.00	7.25	1.38	1.23	3.63	
112	〃	24.25	20.25	8.75	7.25	1.28	1.14	3.45	
113	〃	23.25	19.50	8.25	6.50	1.10	0.79	2.42	
114	〃	24.25	19.75	9.00	7.25	0.94	0.84	2.56	
115	〃	23.50	20.25	8.50	7.00	1.14	0.78	2.97	
116	〃	24.00	20.75	8.75	7.00	1.17	0.88	3.12	
117	〃	24.00	19.75	8.25	6.75	1.27	0.78	2.95	
118	〃	24.00	18.25	8.00	6.25	1.25	0.73	3.40	
119	至和元寶	23.25	18.25	7.00	6.00	1.18	1.03	2.73	
120	〃	22.75	17.75	7.75	6.00	0.99	0.78	2.42	
121	嘉祐元寶	22.75	20.00	8.50	7.25	1.33	0.88	2.24	
122	〃	23.00	18.75	7.75	7.00	1.30	0.89	3.02	
123	〃	24.25	20.25	7.75	6.25	1.56	0.68	4.01	
124	嘉祐通寶	24.50	20.00	9.00	7.75	1.23	0.88	3.35	
125	治平通寶	23.00	19.25	7.75	7.00	1.48	1.04	3.64	
126	〃	23.75	19.50	9.00	7.00	1.41	1.09	3.51	
127	治平元寶	22.25	20.00	7.75	6.50	1.45	0.94	3.41	
128	〃	23.75	19.50	8.00	7.25	1.34	0.93	3.22	
129	〃	24.00	19.75	7.75	6.25	1.41	1.24	3.36	
130	熙寧元寶	23.50	20.00	9.00	7.25	1.44	0.97	3.35	
131	〃	22.50	20.00	8.50	7.50	1.08	0.85	2.19	
132	〃	23.00	19.00	8.25	7.00	1.48	1.04	3.40	

表4 埋納遺構古銭計測表4

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
133	熙寧元寶	23.75	19.25	8.00	7.00	1.25	1.14	3.11	
134	〃	24.00	20.00	8.00	7.50	1.29	0.98	3.61	
135	〃	24.00	19.75	8.00	7.00	1.40	1.09	3.61	
136	〃	23.25	19.00	8.00	7.00	1.27	0.93	2.73	
137	〃	23.00	19.50	8.50	7.50	1.42	0.95	2.69	
138	〃	23.00	19.75	8.00	7.00	1.27	0.99	3.36	
139	〃	23.00	19.00	7.50	6.50	1.23	0.82	2.92	
140	〃	22.00	19.50	8.00	7.00	1.53	1.00	3.54	
141	〃	22.50	20.00	7.50	7.00	1.45	1.27	3.31	
142	〃	23.25	19.00	8.00	7.25	1.23	0.87	2.54	
143	〃	23.25	18.50	7.25	6.50	1.45	1.05	3.73	
144	〃	24.00	21.50	9.00	8.00	1.42	0.79	3.26	
145	〃	23.00	20.50	9.00	8.00	1.04	0.65	1.81	
146	〃	24.00	20.50	8.50	7.50	1.34	1.22	3.48	
147	〃	23.50	19.25	8.25	7.00	1.44	1.04	3.52	
148	〃	23.00	19.00	7.50	6.25	1.13	0.85	2.73	
149	〃	22.25	17.75	7.50	6.00	1.34	0.98	3.33	
150	〃	22.75	19.25	7.25	6.00	1.33	0.99	3.47	
151	〃	22.75	20.00	8.50	7.25	1.05	0.60	2.30	
152	〃	24.00	19.00	7.75	7.00	1.44	1.18	3.66	
153	〃	23.25	21.00	9.00	7.00	1.28	0.86	2.84	
154	〃	24.75	18.25	8.50	7.00	1.18	0.81	2.41	
155	〃	24.00	20.50	8.75	7.00	1.14	0.88	3.34	
156	〃	23.50	20.75	9.00	7.00	1.23	0.88	2.74	
157	〃	23.75	18.75	8.50	7.00	1.46	0.66	3.30	
158	〃	24.00	21.00	8.50	6.75	1.16	1.09	3.42	
159	〃	24.00	20.25	8.50	7.00	1.23	1.04	3.69	
160	〃	23.25	20.00	7.75	6.75	1.35	1.09	3.37	
161	〃	23.25	19.75	8.00	6.25	1.29	1.10	3.06	
162	〃	23.25	20.25	9.00	7.25	1.03	0.86	2.56	
163	〃	23.50	19.75	8.25	6.25	1.34	1.01	3.01	
164	〃	24.00	20.25	9.50	7.75	1.52	1.37	4.56	
165	〃	23.00	20.25	9.00	7.50	1.24	0.82	2.71	
166	〃	24.00	19.50	8.00	7.00	1.10	0.93	2.93	
167	〃	23.75	18.75	8.50	6.75	1.54	1.15	3.97	
168	〃	24.25	21.00	8.25	6.75	1.24	0.90	3.04	
169	〃	23.75	19.25	8.00	6.25	1.40	1.04	2.94	
170	元豐通寶	24.25	20.00	8.50	7.50	1.23	0.98	3.21	
171	〃	24.50	19.50	8.00	7.25	1.32	0.93	2.80	
172	〃	22.50	22.75	7.25	6.75	1.35	1.03	2.87	
173	〃	24.50	21.00	8.25	7.00	1.25	0.70	2.77	
174	〃	23.50	18.00	7.00	6.50	1.10	0.72	2.55	
175	〃	23.50	19.50	7.50	6.75	1.19	0.89	2.46	
176	〃	23.00	19.75	8.00	7.50	1.19	0.69	2.28	

表5 埋納遺構古銭計測表5

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
177	元豊通寶	23.75	19.75	8.25	7.25	1.30	0.85	2.99	
178	〃	24.00	19.50	8.00	6.75	1.24	0.69	2.63	
179	〃	23.25	19.75	8.25	7.00	0.94	0.69	2.09	
180	〃	24.00	20.00	8.00	7.25	1.28	1.12	3.00	
181	〃	23.50	19.75	8.00	7.00	1.48	0.85	3.21	
182	〃	23.00	19.25	7.50	6.50	1.50	0.94	3.51	
183	〃	24.00	20.00	8.00	7.00	1.17	0.97	3.11	
184	〃	23.50	19.25	7.75	6.75	1.40	0.80	2.87	
185	〃	23.25	18.75	8.50	7.25	1.40	1.02	3.45	
186	〃	23.50	19.75	7.50	6.75	1.24	0.78	3.01	
187	〃	23.50	20.00	8.00	7.00	1.24	0.88	3.13	
188	〃	23.00	19.00	7.75	6.50	1.00	0.68	2.63	
189	〃	25.00	23.75	7.75	7.00	1.38	1.02	3.86	
190	〃	23.50	18.25	7.50	6.25	1.64	1.33	4.15	
191	〃	24.00	19.25	7.75	6.75	1.21	0.95	3.50	
192	〃	23.25	19.50	8.25	7.00	1.26	1.08	2.89	
193	〃	24.25	19.00	8.50	7.25	1.14	0.70	3.17	
194	〃	23.50	19.25	7.75	6.50	1.26	0.74	2.25	
195	〃	23.25	19.75	8.75	7.00	1.14	0.73	3.04	
196	〃	23.75	13.75	8.75	7.25	1.11	0.66	2.27	
197	〃	24.50	19.50	8.25	6.75	1.06	0.70	2.33	
198	〃	23.25	19.25	8.00	7.00	1.26	0.96	2.86	
199	〃	23.75	20.25	9.50	8.00	1.31	0.94	3.42	
200	〃	23.00	18.00	7.75	6.00	1.26	1.01	3.53	
201	〃	23.50	18.50	7.75	6.00	1.61	1.14	4.33	
202	〃	22.50	18.75	8.25	7.25	1.20	0.86	2.78	
203	〃	24.00	19.00	8.25	6.75	1.28	0.89	3.44	
204	〃	23.75	17.75	7.75	6.25	1.16	0.60	2.80	
205	〃	23.25	18.50	8.00	6.00	1.38	1.09	3.85	
206	〃	24.00	20.00	8.00	7.00	1.16	0.93	3.42	
207	〃	23.00	18.75	8.25	6.50	1.14	0.78	2.61	
208	〃	24.50	18.50	8.00	6.50	1.36	0.98	3.85	
209	〃	23.75	18.75	8.75	7.00	1.31	0.98	3.65	
210	〃	23.00	19.25	8.25	6.75	1.48	1.03	3.94	
211	〃	23.50	18.25	7.50	6.00	1.44	0.84	3.68	
212	〃	23.00	18.50	7.75	6.00	1.00	0.93	2.63	
213	〃	24.00	20.75	8.25	7.50	1.45	0.80	3.46	
214	元祐通寶	24.50	20.50	8.50	7.25	1.35	0.93	2.83	
215	〃	24.00	20.75	8.75	7.50	1.35	0.97	2.86	
216	〃	23.25	17.50	7.50	6.25	1.38	1.04	3.37	
217	〃	23.75	20.50	8.50	7.50	1.14	0.77	2.20	
218	〃	23.75	20.00	8.50	7.00	1.37	1.02	3.36	
219	〃	23.75	20.50	8.75	7.75	0.95	0.64	2.21	
220	〃	24.00	20.50	8.25	7.25	1.23	0.73	3.26	

表6 埋納遺構古銭計測表6

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
221	元祐通寶	23.75	19.75	8.25	7.25	1.43	0.95	3.16	
222	〃	24.00	20.00	8.25	7.00	1.31	1.10	3.24	
223	〃	24.50	19.50	8.25	6.50	1.30	0.78	3.45	
224	〃	24.00	20.75	8.25	7.00	1.31	0.95	3.57	
225	〃	24.50	17.25	7.75	6.00	1.35	0.91	3.01	
226	〃	24.50	17.25	7.00	6.25	1.20	0.76	3.20	
227	〃	23.75	20.50	8.75	7.25	1.42	1.04	3.72	
228	〃	22.25	18.75	8.00	6.75	1.24	1.00	2.71	
229	〃	24.25	20.50	8.50	7.00	1.53	0.89	3.79	
230	紹聖元寶	23.00	19.00	8.50	7.25	1.42	1.03	3.61	
231	〃	23.50	20.00	7.50	6.50	1.20	0.90	2.00	
232	〃	23.50	18.50	7.25	6.25	1.35	0.77	3.27	
233	〃	22.75	19.50	8.00	7.00	1.22	0.75	2.18	
234	〃	23.25	17.00	7.50	6.50	1.42	1.09	3.43	
235	〃	23.00	18.00	8.25	7.25	1.28	1.08	2.71	
236	〃	23.75	19.00	8.00	7.00	1.20	1.04	3.04	
237	〃	23.75	19.75	8.00	7.00	1.18	0.77	2.23	
238	〃	24.25	19.50	8.00	7.00	1.29	0.78	3.41	
239	〃	24.50	20.75	8.25	7.50	1.25	0.81	3.03	
240	〃	24.25	19.75	8.00	6.75	1.39	0.88	3.10	
241	〃	24.75	20.00	8.00	6.50	1.33	1.08	3.50	
242	元符通寶	24.00	20.75	9.00	7.75	1.49	1.19	3.16	
243	〃	22.75	18.50	8.00	7.00	1.24	0.82	2.52	
244	〃	23.50	20.00	7.50	7.00	1.17	0.68	2.71	
245	〃	24.25	19.75	8.50	6.25	1.49	1.01	3.78	
246	〃	25.00	20.00	8.50	6.00	1.25	0.73	3.34	
247	〃	24.50	21.00	9.00	6.75	1.22	0.86	2.80	合わせ口
248	聖宋元寶	22.75	18.50	8.25	7.00	1.10	0.79	2.59	
249	〃	23.25	19.25	7.75	7.00	1.57	1.09	3.92	
250	〃	22.75	20.00	8.00	7.00	1.20	0.90	2.40	
251	〃	21.75	19.50	8.00	7.00	0.95	0.72	1.87	
252	〃	23.25	20.00	9.00	7.00	1.40	1.17	3.47	
253	〃	23.00	18.50	8.00	7.00	1.43	1.04	3.25	
254	〃	23.75	19.75	7.25	6.25	1.08	0.63	2.83	
255	〃	24.00	19.50	8.00	7.00	1.29	1.23	2.61	
256	〃	24.25	19.00	8.00	6.50	1.35	1.11	3.65	
257	〃	23.00	19.50	8.25	6.75	1.20	0.89	2.51	
258	大觀通寶	24.00	21.50	7.50	6.50	1.43	0.72	2.36	
259	〃	24.25	22.25	8.00	7.00	1.40	0.93	3.00	
260	〃	23.50	21.50	7.75	6.50	1.53	1.09	3.49	
261	〃	24.00	22.00	8.00	7.00	1.33	0.83	2.89	
262	〃	24.50	22.00	8.25	7.00	1.44	0.90	3.28	
263	〃	24.50	22.50	8.25	7.50	1.28	0.70	2.45	
264	〃	24.00	21.50	7.50	6.75	1.23	0.92	2.67	

表7 埋納遺構古銭計測表7

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
265	大観通寶	23.75	21.75	7.25	7.00	1.48	0.80	3.19	
266	〃	23.75	21.00	7.50	6.25	1.38	1.00	3.86	
267	〃	24.00	21.50	7.50	6.25	1.48	0.74	3.27	
268	〃	24.50	21.75	7.75	6.50	1.34	0.78	2.67	
269	〃	24.50	22.00	8.00	7.00	1.60	0.92	3.43	合わせ口
270	政和通寶	23.25	21.50	8.00	6.75	1.24	0.69	2.43	
271	〃	24.00	22.00	8.25	6.75	1.50	0.84	2.20	
272	〃	23.50	20.00	7.00	6.00	1.15	0.95	3.03	
273	〃	23.00	21.25	8.25	7.00	1.50	0.77	2.99	
274	〃	23.75	21.75	8.00	7.00	1.38	1.04	2.83	
275	〃	25.00	20.00	7.50	6.75	1.25	0.73	3.18	
276	〃	24.25	22.00	8.00	7.00	1.40	0.89	2.58	
277	〃	24.75	21.25	7.50	6.00	1.48	0.95	3.47	
278	〃	24.25	20.75	7.25	6.25	1.34	0.88	2.75	
279	〃	24.25	19.75	7.25	6.25	1.06	0.65	2.51	
280	〃	24.00	20.75	8.25	6.75	1.20	0.91	2.87	
281	〃	24.00	21.00	8.00	6.50	1.33	0.84	2.89	
282	〃	24.00	21.25	7.75	6.00	1.74	0.88	3.00	
283	〃	23.50	20.25	7.00	5.50	1.23	0.84	3.45	
284	正隆元寶	25.50	22.25	8.00	6.75	1.37	0.65	2.97	
285	〃	24.50	21.50	8.25	6.25	1.40	0.85	3.35	
286	〃	24.25	21.25	8.00	6.25	1.68	1.00	3.90	
287	淳熙元寶	23.50	18.50	8.00	7.00	1.29	0.78	2.30	
288	〃	23.50	18.25	8.00	6.25	1.16	0.76	2.38	
289	〃	24.00	19.25	8.50	6.75	1.09	0.81	2.96	
290	大定通寶	23.00	21.50	9.00	7.00	1.00	0.85	1.91	
291	紹熙元寶	23.50	19.75	8.75	7.25	1.32	0.83	2.57	
292	〃	23.25	19.00	8.75	7.00	1.39	0.76	3.10	
293	〃	22.75	21.00	8.50	7.50	1.22	0.80	1.59	
294	慶元通寶	24.00	20.50	8.75	7.00	1.27	0.73	2.24	
295	紹定通寶	23.75	21.00	8.00	7.00	1.04	0.65	1.97	背
296	〃	23.75	21.00	8.00	7.00	1.18	0.85	2.48	背四
297	淳祐元寶	24.50	20.25	9.00	7.25	1.05	0.79	2.87	背十
298	〃	23.00	19.00	8.50	6.75	1.30	1.00	2.74	背十
299	皇宋元寶	23.75	20.25	8.50	7.00	1.28	0.81	3.42	背三
300	景定元寶	23.75	21.25	9.25	7.25	0.92	0.78	1.38	背三
301	咸淳元寶	23.50	19.50	8.50	7.00	1.18	1.11	2.50	背
302	〃	23.75	20.00	9.25	6.75	0.75	0.90	2.81	背
303	洪武通寶	23.00	21.00	8.00	6.25	1.42	0.75	3.00	
304	〃	23.00	17.50	6.50	5.50	1.70	0.77	3.56	背
305	〃	22.50	19.75	7.00	6.00	1.67	0.70	2.78	
306	〃	23.00	19.00	7.00	6.00	1.69	0.72	3.52	
307	〃	22.00	17.00	6.00	5.00	1.53	1.04	3.68	背
308	〃	22.25	20.00	7.00	6.00	1.63	1.03	3.36	

表8 埋納遺構古銭計測表8

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
309	洪武通寶	22.00	19.00	7.00	6.25	1.55	0.78	2.91	
310	〃	22.00	17.25	6.50	5.50	1.57	1.12	3.85	背
311	〃	23.75	21.00	7.00	6.00	1.37	0.83	2.55	背
312	〃	22.25	18.00	7.00	6.00	1.30	0.70	3.12	背
313	〃	23.25	20.25	7.25	5.75	1.24	0.63	2.89	
314	〃	23.00	19.25	7.00	5.75	1.43	0.69	3.19	
315	永樂通寶	24.25	21.25	6.25	6.00	1.32	0.74	2.61	
316	〃	24.75	21.50	6.75	5.75	1.44	0.78	3.48	
317	〃	24.25	21.00	7.00	6.00	1.45	0.94	3.46	
318	〃	24.25	21.75	7.00	6.00	1.22	0.69	3.18	
319	〃	24.50	21.25	7.00	6.00	1.32	0.68	2.93	
320	〃	24.50	21.50	7.00	6.00	1.23	0.40	2.44	
321	〃	24.00	21.00	7.00	6.00	1.19	0.55	2.67	
322	〃	24.00	21.50	6.75	6.00	1.72	1.13	4.11	
323	〃	24.00	21.00	7.00	6.00	1.57	0.82	3.55	
324	〃	23.75	21.00	7.00	6.00	1.18	0.67	2.78	
325	〃	24.25	21.25	7.00	6.00	1.30	0.67	2.64	
326	〃	24.25	21.00	7.00	6.00	1.27	0.74	3.13	
327	〃	25.50	21.00	7.00	6.00	1.42	0.90	3.45	
328	〃	24.75	21.00	7.50	6.00	1.35	0.65	3.52	
329	〃	24.00	21.50	7.00	6.00	1.63	0.93	3.82	
330	〃	24.50	21.00	7.00	6.00	1.43	0.94	3.45	
331	〃	24.50	21.25	7.00	6.00	1.48	0.88	2.44	
332	〃	25.00	21.25	6.75	6.00	1.65	0.64	2.74	
333	〃	24.50	21.50	7.00	6.00	1.47	0.72	3.17	
334	〃	24.75	21.25	7.50	6.25	1.40	0.52	3.03	
335	〃	24.50	21.25	7.00	6.00	1.50	1.05	4.10	
336	〃	24.50	22.00	7.00	6.00	1.24	0.75	2.86	
337	〃	24.00	21.00	6.75	6.00	1.45	0.80	3.45	
338	〃	24.25	21.00	6.75	6.00	1.30	0.77	3.09	
339	〃	24.50	21.50	7.60	6.00	1.42	1.07	3.91	
340	〃	23.75	21.00	7.00	6.00	1.45	0.70	2.93	
341	〃	24.50	20.75	7.00	6.00	1.17	0.68	2.62	
342	〃	24.25	20.50	7.00	5.50	1.32	0.65	2.64	
343	〃	24.25	21.25	7.00	6.00	1.24	0.78	2.63	
344	〃	24.00	21.25	7.00	6.00	1.57	1.14	3.82	
345	〃	24.00	21.25	7.00	6.00	1.19	0.60	2.27	
346	〃	23.25	20.00	7.00	5.75	1.12	0.65	2.10	
347	〃	24.25	21.00	7.00	6.00	1.87	1.23	5.52	
348	〃	24.75	21.25	7.25	5.75	1.31	0.64	3.29	
349	〃	24.50	21.00	6.75	5.50	1.53	1.60	4.23	
350	〃	24.50	20.75	7.00	5.50	1.35	0.64	3.47	
351	〃	24.25	21.25	7.00	5.75	1.09	0.68	2.31	
352	〃	24.25	20.50	7.50	6.00	1.40	0.71	3.27	

表9 埋納遺構古銭計測表9

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
353	永樂通寶	24.25	21.00	6.75	5.50	1.33	0.64	3.04	
354	〃	24.75	21.25	7.00	5.75	1.39	0.64	2.85	
355	〃	24.75	21.25	7.00	5.75	1.40	0.69	2.98	
356	〃	24.75	21.25	7.00	5.75	1.40	0.70	3.39	
357	〃	25.00	21.25	7.00	6.00	1.43	0.70	3.66	
358	〃	24.50	21.25	7.25	5.25	1.39	0.89	3.26	
359	〃	24.50	21.00	7.25	5.75	1.24	0.71	2.92	
360	〃	24.25	21.00	7.25	5.50	1.45	0.69	3.23	
361	〃	25.00	21.50	7.00	5.75	1.18	0.69	2.92	
362	〃	24.00	21.00	7.25	6.25	1.41	0.76	3.09	
363	〃	24.25	20.75	7.25	6.00	1.11	0.64	2.44	
364	〃	24.50	21.25	7.25	5.75	1.18	0.65	2.79	
365	〃	24.25	21.25	7.00	5.75	1.29	0.59	3.05	
366	〃	26.50	21.25	6.75	5.50	1.44	0.51	3.92	
367	〃	24.00	21.25	7.00	5.25	1.41	0.68	3.00	
368	〃	23.50	20.00	7.00	5.50	1.11	0.99	3.00	
369	〃	24.50	20.50	6.75	5.75	1.66	0.71	3.97	
370	〃	24.50	21.00	7.00	5.25	1.39	0.60	2.89	
371	〃	25.00	21.50	7.00	5.75	1.51	0.85	3.63	
372	〃	25.00	21.50	7.00	5.75	1.15	0.81	3.37	
373	〃	24.25	21.00	7.00	5.75	1.34	0.94	3.81	

表10 土器埋納古銭計測表10

番号	銭種	外縁 外径 (mm)	外縁 内径 (mm)	内郭 外径 (mm)	内郭 内径 (mm)	外縁 厚 (mm)	文字 面厚 (mm)	質量 (g)	備考
374	永樂通寶	24.50	21.25	7.00	5.75	1.12	0.60	2.68	
375	〃	24.25	21.00	6.50	5.50	1.50	0.90	3.99	
376	〃	24.75	21.50	7.25	5.75	1.38	0.68	3.16	
377	〃	25.00	21.00	7.00	5.50	1.64	0.93	3.98	
378	朝鮮通寶	23.50	19.75	7.75	6.00	1.39	0.80	2.91	
379	〃	23.50	20.00	7.00	5.75	1.35	0.55	3.18	
380	宣徳通寶	25.25	20.75	6.50	5.75	1.29	0.75	3.32	
381	〃	24.75	21.25	6.75	5.75	1.28	0.89	3.70	
382	不明	24.50	21.25	9.25	8.25	1.33	1.09	3.44	
383	〃	22.50	19.25	8.50	7.25	1.13	0.87	1.89	
384	〃	23.25	22.00	8.50	7.00	1.14	1.00	2.25	
385	〃	23.25	18.00	7.75	6.50	1.27	1.13	3.01	
386	〃	23.00	18.50	7.75	6.75	1.39	1.12	3.34	
387	〃	23.25	20.75	8.75	7.50	1.19	1.00	2.83	
388	〃	24.50	19.00	7.75	6.25	1.50	1.10	3.00	
389	〃	23.75	21.00	9.50	7.75	1.08	0.95	2.46	
390	〃	23.25	20.00	7.75	6.00	1.15	1.08	2.54	
391	〃	22.25	19.75	9.25	7.25	0.85	0.82	1.63	
392	〃	23.00	19.50	8.00	6.75	1.18	0.93	2.76	
393	〃	24.25	20.25	9.25	7.00	1.00	0.84	2.40	

表11 埋納遺構古銭集計表

銭種(鑄造年)	数量	割合	元号	銭種(鑄造年)	数量	割合	元号
開元通寶(621・845・960年)	40	10.17%	唐・南唐	紹聖元寶(1094年)	12	3.05%	北宋
乾元重寶(758・759年)	1	0.25%	唐	元符通寶(1098年)	6	1.52%	〃
唐國通寶(959年)	1	0.25%	南唐	聖宋元寶(1101年)	10	2.54%	〃
太平通寶(976年)	3	0.76%	北宋	大觀通寶(1107年)	12	3.05%	〃
淳化元寶(990年)	3	0.76%	〃	政和通寶(1111年)	14	3.56%	〃
至道元寶(995年)	3	0.76%	〃	正隆元寶(1157年)	3	0.76%	金
祥符元寶(1009年)	7	1.77%	〃	淳熙元寶(1174年)	3	0.76%	南宋
祥符通寶(1009年)	3	0.76%	〃	大定通寶(1178年)	1	0.25%	金
天禧通寶(1017年)	6	1.52%	〃	紹熙元寶(1190年)	3	0.76%	南宋
天聖元寶(1023年)	13	3.30%	〃	慶元通寶(1195年)	1	0.25%	〃
明道元寶(1032年)	1	0.25%	〃	紹定通寶(1228年)	2	0.05%	〃
景祐元寶(1034年)	4	1.01%	〃	淳祐元寶(1241年)	2	0.50%	〃
皇宋通寶(1038年)	33	8.39%	〃	皇宋元寶(1253年)	1	0.25%	〃
至和元寶(1054年)	2	0.5%	〃	景定元寶(1260年)	1	0.25%	〃
嘉祐元寶(1056年)	3	0.76%	〃	咸淳元寶(1265年)	2	0.50%	〃
嘉祐通寶(1056年)	1	0.25%	〃	洪武通寶(1368年)	12	3.05%	明
治平通寶(1064年)	2	0.50%	〃	永樂通寶(1408年)	63	16.03%	〃
治平元寶(1064年)	3	0.76%	〃	朝鮮通寶(1423年)	2	0.50%	朝鮮
熙寧元寶(1068年)	40	10.17%	〃	宣徳通寶(1433年)	2	0.50%	明
元豐通寶(1078年)	44	11.19%	〃	不明	12	3.05%	
元祐通寶(1086・1093年)	16	4.07%	〃	合計	393	100.00%	

SK1 (図112)

CⅢ-1-2グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。長径1.10m, 短径0.86m, 深さ0.27mを測る。土坑の長軸方向はN-32°-Wを示す。断面形は逆台形状を呈し, 埋土は褐色粘土質シルトで上層には焼土と炭化物が混じる。埋土中からは図示した460~467の遺物が出土した。460~465は土師質土器杯の底部片である。全て回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転糸切りによる。形態的にはベタ底からやや段を持ち立ち上がる。460は内面にタール痕が認められ灯明具として使用されたものと思われる。464は内面が剥離する。466・467は青磁碗である。外

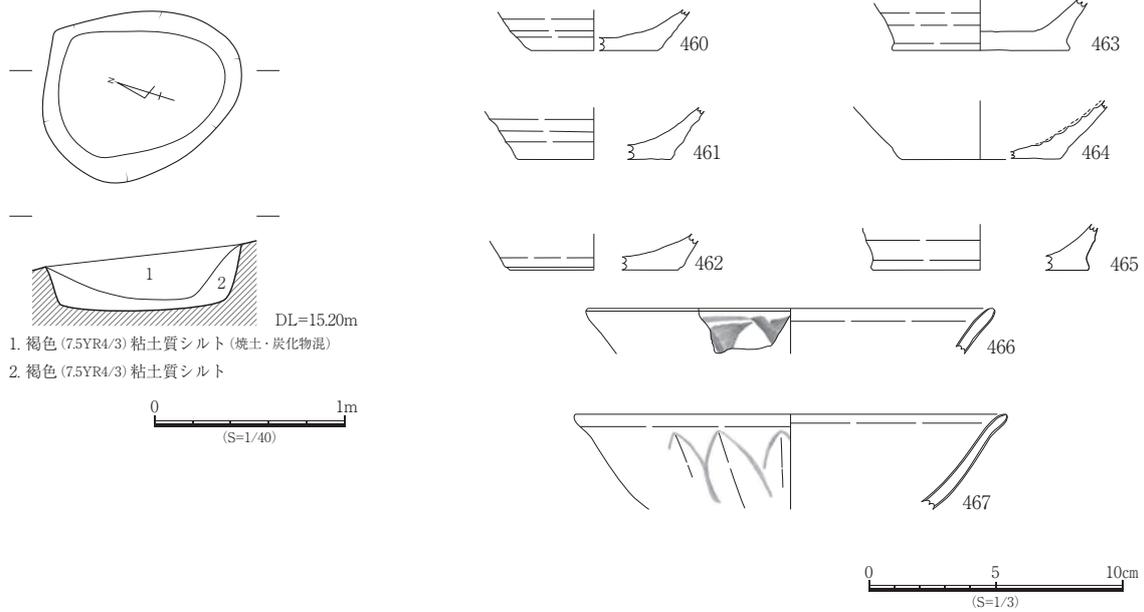


図112 II区SK1遺構図・遺物実測図

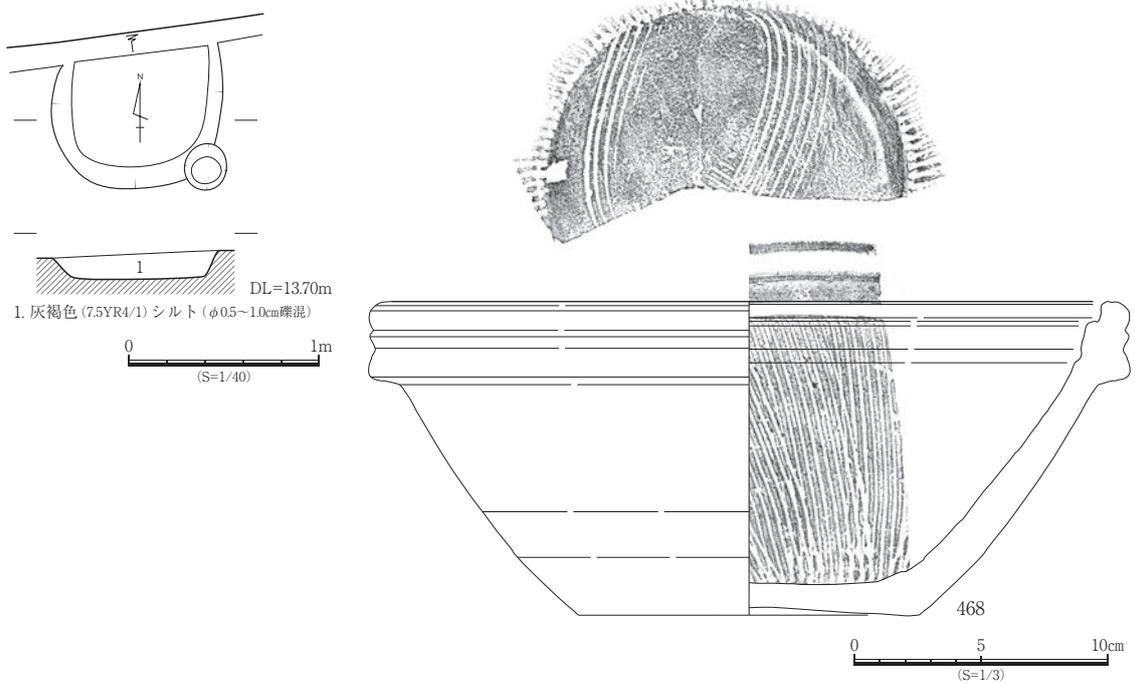


図113 II区SK2遺構図・遺物実測図

面に鎬蓮弁文が施される。467は二次被熱を受け器表面がピンホール状になる。その他、土師質土器片約25点が出土した。

SK2 (図113)

C II - 21 - 11 グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈すると考えられるが、調査区北側へ続く。長径0.89m, 短径0.72m以上, 深さ0.14mを測る。長軸方向はN - 3° - Eを示す。断面形は浅い逆台形状を呈し, 埋土は灰褐色シルトである。埋土中から関西系播鉢(468)が出土した。口縁部はヨコナデ調整により凹線が入り, 端部内面に段が入る。体部内面全体に条線が施され, 底部にも弧状に条線が認められる。胎土には長石, 花崗岩の礫粒を含む。その他, 土師質土器片4点が出土した。

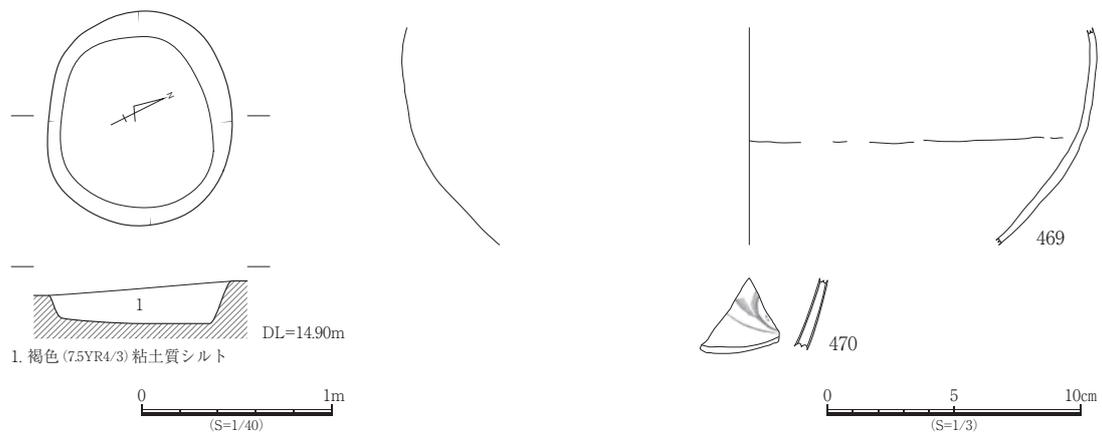


図114 II区SK7遺構図・遺物実測図

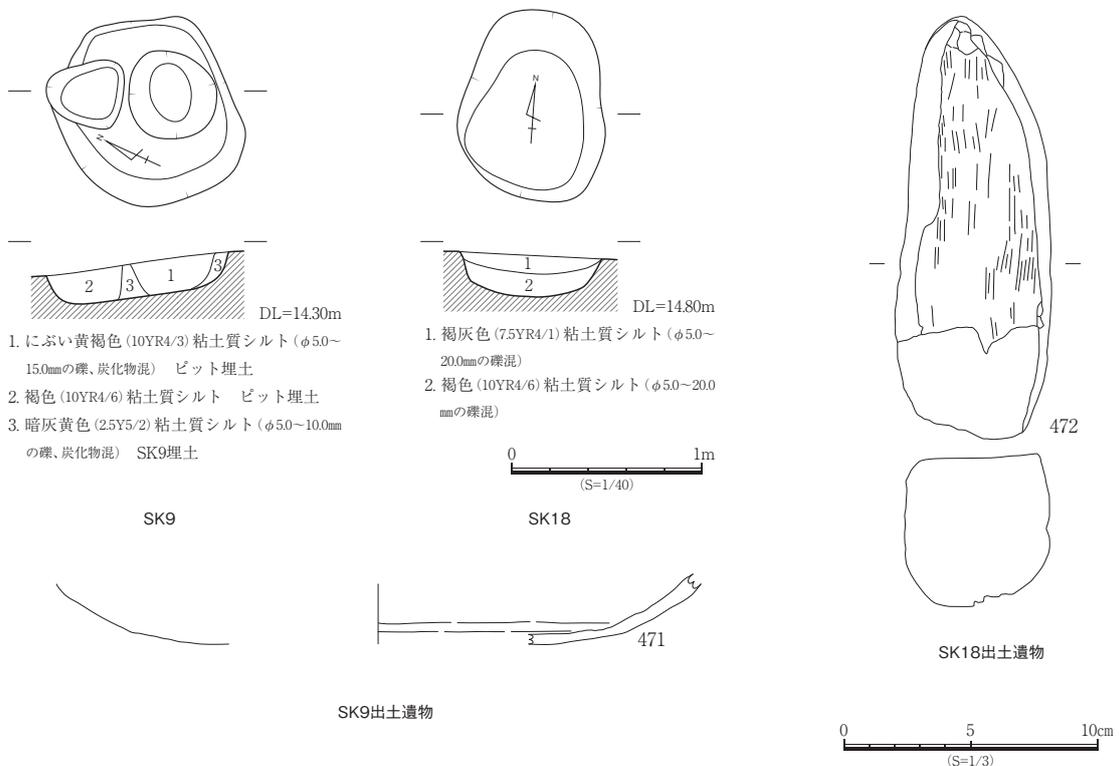


図115 II区SK9・18遺構図・遺物実測図

SK7 (図114)

C II-21-22・C III-1-2グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。長径1.14m, 短径0.95m, 深さ0.18mを測る。長軸方向はN-59°-Wを示す。断面形は逆台形状を呈し, 埋土は褐色粘土質シルトである。埋土中から土師質土器鍋(469), 青磁碗片(470)が出土した。469は胴部であり, 胴部内面に粘土帯接合痕, 外面は全体的に煤の付着が認められる。470は青磁碗片であり, 内面に劃花文が施される。その他, 土師質土器片5点が出土した。

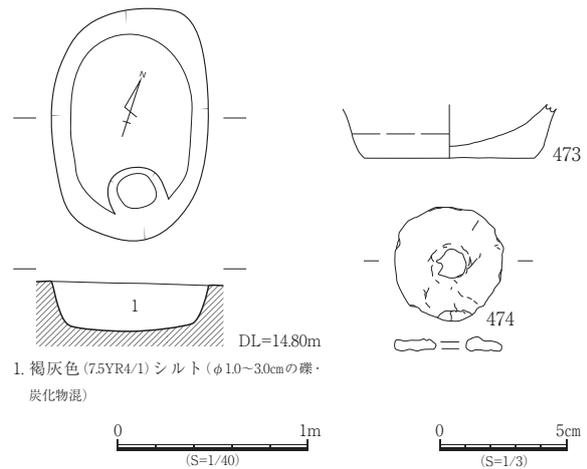


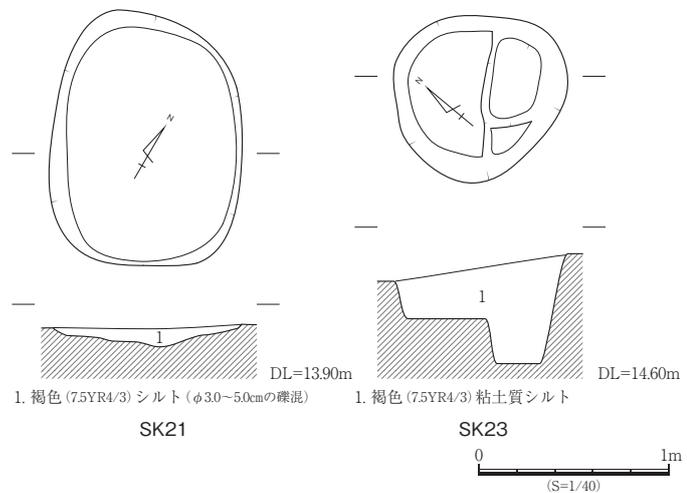
図116 II区SK19遺構図・遺物実測図

SK9 (図115)

C II-21-16・21グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈するが, 2つのピットに切られている。長径1.02m, 短径0.90m, 深さ0.20mを測る。土坑の長軸方向はN-48°-Eを示す。断面形は逆台形状で, 埋土は暗灰黄色粘土質シルトである。埋土中から瓦質土器鍋の底部片(471)が出土した。内面の底部と体部の境目に接合部が認められる。底部の器壁は薄く仕上げる。その他, 土師質土器2点が出土した。

SK18 (図115)

B III-4-15グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。長径0.98m, 短径0.78m, 深さ0.24mを測る。土坑の長軸方向はN-6°-Eを示す。断面形はU字状で, 埋土は褐灰色粘土質シルト及び褐色粘土質シルトである。埋土中から砥石(472)が出土した。流紋岩製の仕上砥である。一側面のみ使用されており, 平らな面を成す。その他, 土師質土器片15点が出土した。



SK19 (図116)

B III-4-19・20グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。長径1.22m, 短径0.82m, 深さ0.27mを測る。長軸方向はN-25°-Wを示す。断面形は逆台形状を呈し, 埋土は褐灰色シルトである。埋土中から土師質土器杯の底部片(473)と, 鉄銭(474)が出土した。473は, 回転ナデ調整, 底部切離しは回転糸切りであり, 胎土に黒色粒が

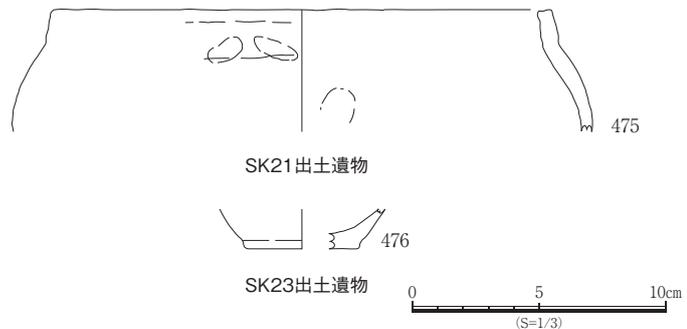


図117 II区SK21・23遺構図・遺物実測図

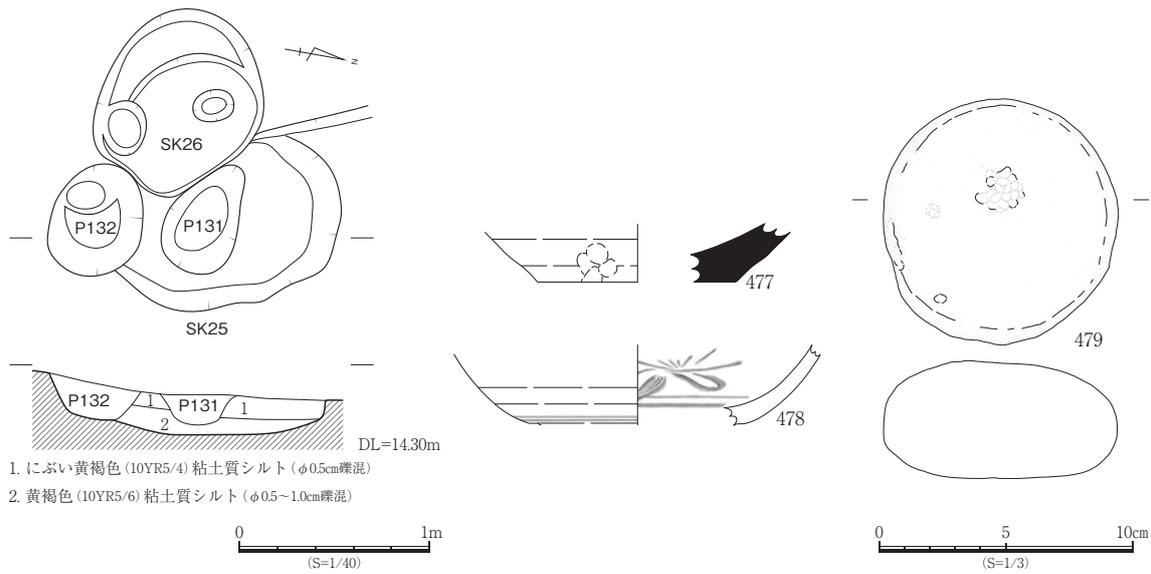


図118 II区SK25遺構図・遺物実測図

認められる。474は鉄銭で、無文で重量が1.6gを測る。その他、土師質土器片4点が出土した。

SK21 (図117)

B II - 25 - 23グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈する。長径1.33m, 短径1.02m, 深さ0.13mを測る。長軸方向はN - 26° - Wを示す。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐色シルトである。埋土中から瓦質土器鍋(475)が出土した。475は膨らみのある胴部から口縁部は直立気味に仕上げる。口縁部はヨコナデ調整が施され、胴部は指頭圧痕が残る。その他、土師質土器片18点が出土した。

SK23 (図117)

C II - 21 - 17グリッドで検出した土坑である。平面プランは円形を呈する。長径0.92m, 短径0.88m, 深さ0.55mを測る。長軸方向はN - 34° - Wを示す。断面形は逆台形状を呈し、北側にテラス状の段を持つ。南東側は柱痕と思われる。埋土は褐色粘土質シルトである。埋土中から土師質土器杯の底部片(476)が出土した。回転ナデ調整, 底部切離しは回転糸切りであり, 内面にタールが付着している。灯明皿として使用されたものと思われる。その他, 瓦質土器1点が出土した。

SK25 (図118)

C II - 21 - 18グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。南側はSK26とP131・132に切られているが、長径1.25m, 短径0.78m以上, 深さ0.23mを測る。長軸方向はN - 14° - Wを示す。断面形は皿状を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルト及び黄褐色粘土質シルトである。埋土中から477~479の遺物が出土した。477は、東播系須恵器鉢の底部片であり、胎土に2.0mm以下の礫を多く含む。478は青磁碗片であり、内面に劃花文が施される。479は花崗岩製の叩石であり、一側面に敲打痕が残る。その他、土師質土器片6点が出土した。

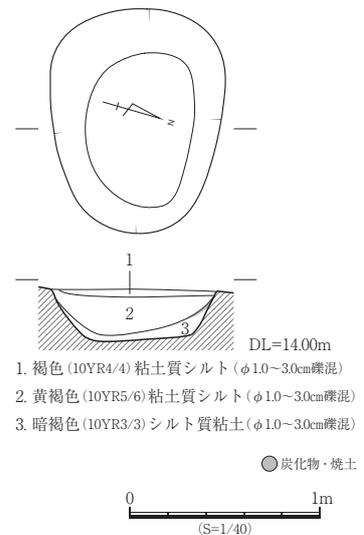


図119 II区SK43遺構図

SK43 (図119)

BⅢ-4-3グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。長径1.20m, 短径0.83m, 深さ0.28mを測る。長軸方向はN-71°-Eを示す。断面形は逆台形状を呈し, 埋土は褐色粘土質シルト及び黄褐色粘土質シルト及び暗褐色シルト質粘土である。暗褐色シルト質粘土の上面に炭化物と焼土の薄い層がみられる。埋土中からは図示し得なかったが, 弥生土器片26点, 土師器片8点, 土師質土器片73点, 須恵器片1点, 陶器片1点などが出土した。

溝跡**SD3** (図120)

BⅢ-5-1・2グリッドで検出した溝跡である。プランは東西方向と南北方向の3方を囲む形状で, 全長は9.92mである。形状から, 何らかの区画溝の性格も考えられる。幅は0.26~1.00m前後, 深さは0.04~0.17mを測る。断面形は皿状で, 南側に一部深く落ち込む。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトである。埋土中から土師質土器杯の底部片(480)が出土した。480は底部に段を持つ。回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転糸切りによる。内面にタールが付着しており灯明皿として使用されたものと思われる。その他に土師質土器片32点が出土した。

SD2 (図121)

BⅡ-25-24, BⅢ-5-4グリッドで検出した溝跡である。SD2はいの町道調査Ⅱ-1区で検出されたSD18の延長にあたり, 調査区北壁で東方向にほぼ直角に曲がる。いの町道調査では検出長9.09m, 幅0.26~0.54m, 深さは最深部で0.35mを測り, 総延長は23.34mを検出した。区画溝になるものと思われ, 特に屈曲部がV字状にきつくなる。全長14.25m以上, 幅0.43~0.77m前後, 深さは0.32~0.41mを測る。埋土は褐色粘土質シルトで, 埋土中から須恵器杯の底部片(481)が出土した。内底部にロクロ目を残す。その他に須恵器片1点, 瓦質土器片7点, 備前焼片2点, 土師質土器片33点, 鉄滓162.0gが出土した。

SD4 (図121)

BⅡ-25-23, BⅢ-5-3グリッドで検出した溝跡である。プランは, 南北方向から東西方向へ延び, 調査区北側へ続く。全長は7.26m以上になると考えられる。幅は0.23~0.42m以上, 深さは0.07

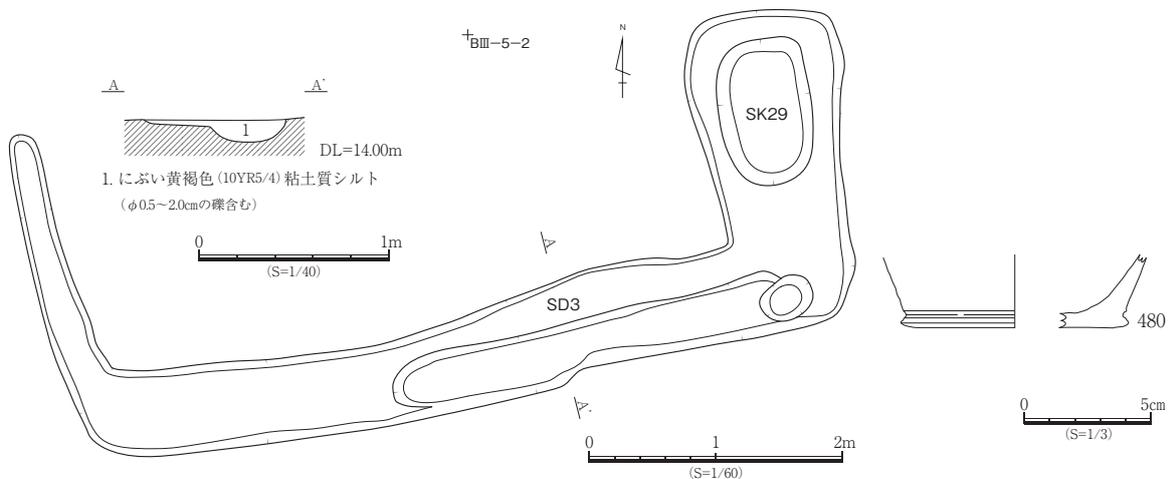


図120 II区SD3遺構図・遺物実測図

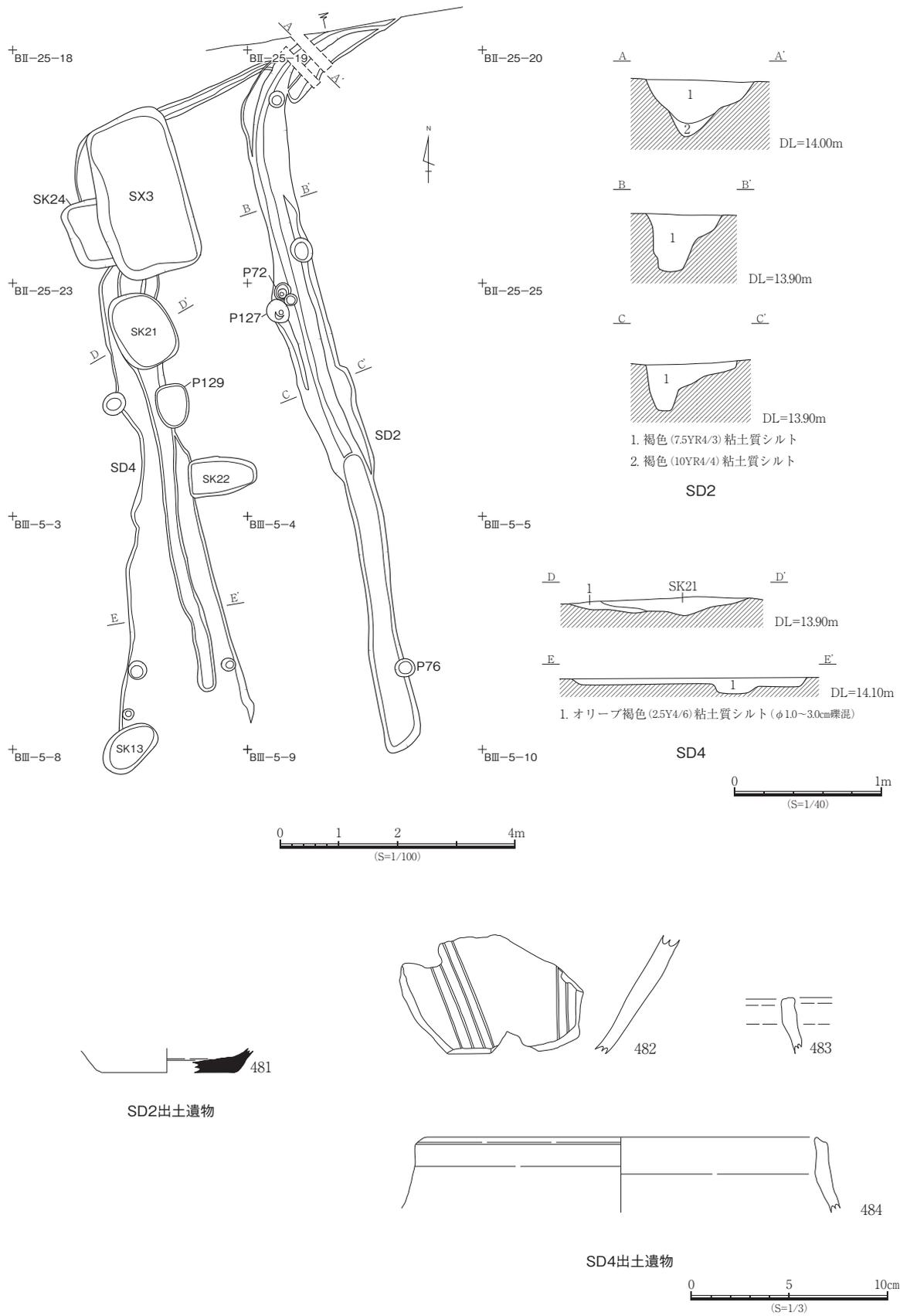
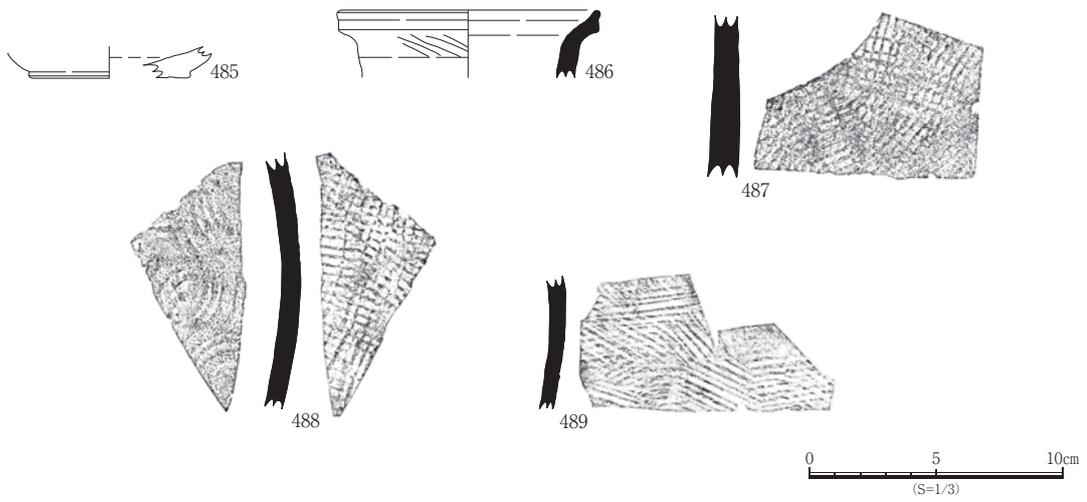
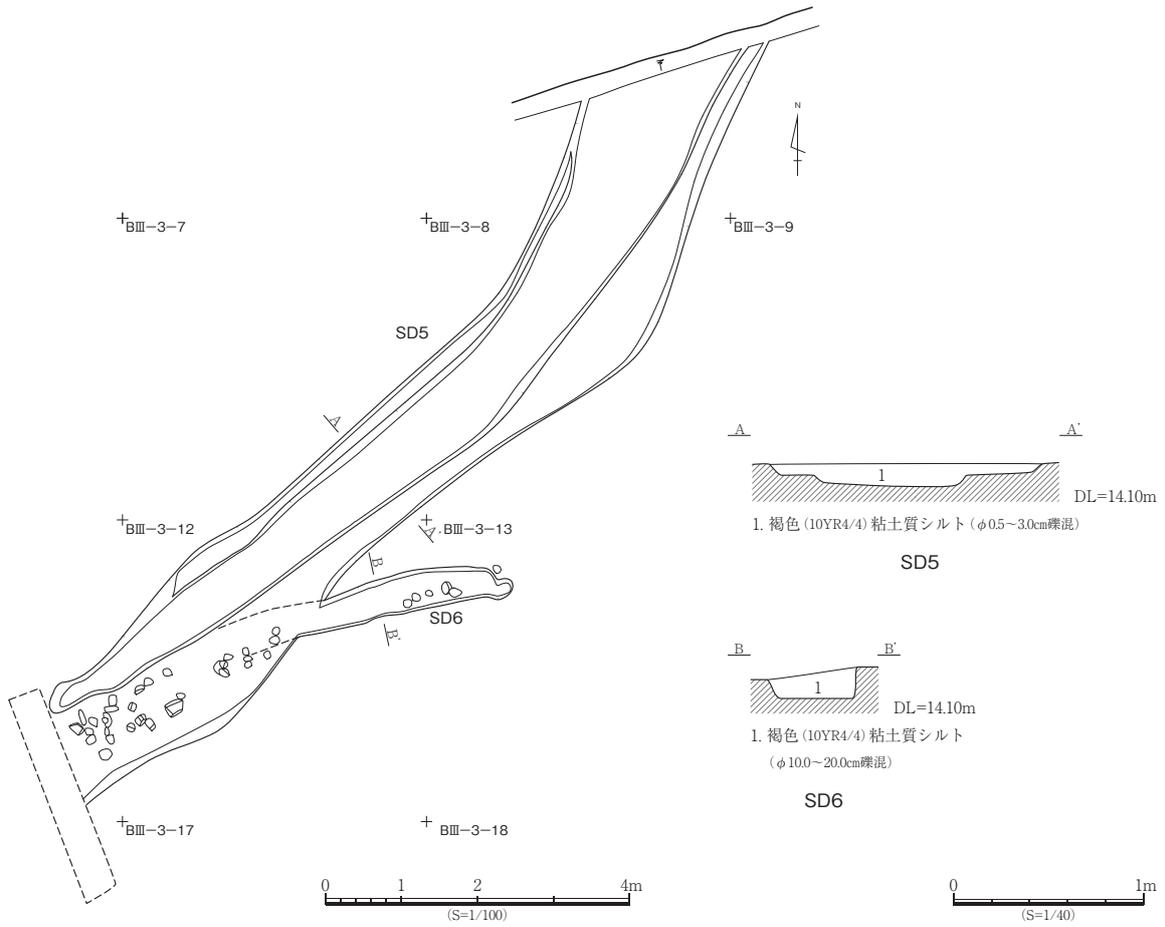


図121 II区SD2・4遺構図・遺物実測図



SD5出土遺物

図122 II区SD5・6遺構図・遺物実測図

～0.16mを測る。断面形は皿状で、一部テラスを持つ。SD4もSD2に並行して延びており、SD2に伴う区画溝と思われる。埋土中からは482～484の瓦質土器が出土した。482は挿鉢であり、内面に4条一単位の条線が施される。483・484は鍋の口縁部片であり、ヨコナデ調整が施され端部は面を成す。484の口縁端部は内側へツマミ出し、端面が凹線状に凹む。埋土はオリーブ褐色粘土質シルトである。その他に瓦質土器片2点、土師質土器片21点が出土した。

SD5 (図122)

BⅢ-3-3・8他グリッドで検出した溝跡である。プランは、東西方向から南北方向へ延び、調査区北側へ続く。全長は12.30m以上になると考えられる。幅は1.44～2.00m前後、深さは0.04～0.20mを測る。断面形は浅い皿状で、一部テラスを持つ。埋土は褐色粘土質シルトである。埋土中からは485～489の遺物が出土した。485は土師器椀の底部片であり、低い円盤状高台を呈する。486～489は須恵器であり、486は壺の口縁部片である。486の口縁部は上方に拡張されナデ調整が施される。外面口縁部直下に斜上の刻みが施される。487～489は甕の胴部片であり、487・488は格子状のタタキ目、489は平行のタタキ目が残る。488の内面は同心円状の当て具痕が残る。その他弥生土器片68点、須恵器片6点、瓦質土器片6点、黒色土器片1点、緑釉陶器片2点、土師器片144点、鉄滓653.5g、石製品2点が出土した。

SD6 (図122)

BⅢ-3-12・13他グリッドで検出した溝跡である。プランは、東西方向へ延び、SD5と接する。全長は2.70m以上になると考えられる。幅は0.53m前後、深さは0.09m前後を測る。断面形は逆台形である。埋土は褐色粘土質シルトで、土師質土器片7点が出土した。

SD8 (図123)

BⅢ-4-2・3グリッドで検出した溝跡である。プランは、東西方向から南北方向へ延び、SD7に切られる。全長は6.30m以上になると考えられる。幅は0.24～0.43m前後、深さは0.19～0.28mを測る。断面形はU字型、一部V字型である。埋土は褐色粘土質シルト及び暗褐色粘土質シルトである。

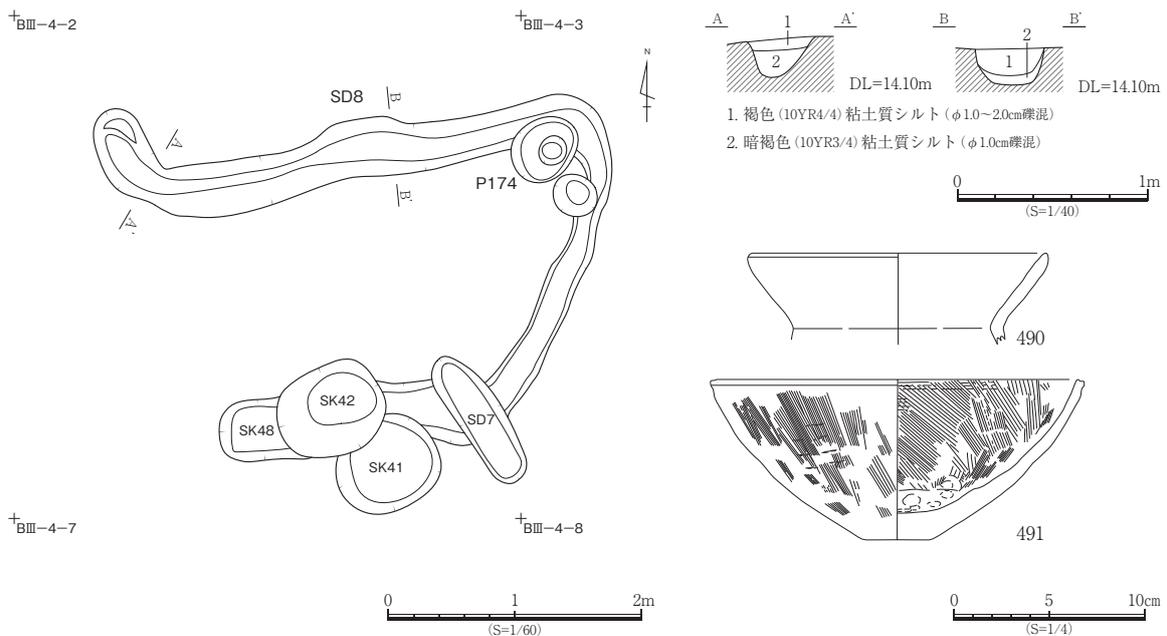


図123 II区SD8遺構図・遺物実測図

2. II区

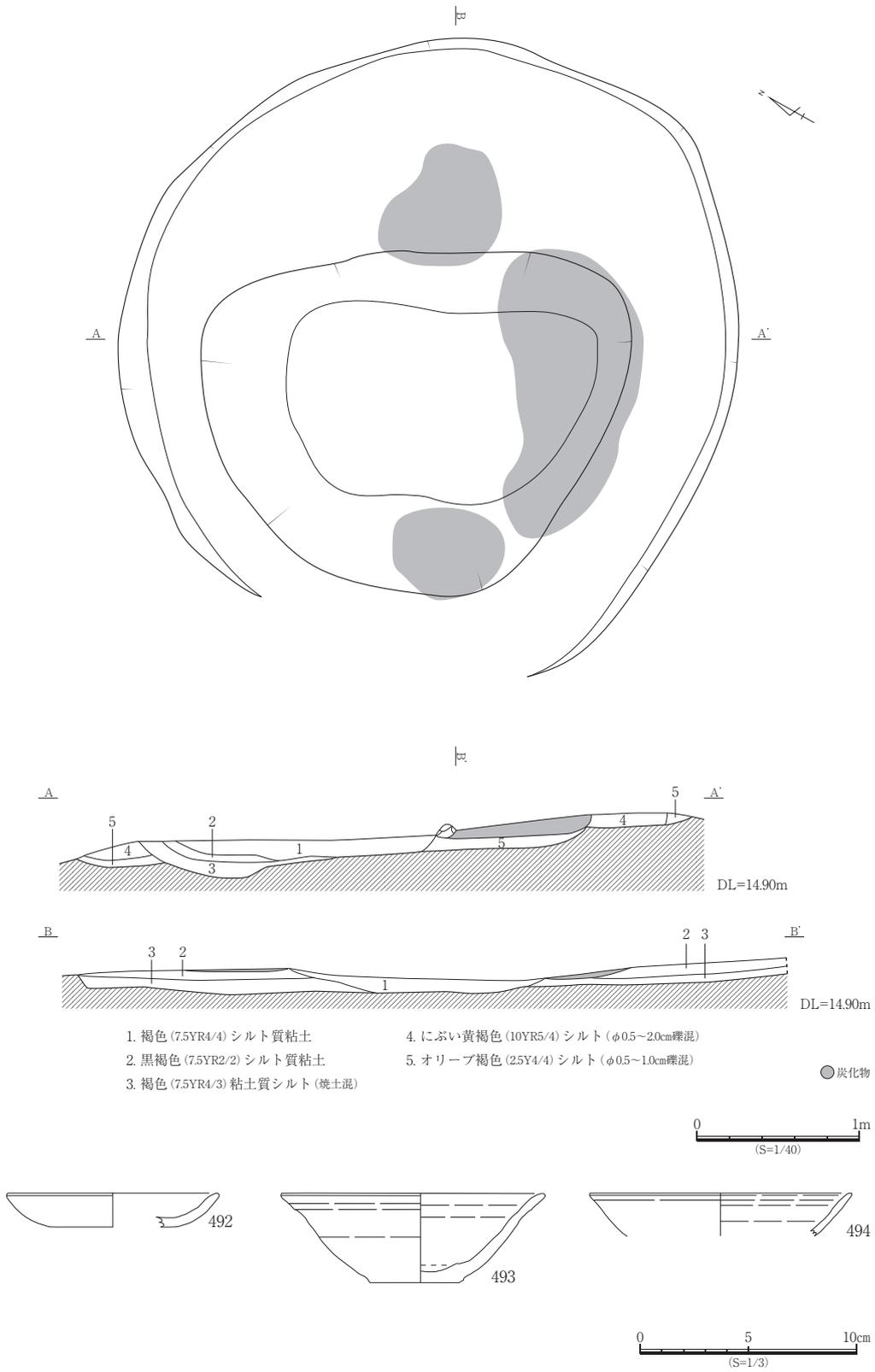


図124 II区SX1遺構図・遺物実測図

埋土中からは弥生土器壺の口縁部片(490), 鉢(491)が出土した。490の口縁部は外方に長く伸び、端部は丸みを帯びる。胎土に3.5mm大のチャートを含む。491は平底から内湾しながら立ち上がり、口縁端部は面を成す。内外面はハケ調整が施される。その他弥生土器片108点, 土師器片10点, 須恵器片10点出土した。

性格不明遺構

SX1 (図124)

調査区南部BⅢ-5-7・13グリッドで検出した円形プランの遺構である。長径4.36m, 短径3.79m, 深さ0.09mを測る浅い皿状の落ち込み中央部に, 長径2.65m, 短径2.12m, 深さ0.24mを測る不整円形状の落ち込みがある。これらの状況から何らかの焼成施設の可能性がある。プラン中央部の検出面上で炭化物が集中して検出され, 中央部落ち込みの3層は焼土を含む。埋土は粘土質のシルトが互層に堆積しており, 埋土中からは図示した土師質土器供膳具(492~494)の他に鉄滓, 粘土塊が出土した。492は皿であり内湾しながら短く立ち上がる。493・494は杯であり, 493はベタ底から内湾して立ち上がり, 口縁部は外反する。内底部は凹む。ロクロ成形, 回転ナデ調整, 底部切離しは回転糸切りが施される。494もロクロ成形である。

(2) 下面遺構と出土遺物

ピット

P250 (図125)

BⅢ-2-19グリッドで検出した長径0.62m, 短径0.60m, 深さ0.12mを測る円形のピットである。埋土は褐色粘土質シルトであり, 断面は台形状を呈する。埋土中から緑釉陶器皿の底部(495), 叩石(496)が出土した。495は京都系の緑釉陶器皿であり円盤状高台である。全面に緑釉が施される。496は砂岩製の叩石の断片であり, 一部に敲打痕が残る。その他に弥生土器片が3点, 須恵器片1点, 土師質土器片15点出土した。

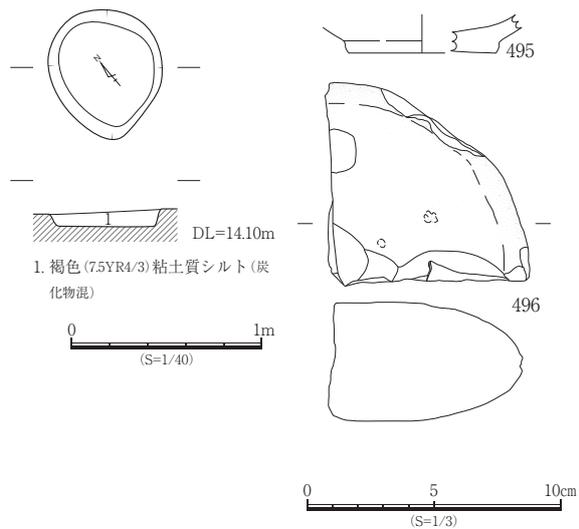


図125 II区P250遺構図・遺物実測図

下面ピット出土遺物(図127 497~508)

II区西部の下面ピットからは図示した497~508の遺物が出土した。出土地点は遺物観察表に記載した。以下に器種ごとに記述する。497・498は弥生土器の甕片である。497は口縁部片であり, 「く」の字に外反し, ナデ調整が施され端部は面を成す。胴部内面はヘラ状工具による横方向のケズリが認められる。498は底部片であり, 僅かに平らな部分を残す。外面に僅かにタタキ目が残る。内面はナデ調整が施される。497・498ともに胎土にチャートを含む。499は黒色土器碗片であり, 内面のみ黒色である。ヘラミガキが施される。500は須恵器甕片である。外面に格子目のタタキ成形痕, 内面に青海波状に当て具痕が残る。501・502は土師器羽釜である。501は水平な鏝が付く。鏝端部はナデにより凹線状に凹む。口縁部は内傾し, 端部は沈線状に凹む。胴部外面は縦方向のハケ調整

2. II 区

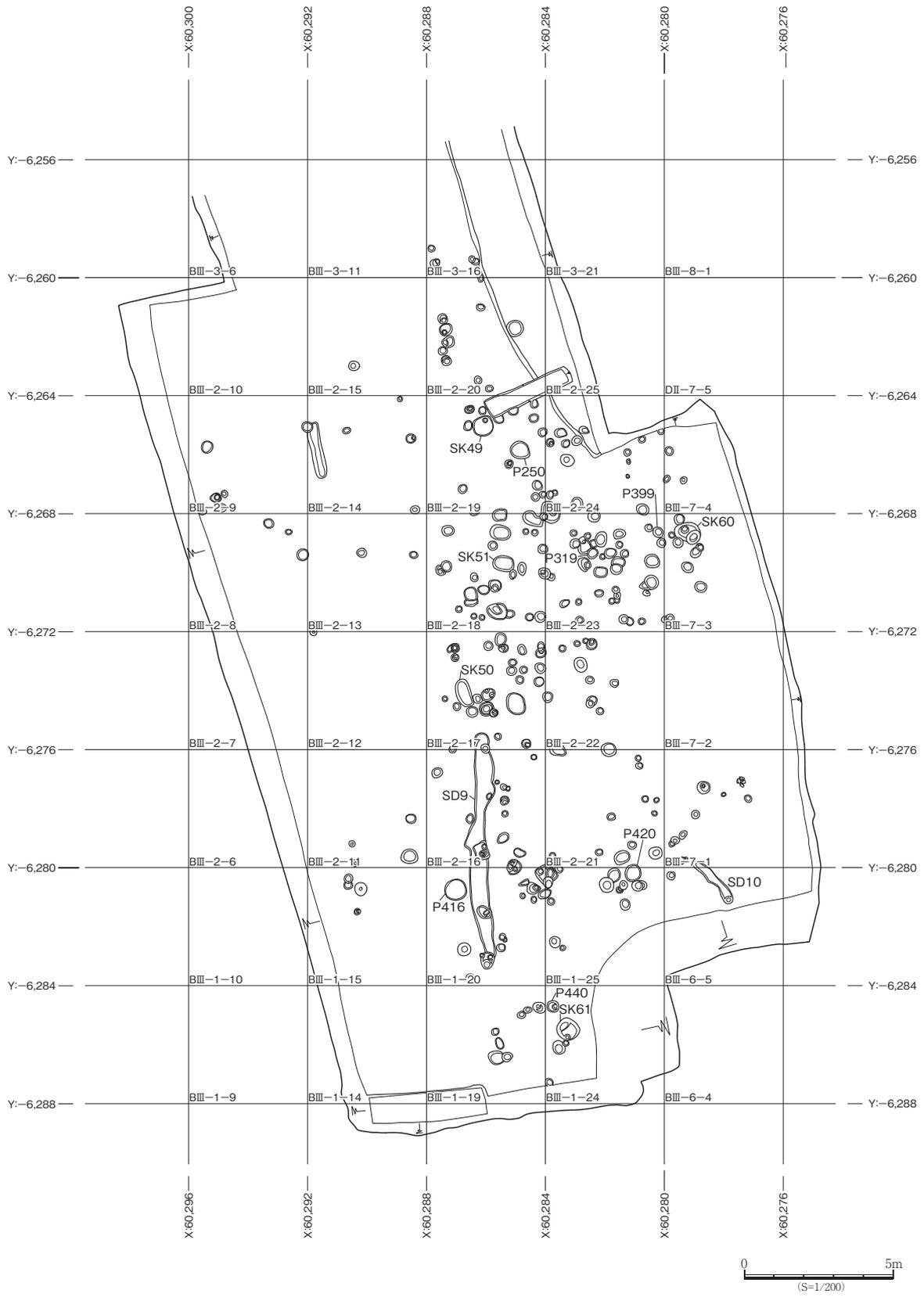


图126 II区下面遺構配置図

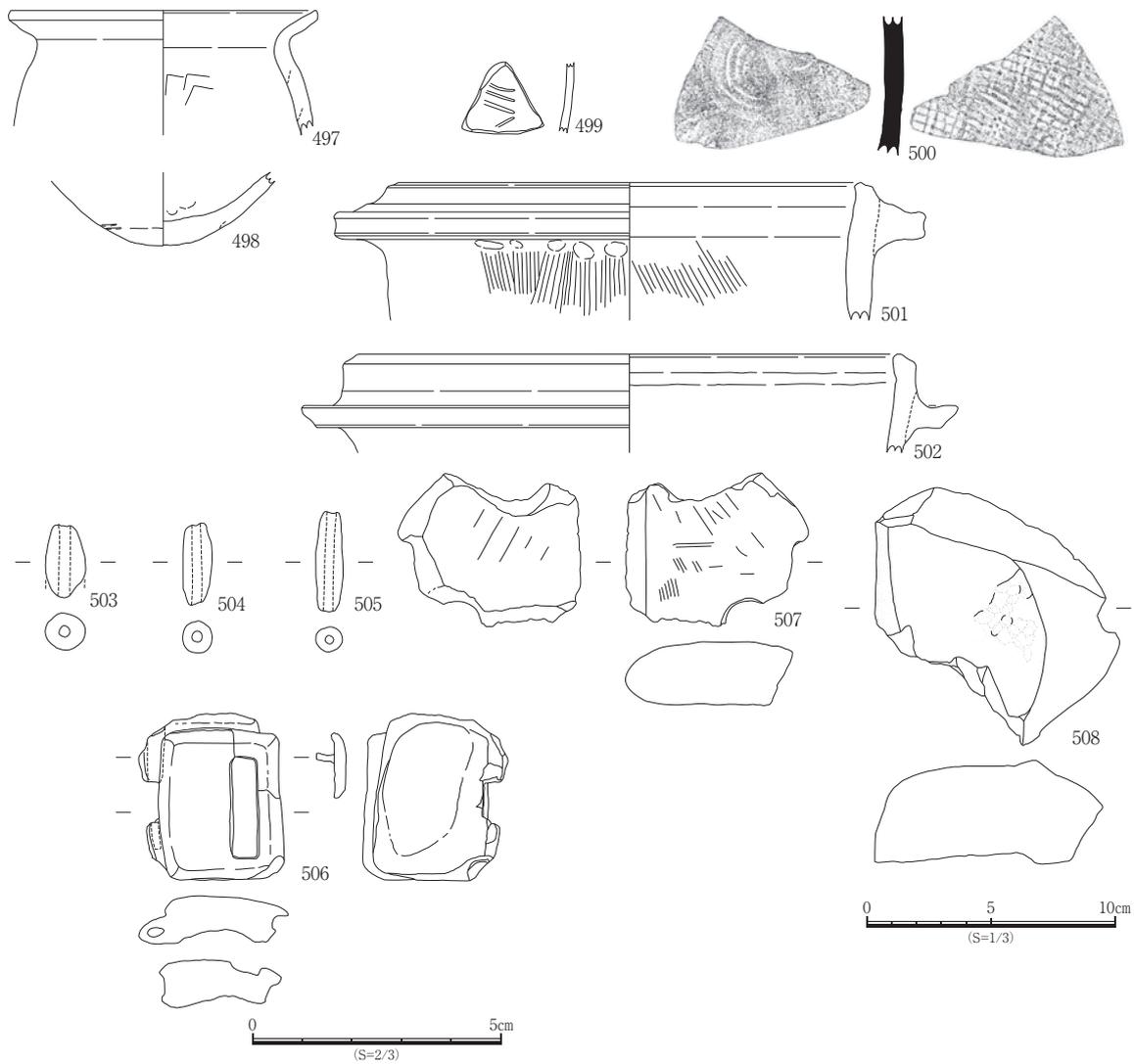


図127 II区下面ピット遺物実測図

が施され、内面の一部にもハケ目を残す。502の鏝端部は外傾し面を成す。口縁部は上方に拡張され端部は内傾する面を成す。口縁部内面には強いナデ調整が施され沈線状に凹む。501・502ともに摂津系の羽釜である。503～505は土錘で、いずれも管状土錘である。506は銅製の銚帯金具であり鉸具か巡方と思われる。一方向に長方形のホゾ穴が認められる。片隅の一部が剥離し、裏面は鉤状の突起が付く。表金具と裏金具を留めるための鉤と思われる。また、一方には、両側から固定するためのラグ状の突起部があり、内側に直径1.5mm前後の円孔を穿つ。507は砥石であり流紋岩製である。仕上砥で両面に擦痕が付く。508は砂岩製の叩石の断片であり一側面に敲打痕が認められる。

土坑

SK51 (図128)

BⅢ-2-18グリッドで検出した土坑である。楕円形を呈し、長径0.72m、短径0.53m、深さ0.10mを測る。土坑の長軸方向はN-4°-Eを示す。断面形は皿状を呈す。遺構埋土は灰褐色粘土質シルト及び褐色粘土で、間に焼土層を挟む。埋土中からは土師器細片と鉄滓が出土した。鉄滓の一部は碗形

を呈するものであり埋土中に焼土が認められる事から鍛冶に関連する土坑と思われる。

SK61 (図128)

BⅢ-1-24グリッドで検出した土坑である。平面プランは円形を呈し、長径0.74m、短径0.70m、深さ0.20mを測る。土坑の長軸方向はN-48°-Wを示し、断面形は逆台形状である。南西側にテラスを持ち、西側は下がる。遺構埋土は褐色粘土質シルトで、埋土中から図示した管状土錘(509)が出土した。

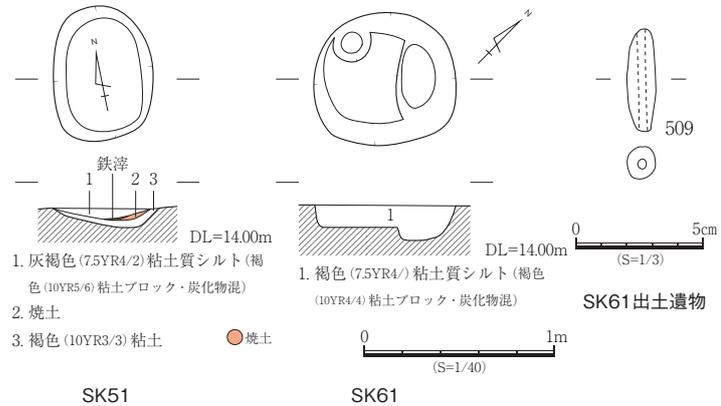


図128 II区SK51・61遺構図・遺物実測図

(3) 包含層出土遺物

II層出土遺物(図129 510～520)

II層からは17世紀後半～18世紀後半代の遺物が出土している。510～513は肥前系の陶器皿である。510は唐津産の灰釉皿であり見込みの4箇所に見込みの砂目が見られる。高台の畳付の一部にも砂の付着が見られる。511の断面長方形の高台が付く。高台脇より内側を深く削り込む。内面から外面体部下半まで白土化粧が施される。512は内野山窯の銅緑釉が施された皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。513は唐津産の鉄釉皿であり、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、アルミナ砂痕が見られる。高台脇より、内側を深く削り込む。514は尾戸焼の灰釉が施された碗である。高台は尖り気味に仕上げ、畳付の釉は削り取る。515は瀬戸美濃系の天目茶碗である。褐釉地に黒褐釉により模様が入る。高台脇の削りが深く、シャープに削る。516・517は肥前系磁器である。516は皿であり、内面に唐草文が施される。517は八角鉢であり、外面に梅花文が施される。518は泥面子であり、外面に桐紋がスタンプされる。519は寛永通宝である。520は石臼で上臼の断片である。上面は凹み内面にハツリ痕が顕著に残る。白面は凹みを持ち、軸受穴は欠損する。ものくばりの凹みは縁辺に付く。白面の溝は復元して6分画になるものと思われる。

III層出土遺物(図130～134 521～526)

III層からは13～15世紀にかけての遺物が出土している。521～526は土師質土器である。521～523は杯であり、ロクロ成形、底部切離しは回転糸切りによる。底部から斜上外方に大きく開く。523は底部円柱作りで、外面に回転糸切り痕が残る。524は甕であり、口縁端部を上方に拡張する。ヨコナデ調整が施され、胎土に0.5mm以下の礫粒を含む。形態的には紀伊型甕の口縁部に類似する。525・526は播磨型の羽釜である。張りのある胴部から口縁部は内湾する。断面三角形の短い鑊が付く。口縁端部はやや内側に傾き面を成す。525は外面にタタキ目が見られる。

527～542は瓦質土器である。527は鉢であり、口縁部はナデ調整により外反させる。胴部外面は指頭圧痕、内面はナデ調整が施され、一部にハケ状工具による調整痕が見られる。528・529は播鉢

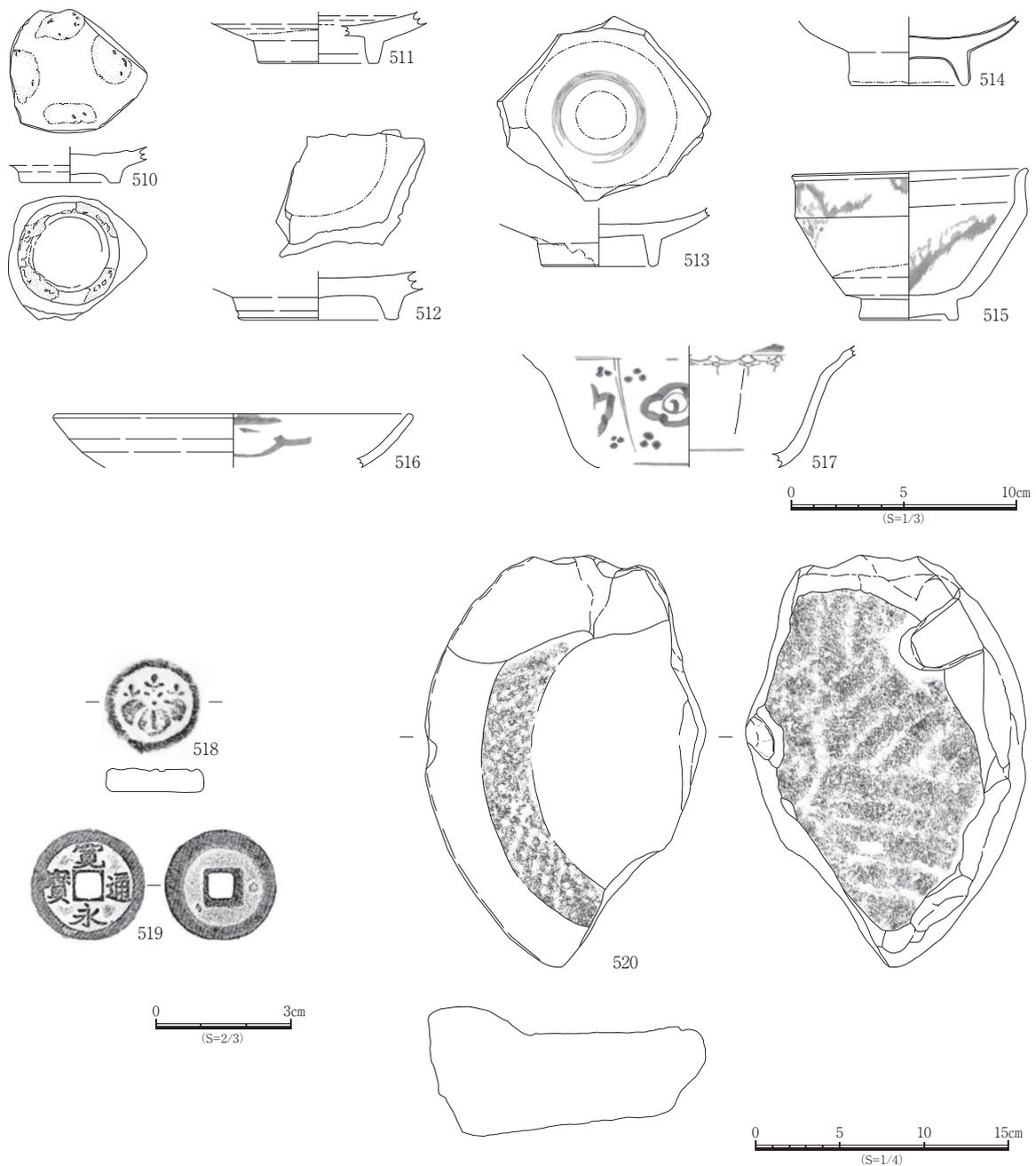


図129 II区II層遺物実測図

である。528の口縁部は、ヨコナデ調整により端部を上方に尖り気味に仕上げ、外傾する面を成す。中央部は凹む。内面に4条の櫛状工具による条線が施される。外面は指頭圧痕が残る。529の口縁部は外反し、端部は外傾する面を成す。口縁部は強いヨコナデ調整が施され、外面体部との境目と内面が凹む。外面は指頭圧痕、内面はナデ調整が施され4条の櫛状工具による条線が施される。530～541は鍋である。口縁部が直立するもの(530～537)と外反するもの(538～541)がある。口縁部直立の531～536は膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部は上方に向く。体部外面は指頭圧痕が顕著であり、口縁部はヨコナデ調整により仕上げる。口縁部は外面に粘土帯を貼付しているものもみられ(535・536)端面を観察すると接着部が沈線状に凹むものが多く見られる。537の体部は

2. II区

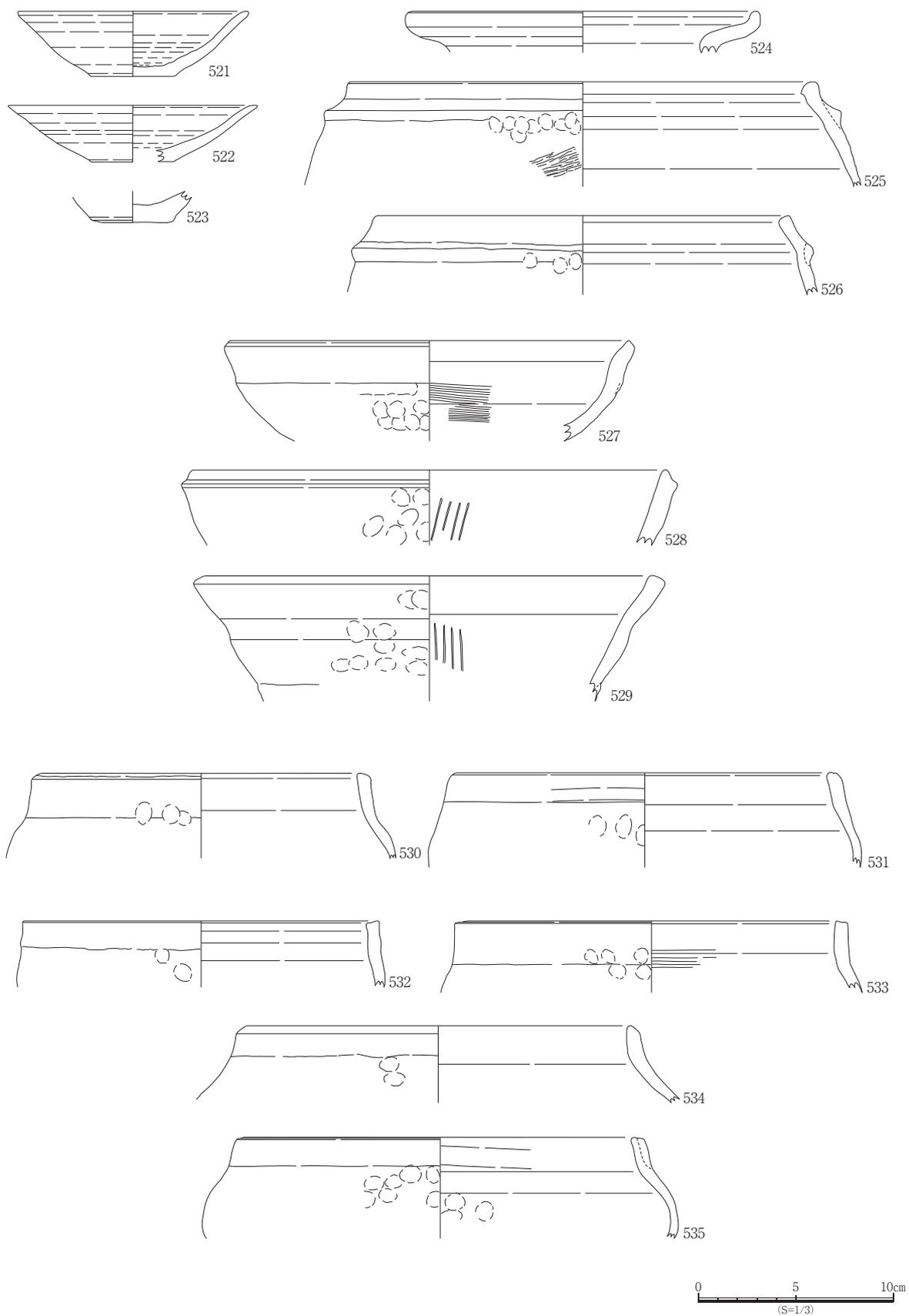


图130 II区III層遺物実測図1

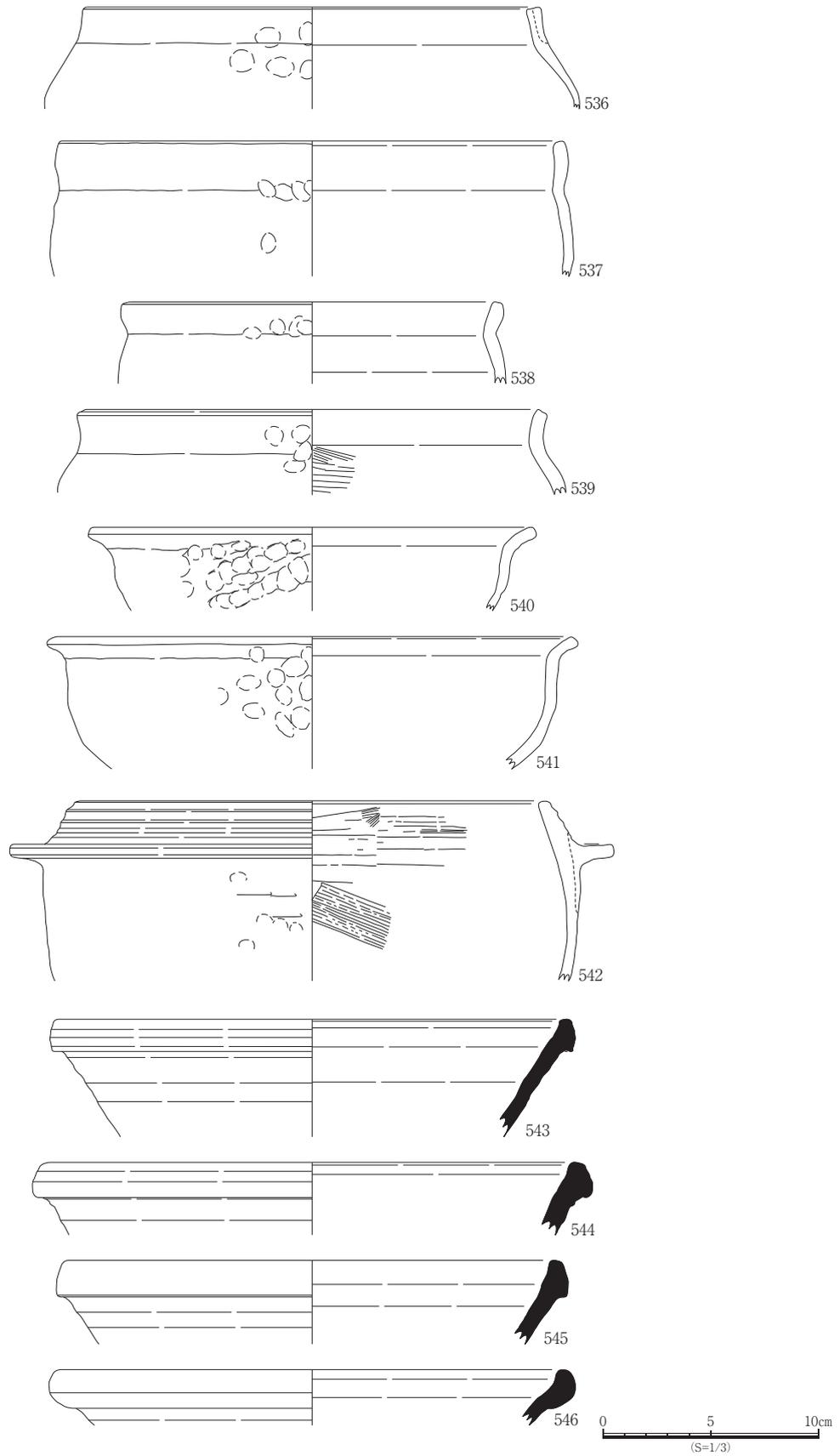


図131 II区III層遺物実測図2

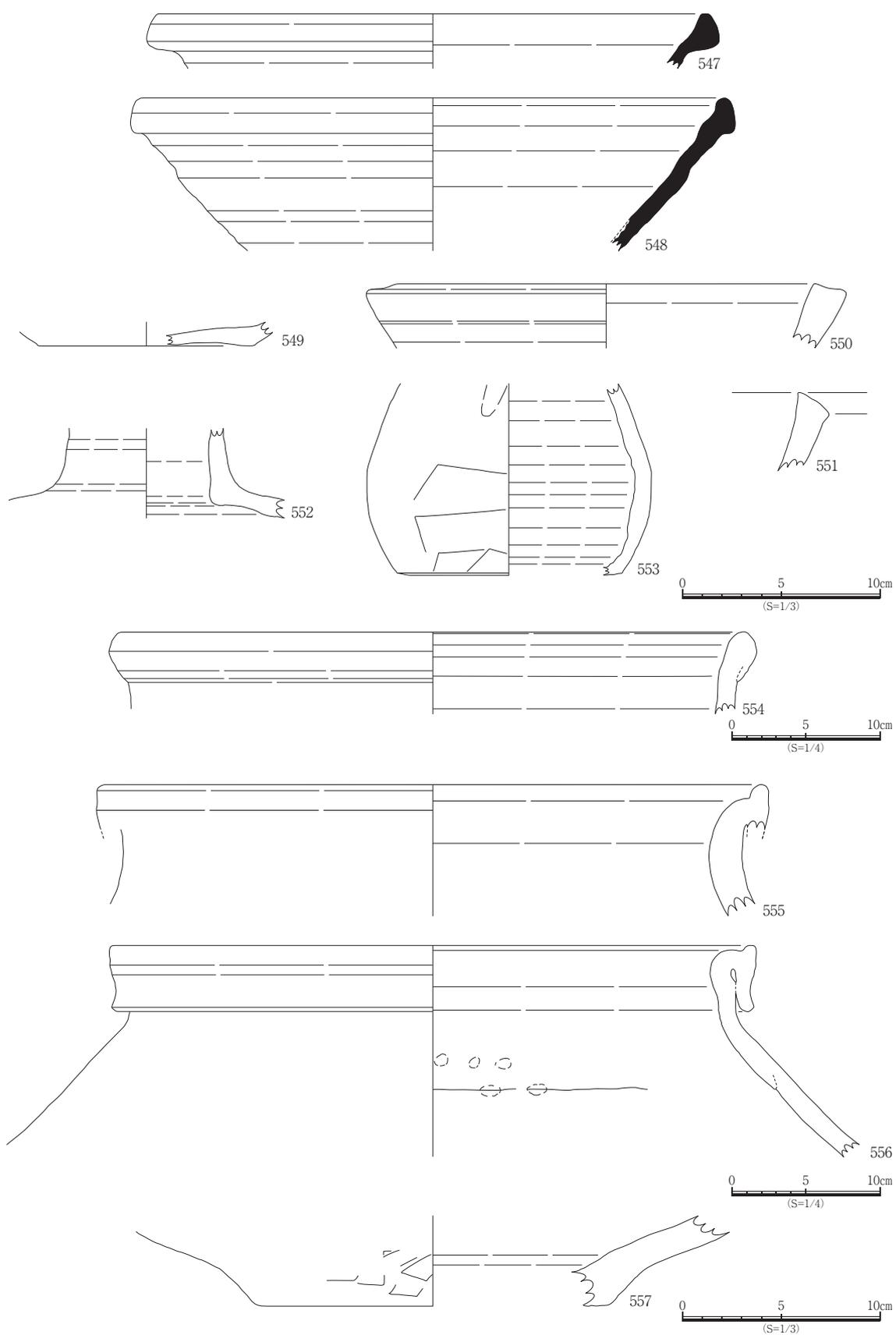


图132 II区III层遗物实测图3

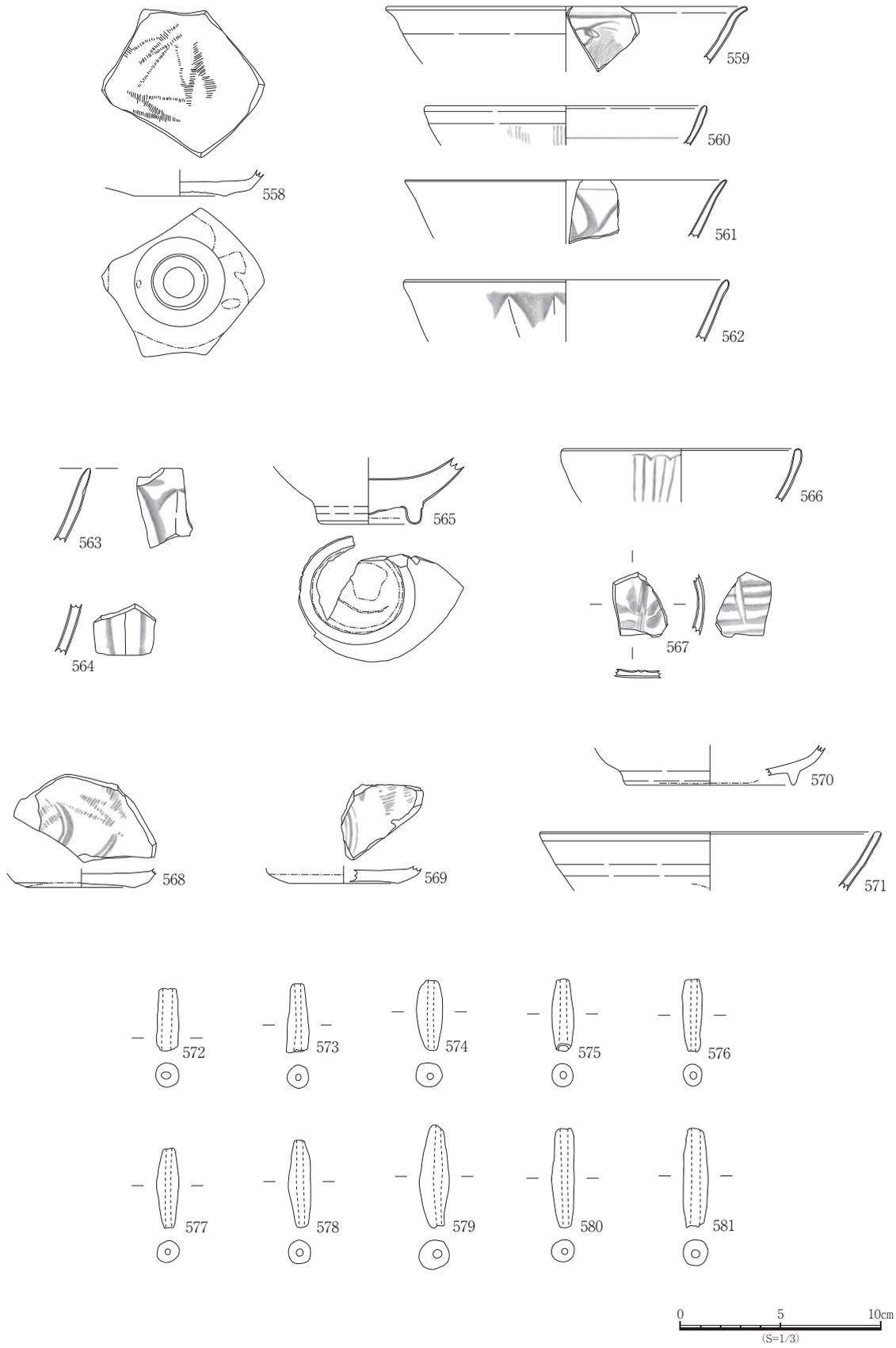


図133 Ⅱ区Ⅲ層遺物実測図4

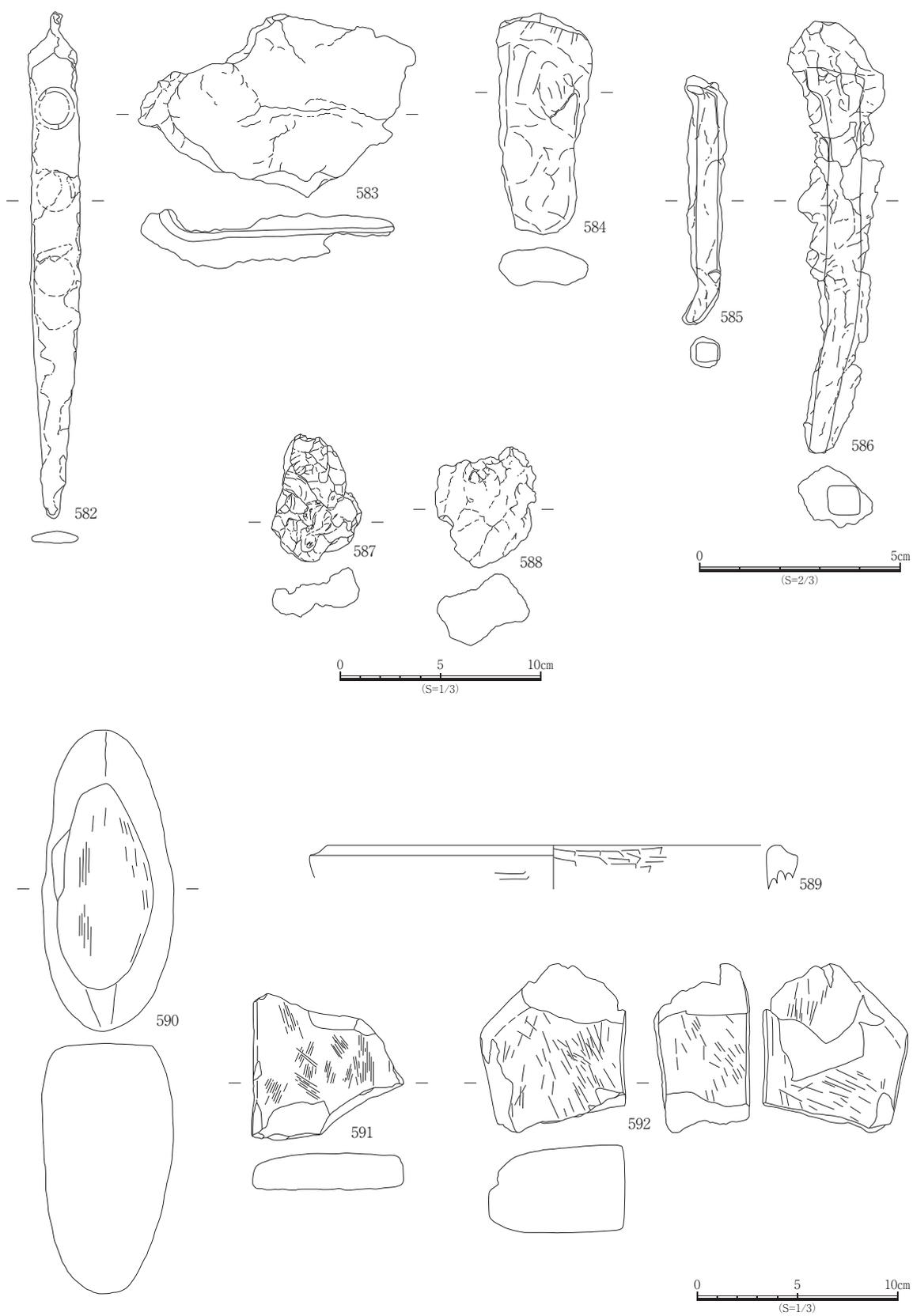


图134 II区III層遺物実測図5

あまり張りが無く、口縁部は他に比べ長く内湾気味に仕上げる。口縁部外反のものは膨らみのある体部から短く外反するもの(538・539)と、体部から外方に開くもの(540・541)がある。540は体部外面に右斜上の指頭圧痕が連続し、体部下半は器壁が薄くなる。内型成形によるものと思われる。口縁部及び内面はナデ調整により丁寧に仕上げる。541も同一のタイプである。542は河内型の羽釜である。水平な鑊が付き、口縁部はやや内傾しながら上方に延びる。口縁部はナデ調整が施され、内面は横方向のハケ調整が一部に認められる。胴部外面は鑊直下に横方向のケズリが認められる。

543～548は東播系須恵器鉢である。543～545の口縁部は上下に拡張され玉縁状を呈する。545は酸化焰焼成であり瓦質に近い。546・547の口縁部は下方への拡張が無く丸く収めた玉縁状を呈する。548は内外面ともにナデ痕が顕著であり、胎土に径2.0mm以下の砂粒を含む。いずれも東播系Ⅲ期の時期に位置付けられる。549は瀬戸美濃系の灰釉皿の底部片である。内面は全面施釉、外面は露胎である。底部切離しは糸切りによる。

550・551は備前焼播鉢である。550の口縁端部は水平な面を成し、中央部が凹む。551の口縁部はやや外傾する面を成し、僅かに面の拡張がみられる。いずれも備前Ⅲ期に位置付けられる。552は陶器壺の頸部である。全体的な色調は光沢味のある薄い褐色を呈し、外面の一部に藁灰釉が認められる。内面の頸部と胴部の接合部はヨコナデ調整により内側に突き出す。胎土に0.5mm大の白色粒と黒色粒を含む。553は備前焼の花入と思われる。平底から胴部下半が膨らみ、上位に向かって窄む。外面は板状工具によるナデ調整が施され、内面はロクロ目が顕著である。全体的に灰赤色の色調を呈し、胎土に1.5mm以下の礫粒を含む。554は備前焼甕の口縁部片である。口縁部は玉縁を呈し、外面は二次被熱により自然釉が溶け白濁した色調を呈する。

555～557は常滑焼甕である。555の口縁部はN字状に上下に拡張されるが下端が欠損する。常滑焼の6a期に位置付けられる。556の口縁部縁帯は垂下し、頸部に接合する。常滑焼の9型式に位置付けられる。557は底部片であり、外面は板状工具によりナデ調整が施される。

558～567は青磁である。558は同安窯系の青磁皿であり、見込みに櫛描文が施される。外底部はケズリ痕が顕著である。559は碗の口縁部片であり、内面に劃花文が施される。560は同安窯系の青磁碗であり、口縁部は内湾する。外面に櫛描による縦方向の条線が施される。561も同安窯系の青磁碗であり、内面に櫛描により劃花文が施される。562～564は龍泉窯系の青磁碗であり、外面に鎬蓮弁文が施される。565は青磁碗の底部片である。全面施釉で高台内面は蛇ノ目状に釉を削り取る。無文碗の底部と思われる。566も青磁碗で、外面に線描きによる細蓮弁文が施される。胎土はやや陶質である。567は青磁であるが器形は不明である。内面は葉脈状、外面は八卦文が陰刻される。

568～571は白磁である。568・569は内面に櫛描文と片彫りによる文様が施された皿である。外底部は露胎である。570は白磁の端反皿の底部で高台畳付の釉を削り取る。571は碗の口縁部片であり、外面体部下半まで全面施釉される。Ⅷ類の碗と思われる。

572～581は土錘である。全て管状で全長が3.0～4.0cmのもの(572～575)と、4.0～5.2cm内外を測るもの(576～581)がある。重量は前者が3.4～4.1g、後者が5.3～9.8gを測る。

582は銅製の筭である。全長12.8cm、全幅1.2cm、全厚0.3cmを測る。丸文が三つ並んだ彫金が施される。583は銅製で板状を呈する。重さが58.6gと重量感がある。584は板状の鉄器である。短辺が湾曲する。585・586は鉄釘である。双方とも角釘であり、585は全長6.3cm、全幅0.7～0.8cmを測る。586は全長10.9cm、全幅2.0cmと比較的大型である。587・588は鉄滓である。587は59.8g、588は110.0g

2. II区

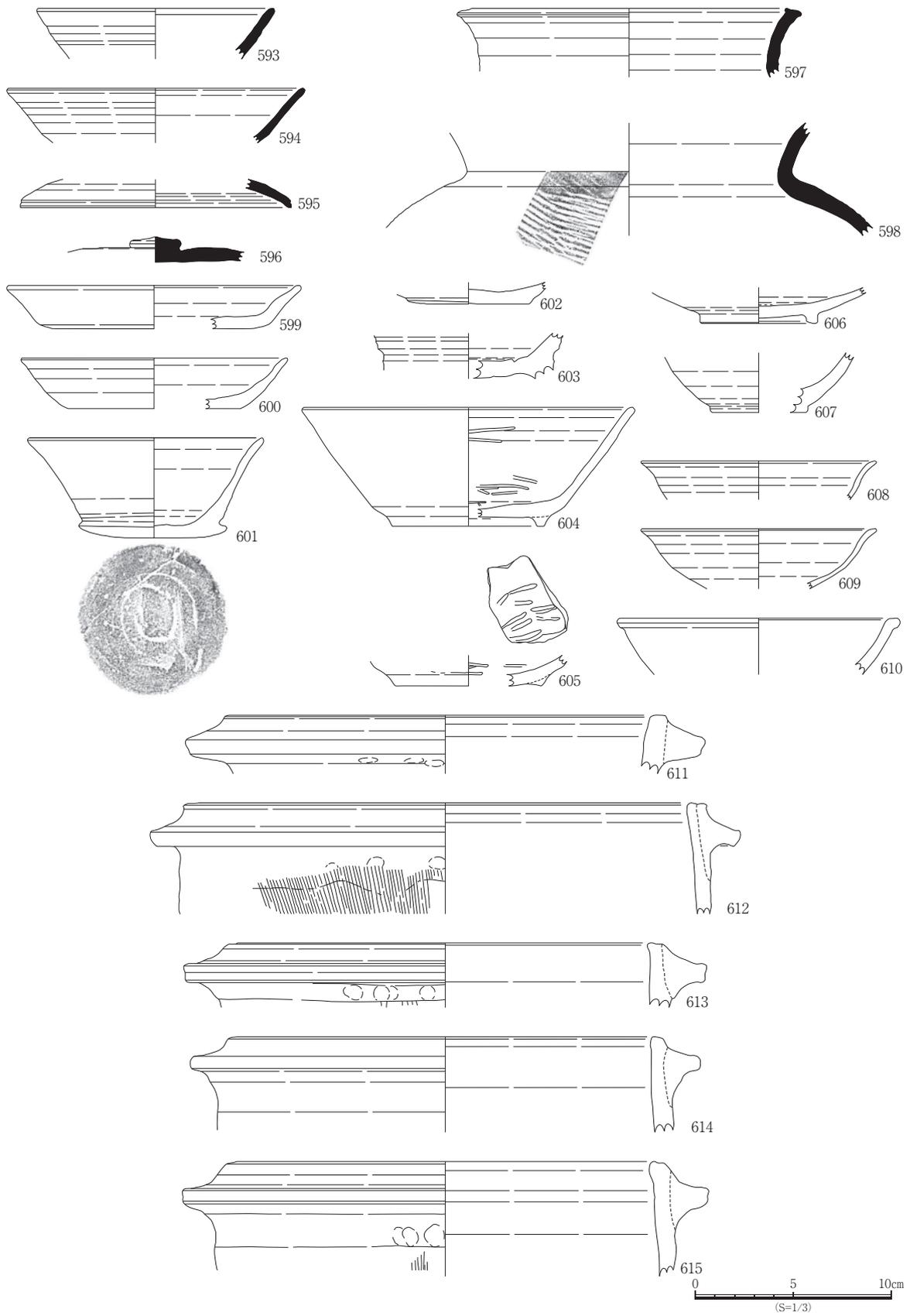


图 135 II区VI层遗物实测图1

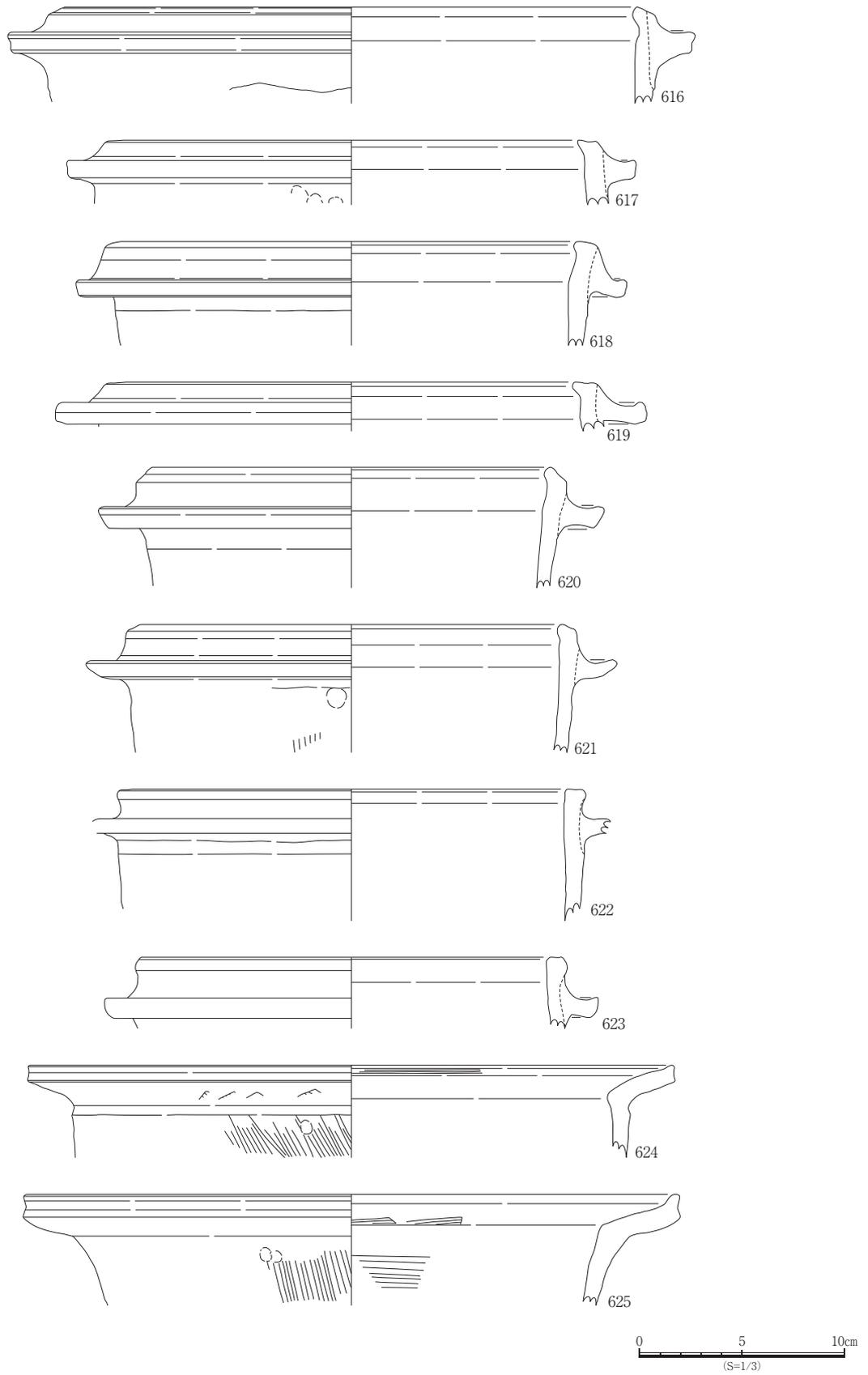


図136 II区Ⅵ層遺物実測図2

2. II区

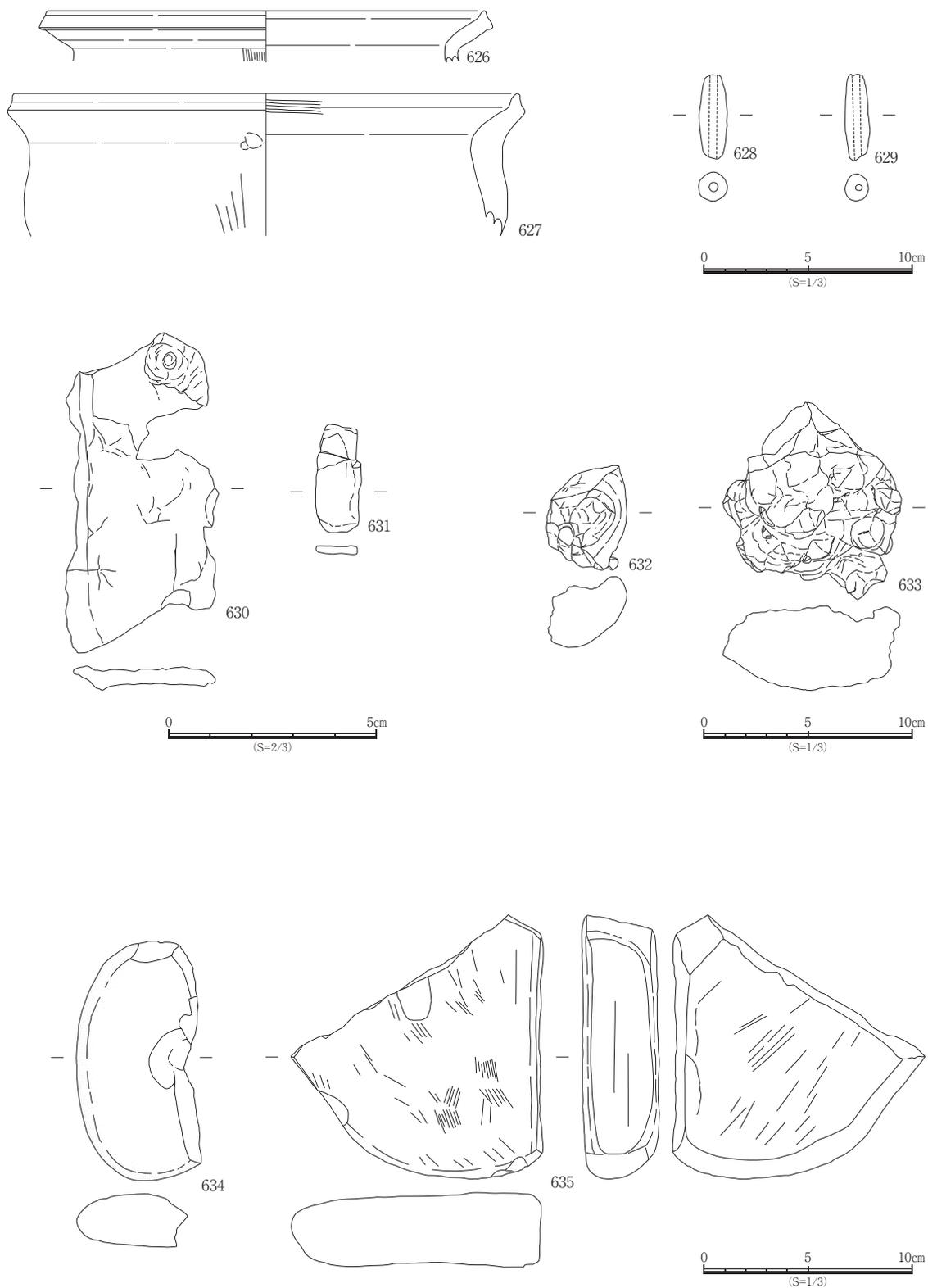


图137 II区VI层遗物实测图3

を測る。589は石鍋の口縁部片である。滑石製であり、断面四角形の鏝を削り出している。590は砥石であり、流紋岩製の円礫の側面を仕上砥として使用している。591・592も砥石であり、591は590と同じ流紋岩製である。592は被熱しており赤褐色を呈する。

VI層出土遺物(図135～137 593～635)

VI層からは古代を中心とする遺物が出土した。9～10世紀代の遺物が中心である。593～598は須恵器である。593・594は須恵器杯の口縁部片である。回転ナデ調整が施される。595・596は蓋であり、595は天井部が欠損する。外面には自然釉が認められる。596はつまみであり、扁平で僅かに宝珠の形態を残す。内面を硯に転用したと思われる擦痕が認められる。597・598は甕であり、597は口縁部片である。口縁端部を水平に拡張し面を成す。598は胴部片であり外面に平行のタタキ目が残る。

599～604は土師器供膳具である。599・600は土師器皿であり、回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りによる。599の口縁部内面は沈線状に凹む。601・602は杯であり、回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。601の底部は、やや段を持ち体部中位から外反する。602は回転ヘラ切りである。603は足高高台碗であるが、高台部が欠損する。色調が浅黄橙色を呈し、回転ナデ調整が施される。604は内面の一部にヘラミガキが施され断面四角形の高台が付く杯である。外面にタールが付着する。605は内面黒色土器碗であり、断面三角形の低い高台が付く。ヘラミガキが施される。

606～610は緑釉陶器である。606は皿であり、断面四角形の高台が付く。胎土は灰白色を呈し須恵質である。607～610は碗であり、607は円盤状底部である。608・609は口縁部片であり器壁が薄い。口縁部は外反し、全体的にオリーブ色を呈した釉が施釉される。胎土は灰白色を呈し須恵質である。610の口縁部は外反し、端部は肥厚する。器壁は他に比べ厚く、胎土は浅黄色を呈した陶器質である。

611～623は土師器羽釜である。611は口縁部真横に鏝が付く。口縁端部は水平な面を成す。ナデ調整が施される。胎土には0.5～1.0mm大のチャート・長石を含む。612の鏝は下方に向く。口縁端部は水平な面を成し、粘土帯接合部は沈線状に凹む。胴部外面は縦方向のハケ調整、その他はナデ調整が施される。胎土には0.2～3.0mm大のチャート・石英が含まれる。613は口縁部真横に鏝が付く。口縁端部は内側に尖り気味に仕上げる。ナデ調整が施される。614は口縁部真横に短い鏝が付く。胎土は2.5mm大のチャート・石英を含む。615は口縁部真横に鏝が付き、口縁端部は内側に少し拡張が見られる。ナデ調整が施され、胴部外面は縦方向のハケ調整が施される。616～620は口縁部の内側への拡張がさらに進んだ様式のものである。鏝は口縁部から少し下がった位置に付き、鏝端部も上方に拡張がみられる。617～619は胎土に0.5mm大のチャート・長石・石英を含む。621は鏝の厚みが薄くなり、端部は上向きに尖り気味に仕上げる。622・623は同じタイプであり、口縁部から下がった位置に短い鏝が付き、鏝端部は上向きに仕上げる。口縁部は直立し、端部は水平な面を成す。623は胎土にチャートを含む。

624～627は土師器甕である。口縁部は「く」の字に外反し、端部は上向きに尖り気味に仕上げる。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整とナデ調整が施される。624は口縁外面にハケ状工具痕が認められる。625の口縁端部は上方に拡張され、尖り気味に仕上げる。胎土に0.5mm大の雲

2. II区

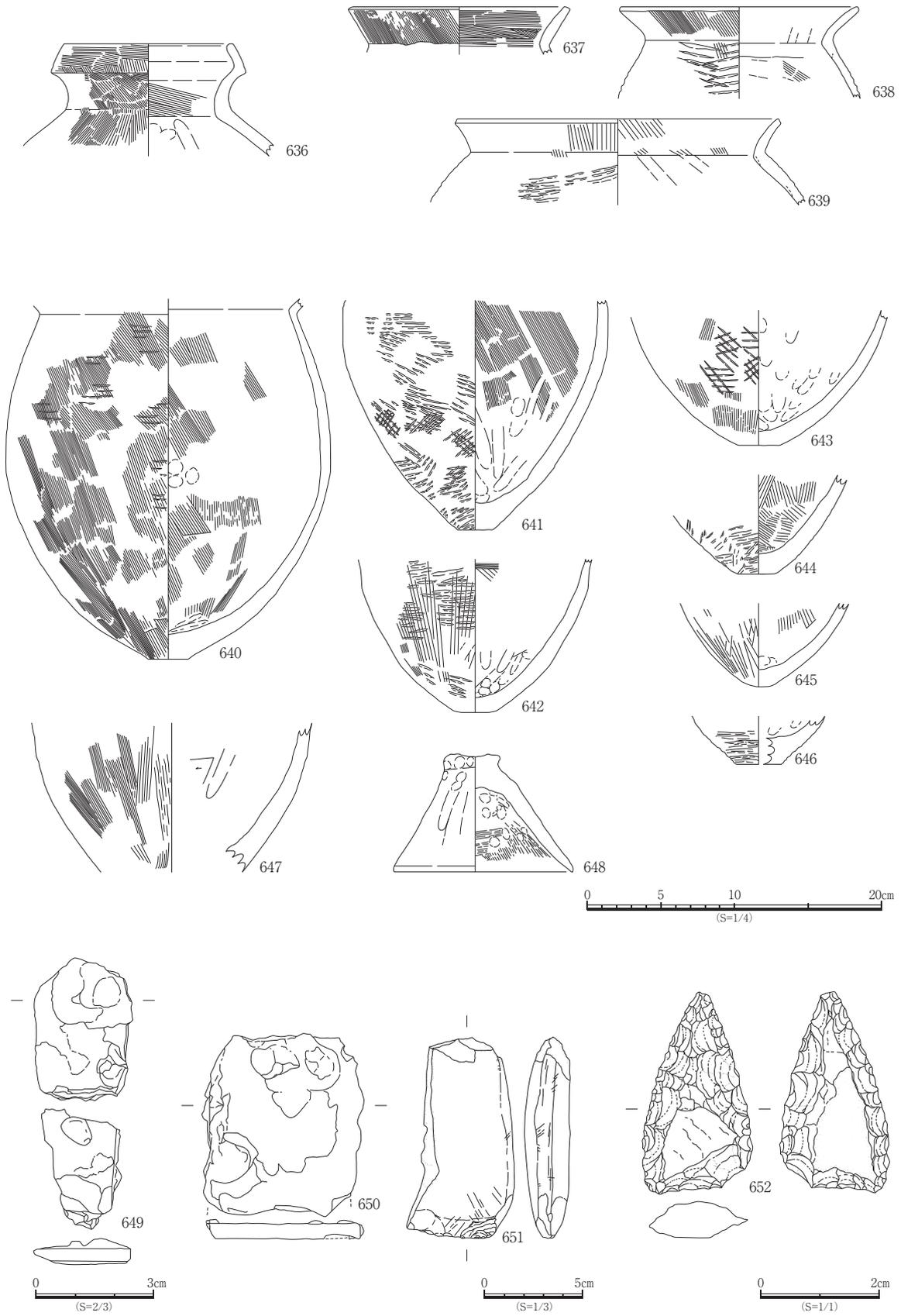


图138 II区VII层遗物实测图

母片を含む。626・627は短く外反し、端部を上方に尖り気味に仕上げる。627は他に比べ器壁が厚く、外面のハケ目の単位も荒い。

628・629は管状土錘である。孔径は0.3～0.4cmを測り、重量4.9～6.2gを測る。630・631は板状の鉄器である。632・633は鉄滓であり、633は重量が1,405g測る。634は砂岩製の叩石であり、一側面の中央部が凹む。635は砂岩製の仕上砥である。両面と一側片を砥石として使用している。

Ⅶ層出土遺物(図138 636～648)

Ⅶ層からは弥生時代後期後半の遺物が出土した。Ⅶ層からの遺物は下層確認の際にⅡ区の中央部、BⅢ-3-4からBⅢ-4-2グリッドにかけて集中して出土した。以下にⅦ層から出土した遺物について記載する。

636～648は弥生土器である。636は複合口縁を持つ壺であり、口縁部は内傾する。外面は全体的に細かな単位のハケ調整が施され、内面は頸部が横方向のハケ調整、口縁部は横方向のナデ調整が施され、口縁端部は面を成す。637～639は甕の口縁部から上半部片であり、「く」の字に外反する。637の口縁部の外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。胎土は2.0～3.0mm大のチャートを含む。638の口縁部は、外反して長く伸び端部は尖り気味に仕上げる。胴部外面はタタキ目が残る。口縁部外面は縦方向のハケ調整が施される。内面の胴部上半はハケ調整、口縁部はナデ調整が施される。639は法量が大きく、口径は20.8cmを測る。胴部外面はタタキ目が残る。口縁部は内外面とも縦方向のハケ調整を施す。

640～647は甕の胴部から底部片である。640は胴部の張りが中位からやや下がった位置にある。タタキ成形であり、内外面ともに細かな単位のハケ調整が施され、僅かに平底を残す底部外面にもハケ調整を施す。641は外面タタキ目、内面は底部から体部下半は指頭によるナデ調整、上半部はハケ調整が施される。642は外面にタタキ成形後、荒い単位のハケ調整が施される。内面は指頭により底部から上方向に向かってナデ調整が施される。胎土には2.0～3.0mm大のチャートを含む。643もタタキ成形後、荒い単位のハケ調整が施され、内面は指頭によるナデ調整が施される。胎土には1.0～2.0mm大の石英が含まれる。644は外面螺旋状のタタキ目、内面はハケ調整が施される。645は僅かに平底を残す。外面はヘラ状工具による縦方向のナデ調整、内面はハケ調整が丁寧に施される。胎土には3.0mm大以下のチャートを含む。646の底部は他に比べ厚く、平底である。外面はタタキ目、内面は指頭によるナデ調整が施される。胎土にチャートを含む。647は外面ハケ調整、内面ヘラ削りが認められる。胎土には0.5mm大のチャート、石英を含む。648は蓋である。外面の一部にタールが付着する。外面把手部は指頭圧痕、体部は縦方向のナデ調整が施される。内面は細かな単位のハケ調整が施される。

649は鉄鏃である。650は板状鉄斧である。651は磨製石斧であり、蛇紋岩製である。基部の幅が刃部より狭くバチ形を呈する。刃部の角は欠損する。652は打製石鏃であり、平基式である。石材は淡緑色を呈した頁岩が使用されている。

3. III区

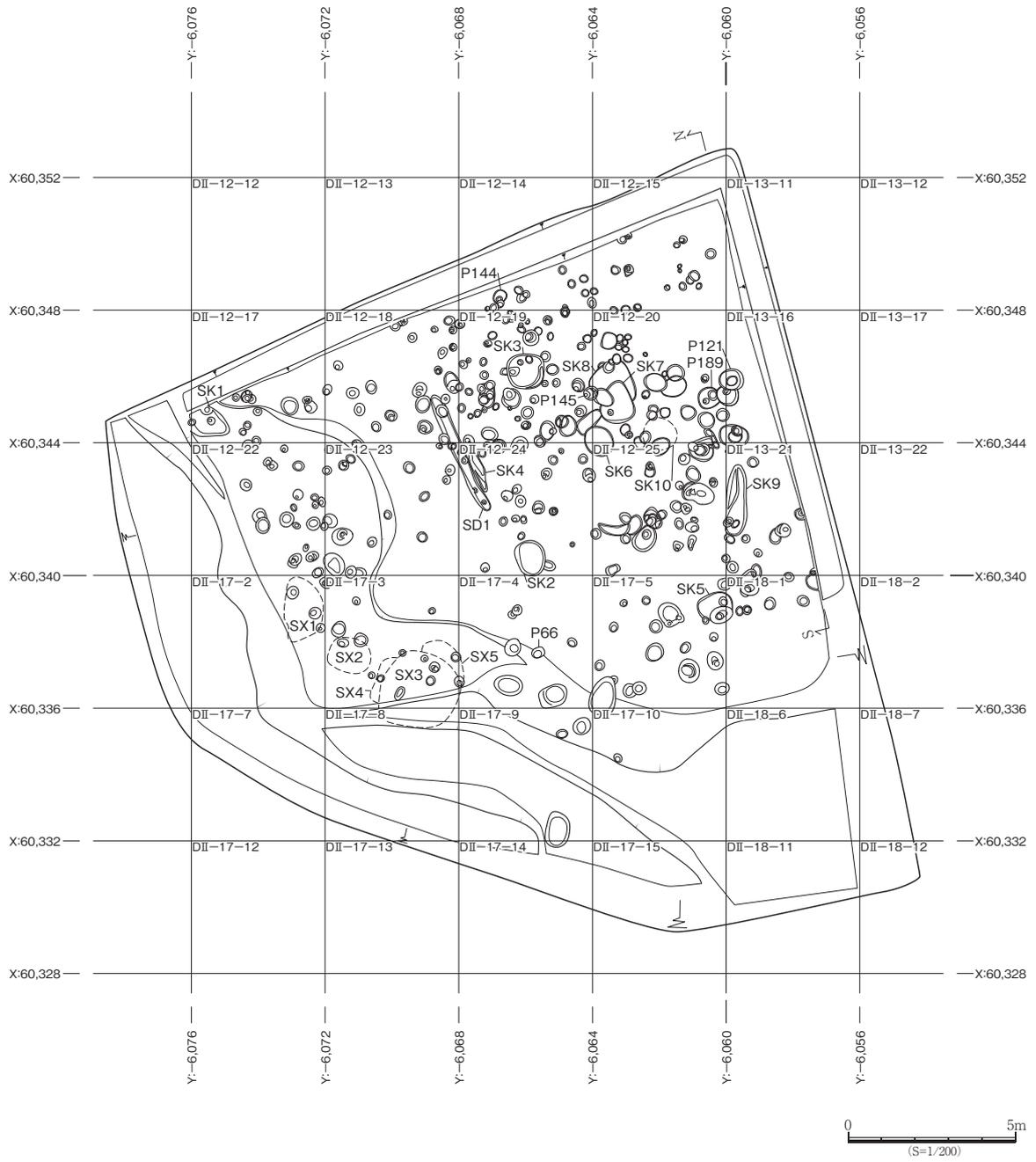


图 139 III区遺構配置図

3. III区

III区は、平成20年度にいの町道改良工事に伴い発掘調査を実施した調査I区の南側に接し、丘陵谷部に位置する。旧耕作土直下で灰色シルト質砂の堆積が認められ、15世紀代の備前焼、青磁片、土師質土器が出土した。丘陵裾にあたる調査区西端では、中世の段階に成形された段部がみつき、ピット、土坑を検出した。炭化材と鉄滓がまとまって出土した土坑もみられ、鍛冶を営んでいた可能性がある。地形は調査区の北東方向に向かって傾斜しており、調査区中央部から東側は、中世の遺物包含層下に黒褐色粘土質シルトの包含層の堆積が認められた。平安時代(9世紀末～10世紀前半)を中心とした土師器、黒色土器、緑釉陶器など遺物がまとまって出土し、土坑などの遺構も検出された。さらに、下面では、古代(8世紀後半～9世紀前半)の土師器の杯・皿、須恵器の杯・皿・蓋・壺などの遺物が出土し、ピット、土坑を検出した。検出面を含めた包含層の堆積をみると、古代の段階に整地が行われているものと思われ、平成20年度調査地点と同じ内容が確認された。下層は粘土及びシルト質の河川の影響による堆積であり、黄褐色の粘土が厚く堆積していた。III区で検出された遺構は土坑10基、ピット353個、溝1条、性格不明遺構5基である。以下に特徴的な遺構について抽出し記述する。

(1) 検出遺構と出土遺物

ピット

P66 (図140)

D II - 17 - 4グリッドで検出した長径0.40m、短径0.32m、深さ0.15mを測る楕円形のピットである。埋土はオリブ黒色砂質シルトであり、断面は台形状を呈する。埋土中からは図示した653・654の遺物出土した。653は土師器甕の口縁部片である。「く」の字に外反し、口縁端部は上方に拡張する。内面は横方向のハケ調整が施される。654は須恵器の杯であり、ベタ底から段を持ち、体部は内湾す

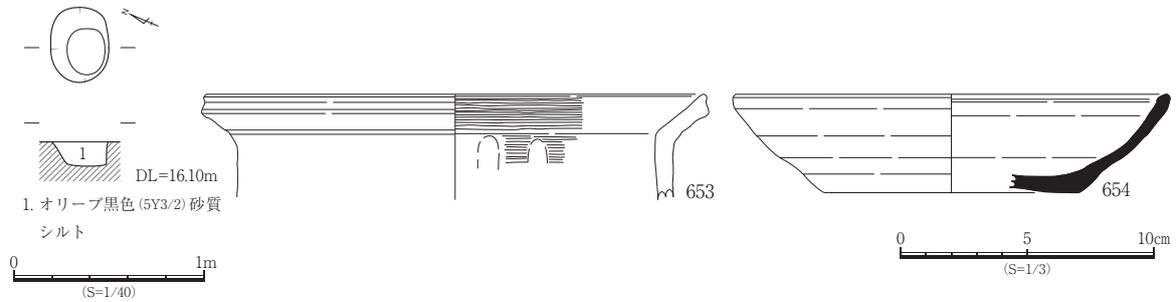


図140 III区P66遺構図・遺物実測図

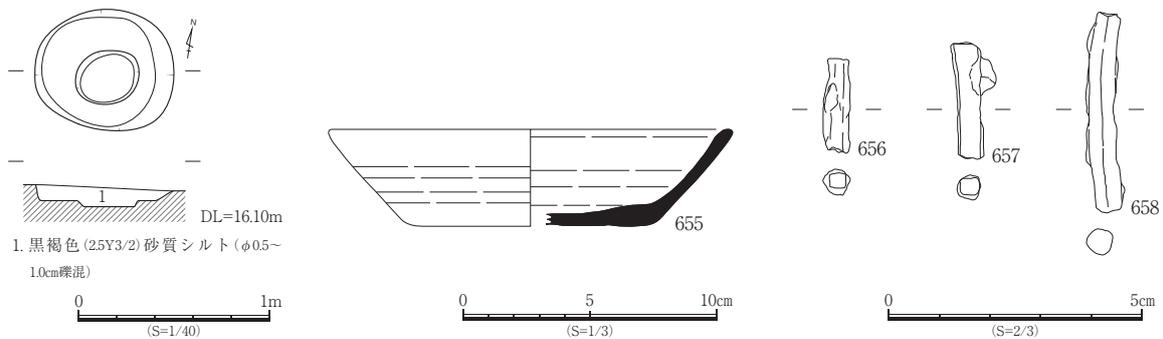


図141 III区P121遺構図・遺物実測図

3. III区

る。口縁端部は内側にツマミ出し、内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りによる。酸化焰焼成である。

P121 (図141)

D II - 13 - 16グリッドで検出した長径0.73m, 短径0.65m, 深さ0.08mを測る円形のピットである。埋土は黒褐色砂質シルトであり、中央に柱痕を持つ。埋土中から図示した須恵器の杯(655), 鉄釘(656 ~ 658)が出土した。655はベタ底で体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。鉄釘は上下が欠損する。その他に土師器片4点, 須恵器片8点が出土した。

P144 (図142)

D II - 12 - 14グリッドで検出した長径0.44m, 短径0.37m, 深さ0.47mを測る円形のピットである。埋土は黒褐色砂質シルトであり、中央に柱痕を持つ。埋土中から図示した土師器皿(659), 土師器甕(660), 土錘(661)が出土した。659は口縁部が短く外反し、口縁内面に一条の沈線が入る。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。外底部の一部にヘラミガキが認められる。660の口縁部は外反し、端部は上方に折れて丸く収める。ナデ調整が施される。661は管状土錘であり、一端は欠損する。その他に土師器細片10点, 緑釉陶器片1点が出土した。

P145 (図143)

D II - 12 - 20グリッドで検出した長径0.66m, 短径0.48m, 深さ0.12mを測る円形のピットである。埋土は黒褐色砂質シルトであり、断面形は台形状を呈する。埋土中から図示した須恵器杯(662), 瓦器碗(663)が出土した。662は高台付きの杯であり、高台畳付の部分は強いナデにより凹む。回転ナデ調整が丁寧に施される。663の口縁部はヨコナデ調整が施される。胎土は淡黄色を呈し軟質である。その他に土師器細片8点が出土した。

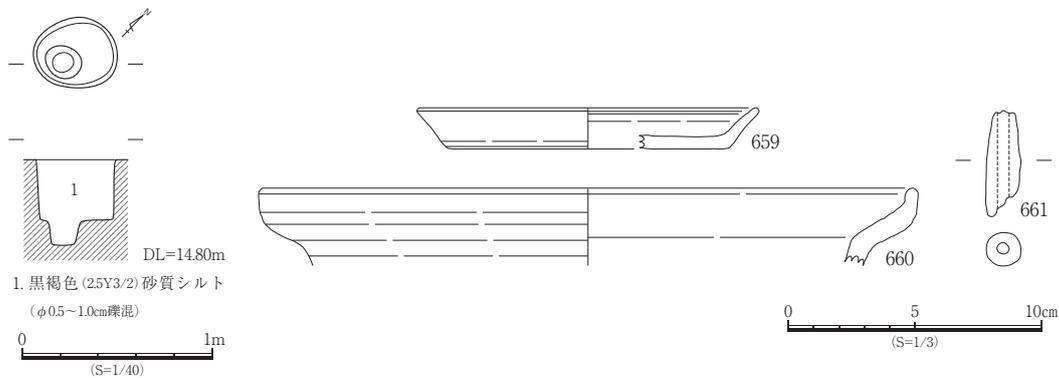


図142 III区P144遺構図・遺物実測図

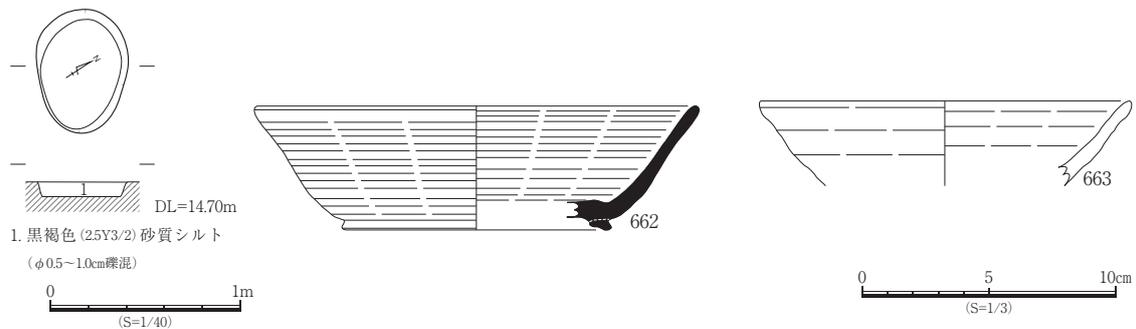


図143 III区P145遺構図・遺物実測図

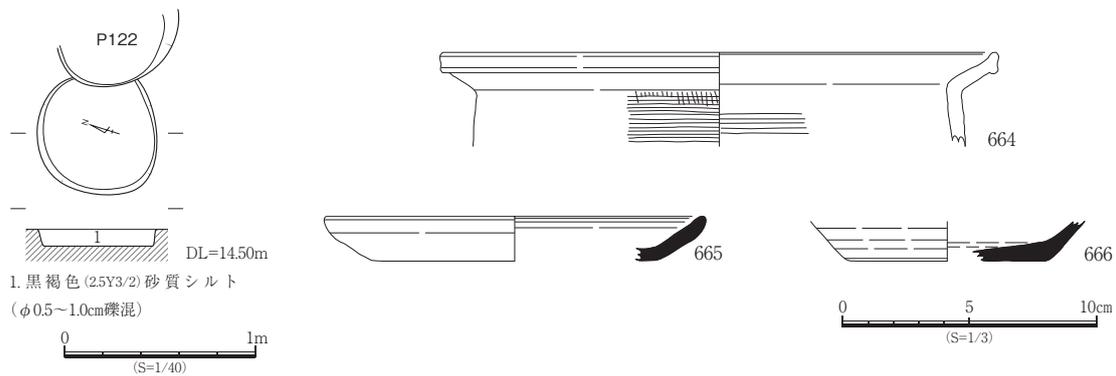


図144 Ⅲ区P189遺構図・遺物実測図

P189 (図144)

DⅡ-12-20グリッドで検出した長径0.63m, 短径0.59m以上, 深さ0.11mを測る円形のピットである。東側はP122に切られている。埋土は黒褐色砂質シルトであり, 断面形は台形状を呈する。埋土中から図示した土師器甕(664), 須恵器皿(665), 須恵器杯(666)が出土した。664の口縁部は「く」の字に外反し, 端部は上下に拡張する。ヨコナデ調整が施される。胴部は内外面ともにハケ調整が施される。665は厚みのある器壁であり, 底部から内湾して立ち上がり口縁部は丸みを帯びる。口縁内面には沈線が施される。666は杯の底部片であり, 回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転ヘラ切りによる。その他に土師器8点が出土した。

Ⅲ区ピット出土遺物(図145・146 667～691)

Ⅲ区で検出されたピットからは図示した667～691の遺物が出土した。ここでは器種ごとに記載をする。667～676は土師器である。667・668は皿である。667は灯明皿で, 口唇部の一部にタール痕が付着する。回転ナデ調整が施され, 底部にヘラ切り痕が認められる。668の口縁部は回転ナデ調整が施され外反する。内底部は暗文が施される。669～672は杯である。669は口縁部片であり, 回転ナデ調整が施され, 僅かに外反する。670・671は底部片であり, 回転ナデ調整が施され, 底部の切離しは回転ヘラ切りである。671は底部と体部の境に段を持つ。672は断面台形の高台が付く杯である。ナデ調整が施され, 外底部にはヘラ切り痕が認められる。内外面ともにタールが付着する。673～676は土師器甕である。673の口縁部は外反し, 端部は上方に拡張される。口縁部はナデ調整, 胴部外面はハケ調整が施され, 胎土にはチャートが含まれる。674の口縁部は肥厚し, 端部は面を成す。胎土は褐灰色を呈し, 雲母片を含む。675の口縁部は外反し, 端部は上方に拡張される。外面はナデ調整, 内面は横方向の荒いハケ調整が施される。676は短く外反し, 端部は上方に尖り気味に仕上げる。口縁部はナデ調整, 胴部内面は横方向のハケ調整が施される。

677～684は須恵器である。677は皿であり, 回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転ヘラ切りである。口縁部内面に沈線が施される。酸化焰焼成である。678～681は杯である。678は器高の低い杯であり, 回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転ヘラ切りである。679～681は器高の高い杯である。679は内外面に火襷がかかる。口縁端部は尖り気味に仕上げ, 回転ナデ調整が施される。680の口縁端部は丸みを帯びる。回転ナデ調整が施される。681の底部は断面四角形の高台が端に付く。回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転ヘラ切りである。酸化焰焼成である。胎土は0.5mm以下の砂粒

3. III区

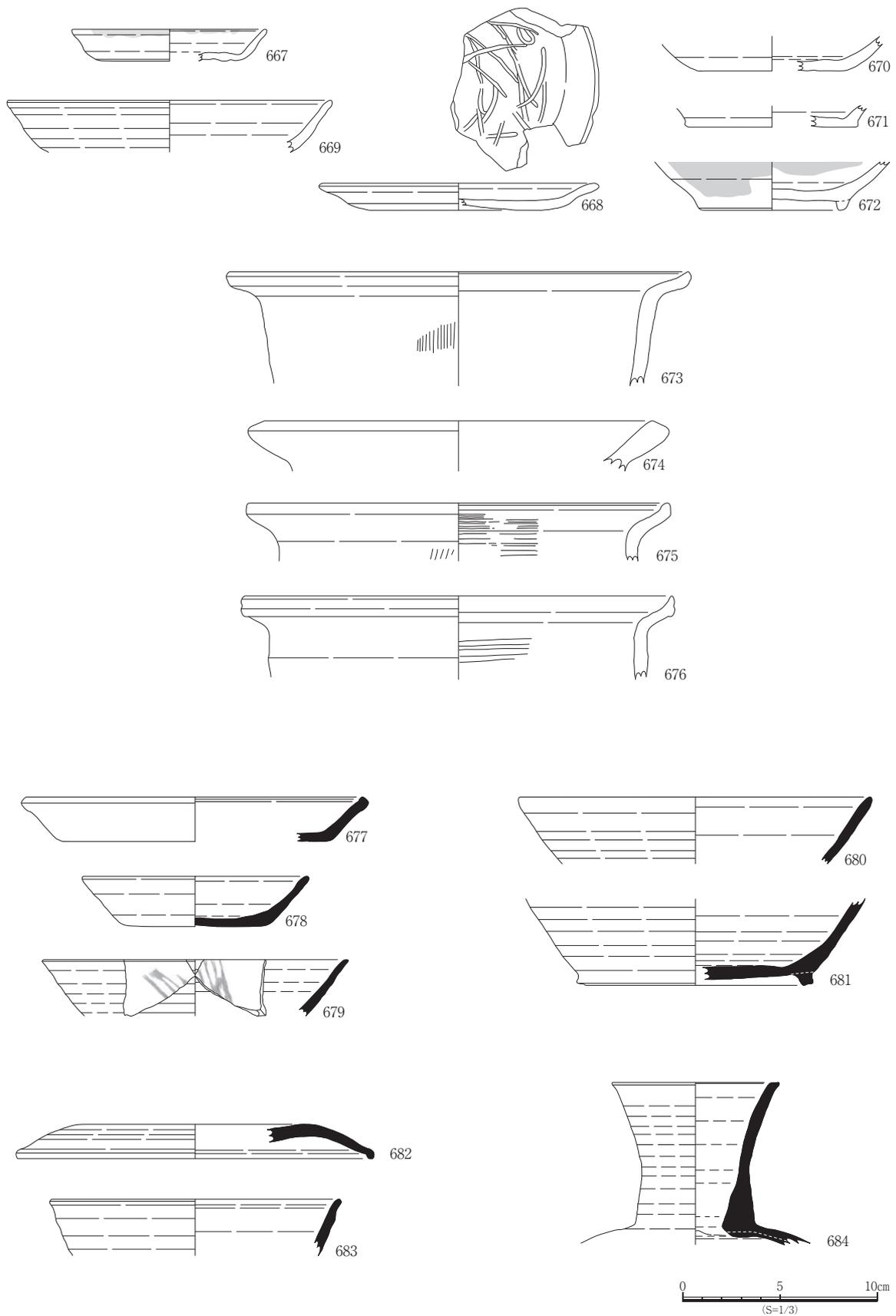


図145 III区ピット遺物実測図1

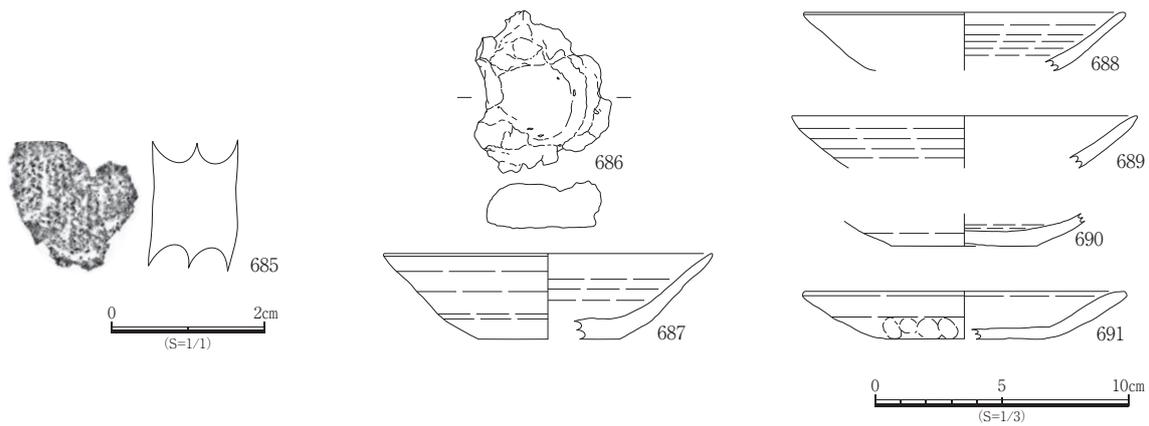


図146 Ⅲ区ピット遺物実測図2

を含む。682は蓋であり、天井部は欠損する。口縁内面は沈線状に凹む。683は碗の口縁部片と思われ、端部外面は凹み外反する。回転ナデ調整が施される。684は壺の口縁部片であり、胴部以下は欠損する。頸部中位から外方に開き、口縁端部は外方にツマミ出し面を成す。端面中央部は沈線状に凹む。回転ナデ調整が施される。

685は製塩土器の破片である。内面に布目痕が認められる。686は鉄滓である。重量は89.0gを測る。687～691は中世の土師質土器である。687～690は杯であり、687～689は外方に直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りである。691は手づくね皿である。外面体部下半に指頭圧痕を残し、口縁部及び内面は丁寧なナデ調整が施される。

土坑

SK2 (図147)

DⅡ-12-24グリッドで検出した土坑である。平面プランは楕円形を呈する。長径1.11m、短径0.86m、深さ0.30mを測る。土坑の長軸方向はN-10°-Wを示す。断面形は逆台形状を呈し、埋土は明黄褐色シルト質礫及び灰黄褐色シルト質粘土である。埋土中からは図示した692～697の遺物が出土した。692～695は土師器であり、692は皿の底部片である。内外面に密なヘラミガキが施される。693・694は杯である。693は口縁部片であり、僅かに外反し、回転ナデ調整が施される。694は底部片であり、ベタ底からやや段を持ち外方に立ち上がる。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。695は蓋の口縁部片であり、端部は尖り気味に仕上げる。696は鉄器であり板状を呈する。小刀の断片と思われ、重量は13.0gを測る。697は砂岩製の叩石で、中央部と側面の一部に敲打痕を残す。その他土師器細片が46点出土した。

SK3 (図148)

DⅡ-12-19グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈する。長径1.11m、短径1.05m、深さ0.28mを測る。土坑の長軸方向はN-1°-Wを示す。断面形は逆台形状を呈し南東側に段を持つ。埋土は明黄褐色シルト質礫である。埋土中から図示した698～704の遺物が出土した。698は土師器皿であり、ベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。回転ナデ調整が施される。699は断面四角形の高台が付く土師器碗の底部片である。回転ナデ調整が施される。700は土師器甕の鏝の断片である。甕本体との接合部から剥離する。外面に指頭圧痕が認められる。

3. III区

701・702は須恵器皿である。口縁部は外反し、端部は丸みを持たせる。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。703・704は管状土錘である。全長が3.0cm以下と小さく、重量も2.5g以下と小さい。その他土師器細片が113点出土した。

SK4 (図149)

D II - 12 - 24 グリッドで検出した土坑である。平面プランは溝状を呈する。長径1.60m, 短径0.31m, 深さ0.15mを測る。土坑の長軸方向はN - 20° - Wを示す。断面形は逆台形状を呈し南側に段を持つ。埋土は明黄褐色シルト質礫である。埋土中から図示した土師器皿(705), 土師器杯(706)

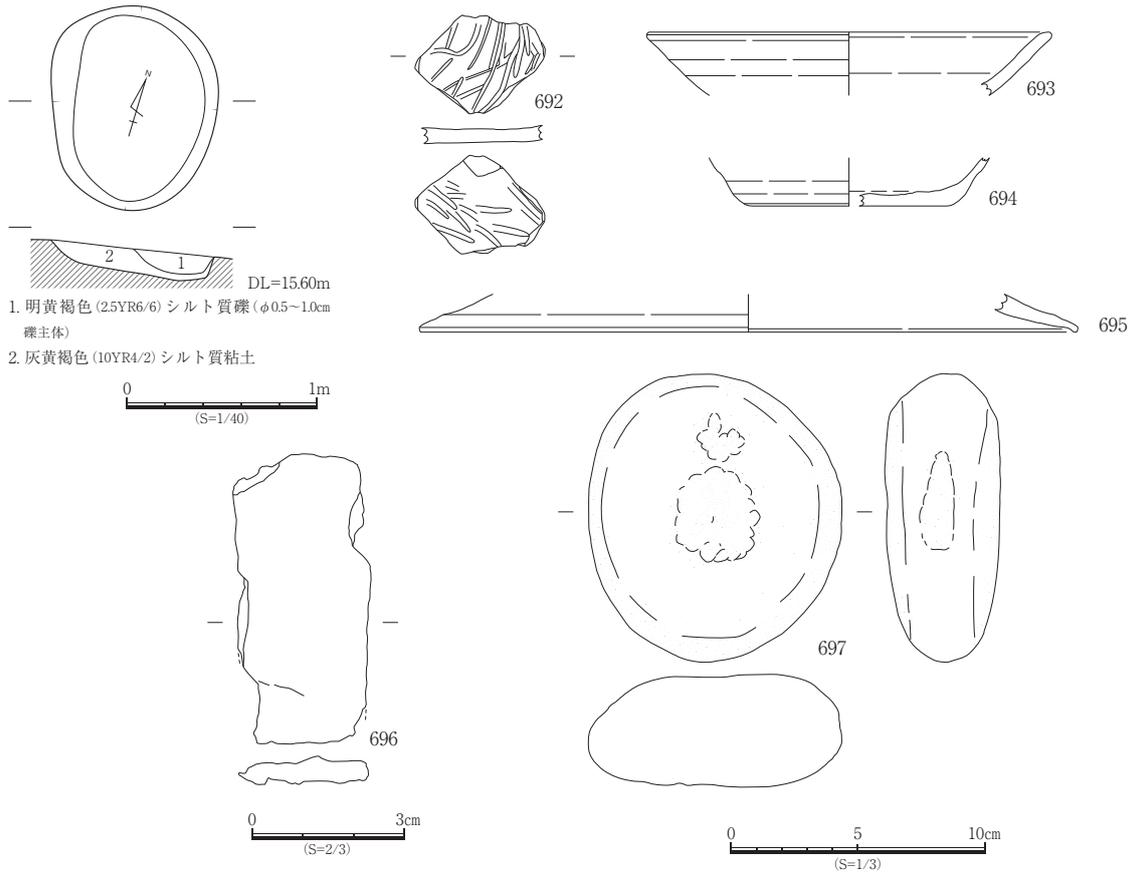


図147 III区SK2遺構図・遺物実測図

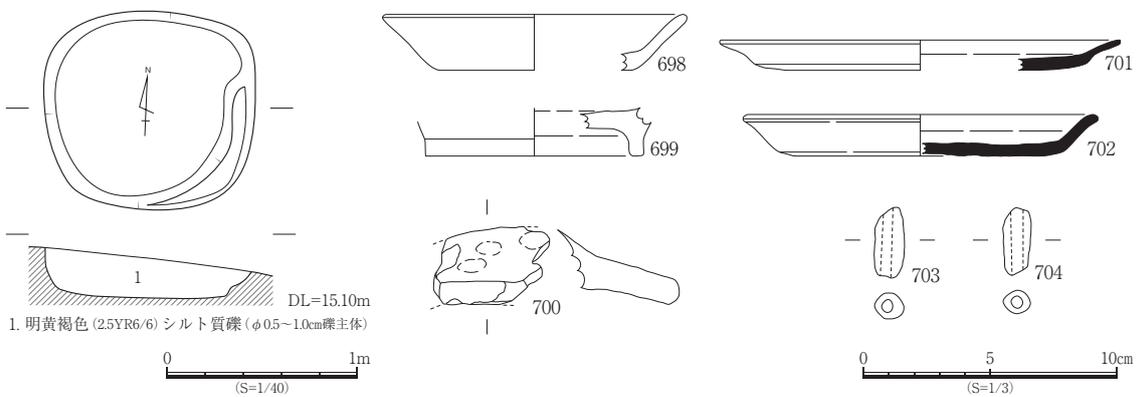


図148 III区SK3遺構図・遺物実測図

が出土した。705は底部から外反しながら立ち上がり、口唇部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整が施される。706は底部から斜上外方に立ち上がり、体部中位から口縁部にかけて内湾気味になる。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。その他土師器細片が30点出土した。

SK5 (図149)

D II - 17 - 5グリッドで検出した土坑である。平面プランは隅丸方形を呈する。長径1.06m, 短径0.81m, 深さ0.12mを測る。土坑の長軸方向はN - 71° - Wを示す。断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘土質シルト礫である。埋土中から図示した土師器皿(707), 土師器杯(708・709)が出土した。707はベタ底から外方に延び口縁部は外反する。内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。708はベタ底から外方に延び口縁部は丸く収める。内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。709はベタ底から外方に延び、口縁部は僅かに外反する。口縁内面は1条の沈線、回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。内外面にタールの付着が認められ灯明具として使用された可能性がある。その他土師器細片が35点出土した。

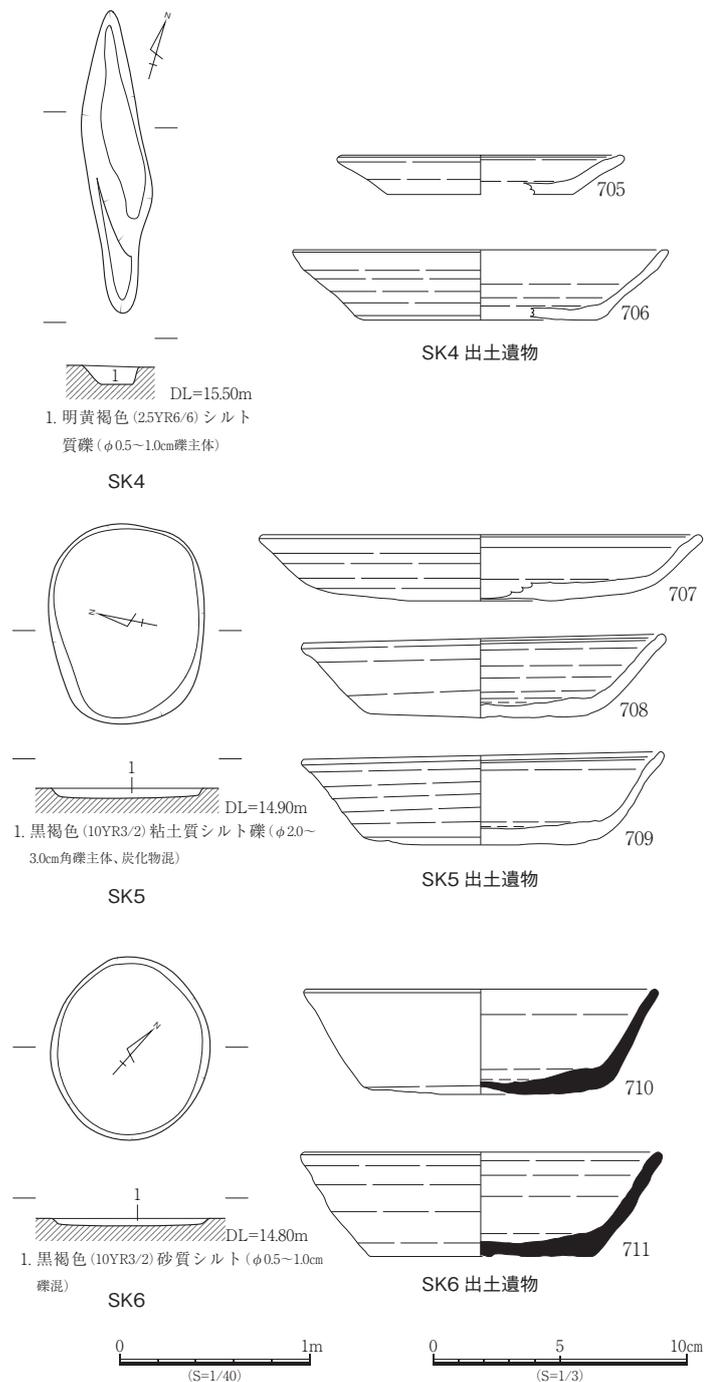


図149 III区SK4~6遺構図・遺物実測図

SK6 (図149)

D II - 12 - 20・25グリッドで検出した土坑である。平面プランは円形を呈する。長径0.97m, 短径0.84m, 深さ0.02mを測る。土坑の長軸方向はN - 40° - Wを示す。断面形は皿状を呈し、埋土は黒褐色砂質シルトである。埋土中から図示した須恵器杯(710・711)が出土した。ベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁部は丸く収める。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。その他土師器細片38点, 須恵器細片4点出土した。

3. III区

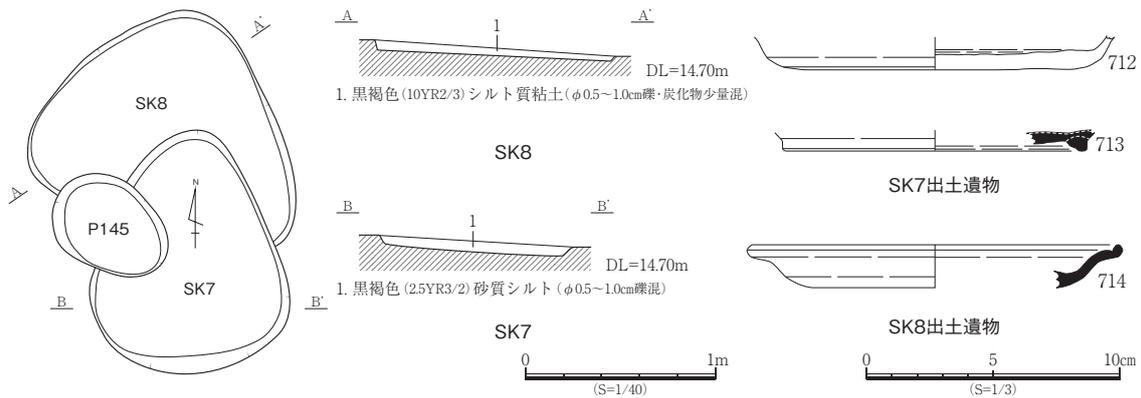


図150 III区SK7・8遺構図・遺物実測図

SK7・8 (図150)

D II - 12 - 20グリッドで検出した土坑である。SK7の平面プランは不整形を呈する。長径1.29m, 短径1.04m, 深さ0.10mを測る。断面形は皿状を呈し, P145に切られる。遺構埋土は黒褐色砂質シルトである。SK7の埋土中から図示した土師器皿(712), 須恵器杯(713)が出土した。712は皿底部片であり, 回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転ヘラ切りである。713は杯底部片であり, 断面逆台形状の高台が付く。強いナデ調整が施され, 高台内面が沈線状に凹む。その他土師器細片19点, 須恵器細片4点が出土した。SK8の平面プランも不整形で, 長径1.41m, 短径1.26m, 深さ0.13mを測る。SK7とP145に切られる。断面形は皿状を呈し, 埋土は黒褐色シルト質粘土である。埋土中からは須恵器皿(714)が出土した。口縁部は外反し, 端部は上方に折れ丸く収める。内面は沈線状に凹む。その他土師器細片20点, 須恵器細片1点が出土した。

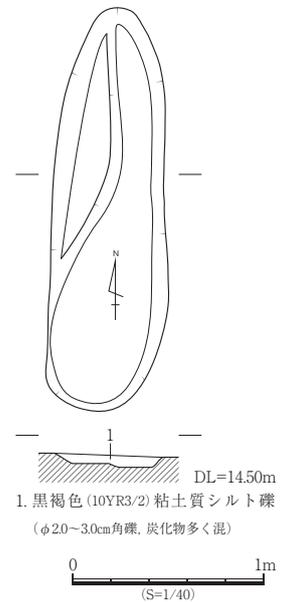


図151 III区SK9遺構図・遺物実測図

SK9 (図151)

D II - 13 - 21グリッドで検出した土坑である。平面プランは溝状を呈する。長径2.14m, 短径0.60m, 深さ0.16mを測る。長軸方向はN - 9° - Eを示す。断面形は逆台形状を呈し, 埋土は黒褐色粘土質シルト礫である。埋土中から図示した須恵器皿(715)が出土した。口縁部は大きく外反し, 端部は丸く収める。回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転ヘラ切りである。その他土師器細片22点が出土した。

SK10 (図152)

D II - 12 - 20・25グリッドの上面で検出した円形の土坑である。直径0.99~1.02m, 深さは0.16mを測る。埋土はオリーブ黒色砂質シルトであり, 炭化物を含む。埋土中から図示した土師質土器皿(716~719)が4個体, 土師質土器細片4点, 骨片が出土した。716~719は全て回転ナデ調整が施され, 底部切離しは回転糸切りで簀子状の圧痕を残す。716は内面見込みと体部の境目に丁寧なナデ調整

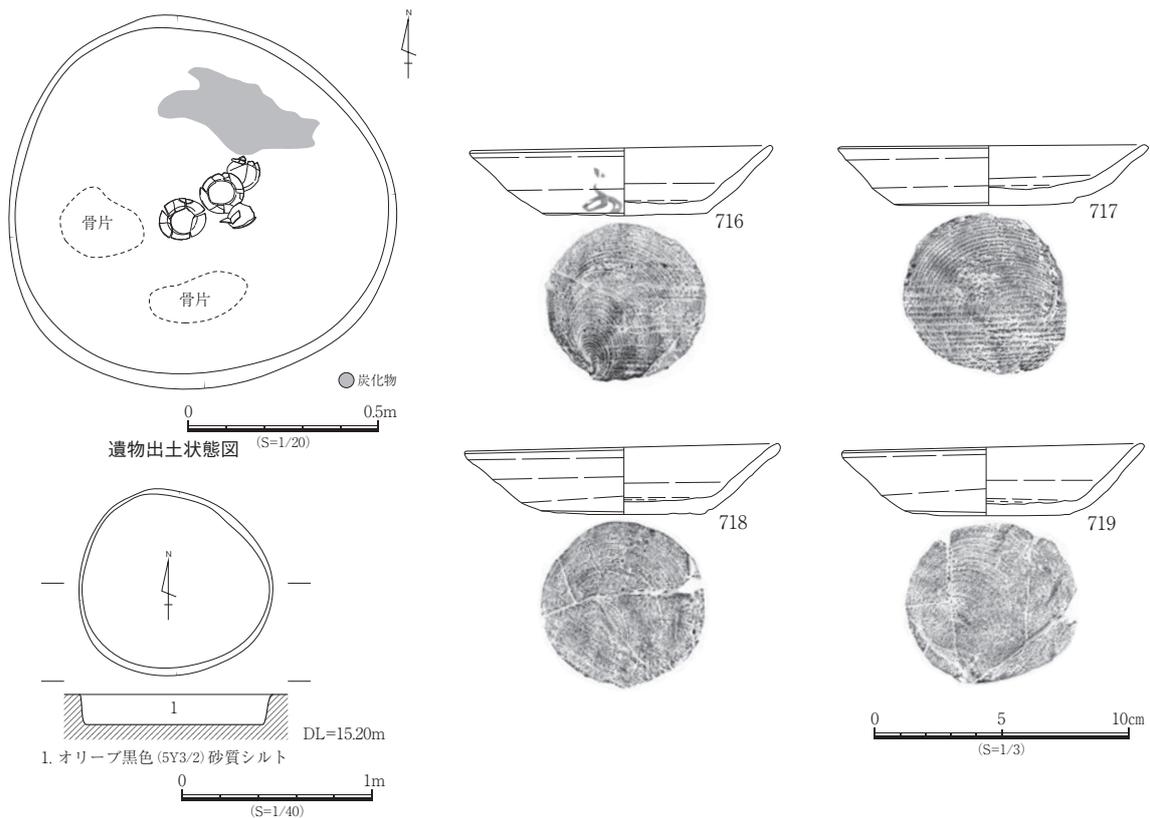


図152 Ⅲ区SK10遺構図・遺物実測図

を施し明瞭な段が生じ、それに起因して外面体部中位にも稜ができる。外面体部下半に「の」の字状の墨書が施される。717～719も内面見込みと体部の境目に丁寧なナデ調整を施し明瞭な段が生じ、それに起因して外面体部中位にも稜ができる。外底部に回転糸切り後の簀子状の圧痕を明瞭に残す。SK10は土坑墓の性格を持ち、これらの土師器皿は副葬品として納められたものと思われる。

性格不明遺構

SX1～5 (図153)

調査区南西部DⅡ-17-2・3グリッドの上面で検出された性格不明遺構である。明確な平面プランは検出されず、部分的に炭化物が集中し、鍛冶関連遺物(鉄滓等)がまとまって出土した範囲をSXの対象とした。傾斜地であることから断面観察でも明瞭なプランは不明であったが、SX3の範囲中央に設定したトレンチ調査では、比較的炭化物が多量に含まれる黒褐色砂質シルト礫と黄褐色シルト礫が互層に堆積がみられ、更に下層でSX5の堆積を確認する事ができた。トレンチの北では中世の遺物包含層(Ⅱ層)が厚く堆積が認められ、Ⅱ層によってSX埋土が切られる状態で確認された。これらのSXからは鉄釘や鉄札といった鉄器及び、鉄滓、羽口など鍛冶に関連する遺物がまとまって出土していることから、鍛冶関連遺構として位置付けをする。以下に出土遺物について記載する。

SX1出土遺物(図154 720～724)

SX1はDⅡ-17-2グリッドで検出した。炭化物を多く含んだ黒褐色シルト礫層から図示した肥前系の白磁小杯(720)、白磁碗(721)の他に、鉄釘(722・723)、鉄滓(724)が出土した。720は高台外面の一部まで白磁釉が施釉される。高台脇の削りがシャープで、体部との境に明瞭な段を持つ。外面は貝殻状の

3. III区

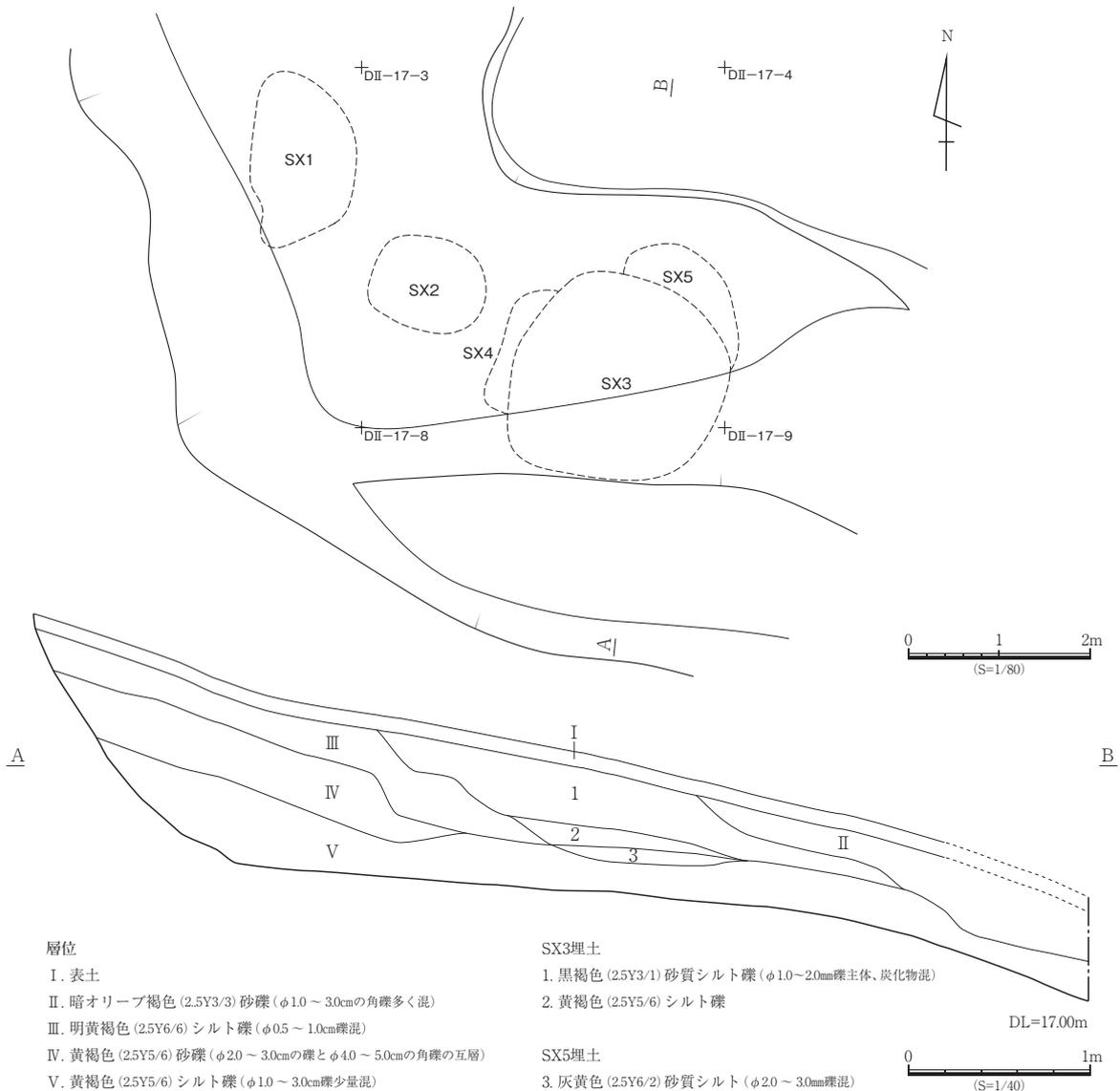


図153 III区SX1～5遺構図

型押し成形による。721は白磁釉が薄く施釉される。透明感が強く、外面は削り痕が顕著である。

SX2出土遺物(図154 725～732)

SX2はD II - 17 - 3グリッドで検出した。炭化物を多く含んだ黒褐色シルト礫層から図示した小札(725～728), 鉄釘(729・730), 鉄滓(731・732)など鉄器が出土した。

SX3出土遺物(図155 733～744)

SX3はD II - 17 - 3グリッドで検出した。炭化物を多く含んだ黒褐色シルト礫層から図示した鞆の羽口(734・735), 鉄釘(736～739), 鉄滓(740～744)など鍛冶関連遺物が出土した。733は白磁の端反皿である。741・742の鉄滓は重量120gを越え, 比較的重量がある。

SX4・5出土遺物(図156 745～748)

SX4・5はSX3の下層で確認した。灰黄色砂質シルト中から図示した鉄滓(745・746), 砥石(747), 鞆の羽口(748)が出土した。747の砥石は, 側縁部の一部が被熱する。

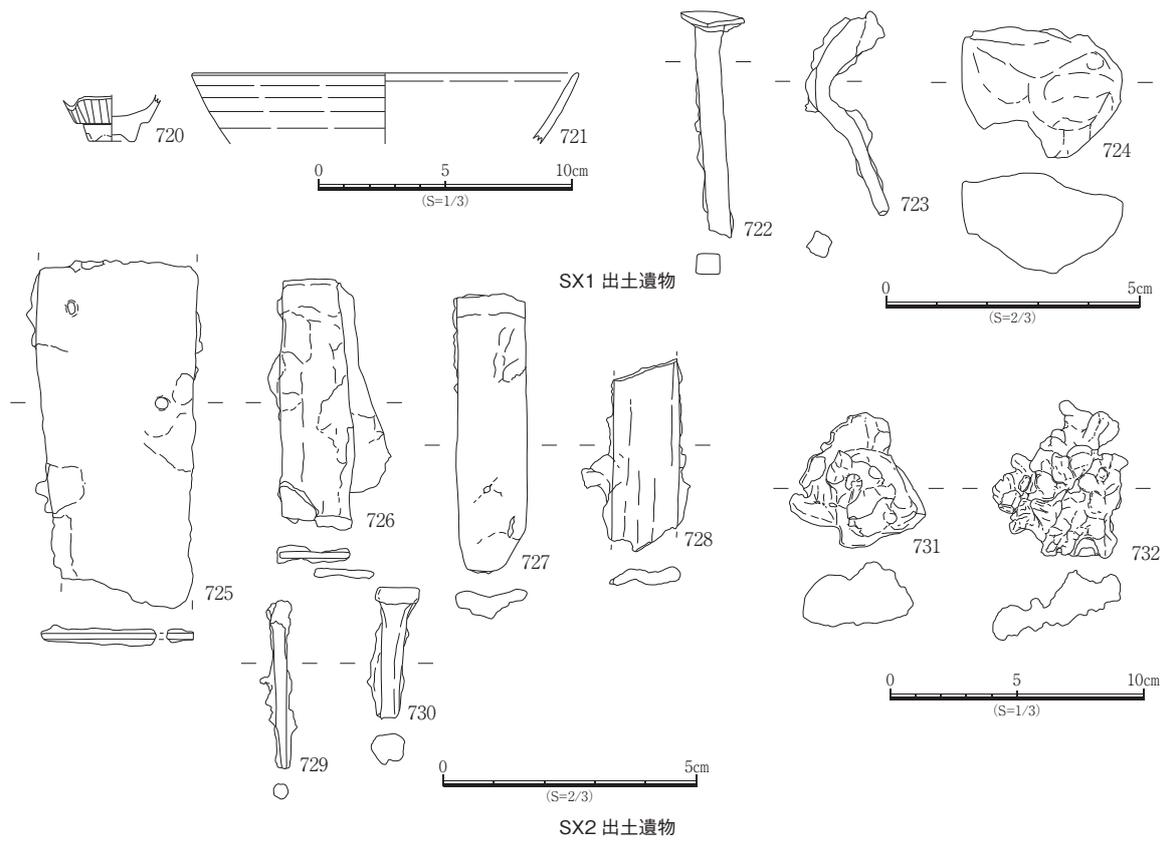


図154 Ⅲ区SX1・2遺物実測図

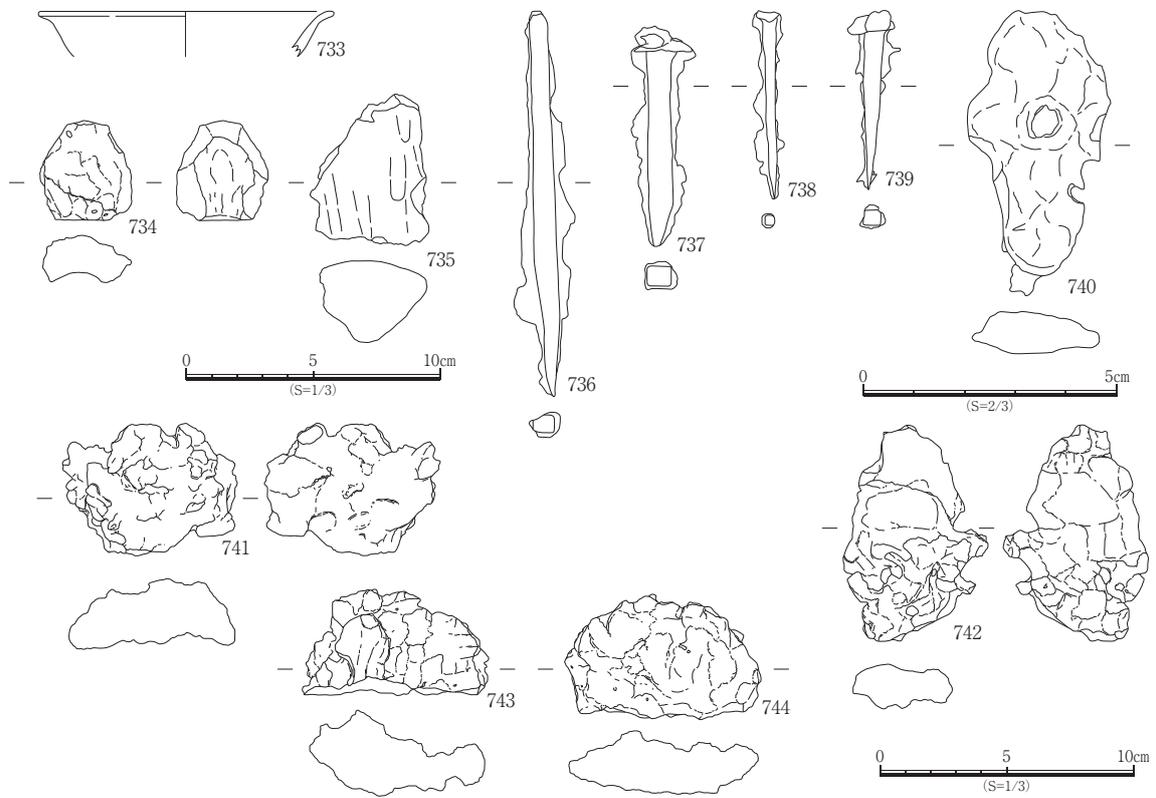


図155 Ⅲ区SX3遺物実測図

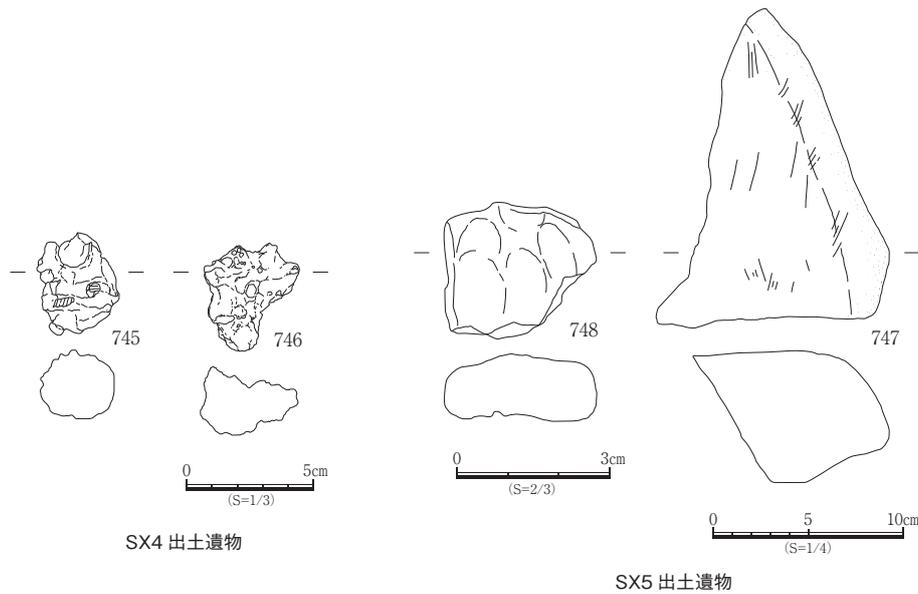


図156 III区SX4・5遺物実測図

(2) 包含層出土遺物

I層出土遺物(図157 749～752)

I層からは17世紀後半～18世紀代を中心とする近世の遺物が出土した。749～751は尾戸焼であり、749は陶器碗である。全体的に灰釉が施され、1.0mm以下の細かな貫入が入る。750・751は皿であり、750は見込み蛇ノ目釉剥ぎが施された鉄釉皿である。高台脇より、高台内部が深く削り込まれる。751は灯明受皿であり、内面のみ灰釉が施される。外面の一部にタールが付着する。752は肥前系白磁の紅皿である。外面に貝殻状の型押し痕が残る。体部下半まで白磁釉が施釉される。

II層出土遺物(図157 753～766)

II層からは13世紀後半～15世紀代を中心とする中世の遺物が出土した。753～756は土師質土器である。753・754は小皿で、ベタ底から斜上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内底部はロクロ目を顕著に残し、底部切離しは回転糸切りによる。755は杯で、ベタ底の底部から立ち上がり、体部下半で腰折れ、口縁部は外反する。回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転糸切りによる。756は焙烙鍋の口縁部片であり、やや肥厚し端部は尖り気味に仕上げる。体部は内型成形、口縁部及び内面はナデ調整が施される。757は瀬戸美濃系の鉢で、全体的に灰釉が施される。見込みに重ね焼きの目跡が残る。断面四角形の低い高台が付き、外底部には糸切り痕が認められる。758は備前焼播鉢で、口縁部端部は強いロクロナデ調整により内面側が凹む。内外面ともロクロ痕が顕著である。内面に11条一単位の条線が施される。759は備前焼甕の底部片で、底部中央は上げ底気味になる。底部外面の周縁部に「×」の窯記号が認められる。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデ調整が施される。760～762は青磁である。760・761は鎬蓮弁文碗である。762は無文端反碗で、口縁部は外反する。全体的に黄色味を帯びた青磁釉が施される。763・764は白磁皿で、763は口縁部内面の釉を削り取る口禿皿である。764は端反皿で、全体的に乳白色を呈した釉が全面に施釉される。765は白磁碗で、高台脇はシャープに削られ、腰がやや張る。断面逆台形の高台が付く。766は青花碗の底部片で、見込みに花卉風の文様、高台外面及び外底部に二重界線が施される。景德鎮窯系である。

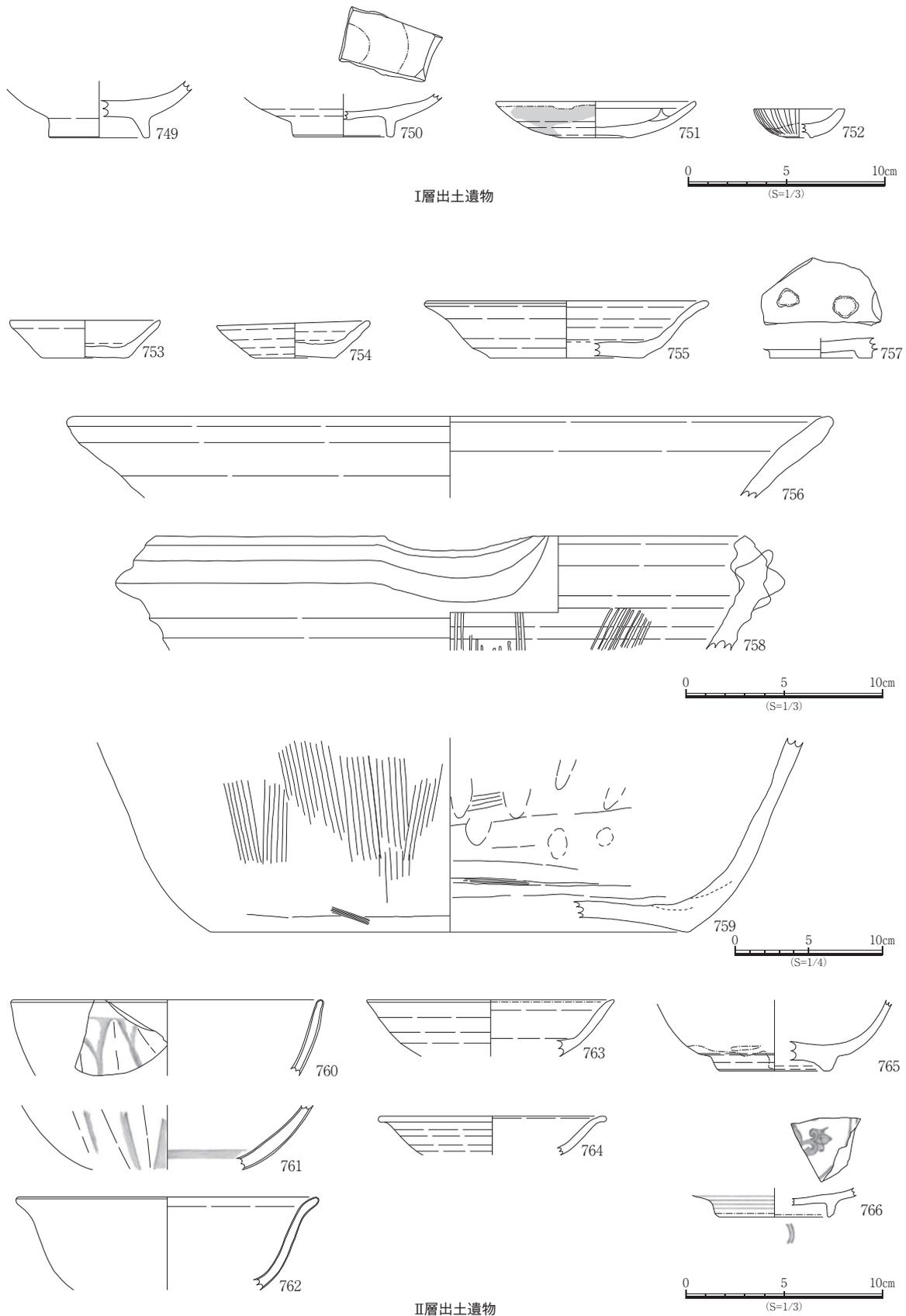


図157 Ⅲ区Ⅰ・Ⅱ層遺物実測図

III層出土遺物(図158 767～786)

III層からは10～12世紀の遺物が中心に出土した。767～775は土師器である。767は皿で、ベタ底から口縁部は外反する。口縁内面は一条の沈線、ヘラミガキが施される。768・769は杯でありベタ底から斜上方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。770～774は椀である。770はベタ高台であり、内底部は凹み段を持つ。外底部にはヘラ切り痕が残る。771は断面逆台形状の高台が付く。高台外面は凹線状に凹む。高台内面は赤色化粧土が施される。772・773は輪高台が付く椀である。772は丸みを持つ高台が貼付され、高台内面に蛇ノ目状に高台接合痕を残す。回転ナデ調整が施され、体部下半はヘラ削り、内面はヘラミガキとナデ調整が施される。773は断面四角形の高台が貼付される。外底部中央に糸切り痕が認められる。高台内面の周縁部は輪郭に沿って糸切り痕をナデ消す。外面体部下半はヘラ削り、内面はヘラミガキが施される。774は口縁部片であり、回転ナデ調整が施され、口縁部は外反する。776～781は須恵器である。776・777は皿であり、口縁内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整が施される。焼成は酸化焰焼成で軟質である。778は杯の底部片で、回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りによる。779～781は須恵器椀である。779の口縁部は端部を強くヨコナデし尖り気味に仕上げる。780・781の口縁部は外反し、回転ナデ調整が施される。781の内面はヘラ状工具による調整痕が認められる。782は炆器甕の胴部片であり、外面胴部下半はタタキ目を残す。内面は横方向のナデ調整が施される。783～786は瓦器椀である。783は和泉型で、内面全体に横方向のヘラミガキが施される。784は楠葉型であり、口縁部は尖り気味に仕上げ、内面に沈線を施す。785・786は底部片で、断面三角形の低い高台が付く。785は平行暗文、786は連結輪状文のくずれた暗文が認められる。

IV-1層出土遺物(図159～162 787～867)

IV-1層からは9～11世紀代の遺物が中心に出土した。787～797は土師器皿で、全て回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。788は全体的にヘラミガキが施される。791～795は器高が低く、底部から短く立ち上がる。796は底部からやや段を持ち外反する。797は口縁部内面に沈線が施される。798・799は盤で、798は断面四角形の高台が付く。底部内面にヘラミガキを施す。799は「ハ」の字に開く高台が付く。体部は外方に大きく開き、回転ナデ調整が施される。800～815は土師器杯である。ベタ高台(800～808)、高台付(809～811)、ベタ高台で有段を呈するもの(813～815)がある。全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。ベタ高台のもの(800～808)は底部から口縁部にかけて斜上方に直線的に立ち上がるタイプが中心であるが、体部が内湾するもの(800)、体部が内湾しながら立ち上がり口縁部が外反するもの(810)などがみられる。816～818は土師器蓋で、天井部は欠損する。いずれも扁平で口縁部は丸く収める。818は全体的にヘラミガキが施される。819～826は土師器甕である。819～822は「く」の字に外反し口縁端部は上方に拡張される。外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。823・824の口縁部は「く」の字に外反して肥厚し、端部は丸みを持つ。823は外面斜位及び横方向のハケ調整が施され、胎土は褐色を呈し雲母片を含む。824は外面に指頭圧痕が顕著である。825・826は口縁部が短く外反し端部は僅かに拡張がみられる。825は荒い単位のハケ調整が深く施される。825・826は胎土にチャートが含まれている。819～824は畿内系、825・826は在地系の甕である。827～843は須恵器である。827～829は皿で、全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。829は口縁内面に沈線が施

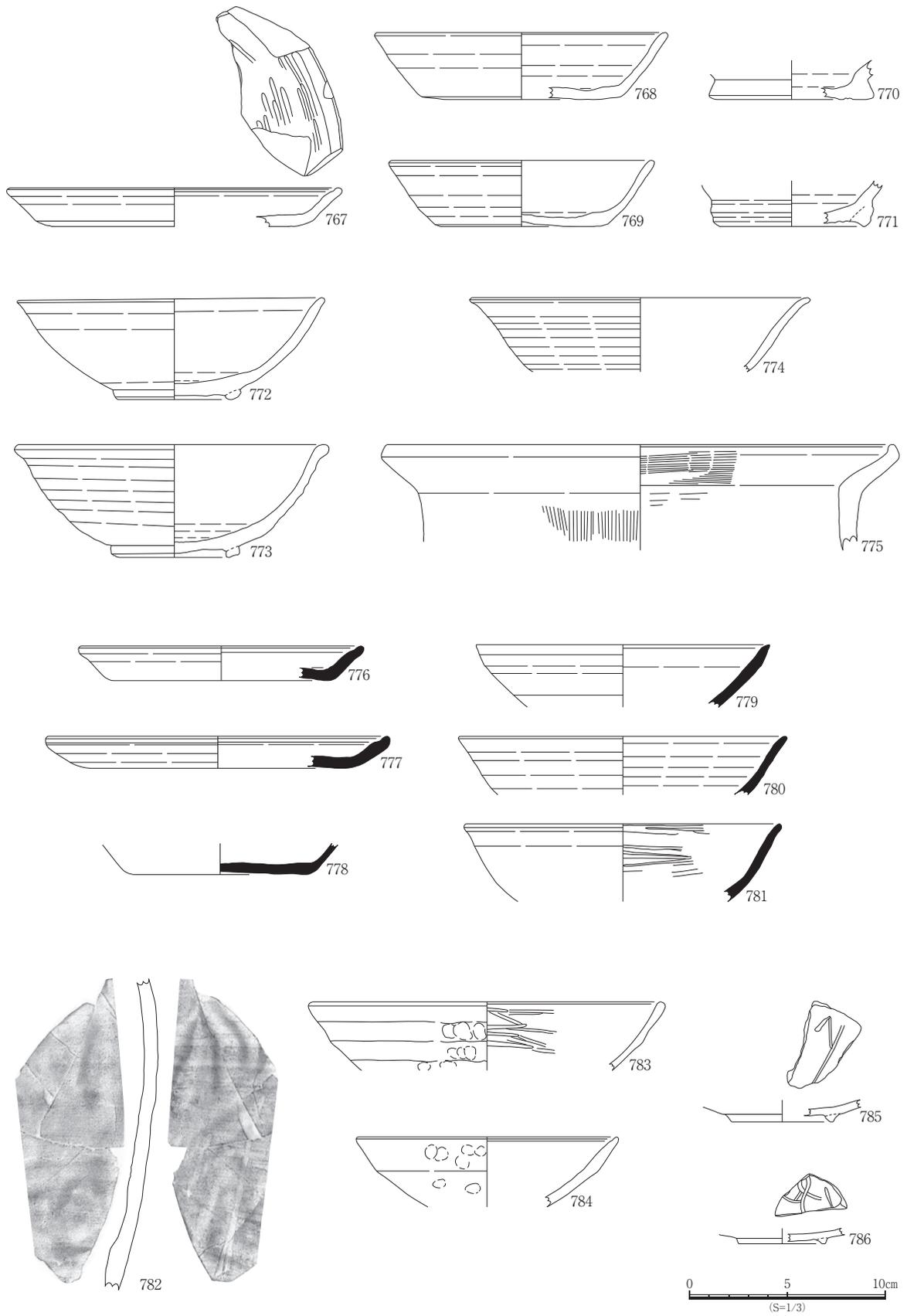


図158 Ⅲ区Ⅲ層遺物実測図

される。いずれも酸化焰焼成で軟質である。830・831は高台付きの盤である。口縁部は外反し、内面に沈線が施される。832～835は杯である。全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。832・833は体部が直線的に立ち上がり、834は体部中位から口縁部にかけてやや内湾気味になる。835の口縁端部はやや外方に屈曲する。口径が17.6cmと大きく、高台が付く杯と思われる。836・837は高杯の脚部である。836は杯部と裾部が欠損し、酸化焰焼成である。837の端部は拡張され面を成し外面に凹線が入る。838は蓋のつまみ部で、宝珠形を呈する。839は蓋で、回転ナデ調整が施される。酸化焰焼成である。841～843は須恵器甕で、外面平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕を残す。

844～846は黒色土器碗である。844・845は内黒の黒色土器であり、内面に暗文が施される。845は底部片であり断面三角形の低い高台が付く。846は内外面黒色の黒色土器であり、口縁端部は尖り気味に仕上げ、内面に沈線を施す。内外面ともに横方向の密なヘラミガキが施される。楠葉型黒色土器碗である。847は灰釉陶器碗であり、口縁部は短く外反し端部は尖り気味に仕上げる。848は緑釉陶器皿の底部である。円盤状高台を呈する。全体的に薄く緑釉が施される。外底部に「—」のヘラ記号が認められる。849・850は製塩土器である。849は口縁部であり、内傾する面を持つ。外面は指頭圧痕が顕著であり、内面は布目を残す。851～859は土錘である。860は銅製の鉋尾である。861は鉄製の鉋である。862～865は鉄釘である。866は砂岩製の叩石であり、敲打痕が認められる。867は砥石で砂岩製である。仕上砥であり4側面全て使用している。

IV-2層出土遺物(図162・163 868～898)

IV-2層からは9～11世紀代の遺物が中心に出土した。868～871は土師器皿である。全て回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。868・869は底部から外方に開き、口縁端部は丸く収める。870は底部から外方に立ち上がり、口縁端部を内側に屈曲させる。871は口縁部を外反させる。872は土師器盤であり、「ハ」の字に開く高台が付く。底部内面はやや落ち込む。回転ナデ調整が施される。873～877は土師器杯である。全て回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りによる。876は赤色塗彩である。878～881は高台が付く杯である。878は断面四角形の高台が付く。879・880は断面逆台形の高台が「ハ」の字に開く。881は細長の高い高台が付く。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。全て回転ナデ調整が施される。882～887は土師器甕である。882～884は口縁部が「く」の字に外反し、端部を上方に拡張し尖り気味に仕上げる。胴部外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整が施される。882・883の胎土は褐色を呈し、石英・長石を含む。885～887は口縁部が短く外反し、端部を上方に僅かに拡張する。885は胴部外面に横方向のハケ調整がみられる。内面は口縁部から胴部上半にかけて荒い単位のハケ調整が深く施される。886・887も荒い単位 of ハケ調整が施される。胎土はにぶい黄橙色を呈しチャートが含まれる。882～884は搬入系、885～887は在地系である。

888～894は須恵器である。888・889は皿で、回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りである。888の口縁端部は屈曲させ、内面に沈線が入る。内外面の一部に火襻が認められる。889の口縁端部は外側にツマミ出し、尖り気味に仕上げる。890は杯の底部片であり、回転ナデ調整、底部切離しは回転ヘラ切りによる。酸化焰焼成である。891・892は蓋で、天井部の一部が欠損する。天井部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整が施される。893は甕の口縁部片で、端部は僅かに上方に拡張され面を成す。894は甕の胴部片で、転用硯である。外面はタタキ成形後、ハケ調整が施される。内面

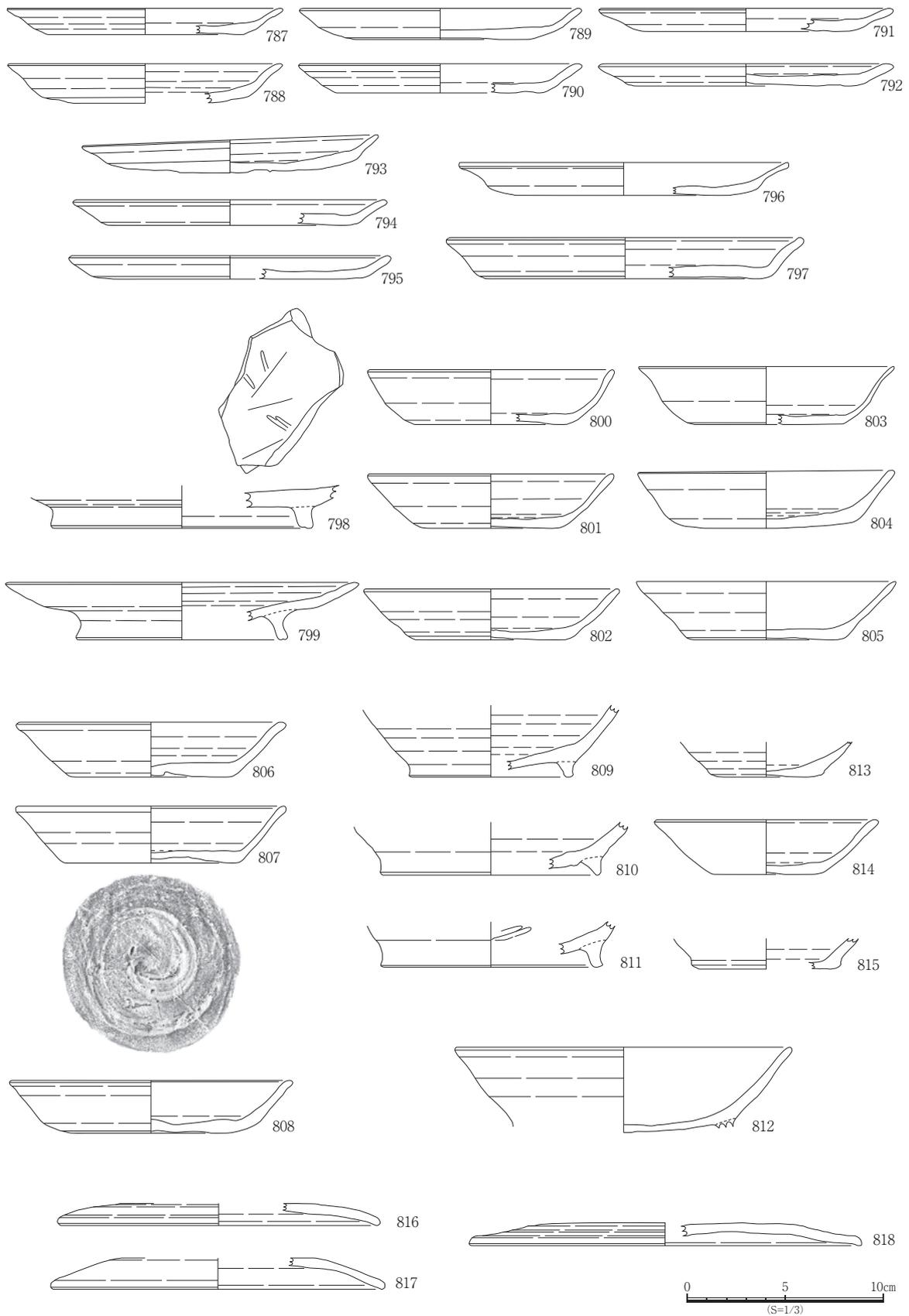


図159 Ⅲ区Ⅳ-1層遺物実測図1

3. III区

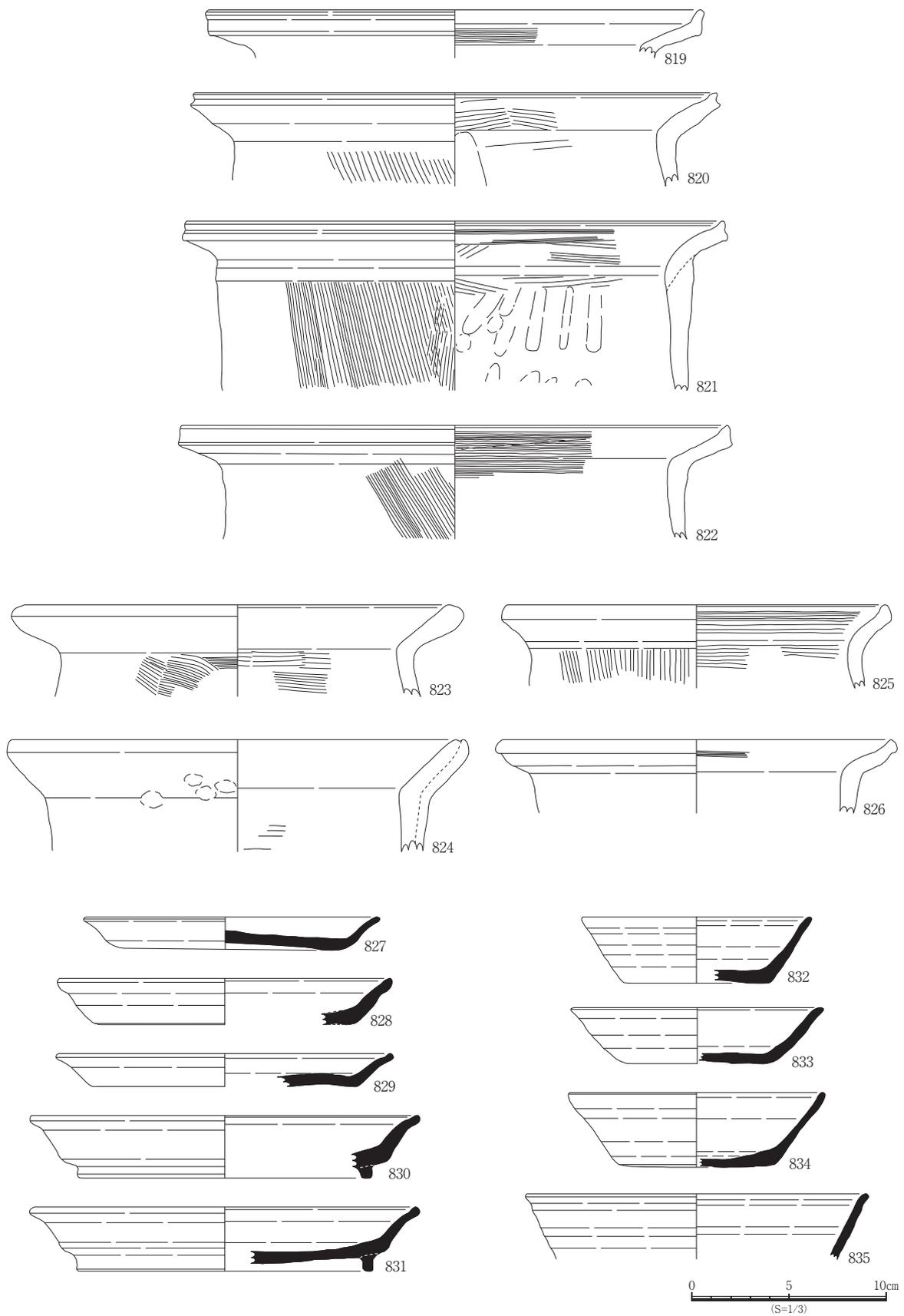


图160 III区IV-1層遺物实测图2

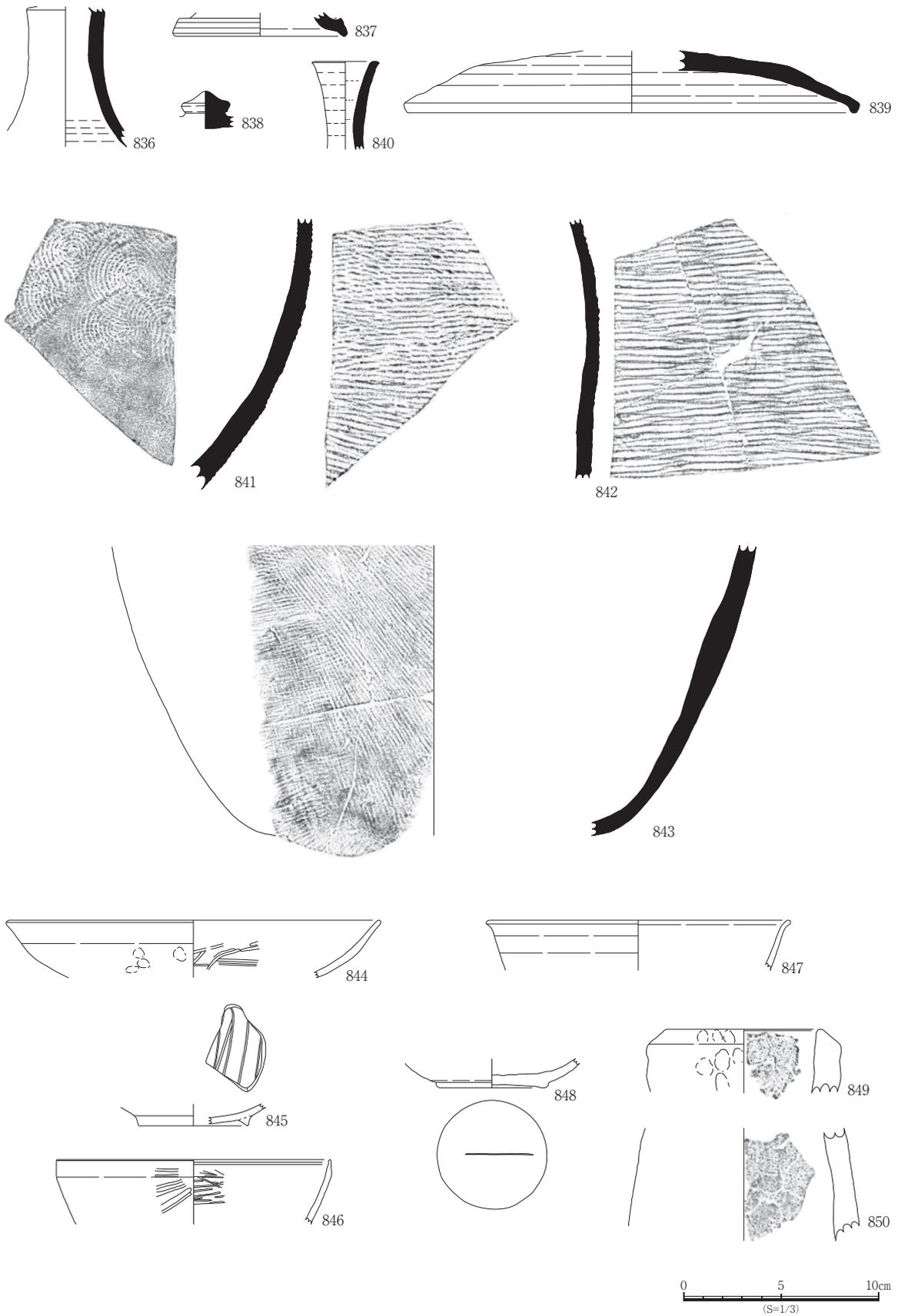
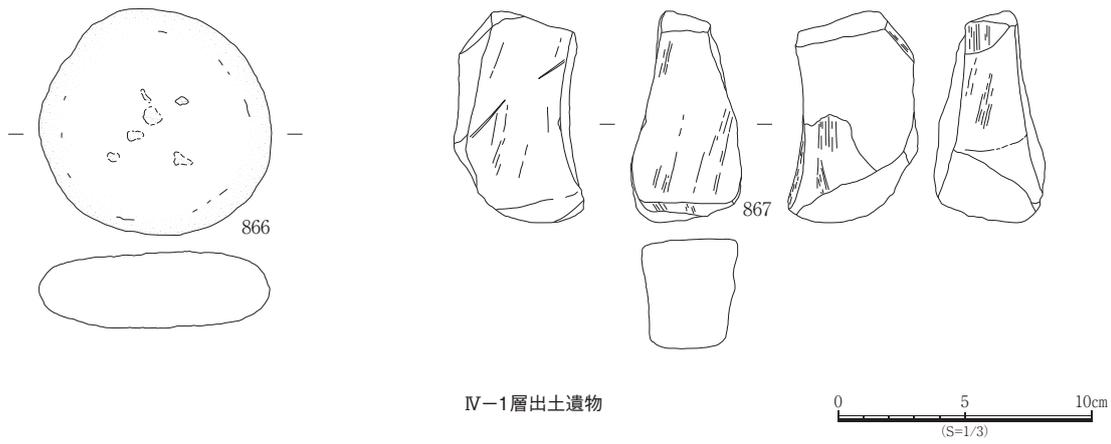
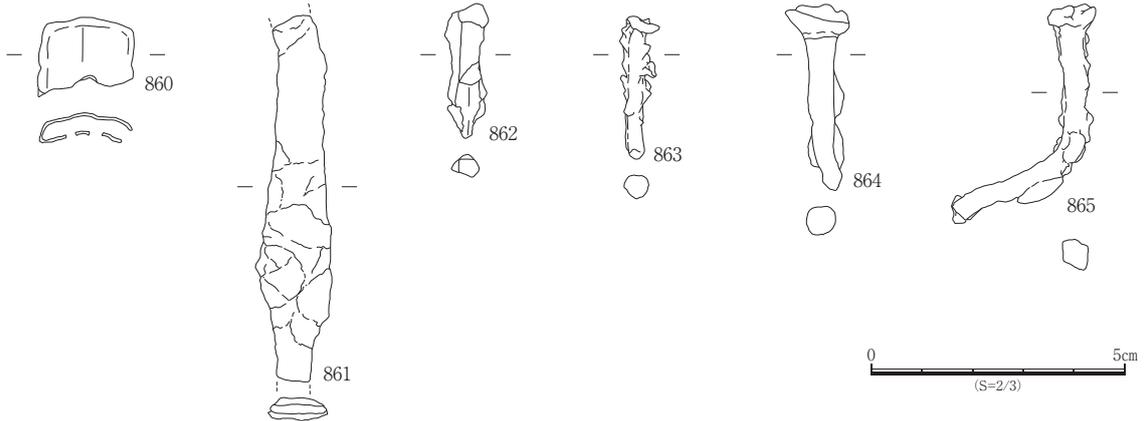
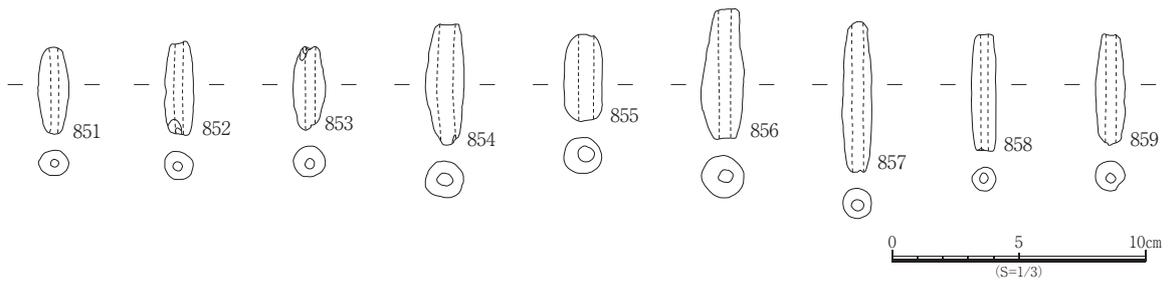
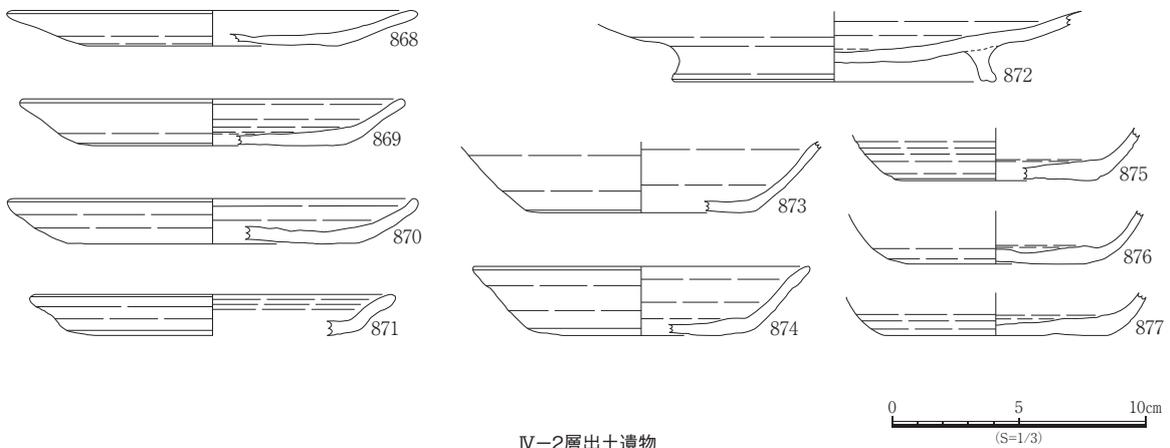


図161 Ⅲ区Ⅳ-1層遺物実測図3

3. III区



IV-1層出土遺物



IV-2層出土遺物

图162 III区IV-1層遺物実測図4·IV-2層遺物実測図1

の一部に硯として使用した擦り痕が認められる。895は黒色土器碗の底部片である。内黒の黒色土器碗で、内底部にヘラミガキが施される。畿内系黒色土器碗である。896は黒色土器の甕である。内面は丁寧に黒色処理されている。球形に膨らむ胴部から口縁部は外反し、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部内面は横方向に密なヘラミガキが施され、胴部内面はハケ調整が施される。口縁部外面は横方向のナデ調整と指頭圧痕が残る。胴部外面はヘラ状工具による横方向のナデ調整が施される。胎土の色調は褐灰色を呈し、長石を含む。畿内系黒色土器甕である。897は灰釉陶器碗の口縁部片である。口縁端部は外方に屈曲する。全体的に薄く灰釉が施される。898は管状土錘である。

V層出土遺物(図164～168 899～980)

V層は9～11世紀代の遺物が中心に出土した。899～904は土師器皿で、全て回転ナデ調整、底部の切離しは回転ヘラ切りによる。899・900は口縁部が外反し、901・902は直線的に立ち上がる。902は口縁部内面が沈線状に凹む。903・904は底部片で、見込みに「×」のヘラ記号が施される。905～911は平底の土師器杯である。905・906は回転ナデ調整が施され、底部の切離しは回転ヘラ切りである。910は内外面にヘラミガキが施される。911の内底部は凹む。回転ナデ調整、底部外面には回転ヘラ切り痕が残る。912～915は高台が付く土師器杯である。912は断面四角形の高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は丸く収める。回転ナデ調整が施される。913は低い高台が付く。器壁が厚く内外面にヘラミガキが施される。914は細長い高台が付く。回転ナデ調整が施される。915も細長い高台が付き、畳付は尖り気味に仕上げる。体部は外方に直線的に立ち上がり、口縁部は肥厚し端部は丸く収める。回転ナデ調整が施される。916は土師器蓋で、天井部は欠損する。扁平で口縁部は丸く収める。917～929は土師器甕である。917～920の口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張される。917は胴部下半がやや膨らみ、中位から口縁部にかけて内面に粘土帯の接合痕が認められる。胴部内面は縦方向のナデ調整、上位から口縁部内面にかけて横方向のハケ調整、胴部外面は縦方向のハケ調整が丁寧に施される。口縁部はナデ調整、端部外面に面を成し、中央部が凹線状に凹む。918の口縁部端部は上方への拡張が強いナデが施され内外面ともに凹む。胴部外面及び口縁部内面はハケ調整、胴部内面は横方向のナデ調整が施される。919の口縁部は僅かに上方への拡張がみられ、端部は面を成す。胴部外面及び胴部内面上位から口縁部にかけては横方向を基調とするハケ調整が施される。胎土にチャートを含む。920は他に比べ緩く外反する。胴部外面は斜位のハケ調整、内面は横方向を基調とするハケ調整が施される。胎土に石英を含む。921・922の口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に内湾気味に屈曲させ丸みを持つ。胴部外面は斜位のハケ調整が施され、胴部内面から口縁部内面は横方向のハケ調整が施される。口縁部外面は横方向にハケ状工具による調整が深く施される。917～922は胎土が褐色系を呈し搬入系の甕である。923～928は口縁部が短く外反する甕である。923～925の口縁部は僅かに肥厚する。胴部外面は縦方向と横方向の荒いハケ調整が施される。口縁部内面は横方向の荒いハケ調整が深く施される。926・927は胴部の張りが他に比べ大きく、口縁部は上方に拡張がみられる。胴部外面は縦方向、口縁部内面は横方向に荒い単位のハケ調整が施される。928の口縁部は外反が強く、端部は上方にツマミ上げ尖り気味に仕上げる。929は胴部上位に最大径がある。胴部と口縁部は接合部が顕著で、内面に接合痕を残す。外面は横方向を基調とするハケ調整が施され、一部縦方向のハケ目と交錯する。口縁部内面は横方向のハケ調整が施される。923～929は胎土にチャートを含む。在地系の甕である。

930～950は須恵器である。930～935は皿である。全て回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。930・931には火襷が入る。931～933は口縁端部の屈曲がつよく内側に沈線が入る。935の口縁端部は上方に尖り気味に仕上げる。936～939は杯である。全て回転ナデ調整が施され、底部切離しは回転ヘラ切りである。936は小杯であり、ベタ底から斜上方に直線的に立ち上がる。937はベタ底から斜上方に直線的に立ち上がる。酸化焰焼成である。938・939は高台を持つ杯である。938は断面四角形の高台が付く。939は断面逆台形状の高台が付き、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。酸化焰焼成である。940は高杯の脚部であり、杯部は欠損する。脚部中位に二条の沈線が施される。941・942は蓋である。941はつまみ部が欠損する。天井部はヘラ削り、その他は回転ナデ調整が施される。943～946は壺である。943は壺の頸部であり、口縁部及び胴部が欠損する。ナデ調整が施され自然釉が付着する。944・945は高台が付く壺であり、高台部は欠損する。大小の二法量がある。946は壺の胴部片である。ナデ調整が施され、外面は全体的に灰褐色の自然釉がかかる。947は双耳壺の把手である。外面は面を成し、把手下部は抉りが入る。中央部に直径5.0mmの穿孔がある。色調は946と同じく灰黒色を呈する。948は長頸壺の胴部片である。胴部上位で内側に屈曲し肩部を成す。肩部は縁帯状を呈する。内面は回転ナデ調整が顕著であり、外面は丁寧なナデ調整が施され、一部に自然釉が付着する。949も長頸壺の胴部片と思われる、外面胴部中位に上下二条の沈線が施される。950は甕である。口縁端部は斜め下方に拡張し面を成す。胴部外面は平行のタタキ目が残る。内面は丁寧なナデ調整が施される。

951～954は内黒の黒色土器碗であり、内面にヘラミガキ、暗文が施される。951の口縁端部は尖り気味に仕上げる。体部内面には横方向のヘラミガキと輪状の暗文が施される。952は口縁端部内面に一条の沈線、内面は横方向のヘラミガキが施される。953は口縁端部を尖り気味に仕上げる。内面に横方向のヘラミガキが施される。954は底部片であり、見込みに平行ミガキ、連結輪状風の暗文が施される。いずれも畿内系黒色土器である。955・956は黒色土器甕である。膨らみのある胴部から口縁部は短く外反し口縁端部は尖り気味に仕上げる。内面のみ黒色処理される。956の胴部内面は横方向のヘラ削り痕が認められる。胎土に雲母片を含む。これも畿内系黒色土器である。

957は東海系の灰釉陶器碗である。断面三日月状の高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外側に短く屈曲する。外面体部下半はヘラケズリ、上半はナデ調整が施される。体部下半まで施釉される。958～960は緑釉陶器である。958は蛇ノ目高台の皿であり、高台外面までオリーブ色を呈した釉が施釉される。959・960は碗の口縁部片であり、口縁部は外反する。軟質である。いずれも京都系緑釉陶器である。

961～966は製塩土器である。961・962・964は口縁部片であり、内傾する面を持つ。963・966は胴部片であり内面に布目痕を残す。965は底部片であり、丸底を呈する。967～970は管状土錘である。967・968は全長3.6cm、重量3.0g前後を測り、969・970は全長4.5～5.1cm、重量7.0～16.0gを測るタイプが認められる。971～974は鉄器である。971は刀子の先端部である。972は鉈、973は有茎平根式の鉄鏃である。974は雁股式の鉄鏃であり茎の部分が傘状に開く。975は滑石製の石鍋の断片である。温石として転用したものと思われる。976・977は棒状石器であり、緑片岩製である。全長10.0cm前後を測り、用途は不明であるが同規格の石が比較的多く出土した。978・979は叩石であり、978は砂岩製の円礫で、中央部両面に敲打痕が認められる。979は棒状の叩石であり、一側片に敲打痕が残る。980は砥石であり、仕上砥である。四面を使用しており、各面に弧状に擦り減った痕が残る。

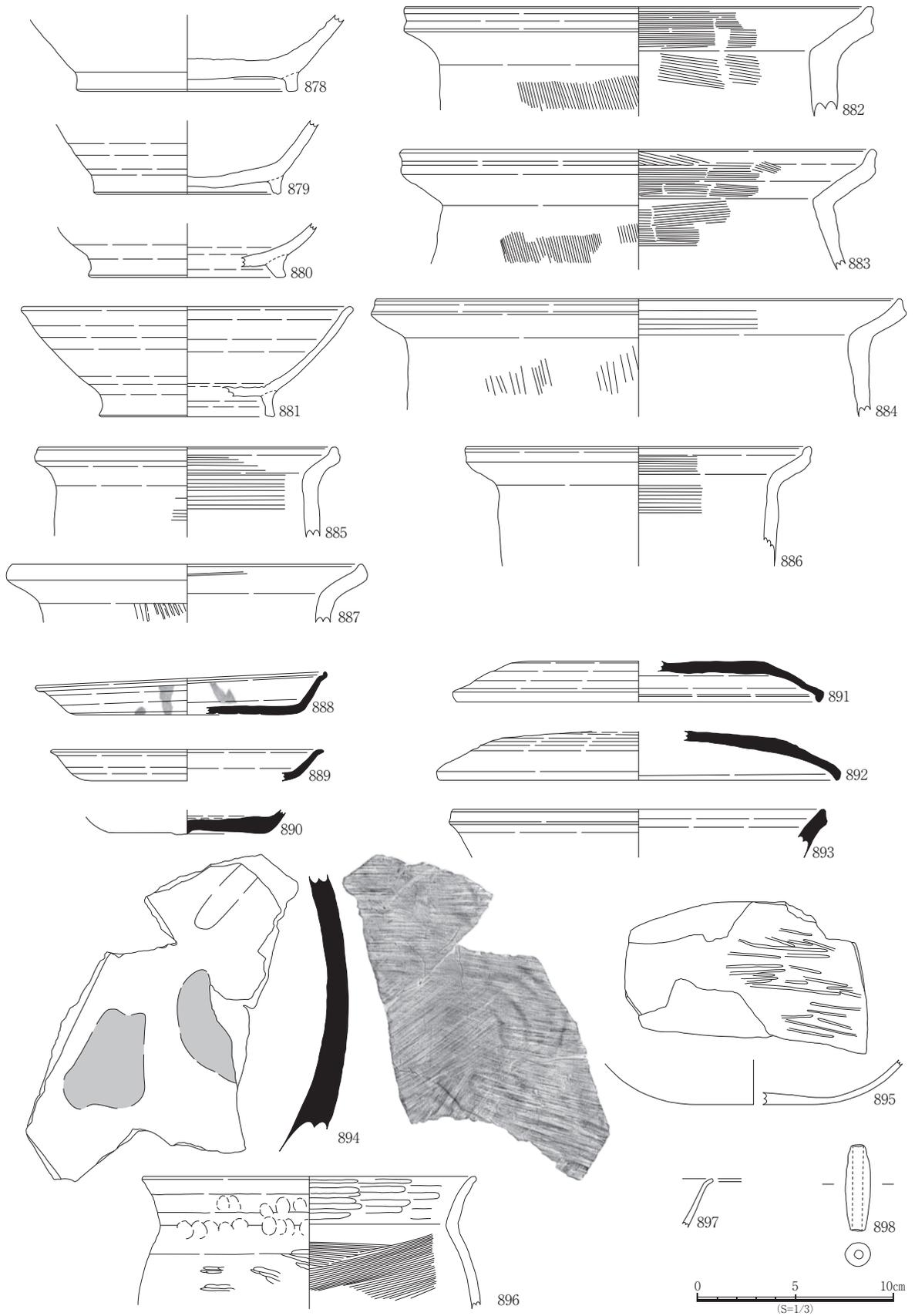


図163 Ⅲ区Ⅳ-2層遺物実測図2

3. III区

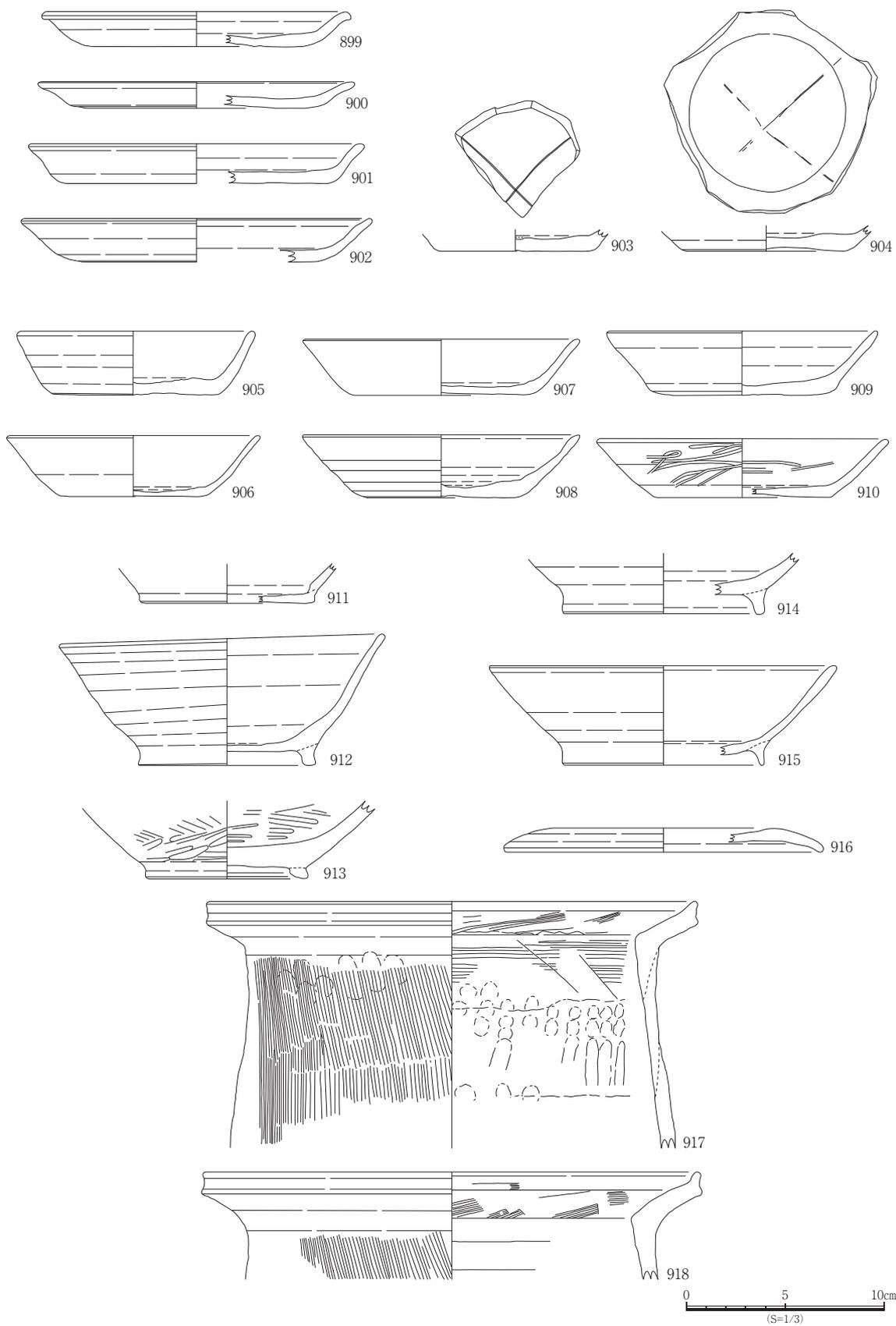


图164 III区V層遺物実測図1

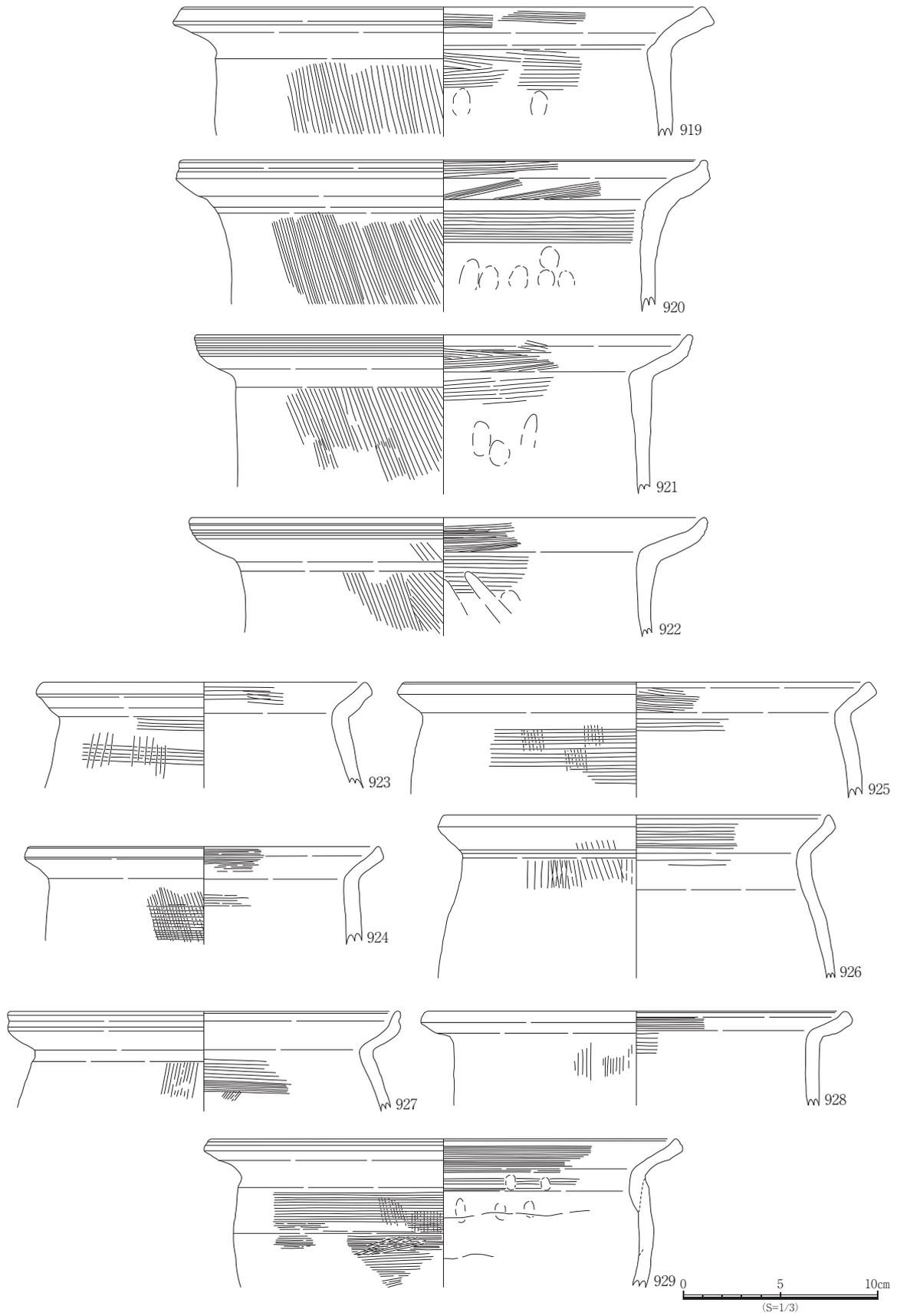


図165 Ⅲ区V層遺物実測図2

3. III区

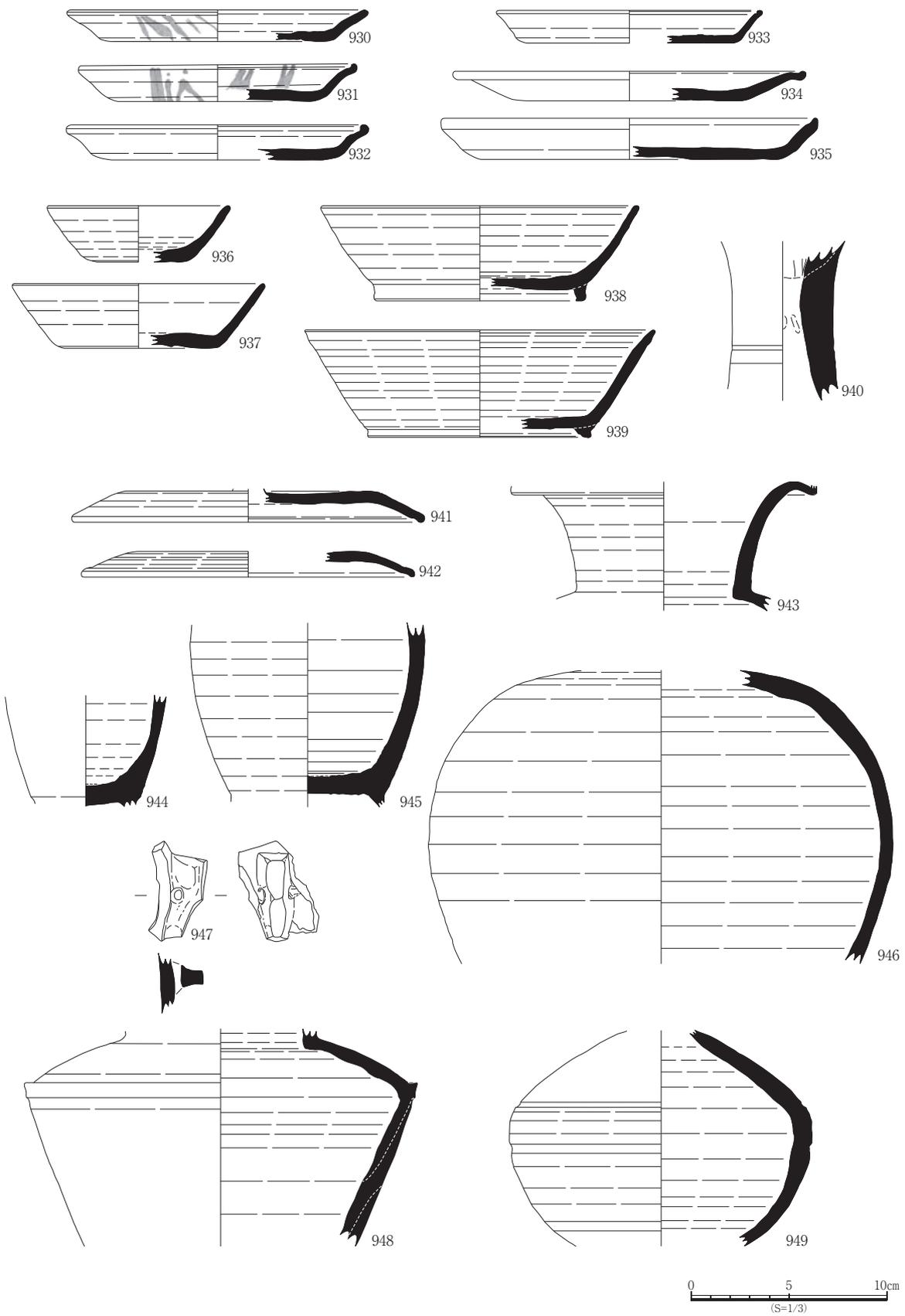


图166 III区V層遺物实测图3

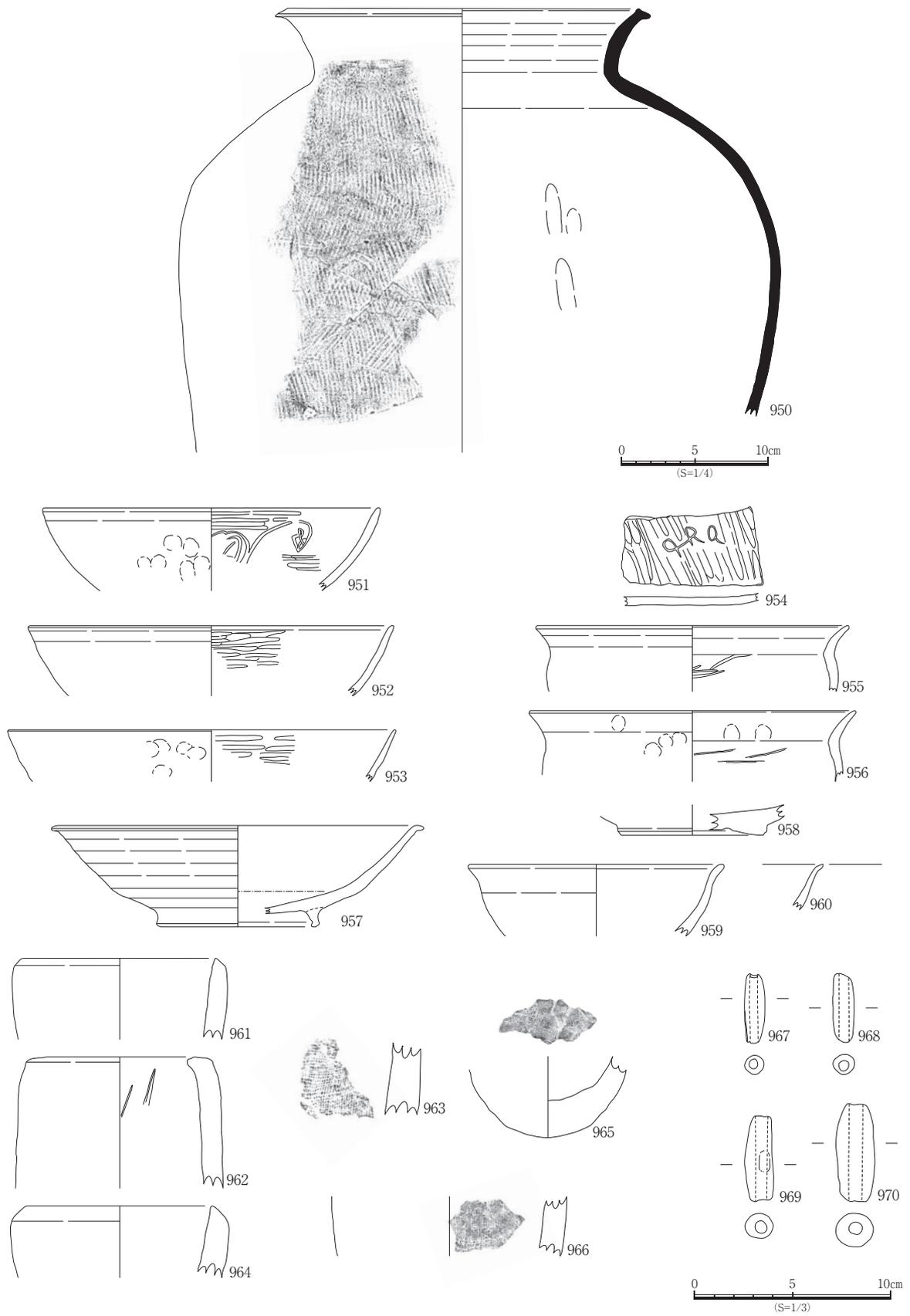


図167 Ⅲ区V層遺物実測図4

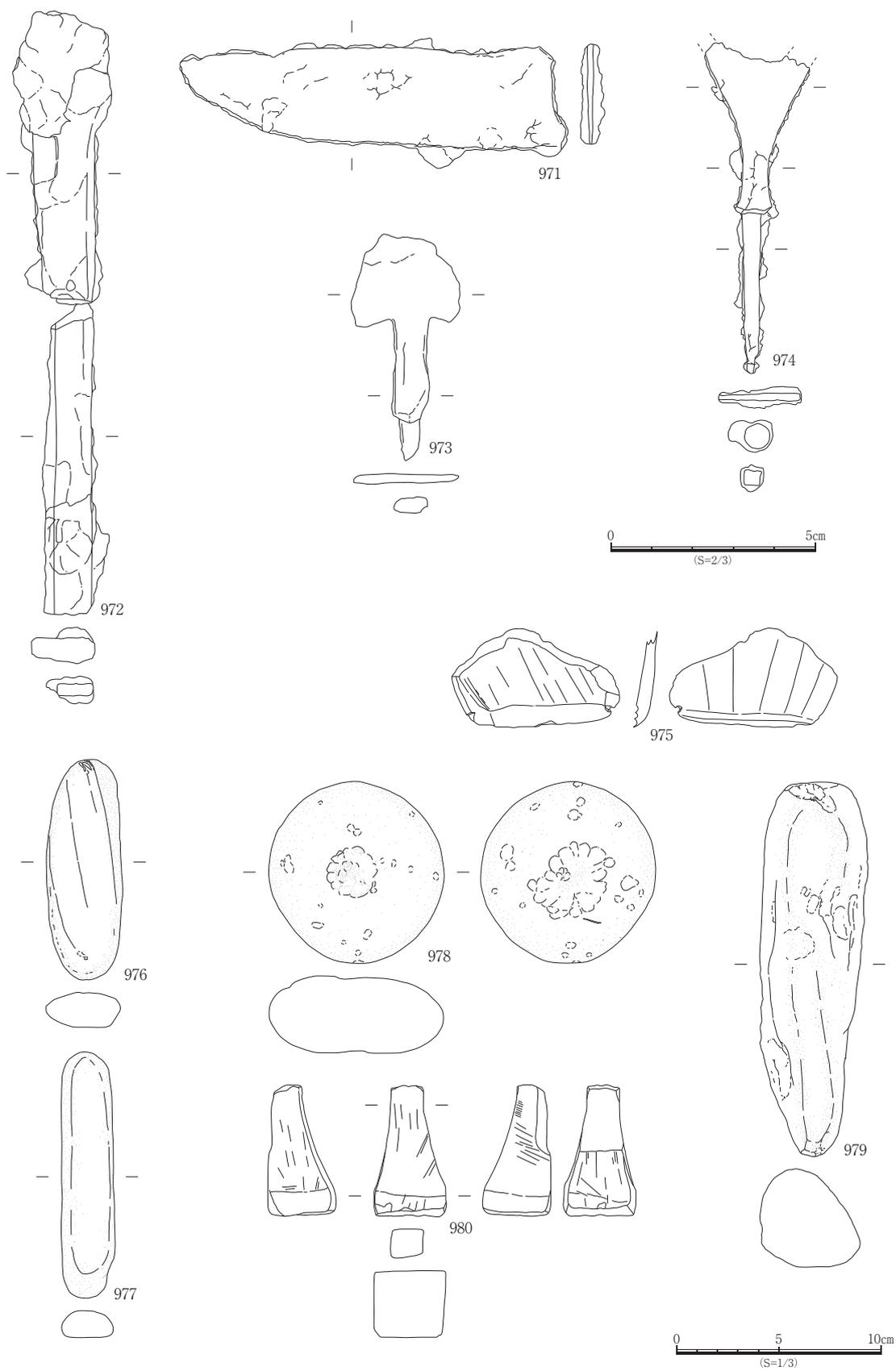


图168 III区V層遺物実測図5

第IV章 科学分析

1. 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

松元 美由紀・高橋 敦

(1) はじめに

本報告では、検出された植物遺体の同定および計測について述べる。

(2) 試料

試料は、天神溝田遺跡より出土した種実遺体5式分である。分析の便宜上、各試料に試料番号を付している。Ⅱ区の埋納遺構壺内底部より出土した種実遺体(水洗別済サンプル；試料番号1)、ひも状の自然遺物を構成する植物遺体(試料番号2)の、2点である。試料は水浸の状態である。

(3) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2000)、岡本(1979)等を参考に実施し、個数と重量を求めて結果を一覧表で示す。また、状態が良好なアワの完形果実100個を対象に、デジタルノギスを用いて、長さ、幅、厚さを計測し、結果を一覧表で示す。分析後は、種実遺体等を分類群毎に容器に入れ、約70%のエタノール溶液で液浸し保管する。

(4) 結果

試料番号1

栽培種のアワの果実が約770個(1.5cc)、イネの穎が1個、胚乳が9個と、草本のホタルイ属の果実が1個、カヤツリグサ属の果実が1個の、合計782個の種実遺体を確認された。

各分類群の形態的特徴等を述べる。

表12 天神溝田遺跡の種実同定結果

分類群	部位・状態	Ⅱ区		備考		
		P161				
		壺内底部				
		水洗別済	植物遺体			
		1	2			
アワ	果実	塊状	約30	-		
		完形	572	-	約1.5cc, 100個を計測	
		破片(外穎)	85	-		
		破片(内穎)	83	-		
イネ	穎	破片	1	-		
		胚乳	完形	6	-	
			破片	3	-	
ホタルイ属	果実	破片(基部)	1	-		
カヤツリグサ属	果実	完形	1	-		
不明			-	3	約2cc, 長さ約12cm, 幅4.7~5mm	

・アワ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

果実(穎果)は灰黄褐色, 半広倒卵状楕円体で腹面(内穎)は平らで背面(外穎)は丸みがある。果皮内部の胚乳を欠損した中空の個体が多い。果皮はやや厚く柔らかく, 表面はアワ特有の微細な乳頭突起(Nasu.et.al.,2007)の配列に似る。

状態が良好な果実100個の大きさを計測した結果, 長さは, 最小1.9~最大2.3(平均2.06±標準偏差0.08) mm, 幅は1.1~1.5(平均1.29±0.08) mm, 厚さは0.7~1.2(平均0.86±0.09) mmであった。また, 計測値をもとに, 長さ/幅を求めた結果, 最小1.3~最大2.0, 平均1.60±標準偏差0.14で, 長さ/幅の比率が2未満を示す円粒(Nasu.et.al.,2007)に属する。

出土果実は, 栽培種のアワとともに多量出土した状況と, 大きさ, 丸みを帯びた粒形, 果皮表面模様を総合的に考慮して, 栽培種のアワと判断している。今後, 果皮表面の電子顕微鏡下観察による詳細な検討が望まれる。

果実が複数集結した泥塊は, 径は1.1cm×0.8cm×0.6cmを測り, 表面に果実が約30個確認された。果実の隣接は確認されるが, 規則性は不明瞭で, 果序(穂)の可能性を示唆するには至らなかった。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳, 穎(果)は灰黄褐色, 胚乳は長さ6.2mm, 幅3.2mm, 厚さ1.8mm程度の扁平な長楕円体。内部を欠損したほぼ中空の状態ですぶれている。基部一端には, 胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面は粗面で, 2~3本の縦隆条が確認される。穎(果)は破片で, 残存長は2.3mm, 残存幅は0.9mmを測る。果皮は薄く, 表面には微細な顆粒状突起が縦列する。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は灰黒褐色, 完形ならば, 長さ2mm, 幅1.8mm, 厚さ0.8mm程度の片凸レンズ状広倒卵体で, 頂部は尖り, 基部は切形。破片は基部のみの残存で, 残存長は0.6mm, 残存幅は1.1mmを測る。基部からのびる灰褐色, 刺針状の花被片を欠損する。果皮表面には不規則な波状横皺状模様がある。

・カヤツリグサ属 (*Cyperus*)

果実は灰黒褐色, 長さ1.2mm, 0.7mmの三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分は尖り, 基部は切形。果皮表面には微細な疣状突起が密布する。

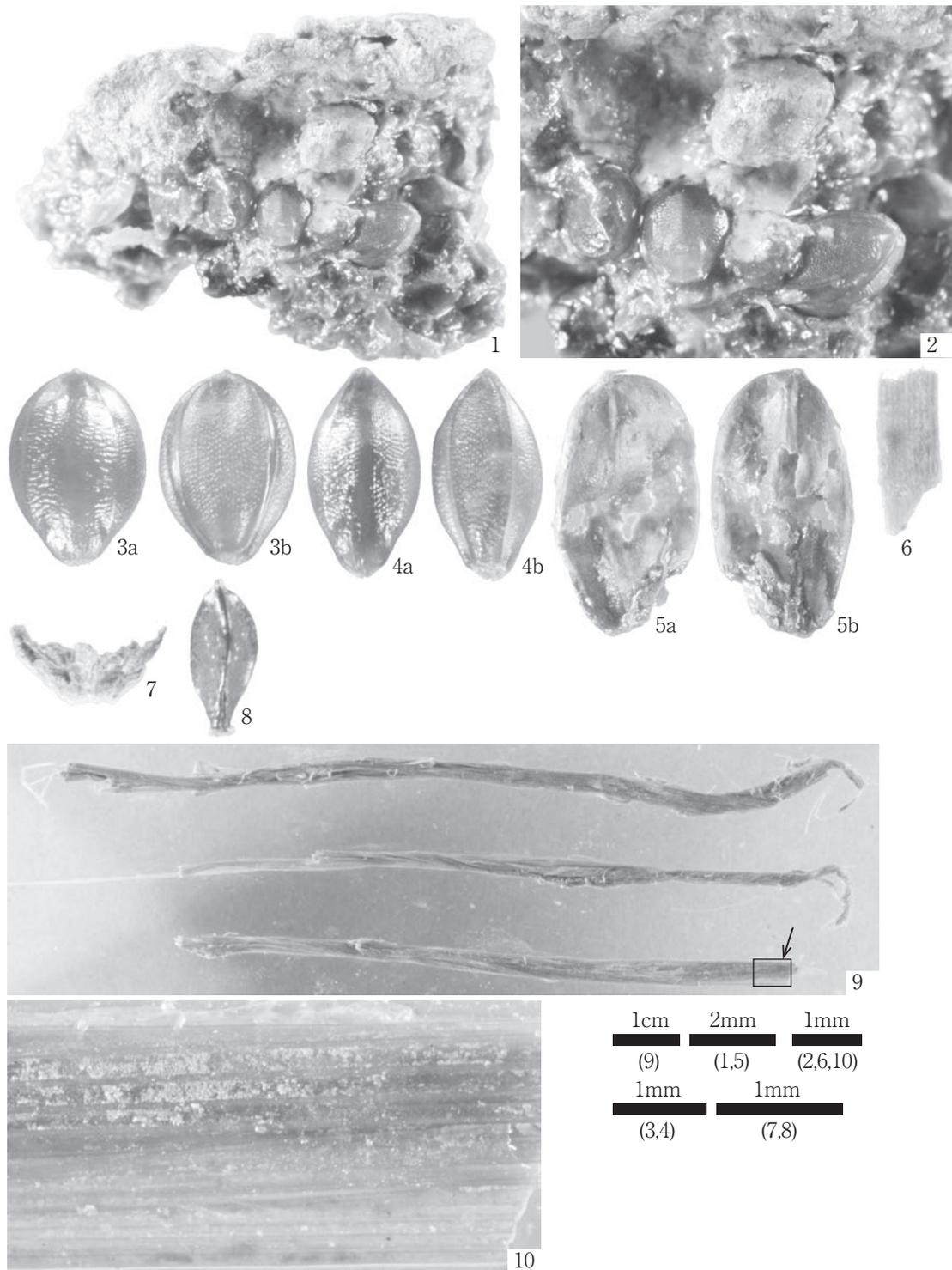
試料番号2

部位・種類ともに不明であった。植物遺体は3本(約2cc)確認され, 灰褐色, 長さ約12cm, 幅4.7~5mmの線状を呈す。表面には長軸方向の微細な平行脈が確認されることから, 単子葉植物の葉や, 植物の茎などに由来すると考えられる。一部を対象とした生物顕微鏡下観察を試みた結果, 細胞列は確認されたが, 種類の特定には至らなかった。

表13 アワ果実の大きさ

II区 P161 壺内底部 (n=100)											
長さ (mm)				幅 (mm)				厚さ (mm)			
最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差
1.9	2.3	2.06	± 0.08	1.1	1.5	1.29	± 0.08	0.7	1.2	0.86	± 0.09
長さ×幅				長さ/幅							
最小	最大	平均	標準偏差	最小	最大	平均	標準偏差				
2.2	3.1	2.66	± 0.17	1.3	2.0	1.60	± 0.14				

注) 計測値はデジタルノギスによる。



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------------|
| 1. アワ 果実(塊状)(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) | 2. アワ 果実(塊状; 1の拡大)(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) |
| 3. アワ 果実(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) | 4. アワ 果実(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) |
| 5. イネ 胚乳(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) | 6. イネ 穎(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) |
| 7. ホタルイ属 果実(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) | 8. カヤツリグサ属 果実(Ⅱ区 P161 壺内底部; 1) |
| 9. 不明(Ⅱ区 P161 壺内底部; 2) | 10. 不明(9の矢印部の拡大)(Ⅱ区 P161 壺内底部; 2) |

写真11 天神溝田遺跡の種実・植物遺体

(5) 考察

分析を行った植物遺体は、室町時代とされる埋納遺構から検出された備前焼の壺内から検出された。この壺内には、和鏡および土師質土器が存在していた。発掘結果から、埋納遺構の壺は、祭祀に伴うものと考えられている。同定した植物遺体のうち試料番号1の多くは、土師質土器に付着するような状況で検出されている。

この試料番号1の種実遺体には、栽培種のアワの果実が約770個と、イネの穎が1個、胚乳が9個の、計780個が確認された。穀類のアワ、イネは、当時の植物質食糧と示唆され、祭祀に伴う埋納品に由来する可能性がある。また、多量のアワとともに出土したイネには、炭化していない胚乳が確認された。胚乳は、炭化しない限り堆積物中に残りにくいため、遺跡出土例は稀である。これらの種実を含む植物遺体は、嫌気的環境下で埋積したと考えられる。

栽培種を除いた種実遺体は、草本のホタルイ属、カヤツリグサ属が各1個確認された。調査区周辺域の草地環境に生育していたと考えられる。ホタルイ属には水湿地生植物を含むことから、周辺域に水田を含む水湿地の存在が推定される。

なお、試料番号2の植物遺体は、壺内に埋納された古銭を束ねたひもと推定されている。この植物遺体は、平行脈と細胞列は確認されたが、部位・種類ともに不明であった。

引用文献

- 今村峯雄・設楽博巳,2011,炭素14年の記録から見た自然環境－弥生中期－.多様化する弥生文化 弥生時代の考古学3,同成社,48-69.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- Nasu, H., Momohara, A., Yasuda, Y., and He, J.J., 2007, The occurrence and identification of *Setaria italica* (L.) P.Beauv. (foxtail millet) grains from the Chengtoushan site (ca.5800 cal B.P.) in central China, with reference to the domestication centre in Asia. *Vegetation History and Archaeobotany*, 16, 481-494.
- 那須孝悌,1975,山口市萩峠遺跡貯蔵穴中の植物遺体および花粉(予報).山口市教育委員会.
- 岡本素治,1979,遺跡から出土するイチイガシ.大阪市立自然史博物館業績,第230号,31-39.
- 佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2生業,金関 怨・佐原 真編,雄山閣,97-111.
- 渡辺 誠,1975,縄文時代の植物食.雄山閣出版,187p.

2. 和鏡の成分分析

財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 保存科学室

(1) 分析方法

外観的には非常に残りがよく強度があるように見えているが、X線透過写真撮影を行ったところ予想に反して内部が“粗”である様子がうかがわれた。後のベンゾトリアゾール含浸処理において、減圧の際に中から脱気される量が多かったことから、内部的な腐食が進行している可能性がある。

成分分析に使用したのはエネルギー分散型蛍光X線成分分析装置(エダックス社製DX95改良型, 大阪歴史博物館設置)で、表面的な分析を非破壊で行った。分析は鏡面2箇所, 外縁の立ち上がり上端面1箇所, 計3箇所である。

(2) 分析の結果

分析の結果, 3箇所とも似通った成分組成であった。検出した元素は銅(Cu), 錫(Sn), 鉛(Pb)で, 微量に水銀(Hg), 銀(Ag)を含んでいる。銅が主成分であることは間違いなく, いわゆる青銅製と思われるが各箇所ともに錫・鉛の検出量が多い。

錫について, 鏡面の仕上げに用いられたことは想像に難くないが, 外縁の上端面からも鏡面と同様に検出していることには疑問が残る。埋蔵中の腐食により表面的に錫の遺存量が上がるケースもあるが, それほど傷んでいる様子はない。

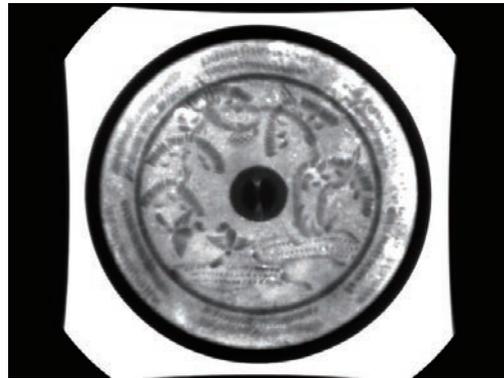
一方, 別途行った微小部の成分分析では鏡面に見られる白色の斑点部(中央赤丸部分)から非常に高濃度の鉛を検出した。よって鉛が偏析していると考えられるが, X線透過写真撮影ではこれを裏付けるような明瞭な画像を得ることはできなかった。内部が粉状化しているためとも考えられるが, 現状では断定できない。

今回の調査は非破壊的に行ったため, 当該資料が内包する問題を明瞭に切り分けることができず, このため, 成分分析の結果から鏡地金そのものの組成や, 技法上の裏付けとなる根拠や解釈を導き出すことはできなかった。

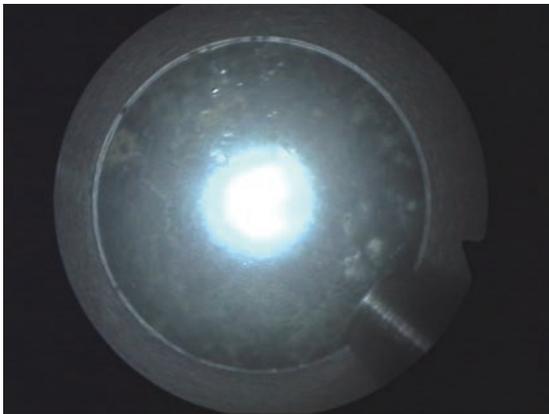
2. 和鏡の成分分析



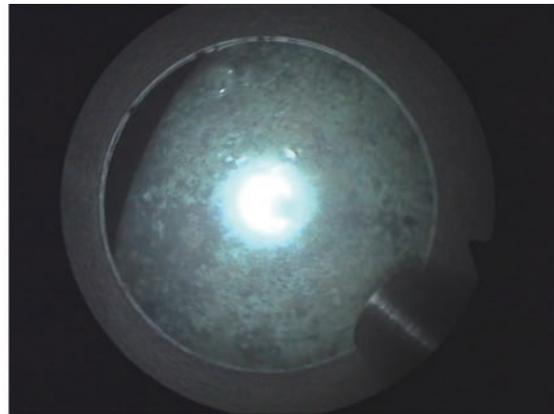
保存処理後



X線透過写真撮影



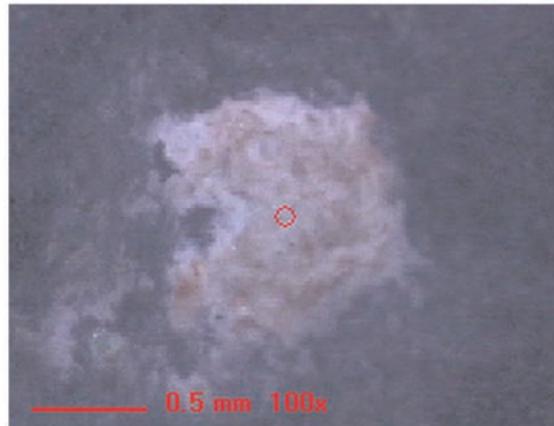
(19)kOZ11103-01-01v



(20)kOZ11103-01-02v



(21)kOZ11103-01-03v



(22)kOZ11103kagami01-01v

エネルギー分散型蛍光 X線成分分析装置による分析

写真12 和鏡保存処理後・X線写真

第V章 まとめ

1. 弥生時代 - I W区出土の弥生土器について-

I W区で出土した弥生土器は、従来「天神式土器」と呼称され、弥生時代後期後半に位置付けされているものである。I W区は調査対象地西端にあたり「天神式土器」⁽¹⁾が出土した天神遺跡に隣接する事から、この土器の特徴について触れてみたい。出土した土器は壺・甕・鉢・高杯がある。甕については、当地域に所在する寺門遺跡で出土した「寺門式土器」⁽²⁾(弥生時代後期前半)に比べ器壁が薄くなる。甕の口縁部については、頸部からの屈曲が強く、端部は下方に僅かに拡張がみられ、ハケ調整が施されている特徴がある。また、口縁部内面に接合痕が認められ、粘土継ぎ足しにより、口縁部全体の外反の度合いが高くなるものと思われる。壺は二重口縁を持つものが多く、拡張された口縁外面に細かなハケによる波状文が施されている。壺・甕にみられるハケ状工具による調整は、寺門式土器にみられるものに比べ非常に細やかな単位で浅い調整が施されており、タタキ目を丁寧に撫でて消す手法が取り入れられている。壺・甕類の底部については僅かに平らな部分を残すものが多いが丸底に近い。底部外面にタタキ目を残すものがあり、平底成形を意識しているものもみられる。内面の調整はナデ調整、ハケ調整がみられ、平底の底部はハケ状工具により横方向に削るものが出土している。また、甕の法量は、大型・中型・小型の三法量に分けられ、小型のものには、底部がやや突出し段を持つタイプもみられる。鉢は平底と、丸底に近い平底、丸底の3タイプがある。

今回、I W区の土器溜まりで出土した壺・甕・鉢・高杯の比率は、壺が25%、甕が70%で、鉢・高杯は全体の1%以下である。弥生時代後期終末頃に位置付けされている高知県中央部から東部の土器である「ヒビノキⅡ式」⁽³⁾に併行期を求める事ができるが、比較すると全体的なプロポーション、調整手法等に相違がみられる。これは地域差として捉えることができる。特に、全体的な調整にハケ・ナデ調整を施す事、及び粘土継ぎ足しによる口縁部の外反、端部を下方に拡張させる仕上がりは天神溝田遺跡の土器の特徴の一つといえる。仁淀川流域に点在する遺跡の中では西分増井遺跡⁽⁴⁾(高知県春野町) ST13及び遺物集中1出土の資料と形態的な特徴が類似している。器種の組成比等からみても天神溝田遺跡の土器集中資料とほぼ同比率であり、併行関係を求めることができる。ただ、西分増井遺跡ST13出土の甕については胴部外面のタタキ目が顕著で、施されるハケ調整の度合いが弱く、天神溝田遺跡出土の甕とは調整手法に差異がある。底部も安定感のある平底形態であり、丸底化が進む前段階の様にも思える。西分増井遺跡の遺物集中1とST13から出土した土器は、どちらも弥生時代後期終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。しかしながら、鉢については、竪穴建物跡から出土した割合が3割を示すのに対し、一括廃棄される場合においては1割に満たない状況が指摘されている。天神溝田遺跡の土器集中資料においても鉢の割合が少なく、西分増井遺跡と同じ状況がみられる事から土器廃棄の背景と住居址一般の状況とは異なっていることを示している。

仁淀川流域における弥生時代後期後半の集落としての具体的な様相を知る資料は下流域の西分増井遺跡の他に、中流域では岩井口遺跡、二ノ部遺跡⁽⁵⁾(佐川町)が挙げられる。岩井口遺跡・二ノ部遺跡では弥生時代終末期頃に位置付けられる竪穴建物跡、土坑、ピットが検出されており、一般的な集落形態の一端を知る資料が得られている。遺物は壺・甕・鉢が主体に出土しており、壺・甕につい

1. 弥生時代

ては底部が平底のものと丸底のものが併存する状況がみられ、土器の法量や特徴も天神溝田遺跡と類似する。天神溝田遺跡出土の弥生土器についてはこれらの遺跡の出土遺物との比較から、併行する土器として位置付けしたい。

今回の発掘調査では、竪穴建物跡など集落を構成する遺構は検出されなかったが、I W区で弥生土器が一括廃棄された状態で出土したことで、天神遺跡の立地する丘陵の裾野から天神溝田遺跡の範囲にかけて弥生時代後期終末期の集落が広がる事が明らかとなった。いの町では、先述した後期前半の「寺門遺跡」から今回の後期終末期の「天神遺跡」「天神溝田遺跡」への変遷が追える。また、この間を埋める資料として「塔の向遺跡」出土資料、いの町道建設に伴う発掘調査で検出された天神溝田遺跡調査I区SK19資料⁽⁶⁾が後期中葉に位置付けられており、今後は、これらの遺跡資料の検討を行い、土器の変化、地域性を抽出したい。

2. 古代 — 遺物の帰属時期と遺跡の性格 —

古代の遺構は、I E区下面、II区の西部下面、及びIII区で検出した。検出された遺構はピット、土坑である。ピットの中には柱痕が確認されたものもあるが、複数が切り合っており、掘立柱建物跡を復元するに至らなかった。検出遺構の中心的な時期は、9世紀末～10世紀前半代であり、I E区下面と、II区下面西部で集中して検出された。I E区が立地する谷東部の緩斜面地に遺構が集中する。I E区東壁セクションで見るとIV・V層が当該期の遺物包含層であり、V・VI層上面で遺構を検出した。I E区P187で検出された鍛冶炉の痕跡や、椀形滓、鉄滓、轆の羽口など鍛冶関連遺物も出土しており、この地点は鍛冶関連施設があった可能性が高い。I E区P187はVI層上面で検出されており、出土遺物から9世紀後半～10世紀代に位置付けられる。また、P187周辺のBⅢ-3グリッド及びBⅢ-6グリッド周辺で鉄滓が多く出土しており、I E区、II区下面西部から出土した鉄滓は総重量で4.9kgを測る。鉄器はI E区、II区西部下面合計で41点出土し、この内、古代のものは28点である。他にも叩石や砥石など鉄器製作にかかる遺物が出土しており、I E区、II区西部は9世紀後半～10世紀代頃以降に鉄器製作に関わる鍛冶関連施設が造られたものと考えられる。

調査区の出土遺物からみた帰属時期は8世紀後半～9世紀前半代、9世紀後半～10世紀代、11～12世紀であり、特に8世紀後半～9世紀前半代、9世紀後半～10世紀代に遺物のピークがみられる。III区は8世紀後半～10世紀代、II区及びI E区は9世紀後半～10世紀代頃にピークがみられる。遺物の内容は、土師器と須恵器の供膳具、土師器煮炊具、須恵器貯蔵具が主体を占める。供膳具は杯と皿があり、杯は平底で底部が段を持ち、内底部が凹むタイプがみられる。須恵器は酸化焰焼成のものが多く土師器

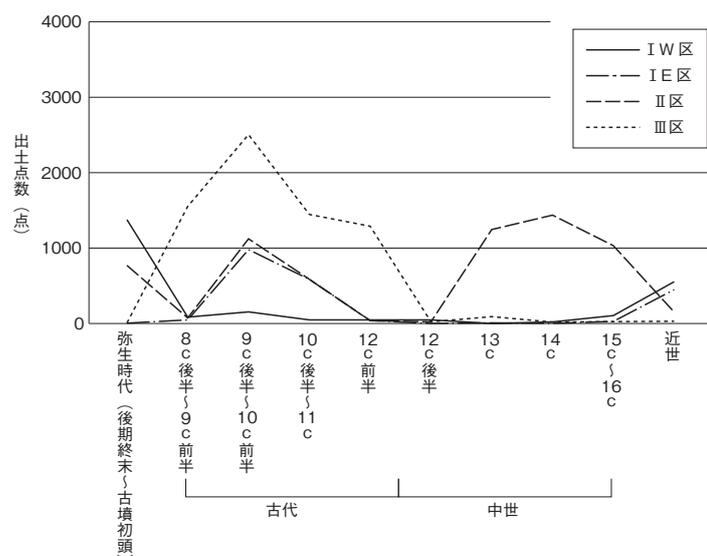


図169 各調査区の年代別出土遺物点数

四方)の範囲に入る。この中に古代の遺跡が広がる可能性が考えられる。当地域は吾川郡大野郷に属し、天平勝宝4年(752年)東大寺の封戸となっている。大野郷の貢納は国司を経て納められ、以後古代を通じて封郷であったとされている。当時、土佐で東大寺の封戸となっているのは高知市の鴨部郷で、条理の施行も関連性がうかがえる。

今回の天神溝田遺跡の調査では、鉄器製作に関わる鍛冶関連の遺構が確認された事により、当時の集落を構成する要素の一端を垣間見る事ができた。県内では古代の一般集落の実態は解明されていない点が多く、特にいの町では古代の遺跡が発掘調査で確認された初めての事例である。今後の資料の蓄積を待って集落の全体像が明らかになればと考える。

表14 天神溝田遺跡古代土器器種別表

器種	8c後半～9c後半				9c後半～10c前半					10c後半～11c					12c前半		合計 (点)		
	土師器杯・皿・蓋	土師器甕	須恵器杯・皿・蓋	須恵器壺・甕	土師器杯・皿	土師器甕	須恵器杯・皿	黒色土器A	緑釉陶器	須恵器壺・甕	土師器杯・皿	土師器甕	須恵器杯・皿	黒色土器B	灰釉陶器	須恵器壺・甕		土師器杯・皿	土師器甕
I W区	24	0	12	36	68	12	36	2	0	36	0	36	12	0	0	0	32	8	314
I S区	4	4	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	21
I E区	23	12	8	5	481	420	38	10	6	25	196	389	0	0	0	0	12	28	1,653
II区	18	14	22	15	487	418	109	23	8	73	185	391	0	3	3	0	15	17	1,801
III区	2,661	2,360	324	152	2,380	1,205	159	80	9	72	1,281	125	14	5	11	5	1,209	76	12,128
計(点)	2,730	2,390	368	211	3,416	2,055	342	115	23	206	1,662	941	26	8	14	5	1,276	129	15,917

3. 中世 — 掘立柱建物跡の変遷と埋納遺構・遺物からみた帰属時期 —

中世の遺構はII区に集中する。中でも南北朝期(13世紀後半～14世紀)にかけての遺構と遺物はII区東部で検出された。この期の遺構は、掘立柱建物跡SB2・3・5・7・11、溝SD2・4などがある。建物の軸方向は旧地形の等高線に沿ったものが多い。SD2・4の延長部はいの町道調査区で検出されており、SB11を囲む区画溝になる。また、SB11の周辺で検出されたSK1・7・9・21・23・25及びSD2・4に区画された周辺に当該期の遺構が集中している。平成20年度に調査したII-1、II-2区でも当該期の遺構と遺物が検出されており、この谷部は屋敷地であった事が明らかとなった。また、II区には室町時代(15～16世紀)の遺構も重複しており、掘立柱建物跡ではSB1・4・6・8・9・10が該当する。特徴的なものとしてはSB1・4・8のように2×2間の正方形平面を成す建物が挙げられる。これらの建物は約20mの規則性をもった間隔で配置されている。丘陵尾根の張り出しに沿った柵列がみられることから、15～16世紀代の掘立柱建物群は溝で区画された屋敷形態はとらず、II区中央部の尾根を境に西と東に分かれていたものと考えられる。

埋納遺構は、この屋敷境付近で検出された。埋納容器として使用された備前焼壺は備前V期のものので16世紀前半代に位置付けられる。壺内部には土師質土器皿20点が納められていた。土師質土器は在地で作られたものであり、法量的にみて15世紀後半～16世紀前半代のものと思われ、備前焼壺と併せてこの頃に埋納されたものと考えられる。また、土師器皿にはアワの種実が大量に付着するものがみられ、土師器皿を入れ子状にして一緒に入れていたものと考えられる。壺内部に入ってい

表15 天神溝田遺跡中世土器器種別表

器種	12c 後半				13c				14c				15~16c						合計 (点)					
	土師質土器 碗	瓦器 碗	青磁	白磁	土師質土器 杯・皿	瓦器 碗	東播系須恵器	青磁	白磁	土師質土器 杯・皿	備前焼	瓦質土器	常滑焼 甕	瀬戸美濃系	青磁	白磁	土師質土器 杯・皿	備前IV		備前V	瀬戸美濃系	青磁	白磁	青花
I W区	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	19	0	0	0	0	41	0	7	8	6	3	0	86
I S区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	35	0	3	2	0	0	0	41
I E区	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	8	2	6	1	2	0	9	39
II区	4	4	6	3	1,219	4	6	8	4	1,060	2	349	5	8	8	0	986	22	2	2	8	6	1	3,717
III区	0	18	0	0	62	18	0	3	3	0	2	10	0	2	0	0	0	13	1	1	0	3	2	138
計(点)	4	23	6	3	1,290	22	6	11	7	1,060	5	379	6	11	8	0	1,070	37	19	14	16	12	12	4,021

た古銭は合計で393枚あり、ほとんどが北宋銭である。藁状の植物を編んだ緡も入っていたことから、緡銭であったと思われる。この緡銭の一単位を97枚で換算すると、3緡分が入っていた事になる。中には文字の判読が困難な模鑄銭と思われる銭種もみられる。これらを壺内部に納めて、壺の口を紙の様なもので蓋をした後、その上に和鏡の鏡面側を上にして置き、地中に納めたものと考えられる⁽⁸⁾。和鏡は文様意匠に州浜・松樹・双雀が施された鎌倉時代のものである。久保智康氏のご教示によると、配置される州浜・松樹・双雀文はセットでよく見かけるが、二羽の雀の巣が松の樹の枝に配置される「巢籠もり」は希少であり、形状及び文様構成からみて鎌倉時代後期(13世紀後半～14世紀前半)頃の和鏡であるとの事である。埋納された時期を備前焼壺、土師質土器皿の時期とすれば、この和鏡は2世紀近く伝世していた事になる。アワ・土師質土器・古銭・和鏡の供伴する事例は少なく、盗難、略奪から逃れる為に意図的に埋めた可能性も考えられるが、出土状態より推察すれば、何らかの祭祀を行なった後、埋めたものと考えたい。このような呪術的使用に銭貨を伴う事例は、福知山城跡(京都府)で丹波焼の壺の内底部に和鏡を上向きに置き、その周囲に20本の竹筆を直立させて囲み、小刀一本を壺の内面に立てかけて底面の中心部に936枚の銭貨を納め埋蔵している事例がある。これは「胞衣銭」と呼ばれる呪術的な埋納銭である⁽⁹⁾。県内においては、類似する事例がいの町に隣接する高岡郡佐川町の加茂遺跡においてみられる。加茂遺跡で発見された壺は備前IV期(15世紀代)に比定されており、壺の内部には土師質土器皿が20点、古銭156枚(開元通寶<初鑄845年>～永樂通寶<初鑄1408年>)が納められ、蓋として土師質土器の杯を伏せた状態で出土している⁽¹⁰⁾。今回の事例と同じく、土師質土器皿が20点である。また、福知山城跡の事例も竹筆20本という、共通の数が納められている。「20」という数も呪術的な意味があるのかも知れない。また、銭貨枚数も大量銭ではない事から、「胞衣銭」もしくは、出土地点が屋敷境の柵列際であることから「地鎮め」的な使用も考えられる「奉賽銭」と呼ばれる呪術的な埋納銭として捉えられる。これらの条件より、天神溝田遺跡II区埋納遺構は呪術的な遺構といえる。

遺物は土師質土器、瓦質土器、備前焼、常滑焼、瀬戸美濃焼、青磁、白磁、青花、鉄器、石器などが出土した。帰属時期は13世紀後半～14世紀代、15～16世紀中葉(前半代)が中心であり、鎌倉時代から室町時代まで連綿と続く様相を呈している。13世紀後半～14世紀代の遺物はII区の東部に比較的多い。調理具では、東播系の須恵器鉢、在地系の瓦質土器搗鉢と鍋、備前焼搗鉢が出土している。東播系須恵器鉢は生産地編年でIII期に位置付けられ、14世紀代(生産地編年III期第2・3段階)のものである。

口縁端部の拡張が少なく、玉縁状に肥厚させただけのもの(第3段階)が多く、14世紀後半代のものが主体である。瓦質播鉢は14世紀後半に位置付けられるものであり、東播系須恵器鉢に変わり在地系の瓦質播鉢が登場する。また、当遺跡では備前Ⅲ期の播鉢も搬入品として入っている。東播系須恵器鉢から備前焼播鉢への移行、また、この移行期に出現する在地瓦質播鉢など、調理具のスムーズな変遷を追うことができる。貯蔵具は常滑焼甕と備前焼甕がみられる。常滑焼甕は生産地編年で6型式(13世紀後半～14世紀)と、9型式(15世紀前半)のものが出土している¹¹⁾。備前焼甕はⅣ期のものが主体である。貿易陶磁器は、初期貿易陶磁器として青磁では同安窯系の外面櫛描文、内面劃花文の碗などがみられ、白磁では櫛描文が施された無高台の皿が出土している。これらの貿易陶磁器は12世紀後半頃に位置付けられている¹²⁾。青磁では鎬蓮弁文碗(Ⅲ類)・無文碗(Ⅳ類)が多く、13～14世紀代にピークがみられる。また、15世紀後半代の外面に細蓮弁文が施された碗も出土している。青磁では鎬蓮弁文碗の時期、無文碗の時期の割合が高く、細蓮弁文の割合は低い。青花は皿が主体に出土しており、B群の牡丹唐草、玉取獅子の時期と、芭蕉葉文のC群の時期があり、15世紀後半～16世紀前半代がピークである。

天神溝田遺跡は仁淀川本流に接し、支流である宇治川、早稲川の下流合流地点に立地していることから、河川交通を利用した物資の荷揚げ場的な場所であったと思われる¹³⁾。搬入品の多さがそれを物語っており、この地域の流通の一端を担っていた遺跡といえる。また、遺跡の南丘陵には山城(音竹城跡)があり、集落の防御施設に加えて、その立地から河川交通や渡しを見張る機能を持った城として考えられる。今回の調査成果から両者は関連する遺跡として位置付けられ、南北朝期から室町時代にかけてこの地域の中心的な役割を果たしていた場所であったといえる。

4. 近世 —江戸時代前期から中期にかけての遺構と遺物—

近世の遺構と遺物はⅠ区に集中する。Ⅰ区の上層では掘立柱建物跡11棟、溝、土坑などが検出されている。特にⅠW区では、SB8以外は全て17～18世紀代の掘立柱建物跡である。SD1・2の南側に2×4間の掘立柱建物跡2棟が溝に沿って検出されたことから、区画溝と考えられる。SB6・7は建替えが考えられるが、区画溝の位置関係からほぼ同時期の遺構として捉えることができる。SD2・4からは17世紀前半代の唐津焼皿と天目茶碗、瀬戸織部焼の向付などが出土しており、区画されたSB6・7は17世紀前半代の建物として位置付けることができる¹⁴⁾。また、南部に5棟が切り合って集中する箇所があるが、棟方向からSB1～3とSB4・5の二時期が考えられる。SB1～3は17世紀前半代の肥前系磁器皿がピットから出土していることから、SB6・7と同時期の建物跡といえる。また、SB4・5はSB4を拡張してSB5が建てられたものと思われる。ピットからは細片しか出土しておらず詳細な時期は不明であるが、この検出面で18世紀代の遺物が出土しており、この頃の建物跡と思われる。

ⅠW区は近世の整地面が二面確認されている。それ以前は北側を中心に立地していたが、18世紀代に南山際のⅠS区側に土地が拡張され、SB4・5が建てられたものと考えられる。ⅠE区上層では、SB9～12の4棟が確認された。特にSB11・12は同じプランであり、同時期に建てられたと考えられる。区画溝と思われるSD2から18世紀代の京焼風陶器碗、また、SD4からは同時期の唐津焼の白土化粧が施された皿が出土していることからSB11・12は18世紀代の建物跡に位置付けられる。SD14・15は17世紀代の溝であり、ⅠW区のSD2と同様に区画溝として位置付けられる。



図171 中世掘立柱建物跡全体配置図

補註

- (1) 昭和48年に刊行された『伊野町史』「青銅利器を語る村」の項で岡本健児氏が提唱された弥生時代後期後半の土器型式名称である。宇治川改修工事等で発見された土器を県内出土の土器と比較検討し位置付けがなされている。
- (2) 註(1)に同じ。いの町内で出土した土器で壺・甕・高杯・小型鉢が出土している。壺は厚手で頸部にヘラによる刻みが施される。甕の特徴は無文、頸部の屈曲が強く、ハケ目が多い。「天神式土器」に先行する土器型式としての位置付けがなされている。
- (3) 高知県香美市に所在するひびのき遺跡から出土した土器群の型式名称で、岡本健児氏によりヒビノキⅠ～Ⅲ式として高知県中央部以東の弥生時代後期の標識土器に位置付けがなされている。
- (4) 弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落遺跡であり、鉄器生産に関わる遺構・遺物が確認された。ST13は鉄器生産を行っていた竪穴建物跡であり、中央部に鍛冶炉が検出された。同遺跡からは弥生土器の他に5,000点を越える鉄片類が出土した。
- (5) 竪穴建物跡・土坑などが検出された弥生時代後期終末期の集落遺跡である。
- (6) いの町道建設に伴う発掘調査で検出された土坑一括資料。『天神溝田遺跡Ⅰ』で東江曲遺跡(高知市春野町)で検出されたST1・SD3の資料と併行する土器として弥生時代後期中葉の年代に位置付けがなされている。
- (7) 『高知の研究2 古代・中世篇』「土佐の条理－その復元再考と補説－」の中で大脇保彦氏により高知市の鴨部郷から以西の条里の方向性について検討がなされている。また、『天神溝田遺跡Ⅰ』で検出された古代の掘立柱建物跡・溝の方向と当地域の条理について検討を行った。
- (8) 久保智康氏(京都国立博物館)に和鏡を実見して頂きご教示を頂いた。
- (9) 『中世の地鎮と銭貨』(第9回出土銭貨研究会資料第二分冊2002)の各都道府県事例(京都府)及び、『出土銭貨2』(出土銭貨研究会1994)の中で「福知山城検出の埋納遺構について」として事例報告されている。また、峰岸純夫氏により『中世災害・戦乱の社会史』(吉川弘文館2011)の「戦乱の中の財産管理」の節で「胞衣銭」と呼ばれる呪術的な使われ方をした埋納遺構として紹介されている。
- (10) 岡本桂典氏のご教示による。『高知県史－考古編』1996に紹介されている。銭貨には布の付着が認められたことから、麻の袋に入れて壺の中に納められたとされる。
- (11) 橋本久和他 1995『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社を参考にした。
- (12) 赤羽・中野 1994「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』資料 日本福祉大学知多半島総合研究所編を参考にした。
- (13) 『城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡』の中で、当地域の仁淀川周辺に立地する城跡とその性格について述べている。
- (14) 大橋康二他 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会編を参考にした。

引用・参考文献

- 高知県土佐山田町教育委員会 1977『高知県ひびのき遺跡』
佐川町教育委員会 1995『岩井口遺跡 二ノ部遺跡・城跡』
佐川町教育委員会 1995『岩井口遺跡Ⅱ』
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002『西分増井遺跡』
高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2010『天神溝田遺跡Ⅰ』
高知県教育委員会・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2013『城ヶ谷山遺跡・鎌田遺跡・貢山城跡』

遺構計測表

遺構計測表1 I区SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	面積(㎡)	柱間寸法(m)	柱径(m)	備考
SB1	N - 18° - W	桁行4間	7.41	41.19	1.55 ~ 4.05	0.10 ~ 0.15	近世 (17c前)
		梁行2間	5.56		2.46 ~ 5.56		
SB2	N - 8° - W	桁行5間	9.52	37.88	1.43 ~ 2.26	0.13 ~ 0.23	近世 (17c前)
		梁行1間	3.98		3.85 ~ 3.98		
SB3	N - 8° - W	桁行3間	5.74	25.77	1.35 ~ 2.44	0.15 ~ 0.20	近世 (17c前)
		梁行1間	4.49		4.41 ~ 4.49		
SB4	N - 6° - E	桁行3間	6.02	22.45	1.49 ~ 2.35	0.09 ~ 0.15	近世 (18c)
		梁行1間	3.73		3.51 ~ 3.73		
SB5	N - 7° - W	桁行4間	7.70	32.72	1.72 ~ 2.21	0.14 ~ 0.21	近世 (18c)
		梁行1間	4.25		4.06 ~ 4.25		
SB6	N - 89° - E	桁行4間	7.00	19.60	1.52 ~ 1.86	0.10 ~ 0.19	近世 (17c前)
		梁行1間	2.80		2.70 ~ 2.80		
SB7	N - 89° - E	桁行4間	7.20	18.86	1.57 ~ 1.93	0.09 ~ 0.10	近世 (17c前)
		梁行1間	2.62		2.59 ~ 2.62		
SB8	N - 78° - W	桁行1間	3.08	8.22	3.08	-	中世 (14c後)
		梁行1間	2.67		2.67		
SB9	N - 72° - E	桁行2間	4.49	9.24	1.71 ~ 2.61	-	近世 (17c後)
		梁行1間	2.06		2.02 ~ 2.06		
SB10	N - 59° - E	桁行2間	4.52	11.39	1.84 ~ 2.61	0.09 ~ 0.18	近世 (17c後)
		梁行1間	2.52		2.50 ~ 2.52		
SB11	N - 89° - W	桁行2間	5.39	29.42	0.98 ~ 4.34	0.17	近世 (18c)
		梁行2間	5.46		2.53 ~ 2.86		
SB12	N - 88° - W	桁行3間	6.06	35.87	1.55 ~ 3.97	0.10 ~ 0.26	近世 (18c)
		梁行3間	5.92		1.82 ~ 3.95		
SB13	N - 30° - W	桁行3間	5.34	19.86	1.60 ~ 1.81	-	中世 (14c後)
		梁行2間	3.72		1.68 ~ 1.99		

遺構計測表2 I区SB1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.51	0.45	0.66	円形	—	
P2	0.30	0.28	0.46	円形	—	
P3	0.32	2.74	0.19	円形	—	
P4	0.36	0.30	0.35	楕円形	土師質土器片2	
P5	0.34	0.32	0.52	円形	—	
P6	0.39	0.34	0.21	円形	—	
P7	(0.37)	0.35	0.47	円形	染付皿1	
P8	0.33	0.28	0.39	円形	—	
P9	0.50	0.49	0.36	円形	—	

遺構計測表3 I区SB2ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.59	0.53	0.56	楕円形	土師質土器片1・唐津焼皿1・鉄銭1	
P2	0.56	0.51	0.66	楕円形	唐津焼皿1	
P3	0.48	(0.37)	0.67	楕円形	土師質土器小皿1・土師質土器片2・唐津焼鉢1・唐津焼片1・肥前系陶器1	
P4	0.74	0.42	0.28	楕円形	近世陶器碗1	
P5	0.34	0.28	0.40	楕円形	土師質土器杯1	
P6	0.50	0.42	0.67	楕円形	—	
P7	0.45	0.44	0.66	円形	—	
P8	0.60	0.57	0.74	楕円形	土師質土器片1・砥石1	
P9	0.43	0.35	0.63	楕円形	—	
P10	0.53	0.45	0.65	楕円形	—	焼土
P11	0.36	0.30	0.38	楕円形	唐津焼片1	

遺構計測表4 I区SB3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.59	0.53	0.56	楕円形	土師質土器片1・唐津焼皿1・鉄銭1	
P2	0.56	0.51	0.66	楕円形	唐津焼皿1	
P3	0.48	(0.37)	0.67	楕円形	土師質土器小皿1・土師質土器片2・唐津焼鉢1・唐津焼片1・肥前系陶器1	
P4	0.61	(0.54)	0.55	隅丸方形	弥生土器片2・唐津焼皿1	
P5	0.64	0.49	0.56	楕円形	土師質土器片1	
P6	0.59	0.50	0.46	楕円形	—	
P7	0.54	0.50	0.40	円形	—	
P8	0.57	0.52	0.69	楕円形	土師質土器杯1	

遺構計測表5 I区SB4ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.30	0.27	0.47	円形	—	
P2	0.41	0.39	0.60	楕円形	鉄釘1	
P3	0.43	0.40	0.74	円形	—	
P4	0.37	0.32	0.70	円形	鉄滓1	炭化物
P5	0.48	0.45	0.69	円形	—	
P6	0.50	0.42	0.56	円形	—	
P7	0.40	0.36	0.37	円形	—	
P8	0.35	0.33	0.47	円形	—	

遺構計測表6 I区SB5ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.59	0.53	0.62	楕円形	土師質土器小皿1・土師質土器片3	
P2	0.70	(0.47)	0.59	楕円形	土師質土器片1	
P3	0.84	0.53	0.81	楕円形	土師質土器片3・近世陶器片1・肥前系白磁片2	
P4	0.54	0.50	0.60	円形	—	
P5	1.12	0.68	0.60	楕円形	土師質土器片2(内灯明皿1)・近世陶器片1	
P6	0.54	0.53	0.62	円形	—	
P7	0.49	0.46	0.21	円形	—	
P8	0.48	0.47	0.57	円形	土師器片1	
P9	0.72	0.60	0.58	楕円形	土師質土器片3・唐津焼皿1	
P10	1.74	0.58	0.64	楕円形	唐津焼片1・京焼風陶器碗1・瓦片1・近世陶器1	

遺構計測表7 I区SB6ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.23	0.22	0.11	円形	—	
P2	0.32	0.22	0.24	楕円形	—	
P3	0.6	0.48	0.40	楕円形	—	
P4	(0.28)	(0.20)	0.32	楕円形	青磁片1	
P5	0.58	0.48	0.47	楕円形	—	
P6	0.50	0.44	0.38	楕円形	土師質土器片1	
P7	0.40	0.32	0.27	楕円形	—	
P8	0.38	0.34	0.23	円形	—	
P9	0.42	0.32	0.18	楕円形	—	
P10	0.48	0.44	0.27	円形	土師質土器片1	

遺構計測表8 I区SB7ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.23	0.22	0.11	円形	—	
P11	0.40	0.30	0.24	楕円形	近世天目茶碗1	
P12	0.6	0.48	0.32	楕円形	—	
P13	(0.22)	0.14	0.46	楕円形	煙管1	
P14	0.58	0.48	0.47	楕円形	—	
P15	0.33	(0.16)	0.09	円形	—	
P16	0.26	(0.17)	0.07	円形	—	

遺構計測表9 I区SB7ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P17	0.36	0.28	0.27	楕円形	—	
P18	0.42	0.34	0.25	楕円形	—	
P19	0.48	0.44	0.27	円形	土師質土器片1	

遺構計測表10 I区SB8ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.34	0.32	0.16	円形	土師質土器片5(内灯明皿2)	14～15c
P2	0.37	0.35	0.12	円形	—	
P3	0.43	0.42	0.10	円形	—	
P4	0.38	0.34	0.30	円形	—	

遺構計測表11 I区SB9ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.39	0.34	0.39	円形	唐津焼片2・土師質土器焙烙鍋1	
P2	0.39	0.30	0.46	楕円形	—	
P3	0.27	0.18	0.27	楕円形	—	
P4	0.33	0.29	0.70	円形	—	
P5	0.44	0.33	0.13	楕円形	—	
P6	0.41	0.31	0.53	楕円形	—	

遺構計測表12 I区SB10ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.70	0.50	0.40	楕円形	—	
P2	0.32	0.26	0.19	楕円形	近代陶磁器片1	19c末
P3	0.58	0.44	0.24	楕円形	—	
P4	0.53	0.41	0.18	楕円形	近世陶器片1	
P5	0.59	0.43	0.42	楕円形	—	
P6	0.44	0.36	0.30	楕円形	—	

遺構計測表13 I区SB11ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.37	0.30	0.07	楕円形	—	
P2	0.30	0.29	0.24	円形	—	
P3	0.30	0.27	0.22	円形	—	
P4	0.36	0.31	0.12	楕円形	—	

遺構計測表14 I区SB11ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P5	0.35	0.34	0.24	円形	—	
P6	0.63	0.52	0.65	楕円形	—	
P7	0.63	0.62	0.26	円形	須恵器甕1・鉄滓2.6g	
P8	0.43	0.42	0.40	円形	—	粘土塊
P9	0.33	0.32	0.29	円形	唐津焼片1	
P10	0.36	0.32	0.08	円形	—	

遺構計測表15 I区SB12ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.30	0.30	0.25	円形	—	
P2	0.36	0.32	0.15	円形	—	
P3	0.42	0.42	0.47	方形	鉄釘1	
P4	0.64	0.48	0.40	楕円形	—	
P5	0.54	0.51	0.36	円形	—	根石有り
P6	0.58	0.55	0.36	円形	—	焼土・炭化物
P7	0.29	0.25	0.31	円形	—	
P8	0.34	0.31	0.43	円形	—	
P9	0.47	0.44	0.37	円形	鉄釘1	
P10	0.32	0.25	0.44	円形	—	
P11	0.30	0.25	0.30	円形	—	
P12	0.38	0.32	0.44	円形	—	
P13	0.24	(0.10)	0.10	円形	—	
P14	0.46	0.35	0.23	楕円形	—	根石有り

遺構計測表16 I区SB13ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.22	0.22	0.14	円形	—	
P2	0.29	0.22	0.18	楕円形	—	
P3	0.26	0.25	0.20	円形	—	
P4	0.29	0.27	0.19	円形	土師質土器片1	
P5	0.22	0.23	0.08	円形	—	
P6	0.22	0.23	0.10	円形	—	
P7	0.26	0.21	0.16	楕円形	土師質土器片2	

遺構計測表17 I区SB13ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P8	0.18	0.17	0.10	楕円形	土師質土器片5	
P9	0.19	0.18	0.08	円形	—	
P10	0.27	0.22	0.06	楕円形	—	
P11	0.30	0.27	0.09	円形	土師質土器片1	

遺構計測表18 IW区上面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N-2°-W	0.92	0.80	0.16	円形	内野山銅緑釉皿1	
SK2	N-82°-W	1.12	0.90	0.17	隅丸方形	土師質土器片1・青磁皿1・肥前系磁器片1	
SK3	N-85°-W	2.20	0.74 0.92	0.22	不整楕円形	須恵器片3・土師質土器片6・瓦質土器片2・肥前系磁器片1	17c中～後
SK4	N-9°-E	1.56	0.78 1.02	0.24	不整楕円形	近世陶磁器片1	17c中～後
SK5	N-3°-E	1.48	0.74 0.76	0.12	不整楕円形	—	17c中～後
SK6	N-79°-W	(1.50)	0.66 0.98	0.15	不整楕円形	唐津焼片2	17c中～後
SK7	N-2°-W	1.30	0.74	0.14	隅丸方形	土師質土器片4・瓦質土器鍋1・染付片1	15c
SK8	N-9°-E	1.04	0.88	0.34	楕円形	土師質土器片7・瓦質土器片1	15c
SK9	N-3°-W	0.86	0.66	0.14	楕円形	紐銭(1束)・土師質土器片2	
SK10	N-1°-W	1.50	1.50	0.28	円形	中世陶器片1・瀬戸天目茶碗1・肥前系青磁碗1・近世陶磁器片1・陶磁器片1	18c後
SK11	N-30°-W	1.74	1.60	0.24	楕円形	—	
SK12	N-48°-W	1.09	0.98	0.10	不整形	須恵器片1・土師質土器片2・瓦質土器片1・青磁連弁文片1・備前焼播鉢1・天目茶碗1	
SK13	N-60°-E	(0.66)	0.77	0.04	隅丸方形	—	焼土・炭化物・骨
SK14	N-6°-E	0.94	(0.78)	0.26	円形	—	
SK16	N-39°-W	0.78	0.78	0.16	円形	堺播鉢1・陶磁器片3	17c後～18c前

遺構計測表19 IS区上面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N-75°-E	2.51	1.56	0.63	隅丸方形	陶器片1, 砥石1	
SK2	N-12°-W	(1.16)	0.95	0.63	楕円形	土師質土器片2, 近世磁器片1, 鉄釘1	
SK3	N-1°-E	0.79	0.66	0.12	楕円形	近代磁器片1, 近代瓦片1	
SK4	N-12°-W	0.87	0.61	0.20	楕円形	—	
SK5	N-9°-E	0.87	0.84	0.16	隅丸方形	磁器碗1・肥前系白磁片1	
SK6	N-5°-W	(1.05)	0.63	0.26	隅丸方形	唐津焼片1	
SK7	N-62°-W	0.81	0.63	0.11	隅丸方形	—	
SK8	N-68°-E	1.71	1.70	0.20	円形	肥前系青磁碗1	

遺構計測表20 I S区上面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK9	N - 37° - W	1.01	0.84	0.25	楕円形	土師器甕2	

遺構計測表21 I W区上面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 86° - E	(15.14)	0.22 ~ 0.95	0.16	青磁片1・瀬戸近世陶磁器片1・鉄滓1	17c中葉～後葉
SD2	N - 84° - E	(20.98)	0.22 ~ 0.95	0.30	弥生土器片1・土師質土器片56・備前焼甕3・備前焼播鉢1・青磁皿1・肥前系白磁小杯1・瀬戸織部焼角皿1・瀬戸焼片3・唐津焼丸皿1・三叉トチン2・内野山銅緑釉皿1・近世天目茶碗3・近世染付片1・近世陶磁器片8・瓦片2・鉄釘2・鉄滓1・砥石1	17c中葉～後葉
SD3	N - 9° - E	(11.12)	0.82 ~ 1.06	0.29	土師質土器片10・備前焼片1・内野山銅緑釉皿1・近世陶磁器片1・唐津焼片1・陶磁器片1・瓦1・古銭1	17c中葉～後葉
SD4	N - 86° - E	(4.42)	0.28	0.07	—	18c代
SD5	N - 5° - E	(3.51)	0.41	0.07	—	
SD6	N - 55° - W N - 19° - W	3.44 5.32	1.43 0.62	0.09 0.06	土師質土器片3・須恵器片1・白磁皿片1	中世
SD7	N - 81° - E	(6.56)	0.48	0.04	土師質土器片1	

遺構計測表22 I S区上面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 12° - E	(2.30)	0.41	0.11	—	
SD2	N - 82° - W	4.00	0.62	0.22	—	
SD3	N - 19° - W	(1.36)	0.69	0.26	—	

遺構計測表23 I W区上面SX

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SX1	N - 18° - W	2.82	(1.52)	0.16	円形	弥生土器片1・土師質土器片1・鉄滓1	
SX2	N - 12° - W	2.34	(1.10)	0.14	隅丸方形	弥生土器片1・土師質土器片11・瓦質土器片1・備前焼播鉢1・染付片1・鉄釘1078.0g	

遺構計測表24 I W区中面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK15	N - 59° - W	1.42	0.74	0.06	隅丸方形	土師器片3・土師質土器片2・鉄滓1078.0g	炭化物集中
SK17	N - 78° - W	0.88	0.72	0.21	不整形	—	

遺構計測表25 I W区中面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD8	N - 3° - W	(1.58) (10.52) (8.42)	0.34 0.42 0.38	0.02 0.02 0.05	土師器片4・須恵器片1・瓦質鍋2	14c後～15c

遺構計測表26 I W区中面SX

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SX3	N - 4° - E	0.96	0.16	0.04	畝状	—	

遺構計測表 27 I E 区上面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 46° - E	0.98	0.73	0.22	不整楕円形	—	
SK2	N - 4° - W	1.34	1.29	0.22	隅丸方形	弥生土器片 1	
SK3	N - 36° - E	0.34	0.54	0.10	隅丸方形	—	
SK4	N - 10° - W	0.75	0.48	0.16	楕円形	—	
SK5	N - 73° - E	0.88	0.62	0.08	不整楕円形	—	
SK6	N - 42° - E	0.61	0.52	0.30	円形	—	
SK7	N - 64° - W	1.34	0.78	0.15	楕円形	近世陶器片 1・瓦片 1	
SK8	N - 14° - W	1.34	0.78	0.13	隅丸方形	内野山銅緑釉皿 1・陶器片 2	
SK9	N - 79° - E	2.03	0.84	0.11	楕円形	—	
SK10	N - 64° - E	0.89	0.67	0.26	楕円形	—	
SK11	N - 64° - E	2.73	0.99	0.07	楕円形	—	
SK12	N - 70° - E	2.19	0.84	0.23	楕円形	—	
SK13	N - 21° - E	0.91	0.60	0.09	楕円形	—	骨片含む

遺構計測表 28 I E 区上面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 13° - W	4.42	0.41	0.24	弥生土器甕 1	弥生後期
SD2	N - 2° - E	14.20	0.73~ 1.16	0.23	土師器皿 2・土師質土器片 2・唐津焼皿 2・肥前系陶器皿 2	18c 前半
SD3	N - 13° - W	2.46	0.39	0.06	引き手金具 1	
SD4	N - 25° - W	(2.62)	0.47	0.13	土師質土器焙烙鍋 1・唐津焼大皿 1	
SD5	N - 9° - W	(0.74)	0.30	0.11	近世白磁筒型香炉 1	
SD6	N - 12° - W	(0.45)	0.40	0.07	—	
SD7	N - 62° - E	4.09	0.46	0.10	土師質土器片 1	
SD8	N - 7° - W	(3.70)	0.75	0.12	—	
SD9	N - 64° - E	15.09	0.56~ 0.70	0.12~ 0.25	瀬戸天目茶碗 1・土師質土器片 1	
SD10	N - 1° - E	(5.93)	0.57	0.16	—	
SD11	N - 7° - W	(2.39)	0.53	0.20	—	
SD12	N - 7° - E	1.87	0.34	0.09	—	
SD13	N - 71° - E	(2.34)	0.44	0.11	—	
SD14	N - 79° - E	14.57	0.50~ 1.17	0.22	土師質土器片 4・染付碗 1・青花皿 2・備前焼搨鉢 2・備前焼甕 2・古瀬戸灰釉片 2・陶器皿 1・唐津焼大皿 2・唐津焼灰釉蓋 1・近世陶器片 3・陶器片 1	
SD15	N - 81° - E	(15.93)	1.34~ 1.84	0.34	土師質土器片 4・唐津焼皿 4・瀬戸天目茶碗 4・近世陶器片 7・陶器片 7	17c 後半~18c

遺構計測表 29 I W区下面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK18	N - 42° - E	0.74	0.70	0.12	不整形	弥生土器片 11	
SK19	N - 8° - W	1.40	1.00	0.17	隅丸方形	弥生土器片 14	
SK20	N - 76° - E	1.18	1.14	0.07	円形	弥生土器片 3	
SK21	N - 52° - W	2.48	0.50	0.24	溝状	弥生土器片 116	

遺構計測表 30 I W区下面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD9	N - 9° - W	1.92	0.26	0.20	弥生土器片 4	
SD10	N - 83° - W	(1.50)	0.28	0.16	弥生土器片 1	

遺構計測表 31 I E区下面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK14	N - 84° - W	1.23	0.53	0.03	溝状	土師器椀 1・土師器杯 9・土師器煮炊具 11・土師器片 21・黒色土器片 1	
SK17	N - 63° - E	1.26	1.13	0.07	隅丸方形	土師質土器杯 1・土師器煮炊具 1・土師器片 8・黒色土器片 1	
SK18	N - 27° - E	1.57	(0.76)	0.40	楕円形	土師器片 14	
SK19	N - 28° - E	(0.94)	(0.65)	0.05	楕円形	—	
SK20	N - 29° - E	(1.54)	0.47	0.07	溝状	土師器煮炊具 1・土師器杯 2・土師器片 140・黒色土器片 1	
SK21	N - 30° - E	0.90	0.56	0.07	楕円形	鈍 1	
SK22	N - 31° - E	1.35	0.29	0.04	溝状	土師器杯 1・土師器片 29	

遺構計測表 32 II区SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	面積(m ²)	柱間寸法(m)	柱径(m)	備考
SB1	N - 73° - W	桁行 2間	3.69	13.46	1.68 ~ 2.01	0.12 ~ 0.15	中世
		梁行 2間	3.65		1.75 ~ 1.88		
SB2	N - 22° - E	桁行 4間	5.29	8.46	0.98 ~ 1.62	0.15 ~ 0.19	中世
		梁行 1間	1.60		1.46 ~ 1.60		
SB3	N - 55° - E	桁行 3間	5.88	15.93	1.49 ~ 2.48	0.16 ~ 0.20	中世
		梁行 2間	2.71		0.97 ~ 1.70		
SB4	N - 72° - W	桁行 2間	3.62	(7.27)	1.74 ~ 1.88	0.10 ~ 0.15	中世
		梁行 (1間)	(2.01)		1.93 ~ 2.01		
SB5	N - 48° - W	桁行 3間	4.91	7.41	1.11 ~ 2.01	0.08 ~ 0.16	中世
		梁行 2間	2.50		1.10 ~ 2.50		
SB6	N - 73° - E	桁行 3間	5.21	19.32	1.55 ~ 1.87	0.08 ~ 0.13	中世
		梁行 2間	3.71		1.83 ~ 1.88		
SB7	N - 53° - E	桁行 2間	4.31	12.54	1.76 ~ 2.51	0.13 ~ 0.16	中世
		梁行 1間	2.91		2.90 ~ 2.91		
SB8	N - 16° - E	桁行 2間	3.74	13.16	1.51 ~ 2.07	0.11 ~ 0.14	中世
		梁行 2間	3.52		1.45 ~ 2.07		
SB9	N - 17° - W	桁行 2間	4.33	12.38	1.40 ~ 2.93	0.17 ~ 0.19	中世
		梁行 1間	2.86		2.54 ~ 2.86		

遺構計測表33 II区SB

遺構名	棟方位	平面規模	総長(m)	面積(m ²)	柱間寸法(m)	柱径(m)	備考
SB10	N-74°-E	桁行4間	6.92	19.58	1.42～2.02	0.09～0.10	中世
		梁行2間	2.83		1.32～1.51		
SB11	N-61°-W	桁行4間	6.99	33.90	0.96～2.15	0.06～0.17	中世
		梁行3間	4.85		1.43～1.69		

遺構計測表34 II区SB1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.35	0.30	0.25	円形	—	
P2	0.33	0.28	0.27	円形	—	
P3	0.34	0.30	0.26	円形	土師質土器片2	
P4	0.36	0.29	0.44	楕円形	—	
P5	0.31	0.35	0.28	円形	—	
P6	0.31	0.29	0.41	円形	—	
P7	0.28	0.27	0.23	円形	—	
P8	0.36	0.30	0.18	円形	—	
P9	0.26	0.23	0.09	円形	—	

遺構計測表35 II区SB2ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.26	0.23	0.13	円形	—	
P2	0.28	0.25	0.14	円形	—	
P3	0.30	0.28	0.13	円形	—	
P4	0.28	0.26	0.14	円形	—	
P5	0.28	0.26	0.40	円形	土師器片4	
P6	0.40	0.32	0.24	楕円形	—	
P7	0.29	0.27	0.13	円形	土師質土器片1	
P8	0.29	0.28	0.25	円形	土師質土器片1	14c～15c
P9	0.28	0.29	0.14	円形	—	

遺構計測表36 II区SB3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	(0.25)	(0.24)	0.19	円形	—	
P2	0.29	0.25	0.15	円形	—	
P3	0.38	0.32	0.11	円形	—	
P4	0.37	0.34	0.20	円形	—	
P5	0.35	0.32	0.13	円形	—	

遺構計測表37 II区SB3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P6	0.38	0.37	0.08	円形	—	
P7	0.40	0.35	0.21	円形	—	
P8	0.25	0.25	0.21	円形	土師質土器片3	
P9	0.32	0.31	0.36	円形	—	
P10	0.60	0.50	0.37	楕円形	土師質土器片1	14c～15c

遺構計測表38 II区SB4ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.25	0.25	0.25	円形	—	
P2	0.21	0.20	0.10	円形	—	
P3	0.20	0.19	0.14	円形	—	
P4	0.15	0.15	0.14	円形	—	
P5	0.28	0.26	0.31	円形	—	

遺構計測表39 II区SB5ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.32	0.30	0.30	円形	—	
P2	0.23	0.21	0.10	円形	—	
P3	0.31	0.25	0.28	楕円形	弥生土器片1・鉄滓95.0g	
P4	0.39	0.35	0.15	円形	土師器甕2	
P5	0.37	0.35	0.17	円形	土師器片1	
P6	0.23	0.21	0.17	円形	—	
P7	0.27	0.26	0.17	円形	土師質土器片1	
P8	0.39	0.38	0.24	円形	—	

遺構計測表40 II区SB6ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.29	0.24	0.13	円形	—	
P2	0.26	0.23	0.17	円形	—	
P3	0.29	0.27	0.17	円形	—	
P4	0.40	0.33	0.31	楕円形	土師質土器片4	14c～15c
P5	0.25	0.24	0.26	円形	土師質土器片1	14c～15c
P6	0.32	0.23	0.22	楕円形	土師質土器片2	
P7	0.27	0.27	0.12	円形	—	

遺構計測表41 II区SB6ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P8	0.61	0.34	0.21	楕円形	—	
P9	0.29	0.25	0.11	円形	—	
P10	(0.37)	0.22	0.12	楕円形	—	

遺構計測表42 II区SB7ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.57	0.40	0.27	楕円形	—	
P2	0.41	0.39	0.29	円形	土師質土器片5	
P3	(0.24)	0.30	0.13	円形	—	
P4	0.30	0.28	0.10	円形	—	
P5	0.39	0.36	0.25	円形	土師質土器片4	
P6	0.30	0.24	0.12	円形	—	

遺構計測表43 II区SB8ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.40	0.30	0.17	円形	—	
P2	0.38	0.32	0.26	楕円形	—	
P3	0.35	0.30	0.09	円形	—	
P4	0.31	(0.26)	0.34	円形	—	
P5	0.31	0.27	0.29	円形	不明鉄製品1	
P6	0.39	0.38	0.11	円形	—	
P7	0.24	0.23	0.14	円形	—	
P8	0.30	0.29	0.23	円形	—	

遺構計測表44 II区SB9ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.50	0.46	0.26	円形	土師質土器片1	
P2	0.35	0.32	0.29	円形	—	
P3	0.65	0.60	0.31	円形	鉄鏝1	
P4	0.51	0.49	0.18	円形	土師器片1・土師質土器片17	14c～15c
P5	0.41	0.36	0.16	円形	—	
P6	0.30	0.24	0.16	楕円形	鉄滓36.5g	

遺構計測表45 II区SB10ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.38	0.34	0.11	円形	—	
P2	0.27	0.26	0.17	円形	—	
P3	0.42	0.27	0.22	楕円形	土師質土器片4	
P4	0.27	0.25	0.11	円形	—	
P5	0.16	0.15	0.12	円形	—	
P6	0.24	0.20	0.06	円形	—	15c
P7	0.19	0.19	0.06	円形	—	
P8	(0.17)	0.24	0.23	円形	—	
P9	0.27	0.22	0.08	楕円形	—	
P10	0.25	0.23	0.08	円形	—	
P11	0.30	0.27	0.11	円形	—	
P12	0.21	0.19	0.16	楕円形	—	
P13	0.30	0.26	0.06	円形	—	
P14	0.34	0.30	0.24	円形	土師質土器片5	

遺構計測表46 II区SB11ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.32	0.29	0.14	円形	—	
P2	0.40	0.36	0.09	円形	—	粘土塊
P3	0.22	0.18	0.13	円形	—	
P4	0.32	0.28	0.19	円形	東播系須恵器片1	
P5	0.29	0.18	0.35	円形	—	
P6	0.39	(0.21)	0.47	円形	土師質土器片1	15c
P7	0.40	0.31	0.48	楕円形	—	
P8	0.22	0.19	0.11	円形	—	
P9	0.21	0.19	0.19	円形	—	
P10	0.30	0.29	0.40	円形	—	
P11	0.34	0.30	0.11	円形	土師質土器片3	
P12	0.33	(0.21)	0.32	楕円形	瓦質土器片1	
P13	0.34	(0.20)	0.42	円形	—	
P14	0.55	0.53	0.40	円形	土師質土器片2	
P15	0.52	0.46	0.24	楕円形	土師質土器片2・鉄滓9.5g	

遺構計測表 47 II区SB11ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P16	0.36	0.34	0.29	円形	土師質土器片2	
P17	0.50	0.47	0.44	円形	土師質土器片2	

遺構計測表 48 II区SA

遺構名	主軸方向	柱穴数	総長(m)	柱間寸法(m)	柱径(m)
SA1	N - 23° - 56° - E	12	12.97	0.63 ~ 1.65	0.09 ~ 0.14
SA2	N - 59° - W	7	12.91	1.09 ~ 2.77	0.11 ~ 0.14
SA3	N - 59° - W	6	11.95	1.19 ~ 2.80	0.10 ~ 0.15

遺構計測表 49 II区SA1ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.24	0.23	0.13	円形	—	
P2	0.23	0.19	0.13	円形	—	
P3	0.21	0.17	0.18	円形	—	
P4	0.23	0.20	0.12	円形	—	
P5	0.25	0.20	0.11	円形	—	
P6	0.28	0.25	0.13	円形	—	
P7	0.36	0.28	0.25	円形	—	
P8	0.32	0.29	0.25	円形	—	
P9	0.20	0.19	0.19	円形	—	
P10	0.29	0.25	0.19	円形	—	
P11	0.31	0.29	0.26	円形	—	
P12	0.24	0.23	0.23	円形	—	

遺構計測表 50 II区SA2・3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P1	0.41	0.37	0.37	円形	土師器片1	
P2	0.34	0.31	0.13	円形	—	
P3	0.34	0.31	0.08	円形	—	
P4	0.38	0.28	0.18	楕円形	土師質土器片1	
P5	0.30	0.27	0.30	円形	—	
P6	0.42	0.40	0.39	円形	—	
P7	0.25	0.24	0.36	円形	—	
P8	0.31	0.26	0.11	円形	—	

遺構計測表51 II区SA2・3ピット

遺構番号	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ			
P9	0.26	0.24	0.16	円形	—	
P10	0.25	0.24	0.12	円形	—	
P11	0.42	0.33	0.09	楕円形	—	
P12	0.54	0.51	0.61	円形	—	
P13	0.57	0.50	0.38	円形	—	

遺構計測表52 II区上面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 32° - W	1.10	0.86	0.27	楕円形	土師質土器片32・青磁片1	
SK2	N - 3° - E	0.89	(0.72)	0.14	楕円形	土師質土器片18・塚搦鉢1・鉄滓65.0g	
SK3	—	—	—	—	—	土師質土器片15・陶器片1	調査区北壁にかかる
SK4	N - 31° - W	1.00	0.72	0.13	楕円形	青磁片1	
SK5	N - 16° - W	(1.22)	1.16	0.12~ 0.34	楕円形	土師質土器片21	
SK6	N - 72° - E	0.86	0.85	0.23	円形	土師質土器片16	
SK7	N - 59° - W	1.14	0.95	0.18	楕円形	土師質土器片5・瓦質土器片1・青磁片1	
SK9	N - 48° - E	1.02	0.90	0.20	隅丸方形	土師質土器片2・瓦質土器片1	
SK10	N - 21° - E	1.36	0.65	0.12	不整形	土師質土器片1・瓦質土器片1	
SK11	N - 56° - E	1.08	(0.86)	0.33	楕円形	—	
SK12	N - 50° - W	0.72	0.54	0.22	楕円形	土師質土器片1・須恵器片1	
SK13	N - 46° - E	1.05	0.65	0.23	楕円形	土師質土器片2	焼土・炭化物・骨
SK14	N - 53° - W	0.80	0.66	0.18	不整形	土師質土器片3	
SK15	N - 23° - W	0.75	0.72	0.20	円形	—	
SK16	N - 76° - E	0.96	0.72	0.28	不整形	土師質土器片4	
SK17	N - 60° - E	1.18	1.08	0.14	円形	土師質土器片2	
SK18	N - 6° - E	0.98	0.78	0.24	楕円形	土師質土器片15・砥石1	
SK19	N - 25° - W	1.22	0.82	0.27	楕円形	土師質土器片5・古銭1	
SK20	N - 71° - E	1.10	0.75	0.18	楕円形	—	
SK21	N - 26° - W	1.33	1.02	0.13	隅丸方形	土師質土器片18・瓦質土器片2	
SK22	N - 85° - E	1.17	0.66	0.13	楕円形	土師質土器片1	
SK23	N - 34° - W	0.92	0.88	0.55	円形	土師質土器片1・瓦質土器片1	
SK24	N - 73° - E	(1.24)	(0.60)	0.12	隅丸方形	土師質土器片3	
SK25	N - 14° - W	1.25	(0.78)	0.23	楕円形	須恵器片1・土師質土器片6・青磁片1・叩石1	

遺構計測表53 II区上面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK26	N - 39° - W	0.84	0.81	0.15	円形	土師質土器片3	
SK27	N - 22° - W	1.09	0.74	0.16	楕円形	—	
SK28	N - 68° - W	0.88	0.81	0.21	円形	須恵器片2・土師質土器片7	
SK29	N - 7° - W	1.16	0.75	0.15	楕円形	—	
SK30	N - 26° - W	0.78	0.74	0.17	円形	土師質土器片3・鉄滓43.5g	
SK31	N - 25° - W	1.38	0.98	0.28	楕円形	—	
SK32	N - 68° - E	1.00	(0.46)	0.12	円形	土師質土器片2	
SK33	N - 5° - E	0.94	0.79	0.05	楕円形	—	
SK34	N - 83° - E	0.84	0.70	0.08	楕円形	土師質土器片3	
SK35	N - 4° - W	(0.74)	0.66	0.13	方形	土師質土器片3	
SK36	N - 68° - E	(1.04)	0.90	0.16	楕円形	弥生土器片18・須恵器片1・土師器片18・土師質土器片17・黒色土器片1	
SK37	N - 27° - E	1.08	0.70	0.16	楕円形	土師質土器片2	
SK38	N - 40° - E	0.80	(0.26)	0.14	楕円形	土師質土器片4	
SK39	N - 19° - E	0.72	0.70	0.12	円形	土師質土器片18	
SK40	N - 83° - W	1.21	0.82	0.19	楕円形	須恵器片1・土師質土器片6	
SK41	N - 60° - E	0.82	0.82	0.12	円形	弥生土器片15・須恵器片1・土師質土器片2	
SK42	N - 66° - E	0.86	0.72	0.30	楕円形	弥生土器片112	
SK43	N - 71° - E	1.20	0.83	0.28	楕円形	弥生土器片26・須恵器片1・土師器片8・土師質土器片73・陶器片1	
SK44	N - 52° - E	1.44	1.20	0.28	楕円形	弥生土器片6・土師質土器片54・鉄滓14.0g	
SK45	N - 85° - E	1.08	0.66	0.24	楕円形	—	
SK46	N - 23° - W	1.00	0.77	0.07	楕円形	—	
SK47	N - 44° - W	0.84	(0.76)	0.19	楕円形	弥生土器片13	
SK48	N - 87° - E	0.49	(0.46)	0.19	楕円形	弥生土器片17・土師質土器片1	
SK52	N - 83° - E	(1.00)	(0.69)	0.06	楕円形	須恵器壺1・土師質土器片1・瓦質土器片3・	
SK53	—	1.91	(1.19)	0.13	不整形	土師質土器片7	
SK54	N - 68° - E	1.30	1.21	0.05	円形	土師器片2・土師質土器片4	
SK56	N - 83° - E	(1.88)	(0.42)	0.15	—	土師質土器片9・陶器片1	
SK57	N - 57° - E	(0.93)	0.90	0.12	隅丸方形	土師質土器片9・瓦質土器片1・鉄釘1	
SK58	N - 80° - W	0.87	(0.15)	0.11	円形	須恵器片1・土師器片1	
SK59	N - 22° - W	0.92	0.53	0.37	隅丸方形	鉄滓12.0g	

遺構計測表 54 II区上面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 64° - E	(5.84)	0.26 ~ 0.37	0.08 ~ 0.22	土師質土器片 3・鉄釘 1.5g	15c
SD2	N - 12° - E N - 53° - E	(14.25)	0.43 ~ 0.77	0.32 ~ 0.41	須恵器片 2・土師質土器片 33・瓦質土器片 7・備前焼片 2・棒状鉄滓 41.5g・鉄滓 120.5g	14c 後～15c 前
SD3	N - 7° - W N - 78° - W N - 15° - W	9.92	0.26 ~ 1.00	0.04 ~ 0.17	土師質土器片 33	15c
SD4	N - 9° - W N - 67° - E	(7.26)	0.23 ~ (0.42)	0.07 ~ 0.16	土師質土器片 21・瓦質土器片 5	14c 後～15c 前
SD5	N - 46° - W	(12.30)	1.44 ~ 2.00	0.04 ~ 0.20	弥生土器片 68・須恵器片 10・土師器片 145・黒色土器片 1・瓦質土器片 6・緑釉陶器片 2・鉄滓 653.5g・石製品 2	10c 前
SD6	N - 80° - E	(2.70)	0.53	0.09	土師質土器片 7	
SD7	N - 37° - W	1.16	0.36	0.22	弥生土器片 6	
SD8	N - 22° - E N - 79° - E N - 80° - W	(6.30)	0.24 ~ 0.43	0.19 ~ 0.28	弥生土器片 110・須恵器片 10・土師器片 10	

遺構計測表 55 II区上面SX

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SX1	N - 27° - W	4.36	3.79	0.09 ~ 0.24	円形	土師質土器片 13・鉄滓 1	
SX2	N - 69° - E	(1.28)	1.26	0.17	隅丸方形	—	
SX3	N - 16° - W	2.62	1.54	0.21	隅丸方形	須恵器片 1・土師質土器片 16・瓦質土器片 1・青磁片 1・陶器片 2	14c 後～15c 前

遺構計測表 56 II区下面SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK49	N - 24° - W	0.68	0.66	0.10	円形	須恵器片 1・土師質土器片 4	
SK50	N - 72° - W	0.94	0.50	0.08	楕円形	土師質土器片 4	
SK51	N - 4° - E	0.72	0.53	0.10	楕円形	土師質土器片 1・鉄滓 18.5g	
SK60	N - 6° - E	0.90	0.66	0.37	楕円形	弥生土器片 6	
SK61	N - 48° - W	0.74	0.70	0.20	円形	弥生土器片 3・土師質土器片 7・土錘 1	

遺構計測表 57 II区下面SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD9	N - 87° - E	(7.46)	0.34 ~ 0.68	0.05	弥生土器片 5・須恵器片 1	10c 前
SD10	N - 40° - E	1.89	0.34	0.15	土師質土器片 1	10c 前

遺構計測表58 Ⅲ区SK

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK1	N - 65° - W	(1.32)	0.94	0.20	不整形	—	
SK2	N - 10° - W	1.11	0.86	0.30	楕円形	土師器杯2・土師器皿1・土師器蓋1・土師器片46・刀子1・叩石1	
SK3	N - 1° - W	1.11	1.05	0.28	隅丸方形	土師器椀1・土師器皿1・土師器竈1・土師器片102・須恵器蓋1・須恵器甕1・土錘2	
SK4	N - 20° - W	1.60	0.31	0.15	溝状	土師器杯1・土師器皿1・土師器片30	
SK5	N - 71° - W	1.06	0.81	0.12	隅丸方形	土師器杯2・土師器皿1・土師器片36	
SK6	N - 40° - W	0.97	0.84	0.02	円形	土師器片38・須恵器杯2・須恵器片6	
SK7	—	1.29	1.04	0.10	不整形	土師器皿1・土師器片19・須恵器杯1・須恵器皿2・須恵器片4	
SK8	—	1.41	1.26	0.13	不整形	土師器片20・須恵器蓋1・須恵器片1	
SK9	N - 9° - E	2.14	0.60	0.16	溝状	土師器片22・須恵器片2	
SK10	N - 65° - W	1.02	0.99	0.16	円形	土師質土器杯4・土師質土器片6	骨片

遺構計測表59 Ⅲ区SD

遺構番号	主軸方向	規模(m)			出土遺物	備考
		全長	幅	深さ		
SD1	N - 25° - W	3.86	0.38	0.20	土師器片3	

遺構計測表60 Ⅲ区SX

遺構番号	主軸方向	規模(m)			平面形	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
S X 1	—	1.95	1.18	—	不整形	土師器片11・肥前系白磁碗3・肥前系白磁片2・内野山銅緑釉皿1・鉄釘2・鉄釘片16.0g・鉄滓74.5g	
S X 2	—	1.26	1.03	—	隅丸方形	鉄製品小札4・鉄釘3・鉄滓136.0g	
S X 3	—	2.30	2.26	0.20～0.32	隅丸方形	土師器片1・白磁(皿)1・鉄製品(釘)7・鉄釘片85.0g・不明35.0g・鉄滓5624.0g・羽口1・送風口1・炭化物5	
S X 4	—	1.47	9.12	—	不整形	鉄滓5.0g	
S X 5	—	1.7	-0.96	0.09	楕円形	砥石1・鉄滓5.0g・羽口1	

遺物觀察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は、基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については()で記載する。
その他、器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
土錘については全長・全幅・孔径、石製品及び鉄製品については全長・全幅・全厚の順にそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. その他、備考には器種の分類、年代のわかるものについて記載した。
5. 中世の土器・陶磁器の分類については『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社1995, 貿易陶磁器の分類については『国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 日本出土の貿易陶磁器』1993を参照した。

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
1	TR6	VI層	土師器 杯	—	(21)	7.6	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	底部はやや段を持って立ち上がり、外底部はヘラ切り痕が残る。	
2	TR8	IV層	土師質土器 〃	—	(0.9)	(8.0)	橙色 5YR6/6 〃 〃	内底部にロクロ目を残す。	
3	TR6	〃	土師器 皿	12.2	2.0	9.0	浅黄橙色 7.5YR8/6 〃 〃	回転ナデ調整, 底部回転ヘラ切り。	
4	〃	〃	須恵器 甕	(19.7)	(5.6)	—	灰色 7.5Y5/1 灰色 N5/0 黄灰色 2.5Y5/1	口縁部は外反し, 端部は直立する。外面胴部には平行タタキ痕。	
5	TR5	IV～V層	〃 蓋	(13.2)	(1.2)	—	灰色 N6/ 灰 7.5Y6/1 褐灰色 10YR6/1	天井部はヘラ削り, 体部は回転ナデ調整。	
6	TR6	IV層	〃 壺	(22.0)	(9.0)	—	灰白色 5Y8/1 灰白色 7.5Y8/1 灰白色 5Y8/1	肩部から上部, 底部が欠損する。回転ナデ調整。	
7	〃	〃	土師器 羽釜	(10.0)	(5.5)	—	橙色 7.5YR6/6 明赤褐色 5YR5/6 橙色 7.5YR6/6	短い鈔が付く。口縁部は直立し, 端部は面を成す。	
8	〃	III層	〃 甕	27.6	4.3	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し, 端部は面を成す。口縁部はヨコナデ, 胴部外面はハケ調整。	
9	〃	〃	〃 〃	(26.6)	(3.6)	—	にぶい黄褐色 10YR5/4 〃 〃	口縁端部は上方に拡張され, 尖り気味に仕上げる。口縁部内面は横方向のハケ調整。	
10	TR9	〃	瓦質土器 鍋	(20.0)	(3.4)	—	灰白色 5Y7/1 灰色 5Y5/1 灰白色 5Y7/1	膨らみのある胴部から口縁部は直立気味に仕上げる。口縁部はヨコナデ調整。	
11	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(4.6)	—	灰白色 5Y7/1 灰色 N4/0 灰白色 5Y7/1	膨らみのある胴部から口縁部は直立気味に仕上げる。口縁部はヨコナデ調整。	
12	TR6	P9	土製品 土錘	3.5	0.9	0.5	黄灰色 2.5Y4/1	管状土錘。重量 3.0g。	
13	〃	IV層	〃 〃	(3.9)	1.5	0.5	にぶい黄橙色 10YR7/3	管状土錘。重量 6.7g。	
14	TR8	〃	陶器 片口鉢	—	(8.8)	—	オリーブ灰色 2.5GY6/1 〃 浅黄色 2.5Y7/3	古瀬戸片口鉢。全体的に灰釉が薄く施釉され, 外面の体部下半は露胎。	
15	I W 区	SB1P7	磁器 皿	13.4	(21)	—	明オリーブ灰 2.5GY7/1 〃 灰白色 5Y2/1	全体的に透明釉が薄く施され, 貫入が入る。内面は唐草文。肥前系。	
16	I S 区	SB2,3P3	土師質土器 小皿	—	(1.2)	4.4	橙色 5YR6/8 〃 〃	ロクロ成形。底部回転糸切り。水漉した胎土。	
17	〃	SB3P8	〃 皿	(11.0)	2.2	(5.2)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	ロクロ成形。胎土に径 0.5mm以下の砂を含む。	
18	I W 区	SB2P5	〃 杯	—	(21)	(4.4)	橙色 5YR6/6 〃 〃	ロクロ成形。内面ロクロ目顕著。底部回転糸切り。焼成良。胎土は細砂粒。	
19	I S 区	SB2,3P1	陶器 皿	(16.0)	(21)	—	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 〃	端反型。全体的に透明感のある灰釉が全面に施される。	
20	〃	SB3P4	〃 〃	(13.4)	(1.5)	—	浅黄色 2.5Y7/3 にぶい黄橙色 10YR6/4 〃	端反型。口縁内面に沈線状の凹み有り。灰釉が施されるが気泡が多い。肥前Ⅱ期。	1610～ 1650年
21	〃	SB2,3P2	〃 〃	(14.2)	(1.3)	—	灰白色 5Y7/2 〃 灰オリーブ色 5Y6/2	端反型。口縁端部は沈線状に凹む。薄く灰釉が施される。肥前Ⅲ期。	1650～ 1690年
22	〃	SB2,3P3	〃 〃	—	(2.3)	(7.5)	灰黄色 2.5Y7/2 明オリーブ灰色 2.5GY/7/2 灰黄色 2.5Y7/2	壺付以外灰釉が全面に施される。内面見込みは蛇ノ目状に釉を剥く。肥前Ⅲ期。	1650～ 1690年

遺物観察表2 (23～44)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
23	I S 区	SB23P3	陶器 皿	(25.8)	(4.7)	—	灰白色 2.5Y8/2 灰オリーブ色 5Y5/2 灰色 5Y5/1	水平な口縁を持つ。灰釉が施釉され、内面には白土化粧が施される。肥前Ⅱ期。	1610～ 1650年
24	〃	SB23P1	鉄銭	直径 2.4	穿径 0.6	—	—	重量 3.0g	
25	〃	SB2P8	石製品 砥石	8.5	4.2	3.5	—	仕上砥。四面使用。	
26	〃	SB5P5	土師質土器 皿	(9.4)	2.4	(4.4)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	内湾気味に立ち上がる。ロクロ成形。底部回転糸切り。	17c 前
27	〃	SB5P1	〃 〃	—	(0.8)	(5.0)	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	ロクロ成形。底部回転糸切り。胎土に 1mm 以下の砂含む。	
28	I W 区	SB7P11	陶器 皿	—	(2.2)	4.6	黒褐色 2.5Y3/1 にぶい赤褐色 5YR5/3 にぶい黄色 2.5Y6/3	内面底部全体に鉄釉が施される。底部は削り出しによる低い高台が付く。肥前系。	
29	〃	SB7P13	銅製品 煙管	—	—	—	—	雁首以下欠損。残長 2.7cm、雁首幅 0.4mm、火皿幅 1.7cm、全厚 0.1mm。	
30	〃	SB8P1	土師質土器 皿	(9.0)	2.2	6.7	にぶい黄褐色 10YR6/3 灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	灯明皿。口縁の一部にタール付着。ロクロ成形。回転ナデ調整が施される。底部外面は籐状圧痕。	
31	〃	〃	〃 〃	(9.7)	1.9	(6.0)	にぶい黄褐色 10YR6/4 黄褐色 2.5Y5/3 にぶい黄褐色 10YR6/4	灯明皿。ベタ底から内湾し、口唇部は丸く収める。外面にタール付着。底部外面は籐状圧痕。	14c
32	〃	P1	陶器 碗	10.5	(4.3)	—	黄褐色 2.5Y5/4 灰黄色 2.5Y6/2	天目茶碗。全体的に鉄釉が施されるが、口縁部周辺は低温焼成により黄地釉の発色を呈す。体部下半は露胎。	
33	I S 区	〃	〃 皿	(14.6)	(1.8)	—	暗オリーブ色 7.5Y4/3 にぶい黄褐色 10YR5/3 〃	灰釉が施釉される。外面体部下半は露胎。水澆した胎土。肥前Ⅱ～Ⅲ期。	17c
34	〃	P16	磁器 小丸碗	8.0	4.5	3.3	灰白色 10Y8/1 〃 〃	外面草花文と雁文。高台脇二重界線。肥前系。	18c 前
35	〃	P11	〃 碗	(8.8)	(2.4)	—	灰白色 10Y7/1 〃 〃	口縁部は僅かに外反する。外面に草花文。	
36	〃	P12	陶器 碗	(14.0)	(3.0)	—	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 灰白色 5Y7/1	灰釉、0.5～1mm 大の細い貫入。鉄絵笹文の一部が認められる。尾戸焼。	18c
37	〃	P14	〃 〃	(12.2)	(4.4)	—	浅黄色 2.5Y7/3 〃 淡黄色 2.5Y8/4	灰釉が薄く施釉される。丸型碗。尾戸焼。	18c
38	〃	〃	鉄製品 楔	4.5	1.9	1.1	—	重量 15g。	
39	〃	〃	鉄銭	直径 2.9	穿径 0.6	—	—	重量 4.0g。	
40	〃	P28	石製品 砥石	12.7	4.4	4.1	—	流紋岩製。	
41	I W 区	SK2	青磁 皿	(10.0)	2.5	(5.0)	灰色 5GY8/1 〃 灰色 N8/0	青白色を呈した釉が高台脇まで薄く施される。波佐見窯。	
42	〃	SK3	土師質土器 〃	(12.8)	3.2	(6.0)	浅黄褐色 10YR8/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。外面の一部にタール付着。	
43	〃	SK6	陶器 〃	—	(2.0)	(4.0)	にぶい褐色 7.5YR5/3 〃 にぶい黄褐色 10YR6/3	外面体部下半は露胎。底部は低い高台が付く。高台内面に砂目。内面全体から外面体部下半まで鎔釉。	
44	〃	SK7	瓦質土器 鍋	(18.0)	(5.2)	—	オーブ灰色 2.5GY5/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	口縁部は直立気味に短く立ち上がり、胴部は膨らむ。口縁部はヨコナデ調整、端部は面を成す。胴部外面は指頭圧痕。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
45	I W 区	SK9	土師質土器 皿	9.8	2.1	4.7	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	灯明皿。口縁の一部にタール痕有り。ロクロ成形。底部回転糸切り。	
46	〃	〃	〃 〃	9.8	2.0	4.7	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	灯明皿。口縁の一部にタール痕有り。ロクロ成形。底部回転糸切り。	
47	〃	〃	鉄製品 鈕銭	10.4	2.7	2.3	—	重量 144.0g。	
48	〃	SK10	陶器 碗	—	(2.8)	4.4	暗褐色 10YR3/3 浅黄色 2.5Y7/3 灰白色 2.5Y8/1	天目茶碗。断面四角形の低い高台が付く。高台脇はケズリが施される。内面全体から外面体部下半まで施釉される。	
49	〃	SK16	磁器 皿	—	(1.9)	—	灰白色 10Y8/1 〃 灰白色 5Y8/1	口縁端部の一部に虫食い。外面に濃いコバルト釉による文様の一部が見られる。	
50	〃	〃	〃 碗	16.0	(1.8)	—	明緑灰色 10GY8/1 〃 灰白色 5Y8/1	外面口縁部は二重界線。内面口縁部は一条の界線が薄いコバルト釉で施される。	
51	〃	〃	白磁 丸皿	12.9	(2.3)	—	灰白色 10Y7/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	丸皿。全体的に白磁釉が薄く施される。外面体部下半は露胎。	
52	〃	〃	陶器 播鉢	—	(7.2)	—	にぶい赤褐色 5YR5/4 〃 明赤褐色 2.5YR5/6	備前焼。内面に細い単位の条線が施される。胎土は3～5mm大の角礫、長石含む。	
53	I S 区	SK1	石製品 砥石	13.8	9.3	4.3	—	流紋岩製。	
54	〃	SK5	磁器 杯	—	(2.6)	4.0	灰白色 5GY8/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	豊付は釉を削り取る。高台から上方に向かって延びる。高台は二重界線。高台内に崩れた舟文が描かれる。	
55	〃	SK8	青磁 皿	—	(1.4)	—	明オリーブ灰色 2.5GY7/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	稜花皿の体部片。腰折れタイプ。胎土はやや陶質。	
56	I W 区	SD1	鉄滓	4.2	3.6	3.0	—	重量 78.3g。	
57	〃	SD2	陶器 皿	14.3	14.3	5.2	釉灰白色 5Y7/1 にぶい赤褐色 5YR5/3 〃	灰釉皿。外面体部下半は露胎。内底部に砂目と釉の一部が付着。外底部は兜巾状の削り出し。灰白色を呈する灰釉が厚く施される。肥前 I - 2 期。	1594～ 1610 年
58	〃	〃	〃 〃	12.6	3.7	4.5	釉灰白色 5Y7/1 浅黄色 2.5Y7/3 〃	灰釉皿。体部は内湾する。外面体部下半は露胎する。胎土目。底部は弱いケズリで兜巾状を呈す。肥前 I - 2 期。	1594～ 1610 年
59	〃	〃	〃 〃	—	(1.4)	(4.4)	釉灰白色 5Y8/1 にぶい黄橙色 10YR7/4 〃	灰釉皿。削り出し高台。内面は灰釉が施されるが、二次被熱により釉が白濁する。三日月状の砂目。外面体部下半は露胎。	
60	〃	〃	〃 〃	10.7	(1.9)	—	灰黄色 2.5Y7/2 〃 浅黄色 2.5Y7/4	全体的に透明釉が薄く施される。	
61	〃	〃	〃 〃	—	(1.5)	4.6	釉灰黄色 2.5Y7/2 〃 にぶい黄橙色 10YR7/4	断面四角形の低い高台を持つ。灰黄色を呈する灰釉が高台外面まで薄く施される。黄橙色を呈する精緻な胎土。	
62	〃	〃	〃 碗	—	(3.7)	(5.4)	釉黒色 10YR2/1 にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	天目茶碗。削り出し高台。外面は露胎する。内面は黒色を呈する鉄釉が施される。精選された胎土。肥前 II 期。	1610～ 1650 年
63	〃	〃	〃 鉢	長径 (10.3)	短径 (5.0)	器高 (3.5)	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	瀬戸織部。向付け。	
64	〃	〃	白磁 小杯	(8.0)	(1.1)	—	灰白色 10Y8/1 〃 〃	肥前系。口縁部は短く外反する。	
65	〃	〃	〃 〃	(8.8)	(1.4)	—	灰白色 7.5Y8/1 〃 〃	肥前系。口縁部は短く外反する。	
66	〃	〃	瓦 軒丸瓦	直径 (13.0)	内区径 (11.5)	鑄部高 (0.7)	灰色 N4/0 〃 灰白色 7.5Y8/1	軒丸瓦。コビキ B 手法。	

遺物観察表4 (67～88)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
67	I W 区	SD2	石製品 砥石	11.8	5.3	10.5	灰色 10Y4/1	仕上砥。表面一側辺を使用。泥岩製。	
68	〃	SD3	陶器 筒形火入れ	(8.6)	(3.0)	—	オリーブ灰色 5GY6/1 〃 灰黄褐色 10YR4/2	肥前系。外面二重の界線。	
69	〃	〃	鉄銭	直径 2.6	穿径 0.7	—	—	重量 2.2g	
70	〃	SX2	陶器 播鉢	—	(6.0)	—	にぶい赤褐色 5YR5/3 灰黄褐色 10YR5/2 にぶい赤褐色 5YR5/4	備前焼。口縁端部は僅かに外傾し面を成す。内面は六条を基調とする条線が施される。胎土に径2mm以下の砂を含む。備前Ⅲ～Ⅳ a 期。	14c
71	〃	〃	鉄製品 釘	5.4	1.1	0.6	—	角釘。重量 5.71g。	
72	〃	SD8	瓦質土器 鍋	(20.0)	(2.9)	—	灰色 N4/0 灰色 N5/0 灰白色 N8/0	口縁部は短く直立する。酸化焙焼成。胎土は細砂粒、径0.2～0.3mm大の砂を少量含む。	
73	〃	P73	銅製品 鉾	—	—	—	—	宝珠形の突起が付く。残長1.7cm、全厚0.2～1cm。重量2.5g。	
74	I E 区	P2	磁器 皿	(11.8)	(1.8)	—	灰白色 2.5GY8/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	端反皿。口縁端部に呉須で界線が施される。	
75	〃	〃	石製品 砥石	7.6	3.6	3.0	—	泥岩製。	
76	〃	〃	〃 〃	5.2	3.0	1.8	—	流紋岩製。	
77	〃	P80	土質土器 杯	(11.0)	(2.8)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 〃	ロクロ成形。口唇部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整。精選された胎土。	
78	〃	〃	青花 皿	(14.8)	(1.2)	—	明緑灰色 7.5GY8/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	外面に牡丹唐草文、内面口縁部に二重界線。青花皿B群。	
79	〃	P18	陶器 碗	(14.4)	(3.9)	—	赤黒色 2.5YR2/1 〃 灰白色 2.5Y8/2	天目茶碗。全体的に鉄釉が施される。瀬戸美濃系。	
80	〃	P43	〃 皿	(10.8)	(2.8)	(7.4)	暗褐色 7.5YR3/4 〃 灰白色 2.5Y8/2	稜花皿。全体に鉄釉が施される。見込みに重ね焼き痕。瀬戸美濃系。	
81	〃	P7	青花 〃	—	—	—	灰白色 2.5GY8/1 灰白色 5Y8/1 〃	見込みに玉取り獅子。青花皿B群。	
82	〃	P68	陶器 〃	—	(1.7)	(4.8)	灰白色 2.5Y8/1 〃 浅黄色 2.5Y7/4	浅黄色を呈したきめの細かい胎土。内面蛇ノ目釉剥ぎ。高台内は兜巾。内面見込み中央に花文、外面体部下半にも呉須によって文様が施される。肥前系内野山窯。	17c 後～ 18c
83	〃	P46	磁器 小杯	—	(3.5)	(3.4)	灰白色 N8/0 〃 灰白色 7.5Y8/1	高台から上方に立ち上がる。	
84	〃	P61	瓦 丸瓦	全長 5.7	全幅 4.7	全厚 3.2	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	コビキ A 手法。	
85	〃	P82	石製品 砥石	11.6	8.0	4.1	—	砂岩製。	
86	〃	P3	鉄製品 鉾	15.4	1.3	0.7	—	重量 17.12g。	
87	〃	SK8	陶器 皿	(11.6)	(2.3)	—	緑灰色 5G5/1 灰黄 2.5Y6/2 灰白 2.5Y8/2	肥前系内野山窯。銅緑釉が施される。	
88	〃	SD2	土質土器 〃	7.4	1.3	5.5	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 〃	底部から短く立ち上がり内湾する。内底中央は凹む。ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
89	I E区	SD2	土師質土器 皿	7.3	1.3	4.6	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	底部から短く立ち上がり内湾する。内底部中央は凹む。ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
90	〃	〃	陶器 碗	(11.2)	(2.8)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 〃 灰黄色 2.5Y7/2	京焼系。腰張形で端反り。全体的に黄味を帯びた灰釉が施される。胎土は緻密。	18c 前
91	〃	SD4	〃 皿	—	(4.6)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 〃 橙色 2.5Y7/3	高台内は高台脇より深く削り込む。白土化粧の後、ハケ目文様を施し、その上に透明釉を掛ける。唐津焼。肥前V期。	1780～ 1860年
92	〃	SD14	〃 〃	—	(3.2)	(8.8)	灰色 7.5Y5/1 灰褐色 5YR4/2 黄灰色 2.5Y6/1	高台内は高台脇より深く削り込む。内面は白土化粧を施し、銅緑釉により文様が描かれる。見込みに砂目。唐津。	
93	〃	〃	〃 蓋	—	2.3	—	にぶい褐色 7.5Y5/3 にぶい黄色 2.5Y6/4 灰白色 2.5Y7/1	宝珠のつまみが付く。天井部は灰釉が施され二条の界線が入る。	
94	〃	〃	〃 碗	(11.9)	(3.6)	—	黒色 2.5Y2/1 〃 灰白色 5Y7/1	全体的に鉄釉が施される。胎土は緻密。肥前III期。	1650～ 1690年
95	〃	SD15	〃 〃	(12.0)	(5.6)	—	黒色 10YR2/1 にぶい黄褐色 10YR4/3 灰白色 2.5Y8/2	瀬戸天目茶碗。口縁部は上方に折れ、端部は玉縁状を呈する。全体的に鉄釉が施され、外面体部下半は露胎。	
96	〃	〃	〃 皿	—	(2.4)	(4.4)	灰オリーブ色 5Y6/2 灰黄色 2.5Y7/2 〃	くり底状の底部から外方に立ち上がり、体部途中で屈曲する。内面に明瞭な段が生じる。見込みに砂目。全体的に灰釉が薄く施され、外面体部下半は露胎。肥前II期。	1610～ 1650年
97	〃	〃	〃 〃	—	(2.1)	(5.6)	灰白色 5Y8/1 にぶい橙色 7.5YR6/4 〃	低い高台がつく。高台内は兜巾状を呈す。露胎。二次被熱により胎土は橙色を呈し、釉が白濁する。内面見込みに砂目。肥前II期。	1610～ 1650年
98	〃	〃	〃 〃	—	(2.9)	4.5	オリーブ黄色 5Y6/3 にぶい黄褐色 10YR6/4 灰白色 10Y8/1	ロクロ成形。外面体部下半は露胎。高台内は兜巾状を呈す。内面見込みに砂目。全体的に灰釉が薄く施される。肥前II期。	1610～ 1650年
99	〃	〃	〃 〃	(13.0)	3.4	(4.6)	褐灰色 10YR6/1 にぶい赤褐色 5YR5/4 〃	二彩手。低い高台から緩やかに延び、口唇部は丸く収める。蛇ノ目釉剥ぎ。外面体部下半は露胎、内面に草花風の文様が施される。二次被熱により釉は白濁。肥前III期。	1650～ 1690年
100	〃	〃	〃 〃	—	(1.7)	—	淡黄色 2.5Y8/2 黒褐色 10YR3/1 褐灰色 10YR4/1	全体的に鉄釉が施され、内面には白土化粧がハケ塗りされる。	
101	〃	〃	〃 〃	—	(4.0)	(10.7)	灰白色 2.5Y8/2 にぶい黄褐色 10YR6/3 〃	内面白土化粧が施され鉄釉と銅緑釉により老松文風の文様が描かれる。見込みに砂目痕。高台脇より高台内の方が深く削り込まれる。肥前III期。	1650～ 1690年
102	〃	〃	青磁 〃	(21.4)	(2.3)	—	明緑灰色 7.5GY7/1 〃 灰白色 5Y8/1	端反皿。全体的に薄く施釉されている。	
103	〃	〃	〃 〃	—	(2.7)	(5.4)	灰オリーブ色 7.5Y5/2 〃 淡黄色 2.5Y8/3	高台外面は斜めに削る。釉は高台外面まで全面施釉され、高台内は露胎。	
104	I W区	P73	須恵器 杯	(14.0)	(3.3)	—	暗灰色 N3/0 灰白色 5Y7/1 暗灰色 N3/0	回転ナデ調整。内面は酸化焰焼成。	
105	〃	P114	〃 器台	25.8	(6.0)	—	青灰色 5B5/1 〃 灰色 7.5Y6/1	須恵器器台の身部分。口縁端部は僅かに外反し、回転ナデ調整。	
106	〃	SK18	弥生土器 甕	—	(12.3)	(2.0)	にぶい黄色 2.5Y6/3 にぶい橙色 7.5YR6/4 灰色 N4/0	底部は丸底気味。外面ハケ調整、内面ナデ調整。外面の一部に煤付着がみられる。胎土に径1～2mm大の砂含む。	
107	〃	SK20	〃 〃	15.5	(7.0)	—	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR6/8 橙色 7.5YR7/6	口縁部は長く大きく開き、接合痕がみられる。胴部外面はタタキ目。口縁部及び胴部内面はナデ調整。胎土に径3～5mm大の礫含む。	
108	〃	〃	〃 〃	—	(4.3)	(4.2)	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4 灰色 N4/0	平底。タタキ成形後、ハケ調整。胎土に径2～3mm大の礫、チャート含む。	
109	〃	〃	〃 〃	—	(2.9)	(4.0)	にぶい黄色 2.5Y6/3 にぶい褐色 7.5YR6/3 暗灰色 N3/0	平底。板状工具によるナデ調整。胎土に径3.5mm以下の礫含む。	
110	〃	SK21	〃 〃	(19.6)	(5.3)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 にぶい黄褐色 10YR4/3	口縁部は長く大きく外反し、端部中央部は凹む。内外面とも細かいハケ調整。胎土に径0.5～1mm大の砂含む。	

遺物観察表6 (111～132)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
111	I W 区	SK21	弥生土器 甕	—	(9.2)	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 橙色 7.5YR7/6 にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部、胴部下欠損。内外面ともにタタキ成形後ハケ調整。胎土に径 2.5mm以下の礫含む。	
112	〃	〃	〃	—	(5.7)	(3.0)	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい赤褐色 5YR5/4 灰色 N4/0	平底から外方に開いて立ち上がる。内外面ハケ調整。胎土に径 2mm以下の砂含む。	
113	〃	〃	〃 壺	—	(8.0)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 灰色 N4/0	内面一部剥離。ハケ調整。胎土に径 2mm以下の砂を含む。	
114	〃	土器溜まり	〃	(20.6)	(2.2)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 〃 灰 N4/0	口縁部は上下に拡張する。ナデ調整。	
115	〃	〃	〃	(19.6)	(4.5)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 黒色 2.5Y2/1	口縁部はラップ状に開き、端部は上下に拡張。頸部外面は縦方向のミガキ、内面は工具による横方向の調整痕。胎土に径 4mm以下の礫、チャート含む。	
116	〃	〃	〃	(15.6)	(4.0)	—	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄橙色 10YR6/3 灰色 N4/0	口縁部は内傾し、端部はナデにより面を成す。内外面ハケ調整。口縁部外面は横方向のハケ、頸部内面は横方向のハケ調整。胎土に径 2.5mm以下の礫含む。	
117	〃	〃	〃	(15.4)	(6.4)	—	橙色 5YR6/6 〃 暗灰色 N3/0	複合口縁壺。上位口縁内面に粘土帯接合痕がみられる。ナデ調整。頸部外面に縦方向のハケ調整。胎土は径 4mm以下の礫を含む。	
118	〃	〃	〃	14.8	(3.0)	—	黄橙色 10YR8/6 にぶい橙色 7.5YR7/4 明黄褐色 10YR7/6	胎土は径 1～3mm大の礫、チャート含む。	
119	〃	〃	〃	—	(3.7)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	頸部と胴部境界に突帯が付く。櫛状原体の工具による刻みが施される。内外面ナデ調整。胎土に径 3.5mm以下の礫を含む。	
120	〃	〃	〃	—	(2.9)	—	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい褐色 7.5YR6/3 褐灰色 10YR5/1	頸部と胴部境界に突帯が付く。ヘラ状工具による刻みが施される。	
121	〃	〃	〃	—	(2.4)	—	明赤褐色 5YR5/6 〃 灰色 N4/0	頸部と胴部境界に突帯が付く。斜格子状の刻みが施される。焼成良。胎土に径 1.5mm以下の砂、チャート、白雲母含む。	
122	〃	〃	〃	—	(1.9)	—	褐灰色 10YR5/2 〃 灰 N4/0	頸部と胴部境界に突帯が付く。斜格子状の刻みが施される。胎土に径 1mm以下の砂含む。	
123	〃	〃	〃	—	(2.9)	—	暗黄褐色 2.5Y4/2 黄褐色 2.5Y5/3 暗黄褐色 2.5Y4/2	櫛描き沈線文。刻目文。胎土に径 5mm以下の礫含む。弥生中期末。	
124	〃	〃	〃	—	(2.0)	4.8	灰色 5Y4/1 明黄褐色 10YR7/6 明黄褐色 10YR7/6～灰色 5Y4/1	平底。円盤状の底部から外方に開く。タタキ目を残す。胎土に径 2～5mm大の礫、チャート、石英含む。	
125	〃	〃	〃	—	(2.8)	7.4	浅黄褐色 7.5YR8/6 にぶい黄褐色 10YR7/4 黒 N2/	平底。タタキ目を残す。内底部は剥離。胎土に径 1～3mm大の礫、チャート含む。	
126	〃	〃	〃	—	(6.9)	6.0	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6 黒色 10Y2/	厚みのある底部から段を持ち、外方に開く。ハケ調整。胎土に径 2～5mm大の礫、チャート、石英含む。	
127	〃	〃	〃	—	(6.8)	5.0	淡黄色 2.5Y8/3 にぶい橙色 7.5YR7/4 オリープ黒色 5Y3/1	内面に細かなハケ調整が施される。胎土に径 1～2mm大の砂含む。	
128	〃	〃	〃	(13.8)	(10.9)	—	浅黄色 2.5Y7/4 浅黄褐色 7.5YR8/6 黒色 7.5YR2/1	素口縁。口縁部はやや外方に開く。胎土に径 1～5mm大のチャート含む。	
129	〃	〃	〃	(14.6)	(15.0)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 にぶい橙色 7.5YR7/4 灰 N4/0	素口縁。口縁部はやや外方に開く。タタキ成形後ハケ調整。	
130	〃	〃	〃	(13.0)	(15.2)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 灰色 N4/0	素口縁。口縁部は直立する。内外面ともにハケ調整。胴部外面に僅かにタタキ目残る。胎土に径 3mm以下の礫含む。	
131	〃	〃	〃	13.2	(24.2)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 黒色 N2/0	複合口縁壺。口縁部外面に櫛描波状文、上部に刺突文。胎土に径 3.5mm以下の礫含む。	
132	〃	〃	〃	—	(26.1)	4.6	にぶい黄褐色 10YR7/4 橙色 5YR7/6 灰色 5Y4/1	口縁部欠損。摩耗が著しい。ハケ調整。胎土に径 3.5mm以下の礫含む。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
133	I W区	土器溜まり	弥生土器 壺	—	(21.7)	(6.8)	黄橙色 10YR5/6 〃 灰黄褐色 10YR5/2	平底から胴部は球形に膨らむ。外面はタタキ成形後ハケ調整、内面ナデ調整。胎土に径3～5mm大の礫、チャートを含む。	
134	〃	〃	〃 甕	13.4	(4.9)	—	橙色 5YR7/8 〃 橙色 5YR6/8 〃 橙色 5YR7/8	小型甕。	
135	〃	〃	〃 〃	10.4	(5.9)	—	橙色 5YR7/6 〃 褐灰色 10YR4/1	口縁部は上方を向き、内湾する。端部は尖り気味に仕上げる。胎土は1～3mm大の礫、チャートを含む。	
136	〃	〃	〃 〃	(14.9)	(4.4)	—	橙色 5YR6/6 〃 オリーブ褐色 2.5Y4/3	口縁部は緩やかに外反する。ナデ調整。胎土に径1～3mm大の礫を含む。	
137	〃	〃	〃 〃	(14.4)	(4.0)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁部は緩やかに外反し、端部は玉縁状に肥厚する。内面横方向のハケ、ナデ調整。外面は縦方向のハケ調整。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
138	〃	〃	〃 〃	(15.2)	(7.3)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	内外面ともにハケ調整。内面はハケ目の単位が粗い。胎土に径1～3mm大の礫、長石を含む。	
139	〃	〃	〃 〃	(13.5)	(5.7)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 〃 にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁部は「く」の字に外反し、端部は尖り気味に仕上げる。胴部外面は斜状のハケ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整。	
140	〃	〃	〃 〃	(13.4)	(10.9)	—	橙色 5YR6/8 〃 黄灰色 2.5Y6/1	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に垂下させ面を成す。内外面ハケ調整、胎土に径5mm以下の礫を含む。	
141	〃	〃	〃 〃	(13.8)	(6.1)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 暗灰色 N3/0	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に垂下させ面を成す。内面胴部はナデ、ハケ、外面はタタキ成形後、粗い単位のハケ。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整。	
142	〃	〃	〃 〃	13.4	(6.5)	—	浅黄色 7.5YR8/6 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に垂下させ面を成す。ナデ調整、胴部内面ヘラケズリ、外面タタキ目。胎土に径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
143	〃	〃	〃 〃	(13.0)	(12.1)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 にぶい褐色 7.5YR5/4 〃 にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に垂下させ面を成す。外面タタキ成形後、ハケ調整。内面ハケ調整。胎土に径3mm以下の礫を含む。	
144	〃	〃	〃 〃	13.7	(10.9)	—	橙色 5YR6/6 〃 橙色 7.5YR7/6 〃 にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に垂下させ面を成す。外面タタキ目、僅かにハケ目が残る。内面ハケ調整。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
145	〃	〃	〃 〃	(14.3)	(3.9)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 灰褐色 7.5YR5/2 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は下方に垂下させ面を成す。外面ハケ調整、内面粗い単位のハケ調整。	
146	〃	〃	〃 〃	(16.0)	(10.0)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 黒色 N2/0	口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く収める。外面タタキ目。内面ハケ調整。胎土に径3mm以下の礫を含む。	
147	〃	〃	〃 〃	(13.1)	(7.3)	—	黄橙色 7.5YR7/8 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く収める。タタキ成形後、ハケ調整が施される。	
148	〃	〃	〃 〃	(14.8)	(4.0)	—	にぶい橙色 5YR6/4 〃 にぶい赤褐色 5YR5/4 〃 にぶい橙色 5YR6/7	口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く収める。タタキ成形後、ナデ調整が施される。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
149	〃	〃	〃 〃	15.0	(5.4)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 〃 にぶい黄褐色 10YR7/4 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く収める。ナデ調整、胴部外面ハケ調整が施される。胎土に径1～5mm大の礫、チャートを含む。	
150	〃	〃	〃 〃	(14.2)	(8.0)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	胴部上位にやや段を持つ。口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く収める。内外面ともに細かい単位のハケ調整。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
151	〃	〃	〃 〃	(17.5)	(10.3)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 にぶい褐色 5YR6/4 〃 灰色 N4/0	口縁部は「く」の字に外反。胴部外面口縁直下まで縦位のハケ調整。口縁内面はハケ状工具でコテ当て状に調整。胎土に径0.5～1mm大のチャートを含む。	
152	〃	〃	〃 〃	13.0	(4.4)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 明褐色 7.5YR5/6 〃 橙色 7.5YR6/8	口縁部は大きく外反し、端部は尖り気味に仕上げる。外面に粘土を貼付けした痕がみられる。胎土に径3mm大の礫、チャートを多く含む。	
153	〃	〃	〃 〃	(17.4)	(4.7)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 褐灰色 10YR4/1	口縁部はラップ状に開く。外面にタール付着、口縁部までタタキ目が残る。胎土は径3mm大の礫、チャートを含む。	
154	〃	〃	〃 〃	(16.2)	(11.9)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 にぶい橙色 5YR6/4 〃 橙色 7.5YR6/6	口縁部はラップ状に開く。外面胴部上半にタタキ目、下半はハケ調整。内面は横方向のハケ調整。胎土に径6mm以下の礫、チャートを含む。	

遺物観察表8 (155～176)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
155	I W 区	土器溜まり	弥生土器 甕	(14.0)	15.9	3.0	橙色 7.5YR7/7 にぶい褐色 7.5YR6/3 橙色 7.5YR7/7	口縁部はラッパ状に開く。内外面ともハケ調整。口縁部外面はナデ調整。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
156	〃	〃	〃	(17.8)	(3.3)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 暗灰色 N3/0	胴部外面から口縁部の一部にタタキ目、内面ハケ調整。胴部と口縁部の接合部が顕著で、内面の稜が明瞭。	
157	〃	〃	〃	(15.9)	(3.9)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 明褐色 7.5YR5/6	口縁部は「く」の字に外反する。内外面ハケ調整。色調はやや褐色系で光沢がある。胎土は径0.5～1mm大の砂を少量含む。	
158	〃	〃	〃	(16.8)	(4.1)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 暗灰色 N3/0	外面細い単位のハケ調整、内面粗い単位のハケ調整。胴部と口縁部の接合部が顕著で、内面の屈曲部の稜が明瞭である。	
159	〃	〃	〃	(15.5)	(6.5)	—	橙色 7.5YR6/8 〃 暗灰色 N3/0	内外面ハケ調整。口縁部は面を成す。胎土に径4mm以下の石英、チャートを含む。	
160	〃	〃	〃	14.4	(4.3)	—	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい橙色 5YR6/4 黒褐色 10YR3/1	口縁部は緩やかに外反し、口縁部は面を成す。肩部に直径1～1.5mmの刺突文。胎土に径3mm大の礫、石英、チャートを含む。	
161	〃	〃	〃	14.9	(6.5)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	口縁部「く」の字に外反し、口縁部は面を成す。粗いハケ調整。胴部外面に僅かにタタキ目残る。胎土に径0.5～1mm大の砂を含む。	
162	〃	〃	〃	16.0	(7.8)	—	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR7/6 オリーブ黒色 7.5Y3/1	口縁部は「く」の字に外反し、口縁部は面を成す。外面タタキ成形後、ハケ調整が施される。口縁部外面の一部にタール痕。	
163	〃	〃	〃	(14.2)	(8.5)	—	橙色 5YR6/6 〃 オリーブ黒色 5Y3/1	口縁部は外反する。外面タタキ後、ハケ調整。内面ハケ調整。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
164	〃	〃	〃	16.5	(4.8)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 暗灰色 N4/0	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成し、やや下方に垂下する。外面タタキ成形後、ハケ調整、内面ハケ調整。	
165	〃	〃	〃	20.0	(3.7)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 明黄褐色 10YR7/6	口縁部は外方に反るように折り曲げる。細かいハケ調整。胎土に1～2mm大の砂粒、5mm大の角礫、チャートを含む。	
166	〃	〃	〃	(18.6)	(4.4)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 〃	口縁部は外方に反るように折り曲げる。細かいハケ調整。内面は粗い単位のハケ調整。口縁外面にタール、煤付着。胎土は径1～3mm大のチャートを含む。	
167	〃	〃	〃	(16.2)	(6.4)	—	明赤褐色 5YR5/6 橙色 5YR6/6 黒色 N2/1	口縁部は外方に反るように折り曲げる。細かいハケ調整。外面タタキ後、ハケ調整。内面ナデ調整。胎土に径2.5mm以下の砂粒を含む。	
168	〃	〃	〃	(13.4)	(11.5)	—	明黄褐色 10YR7/6 橙色 5YR6/8 黒色 N2/0	口縁部は「く」の字に外反し、端部は丸く収める。外面タタキ後、ハケ調整。内面ハケ調整が施される。胎土に径4.5mm以下の礫を含む。	
169	〃	〃	〃	(16.6)	(10.2)	—	明黄褐色 10YR6/6 橙色 5YR6/6 褐色 10YR5/1	口縁部は大きく外反し、胴部内面の接合痕が顕著である。摩耗著しい。内面ハケ調整。胴部外面に僅かにハケ目が残る。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
170	〃	〃	〃	17.8	(7.6)	—	橙色 5YR6/6 〃 黒色 7.5YR2/1	口縁部は外反し、端部は面を成す。内外面ともハケ調整。胎土に径3～5mm大の礫、チャートを含む。酸化焙焼成。	
171	〃	〃	〃	(17.0)	(7.7)	—	橙色 5YR6/8 〃 灰色 7.5Y6/1	口縁部は大きく外反し、胴部内面の接合痕が顕著。内面ナデ調整、外面口縁部ナデ調整。胴部はハケ調整。胎土は径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
172	〃	〃	〃	(14.8)	(13.4)	—	橙色 5YR6/6 〃 黒色 N2/0	口縁部は外反し、胴部内面の接合痕が顕著である。外面ハケ調整。内面ハケ、ナデ調整が施される。胎土に径4.5mm以下の礫を含む。	
173	〃	〃	〃	(15.8)	(10.4)	—	黄褐色 7.5YR7/8 〃 褐色 7.5YR4/1	口縁部は大きく外反し、やや垂下し面を成す。胴部内面の接合痕が顕著である。ハケ調整。胎土に径4～5mm大の礫を含む。	
174	〃	〃	〃	18.6	(6.8)	—	橙色 7.5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR6/4 橙色 7.5YR6/6	口縁部は外方に大きく開き、端部は面を成す。内外面ともにハケ調整。胎土に径1～3mm大の礫を含む。	
175	〃	〃	〃	14.0	(8.2)	—	浅黄褐色 10YR8/3 にぶい褐色 7.5YR7/4 黒褐色 10YR3/1	口縁部を短く折り曲げる。外面をタタキ成形、内面は縦方向の均等なハケ調整。	
176	〃	〃	〃	(18.8)	(7.0)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 暗灰色 N3/0	口縁部はやや内湾し、受け口状を呈す。外面胴部にタタキ目。内面ハケ調整。胎土に径2mm以下の砂を含む。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
177	I W区	土器溜まり	弥生土器 甕	(17.2)	(8.0)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 暗灰色 N3/0	口縁部はやや内湾し、受け口状を呈する。外面はタタキ成形。胎土に径7.5mm以下の礫を含む。	
178	〃	〃	〃 〃	(15.2)	(14.1)	—	暗灰色 N3/0 にぶい黄橙色 10YR6/4 暗灰色 N3/0	口縁部の屈曲が緩い。ナデ調整。胎土に径5mm以下の礫、チャートを含む。	
179	〃	〃	〃 〃	(14.3)	(13.8)	—	明褐色 7.5YR5/6 明赤褐色 5YR5/7 暗灰色 N3/0	口縁部の屈曲が緩い。ナデ調整。摩耗著しい。胴部外面の一部、口縁部内面にハケ目。胎土に径4.5mm以下の礫を含む。	
180	〃	〃	〃 〃	(15.0)	(5.7)	—	橙色 7.5YR7/6 灰色 7.5Y6/1 〃	口縁部の屈曲が緩い。ナデ調整。摩耗が著しく、調整不明。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
181	〃	〃	〃 〃	16.6	(4.3)	—	にぶい橙色 10YR6/4 にぶい橙色 10YR5/3 にぶい橙色 10YR6/4	口縁部は外方に大きく開き、端部はナデ調整により垂下する面を成す。外面口縁直下に接合痕。ナデ調整。	
182	〃	〃	〃 〃	18.0	(9.4)	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 黒褐色 10YR3/1	口縁部は外反し、端部は丸く収める。胎土に径1～3mmの礫、チャートを含む。	
183	〃	〃	〃 〃	(16.0)	(5.4)	—	橙色 5YR6/6 〃 〃	胴部と口縁部の接合痕が顕著。口縁端部は強いナデにより外面が凹み、端部は垂下する面を成す。胎土に径6mm以下の礫を含む。	
184	〃	〃	〃 〃	(16.2)	(7.6)	—	橙色 7.5YR6/6 明褐色 7.5YR3/3 橙 7.5YR6/6	胴部と口縁部の接合痕が顕著。口縁端部は強いナデにより外面が凹み、端部は垂下する面を成す。内外面ハケ調整。胎土に径3mm以下の礫を含む。	
185	〃	〃	〃 〃	(15.8)	(11.7)	—	橙色 5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR6/4 橙色 5YR6/6	口縁端部は強いナデにより外面が凹み、端部は垂下する面を成す。内面ハケ、ナデ調整。胎土に径5.5mm以下の礫を含む。	
186	〃	〃	〃 〃	(21.4)	(7.8)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 灰 N4/0	口縁部は大きく外反し、端部は垂下して面を成す。タタキ成形後、ハケ調整。胎土に径3.5mm以下の礫、チャートを含む。	
187	〃	〃	〃 〃	(15.5)	21.9	(3.2)	橙色 7.5YR6/6 〃 オリーブ黒色 5Y3/1	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。僅かな平底。内外面ともにハケ調整。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
188	〃	〃	〃 〃	16.1	25.8	(2.4)	橙色 5YR6/6 にぶい赤褐色 5YR5/4 黒褐色 5YR2/1	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。底部は小さな平底。外面タタキ成形後、ナデ、ハケ調整。内面ハケ、ナデ調整。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
189	〃	〃	〃 〃	(15.0)	(24.1)	(5.0)	橙色 5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR7/4 黒色 10YR2/1	口縁部は「く」の字に外反し、端部はやや垂下する。外面タタキ成形後、ハケ、ナデ調整。内面ハケ調整。胎土に径4.5mm以下の礫を含む。	
190	〃	〃	〃 〃	(15.6)	(20.8)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR6/6 灰 N4/0	タタキ成形後、ハケ調整。内面下半は横位のハケ調整。上半はナデ調整。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
191	〃	〃	〃 〃	(18.0)	(7.7)	—	黄褐色 7.5YR7/8 にぶい黄橙色 10YR6/3 黄褐色 7.5YR7/8	外面タタキ成形後ハケ調整。内面はナデ調整。胎土に径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
192	〃	〃	〃 〃	(12.8)	(7.2)	—	橙色 5YR7/8 〃 黄灰色 2.5Y4/1	口縁部は外反し、端部は丸く収める。摩耗が著しい。外面の一部にタタキ目が残る。胎土に径2～5mmの礫、チャートを含む。	
193	〃	〃	〃 〃	(18.6)	(13.1)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR5/4 黄灰色 2.5Y5/1	口縁部は「く」の字に外反し、やや肥厚する。端部は面を成し、一部にハケ目が残る。外面タタキ目、内面は細かい単位のハケ調整。	
194	〃	〃	〃 〃	(20.4)	(14.6)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 灰色 N6/0	寸胴の胴部から口縁部がひらき頸部のくびれが小さい。口縁部は外反する。外面一部にハケ目が残る。5cm単位で粘土帯接合痕が残る。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
195	〃	〃	〃 〃	(15.7)	(11.4)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 明黄褐色 10YR7/6	口縁部は「く」の字に外反、端部は面を成す。非連続性のハケ調整。胎土は1～3mmの礫、チャートを含む。	
196	〃	〃	〃 〃	19.1	(10.4)	—	橙色 5YR6/6 〃 〃	タタキ成形。ナデ調整。胴部上位内面はナデ調整により凹む。胎土に3～5mmの礫、チャートを含む。	
197	〃	〃	〃 〃	—	(4.9)	5.0	黒褐色 2.5Y3/1 〃 〃	外底部は中央部が凹む。ナデ調整。胎土に径5mm以下の礫、チャートを含む。	
198	〃	〃	〃 〃	—	(4.2)	(4.0)	暗オリーブ灰色 5GY3/1 〃 〃	外底中央部は凹む。外面ハケ調整、内面ナデ調整。胎土に径1～2mmの砂、チャートを含む。	

遺物観察表 10 (199～220)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
199	I W 区	土器溜まり	弥生土器 甕	—	(10.6)	4.0	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR6/6 オリーブ黒色 5Y3/1	外底部は中央部が凹み、高台状を呈す。内外面ハケ調整。胎土に径1～3mmの礫を含む。	
200	〃	〃	〃	—	(5.1)	1.8	黄橙色 10YR8/6 にぶい橙色 5YR6/4 黄橙色 10YR8/6	平底の底部から胴部は内湾する。一部にハケ目。胎土に径2～5mmの礫、チャートを含む。	
201	〃	〃	〃	—	(3.2)	2.1	灰色 5Y4/1 浅黄色 2.5Y4/1 灰色 5Y4/1	僅かに残る平底から外方に立ち上がる。ハケ調整。胎土に径1～2mmの砂を含む。	
202	〃	〃	〃	—	(4.1)	2.0	黒色 7.5Y2/1 明褐色 7.5YR5/6 黒褐色 2.5Y3/1	平底から外方に立ち上がる。内外面ハケ調整。胎土に径1～2mmの砂を含む。	
203	〃	〃	〃	—	(3.8)	3.0	暗灰色 N3/ 橙色 7.5YR7/6 〃	外面タタキ目が僅かに残る。ハケ調整。平底。胎土に径1～2mmの砂を含む。	
204	〃	〃	〃	—	(4.5)	3.0	灰褐色 7.5YR5/3 にぶい赤褐色 5YR5/4 灰色 7.5Y5/1	底部は僅かに平底を呈する。ハケ調整。	
205	〃	〃	〃	—	(4.6)	2.3	橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR6/6 オリーブ黒色 5Y3/1	僅かな平底。単位の細かいハケ調整。煤付着。胎土に径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
206	〃	〃	〃	—	(6.1)	(2.4)	にぶい黄橙色 10YR6/4 〃 灰色 N4/0	外面ナデ調整。内面はハケ調整。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
207	〃	〃	〃	—	(5.7)	(3.4)	オリーブ黒色 7.5Y3/1 橙色 7.5YR6/6 オリーブ黒色 7.5Y3/1	外面は粗い単位のハケ調整。内面はナデ調整。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
208	〃	〃	〃	—	(5.5)	3.6	黄橙色 7.5YR8/8 〃 〃	平底から外方に開く。タタキ成形後、ハケ調整。内面はコテ当て状の痕。胎土に径3～5mm以下の礫、チャート、石英を含む。	
209	〃	〃	〃	—	(11.7)	2.5	黄橙色 7.5YR7/8 橙色 7.5YR7/6 黒褐色 2.5Y3/2	丸みを帯びた平底。ハケ調整。胎土に径1～4mm大の礫、チャートを含む。	
210	〃	〃	〃	—	(10.3)	3.0	にぶい橙色 7.5YR6/4 橙色 7.5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR6/4	ハケ調整。胎土に径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
211	〃	〃	〃	—	(11.5)	(3.0)	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい橙色 5YR6/4 灰色 N4/0	ハケ調整。外面は底部、内面は胴部中位からハケ目。胎土に径4mm以下の礫、チャートを含む。	
212	〃	〃	〃	—	(16.6)	3.0	橙色 5YR7/8 〃 褐灰色 7.5YR4/1	ハケ調整。胎土に径2～3mm大の礫、チャートを含む。	
213	〃	〃	〃	—	(6.3)	3.1	暗オリーブ灰色 5GY4/1 黄褐色 10YR8/6 暗オリーブ灰色 5GY4/1	タタキ成形後、ハケ調整。内面はナデ調整が施される。	
214	〃	〃	〃	—	(6.7)	3.6	橙色 7.5YR7/6 〃 黒 N2/	平底。外面ハケ調整、内面ナデ調整。胎土に径1～3mm以下の礫を含む。	
215	〃	〃	〃	—	(8.2)	3.4	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 灰色 N4/0	ハケ、ナデ調整。胎土に径3mm以下の礫、チャートを含む。	
216	〃	〃	〃	—	(9.0)	(4.4)	黒褐色 10YR3/1 にぶい橙色 7.5YR6/4 黒褐色 10YR3/1	平底から内湾して立ち上がる。内面ハケ調整。胎土に径3mm以下の礫を含む。	
217	〃	〃	〃	—	(7.5)	(4.0)	にぶい褐色 7.5YR6/3 にぶい褐色 7.5YR7/4 灰色 N4/0	平底。外底部までタタキ目残る。螺旋状のタタキ成形。胎土に径3mm以下の礫を含む。	
218	〃	〃	〃	—	(7.4)	2.2	明褐色 5YR5/6 にぶい褐色 7.5YR5/4 黒褐色 10YR3/1	粗いハケ調整。胎土に径3～5mm以下の礫を含む。	
219	〃	〃	〃	—	(8.1)	2.2	黒褐色 2.5Y3/1 にぶい黄色 2.5Y6/4 にぶい黄色 2.5Y6/4	僅かに平底を呈する。タタキ成形後ハケ調整、内面はナデ調整。胎土に径1～2mmの砂、チャートを含む。	
220	〃	〃	〃	—	(12.2)	3.0	黄橙色 10YR8/6 にぶい褐色 7.5YR7/4 黒色 N2/	タタキ成形後、ハケ調整。内面は縦方向のハケ調整。胎土に径1～3mm大の礫を含む。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
221	I W 区	土器溜まり	弥生土器 甕	—	(12.6)	—	にぶい黄橙色 10YR6/3 〃 灰色 N4/0	内外面ともに縦位のハケ調整。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
222	〃	〃	〃 〃	—	(20.0)	3.4	橙色 7.5YR7/6 にぶい黄褐色 10YR5/3 橙色 7.5YR7/6	外面胴部上半タタキ成形後、ハケ調整。内面ハケ、ナデ調整。平底。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
223	〃	〃	〃 〃	—	(17.4)	3.2	橙色 7.5YR6/6 〃 黒色 10YR2/1	僅かに平底を呈する。外面タタキ成形後、ハケ調整。内面ナデ調整。一部にハケ目残る。胎土に径1～3mmの礫、チャートを含む。	
224	〃	〃	〃 〃	—	(17.9)	3.4	黄橙色 10YR8/6 にぶい黄褐色 10YR6/3 —	平底。外底部の一部は剥離。外面タタキ成形後、ハケ調整。内面ハケ調整。	
225	〃	〃	〃 〃	—	(8.2)	4.4	にぶい黄褐色 10YR7/4 橙色 5YR7/6 オリブ黒色 7.5Y3/1	平底からやや膨らみをもって立ち上がる。内外面ハケ調整。胎土に径1～3mmの礫、チャート、石英を含む。	
226	〃	〃	〃 〃	—	(15.0)	(5.0)	にぶい橙色 7.5YR6/4 橙色 7.5YR7/6 灰色 N5/0	比較的厚い平底。外面タタキ成形後、ハケ調整。内面ナデ調整。胎土に径4mm以下の礫、チャートを含む。	
227	〃	〃	〃 〃	—	(22.0)	3.4	橙色 5YR6/6 橙色 2.5YR6/8 浅黄色 2.5Y7/4	摩耗著しい。内面ハケ、ナデ調整。平底。底部に僅かにタタキ目が残る。	
228	〃	〃	〃 〃	—	(11.5)	(4.0)	にぶい黄褐色 10YR7/4 橙色 7.5YR7/6 暗灰色 N3/0	僅かに平底を呈する。タタキ成形後ナデ調整。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
229	〃	〃	〃 〃	—	(13.7)	4.6	橙色 5YR6/8 橙色 7.5YR7/6 暗オリブ灰色 2.5GY4/1	外面タタキ成形後、ハケ調整。内面ハケ、ナデ調整。胎土に径4.5mm以下の礫を含む。	
230	〃	〃	〃 〃	—	(16.6)	4.6	にぶい褐色 7.5YR6/3 橙色 7.5YR6/6 褐灰色 7.5YR5/1	摩耗著しい。外面タタキ成形後ハケ調整。内面ナデ調整。平底。胎土に径3.5mm以下の礫を含む。	
231	〃	〃	〃 〃	—	(33.0)	6.6	灰色 5Y5/1 橙色 7.5YR6/8 〃	タタキ成形後、ハケ調整。外面胴部下半はナデ。内面は全体ハケ調整。径1.5mm以下の砂を含む。	
232	〃	〃	〃 〃	—	(5.1)	(2.8)	にぶい黄褐色 10YR6/4 橙色 5YR6/6 暗灰色 N3/0	タタキ成形により底部を平底にしており、明瞭にタタキ目を残す。胎土に径5mm以下の礫を含む。	
233	〃	〃	〃 〃	—	(7.0)	3.4	灰黄褐色 10YR4/2 〃 灰色 7.5Y4/1	タタキ成形により底部を平底にしており、明瞭にタタキ目を残す。胎土に径3.5mm以下の礫、チャートを含む。	
234	〃	〃	〃 〃	—	(2.7)	3.7	灰色 7.5Y5/1 にぶい黄褐色 10YR7/4 黒褐色 10YR3/1	タタキ成形により底部を平底にしており、明瞭にタタキ目を残す。胎土に径1～2mmの砂を含む。	
235	〃	〃	〃 〃	—	(6.2)	3.5	黄灰色 2.5Y4/1 黄褐色 7.5YR7/8 黄灰色 2.5Y4/1	外面ハケ調整。内面はナデ調整。胎土に径3～5mmの礫、チャート、石英を含む。	
236	〃	〃	〃 〃	—	(11.6)	(4.4)	黄褐色 7.5YR8/8 浅黄色 2.5Y7/4 灰色 7.5Y4/1	平底。タタキ成形後ハケ調整。外底部にもハケ目が残る。胎土に径1mmの砂を含む。	
237	〃	〃	〃 〃	—	(9.4)	3.8	にぶい橙色 5YR6/3 橙色 5YR6/6 灰色 N5/0	タタキ成形により底部を平底にしており、明瞭にタタキ目を残す。ハケ調整。内面はナデ調整。胎土に径4mm以下の礫を含む。	
238	〃	〃	〃 〃	—	(14.8)	3.2	橙色 7.5YR6/6 灰褐色 7.5YR5/3 暗灰色 N3/0	タタキ成形により底部を平底にしており、明瞭にタタキ目を残す。外面タタキ後、ハケ調整。内面ナデ調整。胎土に径2.5mm以下の礫を含む。	
239	〃	〃	〃 〃	(24.0)	(14.7)	(4.2)	浅黄色 2.5Y7/3 橙色 7.5YR7/6 黒 7.5YR2/1	平底。タタキ成形後、ハケ調整。胎土に3mmの礫を少量含む。	
240	〃	〃	〃 〃	—	(16.6)	3.4	にぶい黄褐色 10YR7/4 灰黄褐色 10YR5/2 黒色 N2/0	内外面ともにハケ調整。平底。胎土に径5mm以下の礫を含む。	
241	〃	〃	〃 〃	—	(19.5)	2.0	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/6 灰色 N4/0	外面タタキ成形後、ハケ調整。内面ハケ調整。僅かな平底。胎土に径3mm以下の礫を含む。	
242	〃	〃	〃 甕	—	(13.0)	—	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR6/6 にぶい橙色 7.5YR7/4	胎土に径5mm以下の礫、チャートを含む。	

遺物観察表 12 (243～264)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
243	I W 区	土器溜まり	弥生土器 甗	—	(10.6)	2.0	にぶい橙色 5YR6/4 橙色 7.5YR7/6 橙色 5YR6/6	底部に直径9mmの焼成前穿孔。内面ハケ調整。胎土に径2mm以下の砂、チャートを含む。	
244	〃	〃	〃	—	(5.5)	1.6	橙色 5YR6/6 〃 黒色 2.5Y2/1	直径7mmの焼成前穿孔。内面ハケ調整。胎土に径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
245	〃	〃	〃 鉢	(10.9)	4.7	4.3	橙色 5YR7/8 〃 橙色 7.5YR6/6	平底。体部は内湾する。外面ミガキ、内面は細かい単位の内面ハケ調整。コテ当て状に工具痕が残る。胎土に径0.5～1mmの砂を含む。	
246	〃	〃	〃	(12.0)	6.4	(6.8)	橙色 7.5YR6/6 〃 暗灰色 N3/0	体部は内湾し、口縁端部は面を成す。ラッパ状に開く低脚が付く。ハケ調整。脚部は指頭圧痕が残る。内底部は押圧により凹む。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
247	〃	〃	〃	—	(2.2)	(4.4)	橙色 7.5Y7/6 明黄褐色 10YR7/6 橙色 7.5YR7/6		
248	〃	〃	〃	(15.0)	(4.0)	—	橙色 7.5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR7/4 灰色 N4/0	胎土に径2mm以下の砂を含む。	
249	〃	〃	〃	—	(2.3)	5.0	橙色 7.5YR7/6 〃	平底から外方に立ち上がる。ナデ調整。胎土に径2～5mmの礫、チャートを含む。	
250	〃	〃	〃	(22.2)	(5.7)	—	橙色 7.5Y7/6 〃 暗灰色 N3/0	口縁部は僅かに外反し、端部は面を成す。外面タタキ成形、内面ナデ調整。胎土は径4mm以下のチャートを含む。	
251	〃	〃	〃	(21.0)	(4.1)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4 暗灰色 N3/0	口縁部は緩やかに外反し、端部は面を成す。内外面横方向の内面ハケ調整。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
252	〃	〃	〃	32.4	(4.3)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 浅黄色 7.5YR8/4	口縁部は緩やかに外反し、端部は面を成す。胎土は径3～5mmの礫、チャートを含む。	
253	〃	〃	鉄製品 鉄鏝	3.2	1.3	0.4	—	平釘状を呈し、先端部は細く尖る。鉄鏝の基部か。重量2.0g。	
254	〃	〃	石製品 投弾	5.7	5.4	4.0	—	砂岩製。	
255	〃	〃	〃 石鏝	2.7	1.5	0.4	—	平基式。サヌカイト。	
256	I E 区	P137	土師器 杯	10.8	3.6	6.0	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	体部は丸味を持つ。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
257	〃	〃	黒色土器 椀	—	(3.3)	—	黒色 N2/0 〃 〃	黒色土器 A 類。口唇部は尖り気味に仕上げる。口唇部直下に沈線状の凹み有り。	9c 末～ 10c 前
258	〃	P158	土師器 杯	(13.0)	3.3	(7.2)	浅黄褐色 7.5YR8/6 〃 〃	ベタ底からやや段を持ち上方に立ち上がる。回転ナデ調整。	
259	〃	〃	〃 杯脚部	—	(2.6)	(8.2)	橙色 7.5YR7/6 にぶい黄褐色 10YR6/4 橙色 7.5YR7/6	足高台。	
260	〃	P172	黒色土器 椀	—	(3.0)	—	暗灰色 N3/0 〃 〃	黒色土器 B 類。口縁内部に1条の沈線が施され、内面はヘラミガキ。楠葉型。	9c 末～ 10c 前
261	〃	〃	須恵器 椀	(17.8)	(3.8)	—	灰白色 N7/1 〃 〃	回転ナデ調整。口縁端部は外方に尖り気味に仕上げる。	
262	〃	P191	土師器 皿	(11.6)	1.7	(7.2)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部切離しは回転ヘラ切り。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
263	〃	〃	〃	—	(1.2)	(7.6)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部切離しは回転ヘラ切り。胎土に径0.5mmの砂、チャートを含む。	
264	〃	P222	〃 杯	12.1	3.2	8.0	にぶい橙色 7.5YR7/6 〃 〃	内底部は凹む。回転ナデ調整。底部切離しは回転ヘラ切り。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
265	I E 区	P222	土師器 杯	(13.6)	2.7	9.4	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	内底部は凹む。回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り。胎土に径 0.5 ~ 1mm 大の砂を含む。	
266	〃	P207	〃 皿	—	(0.8)	(5.8)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
267	〃	P213	〃 〃	(12.0)	1.7	(6.0)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。胎土に径 0.5 ~ 1mm 大の砂, チャートを含まず。	
268	〃	P189	〃 〃	—	(1.5)	(8.0)	橙色 5YR6/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。外面と内面の一部にタール付着有り。	
269	〃	P208	〃 杯	—	(1.6)	(5.6)	浅黄橙色 10YR8/3 〃 〃	円盤状の底部から斜上方に立ち上がる。回転ナデ調整。	
270	〃	P163	〃 〃	—	(1.5)	8.4	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	10c
271	〃	P169	〃 〃	(12.0)	2.5	(5.6)	にぶい橙色 7.5YR5/4	底部外面は剥離。内面体部の一部にタール付着有り。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
272	〃	P139	〃 〃	(12.4)	3.3	(6.6)	橙色 5YR7/6 にぶい黄橙色 10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR7/4	回転ナデ調整。内底面縁部はナデにより凹む。底部回転ヘラ切り。外面の一部にタール付着有り。	
273	〃	P188	〃 甗	(19.8)	(3.8)	—	明赤褐色 5YR5/6 〃 にぶい赤褐色 5YR4/4	丸味を持つ胴部から口縁部は短く直立する。口唇部は丸く収める。内面胴部の境目は横方向のナデにより段が生じる。胴部外面は指頭圧痕が顕著である。	
274	〃	P206	〃 〃	(3.2)	—	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	口縁端部は上下に拡張がみられ、外面に面を成す。外面は横方向の粗いハケ調整、内面はナデ調整。胎土に径 0.5 ~ 1mm 大の砂, チャートを含まず。	
275	〃	P234	〃 羽釜	(18.8)	(9.0)	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 〃 〃	口縁直下に鋳が付く。鋳端部及び口縁端部は面を成す。口縁部はヨコナデ調整。胴部は縦方向のハケ調整。胎土に径 0.5mm 大の砂, 長石, 雲母を含む。	
276	〃	P142	黒色土器 椀	(14.8)	4.7	(8.6)	黒褐色 2.5Y3/1 橙色 7.5YR6/6 黒褐色 2.5Y3/1	黒色土器 A 類。断面三角形の高台から内湾して立ち上がる。	
277	〃	P210	須恵器 杯	—	(1.3)	(6.6)	灰白色 7.5Y7/1 灰色 N6/1 灰黄褐色 10YR6/2	断面四角形の短い高台が付く。畳付は沈線状に凹む。回転ナデ調整。	
278	〃	P192	〃 蓋	—	(14.0)	(1.4)	灰白色 5Y7/1 〃 〃	丸底。外面はタタキ目と粗い単位のハケ状工具による調整。内面はナデと指頭圧痕が顕著である。	
279	〃	P174	〃 甗	—	(7.3)	—	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	胎土に径 5mm 以下の礫を含む。	
280	〃	P194	土製品 土錘	4.1	1.8	0.5	にぶい黄橙色 10YR6/4	管状土錘。	
281	〃	SK14	土師器 椀	(12.0)	4.9	7.2	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	足高台。断面逆三角形の高台が付く。体部は直線的に立ち上がる。回転ナデ調整。	
282	〃	〃	黒色土器 〃	(14.8)	(4.5)	—	黒色 N2/0 にぶい黄橙色 10YR6/4 〃	黒色土器 A 類。口縁部は強いヨコナデにより尖り気味に仕上げる。口縁内面に一条の沈線。内面は密なヘラミガキ、外面口縁部はヨコナデ調整、体部は指頭圧痕。	
283	〃	SK17	土師器 杯	—	(0.7)	(7.0)	にぶい黄橙色 10YR7/3 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
284	〃	〃	黒色土器 椀	—	(1.4)	(8.6)	暗灰色 N3/0 橙色 5YR6/6 〃	黒色土器 A 類。断面三角形の低い高台が付く。内底部は平行にヘラミガキ。胎土に径 0.5 ~ 1mm 大の砂, 雲母を含む。	
285	〃	SK20	土師器 杯	—	(2.5)	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	ベタ底から斜上方に立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
286	〃	〃	〃 〃	—	(1.8)	(7.6)	にぶい黄橙色 10YR7/3 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。内底部にタール付着。	

遺物観察表 14 (287～308)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
287	I E 区	SK22	土師器 杯	(11.2)	2.8	(7.8)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
288	I W 区	I 層	陶器 片口鉢	15.0	9.4	7.0	灰白色 5Y8/1 灰白色 5Y8/1 暗赤褐色 5YR3/3	外面胴部中位から内面全体に白土化粧。口縁内面と上面の一部は釉を削り取る。外面「伊野町④小野醬油商」見込み「山羽」の屋号。	近代
289	〃	〃	統制陶器 皿	(12.0)	(3.8)	(5.8)	灰白色 5Y8/1 〃 〃	統制陶器丸形皿。見込みに山と樹木が呉須により描かれている。高台内に「ト5」の統制番号がみられる。	
290	〃	II 層	土師質土器 〃	—	(1.1)	(3.6)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ロクロ成形。底部回転系切り。	
291	〃	〃	陶器 〃	(12.6)	(1.6)	—	灰褐色 5YR4/2 〃 灰色 5Y4/1	肥前系。鉄釉。	
292	〃	〃	〃 〃	—	(1.8)	—	明オリブ灰色 5GY7/1 明オリブ灰色 5GY7/1 灰白色 7.5Y7/1	肥前系。断面逆三角形の低い高台がつく。内面蛇ノ目釉剥ぎ。透明感のある灰釉が薄く施され、貫入が入る。	
293	〃	〃	〃 〃	(13.0)	3.6	(4.0)	灰オリブ色 5Y6/2 灰オリブ色 5Y6/2 灰黄色 2.5Y6/2	唐津端反型。口縁内面は沈線状に凹む。高台内は兜巾状に削り出す。見込みに砂目。	
294	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(3.1)	—	オリブ褐色 2.5Y5/3 〃 にぶい黄色 2.5Y6/3	口径が大きい直縁皿。肥前IV期。	1690～ 1780年
295	〃	〃	〃 碗	—	(3.6)	(4.6)	灰オリブ色 7.5Y5/3 〃 浅黄色 2.5Y7/3	唐津灰釉碗。高台部分は露胎。高台内は兜巾状に削り出す。肥前II期。	1610～ 1650年
296	〃	〃	〃 〃	(12.5)	4.8	(4.0)	暗褐色 7.5YR3/3 黒褐色 7.5YR3/2 黄灰色 2.5Y5/1	丸形碗。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。外面は高台脇まで施釉。	
297	〃	〃	〃 〃	(12.2)	(3.0)	—	黒褐色 10YR2/2 〃 灰黄色 2.5Y7/2	唐津鉄釉碗。口縁部は外反する。	17c
298	〃	〃	〃 〃	—	(4.0)	(5.2)	浅黄色 2.5Y7/4 〃 淡黄色 2.5Y8/4	尾戸焼丸形碗。高台脇より高台内を深く削り込む。灰釉が全面施釉され畳付の釉は削り取る。細かな貫入が認められる。0.5～1mm大の細かい貫入が入る。	
299	〃	〃	〃 搦鉢	(20.4)	(4.1)	—	暗灰黄色 2.5Y5/2 〃 〃	関西系搦鉢。内面に11条一単位の条線。口縁部内面は沈線状に凹む。	
300	〃	〃	磁器 瓶	—	(3.9)	(4.0)	灰白色 10Y8/1 にぶい黄橙色 10YR7/3 灰白色 10Y8/1	肥前系鶴首瓶。外面草花文。畳付は釉を削り取る。肥前V期。	1780～ 1860年
301	〃	〃	〃 〃	—	(8.5)	(11.2)	灰白色 10Y8/1 明緑灰色 7.5GY8/1 灰白色 10Y8/1	油壺。外面に草花文。肥前II～2期。	1630～ 1650年
302	〃	〃	鉄銭	直径 2.5	穿径 0.6	—	—	重量 3.0g。	
303	〃	III 層	陶器 皿	14.0	(2.1)	—	灰白色 7.5Y7/2 〃 灰黄色 2.5Y6/2	唐津灰釉皿。口縁端部内面は凹み、端部は上方に尖る。全体的に薄く施釉される。	
304	〃	〃	〃 〃	(12.4)	3.8	4.1	灰黄色 2.5Y6/2 浅黄色 2.5Y7/4 〃	唐津灰釉皿。体部中位から口縁部にかけて外反し、内面に段が生じる。見込みに砂目。体部内面から口縁外面まで灰釉が薄く施される。	
305	〃	〃	〃 〃	(13.2)	(2.7)	—	釉緑灰色 10G5/1 にぶい黄色 2.5Y6/3 灰黄色 2.5Y7/2	内野山窯。内底見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、三日月状の目跡。銅緑釉。	
306	〃	〃	〃 碗	12.8	(5.6)	—	褐色 7.5YR4/3 〃 灰黄色 2.5Y7/2	唐津鉄絵。全体的に褐色釉が施され、口縁部外面及び体部内面の一部に鉄釉による文様。肥前III期。	1650～ 1690年
307	〃	〃	〃 大皿	—	(2.6)	(10.0)	灰黄色 2.5Y6/2 にぶい褐色 7.5YR5/3 黄灰色 2.5Y6/1	断面逆三角形の高台が付く。高台部分は脇よりも内面が深く削り込まれる。内面は透明釉が施され白土化粧によりハケ目文様を描く。見込み中央に銅緑釉、外面は露胎。	1780～ 1860年
308	〃	〃	〃 皿	—	(0.9)	5.6	浅黄色 2.5YR7/3 〃 淡黄色 2.5Y8/3	瀬戸美濃系灰釉皿。内面見込みは青い釉調の釉葉が輪状に施される。断面四角形の低い高台が付く。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
309	I W 区	Ⅲ層	陶器 碗	—	(2.1)	(4.4)	黒褐色 5YR2/1 浅黄色 2.5YR7/3 〃	瀬戸美濃系天目茶碗。断面逆台形の低い高台が付く。	
310	〃	〃	〃 〃	—	(3.6)	(7.4)	黒褐色 5YR2/2 〃 にぶい黄橙色 10YR7/3	瀬戸美濃系天目茶碗。高台部欠損。内面全体から体部下 半まで鉄釉。胎土に径 0.5～1mm 大の砂を含む。	
311	〃	〃	〃 壺	(12.6)	(2.6)	—	暗灰黄色 2.5Y4/2 にぶい黄褐色 10YR5/3 灰黄色 2.5Y7/2	口縁部は水平に折り曲げ、端部は面を成す。外面から口縁 部内面の一部まで褐色釉。	
312	〃	〃	白磁 皿	(12.5)	(2.7)	—	灰白色 5Y7/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。全体的に透明釉が薄く施さ れ、一部ピンホールが認められる。肥前系。	
313	〃	〃	〃 〃	—	(1.7)	(2.4)	灰白色 10Y8/1 〃 〃	くり底。全体的に透明釉。細かな貫入が入る。	
314	〃	〃	磁器 鉢	15.0	8.3	8.0	灰白色 10Y8/1 〃 〃	角鉢。外面三又、菱形文。肥前V期。	1780～ 1860年
315	〃	V層	土師質土器 皿	6.6	1.5	5.0	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。酸化焙焼成。	
316	〃	〃	陶器 皿	(32.8)	(3.7)	—	灰白色 7.5Y7/2 〃 浅黄色 2.5Y7/3	折縁大皿の口縁部片。口縁端部は外側に折り返し、端部は 面を成す。全体的に薄く自然釉がかかり、ピンホールが認 められる。瀬戸美濃系灰釉陶器。	
317	〃	〃	〃 甕	—	(6.2)	—	灰色 7.5Y5/1 灰オリーブ色 5Y5/2 灰色 7.5Y5/1	常滑焼。外面に自然釉がかかり、格子目のスタンプ文。	
318	〃	〃	青花 皿	—	(1.7)	4.0	灰白色 5Y7/2 〃 にぶい黄橙色 10YR7/3	漳州窯系。くり底。周縁部に砂付着がみられる。胎土は陶 質で、内面見込みには草花風の文様。	
319	〃	〃	石製品 投弾	7.1	5.9	4.8	—	砂岩。	
320	〃	Ⅵ層	土師器 皿	(10.0)	1.7	6.4	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
321	〃	〃	〃 〃	—	(1.3)	6.4	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
322	〃	〃	〃 椀	(13.6)	(2.7)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい橙色 2.5YR6/4 灰色 N4/0	口縁部は外反し、回転ナデ調整。胎土に径 1mm 以下の砂を 含む	
323	〃	〃	〃 〃	(19.4)	(2.9)	—	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	口縁部は外反し、端部は肥厚する。回転ナデ調整。胎土に 径 1mm 以下の砂を含む	
324	〃	〃	須恵器 杯	11.1	(3.0)	—	灰白色 10Y7/1 灰色 10Y6/1 灰黄色 2.5Y6/2	口縁端部は僅かに外反する。回転ナデ調整。焼成良。	
325	〃	〃	〃 〃	—	(1.7)	9.0	灰オリーブ色 5Y6/2 灰白 5Y7/2 〃	杯Bタイプ。断面逆四角形の高台が付く。回転ナデ調整。	
326	〃	〃	〃 蓋	11.6	(2.1)	—	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	天井部欠損。回転ナデ調整。焼成良。胎土は細砂粒。杯G 蓋。	
327	〃	〃	〃 瓶	(5.0)	(1.9)	—	浅黄色 2.5Y7/3 〃 黄灰色 2.5Y5/1	口縁端部は上方に拡張し、ナデ調整によって仕上げる。	
328	〃	〃	〃 壺	—	(4.6)	—	灰色 10Y5/1 〃 暗赤灰色 5R4/1	把手付壺。口縁端部は欠損。ナデ調整。頸部下半の一部に タタキ目と斜状の刻みが僅かに残る。	
329	〃	〃	〃 〃	—	(4.3)	(13.0)	灰色 N6/ 青灰色 5B5/1 褐灰色 10YR5/1	「ハ」の字に開く高台が付く。粘土接合部に隙間が生じ、 底部の一部が彫れる。	
330	〃	〃	〃 〃	—	(3.8)	(12.2)	灰色 10Y6/1 灰色 N6/0 灰色 10Y6/1	「ハ」の字に開く高台が付く。	

遺物観察表 16 (331～352)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
331	I W 区	VI 層	須恵器 甕	—	(2.6)	—	オリーブ灰色 2.5GY5/1 灰色 7.5Y6/1	外面に平行タタキ目、内面は工具の調整痕が横方向に連続する。	
332	〃	〃	〃 〃	—	(4.6)	17.0	灰白色 7.5Y7/1 灰白 5Y7/1	外面胴部下半にタタキ目、内面底部に粘土帯の接合痕が認められる。	
333	〃	〃	鉄製品 板状鉄製品	4.4	3.5	0.5	—	重量 11.0g。	
334	〃	〃	鉄滓	3.5	3.9	2.3	—	重量 21.1g。	
335	〃	〃	〃	6.0	4.8	2.4	—	重量 93.6g。	
336	〃	〃	土製品 土錘	5.0	2.0	0.6	灰黄色 2.5Y6/2	管状土錘。重量 20.0g。	
337	〃	VII 層	弥生土器 甕	(11.4)	(8.7)	—	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/3 暗灰色 N3/0	口縁部は緩やかに外反する。胴部外面の一部にタタキ目とハケ調整痕。内面はヘラ状工具による横方向のナデ調整。胎土に径 4.5mm 以下の礫を含む。	
338	〃	〃	〃 〃	(13.8)	(7.0)	—	黄橙色 7.5YR8/8 黒褐色 7.5YR3/1	口縁部は「く」の字に外反し、尖り気味に仕上げる。外面胴部と口縁部の一部にタタキ目。胎土に径 2～5mm 大の礫、チャートを含む。	
339	〃	〃	〃 〃	(14.4)	(5.0)	—	にぶい黄橙色 10YR7/2 にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。外面胴部と口縁部に横方向を基調とするハケ調整。胎土に径 2mm 以下の砂を含む。	
340	〃	〃	〃 〃	15.9	(6.8)	—	灰黄色 2.5Y7/2 にぶい黄橙色 10YR7/3 黒色 7.5YR2/1	口縁部は胴部から間延びしながら外反し、端部は面を成す。外面縦方向のハケ調整、内面横方向のハケ調整。胎土に径 0.5～1mm 大の砂、チャートを含む。	
341	〃	〃	〃 〃	16.0	(8.4)	—	橙色 7.5YR6/6 黒褐色 7.5YR3/1	口縁部は上方に延び、端部は外反する。外面は胴部から口縁部までタタキ目。内面はナデ調整。胎土に径 3～5mm 大の礫、チャートを含む。	
342	〃	〃	〃 〃	—	(7.5)	4.0	明黄褐色 10YR6/6 橙色 7.5YR7/6 オリーブ黒色 5Y3/1	僅かに平底を呈する。ナデ調整後、縦方向のハケ調整。胎土に径 2～3mm 大の礫を含む。	
343	〃	〃	〃 〃	—	(15.0)	3.2	灰色 N4/0 にぶい橙色 7.5YR7/4 灰色 N4/0	僅かに平底を呈する。タタキ成形の後、縦方向のハケ調整。胎土に径 4mm 以下の礫を含む。	
344	〃	〃	〃 〃	(30.8)	(10.3)	—	暗灰色 N3/0 灰色 10Y4/1	内面の粘土帯の接合痕が顕著である。全体的にナデ調整、口縁端部は平らな面を成す。胎土に径 5mm 以下の礫を含む。	
345	〃	〃	石製品 砥石	16.9	7.7	7.7	—	砂岩。一側面に使用痕が認められる。	
346	〃	〃	〃 叩石	10.1	9.2	6.0	—	中央部に敲打による凹みが認められる。	
347	I E 区	II 層	土師質土器 焙烙鍋	—	(3.0)	—	にぶい橙色 7.5YR7/3 黒褐色 10YR3/1 にぶい橙色 7.5YR7/3	口縁部はやや肥厚する。ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕。	17c
348	〃	〃	陶器 皿	(15.0)	(2.0)	—	灰白色 5Y7/2 にぶい黄褐色 10YR6/3 灰白色 5Y7/2	口縁部外面直下まで灰釉を掛け流しにより薄く施釉。肥前 II 期。	1610～ 1650 年
349	〃	〃	〃 〃	—	(2.3)	(4.2)	にぶい黄褐色 10YR5/4 浅黄色 2.5Y7/3	削り出し高台。高台内は兜巾状に削る。内面見込み蛇ノ目釉剥ぎ、砂目。釉調はにぶい黄褐色。肥前 III 期。	1650～ 1690 年
350	〃	〃	〃 〃	—	(3.2)	(11.2)	灰白色 5Y7/1 にぶい黄色 2.5Y6/3	断面四角形のしっかりした高台を持つ。内面は白土化粧によるハケ塗りが施され、見込みに鉄釉で文様を描く。肥前 III 期。	1650～ 1690 年
351	〃	〃	〃 碗	—	(2.3)	5.0	黒褐色 2.5Y3/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	白土化粧による象嵌。断面逆台形状の高台が付き、全体に鉄釉が施される。内面見込みに菊花文、外面にはこよみ手文。肥前 II 期	1610～ 1650 年
352	〃	〃	〃 〃	(13.6)	(6.0)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 灰黄色 2.5Y7/2	黄釉碗。細かな貫入が入る。尾戸焼。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
353	I E区	II層	陶器 碗	—	(5.1)	(4.6)	浅黄色 2.5Y7/4 〃 淡黄色 2.5Y8/3	高台から丸味をもって立ち上がる。全体的に黄釉が施される。尾戸焼。	
354	〃	〃	〃 鉢	(25.5)	(8.4)	—	灰黄褐色 10YR5/2 暗灰黄色 2.5Y5/2 灰褐色 7.5YR5/2	口縁部は外側に折り曲げ、端部は方形を呈する。内面白土化粧によるハケ塗り。外面体部下半は露胎である。肥前IV期。	1690～ 1780年
355	〃	〃	〃 播鉢	(27.0)	(4.7)	—	灰赤色 10R4/2 〃 灰 N5/0	関西系播鉢。10条一単位の条線がみられる。	
356	〃	〃	〃 〃	(30.2)	12.8	(13.0)	明赤褐色 2.5YR5/6 〃 〃	口縁端部は丸味を持ち、内面は沈線状に凹む。内面は9条一単位の条線を口縁部直下まで施し、口縁部内面のヨコナデ調整によって摩り消す。	
357	〃	〃	〃 甕	—	(6.4)	(23.4)	暗褐色 7.5YR3/3 黒褐色 7.5YR3/1 にぶい赤褐色 5YR4/3	全体的に鉄釉が施される。	
358	〃	〃	磁器 碗	—	(2.1)	(5.4)	灰白色 5GY8/1 〃 灰白 N8/0	体部外面に草花文、高台脇に二重界線。高台内には界線とくずれた文字が薄い呉須により施される。肥前IV期。	1690～ 1780年
359	〃	〃	〃 筒形碗	—	(1.8)	(4.4)	灰白色 7.5Y8/1 〃 〃	素描き。外面は高台外面二重界線、斜格子文。内面は五弁花文と二重界線。肥前V期。	1780～ 1860年
360	〃	〃	〃 皿	—	(2.1)	(8.2)	灰白色 N8/0 〃 〃	見込みに山水楼閣文。蛇ノ目凸型高台。肥前IV期後～V期。	1730～ 1860年
361	〃	〃	石製品 石錘	15.0	5.0	3.1	—	両側面に抉り。緑色片岩製。	
362	〃	〃	〃 石臼	18.5	14.5	8.2	—	砂岩製。	
363	〃	〃	古銭					寛永通宝。「文」の背文字。	
364	〃	III層	陶器 皿	(14.8)	2.8	(8.6)	灰白 5Y7/2 〃 灰白 5Y8/1	全体的に灰釉が施される。端面は抉りが入り、稜花皿風である。瀬戸美濃系。	
365	〃	〃	〃 碗	(12.2)	(4.2)	—	黒褐色 5YR2/1 〃 灰白色 5Y7/1	瀬戸美濃系の天目茶碗。全体的に透明感のある鉄釉が施される。口縁部は口鏝釉。	
366	〃	〃	〃 播鉢	—	(7.0)	(10.4)	にぶい褐色 7.5YR5/3 灰色 7.5Y4/1 灰色 10Y5/1	内面12条を基調とする条線が施され、ロクロ目が顕著である。	
367	〃	〃	青磁 碗	—	(3.9)	—	オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 2.5Y8/1	外面に剣先蓮弁文。	
368	〃	〃	青花 皿	—	(1.9)	(3.4)	灰白色 2.5GY8/1 〃 灰白色 2.5Y8/1	くり底。外面芭蕉葉文。見込み二重界線、くずれた十字花文がみられる。二次被熱により透明釉が溶ける。青花皿C群。	
369	〃	〃	〃 〃	(9.0)	2.2	(5.0)	灰白色 5GY8/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	端反皿。外面唐草文、内面見込みに十字花文と二重界線がみられる。青花皿B群。	
370	〃	〃	〃 碗	—	(3.1)	—	灰白色 2.5GY8/1 〃 灰白色 N8/0	外面唐草文、内面アラベスク文と二重界線、高台外面には三重の界線がみられる。青花皿C群。	
371	〃	〃	〃 杯	(9.9)	(2.3)	—	灰白色 2.5GY8/1 〃 灰白色 N8/0	口縁部内外面に観世水文帯。	
372	〃	IV層	土師器 杯	(14.4)	(3.3)	(8.8)	浅黄褐色 7.5YR8/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
373	〃	〃	〃 椀	—	(3.6)	(8.0)	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	足高の高台が「ハ」の字に開く。底部中央部は厚くなる。	
374	〃	〃	黒色土器 椀	(14.0)	5.2	(8.2)	暗灰色 N3/0 にぶい黄褐色 10YR7/4 〃	黒色土器A類。断面逆三角形の高台が付く。体部は内湾し、端部は尖り気味に仕上げる。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ。	

遺物観察表 18 (375～396)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
375	I E 区	IV層	黒色土器 椀	—	(3.2)	(7.6)	暗灰色 N3/0 にぶい黄褐色 10YR7/4 浅黄褐色 10YR8/3	黒色土器 A 類。断面逆三角形の高台が付く。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ。底部中央部は丸味を帯びる。	
376	〃	〃	〃	—	(1.2)	(9.2)	黒 N2/0 にぶい黄褐色 10YR7/4	低い高台が付く。内面は密なヘラミガキ。	
377	〃	〃	〃	—	(1.0)	(7.4)	暗灰色 N3/0 明黄褐色 10YR7/6 にぶい黄褐色 10YR7/4	黒色土器 A 類。断面三角形の低い高台が付く。底部中央部は接地する。内面は平行に密なヘラミガキ。	
378	〃	〃	緑釉陶器	—	(3.9)	—	灰白色 7.5Y7/2 灰白色 7.5Y8/1	京都洛北系。内面体部中位に段がある。全体的に薄く緑釉がかかる。	
379	〃	〃	土師器 甕	(26.0)	(4.1)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁部は「く」の字に外反し、端部は強いヨコナデにより上方に向き尖り気味に仕上げる。ヨコナデ調整。胎土に径 1mm 大の砂、雲母片を含む。	
380	〃	〃	〃	(27.4)	(8.3)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部は「く」の字に外反する。外面板状工具によるナデ調整、口縁部内面は横方向のハケ調整。口縁部と胴部の接合部は指頭による押圧痕とナデ調整が顕著。	
381	〃	〃	〃	(18.0)	(5.1)	—	にぶい黄褐色 10YR6/4	口縁部は外反し、端部は上方に拡張し外面に面を成す。口縁部はナデ調整。外面胴部の一部に横方向のハケ調整。在地系。	
382	〃	〃	〃	—	(11.7)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/3	外面はタタキ成形後横方向のハケ調整。胎土に 2mm 以下のチャートを含む。在地系。	10c
383	〃	〃	〃	(19.0)	(3.8)	—	黒褐色 10YR3/2 明赤褐色 5YR5/6	胴部から口縁部は段を持ちながら外反する。胴部外面は指頭圧痕がみられる。胎土に径 0.5～1mm 大の砂、長石、雲母片を含む。搬入品。	
384	〃	〃	〃 羽釜	(24.0)	(3.6)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁直下に鈔が付き、鈔端部は尖り気味に仕上げ上方に向く。口縁端部はヨコナデ調整により面を成す。胴部外面に指頭圧痕。胎土に径 0.5～1mm 大の砂、石英を含む。	
385	〃	〃	〃	(25.6)	(8.7)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい赤褐色 5YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	摂津型。口縁部を内側に引き出し尖り気味に仕上げる。口縁部は水平に付き、端部は面を成す。胴部外面は鈔接合部の下端にヘラ状工具による縦方向のナデ調整。	
386	〃	〃	石製品 砥石	8.4	5.3	3.4	—	仕上砥。三側面に使用痕がみられる。	
387	〃	VII層	土師器 杯	—	(1.2)	(6.6)	にぶい黄褐色 10YR7/4	円盤状の薄い底部から立ち上がる。底部回転系切り。内底部は沈線状に凹むロクロ目が残る。	
388	〃	〃	〃	—	(2.1)	(6.8)	灰褐色 7.5YR4/2 にぶい黄褐色 10YR6/4	ベタ底から段を持って立ち上がる。内底部は凹む。底部回転ヘラ切り。	
389	〃	〃	〃 椀	—	(2.5)	(5.6)	灰白色 2.5Y8/2	円盤状高台。内底部は凹む。底部回転系切り。	
390	〃	〃	〃	—	(3.0)	(8.0)	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR4/4	足高高台。胎土に径 1～2mm 大の砂を含む。	
391	〃	〃	黒色土器	—	(1.3)	(8.4)	暗灰色 N3/0 にぶい黄褐色 10YR6/4 暗灰色 N3/0	黒色土器 A 類。断面三角形の低い高台が付く。底部は丸味を持つ。	
392	〃	〃	緑釉陶器	—	(2.3)	—	浅黄色 5Y7/3 灰白色 5Y7/1	京都系。全体的に薄く緑釉が施される。	
393	〃	〃	土師器 羽釜	(21.0)	(6.2)	—	にぶい黄褐色 10YR6/4	口縁端部横に鈔が付く。ナデ調整。胴部外面に縦方向のハケ調整、その他はナデ調整。胎土に径 1～2mm 大の砂、チャート、石英を含む。摂津 C 型。	
394	〃	〃	〃	(14.8)	(6.8)	—	にぶい黄褐色 10YR7/3 橙色 5YR6/6	口縁端部横に鈔が付く。口縁端部は内側に拡張され、水平な面を成す。胴部外面は縦方向のハケ調整、その他はナデ調整。摂津 C 型。	
395	〃	〃	〃	(17.6)	(8.4)	—	灰黄褐色 10YR4/2 にぶい黄褐色 10YR5/4	口縁端部からやや下がった所に鈔が付き、端部は丸味を帯びる。口縁端部は内傾。全体的にナデ調整。胎土に径 3～5mm 大の礫、チャート、石英を含む。摂津 C 型。	
396	〃	〃	〃	(21.4)	(8.8)	—	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	寸胴で直線的に立ち上がる。口縁端部は水平な面を成す。鈔は欠損しており、形状は不明。全体的にナデ調整、外面は指頭圧痕。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
397	I E 区	VII 層	土師器 甕	(24.4)	(3.9)	—	にぶい褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR5/4 〃	口縁部は外反し、端部は面を成す。外面ナデ調整、内面横 方向のハケ調整。胎土に径 0.5～1mm 大の砂、チャート、石 英を含む。	
398	〃	〃	〃 〃	(18.0)	(5.2)	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい赤褐色 5YR5/4 〃	口縁部は「く」の字に外反する。ヨコナデ調整。胴部は指 頭圧痕が顕著。胎土に径 0.5～1mm 大の砂、石英、雲母を含 む。	
399	〃	〃	〃 〃	(17.6)	(7.2)	—	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい橙色 5YR6/4 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張する。外 面胴部は横方向のハケ調整。	
400	〃	〃	土製品 土錘	3.2	1.3	1.1	橙色 7.5YR7/6	管状土錘。	古代
401	〃	〃	須恵器 杯	(13.8)	3.3	(9.9)	灰白色 N7/0 〃 〃	体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上 げる。回転ナデ調整。	
402	〃	〃	〃 蓋	—	(1.2)	—	黄灰色 2.5Y6/1 〃 〃	扁平なつまみ。僅かに宝珠の形状を残す。	
403	〃	〃	〃 壺	—	(4.4)	(10.4)	灰色 5Y6/1 〃 〃	断面四角形の高台が付く。高台脇はヘラケズリにより沈 線状に凹む。回転ナデ調整。	
404	〃	〃	〃 甕	—	(3.0)	—	灰色 5Y6/1 〃 灰白 5Y7/1	口縁部はナデ調整により上方に拡張し、端部を尖り気味 に仕上げる。自然釉がかかる。	
405	〃	〃	〃 〃	(28.4)	(3.6)	—	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	口縁部は上方に拡張され端部は水平な面を成す。外面に 櫛描による波状文。	
406	〃	〃	〃 〃	—	(9.8)	—	灰色 N6/0 〃 灰色 N4/0	甕の頸部片。外面に 2 条の沈線の間に櫛描きによる波状 文がみられる。	
407	〃	〃	鉄製品 鉄鎌	(9.8)	(3.6)	2.9	—	杏仁形。重量 30.7g。	
408	〃	〃	〃 鉄鎌	13.3	9.2	0.6	—	着柄部分は折り返しをしている。重量 87.1g。	
409	〃	〃	〃 鉈	(8.4)	(4.3)	1.00	—	菱形を呈す。先端部は尖る。重量 37.4g。	
410	〃	〃	〃 釘	5.9	1.9	1.4	—	重量 16.7g。	
411	〃	〃	〃 不明	4.4	3.5	0.9	—	環状部分から下に扁平な突起が付く。重量 21.5g。	
412	〃	〃	鉄滓	4.3	3.9	1.7	—	重量 33.4g。	
413	II 区	SB9P4	土師質土器 杯	(12.2)	3.9	(4.2)	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	回転ナデ調整。内面はロクロ目顕著。内底部にタール付 着。外底部は籐状圧痕残す。	
414	〃	SB9P3	鉄製品 鉄鎌	(3.7)	(1.6)	0.3	—	重量 2.5g。	
415	〃	SB11P4	東播系須恵器 鉢	—	(4.0)	(14.0)	灰白色 5Y7/2 暗灰黄色 2.5Y5/2 灰白色 5Y7/2	外面煤付着。酸化焙焼成で瓦質的な仕上がり。	
416	〃	P5	土師質土器 杯	12.3	3.5	8.5	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部切り離しは不明。	
417	〃	〃	〃 〃	14.8	5.0	8.4	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。底部は糸切 りのズレにより段が生じる。焼成良。胎土は細砂粒。	
418	〃	P88	陶器 碗	10.6	5.2	6.4	暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 〃 浅黄色 2.5Y7/4	高台部欠損。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は外反 し玉縁状を呈する。全体に鉄釉。瀬戸美濃系。	

遺物観察表 20 (419～440)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
419	Ⅱ区	P88	青花 皿	—	(0.8)	(6.6)	明緑灰色 10GY8/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	見込みに二重界線、中に草花文。高台は軸を削り取る。景德鎮窯系。	
420	〃	P209	須恵器 杯	(12.4)	(1.6)	—	灰色 10Y5/1 〃 〃	回転ナデ調整。焼成良。	
421	〃	P223	〃 〃	13.0	(2.7)	—	黄灰色 2.5Y5/1 〃 灰白色 7.5Y7/1	回転ナデ調整。焼成良。	
422	〃	P337	〃 〃	—	(2.0)	6.4	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。酸化焰焼成。胎土は細砂粒。	
423	〃	P198	土師器 甕	(22.3)	(4.9)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6 〃	胴部外面タタキ成形後、横方向のハケ調整。口縁部内面横方向のハケ調整。胎土は径4.5mm以下の礫、チャートを含む。在地系。	
424	〃	P128	土師質土器 小皿	(6.2)	(1.7)	—	にぶい橙色 10YR6/4 褐灰色 7.5YR5/1 にぶい橙色 10YR6/4	口縁部は短く外反し、一部被熱。	
425	〃	P121	〃 〃	(7.2)	1.7	(5.4)	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	ベタ底から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。	
426	〃	P171	〃 杯	(13.0)	(2.7)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。体部下半の一部にタール附着。底部回転糸切り。	
427	〃	P194	〃 〃	—	(1.4)	5.6	浅黄褐色 10YR8/4 にぶい黄褐色 10YR7/3 黒色 2.5Y2/1	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
428	〃	P14	〃 〃	—	(2.1)	(7.2)	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	摩耗が著しく、調整不明。	
429	〃	P62	〃 〃	(12.3)	4.4	(7.0)	明黄褐色 10YR7/6 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。内外面の一部にタール附着。	
430	〃	P12	瓦質土器 鍋	—	(3.2)	—	灰色 N6/0 黒色 7.5Y2/1 灰色 N6/0	外面指頭圧痕。内面ナデ調整。外面煤附着。酸化焰焼成。	
431	〃	P38	〃 〃	—	(1.6)	(11.6)	淡黄色 5Y8/2 〃 灰色 5Y6/1	底部片。外面粘土帯接合部に指頭圧痕がみられる。内面ナデ調整。	
432	〃	P52	〃 〃	—	(3.2)	(17.4)	灰白色 5Y7/1 灰色 5Y5/1 灰白色 5Y7/1	内型成形によって底部外面に段が生じたものと思われる。外面指頭圧痕。内面ナデ調整。	
433	〃	P146	陶器 皿	—	(1.7)	(11.0)	灰オリーブ色 5Y6/2 にぶい黄褐色 5YR5/3 浅黄色 2.5Y7/3	折縁皿底部。外面露胎。内面は灰釉。内底部に重ね焼痕。瀬戸美濃系。	
434	〃	P1	〃 甕	—	(6.2)	—	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 〃	常滑焼。外面肩部に格子目状のスタンプ文、2条平行のヘラ記号がみられる。	
435	〃	P48	鉄製品 刀子	11.5	2.3	0.6	—	重量 16.9g。	
436	〃	P4	〃 鉄鏝	(7.5)	(3.0)	0.6	—	方頭式。羽子板状を呈す。重量 23.5g。	
437	〃	P373	石製品 叩石	11.0	9.7	7.1	—	砂岩。中央部は敲打により凹む。	
438	〃	埋納遺構	陶器 壺	15.6	32.2	17.1	—	備前焼。口縁端部は断面三角形に玉縁を持つ。外面底部と胴部の接合部は凹線が入る。肩部に波状文。外面全体にロクロ目を残し、外底部は下駄状の圧痕を残す。胴径 26.9cm。備前V期。	
439	〃	〃	銅鏡	面径 9.1	面厚 0.2	—	—	和鏡。州浜松樹双雀鏡。周縁項厚 0.7cm、周縁幅 0.3cm。	
440	〃	〃	土師質土器 皿	12.4	3.4	5.8	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。銭附着痕がみられる。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
441	Ⅱ区	埋納遺構	土師質土器 皿	11.4	3.4	5.1	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。タール痕付着がみられる。	
442	〃	〃	〃 〃	11.3	3.3	5.3	にぶい黄橙色 10YR7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
443	〃	〃	〃 〃	11.3	3.0	5.6	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。タール痕付着がみられる。	
444	〃	〃	〃 〃	11.1	3.3	5.3	淡黄色 2.5Y8/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
445	〃	〃	〃 〃	11.4	3.5	5.7	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
446	〃	〃	〃 〃	11.6	3.3	4.8	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
447	〃	〃	〃 〃	11.4	3.3	5.1	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
448	〃	〃	〃 〃	11.3	3.3	5.4	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
449	〃	〃	〃 〃	11.0	3.4	5.7	黄灰色 2.5Y5/1 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。タール痕付着がみられる。	
450	〃	〃	〃 〃	11.4	3.4	4.3	淡黄色 2.5Y8/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
451	〃	〃	〃 〃	10.7	3.2	5.4	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
452	〃	〃	〃 〃	11.4	3.2	5.3	灰黄色 2.5Y6/2 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。タール痕及びアワの付着がみられる。	
453	〃	〃	〃 〃	11.6	3.6	5.0	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。銭付着痕がみられる。	
454	〃	〃	〃 〃	11.2	3.3	5.1	にぶい黄橙色 10YR7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
455	〃	〃	〃 〃	11.5	3.2	5.3	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
456	〃	〃	〃 〃	11.7	3.4	5.0	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。タール痕付着がみられる。	
457	〃	〃	〃 〃	11.3	3.0	5.3	淡黄色 2.5Y8/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
458	〃	〃	〃 〃	11.3	3.4	5.1	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
459	〃	〃	〃 〃	11.2	3.5	5.2	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ロクロ成形。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
460	〃	SK1	〃 杯	—	(1.6)	(5.0)	明黄褐色 10YR7/6 〃 〃	灯明皿。回転ナデ調整。底部回転糸切り。内面にタール付着。	
461	〃	〃	〃 〃	—	(2.1)	(6.0)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。胎土は細砂粒。	
462	〃	〃	〃 〃	—	(1.5)	(6.6)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	胎土は細砂粒。	

遺物観察表 22 (463～484)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
463	Ⅱ区	SK1	土師質土器 杯	—	(2.1)	6.9	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
464	〃	〃	〃 〃	—	(2.4)	(6.2)	明黄褐色 10YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。体部内面は剥離。胎土は細砂粒。	
465	〃	〃	〃 〃	—	(1.8)	(8.5)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
466	〃	〃	青磁 碗	(16.0)	(1.8)	—	オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 10Y8/1	鎗蓮弁文碗。	
467	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(3.8)	—	明オリーブ灰色 2.5GY7/1 〃 灰白色 7.5Y7/1	鎗蓮弁文碗。二次被熱により、器壁がピンホール状になる。青磁Ⅰ～Ⅳ類。	
468	〃	SK2	陶器 播鉢	28.2	12.5	13.4	明赤褐色 2.5YR5/6 にぶい赤褐色 5YR5/4 明赤褐色 2.5YR5/6	関西系播鉢。胎土に径7mm以下の礫、長石、花崗岩を含む。	
469	〃	SK7	土師質土器 鍋	—	(8.6)	胴径 (27.4)	橙色 7.5YR7/6 暗オリーブ色 5Y4/3 橙色 7.5YR7/6	播磨型。胴部内面に粘土帯接合痕。外面は全体的に煤付着。胎土は径1mm以下の砂を含む。	
470	〃	〃	青磁 碗	—	(2.9)	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2 〃 灰白色 7.5Y7/1	内面に劃花文がみられる。	
471	〃	SK9	瓦質土器 鍋	—	(2.4)	—	暗オリーブ色 5Y4/1 〃 灰白 7.5Y7/1	内面の体部と底部の境目に接合痕がみられる。底部の器壁は薄く仕上げる。	
472	〃	SK18	石製品 砥石	16.8	6.1	6.1	—	流紋岩製。	
473	〃	SK19	土師質土器 杯	—	(2.1)	6.7	黄橙色 10YR8/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。胎土は細砂粒、径1mm大の黒色砂を含む。	
474	〃	〃	鉄銭	直径 2.3	穿径 0.6	—	—	重量1.6g。	
475	〃	SK21	瓦質土器 鍋	(19.7)	(4.8)	—	にぶい黄色 2.5Y6/4 灰白色 7.5Y8/1 灰色 N4/0	膨らみのある胴部から口縁部は直立気味になる。口縁部は横ナデ調整、胴部は指頭圧痕が残る。胎土は細砂粒。	
476	〃	SK23	土師質土器 杯	—	(1.6)	(4.3)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。内面にタール付着。	
477	〃	SK25	東播系須恵器 鉢	—	(2.3)	(7.8)	灰色 N6/0 〃 〃	底部片。胎土に径2mm以下の砂を含む。	
478	〃	〃	青磁 碗	—	(3.2)	(8.2)	オリーブ灰色 5GY6/1 〃 灰色 N6/0	劃花文。	
479	〃	〃	石製品 叩石	9.8	9.3	4.7	—	花崗岩。一側面に敲打痕が残る。	
480	〃	SD3	土師質土器 杯	—	(3.0)	(7.8)	明黄褐色 10YR7/6 〃 〃	底部に段を持つ。回転ナデ調整。底部切離しは回転糸切りによる。内面にタール付着。	
481	〃	SD2	須恵器 〃	—	(1.2)	(6.8)	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	内底部にロクロ目がみられる。	
482	〃	SD4	瓦質土器 播鉢	—	(6.1)	—	黄灰色 2.5Y5/1 〃 〃	内面に4条一単位の条線がみられる。	
483	〃	SD4	〃 鍋	—	(2.9)	—	灰黄色 2.5Y7/2 灰色 5Y6/1 灰黄色 2.5Y7/2	口縁端部は面を成す。ヨコナデ調整。酸化焙焼成。	
484	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(3.9)	—	灰色 7Y6/1 灰白色 2.5Y7/1 灰色 7.5Y6/1	口縁端部は内側へツマミ出し、側面が凹線状に凹む。ヨコナデ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
485	Ⅱ区	SD5	土師器 椀	—	(1.3)	(6.4)	浅黄橙色 10YR8/3 〃 灰色 7.5Y4/1	形骸化した円盤状高台。	
486	〃	〃	須恵器 壺	(10.2)	(2.7)	—	灰色 10Y4/1 灰色 10Y5/1 灰黄色 2.5Y6/2	口縁端部は上方に拡張される。回転ナデ調整。外面口縁部直下に斜上のキザミ。	
487	〃	〃	〃 甕	—	(6.5)	—	黄灰色 2.5Y6/1 灰黄色 10YR5/2 灰黄色 2.5Y6/2	格子状のタタキ目。	
488	〃	〃	〃 〃	—	(5.8)	—	灰色 5Y6/1 〃 〃	格子状のタタキ目。内面同心円状の当て具痕。	
489	〃	〃	〃 〃	—	(5.3)	—	灰色 N6/0 灰色 10Y5/1 灰褐色 7.5YR5/2	外面平行タタキがみられる。内面同心円状の当て具痕をナデ消す。	
490	〃	SD8	弥生土器 壺	(15.4)	(4.8)	—	橙色 7.5YR6/6 明赤褐色 5YR5/6 橙色 7.5YR6/6	口縁部は外方に延び、端部は丸みを帯びる。胎土に径 3.5mm以下の礫、チャートを含む。	
491	〃	〃	〃 鉢	(19.0)	8.5	4.0	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	平底から内湾して立ち上がり、口縁端部は面を成す。内外面ハケ調整。胎土に径 6mm以下の礫を含む。	
492	〃	SX1	土師質土器 皿	(9.7)	1.6	—	橙色 5YR6/6 〃 〃	内湾しながら短く立ち上がる。回転ナデ調整。	
493	〃	〃	〃 杯	12.1	4.2	4.0	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	ベタ底から内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。ロクロ成形。底部回転糸切り。内底部は凹む。	
494	〃	〃	〃 〃	(12.1)	(2.0)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	ロクロ成形。	
495	〃	P250	緑釉陶器 皿	—	(1.5)	(5.8)	灰白色 5Y7/2 〃 にぶい黄橙色 10YR7/3	円盤状高台。全面施釉。胎土は径 1mm以下の砂を含む。京都系。	
496	〃	〃	石製品 叩石	8.1	8.0	4.8	—	砂岩。一部に敲打痕が残る。	
497	〃	P399	弥生土器 甕	(16.4)	(6.8)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい褐色 7.5YR6/3 黄褐色 2.5Y5/3	口縁部は「く」の字に外反し、ヨコナデ調整が施され端部は面を成す。胴部内面はヘラ状工具による横方向のケズリ。胎土に径 2.5mm以下の礫、チャートを含む。	
498	〃	P416	〃 〃	—	(4.0)	(1.6)	にぶい黄橙色 10YR7/4 浅黄色 2.5Y7/3 〃	底部は僅かに平らな部分を残す。外面に僅かにタタキ目が残る。内面ナデ調整。胎土は径 3～5mm大の礫、チャートを含む。	
499	〃	P409	黒色土器 椀	—	(2.9)	—	黒色 N2/0 橙色 5YR6/6 〃	黒色土器 A 類。内面ヘラミガキ。胎土は径 1mm以下の砂を含む。	
500	〃	P412	須恵器 甕	—	(5.6)	—	灰色 5Y6/1 灰褐色 7.5YR5/2 灰色 5Y6/1	外面格子状にタタキ目が残る。内面に当て具痕有り。酸化焰焼成。	
501	〃	P420	土師器 羽釜	(18.6)	(5.6)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 〃 〃	水平な鋳が付く。端部はナデにより凹線状に凹む。口縁部は内傾し、端部は沈線条に凹む。胴部外面縦方向のハケ調整。内面の一部にもハケ目。	
502	〃	P440	〃 〃	(21.6)	(4.0)	—	明灰黄色 2.5Y5/2 〃 にぶい赤褐色 5YR5/4	鋳端部は外傾し面を成す。口縁部は上方に拡張し、端部は内傾する面を成す。口縁部内面は強いナデにより、沈線状に凹む。胎土に径 0.2～3mm大の礫を含む。摂津系。	
503	〃	P295	土製品 土錘	(3.0)	1.6	0.5	明赤褐色 5YR5/6	管状土錘。重量 5.2g。	
504	〃	P302	〃 〃	3.4	1.2	0.4	橙色 7.5YR6/6	管状土錘。重量 4.5g。	
505	〃	P421	〃 〃	4.0	1.1	0.3	明黄褐色 10YR7/6	管状土錘。重量 3.4g。	
506	〃	P319	銅製品 鈔帯金具	(3.4)	(3.0)	1.0	—	一方向に長方形の臍穴がみられ、片隅が剥離する。裏側は鋌状の突起が付く。重量 20.4g。	

遺物観察表 24 (507～528)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
507	Ⅱ区	P278	石製品 砥石	5.3	6.7	3.1	—		
508	〃	P398	〃 叩石	10.5	9.8	4.2	—		
509	〃	SK61	土製品 土錘	4.1	1.1	0.3	にぶい黄橙色 10YR7/4	管状土錘。重量 4.8g。	
510	〃	Ⅱ層	陶器 皿	—	(1.6)	4.4	灰オリーブ色 5Y6/8 灰黄色 2.5Y7/2	唐津灰釉皿。見込みに4ヶ所の砂目有り。高台畳付に砂付着がみられる。	
511	〃	〃	〃 〃	—	(2.3)	(5.2)	灰白色 7.5Y8/1 にぶい黄橙色 10YR7/3	断面長方形の高台が付く。高台脇より内側を深く削り込む。内面から外面体部下半まで白土化粧。肥前系。	
512	〃	〃	〃 〃	—	(2.2)	(7.2)	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5GY8/1 浅黄色 2.5Y7/3	内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。中央部は銅緑釉。外面は灰白色を呈した透明釉が薄く施される。内野山窯。	
513	〃	〃	〃 〃	—	(2.6)	4.8	灰褐色 7.5YR7/3 黄灰色 2.5Y6/1	唐津鉄釉皿。内面蛇ノ目釉剥ぎ。アルミナ砂痕が認められる。高台脇より内側を深く削り取る。	
514	〃	〃	〃 碗	—	(3.1)	(5.1)	浅黄色 5Y7/4 灰白色 2.5Y8/2	灰釉碗。高台は尖り気味に仕上げ、畳付は釉を削り取る。他は全面施釉。尾戸焼。	
515	〃	〃	〃 〃	10.3	6.8	4.3	褐色 7.5YR4/4 灰白色 N8/0	瀬戸美濃系天目茶碗。褐釉地に黒褐釉により文様が描かれる。高台脇のケズリが深い。	17c
516	〃	〃	磁器 皿	(15.8)	(2.4)	—	灰白色 10Y8/1	内面に唐草文。肥前系。	17c 後
517	〃	〃	〃 鉢	—	(5.5)	—	灰白色 10Y8/1	八角鉢。外面に梅花文。肥前系。	
518	〃	〃	土師質土器 泥面子	径 2.2	厚さ 0.5	—	橙色 7.5YR7/6	桐文がスタンプされる。	
519	〃	〃	古銭					寛永通宝。	
520	〃	〃	石製品 石臼	24.6	16.7	8.7	—	上臼。上面は凹み、内面にハツリ痕が顕著にみられる。臼面は凹みを持ち、軸受け穴は欠損する。ものくぼりの凹みは縁辺につく。花崗岩製。	
521	〃	Ⅲ層	土師質土器 杯	(11.8)	3.4	(4.3)	橙色 7.5YR7/6	ロクロ成形。底部回転糸切り。	
522	〃	〃	〃 〃	(12.8)	2.9	(4.2)	橙色 5YR6/6	ロクロ成形。底部回転糸切り。胎土は細砂粒。	
523	〃	〃	〃 〃	—	(1.6)	4.2	橙色 7.5YR6/6	底部円柱造りで外面に回転糸切り痕。	
524	〃	〃	〃 甕	(17.6)	(2.2)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4	口縁端部を上方に拡張する。ヨコナデ調整。胎土に径 0.5mm以下の砂を含む。紀伊型甕の口縁部に類似。	
525	〃	〃	〃 羽釜	(23.8)	(5.4)	—	橙色 7.5YR7/6	張りのある胴部から口縁部は内湾する。断面三角形の短い鑊が付く。口縁端部はやや内側に傾き面を成す。外面にタタキ目。播磨型。	
526	〃	〃	〃 〃	21.2	(4.1)	—	橙色 7.5YR7/6	張りのある胴部から口縁部は内湾する。断面三角形の短い鑊が付く。口縁端部はやや内側に傾き面を成す。播磨型。	
527	〃	〃	瓦質土器 鉢	(20.4)	(5.2)	—	灰白色 7.5Y7/1 灰色 N4/0 灰白色 7.5Y7/1	口縁端部はナデ調整により外反する。胴部外面は指頭圧痕、内面はナデ調整。	
528	〃	〃	〃 播鉢	(24.0)	(3.9)	—	灰色 7.5Y6/1 灰色 N4/0 灰色 7.5Y6/1	口縁部はヨコナデ調整により端部を上方に尖り気味に仕上げ、外傾する面を成す。中央部は凹む。内面に4条の櫛状工具による条線を施す。外面は指頭圧痕が残る。	

番号	調査区	遺構層位	器種器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
529	Ⅱ区	Ⅲ層	瓦質土器 播鉢	(21.4)	(6.2)	—	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	口縁部は外反し端部は外傾する面を成す。口縁部は強いヨコナデ調整により外面体部の境目と内面が凹む。外面は指頭圧痕、内面はナデ調整、4条の条線を施す。	
530	〃	〃	〃 鍋	(16.2)	(4.4)	—	灰白色 7.5Y7/1 灰色 7.5Y6/1 灰白色 7.5Y7/1	口縁部はヨコナデ調整。端部は面を成し、中央部は凹む。外面は指頭圧痕、内面はナデ調整。	
531	〃	〃	〃 〃	(18.8)	(4.9)	—	灰色 N5/0 灰色 N4/0 灰色 N5/0	膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部は上方に向く。体部外面は指頭圧痕。口縁部はヨコナデ調整。	
532	〃	〃	〃 〃	(18.2)	(3.4)	—	灰白色 5Y7/1 灰色 10Y5/1 灰白色 5Y7/1	膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部は上方に向く。体部外面は指頭圧痕。口縁部はヨコナデ調整。	
533	〃	〃	〃 〃	(19.0)	(3.7)	—	灰色 10Y6/1 灰白色 10Y8/1 〃	膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、口縁部は上方に向く。体部外面は指頭圧痕。口縁部はヨコナデ調整。	
534	〃	〃	〃 〃	(19.6)	(4.0)	—	灰白色 7.5Y7/1 灰色 5Y4/1 〃	膨らみのある体部から口縁部にかけて内湾し、端部は尖り気味に仕上げる。体部外面は指頭圧痕。口縁部はヨコナデ調整。	
535	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(5.2)	—	灰白色 10Y8/1 灰色 N4/0 灰白色 10Y8/1	端部は尖り気味に仕上げる。口縁外面に粘土帯貼付、やや肥厚する。胴部は内面ナデ、外面は指頭圧痕。	
536	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(4.8)	—	灰黄褐色 10YR6/2 黄灰色 2.5Y6/1 灰白色 2.5Y7/1	口縁部外面に粘土帯貼付、やや肥厚する。口縁内面にタール附着。口縁部はヨコナデ調整、胴部外面は指頭圧痕が残る。内面はナデ調整。	
537	〃	〃	〃 〃	(23.4)	(6.4)	—	灰白色 5Y8/1 灰色 5Y5/1 灰白 5Y8/1	体部はあまり張りが無く、口縁部は長く内湾気味に仕上げる。ヨコナデ調整。外面は指頭圧痕。	
538	〃	〃	〃 〃	(16.8)	(3.8)	—	灰白色 5Y7/1 にぶい黄褐色 10YR5/3 灰色 5Y5/1	口縁部は短く外反する。ヨコナデ調整。胴部外面は指頭圧痕。煤付着がみられる。胎土に径1mm以下の砂を含む。	
539	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(4.0)	—	灰白色 5Y7/1 灰色 5Y5/1 灰白色 5Y7/1	口縁部はヨコナデ調整。端部は面を成し、中央部は凹む。外面は指頭圧痕、内面は横位のハケ調整。	
540	〃	〃	〃 〃	(20.3)	(3.9)	—	灰白色 7.5Y8/1 暗灰黄色 2.5Y5/2 灰白色 7.5Y8/1	体部外面に右斜上の指頭圧痕が連続し、内型成形により体部下半は器壁が薄くなる。口縁部及び内面はナデ調整により丁寧に仕上げる。	
541	〃	〃	〃 〃	(24.0)	(6.2)	—	灰白色 5Y8/1 〃 〃	体部外面に指頭圧痕。口縁部及び内面はナデ調整により丁寧に仕上げる。胎土に径2.5mm以下の礫を含む。	
542	〃	〃	〃 羽釜	(21.2)	(8.5)	—	浅黄色 2.5Y7/3 灰黄色 2.5Y6/2 浅黄色 2.5Y7/3	河内型羽釜。水平な鋸が付き、口縁部はやや内傾しながら上方に延びる。口縁部はナデ調整、内面は横方向のハケ調整。胴部外面は鋸直下に横方向のケズリ。	
543	〃	〃	東播系須恵器 鉢	(23.6)	(5.5)	—	灰色 5Y5/1 〃 〃	口縁部は上下に拡張され玉縁状を呈す。東播系Ⅲ期。	
544	〃	〃	〃 〃	24.2	(3.4)	—	灰色 N6/1 灰白色 7.5Y7/1 〃	口縁部は玉縁状を呈する。東播系Ⅲ期。	
545	〃	〃	〃 〃	(22.2)	(3.9)	—	灰色 7.5Y6/1 暗灰黄色 2.5Y5/2 灰色 7.5Y6/1	口縁部は玉縁状を呈する。酸化焰焼成、瓦質に近い。東播系Ⅲ期。	
546	〃	〃	〃 〃	(23.0)	(2.6)	—	浅黄色 2.5Y7/3 にぶい黄色 2.5Y6/3 浅黄色 2.5Y7/3	口縁端部は玉縁状を呈する。胎土に径1mm以下の砂を含む。東播系Ⅲ期。	
547	〃	〃	〃 〃	(28.0)	(2.8)	—	灰色 7.5Y6/1 黄灰色 2.5Y4/1 灰色 7.5Y6/1	口縁部は玉縁状を呈する。胎土に径1mm以下の砂を含む。東播系Ⅲ - b期。	
548	〃	〃	〃 〃	(29.4)	(7.8)	—	灰白色 5Y7/2 〃 〃	口縁部は玉縁状を呈する。内外面ともにナデ痕が顕著である。胎土に径2mm以下の砂を含む。東播系Ⅲ - b期。	
549	〃	〃	陶器 皿	—	(1.2)	(11.0)	灰白色 7.5Y7/2 灰褐色 5YR5/2 淡黄色 2.5Y8/3	瀬戸美濃系灰釉皿。内面は全面施釉、外面底部脇は露胎。底部回転糸切り。	
550	〃	〃	〃 播鉢	(21.0)	(3.3)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい赤褐色 5YR4/3 にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁端部は水平な面を成し、中央部が凹む。胎土に径5mm以下の礫を含む。備前Ⅲ期。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
551	Ⅱ区	Ⅲ層	陶器 播鉢	—	(4.0)	—	灰褐色 7.5YR5/2 にぶい赤褐色 2.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁部はやや外傾する面を成し、僅かに面の拡張がみられる。胎土に径 3mm以下の礫を含む。備前Ⅲ期。	
552	〃	〃	〃 壺	—	(4.6)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3 灰黄褐色 10YR5/2 黄灰色 2.5Y6/1	光沢のある褐色を呈す。外面の一部に叢灰釉。内面頸部と胴部の接合部はヨコナデ調整により内側へ突き出す。胎土に 0.5mm大の白色砂と黒色砂を含む。	
553	〃	〃	〃 花入	—	(9.8)	(11.4)	灰赤色 10R4/2 〃 灰色 7.5Y6/1	備前焼。平底から胴部下半が膨らみ、上位に向かって窄む。外面は板状工具によるナデ調整、内面はロクロ目が顕著。胎土に径 1.5mm以下の砂を含む。	
554	〃	〃	〃 甕	(42.2)	(5.6)	—	にぶい赤褐色 5YR5/3 灰白色 5Y7/2 にぶい橙色 7.5YR6/4	備前焼。口縁端部は玉縁状を呈する。外面は自然釉が二次被熱により溶け、白濁する。	
555	〃	〃	〃 〃	(33.4)	(6.7)	—	にぶい褐色 7.5YR6/3 〃 明赤褐色 5YR5/6	常滑焼。口縁部は N 字状に上下に拡張し、下端は欠損する。胎土に径 7mm以下の礫を含む。常滑 6a 期。	
556	〃	〃	〃 〃	(43.2)	(14.4)	—	にぶい赤褐色 5YR5/4 灰黄褐色 10YR5/2 灰黄色 2.5Y6/2	口縁部縁帯は垂下し、頸部に接合する。常滑 9 型式。	
557	〃	〃	〃 〃	—	(4.6)	(18.0)	灰白色 5Y7/2 灰黄色 2.5Y6/2 灰白色 5Y7/2	常滑焼。外面は板状工具によるナデ。	
558	〃	〃	青磁 皿	—	(1.3)	4.5	灰色 10Y6/1 灰黄色 2.5Y6/2 灰白色 7.5Y7/1	同安窯系青磁皿。内面見込みに櫛描文。外底部はケズリ痕が顕著。	
559	〃	〃	〃 碗	(17.8)	(2.9)	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2 〃 灰白色 7.5Y8/1	外面無文。内面に劃花文。	
560	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(2.0)	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2 〃 灰白色 7.5Y7/1	口縁部は内湾する。外面に櫛描による縦方向の条線。内面に界線。同安窯系。	
561	〃	〃	〃 〃	(16.0)	(2.9)	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2 〃 灰白色 7.5Y7/1	全体的に薄い釉が施される。内面に櫛描による劃花文。同安窯系。	
562	〃	〃	〃 〃	(16.0)	(3.1)	—	緑灰色 7.5GY6/1 〃 灰白色 10Y8/1	外面に竊蓮弁文。龍泉窯系。	
563	〃	〃	〃 〃	—	(3.7)	—	オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 10Y8/1	外面に竊蓮弁文。龍泉窯系。	
564	〃	〃	〃 〃	—	(2.6)	—	緑灰色 5G6/1 〃 灰白色 7.5Y8/1	外面に竊蓮弁文。龍泉窯系。	
565	〃	〃	〃 〃	—	(3.4)	(5.0)	オリーブ灰色 10Y6/2 〃 灰白色 10Y8/1	全面施釉。高台内面は蛇ノ目状に釉を削り取る。無文 D 類碗。	
566	〃	〃	〃 〃	(11.6)	(2.7)	—	オリーブ黄色 5Y6/3 〃 淡黄色 5Y8/3	外面に線描による細蓮弁文。胎土はやや陶質である。	
567	〃	〃	〃 不明	—	(3.3)	—	灰オリーブ色 5Y4/2 〃 灰白色 5Y7/1	内面に葉脈状の陰刻文、外面に八卦文が陰刻される。	
568	〃	〃	白磁 皿	—	(1.0)	(5.4)	灰白色 5Y7/2 〃 灰白色 5Y7/1	内面見込みに櫛描文と片切彫りによる文様。全面施釉。外底部は露胎。	
569	〃	〃	〃 〃	—	(0.9)	(5.5)	明オリーブ灰色 2.5GY7/1 〃 灰白色 2.5GY8/1	内面見込みに櫛描文と片切彫りによる文様。ベタ底。底部脇は釉剥ぎ。	
570	〃	〃	〃 〃	—	(2.0)	(8.4)	灰白色 10Y8/1 〃 灰白色 N8/0	高台畳付の釉を削り取る。白磁皿 E 群。	
571	〃	〃	〃 碗	(16.9)	(2.9)	—	灰白色 7.5Y7/1 〃 灰白色 10Y8/1	外面体部下半は露胎。他は全面施釉。	
572	〃	〃	土製品 土錘	3.2	1.1	0.5	橙色 5YR6/6	管状土錘。重量 3.6g。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
573	Ⅱ区	Ⅲ層	土製品 土錘	3.5	1.1	0.3	灰白色 2.5Y8/2	管状土錘。重量 3.4g。	
574	〃	〃	〃	3.5	1.3	0.3	橙色 7.5YR7/6	管状土錘。重量 4.1g。	
575	〃	〃	〃	3.6	1.1	0.3	にぶい橙色 5YR7/4	管状土錘。重量 3.9g。	
576	〃	〃	〃	3.7	0.9	0.3	灰色 7.5Y4/1	管状土錘。重量 3.4g。	
577	〃	〃	〃	4.0	1.1	0.3	橙色 2.5YR6/6	管状土錘。重量 3.6g。	
578	〃	〃	〃	4.4	1.1	0.3	灰色 7.5Y4/1	管状土錘。重量 5.3g。	
579	〃	〃	〃	5.2	1.5	0.4	にぶい黄橙 10YR6/3	管状土錘。重量 9.8g。	
580	〃	〃	〃	5.0	1.1	0.3	にぶい赤褐色 5YR5/3	管状土錘。重量 6.0g。	
581	〃	〃	〃	5.0	1.2	0.4	にぶい橙色 2.5YR6/4	管状土錘。重量 6.6g。	
582	〃	〃	銅製品 筭	(12.8)	(1.2)	0.3	—	重量 15.3g。「〇」文の彫金が施される。	
583	〃	〃	〃 不明	4.6	6.4	0.9	—	重量 58.6g。	
584	〃	〃	鉄製品 板状鉄器	5.6	2.2	0.9	—	短辺が湾曲する。重量 241g。	
585	〃	〃	〃 釘	6.3	0.7	0.8	—	角釘。重量 8.8g。	
586	〃	〃	〃	10.9	2.0	1.4	—	角釘。重量 38.8g。	
587	〃	〃	鉄滓	6.4	4.4	2.5	—	重量 59.8g。	
588	〃	〃	〃	5.3	4.6	2.3	—	重量 110.0g。	
589	〃	〃	石製品 石鍋	(22.0)	(2.2)	—	黒色 N2/0 〃 灰色 N6/0	滑石。断面四角形の鑊を削り出す。	
590	〃	〃	〃 砥石	15.2	6.6	12.7	—	流紋岩。一側面を仕上砥として使う。	
591	〃	〃	〃	8.5	7.3	4.4	—	流紋岩。一側面を仕上砥として使う。	
592	〃	〃	〃	7.4	7.6	1.9	—	流紋岩。被熱し赤褐色を呈す。	
593	〃	Ⅵ層	須恵器 杯	(12.0)	(2.6)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 〃 〃	回転ナデ調整。	
594	〃	〃	〃	(15.0)	(2.8)	—	灰色 5Y6/1 〃 灰オリーブ色 5Y6/2	回転ナデ調整。	

遺物観察表 28 (595～616)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
595	Ⅱ区	Ⅵ層	須恵器 蓋	(13.8)	(1.5)	—	灰色 7.5Y6/1 灰白色 5Y7/2 灰色 7.5Y6/2	外面に自然釉が付着する。	
596	〃	〃	〃 〃	—	(1.3)	—	灰色 N6/0 〃 〃	偏平なつまみ。内面はナデ調整。内面を硯に転用か。	
597	〃	〃	〃 甕	(16.0)	(3.5)	—	灰色 7.5Y6/1 〃 暗灰黄色 2.5Y4/2	口縁端部は水平に拡張し面を成す。回転ナデ調整。	
598	〃	〃	〃 〃	—	(5.8)	—	灰色 7.5Y5/1 〃 褐灰色 10YR4/1	口縁端部は欠損する。外面胴部は平行のタタキ目が残る。内面はナデ調整。	
599	〃	〃	土師器 皿	(14.8)	2.2	(11.6)	灰色 7.5Y5/1 淡黄色 2.5Y8/3 灰色 7.5Y5/1	口縁端部内面は沈線条に凹む。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
600	〃	〃	〃 〃	(13.5)	2.6	(8.8)	淡黄色 2.5Y8/4 〃 黄灰色 2.5Y5/1	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
601	〃	〃	〃 杯	(11.9)	5.1	7.5	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部ヘラ切り。	
602	〃	〃	〃 〃	—	(1.1)	6.2	にぶい黄橙色 10YR6/4 〃 〃	ベタ底。底部ヘラ切り。	
603	〃	〃	〃 碗	—	(2.3)	—	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	足高高台碗底部。高台欠損。回転ナデ調整。	
604	〃	〃	〃 杯	(16.7)	6.1	(7.7)	にぶい黄橙色 10YR7/4 にぶい黄橙色 10YR6/3 にぶい黄橙色 10YR7/4	内面の一部にヘラミガキ。高台はやや内側に付く。外面にタール付着。胎土に径2.5mm以下の礫を含む。杯Bタイプ。	
605	〃	〃	黒色土器 碗	—	(1.6)	7.4	黒褐色 10YR3/1 にぶい黄橙色 10YR6/4 黒褐色 10YR3/1	内面ヘラミガキ。断面三角形の低い高台が付く。一部欠損。	
606	〃	〃	緑釉陶器 皿	—	(1.8)	5.8	浅黄色 2.5Y7/4 〃 灰白色 5Y7/1	断面四角形の高台が付く。京都系。	
607	〃	〃	〃 碗	—	(3.1)	(4.8)	浅黄色 5Y7/3 浅黄色 2.5Y7/3 にぶい黄橙色 10YR7/4	円盤状高台。京都系。	
608	〃	〃	〃 〃	(11.9)	(2.0)	—	灰オリーブ色 7.5Y6/2 〃 灰白色 7.5Y6/1	器壁薄い。オリーブ黒色を呈した釉が全体に薄く施される。	
609	〃	〃	〃 〃	(12.0)	(3.1)	—	オリーブ黄色 5Y6/3 〃 灰白色 5Y5/1	器壁薄い。全体的にオリーブ黄色を呈した釉が薄く施される。	
610	〃	〃	〃 〃	(14.2)	(2.9)	—	淡黄色 5Y8/3 淡黄色 2.5Y8/3 〃	口縁部は外反する。	
611	〃	〃	土師器 羽釜	(11.4)	(3.0)	—	にぶい赤褐色 5YR5/4 〃 〃	ナデ調整。胎土は径0.5mm大のチャート、長石が含まれる。摂津C型。	
612	〃	〃	〃 〃	(30.0)	(5.7)	—	にぶい黄橙色 10YR7/3 にぶい橙色 7.5YR7/4 〃	鋳端部は下方に向く。口縁端部は水平な面を成す。胎土は径0.2～3mm大のチャート、石英が含まれる。摂津C型。	
613	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(3.3)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	摂津C型。	
614	〃	〃	〃 〃	(21.2)	(4.9)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3 〃 〃	短い鋳が付く。胎土に径2.5mm大以下の礫、チャート、長石を含む。摂津C型。	
615	〃	〃	〃 〃	(21.2)	(5.9)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 オリーブ黒色 5Y3/1 にぶい橙色 7.5YR7/4	胴部外面ハケ調整。摂津C型。	
616	〃	〃	〃 〃	(27.8)	(4.8)	—	明赤褐色 2.5YR5/6 〃 〃	口縁部は内側にツマミ出す。ナデ調整。摂津C型。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
617	Ⅱ区	Ⅵ層	土師器 羽釜	(22.1)	(3.2)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 灰褐色 7.5YR4/2 〃	口縁端部は内側に引き出す。胎土に径 1.5mm以下のチャート、長石を含む。摂津 C 型。	
618	〃	〃	〃 〃	(22.0)	(5.1)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 灰黄褐色 10YR5/2 〃	口縁端部は内側に引き出す。胎土に径 2mm以下の砂、チャート、長石、石英を含む。摂津 C 型。	
619	〃	〃	〃 〃	(21.8)	(2.4)	—	浅黄色 2.5Y7/4 〃 〃	鈔は水平に付き、端部は上方に拡張する。口縁端部は内側に水平に引き出し、水平な面を成す。胎土は径 0.5mm 大のチャート、長石を含む。摂津 C 型。	
620	〃	〃	〃 〃	(19.4)	(5.9)	—	にぶい黄褐色 10YR7/3 〃 〃	鈔端部は上方に向く。口縁端部は内傾する。ナデ調整。摂津 C 型。	
621	〃	〃	〃 〃	(20.4)	(6.3)	—	にぶい黄褐色 10YR5/3 黒褐色 10YR3/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	口縁端部は内側に拡張する。煤付着。摂津 C - 2 型。	
622	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(6.5)	—	褐灰色 10YR4/1 〃 〃	鈔端部欠損。口縁端部はやや肥厚し、水平な面を成す。胎土に径 5mm以下の礫を含む。	
623	〃	〃	〃 〃	(19.4)	(3.5)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 〃	口縁端部は肥厚する。胎土に径 3mm以下の礫、チャートを含む。	
624	〃	〃	〃 甕	(31.2)	(4.6)	—	にぶい黄色 2.5Y6/3 〃 〃	口縁端部は面を成す。外面にハケ状工具痕、口縁部内面は横方向のハケ調整。胴部外面は縦方向のハケ調整。	
625	〃	〃	〃 〃	(31.5)	(5.5)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 橙色 7.5YR6/8	口縁端部は上方に拡張し、尖り気味に仕上げる。外面縦方向のハケ、内面横方向のハケ調整。胎土に径 0.5mm 大の砂、雲母片を含む。	
626	〃	〃	〃 〃	(21.0)	(2.5)	—	黒褐色 10YR3/2 にぶい褐色 7.5YR5/4 黒褐色 10YR3/2	口縁端部は上方に尖る。胴部外面に縦方向のハケ目がみられる。胎土に径 2mm以下の砂を含む。	
627	〃	〃	〃 〃	(24.2)	(6.9)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	胴部は丸味を帯びる。外面縦方向のハケ調整、内面横方向のハケ調整。	
628	〃	〃	土製品 土錘	4.0	1.3	0.4	褐灰色 10YR4/1	管状土錘。重量 6.2g。	
629	〃	〃	〃 〃	4.2	1.1	0.3	橙色 5YR6/8	管状土錘。重量 4.9g。	
630	〃	〃	鉄製品 板状鉄器	7.8	3.7	0.6	—	重量 17.5g。	
631	〃	〃	〃 〃	2.6	1.1	0.2	—	重量 1.4g。	
632	〃	〃	鉄滓	5.1	3.9	3.4	—	重量 49.8g。	
633	〃	〃	〃	9.6	8.6	4.1	—	重量 1405.0g。	
634	〃	〃	石製品 叩石	11.7	6.0	2.6	—	重量 224.7g。	
635	〃	〃	〃 砥石	12.9	12.1	3.6	—	重量 740.0g。	
636	〃	Ⅶ層	弥生土器 壺	(11.4)	(7.7)	—	灰色 N4/0 にぶい黄褐色 10YR6/4 灰色 N4/0	胎土に径 4.5mm以下の礫を含む。	
637	〃	〃	〃 甕	14.2	(3.3)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい褐色 7.5YR6/4 褐灰色 10YR4/1	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。外面は斜位、内面は横位のハケ調整。胎土に径 2～3mm 大の礫、チャートを含む。	
638	〃	〃	〃 〃	(16.0)	(6.3)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 灰色 N4/0	口縁部は「く」の字に外反する。胴部外面はタタキ目が残る。口縁部外面は縦方向のハケ、内面はハケ調整とナデ調整。胎土に径 5mm以下のチャートを含む。	

遺物観察表 30 (639～660)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
639	Ⅱ区	Ⅶ層	弥生土器 甕	20.8	(5.9)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4 褐色 10YR4/1	口縁部は「く」の字に外反する。口径が大きい大型の甕。 外面胴部はタタキ目、口縁部は縦方向のハケ調整。	
640	〃	〃	〃	—	(24.7)	(2.8)	にぶい黄褐色 10YR5/3 灰黄褐色 10YR4/2 黒褐色 10YR3/1	平底。内外面ハケ調整、外底部もハケ目残る。胎土に径 3.8mm以下の礫を含む。胴径 22.0cmを測り、大型である。	
641	〃	〃	〃	—	(15.8)	2.4	淡黄色 2.5Y8/3 にぶい黄褐色 10YR7/3 黒褐色 10YR2/1	平底。外面タタキ、内面胴部下半は指頭によるナデ。上半はハケ調整。	
642	〃	〃	〃	—	(10.5)	(2.8)	浅黄色 2.5Y7/4 にぶい黄褐色 10YR7/4 黒色 2.5Y2/1	平底。タタキ成形後、粗い単位のハケ調整。平底。胎土に径 2～3mm大の礫、チャートを含む。	
643	〃	〃	〃	—	(9.3)	2.8	明褐色 5YR5/6 〃 黒 N2/	平底。胎土に径 3mm以下の礫、石英を含む。	
644	〃	〃	〃	—	(6.8)	2.6	黒色 N2/ にぶい黄褐色 10YR5/3 黒色 N2/	外面螺旋状のタタキ目、内面ハケ調整。僅かに平底が残る。胎土に径 1mm以下の砂を含む。	
645	〃	〃	〃	—	(5.7)	—	浅黄色 2.5Y7/4 浅黄褐色 7.5YR8/4 灰色 7.5Y5/1	僅かに平底を残す。ハケ調整。器面調整が丁寧である。胎土に径 3mm以下の礫、チャートを含む。	
646	〃	〃	〃	—	(3.3)	3.0	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR5/3 黒褐色 2.5Y3/1	平底。内面ナデ調整、外面タタキ成形。胎土に径 1～2mm大の砂、チャートを含む。	
647	〃	〃	〃	—	(10.2)	—	暗灰黄色 2.5Y5/2 にぶい褐色 7.5YR6/3 灰色 5Y5/1	外面ハケ調整。内面ヘラ削り、ナデ調整。胎土に径 0.5mm大のチャート、石英を含む。	
648	〃	〃	〃 蓋	(12.2)	(8.1)	—	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR6/4 〃	外面の一部にタール付着がみられる。内面ハケ調整。	
649	〃	〃	鉄製品 鉄鏝	(3.7)	2.5	0.7	—	中央部欠損。重量 13.2g。	
650	〃	〃	〃 鉄斧	(4.7)	(4.0)	0.4	—	板状を呈す。重量 21.0g。	
651	〃	〃	石製品 石斧	10.2	4.8	2.3	—	扁平片刃石斧。重量 180.0g。	
652	〃	〃	〃 石鏝	3.5	1.8	0.6	—	夏岩製打製石鏝。重量 4.4g。	
653	Ⅲ区	P66	土師器 甕	(19.6)	(4.2)	—	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/4 橙色 7.5YR7/6	口縁部は「く」の字に外反する。端部は上方に向かって尖り気味に仕上げ、面を成す。内面は横方向のハケ調整。	
654	〃	〃	須恵器 杯	(17.0)	3.9	(10.0)	灰白色 7.5Y8/1 灰色 N4/0 灰色 N4/0 〃	ベタ底からやや段を持ち、内湾して立ち上がる。口縁部は内側にツマミ、内面が沈線状を呈する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。酸化焙焼成。	
655	〃	P121	〃	(15.9)	(3.9)	(9.8)	淡黄色 2.5Y8/4 浅黄褐色 10YR8/4 浅黄色 2.5Y8/4	回転ナデ調整。回転ヘラ切り。酸化焙焼成。	
656	〃	〃	鉄製品 釘	1.9	0.5	0.5	—	角釘。重量 0.54g。	
657	〃	〃	〃	2.4	0.9	0.5	—	角釘。重量 1.33g。	
658	〃	〃	〃	4.0	0.8	0.5	—	角釘。上下欠損。重量 2.19g。	
659	〃	P144	土師器 皿	(13.2)	1.7	(11.2)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁部は短く外反する。口縁内面に一条の沈線。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。外底の一部にヘラミガキ痕。	
660	〃	〃	〃 甕	(26.0)	(3.1)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 〃 〃	口縁部は外反し、端部は上方に折れ、丸く収める。ナデ調整。	

番号	調査区	遺構層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
661	Ⅲ区	P144	土製品 土鉢	4.2	1.3	0.5	にぶい黄橙色 10YR7/3	管状土鉢。重量 6.47g。	
662	〃	P145	須恵器 杯	(17.4)	(5.0)	(10.6)	灰白色 5Y7/2 灰色 5Y5/1 灰白色 5Y7/2	杯 B タイプ。高台付は強いナデにより凹む。回転ナデ調整。	
663	〃	〃	瓦器 椀	(14.6)	(3.4)	—	淡黄色 2.5Y8/3 〃 〃	口縁部は僅かに外反する。回転ナデ調整。全体的に煤附着。	
664	〃	P189	土師器 甕	(21.8)	(3.8)	—	橙色 7.5YR7/6 橙色 7.5YR6/6 橙色 7.5YR7/6	口縁部は「く」の字に外反し、端部は僅かに上下に拡張する。ナデ調整。胴部は内外面ともに横方向のハケ調整。	
665	〃	〃	須恵器 皿	(15.0)	(1.8)	—	淡黄色 2.5Y8/3 浅黄色 2.5Y7/3 〃	厚みのある器壁。底部から丸味を持って立ち上がり、口唇部は丸く収める。内面に沈線有り。回転ナデ調整。	
666	〃	〃	〃 杯	—	(1.6)	—	黄灰色 2.5Y5/1 灰白色 2.5YR7/1 黄灰色 2.5Y5/1	杯 A タイプ。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
667	〃	P29	土師器 皿	(10.0)	(1.7)	(7.6)	浅橙色 7.5YR8/6 〃 〃	灯明皿。口唇部にタール痕有り。回転ナデ調整。回転ヘラ切り。	10c 後
668	〃	P69	〃 〃	(14.0)	14	(11.4)	にぶい黄橙色 10YR6/3 〃 にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁部はヨコナデ調整。見込みは暗文。	
669	〃	P180	〃 杯	(16.6)	(2.7)	—	にぶい黄橙色 7.5YR6/4 〃 〃	回転ナデ調整。	
670	〃	P3	〃 〃	—	(1.8)	(7.8)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 黄灰色 2.5Y5/1	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
671	〃	P56	〃 〃	—	(1.1)	(8.8)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	底部と体部の境に段を持つ。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
672	〃	P103	〃 〃	—	2.5	7.6	橙色 7.5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR6/4 〃	杯 B タイプ。断面逆台形の高台が付く。ナデ調整。底部回転ヘラ切り。外面と内面の一部にタール附着。	
673	〃	P137	〃 甕	(23.6)	(6.0)	—	橙色 7.5YR6/6 橙色 5YR6/6 〃	口縁部は外反し、端部はやや上方に拡張される。ナデ調整。胴部外面はハケ調整。胎土に径1～3mm大の礫、チャートを含む。	
674	〃	P25	〃 〃	(19.8)	(2.7)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 褐灰色 10YR4/1	口縁部は肥厚し、端部は面を成す。胎土に径0.5～1mm大の砂、雲母片含む。	
675	〃	P30	〃 〃	(21.6)	(3.0)	—	橙色 7.5YR6/8 〃 〃	口縁部は外反し、端部は上方に拡張される。内面は荒い単位のハケ調整。在地系。	9c 後～ 10c 前
676	〃	P18	〃 〃	(22.0)	(4.3)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	口縁端部は上方に拡張し、面を成す。ナデ調整。胴部内面は横方向のハケ調整。	
677	〃	P122	須恵器 皿	(17.8)	2.3	(14.0)	淡黄色 2.5Y8/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。口縁内面に一条の沈線。酸化焙焼成。	
678	〃	P124	〃 杯	(11.6)	2.6	(7.4)	灰白色 2.5Y8/2 淡黄色 2.5Y8/3 灰白色 2.5Y8/2	杯 A タイプ。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
679	〃	P151	〃 〃	(15.6)	(2.9)	—	灰色 10Y6/1 〃 〃	内外面に火擦。口縁部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整。	
680	〃	P120	〃 〃	(18.0)	(3.1)	—	灰白色 5Y8/1 〃 〃	口縁端部は尖り気味に仕上げる。回転ナデ調整。	
681	〃	P123	〃 〃	—	(4.5)	—	灰黄色 2.5Y6/2 〃 橙色 5YR7/6	杯 B タイプ。高台は底部端に付く。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。酸化焙焼成。胎土に径0.5mm以下の砂を含む。	
682	〃	P181	〃 蓋	(18.2)	1.8	—	灰白色 7.5Y8/1 〃 〃	天井部欠損。口唇部は内面に一条の沈線が巡る。	

遺物観察表 32 (683～704)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
683	Ⅲ区	P26	須恵器 椀	(14.8)	(3.0)	—	灰色 5YR6/1 〃 〃	口縁端部は僅かに外反する。回転ナデ調整。	
684	〃	P96	〃 壺	(8.6)	(8.4)	—	灰色 5Y6/1 〃 黄灰色 2.5Y7/2	頸部中位からやや外方に開く。口縁端部は外方にツمام出し、水平な面を成す。	
685	〃	P119	製塩土器	—	(1.8)	—	橙色 5YR7/6 〃 〃	内面に布目痕有り。	
686	〃	P183	鉄滓	6.5	5.4	1.9	—	重量 89.0g。	
687	〃	P1	土師質土器 杯	13.0	3.4	5.6	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	外方に直線的に立ち上がり口縁端部は尖り気味に仕上げる。ロクロ成形、回転ナデ調整、底部回転糸切り。	
688	〃	P71	〃 〃	(12.6)	(2.3)	—	橙色 5YR6/6 〃 〃	内面はロクロ目が顕著である。	
689	〃	P74	〃 〃	(13.6)	(2.1)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁端部は尖り気味に仕上げる。ロクロ成形、回転ナデ調整。	14c
690	〃	P75	〃 〃	—	(1.3)	(5.8)	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	ナデ調整。底部回転糸切り。	14c
691	〃	P67	〃 皿	(12.8)	1.9	(6.8)	橙色 2.5Y8/3 浅黄橙色 10YR8/3 〃	手づくね皿。京都系。外面体部下半に指頭圧痕。口縁部及び内面はナデ調整。	
692	〃	SK2	土師器 皿	—	—	—	橙色 5YR6/6 〃 〃	皿の底部片。内外面にヘラミガキ。	
693	〃	〃	〃 杯	(16.0)	(2.5)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。口縁部は僅かに外反する。	
694	〃	〃	〃 〃	—	(1.9)	(8.4)		ベタ底から外方に立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
695	〃	〃	〃 蓋	(26.0)	(1.5)	—	にぶい黄橙色 7.5YR7/4 にぶい黄橙色 10YR7/4 〃	天井部欠損。回転ナデ調整。内面は凹む。	
696	〃	〃	鉄製品 小刀	5.8	2.7	0.6	—	小刀の断片。重量 13.0g。	
697	〃	〃	石製品 叩石	11.5	10.0	4.5	—	中央部と側面の一部に敲打痕。砂岩製。	
698	〃	SK3	土師器 皿	—	(2.2)	(8.0)	にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい黄橙色 10YR7/4 〃	ベタ底から外方に立ち上がる。口縁部は丸く収める。回転ナデ調整。	
699	〃	〃	〃 椀	—	(1.9)	(8.6)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	断面方形の高台が付く。回転ナデ調整。	
700	〃	〃	〃 竈	—	—	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 褐色 10YR6/1	竈の断片。指頭圧痕。	
701	〃	〃	須恵器 皿	(15.8)	(1.2)	—	にぶい黄橙色 7.5YR6/4 〃 黄灰色 2.5Y6/1	口縁部は大きく外反する。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
702	〃	〃	〃 〃	(13.6)	1.7	(11.2)	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	口縁部は外反する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
703	〃	〃	土製品 土錘	2.8	1.2	0.5	にぶい黄橙色 10YR7/3	管状土錘。重量 2.5g。	
704	〃	〃	〃 〃	2.7	1.1	0.9	にぶい黄橙色 10YR7/3	管状土錘。重量 2.0g。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
705	Ⅲ区	SK4	土師器 皿	11.4	1.6	7.4	灰白色 2.5YR8/2 〃 〃	回転ナデ調整。	
706	〃	〃	〃 杯	(14.8)	(2.8)	(9.4)	浅黄色 10YR8/4 〃 〃	ベタ底からやや段を持ち、内湾気味に立ち上がる。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
707	〃	SK5	〃 皿	17.2	2.7	13.0	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ベタ底から外方に延び、口縁部は外反する。内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
708	〃	〃	〃 杯	14.2	3.1	8.6	浅黄色 7.5YR8/9 〃 〃	ベタ底から外方に延び、口縁部は丸く収める。内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
709	〃	〃	〃 〃	14.1	3.7	9.4	にぶい黄橙色 10YR7/4 橙色 7.5YR7/6 —	ベタ底から外方に延び、口縁部は僅かに外反する。口縁内面に一条の沈線、回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。内外面にタール付着。灯明皿。	
710	〃	SK6	須恵器 〃	(13.8)	4.2	9.6	黄灰色 2.5Y5/1 〃 〃	ベタ底から外方に立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
711	〃	〃	〃 〃	(14.2)	(4.1)	(8.8)	黄灰色 2.5Y7/2 淡黄色 2.5Y8/3 〃	ベタ底から外方に延びる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
712	〃	SK7	土師器 皿	—	(1.4)	(11.8)	灰白色 2.5Y8/2 浅黄色 10YR8/4 灰白色 2.5Y8/2	底部片。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
713	〃	〃	須恵器 杯	—	(0.8)	(12.0)	灰色 N5/0 灰白色 5Y8/1 灰色 N5/0	杯Bタイプ。底部片。高台は強いナデ調整により内面が凹む。	
714	〃	SK8	〃 皿	(14.5)	(1.7)	(9.8)	灰白色 5Y8/1 〃 灰色 N5/0	回転ナデ調整。口縁部は丸味を帯び、内面は沈線状に凹む。	
715	〃	SK9	〃 〃	(14.2)	1.3	(11.4)	灰白色 5Y7/1 〃 〃	口縁部は大きく開く。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
716	〃	SK10	土師質土器 〃	11.7	2.8	6.4	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ヨコナデ調整、回転糸切り。内面見込みと体部の境目に丁寧なナデ調整を施し、体部下半に段ができる。外面体部下半に「の」の字の墨書。	
717	〃	〃	〃 〃	12.0	2.4	7.1	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ヨコナデ調整、回転糸切り。外底には簾状圧痕。内面見込みと体部の境目に丁寧なナデ調整を施し、体部下半に段ができる。	
718	〃	〃	〃 〃	12.3	2.8	6.5	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	ヨコナデ調整、回転糸切り。外底には簾状圧痕。内面見込みと体部の境目に丁寧なナデ調整を施し、体部下半に段ができる。	
719	〃	〃	〃 〃	11.7	2.9	6.5	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	ヨコナデ調整、回転糸切り。外底には簾状圧痕。内面見込みと体部の境目に丁寧なナデ調整を施し、体部下半に段ができる。	
720	〃	SX1	白磁 小杯	—	(1.8)	1.8	灰白色 N8/0 〃 〃	高台外面の一部まで施釉。高台脇の削りがシャープで、高台と体部の境に明瞭な段を持つ。外面は貝殻状の型押し。	17c 後
721	〃	〃	〃 碗	(15.2)	(2.8)	—	灰白色 10Y8/1 〃 〃	全体的に白磁釉が薄く施釉される。透明感が強く、外面はケズリの痕が顕著である。	17c 後
722	〃	〃	鉄製品 釘	4.5	1.2	0.4	—	角釘。重量 4.0g。	
723	〃	〃	〃 〃	4.1	0.8	0.5	—	角釘。重量 2.2g。	
724	〃	〃	鉄滓	2.6	3.2	2.0	—	重量 26.0g。	
725	〃	SX2	鉄製品 小札	7.9	3.5	0.3	—	両端に2ヶ所の円孔。重量 14.5g。	
726	〃	〃	〃 〃	5.0	2.4	0.3	—	折れ曲がる。重量 6.8g。	

遺物観察表34 (727～748)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
727	Ⅲ区	SX2	鉄製品 小札	5.8	2.1	0.5	—	重量 5.6g。	
728	〃	〃	〃	3.7	2.1	0.2	—	重量 3.2g。	
729	〃	〃	〃 釘	3.4	0.7	0.3	—	角釘。重量 0.8g。	
730	〃	〃	〃	2.6	0.9	0.6	—	角釘。重量 1.5g。	
731	〃	〃	鉄滓	5.4	5.4	2.6	—	重量 47.4g。	
732	〃	〃	〃	6.3	5.1	2.1	—	重量 64.2g。	
733	〃	SX3	白磁 皿	(11.6)	(1.7)	—	灰白色 N8/ 〃 灰白色 7.5Y8/1	端反皿。E 群。	15c～ 16c
734	〃	〃	羽口	4.0	3.6	1.9	—	重量 15.8g。	
735	〃	〃	〃	6.0	4.7	3.2	—	重量 55.0g。	
736	〃	〃	鉄製品 釘	7.6	1.2	0.5	—	角釘。重量 6.5g。	
737	〃	〃	〃	4.4	1.3	0.5	—	角釘。重量 4.4g。	
738	〃	〃	〃	3.8	0.7	0.3	—	角釘。重量 0.9g。	
739	〃	〃	〃	3.5	1.1	0.5	—	角釘。重量 1.2g。	
740	〃	〃	鉄滓	5.7	2.8	0.8	—	重量 14.2g。	
741	〃	〃	〃	5.3	6.9	2.4	—	重量 124.0g。	
742	〃	〃	〃	8.6	5.7	1.8	—	重量 121.0g。	
743	〃	〃	〃	4.2	7.3	3.4	—	重量 83.0g。	
744	〃	〃	〃	5.0	7.8	2.6	—	重量 101.0g。	
745	〃	SX4	〃	4.1	3.3	2.7	—	重量 21.0g。	
746	〃	〃	〃	4.3	3.8	2.3	—	重量 19.4g。	
747	〃	SX5	石製品 砥石	17.0	12.3	7.0	—	花崗岩製。一部被熱。雲母多く含む。	
748	〃	〃	羽口	2.7	3.0	1.3	—	重量 5.7g。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
749	Ⅲ区	I層	陶器 碗	—	(2.9)	(5.0)	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	尾戸焼。全体に灰釉が施され、1mm以下の細かい貫入が入る。	
750	〃	〃	〃 皿	(2.2)	—	(5.0)	黒褐色 10YR3/2 〃 〃	尾戸焼鉄釉皿。高台脇より高台内部の方が深く削り込まれている。内面蛇ノ目釉剥ぎ。	
751	〃	〃	〃 〃	(10.2)	—	3.8	灰白色 5Y7/2 〃 〃	尾戸焼灯明受皿。内面のみ灰釉が施される。外面の一部にタール附着。	
752	〃	〃	白磁 紅皿	(4.6)	(1.5)	(1.4)	灰白色 5Y8/2 〃 〃	肥前系。貝殻状の型押し。	
753	〃	Ⅱ層	土師質土器 小皿	(7.6)	1.9	4.4	にぶい黄橙色 7.5YR6/4 〃 〃	ベタ底から斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内底部にロクロ目。底部回転糸切り。	
754	〃	〃	〃 〃	7.8	1.9	4.2	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ベタ底から斜め上方に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に仕上げる。内底部にロクロ目顕著。底部回転糸切り。	
755	〃	〃	〃 杯	(14.2)	2.9	(7.8)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	ベタ底の底部から腰折れ、口縁部は外反する。回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
756	〃	〃	〃 焙烙鍋	(38.6)	(5.2)	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 黒色 7.5Y2/1 にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁部は大きく開く。体部は型押し成形。口縁部はヨコナデ調整。外面にタール附着。	
757	〃	〃	陶器 小鉢	—	(1.0)	(5.2)	浅黄色 5Y7/3 浅黄色 2.5Y7/3 〃	灰釉小鉢。断面逆四角形の低い高台が付く。外底に糸切り痕、内底に重ね焼の痕がみられる。瀬戸美濃系。	
758	〃	〃	〃 播鉢	(34.0)	(5.9)	—	にぶい赤褐色 5YR5/3 明褐色 5YR5/6 にぶい赤褐色 5YR5/3	備前V期。内外面ともにロクロ目顕著。	15c 後
759	〃	〃	〃 甕	—	(13.3)	(32.6)	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい赤褐色 5YR4/4 〃	底部中央は上げ底気味になる。外面縦方向のハケ、内面はナデ調整。外底周縁部に「×」の窯記号有り。外面の一部に自然釉がかかる。	〃
760	〃	〃	青磁 碗	(15.6)	(3.9)	—	オリーブ灰色 10Y6/2 灰白色 10Y7/1	鎗蓮弁文碗。青磁釉が厚く施される。	13c 後
761	〃	〃	〃 〃	—	(3.3)	—	オリーブ灰色 2.5GY6/1 〃 灰白色 7.5Y7/1	鎗蓮弁文碗。	〃
762	〃	〃	〃 〃	(15.2)	(4.8)	—	にぶい黄色 2.5Y6/4 〃 灰黄色 2.5Y7/2	無文碗。やや黄味がかつた青磁釉が全面施釉される。	
763	〃	〃	白磁 皿	(12.6)	(2.9)	—	灰色 5Y6/1 〃 灰白色 5Y7/1	口縁端部内面の釉を削り取る。透明感のある釉が施される。口禿げ皿。	13c 後～ 14c
764	〃	〃	〃 〃	(11.4)	(2.0)	—	灰白色 10Y8/1 〃 〃	端反型。乳白色を呈した釉が全面に施される。	
765	〃	〃	〃 碗	—	(3.6)	(5.8)	灰白色 10Y8/1 〃 〃	高台脇からやや腰が張った形で立ち上がる。断面逆台形の高台が付く。高台内外面ケズリ。釉は内面及び外面体部下半まで施される。	14c
766	〃	〃	青花 〃	(1.5)	—	(5.6)	灰白色 10Y8/1 〃 〃	景德鎮。明末から清初。内面見込みに花卉風の文様。高台外面に二重界線、外底部にも二重界線が淡い呉須により施される。Eタイプ。	16c 後
767	〃	Ⅲ層	土師器 皿	(17.1)	(2.0)	(14.2)	橙色 5YR6/8 〃 〃	ベタ底から口縁部は外反する。口縁内面は一条の沈線。内面はヘラミガキ。	8c
768	〃	〃	〃 杯	(14.8)	(3.5)	(10.2)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
769	〃	〃	〃 〃	(13.4)	3.4	(8.0)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。全体的にヘラミガキ。	
770	〃	〃	〃 椀	—	(2.0)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	ベタ高台から立ち上がる。内底は凹み段を持つ。	

遺物観察表 36 (771～792)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
771	Ⅲ区	Ⅲ層	土師器 椀	—	(2.4)	(7.4)	浅黄橙色 10YR8/3 橙色 5YR7/6 浅黄橙色 10YR8/3	断面逆台形状の高台が付く。高台外面は凹線状に凹む。高台内面は赤色化粧土が施される。内底部は段が生じ凹む。	11c 後
772	〃	〃	〃	15.5	5.2	6.0	浅黄色 2.5Y7/3 〃 灰白色 2.5Y8/2	丸味を持つ高台を持つ。外底部に蛇ノ目状に高台の粘土貼付痕がみられる。回転ナデ調整。外面体部下半ヘラケズリ、内面はヘラミガキ。口縁の一部を赤彩風に仕上げる。	12c
773	〃	〃	〃	16.1	5.8	6.6	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	断面四角形の高台が貼付く。外底部中央に糸切り痕、高台周縁は輪郭に沿ってナデ消す。回転ナデ調整。外面体部下半ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	12c
774	〃	〃	〃	(17.2)	(3.8)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁部は外反する。回転ナデ調整。	
775	〃	〃	〃 甕	(26.0)	(5.5)	—	にぶい黄褐色 10YR5/4 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張する。口縁内面は横方向のハケ、胴部外面は縦方向のハケ調整。胎土に径 0.5～1mm 大の砂を含む。	
776	〃	〃	須恵器 皿	(14.6)	(1.8)	(11.2)	灰白色 5Y8/1 〃 〃	口縁部内面に沈線。回転ナデ調整。酸化焰焼成。	
777	〃	〃	〃	(17.4)	1.7	(13.4)	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	口縁端部は尖り気味に仕上げる。口縁内面に一条の沈線。回転ナデ調整。酸化焰焼成。	
778	〃	〃	〃 杯	—	(1.6)	(9.0)	灰色 N4/1 〃 〃	口縁部は欠損する。底部回転ヘラ切り。酸化焰焼成。	
779	〃	〃	〃 椀	(15.0)	(3.2)	—	灰色 10Y6/1 〃 〃	口縁端部は強いナデが施される。回転ナデ調整。体部下半はケズリ。	
780	〃	〃	〃	(16.6)	(3.0)	—	灰色 10Y5/1 〃 〃	口縁部は僅かに外反する。回転ナデ調整。	
781	〃	〃	〃	(16.0)	(4.0)	—	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 〃	口縁部は外反する。内面はヘラ状工具によるナデ調整。	10c
782	〃	〃	炆器 甕	—	(16.1)	—	灰色 5Y5/1 暗赤褐色 5YR3/3 灰色 7.5Y6/1	外面胴部下半はタタキ目が残り、横方向のナデ調整。内面はヨコナデ調整。	
783	〃	〃	瓦器 椀	(18.0)	(3.5)	—	灰色 N4/0 〃 灰白色 5Y7/1	和泉型瓦器椀。外面は指頭圧痕が顕著。内面体部には横方向のヘラミガキ。	
784	〃	〃	〃	(13.2)	(3.6)	—	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	口縁端部は尖り気味になる。内面に沈線。外面は指頭圧痕。カーボン剥離。	
785	〃	〃	〃	—	(1.2)	(5.2)	灰白色 7.5Y8/1 〃 〃	断面三角形の低い高台が付く。見込みに平行暗文。内外面ともにカーボン剥離。	
786	〃	〃	〃	—	(0.8)	(4.4)	灰色 10Y5/1 〃 灰白色 10Y7/1	断面逆三角形の低い高台が付く。見込みにヘラミガキ。	
787	〃	Ⅳ-1層	土師器 皿	(13.8)	1.4	(10.0)	橙色 7.5YR7/4 〃 〃	口縁部は外反する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
788	〃	〃	〃	(14.0)	(2.1)	(10.4)	橙色 5YR7/6 〃 〃	口縁部は外反する。回転ナデ調整。全体的にミガキ。	
789	〃	〃	〃	(14.0)	1.6	(9.6)	橙色 5YR7/6 〃 〃	口縁部は僅かに外反する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
790	〃	〃	〃	(14.0)	1.5	(10.0)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	口縁部は短く外反する。回転ナデ調整。	
791	〃	〃	〃	(14.6)	1.2	(10.6)	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	口縁部は短く立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
792	〃	〃	〃	(15.0)	(1.2)	(11.8)	黄橙色 10YR8/6 橙色 5YR7/6 黄橙色 10YR8/6	口縁部は短く立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
793	Ⅲ区	Ⅳ-1層	土師器 皿	15.6	1.7	13.0	橙色 7.5YR4/6 〃 〃	底部から口縁部は短く立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
794	〃	〃	〃 〃	(15.6)	1.3	(12.2)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁部は端反型を呈する。回転ナデ調整。	
795	〃	〃	〃 〃	(16.2)	1.2	(14.0)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁部は短く立ち上がる。回転ナデ調整。	
796	〃	〃	〃 〃	(16.7)	1.7	(10.6)	橙色 5YR6/8 〃 〃	底部からやや段を持って立ち、口縁部は外反する。回転ナデ調整。	
797	〃	〃	〃 〃	(18.0)	2.1	(14.0)	浅黄色 2.5Y7/4 〃 黄灰色 2.5Y4/1	口縁部は外反し、口縁内面に沈線。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
798	〃	〃	〃 盤	—	(2.2)	(13.2)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	断面長方形の高台が付く。内面ヘラミガキ。	
799	〃	〃	〃 〃	(18.0)	(3.0)	(10.4)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	「ハ」の字に開く高台が付く。回転ナデ調整。	
800	〃	〃	〃 杯	(12.4)	2.8	(7.8)	橙色 5YR7/8 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。口縁部はやや内湾する。	
801	〃	〃	〃 〃	(12.4)	2.8	(7.0)	浅黄橙色 10YR8/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。胎土に径3mmの礫を少量含む。	
802	〃	〃	〃 〃	(13.0)	(2.6)	(8.5)	橙色 5YR6/8 〃 橙色 7.5YR6/8	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
803	〃	〃	〃 〃	(13.0)	3.0	(8.0)	橙色 5YR7/8 〃 〃	ベタ底の底部から腰折れ、口縁部は外反する。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
804	〃	〃	〃 〃	13.1	2.9	(9.2)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
805	〃	〃	〃 〃	(13.2)	3.0	(7.4)	浅黄橙色 7.5YR8/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
806	〃	〃	〃 〃	(13.4)	2.8	(8.0)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
807	〃	〃	〃 〃	(13.6)	2.9	9.0	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	ベタ底から直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。回転ナデ調整、回転ヘラ切り。	
808	〃	〃	〃 〃	(14.2)	2.7	(9.0)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
809	〃	〃	〃 〃	—	(3.7)	(8.4)	橙色 7.5YR7/5 〃 〃	杯Bタイプ。断面逆台形の高台がつく。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
810	〃	〃	〃 〃	—	(2.7)	(11.0)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	杯Bタイプ。断面逆三角形の高台が付く。回転ナデ調整。	
811	〃	〃	〃 〃	—	(2.3)	(11.2)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	断面長方形の高台が付く。高台端部はやや外側に踏ん張る。ヘラミガキ。	
812	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(4.4)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	杯Bタイプ。高台は欠損、貼付け高台。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
813	〃	〃	〃 〃	—	(1.8)	(5.6)	浅黄橙色 10YR8/4 にぶい黄橙色 10YR7/4 浅黄色 10YR8/4	ベタ底から段を持って立ち上がる。回転ナデ調整。	
814	〃	〃	〃 〃	(11.2)	2.8	(5.6)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	ベタ底から斜め上方に立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	

遺物観察表 38 (815～836)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
815	Ⅲ区	Ⅳ-1層	土師器 杯	—	(1.5)	(7.6)	にぶい黄色 2.5Y6/4 〃 黒褐色 2.5Y3/1	ベタ底から段を持って立ち上がる。回転ナデ調整。	
816	〃	〃	〃 蓋	—	(1.1)	(16.2)	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	かえりは丸く収める。回転ナデ調整。	
817	〃	〃	〃 〃	—	(1.6)	(16.7)	橙色 5YR7/6 橙色 5YR6/6 〃	かえりは丸く収める。内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整。	
818	〃	〃	〃 〃	(20.0)	1.2	—	橙色 7.5YR7/6 にぶい黄褐色 10YR7/4 〃	扁平な蓋。回転ナデ調整。全体的にミガキ。	
819	〃	〃	〃 甕	(25.4)	(2.5)	—	橙色 5YR6/8 褐色 7.5YR6/6 〃	口縁部は外反し、端部は上方に拡張する。外面はヨコナデ調整、内面は横方向のハケ調整。胎土に径 0.3～0.5mm 大の砂を含む。	
820	〃	〃	〃 〃	(26.8)	(4.8)	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方にツمامミ上げる。胴部外面及び口縁内面は粗い単位のハケ調整。胎土に径 0.5～1mm 大の砂を含む。	
821	〃	〃	〃 〃	(27.6)	(8.8)	—	褐色 7.5YR4/6 褐色 10YR4/6 褐色 7.5YR4/6	口縁部は「く」の字に外反、端部は僅かに上方にツمامミ上げる。口縁部内面は胴部との境目からヨコナデ、横方向のハケ調整、胴部外面は縦方向のハケ調整。	
822	〃	〃	〃 〃	(28.0)	(5.9)	—	にぶい黄褐色 10YR6/4 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張され、外側に面を成す。ハケ調整。胎土に径 0.5～1mm 大の砂を含む。	
823	〃	〃	〃 〃	(21.6)	(4.8)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 にぶい黄色 2.5Y6/3	口縁部は「く」の字に外反し肥厚、端部は面を成す。口縁部ヨコナデ調整、胴部内面は横方向のハケ、外面は横、斜め方向のハケ調整。胎土に径 4mm 以下の礫、雲母を含む。	
824	〃	〃	〃 〃	(23.4)	(5.8)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4 褐灰色 10YR4/1 〃	口縁部は外反し、肥厚する。口唇部は沈線状に凹む。口縁部はナデ調整。外面は指頭圧痕が顕著である。	
825	〃	〃	〃 〃	(19.6)	(4.3)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	口縁部は「く」の字に緩く外反し、端部は上方に拡張される。内面胴部上半から口縁部にかけて粗い単位の横方向のハケ、外面は縦方向のハケ調整。	
826	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(3.8)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反、端部は肥厚する。口縁部内面は横方向のハケ、外面はナデ調整。胎土に径 3mm 以下の礫、チャートを含む。	
827	〃	〃	須恵器 皿	15.0	1.7	11.0	灰色 7.5Y5/1 〃 〃	口縁部は短く外反する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。酸化焰焼成。	
828	〃	〃	〃 〃	(17.0)	(2.4)	(13.4)	灰白色 5Y8/1 灰白色 2.5Y8/2 黄灰色 2.5Y5/1	回転ナデ調整。外底部は剥離する。酸化焰焼成。	
829	〃	〃	〃 〃	(17.8)	(1.7)	(13.6)	灰白色 5Y8/1 灰色 5Y6/1 〃	口縁内面に沈線。内底周縁部は凹む。回転ナデ調整。酸化焰焼成。	
830	〃	〃	〃 盤	(20.0)	(3.3)	(15.0)	灰白色 7.5Y8/1 〃 〃	断面四角形の高台が付く。口縁部は外反し、内面に一条の沈線。酸化焰焼成。	
831	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(3.3)	(15.2)	灰白色 2.5Y8/1 〃 〃	断面四角形の高台が付く。口縁内面は強いナデにより沈線状に凹む。回転ナデ調整。	
832	〃	〃	〃 杯	(11.8)	(3.5)	(7.6)	灰白色 2.5Y5/2 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転糸切り。	
833	〃	〃	〃 〃	(13.0)	(2.9)	(7.6)	灰白色 5Y7/1 〃 〃	ベタ底から斜上外方に立ち上がる。回転ナデ調整。酸化焰焼成。	
834	〃	〃	〃 〃	(13.0)	3.9	(8.0)	灰白色 5Y8/1 〃 〃	ベタ底から斜上外方に立ち上がり、口縁部はやや内湾する。回転ナデ調整。	
835	〃	〃	〃 〃	(17.6)	(3.4)	—	灰白色 7.5Y7/1 〃 〃	回転ナデ調整。	
836	〃	〃	〃 高杯	—	(7.3)	—	灰白色 2.5Y8/1 〃 〃	高杯脚。杯部及び裾部欠損。酸化焰焼成。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
837	Ⅲ区	Ⅳ-1層	須恵器 高杯	—	(1.2)	(8.8)	浅黄色 5Y7/2 灰色 5Y5/1 灰オリーブ色 5Y5/2	脚裾部。端部は拡張され面を成す。外面に一条の凹線。	
838	〃	〃	〃 蓋	—	1.9	—	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	宝珠型をつまみ。	8c
839	〃	〃	〃 〃	(23.0)	(3.2)	—	灰白色 5Y8/1 〃 〃	回転ナデ調整。酸化焰焼成。	
840	〃	〃	〃 瓶	(3.4)	(4.5)	—	暗青灰色 5BG4/1 〃 明青灰色 5BG7/1	瓶の口縁端部。端部は水平な面を成す。	
841	〃	〃	〃 甕	—	(14.0)	—	オリーブ灰色 2.5GY6/1 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 オリーブ灰色 2.5GY6/1	外面平行タタキ, 内面当て具痕。	
842	〃	〃	〃 〃	—	(13.3)	—	灰色 5Y6/1 灰色 10Y5/1 灰色 5Y6/1	外面平行タタキ, 内面はナデ調整。	
843	〃	〃	〃 〃	—	(15.1)	—	灰黄色 2.5Y6/2 〃 〃	外面細かい単位の平行タタキ。内面当て具痕の凹凸が顕著。	
844	〃	〃	黒色土器 椀	(19.0)	(3.0)	—	黒色 N2/0 にぶい橙色 7.5YR6/4 〃	黒色土器 A 類。口縁部は内湾し、端部は尖り気味に仕上げられる。外面口縁部はヨコナデ、体部は指頭圧痕、内面ヘラミガキ。畿内系。	
845	〃	〃	〃 〃	(1.1)	—	(5.6)	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい橙色 7.5YR7/3 〃	黒色土器 A 類。断面逆三角形の低い高台が付く。内面見込みに平行暗文がみられる。畿内系。	
846	〃	〃	〃 〃	(14.0)	(3.5)	—	黒色 7.5Y2/1 〃 〃	黒色土器 B 類。内外面とも密なヘラミガキ。楠葉型。	
847	〃	〃	灰釉陶器 〃	(15.4)	(2.6)	—	浅黄色 2.5Y7/3 〃 〃	口縁部は端反型を呈す。全体的に薄く灰釉が施される。	
848	〃	〃	緑釉陶器 皿	—	(1.5)	5.6	灰白色 5Y8/2 〃 灰白色 2.5Y8/2	円盤状高台。高台外面に「-」のヘラ記号。全体的に緑釉が施されるが、釉が剥がれ落ちる。	
849	〃	〃	製塩土器	(8.0)	(3.3)	器壁厚 1.3	橙色 5YR7/6 〃 〃	口縁部は内傾する面を成す。外面指頭圧痕、内面布目痕が残る。胎土に径 1mm 大の砂, チャート含む。	
850	〃	〃	〃	—	(5.9)	—	浅黄褐色 10YR8/4 にぶい黄褐色 10YR7/4 灰白色 2.5Y7/1	内面に布目痕。胎土に径 0.3～0.5mm 大の砂含む。	
851	〃	〃	土製品 土錘	3.5	1.2	0.3	橙色 7.5YR6/6	管状土錘。重量 3.6g。	
852	〃	〃	〃 〃	3.7	1.1	0.4	にぶい黄褐色 10YR7/4	管状土錘。重量 3.9g。	
853	〃	〃	〃 〃	3.3	1.3	0.3	明黄褐色 10YR6/6	管状土錘。重量 3.5g。	
854	〃	〃	〃 〃	4.8	1.5	0.5	にぶい黄褐色 10YR7/3	管状土錘。重量 7.0g。	
855	〃	〃	〃 〃	3.5	1.5	0.5	灰褐色 10YR5/1	管状土錘。重量 6.1g。	
856	〃	〃	〃 〃	5.2	1.7	0.5	にぶい黄色 10YR6/4	管状土錘。重量 10.4g。	
857	〃	〃	〃 〃	6.0	1.1	0.5	にぶい黄褐色 10YR6/4	管状土錘。重量 7.3g。	
858	〃	〃	〃 〃	4.7	1.0	0.4	橙色 7.5Y7/6	管状土錘。重量 3.4g。	

遺物観察表 40 (859～880)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
859	Ⅲ区	Ⅳ-1層	土製品 土錘	4.4	1.2	0.4	黒色 10YR2/1	管状土錘。重量 48g。	
860	〃	〃	銅製品 鈍尾	1.6	1.9	0.6	—	銅製鈍尾。裏側は湾曲し、2ヶ所に円孔を穿つ。重量 1.9g。	
861	〃	〃	鉄製品 鈍	7.3	1.5	0.5	—	両端欠損。重量 8.2g。	
862	〃	〃	〃 釘	2.7	0.9	0.5	—	重量 1.3g。	
863	〃	〃	〃 〃	2.9	0.5	0.5	—	重量 1.0g。	
864	〃	〃	〃 〃	3.7	1.3	0.6	—	重量 2.2g。	
865	〃	〃	〃 〃	4.4	0.5	0.5	—	重量 4.6g。	
866	〃	〃	石製品 叩石	9.0	9.2	3.0	—	砂岩製。	
867	〃	〃	〃 砥石	8.4	4.4	4.4	—	仕上砥。四側面を使用一部被熱痕。砂岩製。	
868	〃	Ⅳ-2層	土師器 皿	(15.8)	1.4	(10.0)	橙色 5YR6/8 〃 〃	平底から外方に開く。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
869	〃	〃	〃 〃	(15.2)	(1.9)	(10.4)	橙色 5YR6/6 橙色 7.5YR7/6 〃	ベタ底から外方に開く。回転ナデ調整。	
870	〃	〃	〃 〃	(15.8)	1.8	(11.4)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	ベタ底から外方に開き、口縁端部はやや内湾する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
871	〃	〃	〃 〃	(14.4)	(1.6)	(11.5)	橙色 7.5YR4/6 〃 〃	口縁部は外反する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
872	〃	〃	〃 盤	—	(2.8)	(12.6)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	「ハ」の字に開く高台が付く。ナデ調整。	
873	〃	〃	〃 杯	—	(2.8)	(9.0)	橙色 7.5YR6/6 橙色 5YR6/6 橙色 7.5Y6/6	上部欠損。回転ナデ調整。	
874	〃	〃	〃 〃	(13.2)	(2.8)	(9.0)	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。	
875	〃	〃	〃 〃	—	(2.1)	(8.0)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
876	〃	〃	〃 〃	—	(2.1)	(7.0)	橙色 5YR6/6 〃 にぶい黄 橙色 10YR7/4	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。赤色塗彩。	
877	〃	〃	〃 〃	—	(1.7)	8.8	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
878	〃	〃	〃 〃	—	(4.0)	—	橙色 7.5YR6/6 〃 〃	断面四角形の高台が付く。内面は焼成時に胎土中の礫が抜け、凹みが著しい。胎土に径 1～2mm 大の砂含む。	
879	〃	〃	〃 〃	—	(3.8)	(9.3)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	逆台形状の高台が付く。回転ナデ調整。	
880	〃	〃	〃 〃	—	(2.8)	(10.0)	橙色 5YR7/8 〃 〃	やや外側に踏ん張る高台が付く。回転ナデ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
881	Ⅲ区	Ⅳ-2層	土師器 杯	(17.0)	(5.7)	(9.0)	橙色 7.5YR6/6 〃 〃 橙色 7.5YR7/6	細長い高台が付く。体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。回転ナデ調整。全体的にミガキ。	
882	〃	〃	〃 甕	(24.0)	(5.7)	—	明赤褐色 5YR5/6 橙色 7.5YR6/6 〃 〃 橙色 5YR6/6	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張され、面を成す。ハケ調整。胎土に径1～2mm大の砂、石英を含む。	
883	〃	〃	〃 〃	(24.4)	(6.2)	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃 〃 橙色 5YR6/6	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張され、外面に面を成す。ハケ調整。胎土に径0.5～1mm大の砂を含む。	
884	〃	〃	〃 〃	(26.8)	(6.1)	—	にぶい黄橙色 10YR6/3 〃 〃 〃 橙色 5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR6/3	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張される。粗い単位のハケ状工具による調整。	
885	〃	〃	〃 〃	(15.2)	(4.7)	—	にぶい黄橙色 10YR7/4 〃 〃 〃 にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい黄橙色 10YR7/4	やや内湾気味の胴部から、口縁部は外反し、端部は上方に拡張する。内面横位のハケ調整。	
886	〃	〃	〃 〃	(17.6)	(6.2)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張する。内面は横位のハケ調整。胎土に径1～2mm大の砂、チャートを含む。	
887	〃	〃	〃 〃	(17.8)	(3.0)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃 〃 〃	口縁部は「く」の字に外反し、端部は僅かに上方に拡張する。粗い単位のハケ調整。胎土に径3mm以下の礫、チャートを含む。	
888	〃	〃	須恵器 皿	14.7	2.2	11.4	オリーブ灰色 2.5GY6/1 〃 〃 〃 灰色 N6/0	口縁端部は屈曲し、内面に一条の沈線が入る。内外面の一部に火襷。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
889	〃	〃	〃 〃	—	1.6	(10.0)	灰色 10Y5/1 〃 〃 〃 〃	口縁端部は端反り。回転ナデ調整、回転ヘラ切り。	
890	〃	〃	〃 杯	—	(1.3)	—	灰白色 5Y8/1 〃 〃 〃 〃	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。酸化焰焼成。	
891	〃	〃	〃 蓋	(18.6)	(2.1)	—	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 〃 〃 〃	天井部はヘラケズリ。底部回転ナデ調整。	
892	〃	〃	〃 〃	(20.5)	(2.6)	—	灰白色 5Y8/1 〃 〃 〃 〃	天井部欠損。一部にヘラ削り痕。僅かにかえりを残す。酸化焰焼成。	
893	〃	〃	〃 甕	(19.0)	(2.5)	—	灰色 5Y6/1 〃 〃 〃 灰色 7.5Y5/1 灰白色 7.5Y7/1	口縁部は僅かに上方に拡張され、端部は面を成す。ナデ調整。	
894	〃	〃	〃 転用硯	—	(14.3)	—	灰色 10Y5/1 〃 〃 〃 〃	内面はハケ調整。内面に硯の使用痕あり。	
895	〃	〃	黒色土器 椀	—	(2.3)	(9.0)	黒色 N2/0 明褐色 7.5YR5/6 〃 〃 灰褐色 7.5YR6/2	黒色土器A類。ベタ底から内湾する。内面はヘラミガキ。	
896	〃	〃	〃 甕	(17.0)	(6.9)	—	黒色 7.5Y2/1 〃 〃 〃 灰褐色 7.5YR5/2 浅黄色 2.5Y7/4	内面は丁寧な黒色処理。口縁部は外反し、端部は尖り気味に仕上げる。口縁部内面は密なヘラミガキ、胴部内面はハケ調整。外面は横位のナデとハケ調整。	
897	〃	〃	灰釉陶器 椀	—	(2.5)	—	灰黄色 2.5Y7/2 〃 〃 〃 〃	口縁端部は外反する。全体的に灰釉。	
898	〃	〃	土製品 土錘	4.4	1.3	0.5	明黄褐色 10YR6/6 〃 〃 〃 〃	管状土錘。重量 5.33g。	
899	〃	V層	土師器 皿	(15.2)	(1.8)	(11.2)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃 〃 〃	口縁部は外反し、端部は丸く収める。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
900	〃	〃	〃 〃	(15.8)	(1.4)	(12.1)	橙色 7.5YR7/6 〃 〃 〃 〃	口縁部は外反する。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
901	〃	〃	〃 〃	(16.8)	(2.1)	(13.6)	にぶい黄褐色 7.5YR6/4 〃 〃 〃 〃	回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
902	〃	〃	〃 〃	(17.6)	(2.2)	(12.5)	黄褐色 7.5YR7/8 〃 〃 〃 〃	口縁部内面は沈線状に凹む。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
903	Ⅲ区	V層	土師器 皿	—	(1.1)	(8.0)	橙色 7.5YR6/6 にぶい黄橙色 10YR7/3	内底部に「×」のヘラ記号。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
904	〃	〃	〃	—	(1.3)	8.4	浅黄橙色 10YR8/4	内底部に「×」のヘラ記号。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
905	〃	〃	〃 杯	(11.9)	3.3	8.4	明黄褐色 10YR7/6 にぶい黄褐色 10YR7/4	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
906	〃	〃	〃	(12.7)	3.2	(7.4)	橙色 5YR7/8	ベタ底。僅かに段を持つ。口縁部は僅かに外反する。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
907	〃	〃	〃	(14.0)	(2.9)	(9.4)	橙色 5YR6/8 黄橙色 7.5YR7/8	ベタ底から斜上方に立ち上がる。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
908	〃	〃	〃	(13.9)	(3.3)	(8.0)	灰白色 2.5Y8/2	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
909	〃	〃	〃	(13.6)	3.3	(9.0)	橙色 7.5YR7/6	回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
910	〃	〃	〃	(14.5)	3.0	9.0	橙色 7.5YR7/6	ヘラミガキ。底部回転ヘラ切り。	
911	〃	〃	〃	—	(2.0)	(8.8)	にぶい黄褐色 7.5YR7/4	ベタ底から段を持って立ち上がる。内底部は凹む。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
912	〃	〃	〃	16.1	6.7	9.0	橙色 7.5YR7/6	断面四角形の高台が付く。回転ナデ調整。胎土に径 0.5～1mm大の砂を含む。	
913	〃	〃	〃	—	(4.0)	8.2	にぶい橙色 7.5YR7/4	外側に踏ん張る高台が付く。内外面ヘラミガキ。	
914	〃	〃	〃	—	(3.1)	(10.0)	橙色 7.5YR7/6	外側に踏ん張る高台が付く。回転ナデ調整。	
915	〃	〃	〃	(17.4)	5.1	(10.0)	にぶい黄褐色 10YR7/4	断面三角形の高台が付く。回転ナデ調整。	
916	〃	〃	〃 蓋	(16.0)	1.2	—	にぶい黄褐色 7.5YR7/4	天井部欠損。回転ナデ調整。	
917	〃	〃	〃 甕	(24.7)	(12.7)	—	にぶい黄色 2.5Y6/4	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張され面を成す。端部外面は凹線状に凹む。胴部外面は縦方向のハケ調整。頸部及び口縁内面は横方向のハケ調整。	
918	〃	〃	〃	(25.0)	(5.5)	—	黄褐色 10YR5/6 褐色 10YR4/4 にぶい褐色 10YR5/4	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張する。外面は凹線状に凹む。胴部外面は縦方向のハケ調整。口縁内面は横方向のハケ調整。	
919	〃	〃	〃	(26.8)	(6.8)	—	橙色 5YR6/6	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。縦方向のハケ調整。内面横方向のハケ調整。胎土に径 1～2mm大の砂、チャートを含む。	
920	〃	〃	〃	(27.0)	(7.9)	—	にぶい褐色 7.5YR5/4 明赤褐色 5YR5/6	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方に拡張する。端部は断面は凹線状に凹む。胴部外面は粗い単位のハケ、内面口縁部及び頸部にかけて横方向のハケ調整。	
921	〃	〃	〃	(25.4)	(8.3)	—	灰黄褐色 10YR5/2	口縁部は外反し、端部は上方に屈曲し丸く収める。胴部外面は斜方向のハケ調整。内面頸部から口縁部は横方向のハケ調整。内面頸部から口縁部は横方向のハケ調整。	
922	〃	〃	〃	(26.0)	(6.2)	—	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁部は外反し、端部は上方に屈曲し丸く収める。胴部外面は斜め、縦方向のハケ。口縁部内面は横方向のハケ調整。胎土に径 0.5～1mm大の砂を含む。	
923	〃	〃	〃	(16.6)	(5.5)	—	にぶい黄褐色 10YR7/4	口縁部は「く」の字に外反する。胴部外面は横方向のハケを基調とし、一部に縦方向のハケ調整。在地系。胎土に径 2～4mm大の礫、チャートを含む。	
924	〃	〃	〃	(18.0)	(5.1)	—	にぶい黄褐色 10YR6/3	口縁部は「く」の字に短く外反し、端部は僅かに上方にツマミ上げる。胴部外面は横方向を基調とするハケ調整。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
925	Ⅲ区	V層	土師器 甕	(23.8)	(6.0)	—	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	口縁部は短く外反し、端部は面を成す。胴部外面は横方向のハケ調整。胎土に径1～4mm以下の礫、チャートを含む。	
926	〃	〃	〃 〃	(19.8)	(8.5)	—	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 〃	やや膨らみのある胴部から間延びしながら立ち上がり、口縁部は短く外反。端部は上方にツمامミ上げる。外面粗い縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケ調整。在地系。	
927	〃	〃	〃 〃	(20.0)	(5.2)	—	にぶい黄橙色 10YR7/2 〃 灰白色 10YR8/1	口縁部は「く」の字に外反し、端部は上方にツمامミ上げる。口縁部はヨコナデ、胴部はハケ調整。在地系。胎土に径1～4mm大の礫、チャートを含む。	
928	〃	〃	〃 〃	(21.6)	(4.9)	—	橙色 7.5YR7/6 〃 〃	口縁部は短く外反し、端部を上方にツمامミ上げ尖り気味に仕上げる。ハケ調整。	
929	〃	〃	〃 〃	(23.8)	(7.7)	—	にぶい黄橙色 10YR6/4 にぶい褐色 7.5YR5/4	口縁部は「く」の字に外反し、端部は面を成す。胴部と口縁部の粘土帯接合痕が顕著。胴部外面、口縁内面に横方向のハケ調整。胎土に径0.5～1mm大の砂を含む。	
930	〃	〃	須恵器 皿	(15.0)	1.6	(11.8)	灰黄色 2.5Y7/2 〃 〃	口縁部は外反する。外面に火襷。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。酸化焙焼成。	
931	〃	〃	〃 〃	14.0	1.9	10.0	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 〃	口縁部は外反し、端部は屈曲する。火襷。回転ナデ調整。底部回転ヘラ切り。	
932	〃	〃	〃 〃	(15.0)	1.8	(11.0)	灰色 7.5Y6/1 〃 〃	口縁部は外反し、端部は強く屈曲する。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
933	〃	〃	〃 〃	(17.9)	(2.3)	(14.3)	灰色 5Y8/1 〃 灰色 5Y5/1	口縁部内面に一条の沈線状の凹み。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。酸化焙焼成。	
934	〃	〃	〃 〃	(17.6)	1.5	(12.0)	灰白色 2.5Y7/1 〃 灰色 N5/1	口縁部は外方に大きく開き、端部は上方に屈曲する。内面に一条の沈線。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
935	〃	〃	〃 〃	(19.0)	2.1	(15.4)	灰白色 2.5Y8/2 〃 〃	口縁部は尖り気味に仕上げ、内面に一条の沈線。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
936	〃	〃	〃 杯	(9.2)	(2.9)	(4.8)	灰オリーブ色 5Y6/2 〃 〃	小杯。ベタ底から斜上方に立ち上がる。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。	
937	〃	〃	〃 〃	(12.8)	(3.4)	(8.2)	灰白色 5Y8/1 〃 〃	ベタ底から斜め上方に立ち上がる。回転ナデ調整、底部回転ヘラ切り。酸化焙焼成。	
938	〃	〃	〃 〃	(16.0)	4.9	(10.6)	灰色 7.5Y5/1 〃 〃	杯Bタイプ。断面方形の高台が付く。回転ナデ調整。	
939	〃	〃	〃 〃	(17.7)	(5.6)	(11.2)	灰白色 2.5Y8/2 灰白色 2.5Y8/1 〃	杯Bタイプ。断面逆台形状の高台が付く。回転ナデ調整。酸化焙焼成。	
940	〃	〃	〃 高杯	—	(8.2)	—	灰色 N6/1 灰色 N5/1 〃	高杯脚部。杯部は欠損。粘土充填痕が認められる。脚部外面中位に二条の沈線。	
941	〃	〃	〃 蓋	(17.8)	1.8	—	灰白色 2.5Y8/1 〃 〃	つまみ欠損。天井部ヘラケズリ。酸化焙焼成。	
942	〃	〃	〃 〃	(16.7)	1.3	—	灰白色 2.5Y8/2 灰黄色 2.5Y7/2 〃	回転ナデ調整、回転ヘラケズリ。	
943	〃	〃	〃 壺	—	(6.7)	—	灰色 7.5Y6/1 灰色 N6/1 灰色 7.5Y6/1	壺の頸部片。ナデ調整。自然釉が付着する。	
944	〃	〃	〃 〃	—	(5.7)	—	灰色 7.5Y5/1 灰白色 7.5Y7/1 〃	小型壺。高台が付く。回転ナデ調整。	
945	〃	〃	〃 〃	—	(9.5)	—	灰色 7.5Y5/1 灰色 7.5Y4/1 灰色 7.5Y6/1	外側に開く高台が付く。回転ナデ調整。	
946	〃	〃	〃 〃	—	(15.1)	—	灰色 N4/ 〃 灰褐色 5YR5/1	壺の上半部片。ナデ調整。外面に自然釉がかかる。胴径23.7cm。	

遺物観察表 44 (947～968)

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
947	Ⅲ区	V層	須恵器 壺	5.2	4.1	—	灰色 7.5Y5/1 暗灰色 N3/0 灰色 7.5Y5/1	双耳壺の把手部片。断面四角形で孔径 6mmの孔を穿つ。	
948	〃	〃	〃 〃	—	(11.2)	—	灰白色 N7/1 〃 〃	胴部上半で内側に屈曲する。頸部から口縁部は欠損。ナデ調整。	
949	〃	〃	〃 〃	—	(11.1)	胴径 (15.4)	灰色 N6/1 〃 灰赤色 2.5YR4/2	底部及び頸部から口縁部は欠損。胴部は中位で最大径になる。外面胴部中位は上下二条の沈線状に凹み、中心はやや突出する。下半は回転ナデ、及びケズリが顕著。	
950	〃	〃	〃 甕	25.8	(30.9)	胴径 41.3	灰オリーブ色 7.5Y4/2 〃 〃	外面平行タタキ、口縁部は斜め下方に拡張し、面を成す。内外面ナデ調整。	
951	〃	〃	黒色土器 椀	(17.2)	(4.3)	—	明褐色 7.5YR5/6 黒色 7.5YR1.7/1 にぶい黄褐色 10YR7/4	黒色土器 A 類。内面に螺旋状のミガキ。畿内系。	
952	〃	〃	〃 〃	(18.6)	(3.6)	—	黒色 2.5Y2/1 にぶい黄褐色 10YR5/3 〃	黒色土器 A 類。内面のみ黒色処理がされる。密なヘラミガキ。胎土に石英、雲母片を含む。畿内系。	
953	〃	〃	〃 〃	(19.6)	(2.7)	—	黒色 10YR1.7/1 にぶい黄褐色 10YR7/4 〃	黒色土器 A 類。口縁部を尖り気味に仕上げる。内面に横方向のヘラミガキ。	
954	〃	〃	〃 〃	—	(0.6)	—	黒色 10YR1.7/1 にぶい黄褐色 10YR6/4 〃	黒色土器 A 類。底部片。内面に平行ミガキと連結輪状風の暗文。	
955	〃	〃	〃 甕	(16.0)	(3.4)	—	暗灰色 N3/0 黒褐色 7.5YR3/2 〃	膨らみのある胴部から口縁部は短く外反する。口縁部はナデ調整。内面のみ黒色処理。	
956	〃	〃	〃 〃	(16.6)	(3.7)	—	赤褐色 2.5YR4/6 明赤褐色 2.5Y5/6 黒色 5Y2/1	膨らみのある胴部から、口縁部は短く外反する。口縁部はナデ調整。胴部内面は横方向のケズリ痕が認められる。内面のみ黒色処理。胎土に雲母が含まれる。畿内系。	
957	〃	〃	灰釉陶器 椀	(19.0)	(5.3)	(8.0)	明オリーブ灰色 2.5GY7/1 灰白色 5GY8/1 灰白色 2.5Y8/2	断面三日月状の高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外側に屈曲する。外面体部下半は回転ヘラケズリ、上半は回転ナデ調整。	
958	〃	〃	緑釉陶器 皿	—	(1.6)	(7.3)	暗オリーブ色 7.5Y4/3 〃 灰色 7.5Y5/1	蛇ノ目高台。オリーブ色の緑釉が高台外面まで施釉される。京都系。	
959	〃	〃	〃 椀	(13.0)	(3.6)	—	浅黄色 7.5Y7/3 オリーブ黄色 7.5Y6/3 灰白色 2.5Y8/2	軟質。京都系。	
960	〃	〃	〃 〃	—	(2.3)	—	オリーブ黄色 7.5Y6/3 〃 灰白色 7.5Y8/2	軟質。京都系。	
961	〃	〃	製塩土器	(9.8)	(4.2)	器壁厚 0.9	にぶい橙色 7.5YR6/4 〃 灰色 N5/0	口縁部は尖り気味に仕上げる。胎土に径 7mm以下のチャート含む。	
962	〃	〃	〃	(7.8)	(6.8)	器壁厚 1.0	灰色 7.5Y5/1 〃 〃	口縁部は内側に屈曲する。内面に工具痕。	
963	〃	〃	〃	—	(3.7)	器壁厚 1.5	橙色 5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR6/4 にぶい橙色 7.5YR7/4	内面布目痕。	
964	〃	〃	〃	(9.4)	(3.7)	器壁厚 1.3	灰色 N5/0 〃 〃	口縁部は尖り気味に仕上げる。	
965	〃	〃	〃	—	(4.2)	器壁厚 1.1	にぶい橙色 7.5YR7/4 〃 〃	丸底。内面布目痕。	
966	〃	〃	〃	—	(3.1)	器壁厚 1.1	橙色 7.5YR7/6 にぶい橙色 7.5YR7/4 〃	内面布目痕。胎土に径 1～3mm大の礫含む。	
967	〃	〃	土製品 土錘	3.6	1.0	0.4	にぶい黄褐色 10YR7/4	管状土錘。重量 3.0g。	
968	〃	〃	〃 〃	3.6	1.1	0.5	にぶい黄褐色 10YR7/3	管状土錘。重量 3.0g。	

番号	調査区	遺構 層位	器種 器形	法量 (cm)			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
969	Ⅲ区	V層	土製品 土錘	4.5	1.5	0.6	にぶい黄橙色 10YR7/2	管状土錘。重量 7.0g。	
970	〃	〃	〃 〃	5.1	1.9	0.6	灰白色 5Y8/1 黒色 5Y2/1	管状土錘。重量 16.0g。	
971	〃	〃	鉄製品 刀子	9.5	2.3	0.3	—	重量 20.8g	
972	〃	〃	〃 鈍	14.9	2.4	0.9	—	重量 28.5g	
973	〃	〃	〃 鉄鎌	5.6	2.7	0.4	—	有茎平根式。重量 6.2g	
974	〃	〃	〃 〃	8.2	2.6	0.4	—	雁股式。重量 14.1g	
975	〃	〃	石製品 石鐮	8.2	4.9	1.2	—	滑石製。温石転用。重量 45.3g。	
976	〃	〃	石製品	10.9	3.6	1.7	—	棒状石器。緑色片岩。重量 121.0g。	
977	〃	〃	〃	12.2	2.6	1.3	—	棒状石器。緑色片岩。重量 90.0g。	
978	〃	〃	石製品 叩石	9.0	8.6	3.8	—	砂岩製。	
979	〃	〃	〃 〃	18.5	4.9	4.9	—	緑色岩製。	
980	〃	〃	〃 砥石	6.5	3.5	3.3	—	仕上砥。四面使用。泥岩製。	

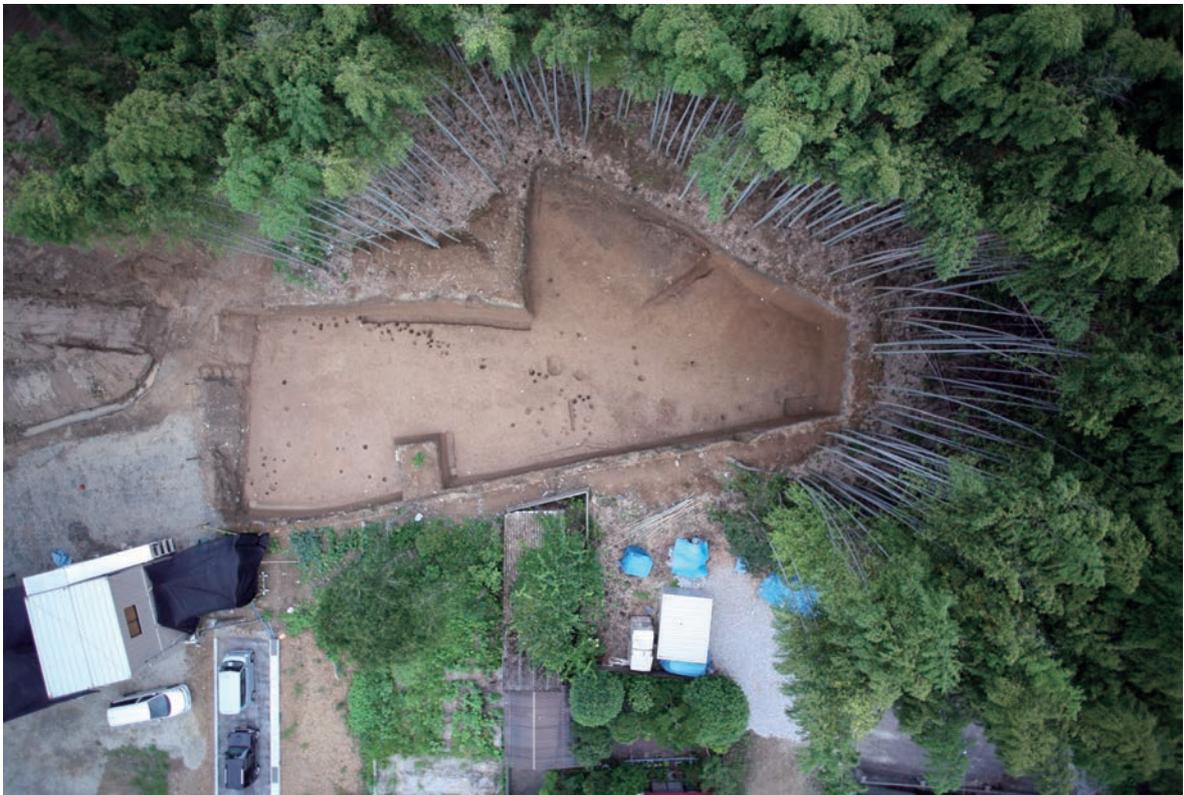
写真図版



天神溝田遺跡全景(東上空より)



I W 区全景(東上空より)



I W 区全景(北上空より)



I W 区上面遺構検出状態(北東より)



I W 区 SB2 P5 土師質土器杯(18)出土状態



I W 区 SB7 P11 陶器皿(28)出土状態



I W 区 SB7 P13 煙管(29)出土状態



I W 区 P27 礎板石検出状態(北西より)



I W 区 SD2 完掘状態(北東より)



I W 区 SK9 遺物(45～47) 出土状態(北より)



I W 区 SK9 紐銭(47) 出土状態



I W 区 SD2 陶器皿(57・58) 出土状態



I W 区 SD2 瀬戸系陶器向付鉢(63) 出土状態



I W 区 SK4・5 炭化物・焼土検出状態(南より)



I W 区上面遺構完掘状態(東より)



I W 区北壁セクション(南東より)



I W 区南壁セクション(北より)



I W 区下面遺構検出状態(東より)



I W 区 SK20 遺物出土状態(北東より)



I W 区 P82 礎板石検出状態(北より)



I W 区土器溜まり 弥生土器出土状態



I W 区土器溜まり出土状態(東より)



I W 区土器溜まり出土状態(南東より)



I W 区下面遺構完掘状態(南西より)



I S区遺構検出状態(西より)



I S区SK6炭化物・焼土検出状態(南より)



I S区SB2P3陶器皿(23)出土状態



I S区P16磁器碗(34)出土状態



I S区VI層土師器皿(320)出土状態



I 区 SB3 完掘状態(北より)



I S 区遺構完掘状態(西より)



I E 区全景(北東上空より)



I E 区上面遺構検出状態(北西より)



I E 区西壁セクション(南東より)



I E 区 P6 青花皿(81)出土状態



I E 区 P22 根巻石検出状態(南より)



I E 区 P31 礎板石検出状態(南より)



I E 区 P187 碗型滓検出状態(西より)



I E 区下面東側遺構検出状態(西より)



I E 区下面西側遺構検出状態(西より)



I E 区 SB13 完掘状態(南より)



I E 区下面遺構完掘状態(東より)



Ⅱ区全景(北東上空より)



Ⅱ区上面遺構検出状態(南西より)



Ⅱ区埋納遺構セクション・備前焼壺(438)出土状態(南より)



Ⅱ区埋納遺構和鏡(439)出土状態



Ⅱ区埋納遺構備前焼壺(438)出土状態(東より)



Ⅱ区埋納遺構備前焼壺(438)出土状態(南より)



Ⅱ区埋納遺構完掘状態(南西より)



II区中央バンクセクション(西より)



II区 SX1 焼土・炭化物検出状態(西より)



II区 P319 銙帯金具(506)出土状態



II区 III層筭(582)出土状態



II区 VII層弥生土器出土状態(南西より)



II区上面遺構完掘状態(南上空より)



II区下面遺構完掘状態(南上空より)



Ⅲ区上面遺構検出状態(西より)



Ⅲ区下面遺構検出状態(南東より)



Ⅲ区Ⅳ層遺物出土状態(北東より)



Ⅲ区SK10土師質土器皿(716～719)出土状態



Ⅲ区Ⅲ層土師器椀(772・773)出土状態



Ⅲ区Ⅳ-1層鈍尾(860)出土状態



Ⅲ区Ⅳ-2層黒色土器甕(896)出土状態



Ⅲ区中央バンクセクション(北東より)



Ⅲ区V層須恵器壺(944)出土状態



Ⅲ区V層刀子(971)出土状態



Ⅲ区V層鉄鍬(973)出土状態



Ⅲ区V層鉄鍬(974)出土状態



Ⅲ区上面遺構完掘状態(東より)



Ⅲ区下面遺構完掘状態(南東より)



Ⅱ区埋納遺構 出土遺物集合写真



Ⅱ区埋納遺構 和鏡(439)



Ⅱ区埋納遺構 古銭



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器皿とアワ(452・454)



Ⅱ区埋納遺構 備前焼壺(438)



Ⅱ区埋納遺構 古銭



440

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



441

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



442

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



443

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



444

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



445

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



446

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



447

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



448

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



449

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



450

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



451

Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



Ⅱ区埋納遺構 土師質土器(皿)



試掘調査出土遺物



I 区 SB1P7 · SB2,3P1 ~ 3 · SB3P4 磁器(皿), 陶器(皿)



I W 区 P1 · I S 区 P1 · 16 · 11 · 12 · 14 陶器(碗·皿), 磁器(小丸碗·碗)



I W区 SK9 鉄製品(紐銭)



I E区 SD14 陶器(皿・蓋・碗)



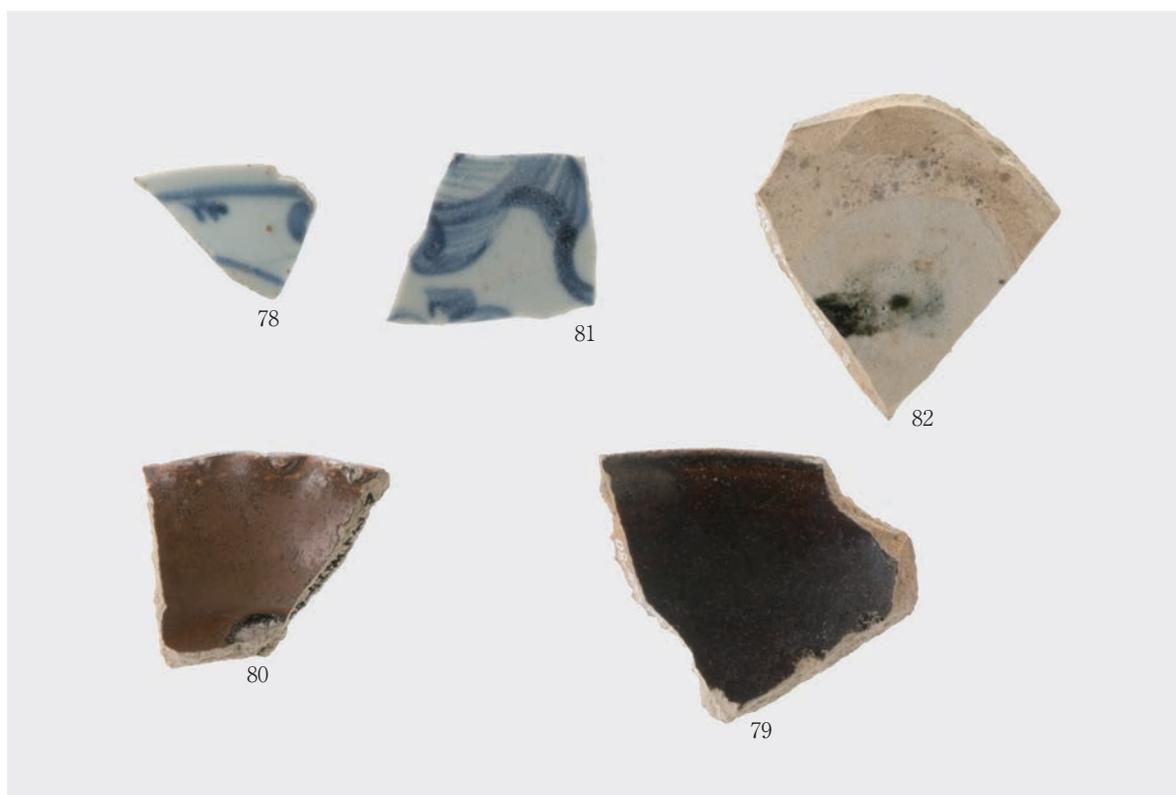
I W区 SD2 陶器(皿·碗·鉢) (外面)



I W区 SD2 陶器(皿·碗·鉢) (内面)



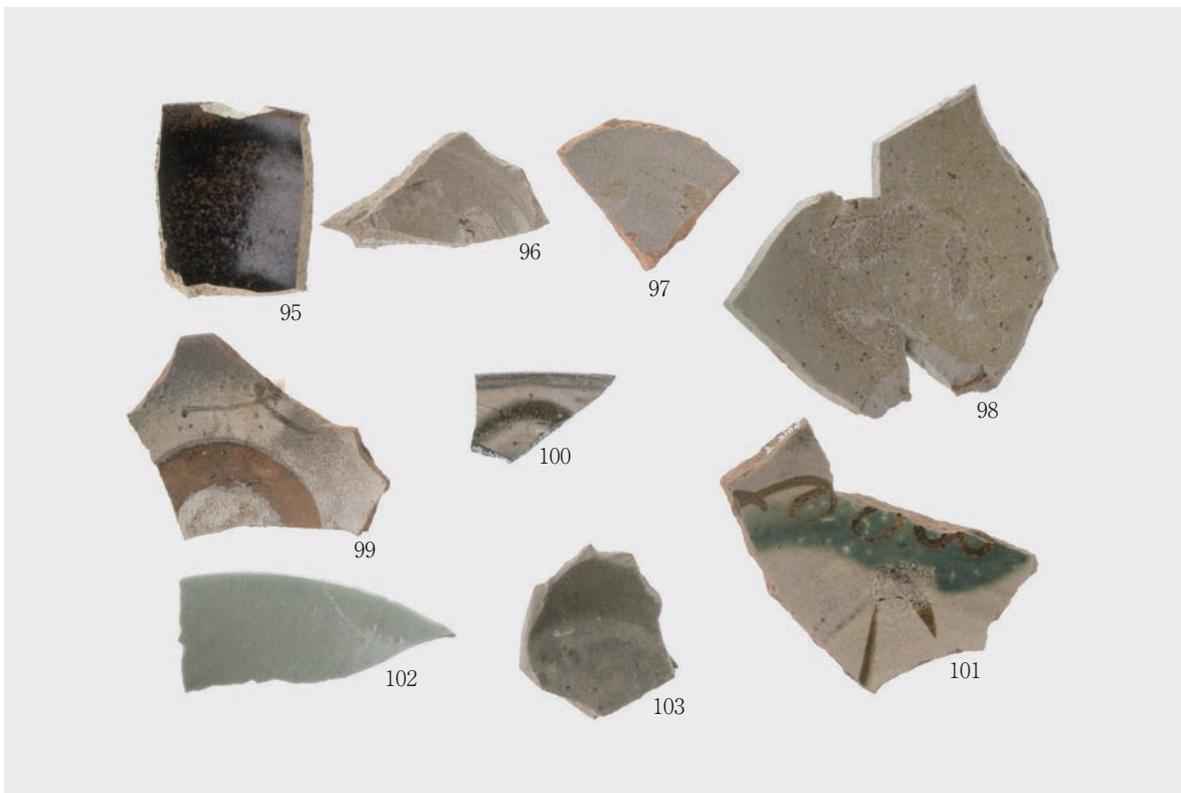
I E 区 P80 · 18 · 43 · 7 · 68 青花(皿), 陶器(碗·皿)(外面)



I E 区 P80 · 18 · 43 · 7 · 68 青花(皿), 陶器(碗·皿)(内面)



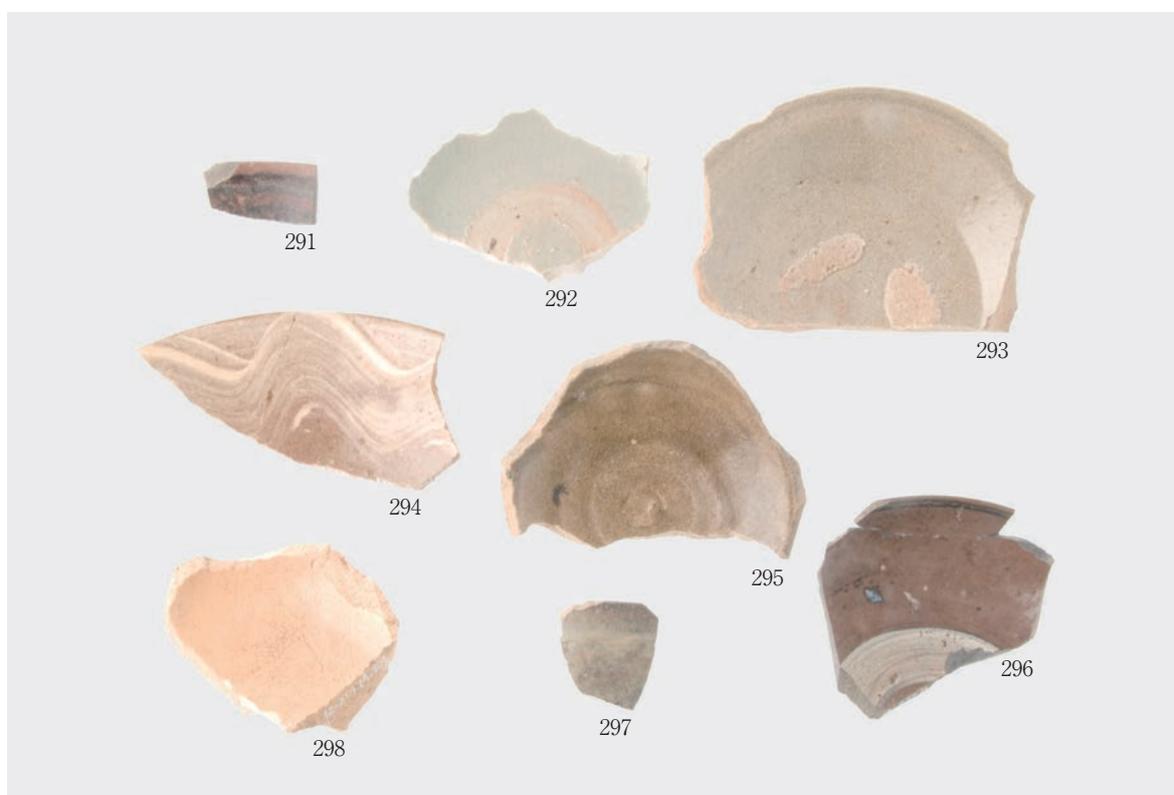
I E 区 SD15 陶器(碗·皿·大皿), 青磁(皿)(外面)



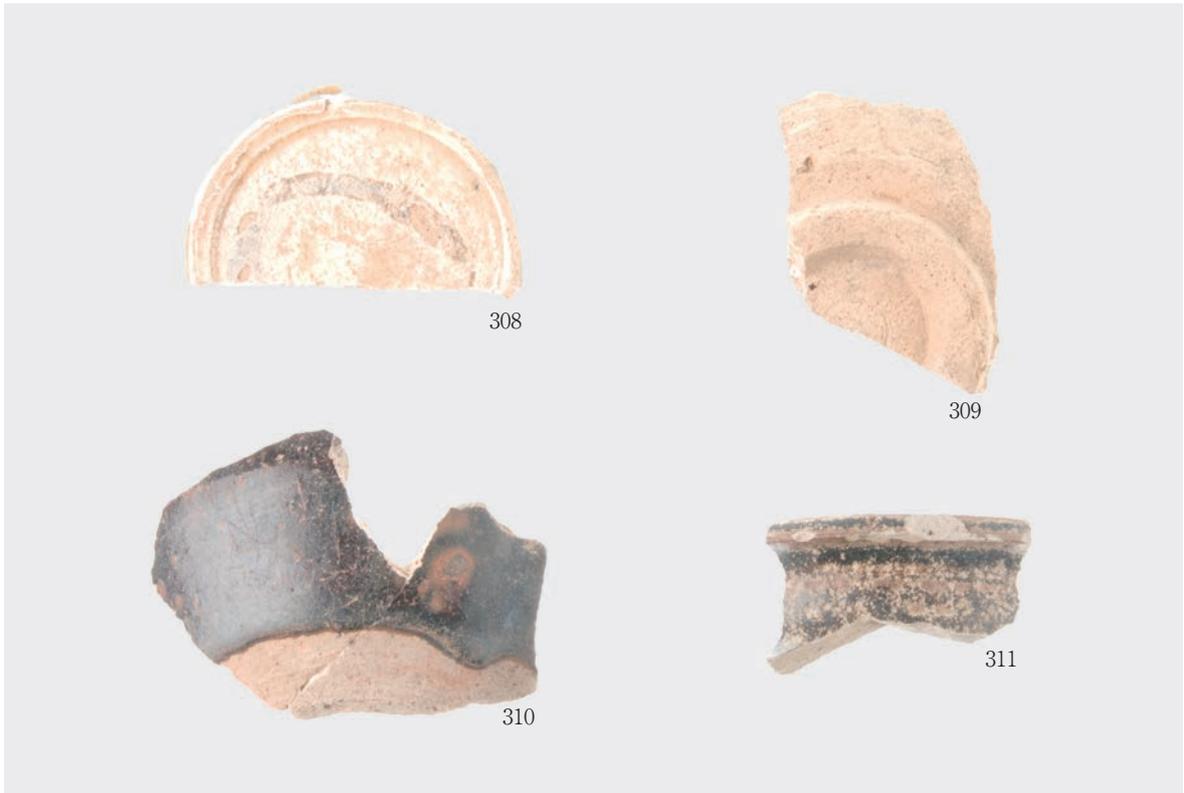
I E 区 SD15 陶器(碗·皿·大皿), 青磁(皿)(内面)



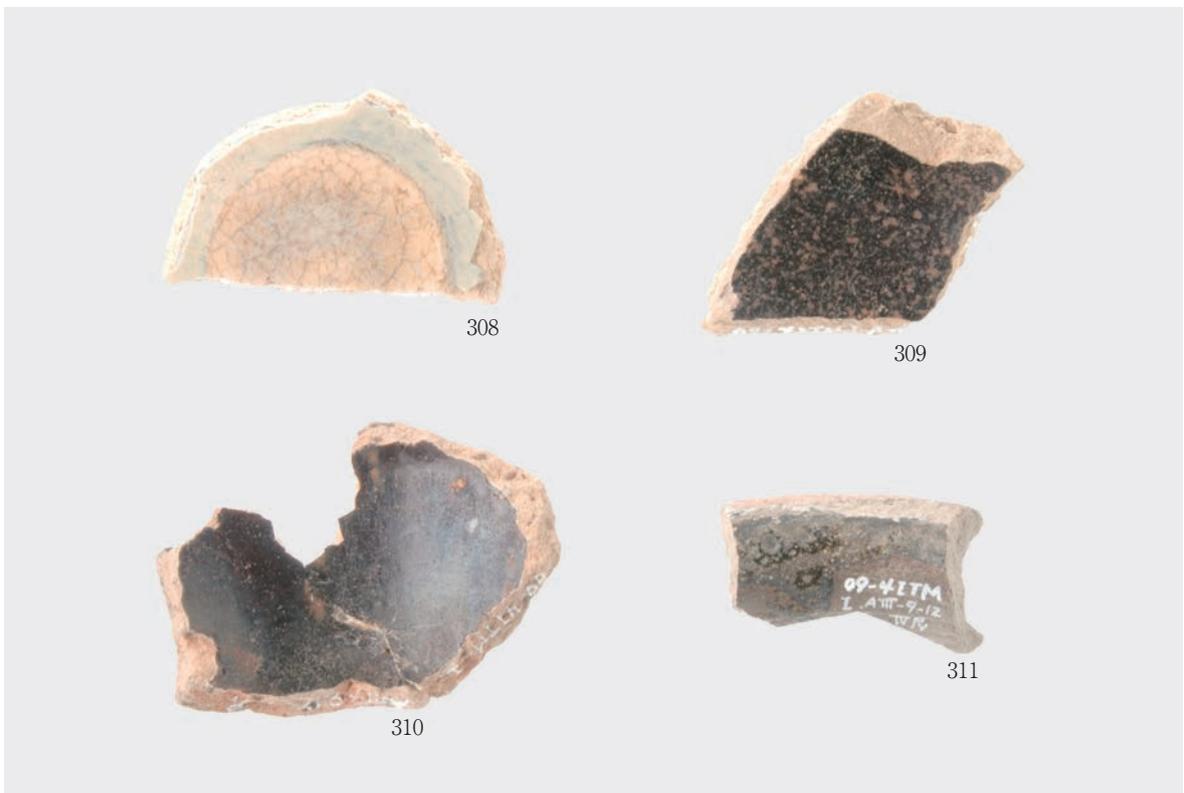
I W区 II層 陶器(皿・碗) (外面)



I W区 II層 陶器(皿・碗) (内面)



I W区Ⅲ層 陶器(皿·碗·壺) (外面)



I W区Ⅲ層 陶器(皿·碗·壺) (内面)



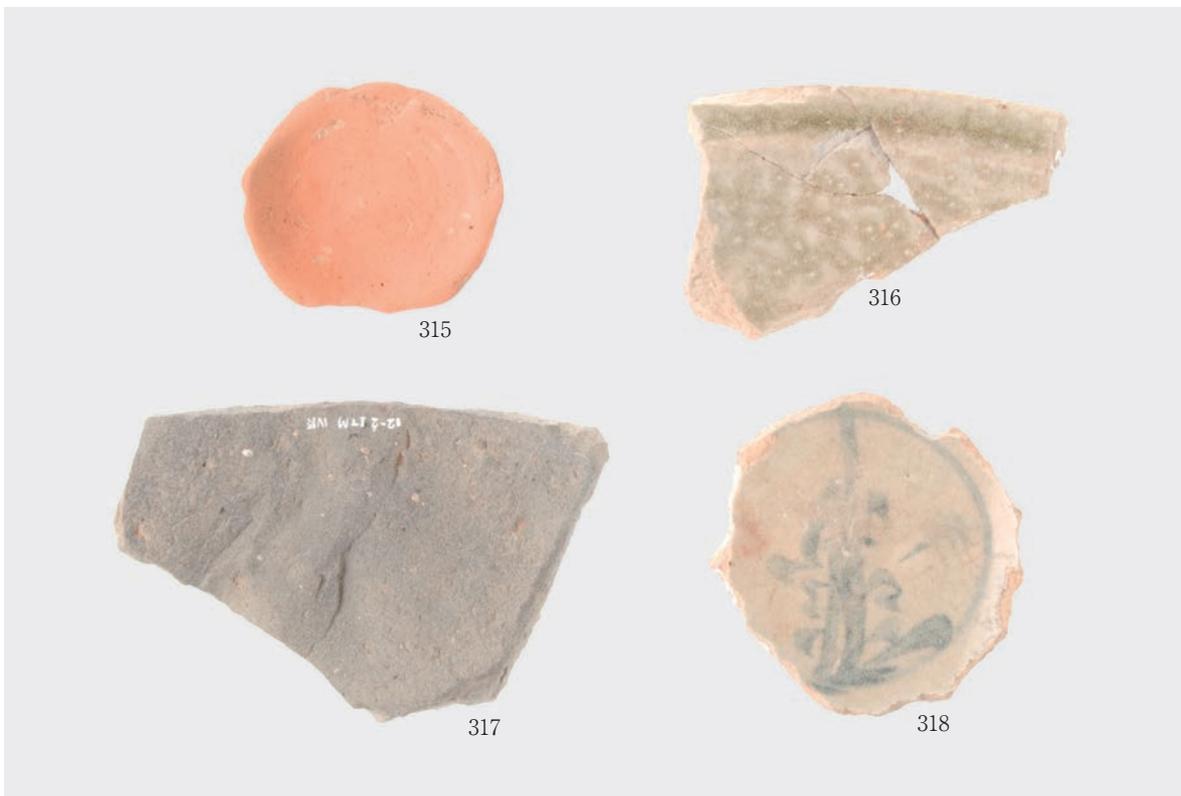
I W区Ⅲ層 白磁(皿), 磁器(鉢) (外面)



I W区Ⅲ層 白磁(皿), 磁器(鉢) (内面)



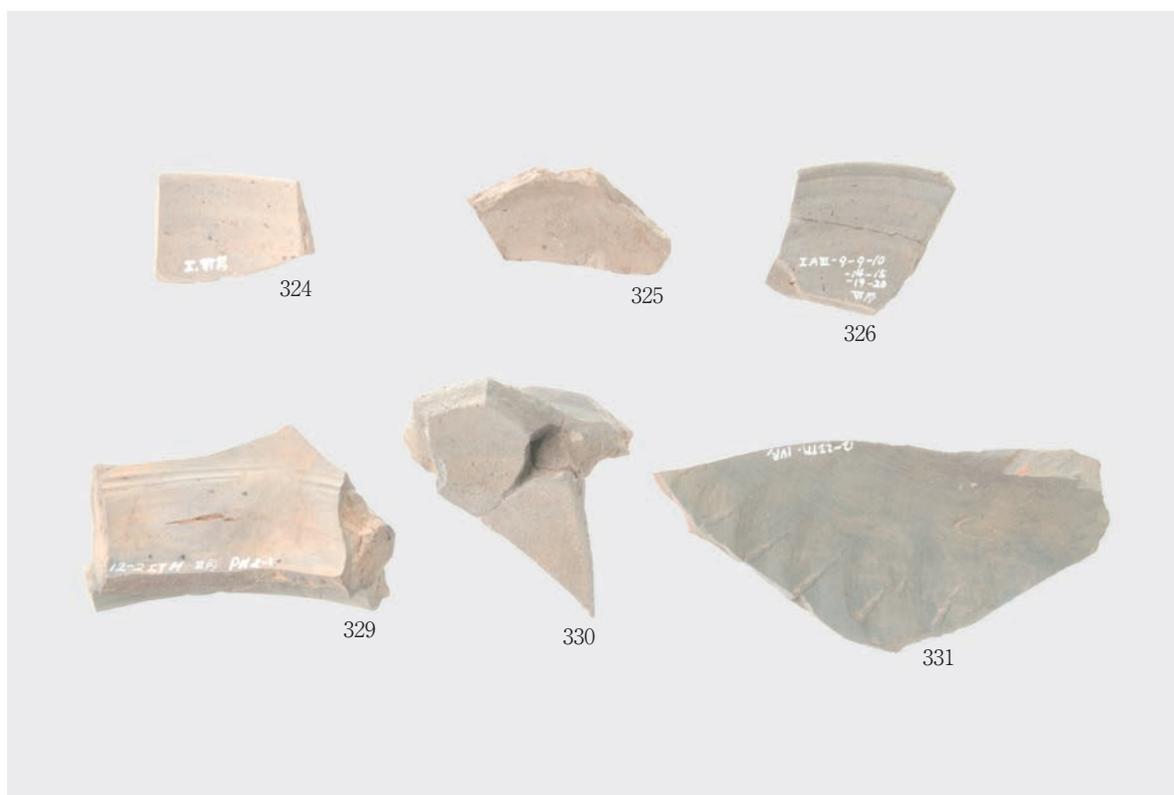
I W区V層 土師質土器(皿), 陶器(皿・甕), 青花(皿) (外面)



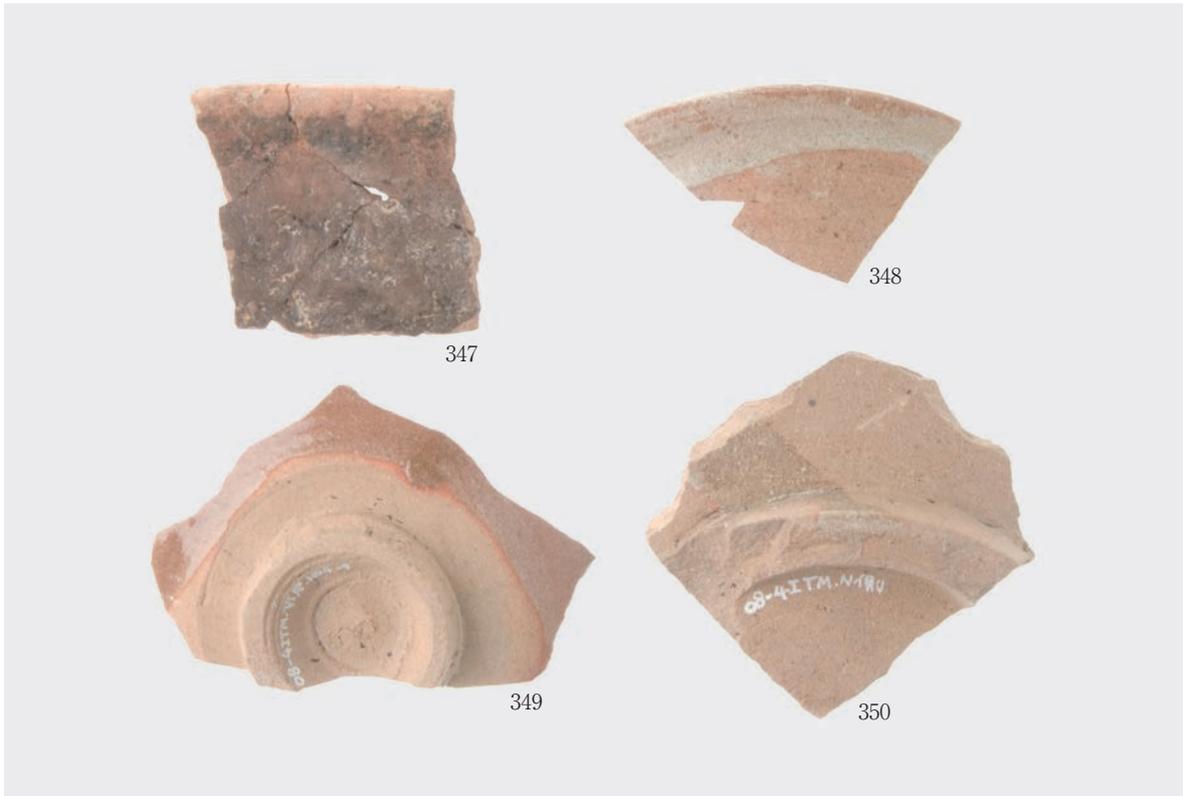
I W区V層 土師質土器(皿), 陶器(皿・甕), 青花(皿) (内面)



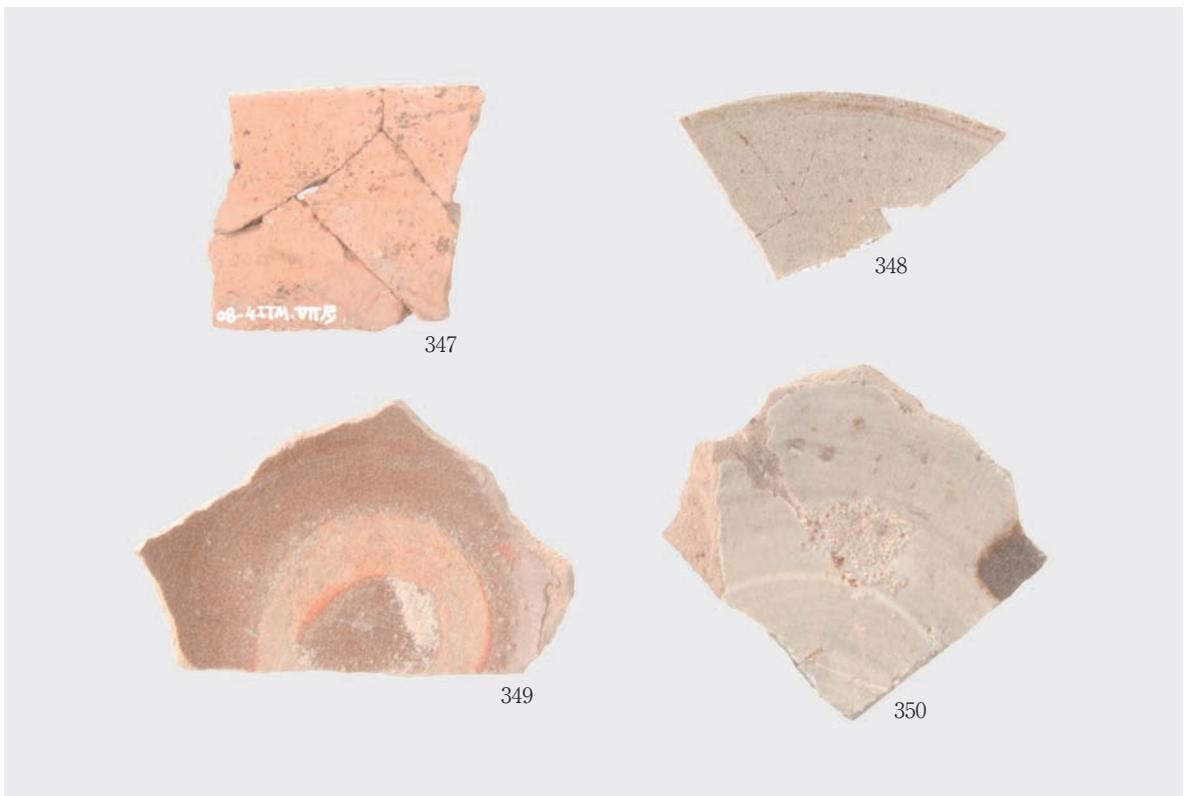
I W区VI層 須惠器(杯·蓋·壺·甕) (外面)



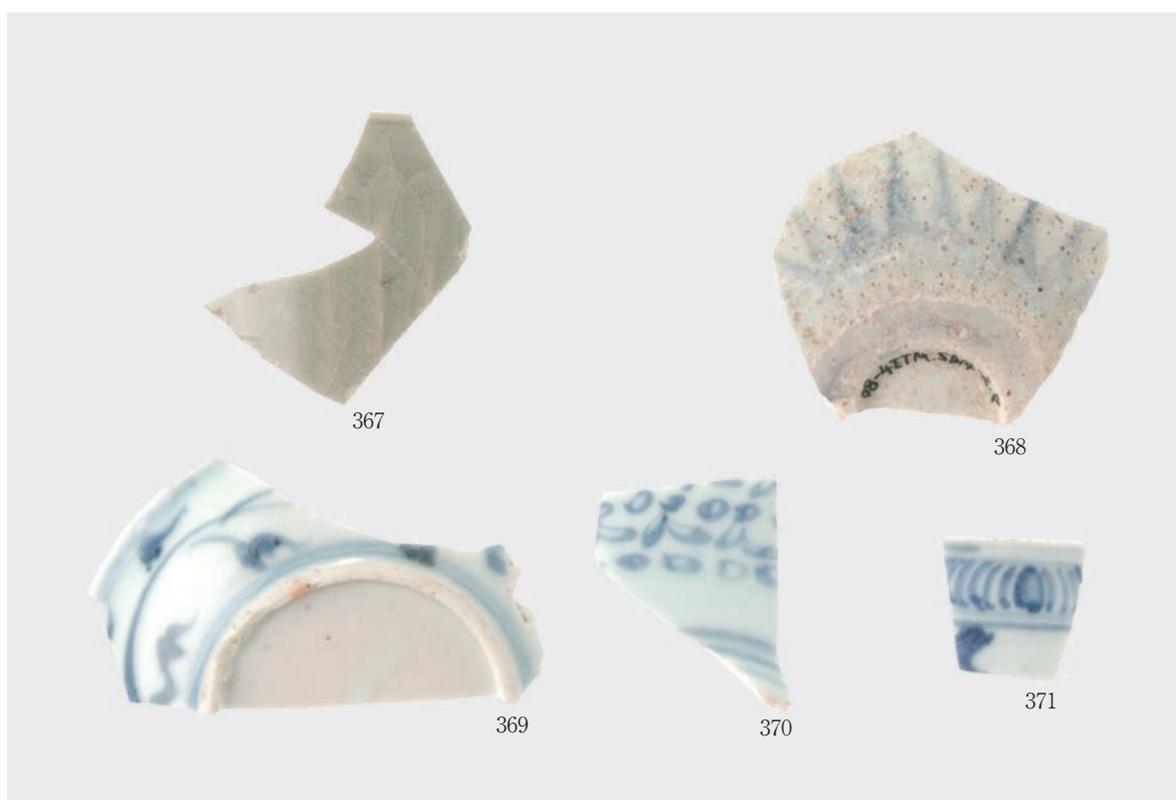
I W区VI層 須惠器(杯·蓋·壺·甕) (内面)



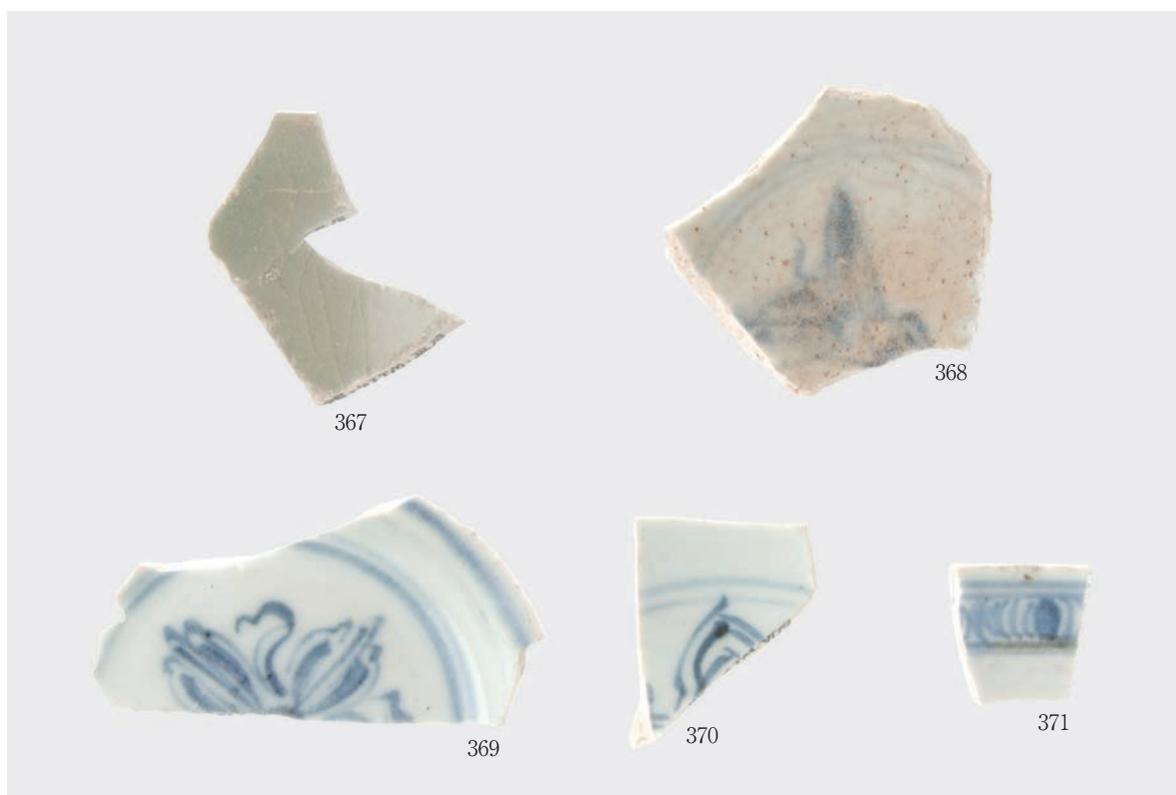
I E 区 II 層 土師質土器(焙烙鍋), 陶器(皿) (外面)



I E 区 II 層 土師質土器(焙烙鍋), 陶器(皿) (内面)



I E 区 III 层 青磁(碗), 青花(皿·碗·杯) (外面)



I E 区 III 层 青磁(碗), 青花(皿·碗·杯) (内面)



I E 区IV層 土師器(甕)



I E 区VII層 鉄製品(鉄鏃・鉄鎌・鉈・不明鉄製品)



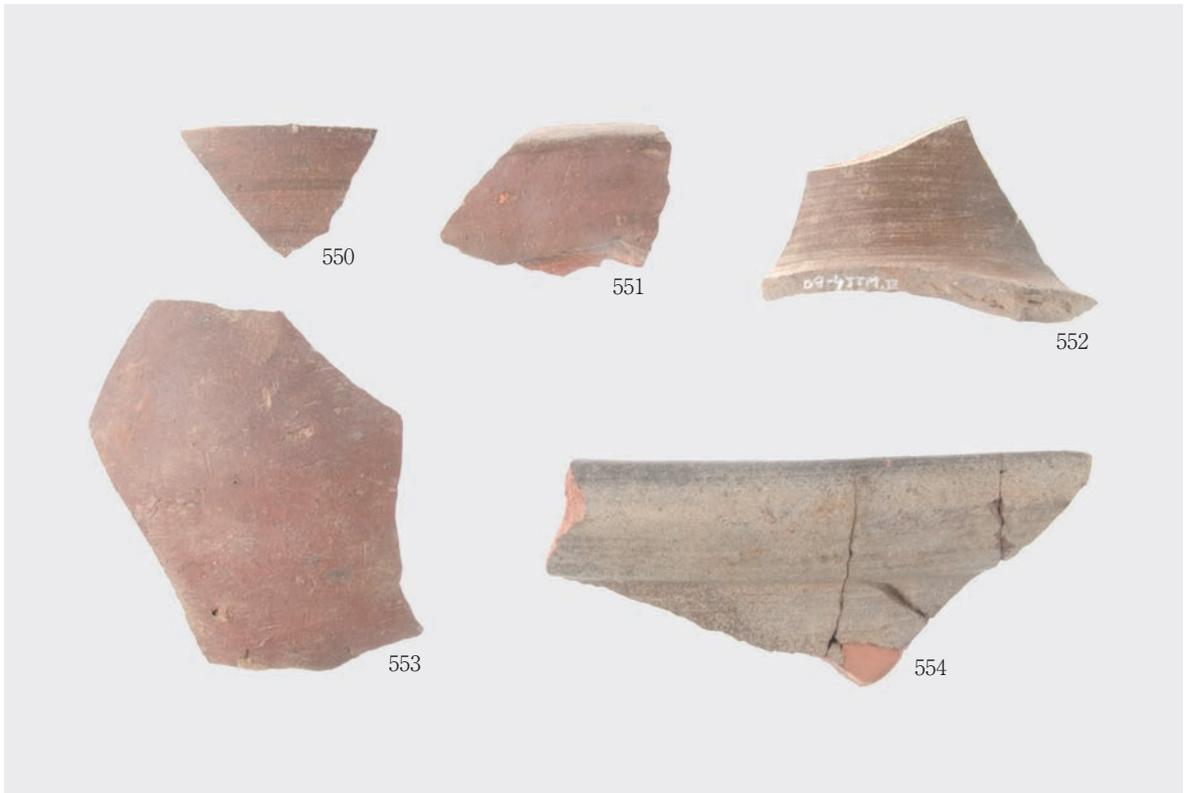
II区SK1 土師質土器(杯), 青磁(碗)



II区III層 瓦質土器(鍋)



Ⅱ区Ⅲ層 東播系須恵器(鉢)



Ⅱ区Ⅲ層 陶器(播鉢・壺・花入・甕)



II区III層 青磁(皿・碗・不明)



II区III層 土製品(土錘)



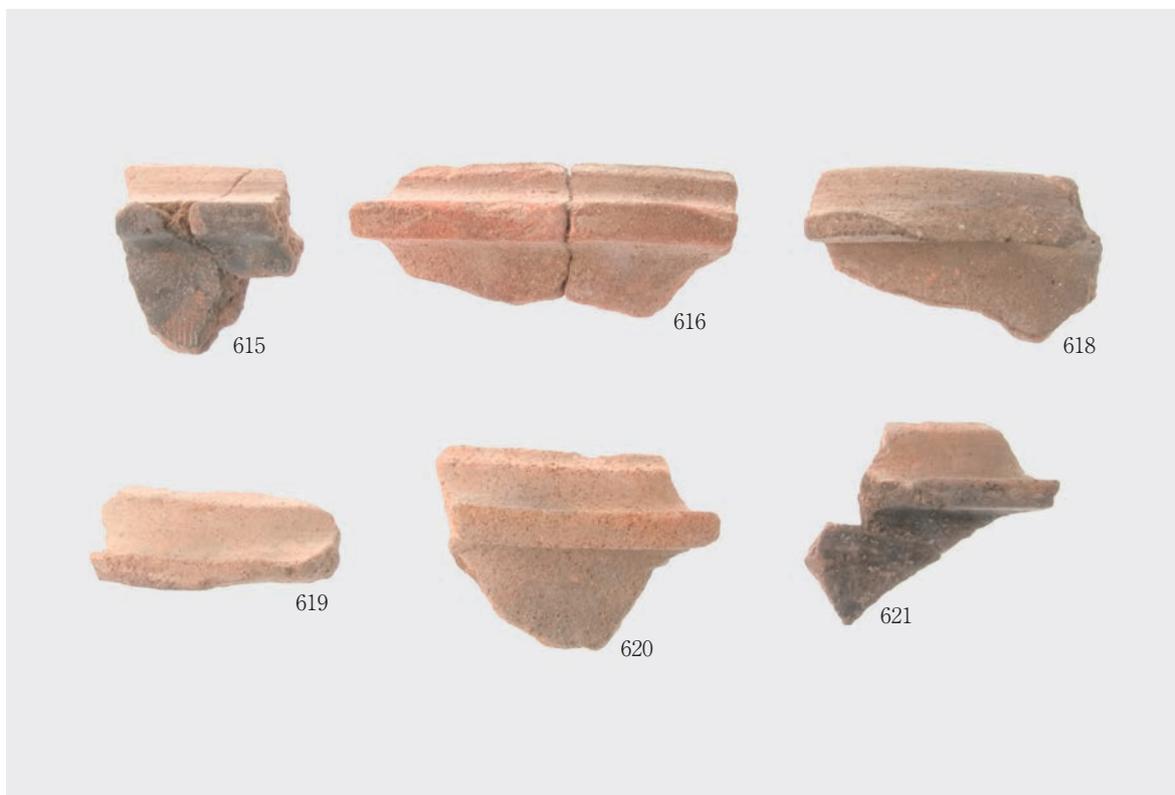
Ⅱ区Ⅵ層 緑釉陶器(皿·碗)(外面)



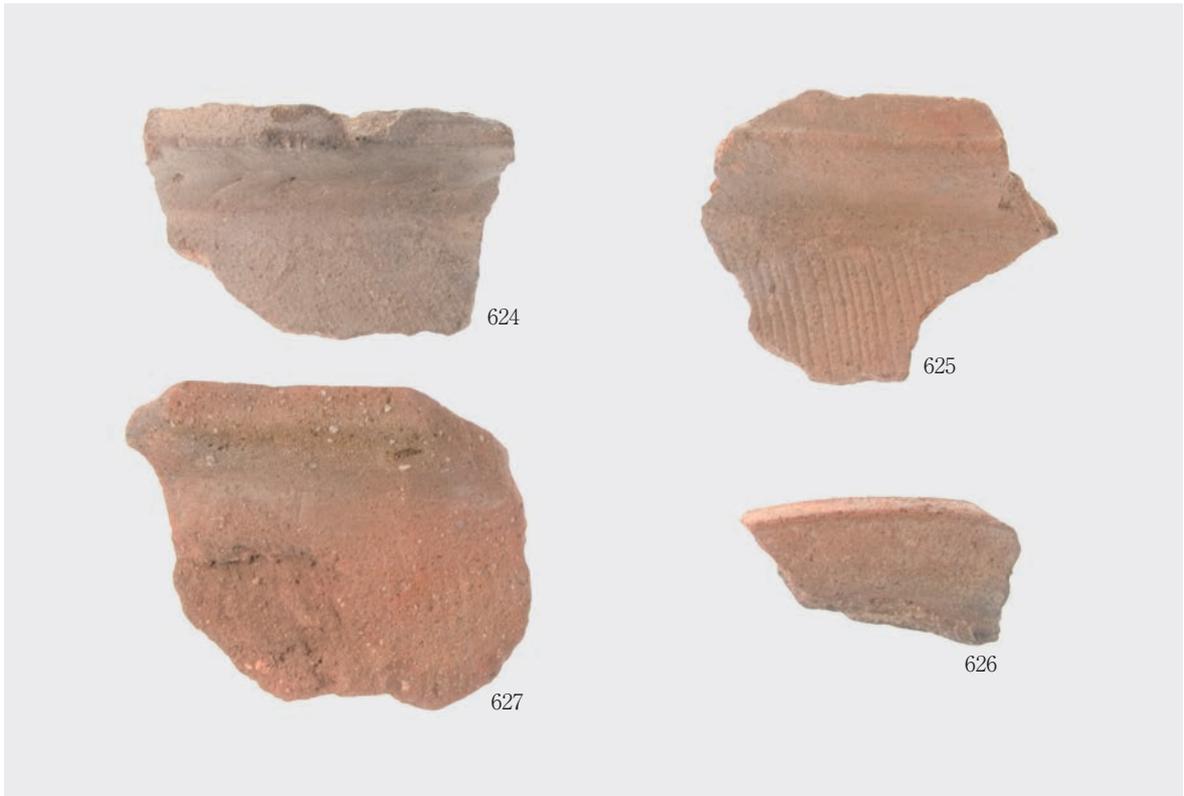
Ⅱ区Ⅵ層 緑釉陶器(皿·碗)(内面)



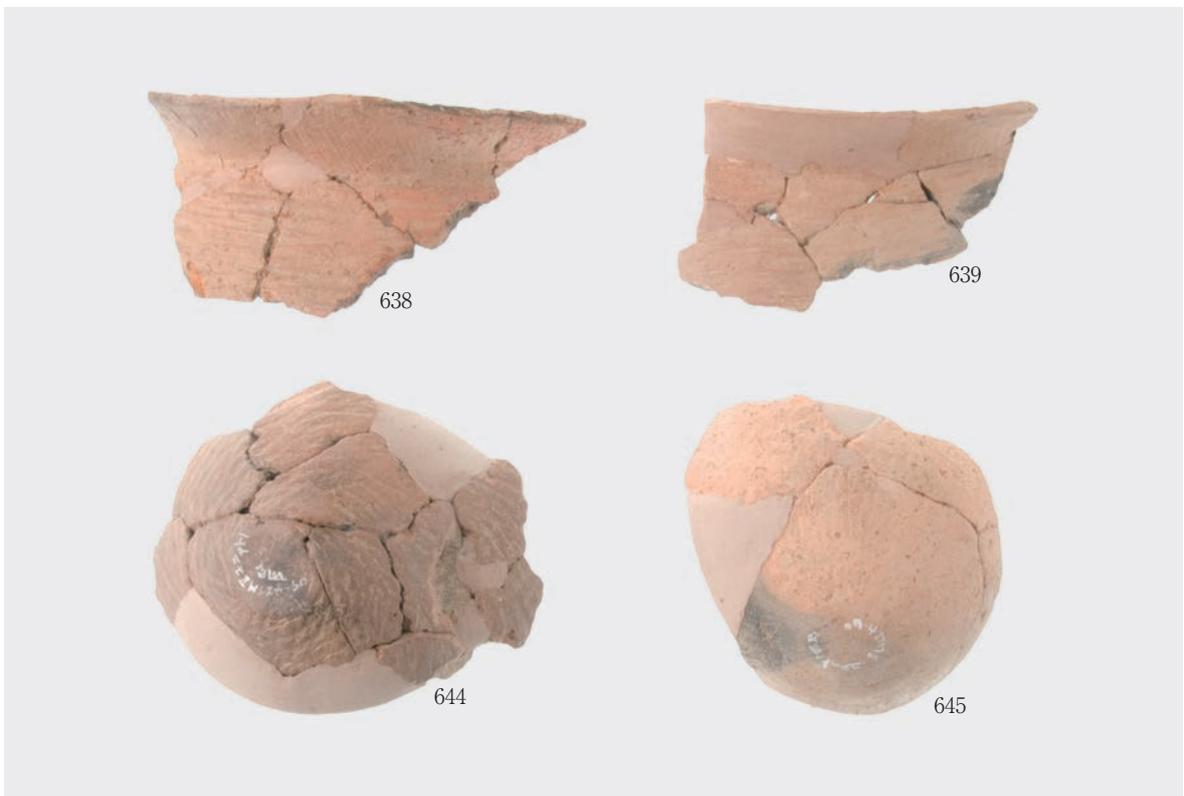
II区VI層 須恵器(杯・蓋・甕)



II区VI層 土師器(羽釜)



II区VI層 土師器(甕)



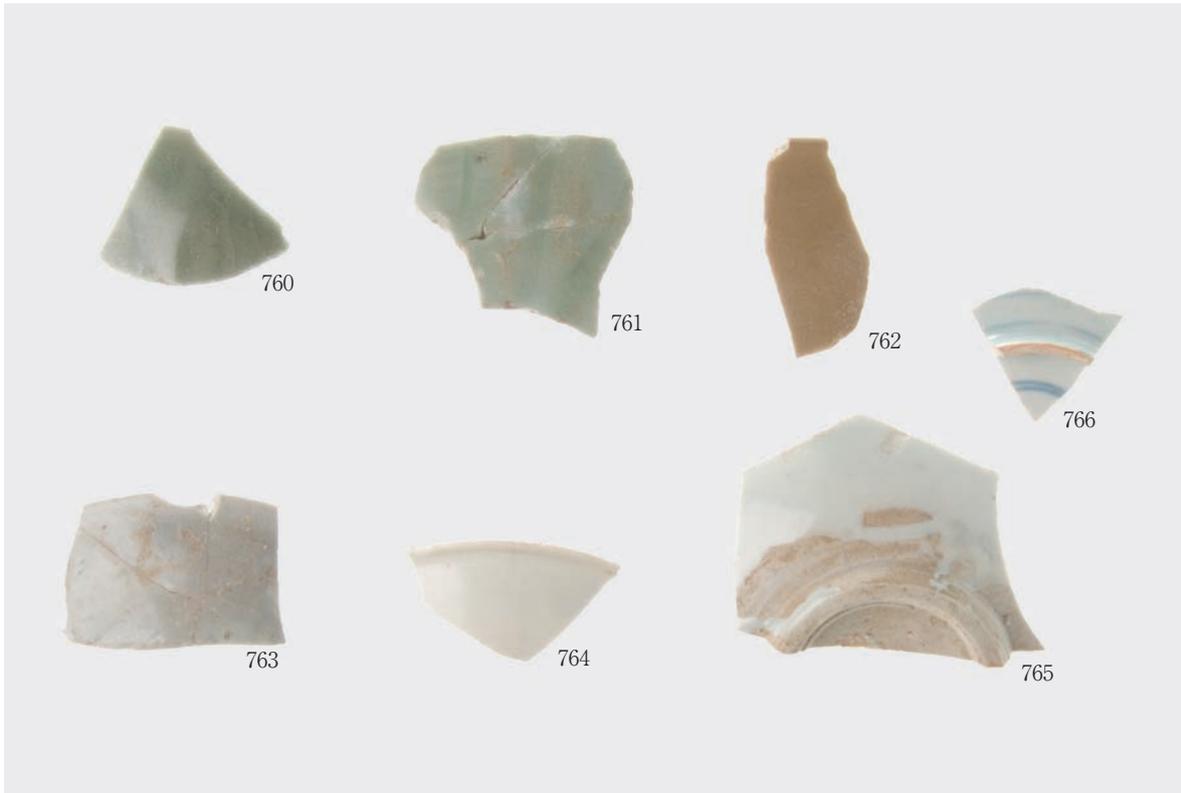
II区VII層 弥生土器(甕)



Ⅲ区 SX2 鉄製品(小札・釘)



Ⅲ区 SX3 鉄製品(釘), 鉄滓



Ⅲ区Ⅱ層 青磁(碗), 白磁(皿·碗), 青花(碗)(外面)



Ⅲ区Ⅱ層 青磁(碗), 白磁(皿·碗), 青花(碗)(内面)



Ⅲ区Ⅳ-1層 土製品(土錘)



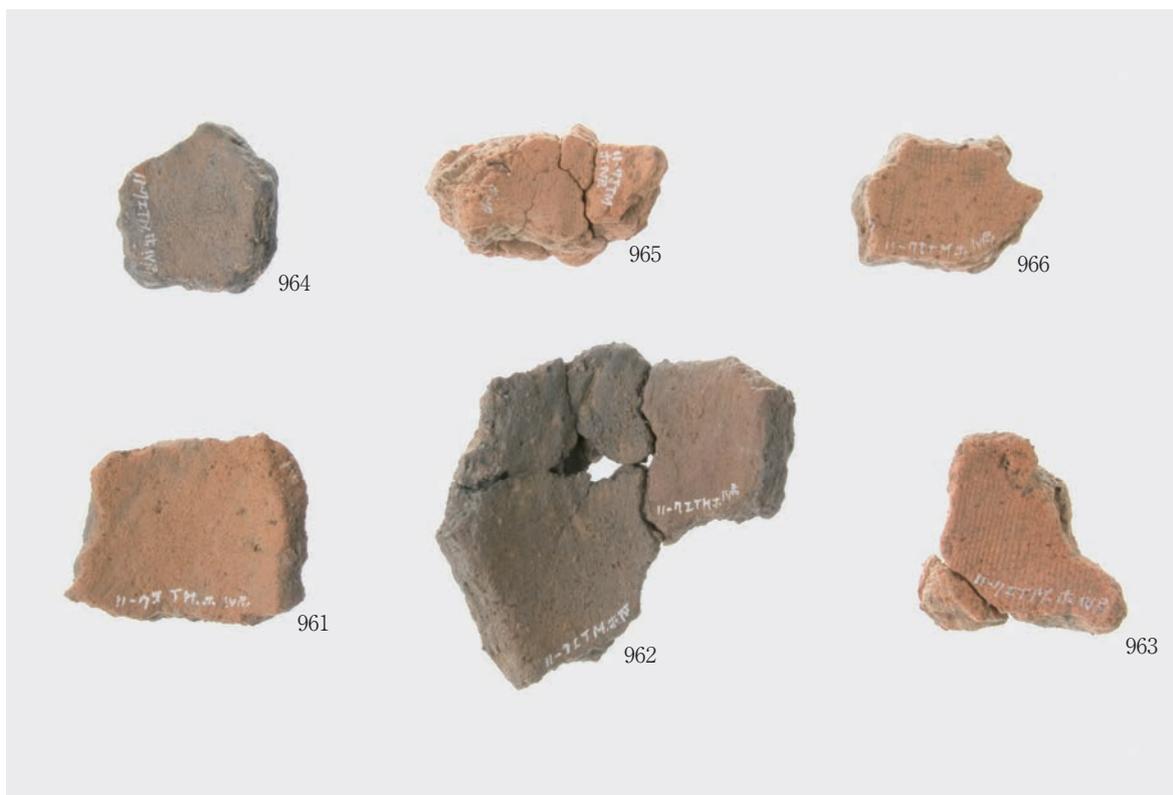
Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(皿)



Ⅲ区Ⅴ層 黑色土器(碗·甕)(外面)



Ⅲ区Ⅴ層 黑色土器(碗·甕)(内面)



Ⅲ区Ⅴ層 製塩土器



Ⅲ区Ⅴ層 土製品(土錘)



30

I W区 SB8P1 土師質土器(皿)



34

I S区 P16 肥前系磁器(小丸碗)



45

I W区 SK9 土師質土器(皿)



46

I W区 SK9 土師質土器(皿)



57

I W区 SD2 肥前系陶器(皿)



58

I W区 SD2 肥前系陶器(皿)



88

I E区 SD2 土師質土器(皿)



89

I E区 SD2 土師質土器(皿)



130

I W区土器溜まり 弥生土器(壺)



144

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



155

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



162

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



168

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



178

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



187

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



188

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



189

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



194

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



231

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



231

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



245

I W区土器溜まり 弥生土器(鉢)



246

I W区土器溜まり 弥生土器(鉢)



264

I E区 P222 土師器(杯)



265

I E区 P222 土師器(杯)



288

I W区 I層 陶器(片口鉢)(外面)



288

I W区 I層 陶器(片口鉢)(内面)



320

I W区 VI層 土師器(皿)



416

II区 P5 土師質土器(杯)



468

II区 SK2 陶器(搗鉢)



491

II区 SD8 弥生土器(鉢)



493

II区 SX1 土師質土器(杯)



515

II区 II層 瀬戸美濃系陶器(碗)



521

II区III層 土師質土器(杯)



601

II区VI層 土師器(杯)



636

II区VII層 弥生土器(壺)



641

II区VII層 弥生土器(甕)



643

II区VII層 弥生土器(甕)



648

II区VII層 弥生土器(蓋)



707

III区SK5 土師器(皿)



708

III区SK5 土師器(杯)



Ⅲ区 SK5 土師器(杯)



Ⅲ区 SK6 須恵器(杯)



Ⅲ区 SK6 須恵器(杯)



Ⅲ区 SK10 土師質土器(皿)



Ⅲ区 SK10 土師質土器(皿)



Ⅲ区 SK10 土師質土器(皿)



Ⅲ区 SK10 土師質土器(皿)



Ⅲ区 I層 尾戸焼(皿)



752

Ⅲ区Ⅰ層 肥前系磁器(紅皿)



753

Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(小皿)



754

Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(小皿)



755

Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(杯)



759

Ⅲ区Ⅱ層 備前焼(甕)



772

Ⅲ区Ⅲ層 土師器(椀)



773

Ⅲ区Ⅲ層 土師器(椀)



788

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(皿)



789

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(皿)



793

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(皿)



801

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(杯)



802

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(杯)



804

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(杯)



808

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(杯)



812

Ⅲ区Ⅳ-1層 土師器(杯)



827

Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(皿)



Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(盤)



Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(杯)



Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(杯)



Ⅲ区Ⅳ-1層 須恵器(蓋)



Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(盤)



Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(杯)



Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(杯)



Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(杯)



881

Ⅲ区Ⅳ-2層 土師器(杯)



888

Ⅲ区Ⅳ-2層 須恵器(皿)



905

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)



910

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)



912

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)



913

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)



914

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)



915

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(杯)



917

Ⅲ区Ⅴ層 土師器(甕)



931

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(皿)



935

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(皿)



936

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(杯)



937

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(杯)



938

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(杯)



939

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(杯)



941

Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(蓋)



943

Ⅲ区V層 須恵器(壺)



945

Ⅲ区V層 須恵器(壺)



950

Ⅲ区V層 須恵器(甕)



957

Ⅲ区V層 灰釉陶器(碗)



43

48

I W区SK6・10 肥前系陶器(皿), 瀬戸天目(碗)(外面)



43

48

I W区SK6・10 肥前系陶器(皿), 瀬戸天目(碗)(内面)



57

58

I W区SD2 陶器(皿)(外面)



57

58

I W区SD2 陶器(皿)(内面)



70

I W区 SX2 備前焼(播鉢) (外面)



70

I W区 SX2 備前焼(播鉢) (内面)



91

I E区 SD4 肥前系陶器(皿) (外面)



91

I E区 SD4 肥前系陶器(皿) (内面)



104

105

I W区 P73・114 須恵器(杯・器台) (外面)



104

105

I W区 P73・114 須恵器(杯・器台) (内面)



119

121

120

I W区土器溜まり 弥生土器(壺)



130

I W区土器溜まり 弥生土器(壺)



129

I W区土器溜まり 弥生土器(壺)



128

I W区土器溜まり 弥生土器(壺)



138

139

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



140

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



142

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



143

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



146

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



151

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



169

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



172

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



177

179

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



182

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



185

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



186

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



190

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



193

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



195

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



199

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



242

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



243

I W区土器溜まり 弥生土器(甕)



250

251

252

I W区土器溜まり 弥生土器(鉢)



255

254

I W区土器溜まり 石製品(投弾・石鏃)



260

261

(外面)

I E区 P172 黑色土器(椀), 須恵器(椀)

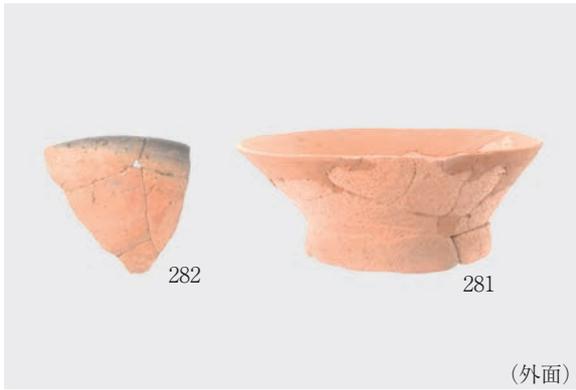


260

261

(内面)

I E区 P172 黑色土器(椀), 須恵器(椀)



I E区 SK14 土師器(碗), 黒色土器(碗)



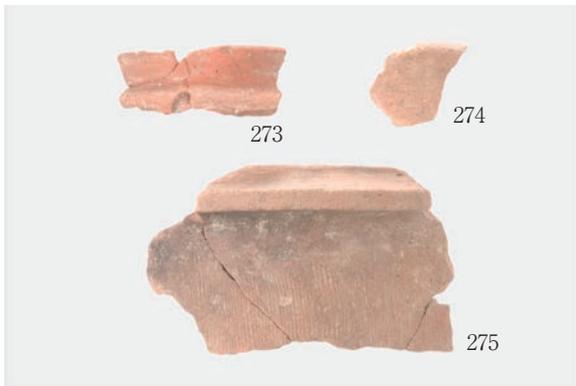
I E区 SK14 土師器(碗), 黒色土器(碗)



I W区 I層 統制陶器(皿) (外面)



I W区 I層 統制陶器(皿) (内面)



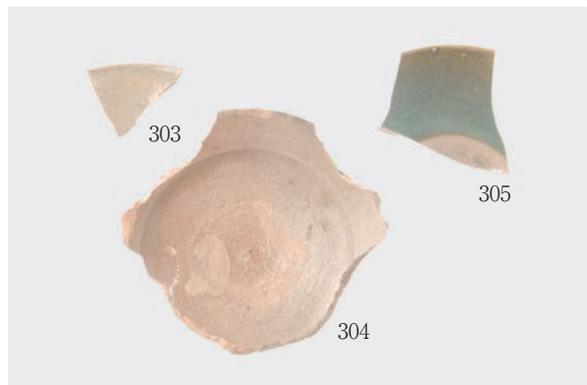
I E区 P188・206・234 土師器(甕・羽釜)



I W区 II層 肥前系磁器(瓶)



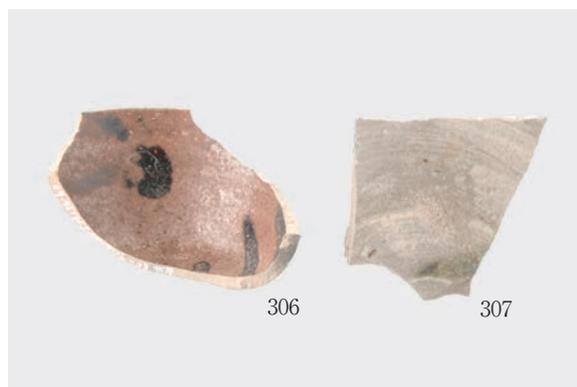
I W区 III層 陶器(皿), (外面)



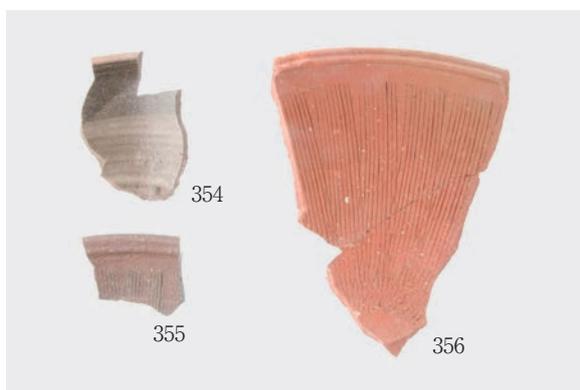
I W区 III層 陶器(皿) (内面)



I W区III層 唐津焼(碗・大皿)(外面)



I W区III層 唐津焼(碗・大皿)(内面)



I E区II層 陶器(鉢・播鉢)



I E区II層 石製品(石錘・石臼)



I E区II層 肥前系磁器(碗・筒形碗・皿)(外面)



I E区II層 肥前系磁器(碗・筒形碗・皿)(内面)



I E区III層 瀬戸美濃系陶器(皿・碗)



I E区III層 備前焼(播鉢)



I E 区IV層 緑釉陶器(碗) (外面)



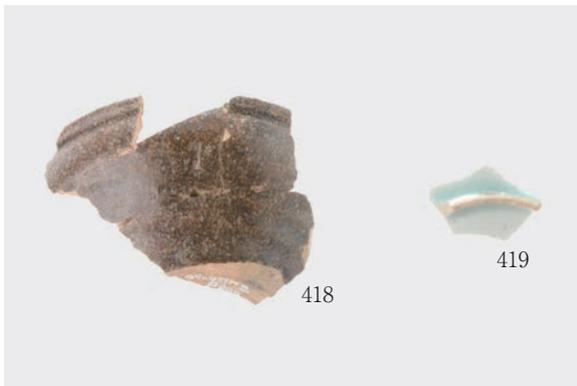
I E 区IV層 緑釉陶器(碗) (内面)



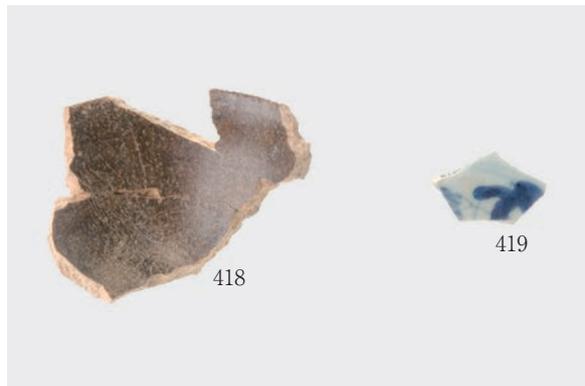
I E 区IV層 土師器(羽釜)



I E 区IV層 石製品(砥石)



II 区 P88 瀬戸天目(碗), 青花(皿) (外面)



II 区 P88 瀬戸天目(碗), 青花(皿) (内面)



II 区 P146·1 瀬戸美濃系陶器(皿), 常滑焼(甕) (外面)



II 区 P146·1 瀬戸美濃系陶器(皿), 常滑焼(甕) (内面)



Ⅱ区 P399・416 弥生土器(甕)



Ⅱ区 P420・440 土師器(羽釜)



Ⅱ区Ⅱ層 肥前系陶器(皿)



Ⅱ区Ⅱ層 唐津焼(皿), 尾戸焼(碗)



Ⅱ区 P319 銅製品(鈐帶金具) (表面)



Ⅱ区 P319 銅製品(鈐帶金具) (表面)



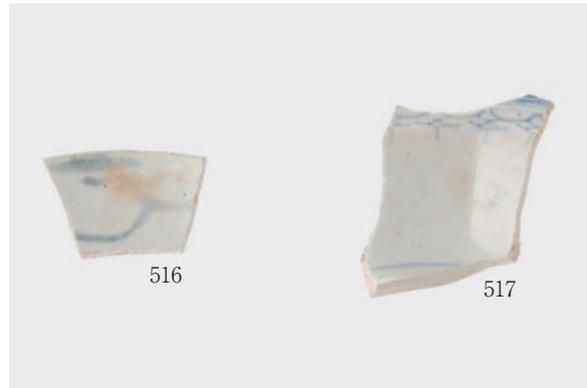
Ⅱ区 P319 銅製品(鈐帶金具) (裏面)



Ⅱ区Ⅱ層 石製品(石臼)



Ⅱ区Ⅱ層 肥前系磁器(皿・鉢)(外面)



Ⅱ区Ⅱ層 肥前系磁器(皿・鉢)(内面)



Ⅱ区Ⅲ層 土師質土器(羽釜)



Ⅱ区Ⅲ層 瓦質土器(鉢(片口)・播鉢)



Ⅱ区Ⅲ層 瓦質土器(羽釜)



Ⅱ区Ⅲ層 陶器(甕)



Ⅱ区Ⅲ層 白磁(皿・碗)



Ⅱ区Ⅲ層 銅製品(不明)



Ⅱ区Ⅲ層 鉄滓



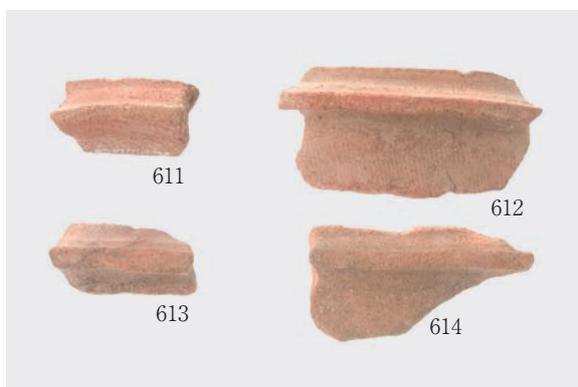
Ⅱ区Ⅲ層 石製品(石鍋)



Ⅱ区Ⅲ層 石製品(砥石)



Ⅱ区Ⅲ層 石製品(砥石)



Ⅱ区Ⅵ層 土師器(羽釜)



Ⅱ区Ⅵ層 土師器(羽釜)



Ⅱ区Ⅵ層 鉄滓



Ⅱ区Ⅶ層 鉄製品(鉄斧)



651

Ⅱ区Ⅶ層 石製品(石斧)



652

Ⅱ区Ⅶ層 石製品(石鏃)



731

732

Ⅲ区SX2 鉄滓



734

735

Ⅲ区SX3 羽口



749

750

Ⅲ区Ⅰ層 尾戸焼(碗・皿)(外面)



749

750

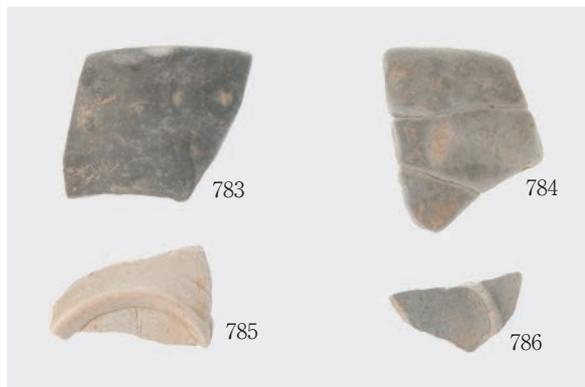
Ⅲ区Ⅰ層 尾戸焼(碗・皿)(内面)



756

757

Ⅲ区Ⅱ層 土師質土器(焙烙鍋), 陶器(小鉢)



783

784

785

786

Ⅲ区Ⅲ層 瓦器(椀)



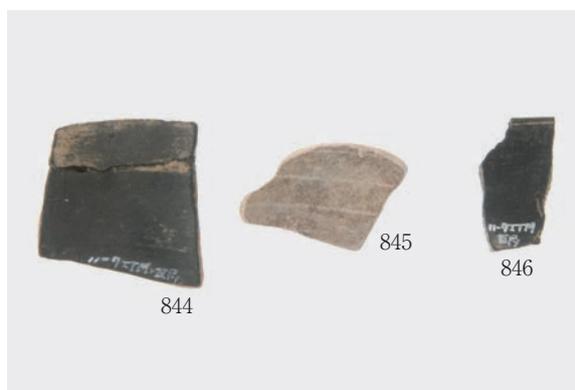
Ⅲ区Ⅱ層 備前焼(播鉢) (外面)



Ⅲ区Ⅱ層 備前焼(播鉢) (内面)



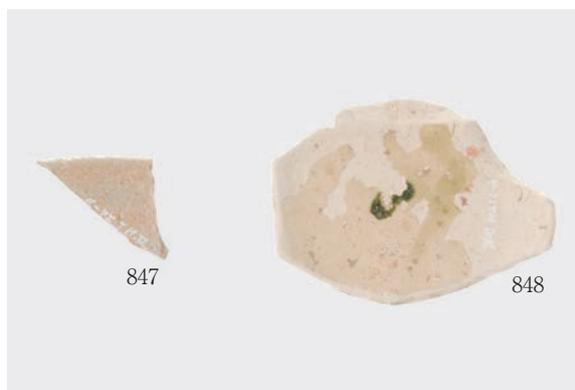
Ⅲ区Ⅳ-1層 黒色土器(椀) (外面)



Ⅲ区Ⅳ-1層 黒色土器(椀) (内面)



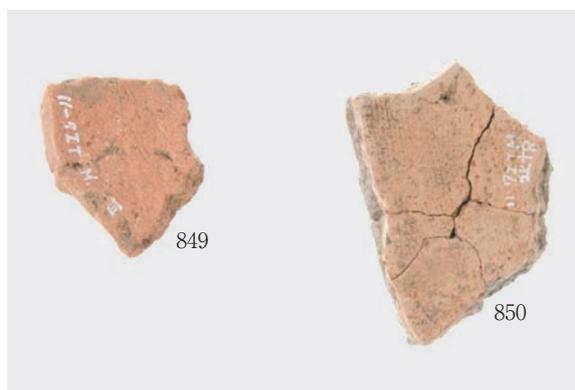
Ⅲ区Ⅳ-1層 灰釉陶器(椀), 緑釉陶器(皿) (外面)



Ⅲ区Ⅳ-1層 灰釉陶器(椀), 緑釉陶器(皿) (内面)



Ⅲ区Ⅳ-1層 製塩土器(外面)



Ⅲ区Ⅳ-1層 製塩土器(内面)



Ⅲ区Ⅳ-2層 黑色土器(碗・甕)(外面)



Ⅲ区Ⅳ-2層 黑色土器(碗・甕)(内面)



Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺)



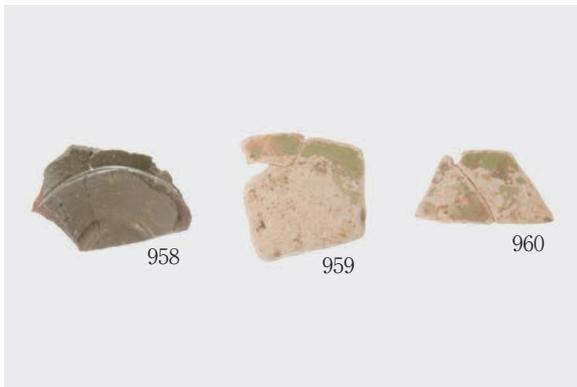
Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺把手)



Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺)



Ⅲ区Ⅴ層 須恵器(壺)



Ⅲ区Ⅴ層 緑釉陶器(碗・皿)(外面)



Ⅲ区Ⅴ層 緑釉陶器(碗・皿)(内面)

報告書抄録

ふりがな	てんじんみぞたいせき							
書名	天神溝田遺跡Ⅱ							
副書名	高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第139集							
編著者名	吉成 承三, パリノ・サーヴェイ株式会社, 大阪文化財研究所							
編集機関	(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原1437-1							
発行年月日	2014年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇'〃	東経 〇'〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんじんみぞたいせき 天神溝田遺跡	〒781-2127 高知県 吾川郡 いの町伊野 あざてんじんやま あざしろやま 字天神山・字城山他	39386	320028	33° 32' 37"	133° 25' 58"	2008.12.22 ～ 2009.3.25 2009.4.22 ～ 2009.9.29 2012.1.26 ～ 2012.3.7 2012.4.23 ～ 2012.5.28	6,031㎡	記録保存調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天神溝田遺跡	集落跡	弥生 古代 中世 近世	掘立柱建物跡 柵列 土坑 溝跡 性格不明遺構 ピット	24棟 3列 120基 41条 12基 2,628個	弥生土器 土師器 須恵器 黒色土器 緑釉陶器 土師質土器 瓦質土器 瓦質土器 陶磁器 貿易陶磁器 鉄器 銅製品	天神溝田遺跡では、弥生時代後期後半の一括性のある土器集中がみにつかった。古代は鍛冶に関連する遺構と遺物が確認された。中世では和鏡、古銭を伴う呪術的な埋納遺構がみつかった。		
要約	<p>当遺跡は、本流仁淀川の支流である宇治川河口付近に位置し、丘陵裾の低地に立地する。試掘調査により新たに古代・中近世の遺構と遺物が確認された。調査の結果、平安時代から江戸時代を中心とする掘立柱建物跡、溝、土坑、ピット等、集落を構成する遺構が検出された。古代では、畿内系の黒色土器や緑釉陶器、中世では青磁、白磁など貿易陶磁器類の搬入品がみられ、仁淀川の川津的な性格が考えられる。また、9世紀後半～10世紀の鍛冶関連に関連する遺構と遺物が同町内では初めて確認された。中世では、屋敷境に位置する地点から、備前焼壺の中に土師質土器皿と古銭を納めた後、和鏡で蓋をし埋納されたと考えられる遺構が確認された。</p>							

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第139集

天神溝田遺跡Ⅱ

高知西バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書Ⅱ

2014年3月20日

発行 (公財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社



天神溝田遺跡調査区位置図 (S1/2,000)



上面遺構配置図

III区

下面遺構配置図

